空想活劇譚【パラノイア・インフェルノ】

居流庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空想活劇譚【パラノイア・インフェルノ】

【Ｎコード】
Ｎ２７８９Ｙ

【作者名】
居流庵

【あらすじ】
魔物や化け物がごく普通に、人間に交じって暮らす現代。人外達は死神の統制下、月明かりと黄昏、白日の間でひっそり生活していた。そんな中、人間の中でも人外にやや近い、古来より連綿と続く魔女の家系が存在する。秘術を伝える魔女の少女、その心臓を狙い、魔女へと成り上ろうする６人の人間と１体の亡霊がいた。人間同士の闘争のため、死神が介入できない中、国連から派遣されてきた魔人が少女を守るお話。そして魔人は１０００年に渡る因縁への決着を行う。※本作品は『ＧＡＩＡ小説広場』に投稿されていた作

品を再編集しています。また本作品は『月シリーズ』として、別作者と世界観を共有しながら作成しています。

００．序章

物語とは虚構である。例え、それが実在の人物の伝記だとしてもだ。

例えば、ある書で英雄として扱われた者は、別の書では多くの人間を虐殺した大罪人としてしか扱われていないのかもしれない。

例えば、世界中を混沌に巻き込んだと全ての書物に書かれる人物は、真実ではただ一人、自分だけの孤独な、完璧な秩序を知っていた人だったかもしれない。

そんな話の真実に最も近い当人達でさえ、その本人が認識を誤ればその人生は悲劇にも喜劇にもなりさえする。

さて、真実の物語とは何処にあるのだろうか？

そして、真実とは何なのだろうか？

時間と言う名の断絶。

共感と言う名の幻想。

神話と言う名の妄想。

……答えは、あなた自身が見つけるより他はない。

さて、ココにある一つの書を取ろう。ページをめくるか、本を閉じるかはあなた次第だ。

本を閉じたあなたはこの本の真実を知る事がない。ただ、それだけだ。

ページをめくり続けるならば、あなたは、最も物語の核心に近い者の書から開かれる……

では、しばし奈落と暴虐の道を少し辿ろうか……

００．序章（後書き）

【八熱地獄】

等活地獄：：
生前争いが好きだったものや、反乱で死んだものもここに落ちる。この中の罪人は互いに害心を抱き、自らの身に備わった鉄の爪や刀剣などで殺しあうという。そうでない者も獄卒に身体を切り裂かれ、粉砕され、死ぬが、涼風が吹いて、また獄卒の「活きよ、活きよ」の声で元の身体に等しく生き返る、という責め苦が繰り返されるゆえに、等活という。

黒縄地獄：：
殺生のうえに偸盗（ちゅうとう）、盗みを重ねた者がこの地獄に堕ちる。卒は罪人を捕らえて、熱く焼けた鉄の地面に伏し倒し、同じく熱く焼けた縄で身体に墨縄をうち、これまた熱く焼けた鉄の斧もしくは鋸（のこぎり）でその跡にそって切り、裂き、削る。また左右に大きく鉄の山がある。山の上に鉄の幢（はたほこ）を立て、鉄の縄をはり、罪人に鉄の山を背負わせて縄の上を渡らせる。すると罪人は縄から落ちて砕け、あるいは鉄の鼎（かなえ）に突き落とされて煮られる。この苦しみは、先の等活地獄の苦しみよりも十倍である。

衆合地獄：：
殺生、偸盗に加えて淫らな行いを繰り返した者が落ちる。黒縄地獄の下に位置し、その１０倍の苦を受ける。多くの罪人が、相対する鉄の山が両方から崩れ落ち、圧殺されるなどの苦を受ける。剣の葉を持つ林の木の上に美人が誘惑して招き、罪人が登ると今度は木の下に美人が現れ、その昇り降りのたびに罪人の体から血が吹き出す。鉄の巨象に踏まれて押し潰される。

叫喚地獄：
殺生・盗み・邪淫・飲酒。ただ酒を飲んだり売買するのみならず、酒に毒を入れて人殺しをしたり、他人に酒を飲ませて悪事を働くように仕向けたり、などということも条件になる。衆合地獄の下に位置し、その十倍の苦を受ける。熱湯の大釜や猛火の鉄室に入れられ、号泣、叫喚する。その泣き喚き、許しを請い哀願する声を聞いた獄卒はさらに怒り狂い、罪人をますます責めさいなむ。頭が金色、目から火を噴き、赤い服を着た巨大な獄卒が罪人を追い回して弓矢で射る。焼けた鉄の地面を走らされ、鉄の棒で打ち砕かれる。

大叫喚地獄：
殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄語を繰り返したものが落ちる。叫喚地獄の下に位置し、その十倍の苦を受ける。叫喚地獄で使われる鍋や釜より大きな物が使われ、更に大きな苦を受け叫び喚く。

焦熱地獄：
殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄語・邪見を繰り返したものが落ちる。邪見とは仏法の教えとは相容れない考えを説き、また実践することである。大叫喚地獄の下に位置し、その十倍の苦を受ける。常に極熱で焼かれ焦げる。赤く熱した鉄板の上で、また鉄串に刺されて、またある者は目・鼻・口・手足などに分解されてそれぞれが炎で焼かれる。この焦熱地獄の炎に比べると、それまでの地獄の炎も雪のように冷たく感じられるという。

大焦熱地獄：
殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄語・邪見に加え、犯持戒人（尼僧・童女などへの強姦）を繰り返したものが落ちる。焦熱地獄の下に位置し、前の６つの地獄の一切の諸苦に１０倍して重く受ける。また更なる極熱で焼かれて焦げる。

無間地獄：
殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄語・邪見・犯持戒人、父母殺害・阿羅漢（聖者）殺害を繰り返したものがおちる。地獄の最下層に位置する。大阿鼻地獄の苦、千倍もあるという。剣樹、刀山、湯などの苦しみを絶え間なく受ける。６４の目を持ち火を吐く奇怪かつ巨大な鬼がいる。舌を抜き出されて１００本の釘を打たれ、毒や火を吐く虫や大蛇に責めさいなまれ、熱鉄の山を上り下りさせられる。これまでの地獄さえ、この無間地獄に比べれば夢のような幸福だという。

01．泥梨　（にらや）

求めを失いし束縛の王……

天涯孤独。
そこには何もなかった。誰も居なかった。

天涯地角。
無限に続く紅い大地。地平彼方を忘れた赤い空。

積年塋域。
荒涼した風は全てをすさばせ、過去を忘れさせる。

無念遐域。
果ての無い道程は彼の未来を彼方に掻き消す。

ココには何も無く、彼のモノが全てある。
Ｈｅｒｅ ｉｓ ｎｏｔｈｉｎｇ, ｔｈｅ ｓｋｙ ｉｓ ｔｈｅ ｌｉｍｉｔ.

そして、彼などと言うモノはココにはない。
Ｔｈｅｎ, ｈｅｒｅ ｈｅ ｉｓ ｔｈｅ ｏｎｅ.

彼はただ一人、この地の王として底に立つ。
Ｈｅ ｉｓ ＯＮＬＹ ｓｔａｎｄｉｎｇ ａｔ ｏｗｎ Ｉｎｆｅｒｎｏ.

故に彼は『　』と呼ばれた……

Ｈｅｎｃｅ　ｈｅ　ｗａｓ　ｃａｌｌｅｄ　……

02. 等割（とうかつ）（前書き）

狂った宙、失われた楽園、そして矛盾した悪性。
朧げな世界は古き深き夢。

02．等割　（とうかつ）

七月　十九日
午後十一時三十七分　警察無線

［神南町（かんなみちょう）巡回本部より、三号車、三号車どうぞ］
［コチラ神南町巡回三号車、感度良好、どうぞ］
［通報のあった被害者（ガイシャ）の確認お願いします］
［ガイシャ、女性、遺体を激しく損傷しているため身元、年齢ともに不明。うわぁ、これ、ヒドイですね。この間と同じで『心臓がありません』。鑑識が入るまで現場を維持します、どうぞ］
［本部了解、あー、今、応援がありました。別命あるまで待機、現場維持でお願いします］
［了解、――ンッ?!］
［三号車、応答願います。異常ありましたか?］
［いや、あ……、失礼しました。今、現場の聞き込みしていた巡査の報告で、甲冑を着て鉄の塊みたいな剣を持った大男とドデカイ槍を持った同じく大男の二人が逃走していたと言う、また変な情報が入りました、どうぞ］
［……そうですか。……こちらも今、連絡入りました。署長からの通達で、今回もまた『黒服（死神）』の奴らの領分みたいです］
［じゃあ……、現場を維持する班長以外は解散ですね、どうぞ］
［それじゃあ、引継ぎまで現場維持、よろしくお願いします］
［三号車、了解しました。はぁ、もう五日間も続けてまた斬殺死体か］
［私も家に三日も帰ってませんよ。新婚なのになぁ……］

同日
午後十一時五十二分　和木市内（わきしない）

視界が、前から後ろへ流れていた。静かな街の情景。線路脇に無言でそびえ立つ灰色のビル群。

その静けさを切り裂くように、暗色に練られた線路上を一両の電車が疾走していた。

ビル群の窓から漏れるまだらな明かりに照らされ、線路上の闇の中にありながら、車両は暗色に埋没するほど無個性でなく、それぞれの側面が各々の煌きを見せていた。

日常を走る鉄の箱がその銀色のボディを白く、暗闇の中で一つ目の魔物のように目を輝きに任せて光らせている。

電車の中では一人の泥酔した、中年のサラリーマンが眠りこけているのみであった。

電車の揺れに任せて酒で赤ら顔となったサラリーマンは、静けさと無縁なギシギシとうるさい古い座席上で、だらしなく口を開けながら首を前後に揺らしている。

空調としてはあまりに微弱な役割を持つ扇風機。古い車体だから、それとも管理を怠ったためなのか、不規則に点滅する蛍光灯の一つは薄暗い車内を助長するだけで、むしろ外から伸びるビルの方が光を強く感じさせる。

日常を疲れたいびきをかくサラリーマンを、優しく包む光のカーテンが、電車の揺れに合わせて動いていた。

その光のカーテンから一筋、紅の電光。

風よりも疾く早く、アカイ、何かが薙ぎ。
と、同時に、真逆の闇の間から二つの鉄色が閃く。

互いに弾けて、火花を散らす。

やや遅れて甲高い、金属の音色を響かせる。

紅と鉄、どちらも鮮烈な一撃だった。
光の外、闇の中、電車の上で一本の槍と二本の剣が舞っていた。
灰色のビルの間を走る鉄の舞台、強者が二人、対峙している。
再び、始まる刃金（こうてつ）の即興曲（トッカータ）。

最初の、その朱の一撃は槍。横殴りの薙ぎ、ややもすれば隙だらけの一撃が、疾走する列車よりも何十倍も速く、もう片方の剣の主を切り裂かんと疾駆。
だがそれを受けた二振りの剣も、槍の長さで増した力で負けぬよう、片方で打ち叩き、片方で打ち殺そうと奔る。
線路と車輪、列車の電力を受けるパンタグラフと送電線、それらとは違う鋼同士の掠れる音色が異常な戦場を支配している。擦れ合う線路と車輪。パンタグラフと送電線。そして、剣と槍の刃金と刃金。

あまりの速さ故にビルからの光を照り返す、武器の軌跡しか見えない。
そして、光の芸術家、否闘争者二人は視覚のみならず、音も支配していた。
その音色の奏者達の舞台は電車の天井と言う不安定な足場。尚且つ、時折その間を分かち、稀に自身らにすらパンタグラフに弾けて迫る送電線。打ち込むのには明らかに邪魔なパンタグラフそのもの。
そして、元より高速で疾走する鉄の箱。

だが、そのどれもが、彼ら、達人に取っては好機を作るための武器であり、無用の長物にはなり得ない。ある時は相手の隙を作り、またある時は付け込ませるための隙とする。

野獣の槍使いと西洋風の甲冑の騎士。もし、列車の天井、その上で戦闘をする強者の肉体を見える者がいたら、そう呼んでいただろう。

野獣の槍使い。それは巨人と言って憚らなかった。甲冑の騎士とどちらが大きいかと訊かれれば男の方が大きいと言えるほど巨大な肉体。例えるなら、熊などの獣と人を比べるような単純な大きさの違い。二メートルと言う単純な杓子の指標で示す事は出来た。だが、それ以上に男の、気合とか意思、そう言ったものがそれ以上に男を超然と大きさの違いを見せていた。そして、その両手には男自身を越えるほどの長大な一本の槍が躍っている。

その槍は長大で質素なデザインでありながら、何処かこの世のモノと違っていた。侵しがたい神性さを保つ『アカイ』色の槍。だが何故かその槍の先には『 突く部分 』がない。刃の先だけが欠けていた。長い刃は明らかに鋭さを有する刃先を持つべきなのにそれが欠けていた。それは反りが無いために薙刀の刃では無く、その半端な長さ故に中国伝来の鉤状の矛でも無い事は明白。いや、そうではなく、武器自体が自身が『槍』であると主張していたからだろうか？　しかしながら、強烈な武器のタイプの主張とは正反対に、その『アカイ』色の槍には漠然としたアカと言う以外に色の統一性がなく、濃く、薄くと常に色そのものが揺らいでいる。それは魔性のためか、それとも神性か？

対して甲冑を着込んだ大男は、幅広の、そして剛直な二本の剣で討ちかかる。一刀の長さは一メートル程の、やや長めの直剣と同じでありながら、普通の幅広など超えて尋常でない太さと幅を持った直剣。それを諸手にそれぞれ携えてもう片方の男に躍りかかる。剣の重さは量り知る事は出来ない。切るや潰すと言った機能を無視し

て、その剣の当たった場所はスピードと、その重さで爆発したように四散するに違いない。振るだけで爆殺させる剣なのだ。金髪に碧眼の美青年、いや美中年だろうか？　何にしろ、年齢は闘争でのあまりの速さと四方への闘気でぶれていた判明しない。もとい闇の中では顔細工の判別などつかない。

槍使いのアカい槍が風を切って捨てるように振るわれる。甲冑の男は半身で、鼻先を擦った刃物を避け、返すように体ごと回転しながら、走る電車に添う真上、送電線の間から剣を落とす。槍が刃を逸らす。瞬間に互いの刃と刃が同じ頭部を狙って拮抗。

電車が斜めに傾きながら、カーブを曲がる。

車内のサラリーマンの首が、斜め後ろに反り返る。

最も人体で硬い、頭蓋骨を突き抜く一撃が互いに外された。決して電車の動きで外れたのではない、互いが首をそらし、見切ってかわしたのだ。

槍使い自身の思考よりも早く、戦闘本能が、槍の石突、刃とは反対の部分が反転して下から甲冑の隙間へと突き上げる。左足付け根。狙いを見据えて騎士は剣で叩く。瞬間、火の花弁が散る。

再び反転した槍の刃が上から円を描く。だが、騎士の剣は二振りなのだ。片方の受けに使った剣は下から突きに移行しつつ、片方で翳（かざ）しながら受けを取る。その突きを長さで間合いを外し、槍が受ける。

高く、より高く響く刃金の楽譜。

――緊（キン）――、

――緊（キン）――、

と絶え間なく、幻想の如く、闘いの亡者達は死撃を打ち重ねている。音は何処かで指揮棒を振るわれているかのように調律されてい

た。

打ち込みは際限りなく、この先はもう無いだろうと言うような、しかし、そのクライマックスの上限など打ち破って、幾度となくその鋼の音符達は天井知らずに加速と連符を重ねていく。

千紫万紅の火花が百花繚乱と咲き乱れる。ビルから零れる光のカーテンを、更に彩る花弁が破羅々々（バラバラ）と花火の如く散らばる。

素人から見れば、それは単純な、突きと振りの繰り返し。しかし、嗜む者なら確実に、時を経た達人なら嫌と言うほど分かるほどの人としての技量の隔絶ある連撃。高みを越え、神域を越え、最早魔域の戦闘空間。常識、常道、定石。あらゆる常にして定めるものを覆す。何故、円を描いて振る槍が突きより速い。何故、有り得ない重さの剣が持ち上がる。

その答えは、ただ、彼らが『人ではない』と言う解を示すのみ。

槍使いが、流水に笹を流すような、突きに似た撫で斬りを三度放つ。鎧の付け根、首と両肩。あまりの間隔の早さに槍が三つに分かれたような錯覚を起こす。だが、騎士は首と片方の肩を狙った斬撃を二つの剣で打ち反らし、最後の突きを肩の鎧で弾く。

再び、剛剣は鉄塊で、鼻先で笑うかのように槍使いに打ち込まれていく。だが槍使いも、その重さとそれを苦もなく卓越した技術で操る甲冑の騎士に、槍を天然の膂力と共に鮮烈に合わせ、外している。槍の梃子と速度と力と技が双剣の削撃をかわし、なおかつもっとも反撃し易いようにギリギリまで、皮膚に薄傷を残すまで引きつけて落とす。

互角、拮抗、見えない鉄線が熱を帯びて張り詰め、直前で切れないようなその白熱戦で繰り広げられる、

死闘。

常人の刀の一振り、一合と呼ばれる中でその十倍の死のやりとりを交わす刹那の打ち合い。

それは常人の命を瞬時で奪い尽くす狂気でありながら、その立ち回りはなお、美しかった。

黄金比。狂気と技の美しさの比率が凄惨さを一歩手前で芸術に変えているのだ。

これが何処ぞの戦闘狂達の話で有ったなら、彼らは同時に、ニヤリ、と不敵かつ傲岸不遜な笑みでも浮かべただろう。しかし残念ながら今の彼らはどちらも悲しき運命（さだめ）の手に落ちた受難者達の足掻きだけであり、この一撃は無限永劫に続く連撃の中の、更に一つにしかならない、ただの苦痛。つまりは合わせ鏡に囲まれた自身を罵倒する行為に似ているのだ。

癒しは遠く彼方。千の年月の更に向こうの夢想。万の年月の更に向こうの回想。億の年月へと至る、それは己の無限の牢獄に囲まれた小さな幻想……

それはただの亡霊の狂気（パラノイア）か、それとも咎人の地獄（インフェルノ）か……

ふと、槍使いがコマ落としのように瞬時にさがる。一呼吸の十分の一で離された距離は七歩。次の一撃で殲滅すると、その槍の長さを生かすために離した間合いの利。そのしなやかな動きは容貌にも似た野生の獣そのものである。山獣の王の筋力に、猫科の肉食獣を彷彿とさせるしなやかで天然の動き。それは同じ異形でなければ、決して立ち向かう事は出来ない圧力だろう。

それに対して、異形そのものである甲冑の騎士は、右手の肘を伸ばし気味にして相手の右目を射抜くように、左手は相手の腹をぶち抜くように剣を向ける。蒼い瞳の騎士は貫かんとジクジクと燃える殺意を込める。

それだけで大男は顔面を貫かれ、腹を三度刻まれたような感覚を覚えて冷や汗を感じた。しかし、それに対抗するように腹の奥底に裂帛の気合を込めながら、槍を地面に立てるように構え、さらに一

歩踏み出す。騎士は大男の体と槍が一回り大きくなったように思えた。

それでも騎士も踏み出す。これで大兵の足で四歩。『貫』の機能を失った槍だが、残り一歩で重装甲の甲冑ごと、胴薙ぎに出来る間合い。

だが騎士も、それを十分承知。先に槍の内側に踏み込んで、剣で切る、いや異常とも言える剣の重さで爆殺させるのみ。

思考が、意志が、仮想の刃が四歩の間を奔る。更に彼らは意識の内で二十合重ねる、心理の内での殺し合い。彼らの心の中では既に何十回、何百回と相手が殺され、自分が死に掛けて、それでも生きている。身体は動かさずとも、心で機先を制する……

自然にその機先すら消え、どちらの汗と気息も冷え、ただ待つ。熟した機を、ただ待つ。

偶然でも、一瞥でも電車の上を見る事の出来た人は驚いたであろう。中空には浮かぶ三つの刃。

心の動きを消した結果、肉体にあたる部分は常人からは人の形だと感知されぬ程、達人の域に入った強者達。

先の動の闘いとは正反対の極致。

ただ、武器だけがその人物のいる虚空を示しながら、持ち主の心気を伝えるように呼吸に合わせて肥大と僅かな縮小を繰り返す。

湖面の静水に映される月の如く、両者は動かない。

古来、武芸者はその卓越した静の精神の段階を水月の位と言った。

そして天頂にも、白く大きな、月。

同じ電車の対向車、そして、夜間に使われる警笛が互いに鳴る。

どちらともなく、二つの影はぶつかった……

02. 等割（とうかつ）（後書き）

The moon is only standing upon the evening air.

Then, little witch happen to meet the Devil.

Now the crazy nights come again...

03．黒縄（こくじょう）（前書き）

月が夜闇にただ一つ。

そして、小さな魔女は魔人と出遭う。

今、イカれた夜が再び降りる……

03．黒縄（こくじょう）

七月　二十日

遠くで奏でる鐘の音。それは終わりを明確に示しながら、私からは程遠いところに位置していた。

鐘の音の終わりと同時に、今度は体の微震。誰かは分からないが私の身体を揺さぶっているみたいだ。

もう少し、この心地よい体感を続けていたいのだから、暫くそのままにして欲しい。

一昨日よりイギリスから帰省した師父（マスター）によって新しい理論に関する講義が続いている。そのせいか普段の睡眠時間をゴッソリ削られて、こっちは何とも言えないほど、眠いのだ。眠りは至福だ。天の恵みだ。天の国は来た。ただどうでもいい事だが、寝る子は育つと言うのは最近になって嘘だと言うのが分かった。とにかく幾ら寝ても、大きくならないものは大きくならないのだ！　何しろ【実体験】に基づいているのだから。そうか、子供だけが入れるから天国なのかしら？　悟りが開けそうだ。

「……きろ、……くぬき。そろそろ起きたまえ、ありひめ。九貫（くぬき）在姫（ありひめ）。目覚めの時が来た」

「――煩い、私、寝てる」

その私の天国を奪うのは目の前にいる、高校の学友である斐川（ひかわ）常寵（じょうちょう）と言う女性だ。彼女は私の拒否権を無視して容赦無く揺さぶり続ける。まったく、私から眠りを取り上げるなど、拷問による虚偽の自白を通り越して、それどころか陪審員買収による無実無根の有罪判決だ。私刑を通り越して虐殺だ。民族浄化運動だ。地球破壊活動だ。やばっ、人類滅亡の危機？　銀河系が交差する？

いくらジョウチョーが綺麗だからって許される罪ではない。その罪に、ささやかな反逆をする。

「私、もっと寝る」

拒否権再発動。自由市民の力を思い知れ。そして世界は救われた。

「……ふむ、垂涎の上、君が学び舎で惰眠を貪る事は私は一向に構わないが……、既に用務員の方が施錠する時刻だ。直ちに下校をして、残りの睡眠時間は快適な自宅で存分に浪費したまえ」

「なぬ？」

――その言の葉で重たい瞼を開けてみれば、夕暮れが教室を薄い橙色に染めていた。橙色より赤に近づいていく教室だが、冷房の効いていない、外の初夏の気温を考えると思わずゾッとしてしまう。また今夜も寝苦しくてもっと寝れなくなるのかなぁと思うと、少々鬱になりそうだ。最近、変な夢も見ているし、疲れているのかな？

顎が外れそうで外れない欠伸と縦方向への伸び、パキパキと胸椎の関節が鳴る音が妙な心地よさを引き起こす。同時に、ところてんだった脳みそが皺を取り戻して本来の思考回路を呼び戻した。机に座って突っ伏したまま寝るとは、最近疲れがドッと押し寄せているのだろう。

私の机の隣りに片膝を立てて（勿論下着は見えていない角度で）、机の上で本を読む長髪眼鏡の文学美少女。その美少女、ジョウチョーの長く、黒い髪は腰まで伸びている。指を髪に差し入れ、その流れに沿えば、きっとその白い肌と相余って清流のように感じるであろう。銀縁眼鏡越しの切れ長の灰色にも見える瞳は、ただ真っ直ぐと何かを見透かすようでいて、初対面のそう言ったものに慣れない人は畏怖に似た感情を抱かせるだろう。この年頃の女性としては平均的な身長のはずだが、手足が外人か何かのように日本人の平均よりも長いため、スラリと高い印象を受ける。しかし、こう表現をすると彼女の場合はかわいいと言うより凛々しいと感じるだろう。実際、容貌の雰囲気は美男子に程近いが（その豊満な胸囲、いや、脅

威を除いて）、それでも女性らしい繊細さと愛らしさも同居している。だから、笑うと可愛いのだ、本当に、ズルイくらいに。

ちなみに私の場合は、身長が平均よりも大幅に低い上に童顔である。胸もあるかないかと言われれば、……まぁ、まったく無いに等しいだろう。唯一、彼女に対抗出来るとしたら同じ位の長さを持つ黒髪くらいのものだ。おかげでジョウチョーと比較して、私を眺める男子は物珍しさのお陰だろうか？　やたら多いのが悩みだ。あぁ、もっと背が高くなりたいです……

「で、何で私を早く起こさなかったのさ」

自分でも驚くほど、ムスッとした声色だった。

でもそれも当然だ。今日は本当ならば早く家に帰って、家政婦も雇いたくなるくらい無駄に広い自宅を掃除したりしなくてはいけなかったのだ。しかも加えて洗濯と食事と買い物などなど、平均の高校生に比べれば遥かに忙しい中で、更に一人暮らしで色々と事情のある私はトビっきり忙しいのだ。はぁ、何処かに掃除洗濯食膳をロハでやってくれるような奇特な人間はいないのかなぁ……？

とにかく、スティック状のスナック菓子、ポッチーのストロベリー味をパクつきながら、理不尽にも私の眠りを覚まさせたジョウチョーに文句を言い立てた。本から眼を離さないところが余計に苛立ちを煽る。

「――本の中には、それを読んで学ぶためでなく、著者が何かを知っていたと言う事を我々に知らせるために書かれたと思われるような本がある。ふむ、格言と反省より」

革のブックカバー付きの本を閉じて、しばらく浸るように眼を閉じ、それからこちらを見据えた。まるで面白いものを見るかのように。

「……有無、やっと元の口調に戻ったな。先ほどの問いに対する回答は至極簡単だ。君が下校時刻ギリギリまで起きなかったという客観的事実だけだ。以上、証明終了」

「ムッ」

色々と一言言いたいが黙っておこう。これ以上事態を拗れさせるのもなんだし。

「で、ジョウチョーはこんなところで何をしていたのさ」

「眠り姫の目覚めを待ちながらの読書だ。なぁに、詩文を愛でていれば、他愛も無く時間は消費されていくものだ」

白魚のような手とはよく言ったもの、生きたビスクドールが交配して出来たような白皙の片手にはゲーテの作品、それも原文のヴァージョンが収められている。つまり、日本語ではなくドイツ語だ。彼女曰く、戸上と言う、あの作家だかフリーライターだかすら分からないあのインチキ文芸男を真似て多言語に精通しようとしているとの事だ。私個人としては、あの男はただの嘘吐きだけにしか思えないけど……

「で、まさかゲーテ（愛の詩人）だから愛でているんですか？」

「まさか、私は詩文を等しく愛する人間だよ。この世で面白くない本など無いからね。加えて君の可愛らしい寝顔を肴にすればページも中々運びが良い、ふふっ」

もしかして最近、長編伝奇モノでも読んだのだろうか？　それよりも、自分より絵面的に格下の女の子を褒めるのはとても良くない事だと思う。ひどい屈辱だ。

「まったく、校内の運動テスト二位が薄暗い文学じゃぁ、体育課の先生方が挙って泣くのは当然だよね。教室で根暗に本読んでないで、若者らしく外を爽やかに笑いながら走って青春でもしなさいな」

目の前の彼女は見た目どおりのの知性の高さに比類して、運動能力も極めて高い。太極拳とか、八極拳とか、そう言う中国拳法の類を親類から習っているらしい。ちなみに実力の程は言うと、

街角で転んで何処かの誰かが頭突きを『その身長』故に、たまたま道の反対を歩いていたチンピラの一人の下腹部、の更に下に食らわして、弁解に対して逆ギレさせてしまったチンピラ五人組の内三人を、『頭突きをしてしまった方の連れだから』と言う理由と暇つ

ぶしの戯れで正当防衛の範囲でボコボコにするくらいは強い。
ちなみに残りの二人は頭部に変なものを押し付けた罪務超過の返上なので左ハイキックと右ストレートで本人が責任を持って始末したらしい（本人談）。

「君、突然笑いながら外を走りだしたら、しばらくは白い部屋での生活を余儀なくされそうな気がするが……。ところで、私は文学部と言う団体に属して君の望むところの『青春的に』時間を有意義に消化しているが、帰宅部の、先日の期末考査が一位だった君はどう思うかね？」
「帰宅部で有る事に別に問題はないでしょ？　私は私で勉強したり、趣味の範囲何だりで有意義に過ごしているし」
すると顎に手を当ててジョウチョーは「なるほど、個人の満足の問題か」と素直に頷いた。うーん、この女にはこう言うカッコイイ動作が似合う。可愛いだけじゃない女っていいですねぇ。でも、その煙草に見立てたようなスナック菓子がピンクのストロベリーじゃなくて黒の『ビター』だったら及第点なんだけどな……。
「ところで君も食べるかね？」
またしても煙草のように、箱から振って差し出す一本のピンク色のポッチー。
「あー、ゴメン。あたし、甘いのは一ヶ月に一度で良いわ」
「あぁ、君は確かそう言う習慣だったな。……さて、ところで君は帰宅するのかな？　それとも一泊して我が坤高校（ひつじさる）の『八不思議』でも体験するかね？」
机から飛び降りて、意地悪そうに口の端を歪めながらジョウチョーは言った。その笑みだけで長編悪漢小説の主役を十分張れるだけの度量を見せつけられる、と私が困る。
「……結構よ。それって確か、卒業生のトガミって人とサナキって先輩が全部見たって話しでしょ？」
「らしいな。だが、一見の価値ある摩訶不思議体験だと思うぞ？」

「結構よ。不思議体験なんてしたくないから。人生でそれなりの体験するには、人にはそれ相応の力が必要なの」
私は通学鞄に机から教科書と写本を詰めながら手をヒラヒラと振って返す。
それに、それなりの経験は自分の分で十分間に合っているし。
「そうだろうか？　恐怖の一夜が明けた後、その安堵と共に湧き出る陽光との迎合。それは意味があると思うのだがな」
「はぁ、私は三連休を昼夜問わずに暫く、グッスリ寝て過ごしたいな」
「怠惰だな。結構結構。発展の絶頂は堕落と同義。君は感覚の頂点を極めて至極であろうね」
「アー、ゴメン。意味が全然分かんない」
「当然だ。瞬弁の戯言ごときで神域たる心象表現と情景描写が周知となるのは文壇の偉人、文学界のテスラと呼ばれる七歩御大（おんたい）の至芸のみ、私などは足元にも及ばない、まったく」
助長過ぎたか、クッ、と己を食い入るように早口言葉のような台詞を吐くジョウチョーさん。まぁ、堕落の頂点を極めたのだろうと邪推しているのは何と無く分かるが流した。てか、テスラって偉人というより変人だったような気がするのだけど……
「あー、はいはい。もぅ適当に文学していて」
「雅に欠けるな」
「ウ　ル　サ　イ」
「譫言（たわごと）を真に受けるでない」
欠伸と伸びを再び同時に行って、ジョウチョーが栞と本、そして独日辞書をしまうのを待って、短い歩幅で帰路に着く。
斐川　常寵は学校での私にとって唯一、友人とも言える人間だ。
思慮深く、無遠慮でありながら引き際を得ている。他人との深い係わり合いをゴメン被りたい。若干人との関わりを拒絶気味な私としては理想の友人である。別に彼女とは深く関わっても問題ないのだが『安全面を考慮すると』この学校だけに留まった関係は非常に都

合がいいのだ。彼女もそれを感じ取っているのか？　私との距離を理性的に感じ取ってそこから先に踏み込もうとはしない。学校での行動を共にしたり、休日に買い物を連れたり、連れられたりはしても、互いの家族関係や普段は何をしているのかなどは自分から話さない限りは聞く事はない。そして、未だ聞いたことも話したこともない。

「つかぬ事を伺うが、君は文学に興味は無いのか？」

何事も無く、その夕日を背に影の長さを比べるように二人で歩いていると、ふと思い出すようにジョウチョーは言った。

「んー、特には無いかな？」

私は自分の性格上、実用的、あるいは即物的とも言える『意味のある文章』以外はあまり読まない。学校の勉強の成果もその自分の主義と目的を進んで学んだ上での、結果的な副産物みたいなものである。

「だが、君は確か、聖王小鍵典（レメゲトン）やら死霊祭記（ネクロノミコン）、緑黄石碑（エメラルドタブレット）に類する、出自の如何わしい文書や月刊レムリアのようなオカルト系カストリ雑誌を愛読していたのを記憶しているのだが？」

カストリ雑誌……って、一体何時の時代の話をしているのよ？

ちなみにカストリは、戦後に流行った安物焼酎の別称、カストリのように早く酔う、早く堕ちる酒。つまり早く廃刊になりそうな雑誌を指す。んー、何だかかんだであぁ言うのも意外に愛読者は多いんだけどなぁ……

「そうかな？　変わってる？」

「あぁ。私の知る限り、実用主義の君とは思えないような行動だと感じる。二年の先輩にあたる『　魔女　』と呼ばれる千塚屋某。彼女とよく似通った趣味だな。私も、それが書店などで買えるような邦訳を施されたコピーモノであるのなら趣味の範疇と思えるがな。しかし、時代掛かった革張りの絶版本などは、本好きの私から見ればこれから本気で『魔術』を習得するようにしか見えないな」

射抜くようにも見える、鋭い視線。まるで魂の内から見透かされ

るような、眼鏡のガラスが照り返す白銀色……

「……そんな風に、見えるかな？」

私は軽口を叩くように張り詰めた首筋を緩めながら年相応らしく微笑んだ。だが少し納得はいかないように、私は眉根を潜めていたかもしれない。何故なら彼女は私の分野からすれば素人らしい、致命的な間違いを犯したからだ。

「私の目にはな」

「そうかな？　私からは節穴のように見えるね」

「節があるなら竹か。私を二級品扱いとは良い度胸だな」

何を言っているのやら……、あぁ、そうか。

「松竹梅のこと？　でも松の眼って目にやたらとごみとか『やに』が付きそうで見た目上不衛生だけど？」

「察しの通りだ。私も竹よりむしろ可憐な梅の方が好ましい。ところで、君は信じてないようだが、私は本気を出すと咲き乱れる梅の花より凄いぞ？」

「眼鏡を取るとステータスアップとか？」

眼鏡を取ると美少女。いや、もう十分なのでこれ以上のヴィジュアルのヴァージョンアップは止めてください、ホントに。

「……君は、本当に勘がいいな。概ねその通りだ。有無、……それでは、私はここまでだ」

彼女は学校の近所に住んでいるため、電車通いの私とはこの五つの道の重なる五十字路での別れる事となる。

「――ところで帰り道は気をつけたまえ」

「何を？」

ジョウチョーは対戦後の格闘ゲームの勝ち手のように背中を見せながら、こちらに顔を向けている。あんた、カッコ良過ぎ。

「最近通り魔が横行しているとの事だ。我が町の新聞の地方欄では全身を細切れに切られ、『心臓の抉られた』死体が昨日を持って四人目、だそうだ。人間とは思えない怪力で巨大な剣を振るっていた

甲冑の剣士と巨大な槍を持った背の高い男を見かけたなど、色々な噂や憶測も飛び交っている」

気をつけ給え、と食事中に塩を掛けるぐらいの気軽さで、至極物騒な一言の後に添える。

「最近は不可解な事が多い。猫を頭に乗せた自称美少女吸血鬼や、ツィンタワーを這う蜘蛛女とビルを這う黒服の男の話、『本気狩る（マジカル）』などとほざく奇怪面妖な輩は序の口だ。断層とは関係の無いところでの地震騒ぎや、ゾンビの集団、幽霊の群体。街中にチーターが出て人を襲い、それをパンダが取り押さえるとか……、とにかくこの町は不思議な事が多いのだ」

「……ふーん、まぁ、ジョウチョーも怪異には気をつけて」

「ふっ、腕にだけ覚えならある程度はあるし、分別もある。それでは、また明日に」

背中向きのまま、シュタッと、片手を上げ、夕日を背景に艶やかな腰までの髪を揺らしながら彼女は赤に消えていく。

彼女は襲われる心配は無い……。襲われた四人、四人は四人とも『魔女』だったのだ。

私あてにも別途、魔女協会、通称サバトからも既に厳戒令が通達されている。

遅くなったが、九貫　在姫は【魔女】である。

アブラカダブラだろうが、テクマクマヤコンだか、チチンプイプイだか、パイポィポイプゥワプゥワプゥだか、エロイムエッサイムだろうが、とにかく【呪文】を唱え、己の力で自己の内面を変革して行使する術を持つ者を【魔法使い】と呼ぶ。その中でも、代々その血脈を伝えている存在を古来より【魔女】と呼ぶのだ。

【霊気装甲】と呼ばれる、体内に含まれる微妙なソレを血管に通して体内中に流し、呪文と共にイメージと結びつけて神秘を起こす術を、私たち魔女の間では【魔法】と呼び、魔法を使うために専用に濾過した力を【魔力】と呼ぶ。【魔法】は【魔術】とはまったく別の類別とされるのだ。

プラットホーム、とも言えないほど寂れた風景をバックに、私は駅のベンチに腰を掛け特殊な象形文字を組み合わせた本を読み耽始める。

一見アラビア文字にしか見えないミミズのたくったような曲線の羅列は、協会の所属者のみに伝わる魔法継承の為の呪文集でありエノク語で表記されている。まぁ、教会の御人達は頑なに神の言語と信じられているけど、これはどちらかと言う『この世界以外の神』から伝えられたものなのだ。ちなみにイメージとしてはサンスクリット語とギリシャ語とアラビア語をごった煮にしたような感じである。

むろん、書いてある呪文全てを私は使えるワケではない。私の魔力と能力の許容量を満たし、尚且つ『身体に刻まれた』術しか使う事は出来ないのだ。

身体に刻まれたと言うのは『記憶』よりも明確な段階を示す指標に過ぎない、私たち魔女は呪文としての言葉の記憶よりも確かに、そこに『魔法』が『ある』ことを体が知っているのだ。

そう、魔法を覚えるのには何よりも反復反射、神経単位、脳でなく、体が憶える段階まで到達させるのが『魔法を使う』と言う行為なのだ。

まれに言葉の意味を理解するだけで【言霊】の位相世界から認識空間を操る魔法使いも存在する。だが、手馴れた使い手は協会には所属せず、十年ほど前に亡くなったらしい。協会の調べでは最近、私の学校にその孫が転校生として一人来たらしい。だが一つの魔法と魔術的結界作用、エリクサーの作成程度しか出来ないと言う体た

らくのため、私の中では『並以下』の魔女として記憶されている。ちなみにそれは先ほど出た千塚屋と言う者の名である。むろん、それが本当の実力かどうかはあてにはならないけれど。

ちなみに私は慧埜(エノク)句語から直接呪文を使う事が出来ないので、私はエノク語に遠くて、それでも私の知る中で一番近い英語に意識上の変換をして使用している。本当は大陸セム系の言語を使った方がもっと効率がいいのだけど、梵字をそらで言えたり、ギリシャ語をペラペラに喋ったり、アラビア語の交渉が出来るようぐらいがないとそれは難しい。バスク語も裸足で逃げ出す言語が修得出来そうなのは……、知っている限りでは小説家でとりあえず一人だけ居るが、あまり会いたくない知り合いだ。つまるところ、私は慧埜句語は修得していないのだ。と言うか、言い回しが難しすぎるので、慧埜句語のネイティブは世界でも名前をフルネームで覚えられるくらいしか使用者はいないはずだ。

まぁ、とにかく……

歯で指先を食い破り、そこから一滴血を落とし、体の奥底から、呼び出すように唱歌する。

「Ｉ ｓｕｍｍｏｎ ｏｎｅ ｆｒｏｍ ｂｌａｚｅ ｕｎｉｖｅｒｓｅ ｉｎ Ｎｏｄｅｎｃｅ' ｎａｍｅ……Ｄｅｒｉｖｅ（我はノーデンスの名に於いて炎界より素を呼ぶ……出でよ）」

誰も居ない駅。帰り道、長い電車待ちを潰すのに、魔法を覚えるのにはこの場所はちょうどいい具合なのだ、個人的には。

無論、自分の周囲には結界魔術が敷いてある。この本が開いている間、私の姿を見ていようと、『本を読んでいる』と言う行為しか認識されないため、普通の人は見過ごしてしまう。まれに先天的、または後天的に【魔眼】と呼ばれるモノを生得、会得した者は『看破』することもあるが、とりあえず、自分の結界を魔眼で破られて、視線に曝されれば、流石に私には分かる。

人にはそれぞれ得意な分野と言うものがある。それは四大霊素と空霊素のような【要素】を単体で直接干渉することが得意だとか、何かを混合するのが得意だとか、予言が得意とか言った【傾向】がある。だが【全要素保持者（オールキャリバー）】と呼ばれる全要素、火、水、風、土、空を網羅しているのであれば、普通なら自分と関係する要素にしか気付きにくい外界の、体外の魔力の揺らぎすら単純な業くらいなら感知できる。ちなみに私はその全保持者、それなのだが、何でも出来ると言う事は何でも手を伸ばして、全体的に底上げしなければならないと言う事で……。つまり才能あふれる器用富豪の気があるのだ。ついでに言うとやたら高い呪術的物品を取引する普通の魔女より大幅に金銭的に余裕がない。……本当は、本来の意味ではない器用貧乏ではないか、と思うのはただの愚痴である。

とにかく、才能のある人間はただでさえ学ぶ範囲が多いのだ。日常生活を言い訳に足踏みしているなどは、魔女として言い訳にもならないのだ。

ただでさえ、直接攻撃の苦手な私は火の要素を高めないと私の身体、の霊気装甲を狙う盟約無視の外国人ヘンタイ吸血鬼やらの敵対者を撃退するのが難しくなるのだ。ちなみ、どこぞのゲームでは無いが、火には神秘としての側面で、浄化、浄火の力があるために、物体を破壊したりするような力に長けているのである。面倒だからいつかはメラとかファイガとか言うだけで発動させたい。

「Ｄｅｒｉｖｅ……Ｅｆｒｅｅｔｉ、Ｐｓａｌａｍａｎｄｅｒ（出でよ……火素霊、火竜）」

目の前では、私のイメージの、焔の鋳型を備えて形作られた流素（エーテル）がある。そして開かれた見えない【異界門】から出た【火素霊】が反応して、魂がその鋳型に個着し、私の血を元に現世に固着。つまりイメージとおりに形作られる。もちろん、それは水素と酸素の反応と同じくらいの短い単位での瞬間の出来事だ。

その瞬間は爆発にも似た生命の発露。言わば、爆誕。圧倒するような七色にして極彩色の奔流が視界を埋める。

まぁ、流素なんて常人の視力じゃ感知できないから、情報量の過多による視力の破壊を防ぐために肉体が自然と目を瞑ってしまう。だから、僅かに見える色は自分の瞼越(まぶた)しだけど。

爆誕後、目の前には魔眼のあるモノで私の結界を突破できるのであれば、見えるであろう、巨大な火竜がいた。

「Ｇｒｕｈｈｈｈｈｈｈ……」

やはり、火素霊の上級幻獣、火竜だけあってその攻撃的な存在は圧巻かつ圧倒的である。その地の底から湧き出るような、厳しい鳴声を挙げている。

……って、私は何をやっているのだ。真夏に火素霊を呼び出しても暑苦しいだけじゃない！

「Ｒｅｔｕｒｎ（回帰）！」

「Ｇｒｕｈｈ……」

気紛れで呼び出された事に対する不服を下がり調子で主張しつつ、さらさらと光の粒子となって自らの幻素界に帰っていく火竜。

と、このように自らの霊気装甲を応用する事で出来るのが、一定の呪文からのイメージによって何かの結果を呼び出す魔法である。他にも体内と体外の霊気装甲を組み合わせて超常的な体術を為す【気功法】やら、触媒と儀式装置の共感作用によって行なう【呪術】、愛と勇気と乙女の貞操を自覚する思い込みで起動させる【本気狩る(マジカル)】なんて冗談みたいな方式やらがある。一体そんな方法を考えたのは何処の天才大馬鹿者一歩手前だろうか？　とにかく、一般的に神秘との関わりの無い人からは想像も及ばないほど、神秘を起こす体系は無数に存在するのだ。

ちなみに私の魔法である、歴史や想念を備えた概念の側面から事象を呼び込む魔法を召喚術などと霊気工学と呼ばれる体系で専門的に言う。

もっと簡単に、そして乱暴に言うと、その世界の神様にムリヤリ「こっちに元になる身体（流素）も餌（魔力）も、来るための道（門）も用意したから部下（素霊）を送ってー」と異界に向かってアポ（呪文）を取って呼び寄せるものなのだ。そしてイメージ通りの部下、もとい素霊、魔獣やら聖獣やら神獣などを送ってもらうのだ。無論、キチンとした長いアポ、もとい呪文や儀式であれば成功率は高まるし、省略すれば失敗しやすくなる。それでも上手い人だと火竜のような竜でなく、人並みの意思を持った龍やら（グレートドラゴン）、麒麟のような幻想動物、そしてあの魔人をも容易く一言で呼んでしまうらしい。その辺りまでいくとキャリアの差だから、私が後プラス十年くらいの年月が必要なはずだ。

それでも『召喚術士（サモナー）』の在姫は、私の通り名のようなものだ。他にも協会では竜巻百殺だの、矮躯撲殺天使とか、マイ・シスなんとかなど、怖気や怒りを覚えるような不名誉なあだ名もあるが、早急に忘れたい。

ところで、先ほどジョウチョーの間違えた【魔法】と【魔術】は根本的に違う。

魔法は体内の霊気装甲を使う、つまり一定の才能が必要なモノだが、魔術は『体外』、自然の『石』や『樹木』などの霊気装甲を正しく、理論的に使えば誰でも出来るものなのだ。言わば、才能を扱う芸術家と積み上げた技術を使う職人みたいな差なのだろう。

そして死を賭してまで魔女、いや、この世で神秘を探求する全ての者が求めるは唯一絶対の神秘獲得。つまり、極端の極端、異端の異端、【大禁呪】を身に刻むためである。

【大禁呪】は不老不死だったり、世界を思うがままに操ったり、巨大な惑星の軌道をズラしたり、何百年も前に死んだ人間を生き返らせたり、神や一つの宇宙を創り出したりするような、同じ神秘の範疇でもスケールがトコトン違う世界なのだ。それでも無論、そんなチートは霊気装甲が力を使い果たして空になるまでと言う制約はあるのだけれど。

とにかく勉学。その実、つまり魔法使いは神秘と言う観点に立っただけの、普通の科学者や研究者と変わらないのだ。つまり、私は探求者なのである。

よく学び、よく遊べ、いや、よく魔法を使え、だったか？

私を育てた義理の母。

今は亡き、一代限りの魔法使いでありながら、今まで代々の協会長の魔女である待崎家を含めて五人だけが連ねた、魔女の最極位、大元級（イブシシマスクラス）にあったアノ人。

大師（グレートマスター）アーキ・オリアクス・ゲヘン・ユキ・バシレイオス、人型核地雷、古い隠者、黒い魔法使いなどと呼ばれた人の格言だった気がする。

と、一人で基礎的な事柄などを一秒弱で頭の中で反芻し、視線を本に戻した瞬間、それは聞こえた。

列車の警笛。

駅の時計は四時五分……

……おかしい、この時間に止まる列車は存在しないはずだ。いや、正確には存在してはイケナイのだ。

いや、もっとおかしいのは時間だ。私は下校時間に学校を出たはずだ。なら、全ての時の刻みは『七時以降』になっていなければいけないはずなのだ。まるで、時を戻した、いや、その時間に止めていたような列車。

神南町七不思議。

地獄へ続く霊界の列車。そう、四時五分に止まる、いや四時五分に『時間を止める』列車はそう呼ばれている。

列車は至って普通の列車と変わらない。違うとすれば、何処からともなくこの静寂を持ち込み、暑さすら忘れ、周囲に冷気を帯びさせる異様な雰囲気だ。

てか、学校じゃなくて、町の七不思議に出会ってしまう私は我なが異才を放つようだ。

［怪異と怪異は恋するように惹かれ遇う。いやぁ、す・て・き（星マーク）　ｂｙ　大師　ユキちゃん］

そんな嫌な格言も思い出した。

そして、気付けば、辺りは人だらけだった。

自らの取れた首を持った男性。青白い顔をした眼窩の奥のない少女。全身を刻まれ、今だ血を垂れ流す女性。切断された下半身を右手で掴み、左手で白線まで這いずる少年、他にも、他にも、他にも、他にも、他にも、他にも、他にも……

否、気付けば、辺りは幽霊だらけだった。

魔女であるからには降霊儀式で幽霊の一つや二つを呼び出した事は何度かある。だが、これほどまで局地的に霊体が集中するのはおかしい。異常だ。まるで思念、いや死人が集める無念の屍念のようなものだ。

故に、私は一歩も動く事は出来なかった。

一つ思う事が、魔術結界が霊体にも有効でよかったと、安堵にも似た感情。そう思ったことだけだった。あんな死んで虚ろなで濁った眼で見られた日には食欲が減退して、夕食の御飯のおかわりが四杯から三杯に減ってしまう。

霊たちは私に構う事なく、それぞれが思い思いに移動、あるいは転がったりしながら車両のドアから乗っていく。通り抜けたりはしない所は意外とおちゃめだと感じてしまう。

そして幽霊が乗り終わり、警笛が再び鳴ると同時に、ドアからソイツは出てきた。

「え……？」

頭から多量の紅を流しつづける黒髪、短髪の巨体の青年。顔までベッタリと真っ赤に染めながら私の前まで来ると、

「……か……り？」

と何かを私から見つけるように、見ながらそう言って、そのままうつぶせに倒れた。

ドアは彼の倒れると同時に再び警笛を鳴らして閉まった。

そのまま線路の半ばで霞みの如く霧散していく列車……

沈黙の統治は青年の呻き声で崩れた。

「ちょっ！」

何々？　何々？！　どうすれば良いの!?　って、落ち着けって！　あぁ、しまった！　空中に一人で突っ込んでる。

深呼吸。今度は魔女として、研究者の如く、冷静に観察する。

頭部の側面に裂傷、頭皮が打ち破れ、耳が裂け掛けている。

鋭い刃物ではなく鈍器のようなモノがぶつかったように見える。

頭蓋骨も割れて、ちょっと暫くは鍋物、特に白子とか食べたく無くなるようなモノがちょっと見えている。

傍から見れば死んでいるようにしか見えないが、それでも彼は、荒く、不規則にも呼吸を繰り返していた。

それにしても……

「デクノ坊だよね、コレ」

百四十五ちょい……、以下の私が、二人で縦に並んでも大きいのでは無いかと思うほどのデカイ体だ。

それに加えて、肉食獣の幼年期のように獰猛さと愛着性を発揮した不思議な顔だ。

ジョウチョーが以前言っていた、燕頷虎頸の風貌とでも言った感じだ（説明を聞いてもまったくどんな風貌かは見当もつかなかったが）。

「失礼しまーす」

脳の異常を確かめるのには瞳孔を見るのが簡単なのだ。と言うわ

けで、瞼をグイッと押し上げる。言い方が何処かの風俗嬢みたいだと思ったが、一ナノ秒で思考から打ち消した。

――世界が終わった。

壊れる。全てが壊れる。しかも壊れて、また歪に改築される。壊れる。無限の円環。円環の理、狂え、繰る絵、それを見て、観て、ひたすら狂え――

……あれ？　今、私は何を見ていたのだろう。一瞬だけ、何か捕らわれてはイケナイモノに捕らわれかけた。

だが、魔女の意地って奴か？「そんなワケの分からないものに負けて溜まるか」って深呼吸、もとい気合を掛けた途端に元に戻った。

……、瞳孔は光の加減でしっかり収縮している。では、輸送と治療手段だ。まさか、こんな所に怪我人を置いておいて死なれても寝目覚めが悪い。

何よりも私は思った。こんな時に怪異で、倒れている人を助けず、ましてや魔女として必要な力を持っていて使えなくてどうするのかと。

浅慮な判断だったかも知れない。でも、魔女である以前に、私は人間だ。私は、そんな薄情には生きたくはない。そう、あの人のように……

私は先ほどと同じ様に地面に一滴の血を垂らし、一瞬にして、「Ｉ　ｓｕｍｍｏｎ　ｏｎｅ　ｆｒｏｍ　ｂｌｏｗ　ｕｎｉｖｅｒｓｅ　ｉｎ　Ｉｔｈａｑｕａ'　ｎａｍｅ．　Ｄｅｒｉｖｅ　Ｓｙｌｐｈ，　Ｈｉｐｐｏｇｒｉｆｆ（我はイタクァの名に於いて風界

より素を呼ぶ。出でよ、風霊素、ヒッポグリフ）！」

前の詠唱より早く、素早い呪文の唱歌と共に、現実に異生物を呼ぶ。

爆発と放射光。傍から見ると核爆発に毎回出くわしているように見えるかも知れない、なんてどうでもいい考えが浮かんだ。

目の前に現れた、体高が私の視線よりもいくらか上にある生物は、胴体がヒッポ（ペガサス）で、頭と前足がグリフ（鷲）。その飛行速度は随一とも言われているギリシャの魔獣は、私に甘えるように目を瞑りながら擦り寄った。

「ヨシヨシ、じゃあ行くよ？」

私の合図と同時に、爪の付いた前足で男を優しく掴み、私を背に乗せて暗色の彼方に飛び立つ。

目指すは私の師父のお店、『ディープ・スタンド』。

魔女、双珂院（ソウカイン）生羅（セイラ）、もとい治療術の大家ならこの男を直せるはずだ。

5分後、――和木市上空二百メートル

結界で目眩しをしていなければ、誰もが顔を挙げる幻想的な光景があった。

夕暮れに染まりつつある空を背景に、神話から出てきた魔獣が大男と美少女を運んでいた……

……やっぱり美少女は却下。幽霊列車やら血だらけの男やらで頭の回路が焼き切れたに違いない。

神南町駅から十分弱、街中のビルとビルの間にひっそりと、いや、『四方を囲まれて』城砦のように立つ魔女のお店。

『Ｄｅｅｐ Ｓｔａｎｄ』。

深海の奥底に立つような隠匿性にも関わらず、実は女子高生に本当に使える魔具のお店として大人気だったりする。最近は恋敵一撃呪殺クリスタルのキーホルダーとか有名らしい。何だ一撃呪殺って。てか女子高生が殺し愛すんな。

ビルの合間に降り立ち、男を静かに横たわらせると同時にヒッポグリフの魔力供給を瞬時に解除。鷲羽と馬の掛け合わせの忠実な動物は、働けた事に満足するように傅きながら仮の肉体を失って虚空に光の粒となって霧散する。

「師父！　さっきから監視しているのは分かっていますよ！　早く助けてください！」

その声に合わせて、店のドアから静かに出て来たのは私の現在の師父、協会の番付で第七位、小達人級双珂院（アデプタス・マイナークラス）　生羅。

私の担いだ怪我人に引けも取らないような威圧するような体格にファンシーな店のロゴの入った桃色の妙に可愛いエプロンをつけている男。神秘的な、真理を悟ったような静かな眼差し。痩躯でありながら華奢とは言えないような頑強な体。それらの威圧感を隠しこむように笑みを浮かべている。その清清しく端正な容貌は、黙っていれば女の子を自動的に吸い寄せるだろう。

「騒がなくても大丈夫だ。　マ　イ　・　シ　ス　タ　ー　・　プ　リ　ン　セ　ス　」

「　黙　れ　、良いから何とかしろ、てかマイプリ（略）止めろ」

「ふむ、『私の』女弟子、つまるところは妹と変わらない存在、その上名の通り在姫であるから『　マイ・シスター・プリンセス　』、これは世界の真理ドブゴっ！！　……師の顎を問答無用で殴るのは魔女としての関係上どうかと思うが？」

殴ってません。ただのムエカッチャー式の回転『肘』打ちです。

「うるさい。あんた、死んでみるか？」

「やれやれ、感情が昂ぶると助詞諸々を抜くのは母上殿と同じか」
と言いながら、師父は私の抱えてきた男の頭部を見る。
「ふむ……、唾をつければ、直るのではないか？」
「良いから直せ、このボケ木偶の坊」
「やれやれ、では『チチンプイプ、ィゴフッ！』　古今東西最高の治療呪文の詠唱を止めるとは何事だ！」
「アンタの脳が　何事だ！　真面目に直さないと……怒るよ」
私がチラリと冷たい魔女の目で睨む。
私が彼に、格上であるはずの師に対して手を上げられるのには魔女としての実力が格段なまでに段違いだからだ。治療術と治癒魔法では魔女随一と呼ばれ、治癒力では満月の吸血鬼と渡り会える程の男でも、――私、魔女協会認定の第二位、大魔導師級（メイガスクラス）の最年少取得者――　魔女の階級から言えば、上から二番目の私を魔法戦に限って言えば相手をしたいとは思わないだろう。
しかし、私の才能があり過ぎるのもあるが、それでも彼自身はかの地、英国の倫敦の時計塔で正統に学んだ【魔法使い】である。そして本当に稀な事に魔法使いの最高位大元級（イプシシマスクラス）で戦闘能力も極位の、最初で最後の自称『大魔法使い』　――弟子を取るのがメンドクサイので、その場で毎回シバキ倒してしまって無かったことにしてしまうエピソードで有名なアノ人――　の数少ない直弟子なのだ。それに治癒魔法にはトンと鈍い私にはそれなりに頼りになる存在でもあるのだ。ついでに１６歳と言う清純な、法的に見ても年齢上は魔女としても人間としても、未だ幼……、もとい若さもある。
ちなみに、男性でも血脈を伝える『魔法使い』は『魔女』である。魔男なんて語呂が悪いモノのはない。
「ほぅ、魔法使いの存在を知られる事を知りながら助けたようだが……、まぁ、良かろう。後は君の好きなように記憶を消すなり好きにしてくれ。隠匿は発見者の君に任せるとしよう。それと先ほどのは冗句だ。久しぶりの再会に興が乗じただけだ」

嫌な性格だ。てか、昨日今日離れたくらいで恋しくなるのかよ。
「で、容態はどうなの？」
「ふむ、出血は何故か既に止まり、さほど酷くは無いが。……脳への表層からは読み取れない障害があるかも知れん。一度、どの程度の記憶の損傷があるか調べてみないとな」
口を開きかけた私を手で制すると、さすが男児だけあって片手で、しかも一挙動で気を失っていた男を持ち上げ、肩に乗せる。
「施術を始める。君は店内でも見ながら1時間ほど待っていなさい」
個々の魔法、特に独自の体系で練り上げたモノはその個人を示す特別なモノであり、加えて協会で公開されている基本魔法を除いて他人には積極的に見せる事はない。それは師弟の場合でも論外ではないのだ。
「うん、分かった」
師父が店の地下工房に向かうのを見届けると周辺に目を転じる。
見慣れた店内には魔法使いが魔法や魔術、錬金術の触媒として使うアイテムが所狭しと並べられている。そう並べられているのだ。
実際に使える呪具、魔具、それが、『一般人の手の触れる場所』にある。
『ディープ・スタンド』、この魔女のお店は一般人にすら開放されている非現実の領域なのだ。
でも、ほとんどのアイテムは正式な手順で無い限り発動しないし、霊気装甲がある程度ないと意味すらない。本当ならば、万が一と言う事を考えれば見過ごせるモノではない。
「置くならインチキなモノにしなさいよねぇ」とブツブツ言いながら道具を見渡す。
地下からはまだ人は出てきていない。
ゲッ、『栄光の手』や『インプの小瓶』なんて本当にヤバイじゃない。あっ、でも欲しいかもとブツブツと言い続ける。

彼自身の魔法使いとしての地位は大したものではない。しかし、その代わりとも言ってはなんだが、彼の治療術と治癒魔法。そして、魔法やら魔術を付け加えた道具である呪具などの保管と鑑定に関しては魔女協会（先ほども言ったが、隠語でサバトと呼ばれる）でも一目置かれている。それは大元級の魔法使いの弟子と言う名誉だけでなく、実力そのものを表しているのだろう。

壁の一面には儀式用である剣が縦に凄然と騎兵のように整列している。う～ん。

「あ、【儀礼剣（アゾート）】だ。うーん、そろそろ、自分用の【交霊武装】でも持とうかなぁ」

自分の指先で一つ一つ手に触れながら、魔力の通りの良いものを確認していく。だが、私の眼鏡に叶うようなモノは中々ない。ある程度の物で無いと私の強力な魔力で砕けてしまうかもしれない。それでもココにある装備が一級品であるのは明白で、私自身が九貫の名に恥じずに特級品であるが上での悩みなのだ。

地下からはまだ人は出てきていない。

交霊武装とはその名の通り、万物の不可視深部、魂と深く交流する霊と感応する為の道具だ。

概念の蓄積によって作られた武装は時に神の武器として認識され、神霊武装なんてモノになったりする（中には神様そのものから貰ったりなんて話もあるとか）。まぁ、攻撃力云々で言ったら死神の鎌の方がよっぽど強い気がするけど……

だが、とにかく、通常は武器としてのみ認識される交霊武装は魔女に取っては都合のいい道具にすらなる。霊と感応しやすい武装で触れながら魔法を行なえば、通常以上の効率の良さを期待できる。

そして、その武装に魂を通わせる契約さえすれば、その効率は何倍にも上がるのだ。

【儀礼剣】は一定の規格によって大量生産される剣状の交霊武装

の総称である。
私は今までその効率に頼りすぎてしまう、甘えの可能性もあるので自制してきた。一人前の魔女として専用の儀式剣を持つのはある種の魔女のステータスであり、そろそろ私も自分を象徴する礼装を持たなくてはいけないお年頃だろう。
「……それに、今日みたいに、治癒魔法が使えないからって言って、師父に毎回頼るわけにはイカナイもんね」
何故かは知らないが、私の治癒魔法の系統は大師から今の生羅師父に移る頃に「君はこの方面の才能は諦めた方がいいかもね」と、自分の師でもある男、しかも治癒魔法のエキスパートに駄目だしされているのだ。儀礼剣で対象との関係性が高まればもしかしたら成功率が上がるかもしれない。
とにかく、そろそろ、私も独り立ちをする事だ。そうでもしないと天国、いや『地獄の』母に申し訳が立たないだろう。
と、思考の円環で誤魔化してきたが、私としては彼の事がずっと心配だった。
地下からはまだ人は出てきていない。
先ほどから何度確認したのか分からないが、私に出来る限りの事はしたまでだ。これで死んだりしたら……、気が沈むかも知れない。でも、それなら絶対に忘れてはいけない。私の通過した出来事、それを通り抜けた責任、そしてそれらを成し遂げた誇りを持たなければならないのだ。何かで誤魔化したり、自分を偽ったりなんて、私は出来ない。それが、私なのだから……
窓から出てきて、さらに天井を飛ぶ魔法の鳩時計が既に二回も鳴っている。時刻は、師父の予測の二倍をも掛かっている。
不吉な予感。

それでも、無為に過ごしていても時は立つ。
『座ると尻のデカくなる椅子』とやらに試しに座ってみたが、特に効果はなかった。不発か……。あぁ、凹凸のない体が悩ましい。ここまで来ると自分の体はスレンダーとか洗濯板とか、そう言う問題ではない気がする。
居ても立ってもいられずにその椅子に何度も立ったり座ったり、店内を見廻したりと落ち着かない。

ギシリと鳴った、階段の鍵盤に弾かれたように、その方向を見る。
階段の前には生羅師父がいた。
「……施術は成功した」
成功にも関わらず、普段は優しげな面持ちを微妙な苦渋に満たしている。
「何か、障害でもあったの？」
私の震える声に答えるように、彼は、後ろに居る『彼』を見せた。
身長は私よりも僅かに低い。１４０ｃｍかそこら、野性的と言えばそう言えるが、逞しいと言うより可愛らしいと言った印象の方が強い、黒髪、短髪の男の子だ。ぶっちゃけて言えば、哺乳動物の幼少期に似ている。具体的に言えば、ライオンとか虎、熊の子供って感じ。
・
・
・
「……えっ、誰？」
これは、私の放った言葉。
そして、彼の放った言葉。
「……俺、誰だ？」
私は、ただ混乱をするしかなかった……

五分後、目の前では目が大きくクリクリとした少年が、椅子に座りながら届かない足をぶらつかせ、私と師父をじっと見ている。雰囲気は肉食動物の子供に似ているが、その形容通り、侮ると引っ掻かれるくらいの手厳しさも窺い知れる。

着ている服は、私が昔、スカートが嫌いだったからと言う理由で着ていた、少し大きいサイズの青いパーカーに白い短パン。靴も私の昔のスニーカーを履いている。

ちょっと待て。この服は一体何処から出したんだ。

私は私で、色々と状況を理解しようと睨むように少年を見る事に努めたが、途中で溜息を吐くと再び睨むように、隣りで余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）と大量の砂糖をいれたミルクコーヒーを作っている変態男を見据える。

「どう言うこと？」

私の問いに軽くコーヒーを飲んで「苦っ」（まだ苦いと言うのか）と吐き出すように言うと、こちらを柔らかく見つめた。

「この通りの状況だよ」

大男の身体が治療中に縮んでしまった、と言う訳？

「裸だと君も困るだろ」

「いや、そっちじゃなくて……」

笑みを浮かべた生羅師父が少年の頭を撫でようとしたが、手はあっさりと少年に空かされた。ジトリと、その手に向かって少年は不快そうな視線を向ける。

私の読みとしては、少年は警戒しているが、状況理解ためにこの場から動かないと言う選択肢をとったように見えた。

「とにかく、何も無しに身体が縮むような、そんな事があるわけ……」

「……君達は魔女だな？」

師父はその柔和な顔に似合わず、軽く、そして不敵に笑う。
私は不覚ながら、少年の、いや元は大人の、そのタイミングを謀ったような言葉に背筋がピクリと震えた。
「……あぁ、気にしないでくれ、俺も『怪異』に属する側だ。言っておくが、敵対派閥ではない。これは信用して欲しい」
少年の、いや男だった少年の眼は、予想以上の理性の輝きに満ちている。身体は子供、頭脳は大人、ってやつ？
「先ほど『俺は誰だ』と言ったが思い出してくれたかな？」
少年にミルクコーヒーを差し出すが、手をつける気配は零。無理やり、少年の手の届くような場所に予め置いた。無論、そんな甘ったるいのは女の私でも却下だ。
「あぁ、先ほどから記憶の混乱は続いているが、いくらかは回復した。俺の名は国定（くにさだ）錬仁（れんじん）と言う、見た目通りと……、見た目に反して大人の男性だ」
「私は双珂院　生羅、魔法使いだ」
「私は九貫　在姫、魔女です」
自己紹介。一度、国定は驚くようにこちらを一瞬見て、しばらく硬直。
・
・
・
「で、それから？」
私の促すような言葉に、国定と自己紹介した少年（元は大人）は我にかえると思案するように目を細めた。
「いや、君達に公開して良い情報とそうでないモノを懸案している。まず、その理由から話そう。その前に、達人（アデプタス）、この工房の結界はどれ程度のものだろうか？」
少年は一目で、師父の魔法使いとしての技量を大まかに見極め、工房の結界の度合いを聞いた。この分野でも得手なのだろうか？
魔のなんたるかを知ると言う事はやっぱり同業者（魔法使い）だろうか？　でも

体が縮む呪文なんて聞いたことないよ、バロー。
「消音結界、封鎖結界、外界に向けた攻性の防御結界、これの種類は明かせない。そして地下には無限牢獄。とりあえず、小規模だが龍脈と接続して店全体を聖域化してもある」
「なるほど、先ほどから体の具合の良いのは聖域のお陰か」

例え、師弟の間でも自分の工房に張られている結界の種類は伝える事はあまり無い。結界とは特定の領域と隔絶する、魔法を使って一つの空間を創り出す『魔法結界』か、自然界の、外界の霊気装甲を利用した『魔術結界』である。『場』に掛ける術のため、よほど卓越したものでなければ霊気装甲をもつ人間からはプロテクトされてしまう。

しかし、先ほど彼の言った、封鎖結界や無限牢獄は私の位階でも解呪の難しい代物だ。

それにしても、聖域化は呪術に掛かり難くするように装甲の通りを良くして心は清浄にするが、身体まで具合が良くなるようにはならないはずだ。まるで人間ではないような、そんな物言いだ。
「なるほど、小規模のワリに大した防備だな。魔法、魔術による両方からの盗聴の心配はないな」
「もちろん、『私の城』としての防御力もありますよ」

城とはその名の通りだ。術者を守るための防御陣地。だが、防御と言うのは個々の攻撃意思を必要としない無差別魔法攻撃、と言う恐ろしい意味もある。

彼はチラリと目の前の魔法使いを警戒するような目で見た。

ん、……ってちょっと待て。
「なんでさっきから私には全ッ然ッ反応していないの！」

？を頭上に浮かべた、国定と言う少年はまるで「こいつ何言っているんだ？」と言う呆れ顔だ。
「当然だ。『未熟者』には無駄な注意を払う必要性は見出せない。認識の無駄だ」

返す刀で言われた台詞にかなりムカッ、と薄っぺらい胸に何かが来たが、極力気にはしない。

「ははっ、君もそう思うかい？　でも弟子としては誇るべき存在だ。私のかわいいマイ・シスっガボラ！！」

スカートなんか気にせずに放ったドロップキックが師父の顔面に入ったが色んな意味で気にしない（もちろんスパッツは穿いてある）。

私はその反動で椅子に座りなおすと寿司の横に添える茗荷のごとく、自然に笑顔を作った。隣りには首がおかしな角度で曲がって不規則な痙攣を繰り返す師父。まぁ、治療術の得手だし、放っとけば勝手に自己再生するでしょう。

「続けてください」

何か檻の中の動物からケダモノの本性を嗅ぎ取ったかのような目で見ているが、私は笑顔を続ける。

気圧されたか、興味が無いのか？　咳払いをした後の国定の視線から察するに今までの事は無かった事にしたようだ。

「……あぁ、まず、俺の身分から話そう。俺の身分はＷＢＯ、国連特捜室　東アジア担当の者だ」

その言葉が、和やかに流れていた空気を払拭した。

「ノーライフキングス？！」

国連特捜室、世界天秤機構。ＷＢＯ。国際的な超法規的武装諜報組織。国ごとの『闇』の固有戦力を把握、調査し、危険な固有国家戦力を排除、各国家間での闇の戦争を調停する最強の……ボランティア機関。

別名、命知らず団体『ノーライフキングス』。たった一人で、生身ながら神域クラスに通用する人間達、超人の集団。

いわば、人外テロリスト殲滅組織の国際機関ヴァージョンである。

何でも資金は各国の政府、非営利団体からの寄付で賄われている

が、まったくもって全然足りてない、というのはどうでもいい話だ。私的には何と無く、足りない気持ちが分かる気がする。

「今回、当局から一つの指令が来た。それは日本国冥府からの依頼で、ある組織と和木市内での魔女での二日間連続での斬殺事件の関係を調査しろというものだった。だが前日、その関係者と交戦し、一度は迎撃した。しかし自らの不手際で負傷し、現在も一部の記憶を失っていると言う渋い状況だ」

「ちょっと、諜報機関がそんなに情報を漏らしてもいいの?!」

「問題ない。これは魔女らの沽券に関わる問題であり、本来は魔女のみで解決すべき問題だ。だが、肝心の魔女は『敵方』との相性が悪いためか、にっちもさっちもイカナイ状況だ。そこで冥府は特捜から俺と、魔女協会が独自にイレギュラーで一人、敵方に対するプロを一人雇った。魔女が解決出来ない問題を肩代わりしているんだ。ここは当事者と解決者として、双方が必要部分の情報交換をすべきところだろ?」

冥府、ということは、日本の裏側。政治と関わるところまで首を突っ込む自体なんだ。

それにしても、なるほど、確かに適宜プロに対応させることは的を射ている。しかし、その気になれば、魔女は【魔術】ではなく、自分の【魔法】による【結界陣地】を作成してその中に入っていれば、神域の存在でも、よほどの事が無ければ入れない。空間自体から作り出す陣地には、さすがに侵入さえ出来ないのだ。

ちなみに私は習得する魔法のほぼ全てを召喚に手を回しているため、結界作成などは覚える気になるまでまるで使えない。だって、結界関係って設備投資するからお金掛かるし。

「ふーん、歴史と血脈を備えた魔女が対応できないなんて、敵方はどんな奴なのかな?」

「関係のあるその組織については幾らか調べがついている」

少年は何を血迷ったのか、あほ師匠が入れたコーヒーに口を付け

て、予想通り「甘っ」と横を向いて凄い勢いで吐き出すと、口を拭い、気を取り直してこちらを見据えた。

「秘密結社『アイオーン』、『魔法使いを狩る』魔術師達の集まりだ……」

魔術師。

魔法に焦がれ、霊気装甲のない、魔法使いになれない出来損ないと呼ばれる者たち、魔法使いを最も憎む者達……

しかし、

「霊気装甲もない彼らに魔女を倒すなんて出来るはずが、」

「いや、そんな事はない」

今まで和やかにコーヒーに似た砂糖を飲んでいた、復活した生羅師父が突然言の葉を挟んだ。

「魔術師は魔法使いと違い、自らの内側に存在する内界の霊気装甲でなく、外界の、自然界に存在する、森の木や石に含まれた霊気装甲を理論と技術で使う。つまり、事実上、自らのバッテリー切れ、魔力切れを懸念しなければいけない魔法使いと違い、彼らには魔力と言うバッテリーの上限はない。むろん、我々も魔術を使おうとすれば使えるが、自身の結界作用の補助程度にしか使わない私達に比べ、それに完全に特化した魔術師には適う筈がない」

ついでに言えば、先ほどからも何度か出ている言葉、【霊気装甲】は特別な、最近、あの幻想においての最高学府、神秘院が作り出した学術造語である。

【霊気装甲】というのはあくまで今の物理で説明できない力を互

換して説明する際に使われる霊気工学専門の学術用語であって、魔法とはたいして関係はない。

霊気装甲を説明する際には二つの用語である【血管内の伝導率】【装甲濃度】に収束される。密度と言うのは、いわゆる潜在的なパワー。伝導率を運動能力とするならばこっちは基礎体力。これが高いほど、物理的な距離においても威力に置いても、高い展開が出来るのだ。

伝導率とは運動能力、技術の限界値である。つまり、霊気装甲保持者の平均伝導率十四％と、霊気装甲を代重ねで増やしている平均的な魔女の六十％では魔法の憶えと発揮性能が四倍近く違うのだ。人間の最高値は魔女の統括者、待崎会長の　九十九，九九九九九九九九九％、イレブンナインと呼ばれる最高純度らしい。つまり、運動能力の優れた家系は大体優れた子が生まれるのだ……と言う理論で、まともに聞くと私でも眠くなってくる。

ちなみに私は九十六，二％、上位五％に入る勢いだったりする、と言うのは蛇足。

妖怪達の霊気装甲を使った威力から身を守るのには自分の霊気装甲が一番効果的と言うことだ。それゆえに『装甲』と呼ばれるのだそうだ。

血管内の血潮の流動、いや魔力の『伝導』による焼け付くような独特の感覚。

元々、妖魔跋扈に対抗するために生まれた能力だったモノは同じく、常軌とは異を為すモノ。故に人がその神秘に触れるたびに、血管の内側から焼き削られる。

肉体を動かす『生命力』。魂の基礎となる『精神力』。そのどちらでもない、生きていくのには『必要のない』のに存在するもの、というのが定義で、霊気装甲は常時血管内を血液と共に流れているということは、エジプトのアノ天才神秘学者の手で判明している。

（ただし科学的な定量観測方法では確認も検出も出来ないものをどう検出したのかは不明）そして、霊気装甲のある人間には妖怪や魔

属の力に抵抗力がある。それ故に『装甲』と呼ばれるのだ。（以下、睡魔侵蝕前に基礎事項反芻終了）

「何だか、魔女は魔法を使っても魔術の内容如何によっては魔術師には適わないような言い方だね」

選民思想では無いが、明らかに世界の外側の力を使う魔女の方が若干贔屓目にでも強大に見える。

「だが、事実そうだ。君の母上の友人、大師も六百年の存命の中で十二度、魔術師に魔術戦で殺されかけたそうだ」

「えっ！　だ、大師が！？」

私は驚きを隠せない。

一代限りの魔法使いでありながら、遺産と歴史の蓄積された魔女と等しくあり、大禁呪『ワールド　イズ　マイン』を習得していたあの大に大のつく大天才。おちゃらけ者、加えて捻くれ者で、終生道楽者だったあの、御気楽な人がとてもじゃないが、死にかけるようには到底見えない。

「事実、大師は、それらの襲撃以降は地道に魔術の研究もしていた。大師、彼女が一般の魔女より優れていたのは魔法だけではなく、魔術も等しく研究していたと言うわけでもある」

「その通りだ。お分かりかな？　未熟者」

先程の私の魔術師を舐め切っていた発言を見下すように、私に向かって「やれやれだぜ」と国定は目を細める。その眼の形を敢えて表現するなら『ー』な感じだ。

ムッとしつつも、話を拗れさせるのも何なので我慢する。

「ははっ、いつもは怒るのに今日は大人しいなぁ？　どうしたんだ、私のかわいいマイ・シヘボラッ！！」

制服の形なんか気にせずに放った、飛び膝蹴りが師父の鼻っ柱に入ったが気にしない。

私は椅子に座りなおすとケーキの上に乗った砂糖菓子のごとく、

自然にとろけるような笑顔を作った。さり気なく膝についた血を、机の下のテーブルクロスで拭う。

「続けてください」

何か檻の中の猛獣の野性でも見たかのような眼で見ているが私は笑顔を続ける。

「……あぁ、アイオーンについてはどの程度知っているのかがまず訊きたい」

「全然、魔術師なんかに興味ないもの」

フム、と軽く思案すると「最初から話そう」と国定は続けた。

「アイオーンは調べでは七人の、魔術師でも最高である匠級（アーティストクラス）で構成される秘密結社で、それぞれの【魔術】を『刑罰』に準えたモノを使う者達だ。把握しているメンバーの限りで、

轢刑（レキケイ）と呼ばれ、機像兵（ゴーレム）を使う摩壁（マカベ）　六騎（ムツキ）、

斬刑（ザンケイ）と呼ばれる、秘密結社きっての白兵戦特化型魔術戦士、オギ。

流刑（リュウケイ）と言う透過魔術を使うと言われるホズミ、

重刑（ジュウケイ）と呼ばれる不可視の術を使う少女、シャラン。

刑罰不明、片目、片腕の女性、セツカ。

磔刑（タッケイ）と言う術を使い、鞍路（クラミチ）　慈恵（ジケイ）と名前まで判明しながら、まったく素性の知れない男。

そして、それらをまとめる『魔女狩りに成功したと言われる元魔術師』の【魔法使い】、特捜室が【脱皮者（モルター）】と仮称した計七人で構成される。

むろん魔術師の目的は魔法使いや魔女と同じだ。その身に【大禁呪】を刻みつけ、自身を神秘化することだ。しかし、先天的に神秘以前の問題で霊気装甲のない彼らは、神秘でなく技術で大禁呪を魂に刻もうとしている。そのもっとも簡単な方法が……」

「魔女の心臓をもぎ取り、自らに移植することだろ？
フッ、人体改造なぞ馬鹿げた手腕だ」

両鼻にテッシュを詰めた師父は甘ったるいコーヒーっぽい飲み物を飲みながら、さも『魔術師の愚考』が面白いように笑う。……なんだか、気味が悪い。

「その通りだ。中世からの魔女狩りと同じ様に、今回の魔女狩りは彼女等の心臓目的だ。現に今までの五人の死体、全てに心臓が『無かった』」

「五人……！？　四人じゃなくて！？」

「昨日、俺の目の前で一人、奪われた。……俺の力が足りないばかりに、……残念だ」

国定は顔を伏し、暫く沈黙を続かせる。

そして、再び顔を戻した時には鋭い野獣の目つきが戻っていた。

「彼らは移植を求める伝導率の純度、九十五％以上を求めて、協会でも秘匿されている一定の伝導率以上の水準を見つけるまで狩り続けるはずだ。そして、結界魔法を習得していない魔女で九十五％以上に該当するのはただ一人」

え、ちょっと待て。私の思考にある種の予感めいた言葉が見つかる。

「おそらく、次の狙いは九貫の最後の娘、つまり、偶然ながら……君だ」

つまり……、私の事だ。
「とにかく、魔術師だけなら俺単体でもどうにかなるはずだったが……、今回の事件が複雑で解決し辛いのは他にも理由がある。それは……」
「それは？」
途端に国定と師父は立ち上がった。
遅れて、私も外から湧き出るその禍禍しい気配に気付く。
「奴だ……」
彼の見開かれ、戦闘状態に整った野獣の瞳は窓から外の一点を貫いている。
「奴の存在のお陰でもある」
師父も、その迎撃準備のために淡々と詠唱と魔術結界の強化を始めている。
闇夜にヒッソリと立つその存在。それは、つい先ほど私が体感したモノと同じだった。
「嘘、あんな強固な存在の幽体なんて見た事ない」
闇夜に立つ、鎖帷子のさらに上に重厚な板金の鎧を着込んだ、背景に透けている西洋甲冑の騎士。それは紛れもなく幽霊だった。その朧な闇の中で強固でありながら、現実への存在観を歪ませるように、時折自身を陽炎の如く揺らがせる存在。それは単体でありながら、先ほど駅で見た幽霊達よりも身を凍らせた。兜のない顔、その瞳は鬼火の如く蒼く燃えている。それは幽霊ではなく……、
「西欧で著名な【亡霊騎士】　元テンプル騎士団　第三騎士長　ガーブリエル・オギュースト。昨日は電車から突き落としてやったのに生きて、いや死に切れてなかったようだな……」
と国定は言うと、椅子から飛び降りて、飄々（ひょうひょう）と外へと向かう。
「ちょっ、何処にいくの！」

思わず、手を掴む。
「何をする？」
ブスッとした顔で文句を垂れるガキンチョ。
「【亡霊騎士】は生を失った亡者、加えて、半ば自然と同化した呪いだ。故に自然界の霊気装甲に属する結界魔術は大した効果がない。紙の檻を引き千切るように押し入られるぞ」
と言って、再び外に出ようとする。それでも私は手を離さない。
「何してんのよ！　馬鹿ッ！　アンタ、よく分からないけど、さっきまで怪我していたし、今はよくわからないけど子供の状態でしょ？　死ぬつもりなの？！」
「未熟者、このままではどの道侵入される。そのためにも事前に出て迎撃した方が得策だ。魔法使いなら防御陣に入って、大人しく攻撃用の呪でも編んでろ。そして、危なくなったら逃げろ。矢面に立つ馬鹿な魔女（砲台）は居ないだろ？」
それでも、私は手を放すつもりはない。
「……時間が無い。手を放せ」
「国定。貴方、今の状況が分かっているの？　原因は分からない、けど今そんな小さな体でどうしようって言うの？　いくらボランティアだろうが超人だろうがね、命をむやみやたらと賭ける必要は無いんだからね！」
手首を掴んだ私の手首を掴む、反対の手。
「俺には……、任務とは別に、もう一つ託された使命がある」
淡々とした口調で、終わりながらも強い意志の瞳で、それは告げられた。

「君を命に代えても守る事だ」

……ヘッ？

驚きで弱まった瞬間に手を回転させて外す国定。

私は、呆気に取られたまま、その言葉の意味が分からずにただ「え？」とか「ほぇ？」とか、変な声を出すくらいしかしていない。

「安心しろ……、俺は強い。だが、少しでも支援をしてくれると助かる」

子供にも関わらず、圧倒的、かつ剛強な背中を見せ、中世の亡霊に少年は向かって行く。

騎士の銀白の鎧が初夏の、やや欠けた月の光を返す。

涼しげかつ、尊大、しかし、威厳に満ちた顔は目前の少年、の姿をした国定に向けられた。

後方に撫で付けられた亡霊の銀髪は肩口で切り揃えられ、耳の前側の右片方が三つ編みとなって垂れ下がっている。古来の騎士風、ケルトの風を魅せる漢。撫で付けられている点では短髪の国定にも似ている。だが、不帳面で無骨に見える国定に対して、亡霊騎士には、鎧に施された薔薇の意匠も相余って貴族らしい、気品と言うモノが見え隠れしている。対比してみれば二人は見れば見るほど似ているようで違う。

二回りも一回りも違う身長差に体重差。いや、体重差に限っては

幽霊であっても鎧を含めて三倍以上の差があるだろう。
体格は鎧越しからも分かるような鍛えられた体に、相対するように少年の皮の下に眠る野獣の天然の筋肉。
鋭い目付き。だがその内に描かれるのが、ジクジクと鬼火の様に燃えるような騎士の瞳に対して、ただ何よりも異質な、終わりとしか表現できない国定の、虹彩が縦に裂けた瞳。
素手の国定に対して、騎士の両手には二振りの剣、いや鉄塊があった。

騎士は下から上まで、上から下まで腕を組んだ少年を値踏みするように眺める。
「Ｑｕｉ　……　ｔｕ？　いや、失礼。よく似た者と間違えたようだ。無関係な子供は去るがいい。この夜の事は忘れることだ。騎士は女子供に手を掛けるつもりはない。……魔女以外はな」
深みと余裕のあるバスの声色がフランス語から日本語へと流暢な切り替えをした。その直後の冷徹な呟きと結界越しの視線に、私の心臓が鷲掴みにされた錯覚に陥る。
「気にするな。その本人だと嗅ぎ取ったのだから、貴様は俺を【魔人】と思ったのだろう？」
目前の少年の、流れるような切り替えしに男は双眸を剥く。
「馬鹿な……ありえない！　……少年、いや貴公が？」
「その通り、俺が昨日の魔人、国定　錬仁だ。信じないのか？　古城に眠っていた呪い(貴公)が魔術師と共に魔女、しかも子供(ガキ)の心臓を追い回すとは、心象穏やかな自体ではないな」
今、『こども』って聞こえたはずなのに、違う意味のように聞こえたのは空耳だろうか？
ワイルドな少年と静謐な騎士は続けている。
「ふむ、憶測など下らぬ。我が願い故に瑣末。たった一人。小娘の心臓を抜き取れればいい。それだけで積年永劫の悔恨も晴れると言うもの。そこを退くがいい、少年」

「フン、下らない願いだ。大の大人が六人も集まって、小娘の身体を奪い合うなんて……」
国定が背中越しにも関わらずニヤリと、獣が牙を見せるように笑ったような気がした。
「――変態だな」
「……騎士への無礼は大きな代償だぞ。少年」
「その代価は貴様の命で払おう。この見た目で侮ると、……後悔するぞッ！！」

国定は無手のまま、騎士に向かって一直線に疾走。
立ち止まったまま、騎士は大きな、大きな剣の片方を振り上げる。
月を割るが如く、そこに竜を一撃で殺すような巨大さが厳然と存る。
国定は進路を変えない。ただ、真っ直ぐと己の道であるかと言うように迷い無く進む。
そして、満天より落つる彗星のごとく、それは飛来する。
国定の体が真っ二つに割れた。

そう、思った時には、既に国定自身によって防がれていた。

斜めに、極太極厚の剣を、少年の身体には些かに似合わない長大な『アカイ』槍が防いでいた。
何故だか、分からない。その瞬時の出来事にも関わらず、私は槍の刃先が無い事と妙に色が曖昧な事が気になった。

反転。
槍の刃よりも内側に騎士が居ながら、国定は爆発的な威力を柄で現し、敵を打ち払った。
急激に槍の柄で弾かれた騎士は驚天動地と言った面持ちのまま、空中から、足場も無いのに、しかも鎧にも関わらず苦も無く一転して着地する。

「ヌッ？」

亡霊が自らに眼を向ける。鎧の脇腹の部分は凹んでいた。霊の持ち物を壊すという事はあの槍も交霊武装なのだろうか？

十二分に離れた間合いから轟風と共に旋転する大槍。仮に、国定が元の身長だとしても有り余るほどの槍。それでありながら、少年、国定の躯は槍を千変万化と苦も無く迸らせる。竜巻のような空裂の連なり。

「ぬっ……！！　神速の槍捌きッ！！　あの魔人と同質！！」

ピタリと、竜巻にも等しい剛戻（ごうれい）のような演舞から、騎士を脳天から割るように垂直に立てられたアカイ槍。

「やっと信じたか。俺もどうしてこんな風に縮んだのかは分からない。が、十分貴様とは闘（やり）えるのは保証しよう」

「なるほど、手心は加えずとも良いと言うことか……」

その瞬間、辺りの空気が凍った。

息が吐けない。詰まったかのように呼吸が苦しい。そうだ、亡霊騎士の根本は自然に固着した呪い。呪いに蝕まれた自然の霊気装甲は彼の支配下にあると言っても過言ではない。彼の居る間は、彼に許されたもの以外は自然の霊気装甲を、結界を編む事すら出来ない。

そして外界の、自然界からの霊気装甲の侵蝕で、常人なら本当に呼吸が途絶えていただろう。僅かに震えるように血流の中を流れる自らの魔力など、私が呼吸をするために紡げる貧弱な装甲に過ぎない。

自然を操る専門家の【魔術師】と自然に溶け込んだ呪いの【亡霊騎士】。まさか最悪のタッグとは気付きもしなかった。

「く、くに、さだ……」

絞り出す声。その声が届くかは分からない。頼りなく小さな、逞しい背中は私を守ると言った。だったら……

国定の槍が奔る。騎士の剣が振り上がる。

十六夜月（いざよいつき）、満月より僅かに過ぎ、欠けた月が薄墨色のおぼろ雲に紛れる。

薄い雲の層から漏れる朧の光、その薄暗がりの中を火花が咲く。華散る間も無く打ち付けられる刃金達。

奮い、振るわれるごとに唸る疾風。小さな、魔女の店の窓を揺らすほどの旋風。人外の戦場である。

一撃はその両脇のビルを破壊するほど鮮烈で速いうえに早い。瞬く間に何度刃金が繰り出すのかなど見当もつかない。巻き込まれれば千殺される災害級の戦闘。

頭、顔、転じて脚、翻って手首、突き込んで胸。しかし、防ぐ。詰め寄る間合いを長さで制する槍。

斜めから切り返して、三連続の突き。小躯を利用して下から潜って突く。防がれる直前に刃とは反対の、石突きからの足薙ぎ。騎士が飛び上がって両刀を落とす。直前で国定は後退。

国定は確実に防いでいる。だが、完全に攻めてはいない。十分な余裕がないのだろうか？

「違う」

国定は私を守っている。守っているから無茶が出来ない。万が一、一歩踏み込んで、自らが傷つき、守りを突破されたらと、そう考えているに違いない。

だったら……

達人の所業としか言えない武闘。だが、騎士はそれをも知っている。小躯。その身が、身体に反していくら怪力とて、いつまでも続くモノではない。

亡霊騎士の両腕が前触れ無く加速した。眼にも、いや、光さえも届かない早さ。

「1（アン）、2（ドゥ）、3（トロワ）、4（キャトル）ッ！！」

双方からの斬撃。いや爆撃が二に掛ける事の四つ。そして、その一つの爆撃は通常の剣撃の十倍の威力。

「うぅッ」

国定の膝が、力が抜けて折れるように曲がる。

「Ｆｉｎｉｒ（終わりだ）ッッ！！」

騎士の剛剣が天から同時に二つ振り落される。国定は槍で受けた。かつて無い暴風。そしてスニーカーが悲鳴をあげながらゴムが擦れて削れ、鼻につく臭いを発しながら十メートル以上を衝撃で後退する。

途端、国定が苦しげに膝をついた。手が震えている。あまりの衝撃に手がイカれたようだ。そんな！　手の甲からは皮膚を破って、折れた骨が見えてる！

騎士がユラリと鬼火の気配を幻炎としながら国定に近づく。

この闘いを止めることは普通の人間では不可能だ。

だったら……

だったら、守られたままでいいのか？　私は一般人ではない。
私は魔女だ！　何があろうと我が道を往き、是、立ち塞がるモノ打ち砕く意志！！
私は、私はそんな、誰かに守られる弱い存在ではないッ！！
国定、私は守られる人間じゃない。戦う人間なの！

その気迫と咆哮に答えるように、血流がいつもどおりに流れる。
私の中の、一つ一つの血管を不可視の力が奔流となり、侵蝕し掛けていた呪いを打ち砕いていく。
霊気装甲起動。全血流正常。魔女心臓駆動。内界へと侵蝕された呪いを完全浄化、そして正常化。
心臓（ハート）よ猛れ、もっと鼓動（ビート）も流れ、もっと力の灼熱（ヒート）を！

魔女の店より出でる。八重歯で親指を噛み切り、その指先で流れるように血で古き契約、五芒星印（グレートサイン）の魔方陣を描く。
騎士の、邪眼にも等しい眼が射抜く。耐える。装甲が軋む。でも、私の魔女の誇りが後退をさせない。
「Ｉ　ｓｕｍｍｏｎ　ｏｎｅ　ｆｒｏｍ　ａｂｙｓｓ　ｕｎｉｖｅｒｓｅ　ｉｎ　Ｃｔｈｕｌｈｕ'　ｎａｍｅ……（我はクトゥルフの名に於いて深界より素を呼ぶ）……」

「未熟者！　早く戻れッ！！」
国定は軋んだ小さな身に体重を預け、槍を杖に立ち上がる。
煩い！　今の私を止めることは誰も出来ないんだから！

「……Ｄｅｒｉｖｅ　ｕｎｄｉｎｅ，　Ｓｌｉｍｅ（出でよ、水霊素、スライム）！」
エーテルの瞬着の爆発と共に、一トンはあるような巨大な緑色の塊が魔方陣からはみだし、溢れるように現れる。
「Ｇｏ（行け）！」

私の指が指し示すと同時に巨大な質量が予想もつかないほどのスピードで動き、広がりながら、津波のように瞬時に騎士を押し包んだ。

「ンヌッ！！」

液体の中でもがく亡霊騎士。流石に既に呼吸はしてないせいか窒息はしないようだ。

だが、いくら巨大な鉄塊とて、液体に近いを生物を切り刻む事は不可能なはずだ。

「国定ッ！」

駆け寄る私。

――この時、何で駆け寄ってしまったのだろうと、後から例え様もないほど後悔した――

「馬鹿野郎ッ！」

「えっ」

駆け寄る私よりも早く、私を抱きかかえる国定。乙女の恥じらいなど感じる間もなく、その身体を徹して人外の体当たりの衝撃と衝撃音。

吹き飛ばされる。ビルの壁が迫ってくる。捻られる視界。再び、衝撃。視界が暗転と同時に朱に染まった。

痛みがない。血が出過ぎて感覚が狂っているのだろうか？

その狂った色彩の中で騎士がコチラに向かってくる。なんて事だ。液体に近い、スライムの細胞を剣の横っ腹で全部『叩き潰した』というのか？　イカレている。超人どころの騒ぎではない。常識が、非常識に生きる者の常識すら通用しない。

身体は血の量に反して思った以上に動く。逃げないと、逃げないと、

コロサレル。

朱の混じった視界を払う。これほどの出血でありながら軽傷だったのだろうか？　それでも、逃げられるのか分からない。

そのまま立ち上がろうと同時に抱き上げようとした、やけに動かない国定の体が、異常なくらい、軽かった。

「ニゲロ」

国定が口から　ア　カ　イ　モ　ノ　を、泡と共に零しながら囁く。

でも、ごめん。駄目なんだ。脚に力が入らない。

「逃げロ」

国定も連れないと、でも、でも……

私の身体を濡らしていたのは、全て、国定の暖かい血だった。

彼は亡霊騎士のデタラメさが分かっていた。だから、瞬時に私を庇えた。だから、私は無事だった。

でも、彼は自分自身の事なんか考えてはいなかった。

先ほどより酷く挫傷した頭部、ダラリと腹から垂れた腸、肝臓、膵臓、胃、遥か後方に、腸の一部と腰と脚。

騎士の刃には拭いきれなかった血、ビルの壁には私のモノでない

血。

上半身だけになった国定は、やたら軽かった。

「――――――――!!」

声にならない、その声はただ、自分の愚かさを呪った喉の、音の集まりだった。

気付け、死ぬ、助け、無理、自業自得、犠牲、死線、怒号、悲鳴、鉄塊……

飛躍した思考が生み出す脆い幻像。

月光を背景に、黒い人影。

大きく、鈍い銀光が大きく振りかぶらされた瞬間、私はそこで意識を失った。

03. 黒縄（こくじょう）（後書き）

They are darkness, and they have nothing.
They are 7 of them, and they have Sin.
They are Magician, and they have Art.

They have curse, and they are sufferer.

０４．幕間　鉄囲線　（てっちせん）（前書き）

彼らは闇、そして、彼らは空虚を懐く。
彼らは七、そして、彼らは罪悪を抱く。
彼らは魔、そして、彼らは魔術を擁く。

彼らは呪いを携え、彼らは受難者である。

０４．幕間　鉄囲線　（てっちせん）

底なしの暗闇の内、一筋の青い光の中に、若い女の前には奇怪な人形達が居た。

一目見れば、理系の女性と推察される鋭利な眼に冷徹な瞳。それらを覆うような薄い細いフレームの眼鏡。金髪短めのボブカットだけが彼女の唯一のおしゃれであると思われる。長年の室内作業によって保たれた白さは病的な部分を感じさせる。おそらく肌のほとんどは青く透ける血管が見えるであろう。それ以外は地味な事この上ない灰色のトレーナーと紺のジーンズ、そして白衣が微かなコントラストを醸し出していた。

彼女はその理知的な容貌にも関わらず、童女の玩具のように数多く並ぶ人形の内の一つに丹念に、櫛を解いていた。優しく、その柔らかな、人の髪とも見紛う人工毛を解く。だが、彼女の瞳を見れば、それが『技術者が自分の完成品を愛でる』歪な輝きが見て取れただろう。

それは年も幾つもいかぬ少女が愛でるような人形ではなく、殆ど人と見紛うような少女、芸術品のようなものだった。

わずかに赤みを帯びた頬、それを軽く撫でれば薄っすらと眠りから覚めて起きるように感じるほど、それは人と見紛うほどの出来だった。

そして、そこには、想像力豊かな者なら創造者の齎（もたら）した神性を汚すほど、そこには人の冒してはならない領域、完璧さに裏付けられた危険性が見え隠れしていた。

その常闇の中、唯一の青い光源であるワークステーションから発信音がなる。

無表情のまま、櫛を掛けていた顔がピクリと、その作業を邪魔された事を鬱陶しいと、感じるように眉が微かにひそめられる。

オフィス用の古い椅子を軋ませながら座ると、彼女の見た目通りに軽快にキーボードに指を走らせて、通信用の汎用アプリケーションを起動させた。

顔前に位置するＴＦＴ画面の上方につけられたカメラの方向を一瞥すると同時に、左右に並べられた七つの画面もやや遅れて点灯する。

それぞれの画面から動きは相当速い回線なのか、滑らかに動くことが分かる。だが、肝心のビデオ画像は一定のプロテクトを掛けて、それを解読して読み込んでいるようで、昔の８ｍｍフィルムのようにかなり荒い。

七つの画面には七つの異なる人物が映っていた。

一つ目の一番右の画面には痩せすぎたゴーグル状のサングラスを掛け、その下に完全に覆面を装備した四十代ほどの男。それが首を一定のリズムで気味悪く動かしている。荒い画像と相余って気持ち悪さを倍加させているのに本人は気付いてはいないだろう。

二つ目のその隣りの画面には目を閉じたまま、口を開き、舌の上に乗せたドロップ飴を荒い鼻息とともに玩ぶ三十代の、頬の張る程度に太った男がちょうど口の中に涎を垂らしながら飴を口にした。

三つ目、その又隣りの画面には、十代かどうかすら疑わしい、先ほど女性の人形にも似た可憐な少女だ。少女は黒い布で目隠しをされた上、瞳の部分に釘の刺さった人形を大事そうに抱えている。見惚れるほど紅い瞳と短い金髪と共に、無邪気な、人によっては残虐にすら見える、笑みを浮かべている。その美しさは例え少女趣味の無い男性でも、理性を破壊して堕落させる曲線と色彩の完璧な構成があった。意志があるだけに、人形よりも性質が悪いかもしれない。

四つ目、一番左の画面には厳しい顔つきでカメラ越しから人を睨むよう、額に防具である鉢金（はちがね）を眼帯のように斜めにつけたの女性が画面の人物を窺っている。瞳はドロドロに解けた金属のような、濁った銀色。眉間の、老人のように刻まれた皺は理性から遠く離れた、

怒気しか表現しえない。
　五つ目、その隣りには軽薄さが顔から滲み出ている、口元に人を小馬鹿にしたような笑いを張り付かせている２０代後半くらいの男。営業マンのようなスーツ姿の若い男が椅子の肘に自らの肘を乗せて指を組み、両方の親指を廻している。
　六つ目、そのまた隣りにはカメラに映るか映らないか位の薄さで映る金髪の騎士、亡霊騎士ガーブリエルが沈黙を保つように瞼を閉じていた。
　そして、画面の真ん中に位置する最後のウィンドウ。そこにはただ、『オンライン』と書かれた緑の文字だけが表示され、背後はテレビの砂嵐のように乱されていた。

［こんばんわ、魔術結社アイオーンの皆様。如何お過ごしでしょうか？　定例の魔術師集会にお集まり頂きありがとうございます］

　慇懃無礼な、形式的な挨拶。
　一言聞いただけで合成音声と分かる、甲高く機械的な音が『オンライン』の画面に付属するスピーカーから漏れた。

［どう言うことだ］
　開口一番、鉢金の女性が、ギラギラと照り付ける異様な銀色の瞳から、目に見える怒声を抑えたような声を挙げた。
［Ｅｘｃｕｓｅｚ－ｍｏｉ（すまない）、マダム　セツカ］
　それに答えるように亡霊騎士、ガーブリエルは沈痛な面持ちでセツカと呼んだ女性に謝罪を口にした。
［アァーー、せっかく、移植にピッタリの魔女さんを見つけたのに、ガッカリだよねー？　ドロシー？］
　その答えに紅い瞳の少女が、くすくすと笑いながら手元の人形に話し掛けている。

移植に十分な純度の心臓。検証と研究の結果、魔術師の間で知られるそれは９５％以上の霊気装甲の純度である。上位者の５％だけが持つ未知の、可能性のつまった領域。それを未だ使い切れていない上、結界関係の魔法で引篭っていないのは魔女でもただ一人。くぬきの樹の魔女にして、九貫の才女。九貫　在姫。

［で、彼女をどうして『逃してしまった』のか。ガーブリエル君の謝罪が聞きたいなぁ？］

軽薄そうな男がククク、と騎士の取り逃しを嘲笑うかのような、癪に障る声を挙げる。顔を伏せながらも片目を開いて、騎士の画面を見ている笑みは何ともいじらしい。

［そ、そそ、そうだね。ぼ、ぼぼぼぼ、僕も、き聞きたいなぁぁぁ］

指先に付いた甘味を貪るように、首のやたら太い男は、激しい舌使いで己の指をズビズバと無茶苦茶な音を立てながら舐めあげる。

［黙れ、デブ。貴様は鬱陶しい］

言葉の端から軽蔑を読み取れる声を痩せすぎた覆面の男が掛ける。その声は何処の舞台俳優のような独特の渋い声色だが、己の首を、太った男の舌と同じくらい激しく振りながら答えている。紅い瞳の少女は「また発作か」と笑顔のまま溜息を吐きつつも、人形の首を締めたりしながら遊んでいる。いや、鬱憤を晴らしているのか？

若干騒ぎ掛け、脱線し掛けた空気を、鉢巻の女性が［黙れ］の一言で沈黙させる。

［いいか、ワタシが聞きたいのは貴様等の汚泥に塗れて地べたを這いずるような戯言ではなく、『欧州最大の呪い』と呼ばれる男、たった一人の守護者に負けた騎士の釈明だ。それまで黙れ、私に闇討ちされて腸（はらわた）をブチ撒けたくなければな］

呪いすら引き千切って殺すほど、憎悪の篭った濁った視線を向け、牙のような八重歯をギリリと鳴らす。女性の空間の軋むような迫力に気圧されて一同は静まり返る。いや、一人だけ、軽薄そうなスー

ツの男は「おぉ、怖い怖い」と呟いていたが。
「Ｎｏｎ（いや）。マダム　セツカ。これはアナタ方、魔術師側からの情報提供不足と不確定的な要素による失敗であり、私の失態でないことを言明し、理解していただきたい」
ガーブリエルはチラリと横にいるスーツ姿の男を制するように見る。
それに合わせて、「本当はどうなのやら」と言いたげに口を歪ませるスーツの男。
「騎士の言い訳とは見苦しいにもほどがあるねぇ。【死神】だろうが、【闇殺舎（あんさつしゃ）】の元・無形だろうが。ボランティアじみた特捜室の一人や二人ごとき、撃退できなくて何のための亡霊騎士かなぁ？」
スーツの男の立て続けの苛めに対して、騎士の、瞼を閉じての僅かな沈黙。だが、それは名誉を汚された、既に有ってないような過去の汚れた栄光に対する怒りを鎮めるものではなかった。それは体内を、呪いに蝕まれた体の中すら這いずるささやかな畏怖にも似た感情だろう。しかも、それを楽しむ、むしろ待ちかねたと言うように楽しむ色を口元が弧を描いて見せていた。
その喜悦に嫌が応にも魔術師たちの関心は高まる。
「……確かに、先日の決闘で『負傷』し、まともに動く事の出来ないのは私の失態だろうな。だが、一つ聞いて欲しい。これは重要な話である。
特捜室の派遣者は【地獄

使い】だ」

やや遅れるように、図るように、ガーブリエルは、彼らにとって最悪の言葉を吐いた。

今まで、僅かに弛緩していた雰囲気が張り詰めた弓のごとく、引き絞られた。それは先ほどの女性の迫力によるような沈黙ではなく、場合によっては絶望とも言える、ただ一人の規格外戦力に恐怖したものだった。

「ネェ、……まずいんじゃないの？　特捜室が大陸弾道弾級の化け物なんか放ってきたら、うちらも最終戦争するぐらいの武装じゃないと無理じゃない？　『アレ』のが放たれて、人外に侵略された街が地表からまるごと消えたりするのが当たり前なんでしょ？」

今まで、笑顔を振り撒いていた少女が美麗な眉を潜ませて、不服そうに、あくまで不服そうに言った。

「ぼぼぼぼぼぼぼぼ僕、ここここ殺されたくないよぉ！！」

太った男が明らかに見っとも無いくらい、ちょっとそれは大人としてどうなのか？と思うくらい、動揺しながら新しい色とりどりのドロップを連続して口に入れる。

「死を賭すしかないか……　なるほど、楽しくなってきたな」

スーツ姿の男が目を細めて、己の不幸すら楽しむように、騎士を真似るかのように口元に歪んだ孤を描かせる。そして、唇の端を舐めるのは愉悦と歓喜の味見。

何処までも、他人が侮蔑で怒りに満ちる姿から自分の体が陵辱するように殺されていくまで、ネガティブな、様々な不幸を哄笑する価値観をスーツの男は見せる。

「『地獄使い』だろうがなんだろうが、ワタシには関係がない……」

鉢巻で隠した目越しに手を当て、それを、音を立てて歪むほど握り締める。両手を挙げるように掲げたにも関わらず、画面には片腕しか映っていないセツカ。憎悪すら越えて、怒りの矛先は全周囲に

向けたそれはただの憤怒。しかし、視線は唯一つ。抑えきれない怒りを発散させて、怒りを重ね、それを周囲に放射する事で保つ壊れた理性。

［しかし、もしも、と言う事もある］

ゴーグルの男が、首を傾けながら、その暗いガラスを光らせて気味の悪い視線を浴びせる。海千山千の魔術師の策謀と巡らしを暗示するかのような色合いである。

［死んじゃうよぉ、ぼぼぼ僕たち死んじゃうよぉぉぉぉ］

情けないことに太った男は滂沱の涙を零し始める。それでも、相変わらずドロップを口に入れるスピードは止まらない。

［うるさいなぁ、たかだか死ぬくらいでビビるなら魔術師になんかなんないでよねぇ］

少女が己の髪を絡めるように弄くりながら、溜息を吐く。

「……」

先ほどから黙って画面の前に立つ白衣の女性も、その言葉に賛同するように僅かに目を細めている。

［その点は心配ありません。彼は今では何らかの事故で力の殆どを失って、いえ『忘れている』ようです。力の発現は一時的なモノで不安定に他有りません。今なら、魔女を仕留めるには好機ですよ、みなさん］

今まで沈黙を保っていたオンラインの人物が僅かな、言の葉と言の葉の隙間を見極めるように言った。

［順番は構いませんね。心臓さえ、生きたまま取り出せればある程度は分けることができますからね。問題は一番初めに、『誰が』

大きな心臓の欠片を手に入れるかです。Ｈｏｗ（如何に）なんて意味はありません。Ｗｈｏ（誰）なのですよ？」

場は静まり返り、誰が、もっとも大きな肉片（しんぞう）を手に入れるか、それだけを考える異常な空気に陥る。

「だから決める方法は簡単ですよ。一番、最初の人物が最も大きな『肉塊』を手に入れられる。シンプルな事この上ないではないですか？　無論、二人同時に襲撃をして成功すれば、その二人にお鉢は廻りますがね。そうすれば、結社の契約の通り、ジャンケンでも何でもして、最初に手をつけた人物が半分の心臓を手に入れる。それが魔法使いの血の流れていない我々が持つ、血の契約であり、同盟なのです」

オンラインの人物の高らかな、歌唱の如き演説の声色が、嫌が応にも妄執たる『魔法』への渇望を引き出す。

無論、例えコンビで合っても、手に入れれば、始まるのは契約の執行ではなく、殺し合い。

そして同時に、それを過去に手に入れた血の獲得者、『脱皮者』の言葉は面白いほど甘く蕩けて、理性を、魔術師達の脳を麻痺させる。

「現在、負傷のため、騎士の加護はありませんが、それでも単独、もしくはチームで魔女に攻め入るのであれば、私には止める理由がありません。……それでは。私には自分の【魔法】の研究がありますので、お先に失礼します」

中央のオンラインの表示が赤い表示のオフラインに切り替わり、それに合わせて次々と他の画面も同じ表示に変わった。

全ての画面が暗転し、暗闇の中で白衣の彼女は白いクチビルを歪める。

「……大きな心臓は私の物。摩壁　六騎が貰うから」

そして、彼女はクスリと小さく笑うと、その音は最も濃い色の中に消えた……

04. 幕間　鉄囲線　（てっちせん）（後書き）

I'm dreaming about you.
I'm wondering about you.
I'm falling into you.

Who are you?

Are you still moaning, when
the shining morning would be co
me?

05．衆合（しゅうごう）（1／2）（前書き）

あなたを夢を見てる。
あなたを想っている。
あなたに堕ちている。

あなたは誰？

輝く朝が来るまで、まだ嘆き続けるのですか？

05．衆合（しゅうごう）（1／2）

七月二十一日

――昔の夢を見た

――

遠方から聞こえる蝉の大合唱。命燃ゆる、生死の狭間の合唱。頂点を迎え、それはより一層激しいものとなっていた。

何処までも続くような深緑の草原、その真ん中に一本の樹が立っていた。あまりにも大きな樹、まるで御伽噺（おとぎばなし）の中のような、どこか記録に在って、だれの記憶に無いはずの光景。そこまで現実離れをしていながら、私には違和感は無かった。

くぬきの樹、と呼ばれていたはずだ。

その樹を境に分けて、対峙するように白い女性と黒い女性、そして、白い女性に隠れるように立つ小さな、子供の頃の私。

麦わら帽子を被ったセミロングの女性。麦わら帽子の下の白いワンピースは、同じ様に女性の白い肌に吸い付くように羽織られている。傍らの私には、優しそうなお母さんに見えた。

その女性に、私は手を握られていた。

樹を境に反対側、目の前には蒼く長い髪をポニーテールにし、黒いタンクトップに、黒い皮のズボン、鰐皮のブーツを履き、何故か鉄パイプを肩に掛けた咥え煙草の女性がいた。

……不良にしか見えなかった。

「もう、行っちゃうんだね？」
突然吹いた夏風。浮き上がりかけた麦わら帽子を押さえながら女性は言う。
「あぁ、もう行く」
咥え煙草の女性は応える。女性の足元には、何処か見覚えのある、魔女の工房作成のための道具が詰まったズタ袋。
天に佇む蒼穹を銀色のプロペラ機が音と競うように駆ける。陽光が翼に照り返され、咥え煙草の女性は煙草を持った手でその反射光を遮る。
逆光になっているためか、それとも記憶が曖昧だからか？　黒い女性の顔はぼやけて、とにかく鮮明ではない。
「死ぬよ、地獄に行ったら？」
白い女性の言葉。プロペラの音で聞き取りきれなかったが、その単語に幼い私は震えた。
それは、奥深く、無限に囚われる牢獄の名。
「その時は、その時。人間、誰でも死ぬ」
「あなたは、父親のエイキュウが、あの『殺神鬼』が、この娘よりも大事なの？」
そっと蒼い空を仰ぎ見て逡巡。でも、彼女の決意は、変わらない。
「……両方大切。片方、家族失いたくない、本当に大切だからこの子置いていく。……ダメか？」
麦わら帽子の女性は長く、ひたすら長く、まるで世界記録でも作るような溜息を吐いた。
「……あーあ、六十年前から喋る時に助詞入れないところから、家族が大好きなところまで全ッ然ッ変わってないし……、もう【時守（ときもり）】にでも遇っていっぺんくらい殺されてきな、ばーかばーか」
頬をリスのように大きく膨らました表情。
不良な女性よりはいくら大人びたように見えた、傍らのワンピー

スの女性。それはどうやら見掛けだけのようで、そのしぐさは不良の女性よりも大きく子供じみていた。

「……あぁ、【夜の帳（とばり）】、手に入れたら」

静かに、大人らしく、不良な女性はプッと口元の煙草を吐いて掌の中に入れると、それを【魔法】を使ったかのようにそのまま消滅させる。

ワンピースの女性が、膝を草原に降ろして、私の目線と合わせる。

「さ、在姫ちゃん。最後に……、今度、また会える時まで、お母さんにバイバイしよ、ね？」

「あなた、男出来て変わった」

「うるさいなぁ、いいでしょー、ダーリン最高なんだからねー」

「……色ボケ？」

「どの口が言うか！！」

私はおそるおそる、怖そうな不良の彼女、私の母に向かって小さく手を振る。

逆光にあったはずの視界がクリアになった。魔女のような白い肌、薄い桜色の唇、そして、その澄んだ目、澄みすぎて、逆に心から済まないと、言葉数少ない母の思いを感じさせる、済まない眼。

それまで何一つ表情に出さなかった顔のパーツのうち、目尻だけが少し下がっていた。

「また、いつか会おう、在姫」

あぁ、これだ。私が、魔女となった決定的な瞬間。

魔性の瞳。

母の瞳。

そして、優しい、女性の瞳。

私は、本当に綺麗で、優しい眼に、狂おしいほどに憧れたのだ。

「……さらばだ、大魔法使いアーキ・オリアクス・ゲヘン・ユキ・バシレイオス。いや、戸上悠紀が……、で、の、……でいいか？」
「どっちの呼び方でも、どっちの日本語の使い方も、とにかくどっちでもいいよー。……では、さようなら。くぬきの魔女　九貫愛媛。貴女の進む道に幸福と安寧、そして更なる幸せのための闘争を……」

　ズタ袋を背負い、そして、私達に背を向ける不良魔女、母が歩く先。
　そこには一人の巨人が居た。

　その巨人の背景は、何故か蒼穹が壊れて割れて、アカイ空が見えている。何処までも続く、何も無い、いや、何かも死んで、何も亡い場所。

「地獄から王の持ち物を持ち出すのは重罪だぞ。古き付き合い『と伝え聞く』故に、直々に門を開けてやると言うのに、俺の物を盗むとは不愉快な女だ」
　野獣にも似た顔で、『終わった瞳』の、何処か見慣れた顔の巨人はそう言った。
「その時は、その時」
　巨人を見上げながら母は続ける。
「人間、誰でも死ぬ。だから、『元は人間の』お前でも死ぬ」
「ふん、魔女如きが。門番にして、王となった【魔人】と闘り合うのか？　不愉快を通し越して愉快だ。この間の、闇殺舎の男と女騎士を思い出すぞ、だいたい魔女は、……っ」

　私の母は、おおよそ隙と言うモノが見つからないはずの、その男の不意をつくように、片手をその巨人の頬に掛ける。むろん背伸び

をしながら。
その表情は我が子を慈しむ、母親そのものだった。
私の記憶では少し冷やりとする、それでも暖かい手。

「悲しい人。未だ……、囚われている」

男の終わった瞳が、微かに揺れた。
人を忘れた、自らを忘れた、忘れられる時を過ごした瞳は、その想いを言葉にして吐く。

「……世迷いごとを……、俺は昔から、地獄の底に、奥底にただ独り、
叶えられなかった夢のため、
永遠に続く復讐を求め、
最後まで失敗した覚悟によって、
自らに科した業を背負い、
過去を捨て、
それらに続くモノを使って、ただ生き延びるのみ、
故に俺は【地獄使い】と呼ばれるのみだ。貴様こそ、下らない世界の秘密に執着したまま、同じ底で死ぬがいい」

何故かは分からない。私には、ただ、男は強がって、歯を食いしばって、勘違いした絶望に、……泣いているように見えた。
何故かは分からない。
だから、それが分かった私はいつか、その男を、途轍も無い勘違いを犯している大馬鹿野郎を、地上まで引きずり出して救わなくてはならないと思った。
もしかしたら、何時か会える。いや、もしかしたら大昔に会っているかも知れない、その時からの再会のために。

「じゃあ、あるかもしれない決闘のため、約束。もし私、死んだら、『あの娘』、責任取って、――　守って」

私の母は私を見ない。目を合わしたら最後。もう、前には進めないから……

その魔女の覚悟を見て取り、大きな男、境界の王、【地獄使い】は頷いた。

「了承した。王と、境界の門番たる【国定】の名にかけて、命を賭けてあの娘を――――――――

――目が醒めた。

白い壁に、白い天井。本棚には摩導書が上から下までぎっしりと積まれ、テーブルには霊薬の実験道具が重なっている。薬理実験途中のフラスコがコポコポと音を立てている。

……私の家だ。

ベッドに寝かされている。血の付いた服は壁に掛けられ、妙に身体の疲れた、大儀式を三連続でやった時くらいに疲れていた私は、下着姿で寝ていた。お陰で涼しく、グッスリ眠れたみたいだ。まぁ、今度からはお腹が冷えるから腹巻くらいは……

下着姿？

「にょわぁぁ！？　なんで、どうして！？」

落ち着け、落ち着け、昨日から不思議な事が続いて、魔女にも関わらず混乱している。いや、魔女でも混乱するのは普通か？　いや、普通は混乱する。魔女である以前に、私は女の子であります！

……昨日？

「国定ッ？！」
あの負傷をした国定は何処に！？
「……なんだよ、朝っぱらからウっセェなぁ」
私の叫び声が聞こえたのか？　何故か師父から渡されたペアルックの白いエプロン（フリル付き）にハーフサイズのジーパンの格好で国定が私の部屋に入ってきた。
「国定ッ！」
「ウワッ！」
私は何故か顔を赤らめた国定に駆け寄って飛びつくと、その勢いで地面に転がした。倒れて「？」を浮かべる彼を余所に、エプロンの更に下の赤いTシャツを捲くってみる。その下の上半身は眼を見張るほど古傷だらけだったが、昨日の、上下に分かれたグロテクスな傷痕はなかった。飛び出た腸（はらわた）も御腹に行儀良く（？）収まっているようだ。まったく、腸をブチ撒けるのは少年漫画の中だけにしてもらいたいものだ。
「……良かったァ」
本当に良かった。あんな簡単な口約束程度で死なれたら、こっちだって目覚めが悪い。
あれ、……口約束って、何だけ？　何だか寝ていた時の方が鮮明に覚えていたのだけれど、ぬるま湯に入浴剤が溶けるように、あの時の映像と説明を出来る言葉が形から溶けていっていた。
「君は……、その、なんて言う格好をしているんだ」
努めて無表情にし、それでも赤い顔を軽く背けながら、己の腹の上に乗っかる、もとい、国定の腹の上に乗っかる私の格好を指差した。
着の身着のまま出た結果、下着姿。『性少年』の逞しい想像力を刺激する白黒でストライプの柄の上下。勿論、靴下と同色。わぁお。
「見るなぁァァァ！！」
真空アッパーカット。非常警戒、矮躯撲殺天使降臨。

天井に飛ぶ腹だし少年がさらに空中で錐揉み。昔の某ワイヤーアクション系サイバーファンタジーなら、銃で撃たれて避けた時みたいに部屋の色んな角度から撮られているだろう光景。

地面に不時着のうえ、尻もちをついた国定の一言。

「もしかして、その格好……誘ってるのか？」

意識してしているであろう下卑た笑いに、踵落としを喰らわせた。

「なぁ、だから許してくれって言っているだろう？」

十五分後、私は一切の口を閉ざして、リビングのテーブルにつきながら、国定が作った朝御飯を食べていた。むろん、代えの制服は着ている。でもスパッツは破れていた。替えは洗濯中なので今日はスパッツは穿いていない。お陰でスースーするのは乙女の秘密である。

この家は代々、九貫の魔女が管理する、自然の霊気装甲の大きな流れを持つ場所。大きな自然の霊気装甲の流れ、龍脈をおさえた曰く付きの、自分で言うのも何だが豪邸での食卓である。まぁ、品は質素だが。

その広すぎるリビングにポツンと、六人ほどの座れるテーブルを使って長い底辺部分で対面するように、国定は座っている。

十八分前、暖か御飯に焼き鮭、小松菜を茹でて糸カツオ節を掛けた御浸し、目玉焼きが並んでいたがその殆どが胃の中にある。ちなみに御飯のお代わり三杯は通常仕様である。

国定は僅か三分の間で二桁の中盤の回数まで差し掛かった溜息を吐く。

「なぁ、いい加減に……」

「ごちそうさま、美味しかったよ」

突然、礼を言われた国定。しかし、それが皮肉でもなく心からの礼だと理解したのか、頬を掻きながら私から軽く顔を背けながら笑

った。素直で宜しい。
手元で急須からお茶を注ぐと、緑茶の渋みを噛み締めて言った。
「で、アレからどうなったの？」
「ようやく聞いたか。馬鹿者にして未熟者、飯を食う前に聞け」
眼を『ー』の形にして、「オイオイ今更聞くかよ、未熟者」って感じで聞き返す男。……いつかコイツ生贄にする。
「君の気絶直後、君の師父が即席の治療魔法を飛ばしてくれてね。キレイにちぎれた部分は繋がったよ。直前の頭の時と違って意識を失うほどでは無かったからな。複雑な記憶復元の魔法など必要なかった。龍脈からの聖域作用を考慮しなくてもアレだけの詠唱と機転を使える、役に立つ魔法使いはそれほど居ない。優れた魔法使いと言うのはあぁ言った人間を言うのだな」
「えぇえぇ、そりゃぁー、私はバカみたいに突っ込んで悪ぅございました」
「バカみたいな形容じゃない。『バカ』そのものの代名詞だ。後方支援、砲台と言っても過言でない魔法使いが、在ろうことか白兵戦に特化した騎士に突っ込んでいくなんて話は聞いた事がない。ハッキリ言おう。君はバカを通り越して大馬鹿者だ。何ならＷＢＯの定例会議で世界クラスのバカ指定稟議書を出してもいいぞ」
プチリ、とコミカメで、霊気装甲とか関係無しに血管が鳴った。
「バカバカって言っているけどね。アンタだって、バカみたいに死に掛けていたじゃない！」
こちらの見下した視線に「これだから未熟者は……」と溜息を混じらせる子供。腹の立つガキだ……
「俺は君ほど絶望的でもない。俺の見せた隙は相手の攻撃のための的、それに攻撃を限定させれば、予測された攻撃は容易く避けられ、その自らの隙を相手の隙に転じられる。後の先と言う武の、高度な駆け引きをしただけだ」
「理解したかね？」と言うと、私が虎の子で残していた沢庵を目にも止まらぬ早さで奪い取った。しかも箸で。……あぁ、朝っぱら

からその武とやらにすら、殺意が芽生える。

だが私は、それ以上に彼が自分の身を省みずに守ったあの瞬間を思い出してしまった。

必死だった。あんな僅かな瞬間にも関わらず、焼き付いた表情。騎士の剣をまともに受けた痛みすら通り越して、私を救えた事に浮かんだ、小さな安堵の笑み。

自らの苦痛よりも、失われる絶望の回避のために奔走した男の表情だった。

やっぱり、コイツの方が大馬鹿野郎だ。そう結論付ける。

何故かその記憶に妙に動揺してきた私は、精神安定剤代わりに国定側の皿の縁についた、向こう側が透けて見えそうな薄い沢庵を口の中に放り込む。

「で、それはそれで、結局。騎士をどうやって撃退したの？」

国定はユックリ、マッタリとした咀嚼を止め、一度眼を瞑る。

さらに沈黙。流石に沈黙にしては長過ぎるだろ、と突っ込もうとした瞬間、

「分からない」

なんて、意味の分からない台詞を吐きやがりました。

「目の前で見ていた、ってか自分で撃退したんでしょ？　分からないなんてことはないじゃない？」

苛立つ私に平然とした顔で国定が応える。

「昨日から記憶の混乱が続いていると言ったが、それは特に『俺の能力』について顕著だ。昨日の『槍』も無意識の内に呼び出したモノであるし、『ワケの分からない攻撃』もそうだ。俺のモノだとは分かるがそれ以上は分からない。ただ、確実に勝てると、そう言う自信は俺の記憶よりも、確かにあった」

私たちを爆殺せんと、剣を振り上げた騎士を横殴りに吹き飛ばした。それは巨大な、騎士の剣とは比べ物にならない、拳のような硬い鋼鉄の何か……

鋼鉄は、あの夢の中の紅い虚空から裂けて出てきていた。

一撃、その一撃を喰らって、騎士は速やかに退散した。

私の質問に確固たる意志を持って、野獣の面が答える。

「安心しろ、憶測でも何でもない。本来より多少の遅れがある感があるが、やはり俺は強いぞ」

腕を組んだ素振といい、自分の能力が分からないわりにむやみやたらと自信はあるのね。

「……ふん、まぁ、いいわ。とにかく、今はどうするかだね……」

「とりあえず、俺のお薦めは篭城して、君の自宅の結界を強化し……」

「じゃ、学校に行こうか」

私の発言と同時に国定は頭をテーブルに打ち付けた。

「何してんの？　新喜劇なんて今時流行んないよ」

「君は、……狙われているのに外を出歩くと言うのか」

プルプルとテーブルに突っ伏して、拳を握り締めながら震えている。コイツ気付いてないなぁ。

「国定、【死神】がいるから、あえて私は外を歩くんだよ？」

【死神】、太古から冥府に魂を運ぶ存在であり、厳密には一部の人外の一族、虚宮（うつろのみや）一族に継承された、生きているものに絶大的なアドバンテージを持つ種族である。

百二十七年前、人を守る最大の魔『過日の魔王　鉄神（てつがみ）　芭王（ばおう）』と

人外のカリスマ『非人食いの神　近江影春（オウミカゲハル）』の集団がぶつかり合った、世界でも稀に見る大戦争が起きた。百二十七年前とは、魔に関係するものには大きな意味を持ち、他にも新しい世界の調律者【時守】が生まれたり、欧州の吸血鬼同士が白昼にも関わらず殺しあったりなんて大事件もあった。

さて、三千世界を揺るがす、爆風雷火。人類への七つの反逆者に十五人の守護者。憎悪の饗宴と狂演のための憎悪。嵐が嵐とすら認知されず、ただ暴風のみが世界を砕き、潰し、蹂躙した混沌時代の黄金時代。

激しい戦闘に次ぐ戦闘の後、【魔王】の勝利が確定した。その後、人外から人を守るために魔王は、人外と人の均衡となるための対魔機関、魔を退けるモノでなく、共存のために対峙する機関、【死神公社】を作る事を決めたのだ。

それ以降、死神公社は非公式ではあるが日本では最大の対魔機関として、警察官のように部署分け、階級分けされながら、実際に警察官のように人外からの脅威に対して人を守っている。いや、むしろその役割を考えれば魔の為の警察官と呼んでも遜色はない。

死神は、死神転生手術と呼ばれる――天才的な魔術師『偶院（グウイン）　鵺（ヌエ）』の手によって、唯一天然の死神である虚宮の身体を研究され、作られた――死神に生まれ変わる手術の体系によって、最低クラスでも下級神域の人外と同じ霊気装甲を持つ。また、その力を効率よく伝える対魔兵装【死神の鎌】、触れただけで並みの妖魔を蒸発させる【不壊黒縛衣】など、特異な力を持つ日本、いや、世界に誇る調停武装集団なのだ。

「【死神】は【亡霊騎士】みたいに自然界の呪いじゃないから、拙いながも【魔術結界】を張った私の工房には簡単には入れない。それなら死神が巡回する経路を常に取っていた方がいいじゃない？

それなら亡霊騎士と互角の死神が運良く『現行犯斬殺』でバッサリ殺ってくれるかもしれないしね？　それなら後は魔女と魔術師の人の問題。死神は魔術師が『人』だから手は出せない。でも、私は魔女だからね。魔術師をしばくことは出来る。私を狙う奴等は容赦しない。むしろ、同朋を殺ってくれた奴等なんて目にモノを見せてあげるつもりよ」

私の不敵な笑みと握りしめた拳に、国定は吊り目気味の目を大きく開いて、頷いた。

「なるほど、その考えには賛成だ。君は思ったほど、未熟ではないようだな。分かった。君の意見に従おう」

「思ったよりってのが気になったけど、……それより、国定ッ！　あんたなんで未熟者ってばかり言って、私のことを名前で呼ばないのよ！」

私が箸の先でビシッと叩きつけると、それに反応するように箸を見て、私を見た。

「まったく、行儀の悪い。睨むな……あぁ、分かった。名前で呼ぶのだな？　確か君の名前は、九貫　在姫だったな」

「そうよ、九貫でも何でも好きに呼びなさい」

国定は私の言葉を無視してブツブツと呟いていた。それは紛れもなく、私の苗字と名前を言い比べているものだった。

「九貫、九貫、在姫、九貫、在姫、在姫、在姫。……では、在姫と呼ぼう。うん、この呼び方は気にいった。在姫、在姫。良い名だな」

私の名前の呼び方を気に入りながら、笑みを浮かべた少年。

何だか分からないけど、その少年、いや、男が、女の子の名前を普通に呼ぶのが久しぶりなのではないかと思って、急に胸が熱くなった。

何だろう？　この胸の高鳴りは？　魔女の律した流れでなく、無秩序な暴走。

「ん？　顔色が優れないようだが、どうした？　熱があるのか？　昨日の今日だ。具合が優れなければ休むといい。その間も俺が、命

がけで守る」
その言葉でさらに温度上昇、沸騰必死、カップラーメンは三分、カヤクは事前、お湯きり必須。
「ま、ま。まま、まさか、私、着替え、学校、行く」
私はダッシュで自分の部屋に戻る。どうした、私？　顔が熱いぞ。止まれ、魔女の心臓、えぇい、うるさいぞ！　助詞が、名詞だけが、何て代物が母から遺伝したんだ！
後ろの方から「既に制服に着替えているというのに……、変なやつだ」と言う声が聞こえた。

……落ち着いて学校の鞄を取り、私が戻る頃には、彼は皿洗いも終わっていた。
……魔術師が撃退し終わった後も家政婦として残ってもらっちゃダメかな？　スゲェ役に立つんだけど。一家に一人くらい、いや魔人だから一家に一台くらいか？
「さて、行くぞ」
私よりも先に玄関に出るチビッコ野郎。黒のスニーカーはいつの間にか履いている。
ちょっと、待て。
「ねぇ、国定もちゃんと付いて行かなくちゃイケナイの？」
すると、彼は不思議そうな顔をする。当然だろ？　と言いたげだ。
「でもさ、高校生くらいの体格ならまだしも、そんな子供の格好だったら校舎内どころか、一人で道すら歩けないよ？　学校の外で待っていたら補導されるよ」
まぁ、大人の格好であっても、高校の外で待っていたら死神でなくても、普通の警官に職務質問をされるけど。
「未熟者、昨日、俺は言っただろ？　俺は【魔人】だと」

その瞬間に彼の姿が消えた。

「あっ、なるほど、付いて行くワケではなくて、憑いて行くワケですか」

【魔人】。

魔法使いの限界、霊気装甲の【伝導率】自体を、代を重ねる事で百%の直前までに近づけるのが魔女なら百%まで行き着いた者を【魔人】と呼ぶ。

言わば、その身全てが霊気装甲。このように自然の霊気装甲に溶け込んでしまうことすら瞼の開け閉めより簡単に出来る。でも、そんな便利な【魔人】になるためには何か条件が……

「この姿なら大丈夫なはずだ。一流の魔女でも感知されず、特別級の魔眼持ちでない限りは俺を見つける事は出来ない。そう言えば、昨日のほどの大怪我でも時間を使えば、霊気装甲の流動で完全に自動で回復できる事もあの戦闘以降で思い出したしな」

私の思索を邪魔するように「フン」と言う意味のない掛け声が虚空で聞こえた、大方腕を組んで偉っそうにたぶん踏ん反り返っているのだろうが、昨日の群体の幽霊や強力な亡霊騎士ならともかく、普通は不可視の霊体は私には見えない。あー、良かった。

と言うか、回復なんて大事な事を忘れているあたり、実は間抜けではないか？　なんて私は思ってしまった。何だか、それを考えると面白くて、普通に笑ってしまった。

「ハッハハ、はいはい、分かった分かった。じゃあさ、ピンチの時には助けてね？」

「？　あぁ、了承した。君のために俺はこの身全てを賭けよう。君も、……在姫も未熟者なのだから俺の指示に従うように」

「未熟者は余計だ、……バカ」

私達は、ドアを開け、晴れやかな陽光のヴェールに踏み入れた。

「……ところで、私の制服を脱がしたの誰？」
「俺が重症だったため、気絶した君を運んできた師父だったが、問題が？」

アイツ、あとでブッ殺す。

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

街を一望できる高台の一番奥に位置する、九貫の洋風の屋敷は二階建てだ。
周りの住居や周辺の風景も、それに合わせたように同じような洋風の屋敷やレンガ造りの道などになっているため、異国風の情緒を醸し出しながらも違和感はない。
魔女の管理する地、九貫の領地を囲む壁は薄くはない。だが一般人には視線を遮断することには使えても、常識外の魔術師や亡霊騎士には目隠し以外の役にも立つかどうか分からない。そして、高い壁の内側、魔女の庭には各種、霊薬の原料となる植物がこっそり植えられている。ユリ科水仙の一種であるアスフォデルやニガヨモギ、朝鮮朝顔、トリカブトなんかが……、オィ、毒物ばかりではないか。捕まるぞ、在姫。
嘆息しつつも、簡単な封印魔法で扉に鍵を掛けた在姫の隣りに俺は位置する。

「在姫、とりあえず襲撃を予測するためにこの街の地理条件を知りたいのだが、歩きながらでも話していいか？　どうやら事前に採取した記憶が欠けているようだ」

虚空に突如浮かんだ俺の質問に「別に構わないけど？」と、何でそんな事を聞くのかと不思議そうな顔をしている。本当にコイツは、自分が襲われそうなのだと理解しているのだろうか？

思ったよりも早く起きたわりに、白色の太陽は天頂を目指して高々と昇りつめている。

遠くに見える街、その先の水面では漣（さざなみ）が陽光を同じ白色で照り返す。

初夏か、魔人以前の、思い出の一つでもあったら嬉しいのだがな……

「ここから見える二つの街の風景があるでしょ？　二つの町を分ける河が太臥河（たいがかわ）で、その河を挟んで港側の発展している街が神南町で、反対側のな――んにも無いのが十院町（じゅういんちょう）って言うの」

「何もないのに町なのか？」

俺の素朴な疑問に「なんでだろうね？」と、一本一本が絹糸のように細い黒髪を揺らしながら苦笑交じりに答える。

あまり大きな声で話すと怪しまれると思うのだが……。まぁ、朝も早いせいか、誰も注目していないのでいいだろう。

「北は海、南はグルリと山に囲まれ、都会と田舎の二つの町を合わせたのが日本国冥府の政霊指定都市、日本で妖魔人外魔女鬼畜が住める、十七の街の一つ、和木市でございまーす……」

神南町側となるこちら側は東西に、中国の伝説の大鳥、鵬（ほう）のごとく広げられた幹線道路で、発展した街に存在する新興住宅街側の平地と山に合わせて段々となった古い住宅街と分け隔てている。戦闘の際はここでは避けるようにしよう。結界を張ったとしても、余波で住宅街には様々な被害が出そうだ。その更に外の山側、高速道路付近まで誘き寄せれば大丈夫かもな。と言うか、とりあえず突っ込むが、鬼畜そのものは人外の鬼と関係はあまり無いぞ？

「……神南町の海側と十院町の山側を繋ぐのが私鉄東堂線で、国定を昨日拾ったのが南神南町駅。駅と河に挟まれた、西の方にあるのが、私の通う高校。私立　坤高校、近くにコンビニの道尊（どうそん）があって便利なんだよね。そして綱魔世（ツナマヨ）おにぎりはなんと言おうと絶品」

「ひつじさるこうこう？」

「そうそう。ちなみにコレがうちの制服」

白い前開きのセーラー服には黒い襟縁と半袖の縁には二本の白いラインが置かれ、絞られるように合わせられた襟の胸元にはスカーフ止めに収められた純白のスカーフ。車ひだの黒いプリーツスカートは、最近の女子高生らしく短めの仕様。下は『先ほども確認した』白と黒のストライプのソックスに黒のローファー……って。

「ちなみに、冬はブレザー」

「いや、別に見せびらかすように回転しなくてもいいぞ」

胸の奥を突かれたかのように苦い顔を見せる少女。

「……いや、つい癖で。ほら、私って小柄だからさ。友達、てかある知り合いと洋服を買いに行くと『君はとても小さくて、本当に、可愛いな、ふふっ』て言われながら着せ替え人形にされるのよ」

「……君は、友達をもう少し選んだ方がいいぞ」

「失礼ね。選ぶほど魔女の私は友達多くないのよ」

それは本当に失礼。

それにしても、これは校長の、まさか教育委員会を通した公然の陰謀だろうか？　白いセーラー服は目を凝らせばその下の下着が透けるほど薄く、朝っぱらから照りつける日差しのためか、胸元の胸当ての部分を在姫は豪快に開けてある。まったく、ただでさえ貧相な体格だと言うことを考えてないのか？　……背が高い男なら上から見えるぞ。それに、薄いと言えば、スカートも黒にも関わらず、コレだけの生地の薄さでは……

「男子学生も勉学に励むのが大変だろうな……」

初夏の太陽が……眩しいぜ。

「何言ってるの？」

「いや、学生の生活行動と権力構造を憂いていただけだ。続けてくれ」

首を傾げながら、高台の九貫の屋敷から長い急な坂を下る。人の身ならば帰りの上り坂の事など考えたくもないだろうな。

「うちの高校と真反対にあるのが県立神南高校（かんなみこうこう）、一般の人には知られていないけど、基本的に人外が通う高校が神南で、人が通うのがウチ――」

在姫が霊体と同じ状態である俺が見えないと知りながら、コッソリと僅かに覗き見るように改めて彼女を眺めた。

「――で、昨日行った師父のお店『ディープスタンド』はより市内の側のオフィス街のあの辺り。えっと……ウチの高校の、東の方にあのやたら大きな複合ビルが見えるでしょ？　そうそうあれが『季堂ツィンタワー』ってやつで、その近くにあるのが地下に死神の和木市本部がある和木市の市役所――」

確かに小柄な部類に入る身体だ。眼を当てられるほどの成長も見れないかもしれない。

「――南の神南駅と同じ様に北の方にもちゃんと商用港と隣接した駅が北神南駅で――」

だが、凛と意志を発するような大きな瞳、桜色の小さなくちびるに磁器のように白い肌。手足も細いように見えて、しっかり筋肉がついている。だが、それは女性としての美しさを損なわない、瞳はあの女に似て、って俺は何をじろじろと眺めているんだ。

「――だから、神南座はダメなのよ！　バカみたいにハリウッド大作～、みたいな駄作ばっかり上映してッ！！　たまにはキューバリックやティランターノ様を――」

……いや、確かに見惚れるのは仕方がないかも知れない。彼女は自覚していないが美少女の部類だ。本当に成長して大人になれば、本当に万人を魅了する、文字通り魔性の女となるだろう。

「――街には噂に寄れば、あの人喰いの神がバラバラにされて封印されて――」

ルビー色の小さな球体のついたピンから洩れた、僅かな髪をかきあげる仕草も今でも大人然としていて、それだけで鼓動が早鐘を打つ。長い髪は魔性を腰まで蓄えて、質素な銀の髪飾りで止めた箇所が眩しく――

「――この間ニャスコに行ったら二週間前ぐらいに常寵が蹴散らしたチーマーが、って国定は話を聞い、ッアタ！！」

――百年の恋も冷めると言うのはこう言う所なのか？　在姫は話に夢中になり過ぎて電信柱にオデコをぶつけていた。星とヒヨコと、あとは名状しがたいスライムみたいなのが頭上を廻りながら飛んでいるのが俺には見える。魔人なのに疲れ目だろうか？

「未熟者」

とりあえず、一瞬、見惚れていた自分が情けなく感じ、一言呟いた。

「アイタタ……、もう、目の前に電信柱があるなら言ってよね！」

「仕方ないだろう、俺は――」

「俺は？」

君の姿を――

「俺は――、君の未熟な姿が見たかっただけだ。予想通りで嬉しいぞ、未熟者」

「……最ッ悪」

涙を溜めたままオデコを擦り、幹線道路脇の停車場からバスに乗

って、南神南駅の隣りの駅である上四帖駅へ。乗り換え十分で電車内へ。

「意外に人が少ない、と言うより俺たち以外はまるで人が居ないのだな」

「何だかんだ言って地方都市だしね。それに通勤ラッシュ前の朝だし人も少ないね」

がらんとした電車内で気にもせずに喋り続ける。傍から見たら独り言を大声で喋っているようにしか見えないな。

「国定、そう言えば国定は魔人って言うくらいだから人間よりかは長く生きているんでしょ？」

「まぁな、今年で……大体千年くらいか？」

「千年？！　魔人でもそれって最古の部類に入るんじゃない！？」

「さぁな。とりあえず、知りうる限り、俺以外で同じくらい息が長いのは後二人くらいしか記憶にないな」

「ふーん。……で、昔は生きていたって事は、その子孫とかいるでしょ？」

在姫のその言葉は虚空で暫く、俺の言葉を止めさせた。

――遥か遠くで霞む笑顔の稚児。そして、その偽りの母にして、妻。

そして、アカイ――

「……、まぁ、おそらくな」

「ふーん、もしかしたら、君を祖先とする人が学校にいるかもよ？」

何だか、他にも色々とイラナイ事を聞かれそうな気がしたので、ふと、疑問に駆られた事を口走ってみた。

「在姫、君は……無理をして喋っていないか？」

ピタリと、目に見えないはずの俺の方を見つめると、僅かに眼を反らして「そうかもね」と淋しそうに呟いた。

「……魔女だからさ。世界の神秘に触れる以上は危険と隣り合わせ出し、人と一線を引かなくちゃいけないんだよね。そのために付かず離れずの位置にいる人としか私はあまり付き合わないし、……それだからかな。自分の事とか気にせずにバーっと喋りたくなる時が、やっぱり、あるよね」

彼女は魔女である以前に年頃の女の子だ。それだけは、ハッキリしている。魔女である心と少女である心、不安定（アンバランス）、不当性（アンビバレンス）。

「あっ、駅についた」

優雅に、電車の揺れにも関わらず立ち上がる。その姿はいつでもハキハキとした不思議で元気な魔女と言った感じではなく、冷徹な仮面を被った優等生に変わっている。変わり身、というか猫かぶりが早過ぎる……。さっきまで淋しがっていたのは嘘なのか？

「じゃあ、ここからは中々喋れないから静かにしていてね？」

「了承した。気兼ねせず、上手く猫を被ると良い」

「……後で、家に帰ったらお話があるので宜しく」

その無邪気、に見せ掛けた魔の篭った笑顔に、思わず残った霊気装甲で生き残れるかと考えたのは言うまでもない。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

流石に高校の前は駅と違い、朝の登校生達でごった返している。油蝉の奏でる旋律が、嫌が応にも今日の昼、最高潮までに茹だる暑さを高めていく。この間みたいに事件で冷房が止まると死んでしまうから、一年Ｄ組の先生には逐次、一部の生徒を特に注意して頂きたい、マジで。

「ふぅ」
既に自己主張など通り越して存在感を丸出しで照りつける太陽に蒸され、私は思わずスカーフ止めを持って、胸元をパタパタとさせる、アヂッ。
並木道の樹木が時折、灼熱の暴力を遮るように歩む私の上に覆い被さる。
そして、高校の校門まで後一歩の信号待ち。
暴力を完全に遮るように、不意に私の身体を大きな影が覆った。

「おはようございます。国定先輩」
「おはようございます。九貫さん」

頑強そうな面に、私と好対照を為す色黒の肌。百五十センチを切っている私からすれば見上げるような体躯。いや、むしろ意識して顔を見せなければ身長差で顔は見えない。短く刈られた髪に、柔和そうな表情は子供などに絶好の『玩具』とかで好かれそうだ。

こんな事を言うのは何だが、うちの高校、坤高校は変な人間が多い。
「あなたは、死について考えた事があるのか?」と、先代の校長の説教中に聞き返したと言う卒業生、遠谷。
「クラーケンは時折、少女の心、あなたの心すら奪うのですか……」と、西洋の化け物級大烏賊と共に今の恋人に告白した卒業生、虚言師　戸上。
「君の人生を何割か預かっても、たかが神如きは文句は言わないだろう」と、その告白を受けた卒業生、漫画家　谷津峰。
「武器が人を殺すわけでない、人が人を殺すのだ」と、その告白を評した卒業生、自称多重人格者　当宮。
「体操着を中にしまう、これ人類の悟りなり」と、その告白に

何かを悟った在校生、自称『有明は我が牙城』、岩代。まぁ、これは変人じゃなくて、師父と同じ方向性の人間か。

他にも、矢戸岐や、等々力など、教師や養護教諭と言う面の皮を被った変人も多数存在する。

そして、うちらの一つ上の代でその頂点に君臨するだろう男が、この人。知り合いでも極少数からしか【怪人】と呼ばれないにも関わらず、何故かあだ名として浸透している国定先輩。変人、そして、フルネーム不明。

弓道部の魔女（本当の魔女ではないらしいが）の葉桜先輩の恋人と噂される方である。ちなみに本人の方である弓道部の魔女は、挙動不審な動作を真顔でしながらそれを否定するとか。

「最近、夏の気配が急に近づいてきましたね、九貫さん」

「本当ですね。授業など先生方も熱心になさらずに、悠々と納涼などしながら教鞭を取れば宜しいかと私は思いますね」

国定先輩はさりげなく、私の日陰となるように立って居てくれている。こう言う事を嫌味なく出来る事から、変人と言われつつも周りから好かれるのだろう。そして、弓道部の魔女にイジメられるのだろう。

「確かに、水桶に氷と井戸水でも入れて足元だけでも浸かりたいですね」

「えぇ、でも、教室でそんな事をしたら騒がしい生徒に引っ繰り返されるかもしれませんからね」

チラリと手元を見た。皮製の鞄を持つ反対の手には網に入った…西瓜。

現実を受け止めよう。

「私のような一生徒が有名人に声を掛けていただけるなんて思っていませんでした」

なんで名前まで覚えていたか分からないけど。

「それは言うまでもないじゃないですか。校内テストで学年トップ

なら自然と目立ちますよ」
「そんなぁ、目立つお株はアノアマ、じゃなかった、島田さんにお任せしますよ」
国定先輩の表情の乏しいパーツが驚きを示す。やばッ、魔女として目立たない事を目指していたのだが……ムムッ。しかし、同じ一年の、副会長の『あの女』が二位だった時の私を見て悔しがる顔と言ったらない。あんまり面白くて赤飯を小躍りしながら炊いて、鯛の尾頭つきまで晩御飯に添えてしまった。出費は重なって色々ヤバかったけど……、畜生。
「は、はぁ、そうなんですか？」
しまった。日頃の隠していた、魔女らしい邪悪な笑いがつい素で出てしまったのかもしれない。変人にすら退かれてどうするんだ。
慌てずに「彼女とはウマが合わなくて～」と適当に綺麗な笑顔で誤魔化しながら長い信号待ちを待つ。

赤から青へ。
「どうも、私の詰まらない談笑に付き合っていただき有難うございます」
長い髪の重さを感じながら軽くお辞儀をしつつ、校門の前で別校舎の国定先輩と別れる。
河に面した学校だけあって時折、吹く風は涼を帯びている。

「九貫さん」
背後の変人が呼び止める。
寥々とした、拙い風。

「……あなた、悪霊などには、取り憑かれていませんよね？」

背筋が凍った。鼓動が、魔女の心臓がサイクルを始める。変人、いや【怪人】は、【魔人】が私の背後に憑いている事に気付いたのだろうか？

怪人の横を一般生徒が「国定君、おはよう」と言いながら私を抜くように通り過ぎ、「おはようございます、頼島（よりしま）さん」と怪人は、相も変わらず、普通の口調で問い掛ける。

日常と非日常の狭間。

早鐘を打つ魔女の心臓。

ここで、……始まるのか？

何が？

――魔術師との殺し合い。

そこで、目に見えない『誰か』の手が、落ち着けとでも言うように置かれた。

「……気のせいですよ。いくら夏だからって、伊奈川さんみたいな怪談話は流行りませんよ？　女の子は怖がらせるモノではありません」

心拍サイクルを強から弱に変えながら、怪人にユッタリと振り返りながら応じる。

「……あぁ、すみません。何かへんなモノが見えたような気がしたので……あっ、気を損ねたようでしたら、……西瓜、食べますか？」

丁重に断った。

「じゃあ、甘納豆はどうでしょう？」
なんでそんなモノを学校に持ってきているのか分からないが、そちらも丁重に断った。
お辞儀をして別れると一年生の学舎に入る。

私のクラスがある二階への階段の踊り場で誰も居ない事を確認すると、国定は国定でも【怪人】でなく【魔人】の方に話し掛けた。
「なんで？　もし魔眼の保持者なら必ず分かるはずなのに」
ギリリと噛み締めた歯が鳴る。魔女同士が何と無く魔女だと分かっても、まさか一般人の【怪人】ごときに私が魔女だと気付かれたのはすごく屈辱だ。
「いや、アレは能力ではない。ただの勘だ」
「国定、貴方本当に霊体になり切っているの？　そうじゃなかったらなんだか、怪しいもんじゃない？」
突っ撥ねるように言う錬仁に怒りの矛先を向けた。
「未熟者。魔導師級の君でも見えない状態であるのを君は忘れたのか？　それに、あの鞄の中以外からは交霊武装のような魔力は感じなかっただろ？　しかもアレは、武器ではなくおそらく防具の類か？　まぁ、気にするほどの事ではない。それに、彼からは純度の高い霊気装甲が魔人の目から見えた。彼は霊気装甲のない【魔術師】ではない。安心しろ」
「……でも、何で気付いたのかしらね？」

階段を昇り始めた私に、
「君の言っていたとおり、縁……、なのかも知れないな」
と静かに言った。確かに苗字同じだし、祖先としての縁があるのかもしれない。

「おはよう、君が私よりも遅く来るとは珍しいじゃないか」
私と同じ長さの髪、それでありながらまとめずに垂らし、それでもなお、一つのうねりとなった漆黒の瀑布。細いフレームの眼鏡からはみ出すのではないかと思うほど、大きく、吊りあがった理知的な目。その口元には常日頃から、まったく似合わないような甘いお菓子が捧げられている。
「おはよう、ジョウチョー。貴女が私より早く登校なんて珍しいじゃない」
「おや、君が早朝から言葉遊びモドキに興じてくれるとは、天変地異の前触れかもしれないな」
クツクツと円筒状の『アポロ十三号』（バナナ味）を笑いと供に口の中に押し込むジョウチョーさん。
それだけ甘い物を食べて太らないのは牛みたいに胃が四つくらい別にあるからだろうか？　実際、ホルスタインのような羨ましい体つきだし……。
「なんて事ないってば、昨日は色々と所用で忙しかったから寝るのが遅かっただけよ。それなら、いつも夜更かしの多い貴女こそ、また何で早起きしたのか聞きたいね」

なんて、冗談交じりに言ってみた彼女の顔は……。
「な、なんて、事はない。知り合いが家に泊まりに来た故に、騒がないように消灯を早めただけだ」

……スミマセン。その知り合いは鉄面皮のジョウチョーを顔を背けながら真っ赤にさせるほどのパワーを持っているのですか？
……男か。
確か、ジョウチョーは性癖はノーマルのはず。しかし、ジョウチョーの美的センスはレオパルド・アカプルコなる俳優を「坊ちゃん野郎」と言うほどなのだから、当然身内であっても破壊力抜群な、

相当な色男なのだろう。あぁ、そういえば、アカプルコも色男（ロミオ）を前の作品中で演じていたね。

そのジョウチョーの顔を見て、「モエ――」っと聞き慣れない言葉を吐いた別のクラスの男子が居たが、二秒後、ジョウチョーの視線で圧殺された。

そして、朝のＨＲも早々に一時間目。

「おはよう諸君。燦燦たる陽光を通り越して地獄の業火と化しているだろう今日この頃。そんな時に我々に必要なものは、なんだ？勿論数学だ。人類が死滅してもこの真理は不変である事を憶えておきたまえ。さて、号令だ」

予鈴とほぼ同時に、肩の所でバッサリと切った黒髪の女性が黒板の前に立つ。眼帯をつけ、夏にも関わらず長袖の内側。その右腕側を何も無い状態でヒラヒラと揺らす新任の教師、三枝（ミツエ）　石火（セッカ）非常勤講師。彼女は教職課程中に車の事故で片手と片目を持って行かれたのだが、今日もそんな事を感じさせずにハキハキと左手一本で数式と図形を書き綴っている。

たまに、フェルマーの最終定理を「あれは大した事がない」と発作的に説明しだしたり、「素数を数えて心を落ち着かせろ」と何処かの神父みたいに言い出したり、ディラック作要素がツイスター理論、曲面論、部分多様体論と、数学の専門家じゃないと絶対分からない幾何図形と数式をドイツ語とかで書き出すのが珠に傷だ。（ジョウチョーは理論自体を理解していなかったが、ドイツ語で大体話は理解したとか）

だが、それ以外は非常に分かりやすい指導にメリハリのある口調。それと思い出したように話す数学の小話（アラビア数字は実はインド数字だとか、三歳の時に親の計算間違いを指摘したガウス、自分

が死ぬと予言した日に餓死したカルダーノなど）が生徒に受けているようで、C組の国語常勤講師　毒島とは段違いの圧倒的な人気を誇っている。何気に大人な美人だしね。日本人にしては珍しい、灰色の瞳が、たまに光の加減で銀色に見えるのが異国情緒な感触だ。もし、未だかつて見た事のない、最高の魔眼の持ち主ならこんな色だろうなんて想像も難くない。

つまり、私も彼女に好感を抱いている一人でもある。教師としての情熱もある良い人だとも思う。てか、自分とは色々な面で掛け離れているからだろう。……大人な美人はいいなぁ。

「九貫くん、相変わらず良い成績を出しているようだね」

授業が終わって休み時間に入ると同時に、三枝先生が不本意ながらもくじ引きで決まった、不良席（窓際の一番後ろ）に陣取る私の元に来た。担当のクラスとして何度も目には掛かっているが、こうして個人的に面識を交わすのは初めてだった。

間近で見ても、独眼の、灰色の瞳が光の加減で艶めかしい銀色に見える。日常にハンディキャップを持つ教師と言うよりも、激動の時代を駆ける賢人と言った風情をかもし出している。そんな女性は同性からも憧れを引き出すだろう。ジョウチョーとは似ているようで似ていない。常寵が詩文の優雅さがあるなら、対照的にこの人は幾何学的な、あるいは一本の筋の通った大人の女性らしさを感じる。うわー、美人ってかっこいいなー。

「……三枝先生、何か御用ですか？」

優等生のような独特の、「あたくし、下々の方とは違いますことよ」的な、隔たりを見せると、三枝先生はそれを気にせずに続けた。やっぱり大人の美人だー。

「いや、校内でも卓越して優秀な生徒がどんな者かと個人的な興味に惹かれただけだよ」

その笑みはこの女性の雰囲気からおよそ量れない、冷たさよりも暖かさに満ちたものだった。いいね、大人の笑み。この先生なら絶

対恋人とか居そうですね。
「九貫くん、君は私の個人的な理由から理数系のクラスに行く事を薦めよう」
「な、何ですか？　個人的な理由って」
思考が大人の色気に女性ながらも囚われていて、慌てて口に付くままに言った。
「先ほども言っただろ？　『個人的な興味に惹かれただけ』だよ。将来的に君が、私が担任するであろうクラスで伸び伸びと勉学に励むと考えると喜びに満ちてくるのだよ」
暖かい笑顔の背後。不謹慎なようだが、私は外でざわめく蝉の音が、何故か、それは違うと声高に言っているように聞こえた。それを頭の端で打ち消すように忘れる。
「――おや、しまった。学生の貴重な休息を奪ってしまった。私は教師失格だ」
「そんな事ないですよ。先生は生徒の事を考えて授業をしていると思います」
毒島と違って、と付け加えるように私は小さく言うと「違いない」と彼女も苦笑をした。
「あと、数日で夏休みだ。それまでも、夏休み中も、気を抜かずに勉学に励みたまえ」
その言葉で締めると三枝先生は休み時間で騒がしい教室を後にした。
当たり前のように静かにしていた国定。それでも、何故か怖いくらい、無言だった……。

時は変わって十二時。
昼食は学食での日替わり定食、もし人目の無い自宅なら、豪快に焼肉定食と天丼とカツカレーをセットで、それぞれ大盛りで頼みたい。だがあくまでも目立たない生徒を意識して、私は空腹を抑えながら野球部と柔道部の猛者と同じ、通常の二倍の特盛カツカレーを

頼む。ちなみにカツも二倍なのが学生に取って嬉しいところ。
目の前のジョウチョーは小月見うどんを、耳から零れる髪を片手で抑えながら食べている。
「ジョウチョーがお昼をそんなに食べないのはお菓子ばかり食べているからじゃない？」
「君の胃袋が宇宙規模だからだ。比較対象は人類以外にしてくれ」
などと軽口を叩かれた。
その反応直後にカツが一つ、キャトルミュティレーションの如く消え去っていた。
耳元の虚空で聞こえた、衣がサクサクと破れる咀嚼音。それと同時に、私の金属スプーンが魔法を超える己の不思議ハンドパワーで曲がる。

――国定、食べ物を恨みは怖いって意味は知っているのかな……？　かな？――

食事後、教室でギルガメッシュ叙事詩を解読しながら読むジョウチョーの対面で、知り合いの学生から少女漫画を借りながら「こんな展開ありえないなぁ」と評しつつ、まったりと過ごす。国定はおそらく学生の様子を珍しそうに眺めてでもいるのだろう。
ハァ……、漫画に触発されるのもなんだが、私も、何か運命的な恋とかしてみたいな。
もし、魔女で家族が居ないと言う境遇を許してくれるような、心の広くて、家事が全自動で出来て、年収二千万のキャリアで、長身で、誰から見ても男性的魅力に溢れている株式投資の出来る公務員の男性なら私は手を打つ。間違ってでも、一人で店番するような根暗で少女趣味（いや少女嗜好か？）な味覚障害男や、人を未熟者呼ばわりする子供戦士だけには、いくら身近で男分（？）が足りなくて切羽詰まって、人類と人外が残り一人と一台になっても絶対的に

拒否したい。……乙女心は複雑なのだ。

それにしても、国定か。あの先輩も何だか、昔話で有名な人の子孫だったから国定は、もとい錬仁の方はその本人かもしれない。何だっけな？　確か唄になるまで有名だった人物なんだけどなぁ。……ど忘れしちゃった、まぁいいか、国定だし。

そして、昼休み後の授業。冷房の効いた快適な教室内で、昨日の疲れがまた出たのか？

午睡と現（うつつ）の狭間をテンポ八十のメトロノームの様に穏やかに揺れる。

その白昼夢のような、淡い光の中、

――昔の夢を見た

――

少年は一人だった。生まれた同時に野に捨てられ、彼の者は獣と戯れ、闇の狭間に生きた。

人は『土蜘蛛』や『鬼童』などと呼んだ。だが、彼に非はあらず。ただ、始めから孤独だっただけだ。

やがて、人は少年を狩った。闇を怖れた古来の民族は、例え人でも、それは闇と変わらなかった。

殺した。少年は生きるために狩り返し、借り返し、狩り尽した。殺した。善悪などは無い。殺そうとするなら生きるために殺す。

だから、少年は守りではなく攻撃に転じた。生きるため。

もし、それすら否定するなら、彼には生きる意味すらない。

少年は一人で麓の村を全滅させた。

時は微かな、闇の動乱の時。山中にすら徒歩の歩兵が蔓延り、少年の山も村とは別の人間に侵されていた。

少年は討ってでた。だが、相手は予想を大きく超える、百戦錬磨の兵士達。

しかし、天性からの野生とその能力が彼を単独でありながら生き残らせた。

多くの強兵を従えた、

「お前は熊でも投げ飛ばせそうな怪力だな」

少年は、一人の小さな運命に出会う――

――起きろ、未熟者。古文の教諭が君を注視しているぞ」

耳元で囁かれた声に一瞬にして覚醒。

現世と幽界の狭間、もとい寝惚け状態から抜け出す。
窓際の席、そして一番後ろの席であることが幸いして、桟にもたれて考え込んでいたようにしか見えないだろう。
「ありがと」
小声でお礼を言うと、私を見ていた国語教師と視線を合わせて微笑み返す。
フン、教師のくせに目を逸らすなんてだらしない……。

放課後のだんだらに染まった橙色の図書室に残りながら、極限の集中で古文教師の捨て土産である最後の宿題を終わらせる。ジョウチョーは「家族との用がある」とかで心持ち浮付いた感じで帰っていった。やっぱり訪問者ってそんなに特別なひとなのだろうか？

長い長い、無駄に長い宿題を終わらせた。
シャーペンをノックして芯を内側にしまうと、椅子の上で背中を鳴らしながら伸び。
それから、周りに誰も居ない事を確認する。
「国定、退屈した？」
……沈黙。何処に行ったんだ奴は？
と机から立った時、その異様な気配に気付いた。
下校時刻前。それにも関わらず、

——人が誰も居ない。

部活で遅くまで残る生徒。同じく、図書館に残って勉強する生徒。
そう、人っ子一人、誰も居ない……。

「これは、『人払いの結界』？」

外界が、別の外界を遮断する別の空気は間違いない。魔術による人の行き来を遮断し、音を回折し、視線すら惑わし、閉ざす領域。狩場。

そして、遠くから刃（ジン）、尽（ジン）と、金属同士がぶつかり合う音がする。

「国定ッ！？」

私はその方向、体育館に向かって駆け出した。

＊　　＊　　＊

05．衆合（しゅうごう）（1／2）（後書き）

＜＜－Ｓｉｄｅ　Ｂ－　国定視点へ続く。

06．衆合（しゅうごう）（2／2）（前書き）

＜＜―Ｓｉｄｅ　Ａ―　九貫視点からの続き。

06．衆合（しゅうごう）（2／2）

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

それに気付いたのは、蒼穹が朱を帯び始めたくらいだろうか？
それに気付くに至るまでは、俺はただ一つ、あの光景を夢想の中、いや悪夢の中で繰り返していた。

――紅蓮に燃える焔、火影の狭間に揺れる人は奇妙で、自分と、相手の境が分からないほど、周りは血塗られていた……。
泣き叫ぶ赤子、彼はそれを踏み潰し、呆然とするその母親、彼はそれを斬り裂き、刃向かうその父親、彼はそれを砕き殺す。
面白いように、まるで地を這い擦る虫の大群を土足で踏み潰すような容易さで……。
吐き気がするほど、喜劇のように、屠、斃、顛、跋、蹂、躙、壊、握……殺戮の宴。

赤い、紅い、朱い、ひたすらアカイ、赫怒を模した形相。

それは正しく、人外。荒人神。鬼。

遠い、遠過ぎる中天に向かって、紅い鬼が吼える、哭き喚く。

心裂かれるほどの痛み、最後まで続かなかった思い……

鬼が
泣きながら、笑っていた――

「……ん？　已然形活用の活用は『ど』『ども』？　係助詞……、なむ？　南無？　にゃむ？」

気が付くと、何やら同じ日本語（と言っても俺が生きていた時代のような古語だが）で悩んでいる未熟者が頭を抱えていた。なるほど、学年一番の称号のわりに古文は苦手ときているらしい。溜息を小さくつくと教科書を覗く。なるほどそんな基礎から躓いていたのか。どうせ、学年一位とやらも丸ごと暗記をしていただけで、実は系統立ててまったく覚えていないのだろう。それは実用主義ではなく、拙速主義言うのだぞ、在姫？

「未熟者。『ど』『ども』に続く、係る結びは『ば』だ。係助詞の『なむ』は中位の強意表現、現代語で言えば『今日こそは』の『こそ』に当たる。例えば、

　恨みわび　ほさぬ袖だに　あるものを　恋に朽ちなむ
名こそ惜しけれ

この句では『恋しい人のつれなさを恨んでは泣く、その涙で乾く間もない袖でさえ惜しいのに、浮き名が流れて朽ちてゆく私の名が、惜しまれてならない』のような『朽ちてゆく～』にあたる場所、恨みがましいような言い方の部分だ」

俺の説明に目を点にして見ている在姫。おいおい、これぐらいは教養として普通だぞ。最近の若者は古書にすら目を通さぬのだな。

「んー、尊敬」

「するほどの教養ではない。いいから続けろ」

蛍光灯に照らされる机から、再び見えないはずの俺の方に小さな

声で在姫は話し掛ける。
「でもさ、なんでこんな事覚えていたの？　もしかしてそう言う昔の、連歌みたいの好きなの？」
「……あぁ、それは『縁があった』から覚えやすいと言うモノだろう。少しばかり自分の血筋とその歌仙に関わりが合っただけだ」
「ふーん」と何やら妙に納得した在姫。この話は突っ込まれると話が長くなるうえ、何分『実感』がないので終わりにしたかったので都合がいい。
　静寂に満ちた図書室。古い紙の持つ匂いが情感を引き立たせる。夕暮れに染まった校庭には人影はない。

……いや、何かおかしくないだろうか？　人がやけに少なくないだろうか？

　俺の思考を筋道立てて考えると、一つの結論が生み出される。
　そう、『人払いの結界』。霊気装甲の無い人間に外界、自然界からの作用で、その場に居づらいような違和感、突然帰宅を促す衝動、説明不明の思いつきによって、効果内の人と言う存在を追い出す精神的な作用の魔術結界である。
　この手練具合、魔術師であることは間違いない。強力な霊気装甲のブロックを持つ在姫と霊気装甲そのものの俺はその影響を受けなかった、いや、それとも『受けさせなかった』のだろうか？　しかし、魔人に気付かせないとはまさに匠級だ。
　意思の網を巡らす。自身の霊気装甲を薄い和紙のように広げて、受動型のソナーのごとく、何かを拾う。

　西方、午の方角に、六十間（百八十メートル）に三つの交霊武装の気配。

俺は古文の読解に熱中している在姫を視線に置く。
外部の霊気装甲の流動は零。相手の術はまだ作動していない。先手を打つこともまた戦術。攻撃も最大の防御と言うのは実戦でいやと言うほど知っている。
「済まん、在姫」
古文に没頭する、小さな少女が気付かれないように声を掛けると、図書室の壁をすり抜けて二十メートル下の地面に着地。霊体時よりも物理的な攻撃を与えやすいように実体化すると一陣の風となって猛る。
と、そこで一度振り向いて『高さ』を思い出す。……うわぁ、こんな高いところから飛び降りたのか？
間違ってもこの『弱み』は在姫にはバレないようにしよう。
体育館、その横には立派な弓道場がある。夕暮れに満ちた校庭はダンダラに匂い立つほど赤い。
その朱色の中心に一人、大人しそうな垂れ眼の少女が居た。
「こんばんは、【魔人】さんですね？　あなたは？」
その右横には筋骨猛々しい男が腰のあたりで三つ、百二十度間隔で開くように上半身だけが三体繋がっている。その腰辺りは人の足でなく蟹のような、十本の尖った足が等角に付いた厚い円盤の台座の上に乗っかっている。
その左横には隣りの男に劣りながらも、十分な迫力を持った男。しかし、その腰から下である部分は首を切った馬にくっ付けられたようになっている。ケンタウロスと言う人外だろうか？　左手には弓が握られていた。背中に十分なほどの矢と矢筒がある。
だがその猛々しさにも関わらず、そのどちらにも、『生』と言うモノが感じられない。虚ろな物体。そして青銅色の肌。
「機像兵（ゴーレム）だな？」
「へぇ、私のオリジナルにも関わらず、よく分かりましたね？」

白皙の肌の少女は長い、膝まで届くほどの黒髪を揺らす。あまりに磨き抜かれ、艶やかな髪は鏡の如く、茜色すらありのまま返した。

「当たり前だ。そいつら二体の額の防具。その下に僅かに見えるのはヘブライ語において真理を意味する『Ｅｍｅｔｈ』の文字。それだけで十分断定は出来る。装甲に４インチＩＣ製の対物理魔鋼と神経直結有線作動とは正しく戦闘向きの『動く交霊武装』だな」

「なるほど、視力と察しが良ろしいようですね」

垂れた眼が細められる。その少女の両手首には、それぞれの機像兵を直接的に、末梢神経と繋げた線によって操るための極細糸が伸びていた。単分子結合炭素線か。槍の大雑把な刃での切断は難しいな。

愕（がく）ッと重い金属が動き、頭をやや垂れていた鋼の兵隊が、目線で俺を捕らええる。

外部霊気装甲、流動確認。

来る。

「機像兵使い（ゴーレムマスター）と言う事は……、魔術師同盟、轢刑（レキケイ）の摩壁　六騎だったかな？　なるほど、機像兵の怪力ならば、車に轢かれてグシャグシャになった轢殺体に見えない事もないだろうな」

「――少々喋りすぎたようですね。では、我が願いに置いて、邪魔者は轢かれなさい」

細い両手が高々と、奏者のように舞い上がりながら俺自身を指す。

それに合わせて、俺は中空から槍を握った。

＊　　＊　　＊

――Ｓｉｄｅ　Ａ――

その場所は、既に戦場だった。
校庭のトラックでは突撃兵（トゥルーパー）と狙撃兵（スナイパー）によって、戦場の最悪のコンビネーションが発揮されている。
専門の魔術師でなくても分かる、あの疲れ知らず、かつ理不尽な機械的動きは機像兵に間違いない。
鋼鉄の鉄拳は小躯を狙う。
だが、小躯自身が驚異的な機動性を持って回避を繰り返す。
頭を下げ、腰を開き、膝を落とし、足を捌く。まさしく、神速の体移動。当たったと思えば、それは残像。そう、間近でなく遠眼で、それでも見間違えるほどに速い動き。
以前の亡霊騎士ほどの技も無いためか、避けきれない攻撃を槍で合わせて逸らす事すら無く、寸前で見切っている。
外れた拳は校庭に無数の拳痕を残しながら、後方、横方、前方、斜面、全方位に展開する魔人を追う。
だが、驚異的な機動性を持ってしても、三方、全ての死角と隙をそれぞれの上半身で塞いだ機像兵に槍を当てる事は出来ても、致命傷、もとい壊すまでにも至らない。思いっきり踏み込もうとしても十本のカニに似た足が踏み込みの邪魔をする。かと言って、立ち止まれば、
遮（シャッ）、と国定の僅かに立ち止まった瞬間と、心臓を狙うように放たれる人馬の矢。
それを眼も使わずに、分かり切ったかの如く背後からの矢を避ける国定。それは突撃兵の拳撃を避けながらの行動と選択である。
コンマの先には穿つ矢と砕く拳。
それでもなお、それが当然であるかの如く、国定は連撃の緊縛から抜け出る。
それも、ある程度の余裕を持ちながら。
「……強い」
思わず、言葉が洩れた。

一騎当千、万夫不当、鎧袖一触、歴戦練磨。およそ国定を形容するような適切な言葉は見つからない。彼の自信はその眼に映されているのだから、それ以上の言葉なんて……。

いや、でも、もし彼を一言で例えるなら名詞、ただ一つで事足りる。

――【英雄】。古代、悪鬼猛る戦場を、僅か一騎で駆け抜けた強者。まさしくそれだ――

その小躯には、何らかの幻視だろうか？　一番初めに見た巨躯が重ね合わせられるように動く。そして、その身も私の子供時代の服ではなく古代の戦士である、唐紅の大鎧に脛当て、手甲、飾りを付けた鉄兜が浮かぶように眼に見える。

しかし、優勢に見える彼でも、あくまでも現在の対処は防戦の一方通行のみである。

機像兵の操者、美少女の魔術師は校庭のど真ん中に突っ立って優雅に旋律を、そして戦慄を伝えるように舞い踊る。

私は指先に『呪い』を凝縮し、さらにそれに物理的ダメージすら与えた魔力弾、『フィンの一撃』でも加えてやろうかと思ったが、いかせん校庭の真ん中、三百メートル先は遠い。私は魔女なのだ、狙撃は魔弾の射手にでも任せよう。さて、それでも近い側の機像兵には意味がない。生物だけにしか、『呪い』は効かないのだ。

勿論、当てる事は出来るが、彼らは魔法使い対策として霊気装甲の流動を職人的に感知するのに長ける。基本的な、霊気装甲での身体強化による十分な狙いと距離で減衰する威力のために『体外』で呪いを固定化させる十分な霊気装甲の流動は必須。さらに魔力弾が万が一にでも外れたら、こちらに弓矢の狙いが定まる。

注意を惹きつける為に校舎影から出ようかと思ったが、ここで、この間のように出て行ったら亡霊の時の二の舞である。

狙撃兵、ケンタウロスの矢が私の胸に吸い込まれるように当たる

はずだ。国定に同意するようだが、不本意ながらわざわざ矢面に立つのは愚行以外の何ものでもない。

それに、そんな事をしたらまた、

――途切れた上半身（からだ）――

悪夢の繰り返し……

――私の魔法の体系である召喚術は非常に援護には向かない。一部の交流の深い生命体を除いて、私の制御の手を離れてしまう事が多いのだ。下手すると、今ココで召喚をしても彼を傷つけるだけになるかも知れない。どうする？

仮に一体を召喚したとしてもアレほどの攻撃力の機像兵。現実界にとどめて置けないほどのダメージを受ければ、異界に回帰せざるを得ない。そして、彼らの人形は一撃でその分の破壊力を表現できる細工である。獣人級の腕力なら耐えられる力があるのに。

情けないッ。才能は有っても、今使えなくては意味が無いのだ。彼を少しでも援護する方法……。

少しでも彼が踏み込みに専念できれば、少しでも彼に攻防を考える遑（いとま）さえあれば、生身の彼女に近づけ……。

「あれ？　おかしい」

おかしい、本当におかしい。なんで、彼女は『目の前に居る』のか？

機像兵の操者はその性質上、二つのタイプに分けられる。

一つは、有線の神経接続によって脳に直接信号を送りながら、視界を同時に確保して戦う方法。
もう一つは、無線で擬似魂回路に生霊を憑依接続しての遠隔操作。魂の一部として生霊を乗り移らせて戦う方法。
どちらに長短はあるにしろ、おかしいのだ。

つまり、機像兵の操者が『その場に居る』必要はない。
つまり、どちらにしろ『機像兵の操者が敵の目の前にいるのがおかしいのだ』。

「まさか……」
いや、有り得ない事でもない。
私の流れを感じ取る。
静かに、覚られないように小さく、『体外に洩れないような』霊気装甲の流動で編んだ意思の糸を機像兵に這わせる。
魔法の糸。精神を紡いだ、精神と接続するための糸。

接続≫≫
自分の思考が流れないように、注意をしながら、無意識に、手探りにその先を辿る。
そして、二つの兵士達への精神の流れは一度少女に集まり、そこから『さらに外側に一本の線』が繋がっている。
それは上へと向かって……。
≪≪解除

体内に巡る小さな粒達、それで私の身体の『内側』を活性化させていく。
校舎脇の影から校舎内へ。強い日差しで傾いた影を縫うように、闇に這う。
その速さは魔人たる国定には及ぶ事すら適わないが、それでも常

人の、いわゆる筋力のリミッター解除くらいは出来ている。
波打つ、魔女の心臓。
階段を勢い良く駆け上がる。そのスピードはジョウチョーの日頃のパートナーだけあって、私の普段の運動能力とは相余っても少女のモノとは思えないほどの速さと力強さ。
そして、屋上の踊り場へ。
いつもは開け放しの場所が、『結界』のように、人を拒むかのように閉まっていた。
「でぇぇやぁぁぁぁぁっ！！」
ドアノブの一番脆い部分を梃子と限界まで引き上げた筋力で蹴破る。
ドアが弾け飛ぶ。ドアはノブを壊すだけに留まらず、そのまま形を保って蹴った方向に移動し、縦に倒れた。
熱い夏の風が一陣とその場所を薙ぐ。朱色から、ワインレッドに変わり始めていた空。
それを仰ぐように見ている、暑苦しい白衣に、短めに切られた金髪の女性
屋上の校庭側に真の操者は居た。
眼下に見える光景は、未だ繰り広げられる戦渦。ここなら戦況を見るのに不自由はしない。
私は五指を広げて、その先に魔力弾を瞬時に溜めて、言い放った。
「魔術師の独奏曲（ソナタ）は終わりよ、葬送曲（ファーナルマーチ）でも準備しなさい」
振り返った女性は怜悧な目を僅かに伏せながら、未だに微かな笑みを浮かべていた……。

＊　　＊　　＊

－Ｓｉｄｅ　Ｂ－

さて、困った事が起きた。

六年前に、大馬鹿など超えて人類の禁治産者代表である俺の上司に召喚されて以来の困った事態だ。その時からは原因不明の魔法爆発やら実験爆発やら核爆発やらなんやら困った事は日常茶飯事に無駄に起き続けているため、例え困った事でも本当に困った事なのかと判断してしまうのだが、即答でこんなに困ったと感じたのは召喚以来初めてだ。

さて、困った時こそ冷静に分析してみよう。

目の前に居るのは機像兵。通常なら傷つけることの出来ない、肉体を持たない物体、霊やらなんやらを傷つけるようにしたモノを交霊武装と呼ぶ。その一つでユダヤ教の秘術（カバラ）によって動く交霊武装でありながら、元の泥人形とはまったく掛け離れたオリジナルのデザインで造られたものである。無論武装なので、普通の武器としても傷付けられる。つまり、霊体の俺を傷付けられる。

三体が各方向に均等に配備された、筋骨逞しい男が腰の辺りで蟹に似た十本足の物体に繋がれている。その上から下に至るまでＩＣ製、イトッコサーカス製の特殊合金である。交霊武装を生み出す魔術師、その専門家を錬金術師と呼ぶ。イトッコサーカスはその中でも反死神派、【逆神】に属する最大の錬金術師団である。それが生み出した合金は自然界の霊気装甲処理、錬金術によって飛躍的に靭性と硬性を上げている。

異形の殺人空繰（カラクリ）人形、機像兵。

たった今の、俺のコメカミを紙一枚で走った拳の一撃は轟風のみで髪の毛が散る。散った髪は元々この世に無い物質として大気に溶けるように消えた。

もし、一撃でも直撃すれば、俺の肉体も同じ末路を辿るだろう。だが、残念ながら機像兵の操者は操るのには長けているが、『戦闘』には上手のようではなく、俺の体捌きに翻弄されているようだ。

同じ様に、上半身は優美な男で下半身は四脚の馬の機像兵も、弓

を執って俺の身に矢の雨を降らせる。だがその殆どは外れるか、蟹男の機像兵の身体に当たるのみである。無論、ＩＣ製の装甲、うんともすんとも言わず、矢は火花を逆って弾かれる。

それを操る黒髪の少女、

――の形をした『機像兵』の更に上。校舎の屋上にいる真の操者。

その目の前に……、何故あの『未熟者』が居るんだ?!

「あのバカ!!」

激情とともに叩きつけた刃金が鋼と火花を散らし、奥まで届かずに尽きる。

先に機像兵の前に来たのは失策だが、魔術師が直接操作するかも知れない結界に入り、それに囚われている間に機像兵で殺されるのよりかは幾分かマシだと踏んだのだ。

それを回避するために、魔術師の武器、『機像兵』を先に叩いたのだが、それがどうにもこうにもなら無い。

この槍は特別製だが、ある事情で槍の先を失っている。おかげで『貫』、刺し穿つ機能は無い。

人の肌ならまだ傷つけるられるにしろ、相手は対物理衝撃に十分堪えうる重装甲、肌を刃で撫でるような小技が使えるはずもなく、必然的に大きく振り回すような『薙ぎ』になる。だが、それでも通常装甲の倍である守りをまったく傷付けられない。元の筋力であれば、三度で破壊出来ると言うのに。

例え今の体格でも、もし、槍に一点を貫く機能があったなら、確実に魔力を制御する中枢刻印の『真理〈Ｅｍｅｔｈ〉』を『死〈Ｍｅｔｈ〉』に変えていただろう。例え、金属でも、そこだけでも抉

れば止まる。
狂った戦士は嵐のごとく、豪腕を振り回す。操者の技量と機像兵の性能など関係なく、単純なスピードなら俺が上だろう。
魔人であるために目に見えた疲れはないが、それでも刻一刻と俺の霊気装甲は削られていく。
突こうにも先がない。立ち止まっても薙げない。
だからこそ冷静に一計を案じる。
「そるァッ！！」
刃から一転、その反対である石突を『機像兵の足に叩き付ける』。
空を切る鋼色が夕日の残光を返してワインレッドに染まり、血を彷彿とさせた。
複雑な関節の『最も柔な部分』が砕けて、脚が一本弾け飛んだ。
残るは後九つ。
耳元で風を切った矢を過ごしながら、とにかく目の前の空繰を倒す決意を固めた……。

＊　＊　＊

－Ｓｉｄｅ　Ａ－

金髪の女性の着る白衣の色はワインレッドから徐々に明度が下がり、赤く、そして黒く変わっていく。
短い髪は夏にしては生ぬるい風に晒されて、ユラリと静かに揺れている。
天井には満月より二日過ぎた十七日月。夕方のそう早くない時期、立って待つほどの時も立たない月のため、通称立待月（たてまちづき）とも呼ばれる。
昨日の今日、早い段階から出現した敵、機像兵の操者には相応しい月の名ではないだろうか？

「さぁ、その擬似神経をととっと引っこ抜きなさい！　そうでないと蜂の巣にするよ！」

私の五指は容赦なく女性を狙っている。その気になればこの距離で胴体を内臓破裂させることだって出来るほど、凝縮された物理的な呪いなのである。ちなみに五本指それぞれから放つそれは、まさに円筒機関銃（ガトリングガン）である。

それを前にして、操者は憮然とした、楽しみが邪魔されたかのように溜息を吐くと、初めて私に振り返った。

理知的な、およそ、論理と呼ばれるもの以外は否定しているような鋭利な瞳。薄い黒縁フレームの眼鏡に、白衣の下のトレーナーとジーンズは研究者として如何に一般的生活と比較して『ずぼら』なのかと物語っているようだ。こんな蒸し暑い中で暑くないのだろうか？　それでも白すぎる肌は血管が透けるほど薄く、真冬の寒さを覚えるほど病的とさえ感じる。

「在姫ですね？」

確認とも取れる言葉。だが、私は答えるつもりはない。

彼女は続けた。

「あの、黒髪の子は私の傑作なの、素敵でしょう？　後の二人も私の力作なの」

ふふふ、と自らに酔いしれるような言葉。

「止めなさい。いますぐに」

静止を促す。意思の塊の一部である生霊を『黒髪の女の子の機像兵』に降臨させ、さらにそこから擬似神経回路で操る手腕。

言わば、彼女は『同時に三体の機像兵』をタイムラグゼロで操っているのだ。並みの操者ではない。生霊によって全てに同じような命令を出し、三体以上を操ることは出来る。だが、彼女のように生霊という媒介を使いながら、さらに擬似神経で二体同時に操っているのだ。彼女はそれぞれを群体では無く、個々として扱っているのだ。その技量は魔術師でも極端中の極端、最高の部類に属する魔術である。匠級とは、マジで凄いようだ。

擬似神経越しに送られる情報を確認しながら、同時に、上から戦場を直接眺める戦術。戦下手とて、平面（二次元）からよりも上空（三次元）から戦況を見る方が容易いのは当然である。

白衣の女が白いハンカチを無造作に取り出した動作に身を固めるが、それはただ単に額の汗を拭うだけだった。

「弱った魔人だと『彼』も言っていましたけど、あなたの彼も頑張ますね」

「彼氏じゃねぇ、勘違いするな、スットコドッコイ」

思わず出た反応に「良い切り返しです」と分析するように、かすかに笑みを浮かべて楽しむ。

なんでそんな風に言い返したのか、なんて考える間もなく、夏に似合わぬ冷風が私にそよいだ。

「で、私をどうするつもりですか？」

決まりきった事、それを確認する女。

「撤退するなら、私を忘れて、この街からとっとと出て行くなら許すよ。けど、刃向かうなら――」

一歩踏み出す。魔女に迷いは無い。

「――叩く」

同時に完全に日が沈み。夜の帳が天幕のように空を覆う。

暗さに馴れた目でも、硝子の如く反射する瞳と意思は読み取れない。

「そうですか。でも、どっちにしろあなたの心臓を貰うのですから、死んでください」

顔に似合わず、論理と倫理完全無視での発言。その次の瞬間、私の心臓が跳ねた。

その本能の警告に従って、回転レシーブのようにタイルを真横に転がりながら『突進』を回避。真横から、突っ込んできた魔術師の

どてっ腹に魔女の一撃を喰らわせる。
開いた指先から五つの歪んだ空気塊。

だが、白衣の操者はその呪いを『素手』で受け止めた。

「なっ！」

次の瞬間、霊気装甲の流動で強化した、私の目にすらコマ落としのように映るスピードで迫る。

左の拳ッ！

避けた場所、背後にはコンクリートの壁。

私は操者と交差するように、飛び込み前転の要領で回避する。

直後、デタラメなフォームで、およそ格闘技とは掛け離れた崩れた動きで、女性はコンクリに拳の型を残した。

「『槍手』！？」

一瞬、あの鈍器の拳を思い出した。だがそれとは違う。まるで、力に頼ったような動き。断じて、あの洗練された、凄みのある技とは違う。

「なるほど、さすが魔女。装甲での身体強化などはお手のものですか」

機械、金属の軋み、歯車と歯車の音色、人工筋肉の唸る声。それはそれぞれの四肢から聞こえる。

「……信じられない、両手両足を機像兵用の手足と取ッ替えてある」

生身への人工強化。病的なまでの繊細さ、あるいは神経質なまでの集中力。それがなければ、肩から先につけたクレーン車を操ることさえ出来ずに、力加減のミスで自ら胴体を引き裂く事となるだろう。それは彼女のような魔術師でなければ死んでしまう事を意味する。

だが、「Ｎｏ，Ｎｏ」と私の言葉は間違いだと言うように、人差し指を立てて左右に振る。

「取り替えたのではありません。『私には元から無かった』だけですよ」

え？　待って、元から無かったって……。

私の口の開くのに合わせて、女性はコツコツと低いパンプスの音を立てながら中央に移動する。

「そう言うことです。言わば、奇形児と呼ばれるものですね。人によっては私を『不格好』だと嘲笑い、人、特に男性によっては私を都合の良い『玩具』代わりにしました。まさに『手も足も出ません』からね。そして最後に、襲った人も、それを憐れむ人も、みんな言うんです。『可哀想ね』と」

「飽きちゃいました。同じ反応で」と過去を回顧するように、眼鏡越しに虚ろな瞳が映る。

そして、何も知らない、私を打ちのめすような見下した目。

「でも、その惨めに『アザラシ』のように這いずっていた私に新しい手足を与えてくれた人がいるんです。本当に、この身体は素晴らしいんですよ？　不格好と言った人を『同じ不格好な姿』にさせたり、私を玩具にしたように、彼らの大事な場所を玩具のように『握り潰したり』する事が出来るんですからね……。しかし、その人の手でもこの身体を満足にはいきませんでしたからね。これ以上肉体と機械の齟齬のある歪なメンテナンスを続けると、自然に元の体の方がボロボロになると仰られました。そこから先は私の研究です。肺から心臓、脊髄から脳まで、『全てを変える必要』があったのです。私は『人の魂を機械の身体に完全に移植』しようとしているんですよ。そんな事が出来るのは【魔法】くらいですからね。私は、完全な体が欲しいんですよ。そんな辱めを受けた事、貴方はありますか？　もし無くとも、その惨めな気持ちが分かるなら、それを克服させてあげたいとは思いませんか？」

確かに、私はそんな惨めな事を受けた事はない。でも……、

「……これが私の願い。誰も人並みに生きていたい、ただそれだけ

を叶えるための、行動」
身体の欠損など分からない、その点では私は幸福に生きていた。
でも……、
「そのために、貴女の心臓、いただきます」
放っておけば、死ぬ体。その圧力すら理解は出来ない。
「私の手、私の足を、身体を下さい」

ピタリと私の目と、その狂気の瞳を合わせた瞬間。

「ふざけるな。これは私の心臓だ。誰であろうと命を粗末にするような人間に渡すつもりは無いッ！！」

弾けるように、魔女の心臓は高鳴った。
これだけはハッキリ言いたかった。確かに辱めを受けた事は同情できる。理解しがたい世界がある事、それを体験していないで言い返すことも出来ない。だが、『それ』と『これ』とは話しが違う。自分の望むモノのために他者を踏みにじることなんて、倫理とか、道徳とかで言い表せなくても、許せるはずがない！　何より、自分の幸福のために、他人に自分と同じ不幸を与えるのは矛盾以上の何でもない。全てが等価交換の世界であろうと、それは、等価交換を無視する、私の意思が許さない！

「……なるほど、これまで、三つ程狩ったの魔女とは些かと違いますね。天然お嬢様育ちの魔女の方々はコレを聞くだけで失神、嘔吐までして、無防備にしていたのですが……。やはり、私は精神系の結界を張るのが不得手ですね。精神に不当な呵責を受けるように設定したのですが……」
理論立てて考え込む女性に言ってやった。

「当たり前よ」
当たり前だ。魔女となると決めた『あの決意を持った済まない瞳と合わせた』瞬間から、私の心は揺らいでいない。
だから研鑽を続けた。だから私は、魔女なのだ。だからこそ、
「アンタに負けるつもりなんてないんだからッ！！」
その言葉と同時に、これまでの同朋の恨みを晴らすべく、怒りの鉄槌を投げかけた。
呪い撃ちと呼ばれるガント撃ちでも最高の、物理レベルのフィンの一撃が、機像兵の腕でガードした顔と全身を物理衝撃で一歩後退させる。
ガードした腕越しに見える歪な笑い。
「後悔しますよ」と唇の形は語っていた。

＊　＊　＊

－Ｓｉｄｅ　Ｂ－

「なんて動きだッ！」
勿論ながら、それについて語っているのは目の前の突撃兵でも、狙撃兵でも、その偽の操者でもなく、屋上の女の事である。
突然、向かい合った在姫に突撃したかと思うと、コンクリの壁をぶち抜き、何かを喋った後、現在は『空中』にいる。
超人的な跳躍能力。飛翔とでも言うべきか、と下らないことを悩んだ次の瞬間。在姫のコンマ一秒前に居た場所、その真下に十メートル飛んだ分の位置エネルギーを加えて、足の裏が押し潰す。穿孔音。
在姫はそれを後退して回避しながら、魔女の嗜みとでも言うべき、

魔力弾、フィンの一撃を送り返して、さらに後退。
透明な歪みを持った五つの魔力弾は交差した女の両腕に炸裂し、白衣の袖から、煙をあげさせている。しかし、その腕には支障はない。霊気装甲で強化した肉体の在姫を追い詰めるほどのスピードとパワー。改造と言う事か？　いや、違う。生命体である限りは呪いを受けた瞬間に影響が出る。という事は、あの女は四肢を機像兵化したというのか？

だが、俺が驚いているのはそんな事ではなく、そんな自分自身の攻防を繰り返しながら、『こちらの機像兵の動き』を怠っていない点だ。
いや、些か鈍ったと言えばそうだが、それでも遜色は微々たるモノだ。
そう、つまり、あの女は『四つの肉体』を同時に操作しているのだ。尋常の業（わざ）とは思えない。
それを相手にする在姫は普通の魔女と比べたら、コップとバスタブほどの差のある魔力の量だが、それとて無尽蔵ではない。
ましてやあの小さな体、いくら伝導率が高くても魔力を通しすぎれば、魔人でも無い限り、人である身体は魔を忌み嫌う。結果、自身を魔力で傷つける。
ピシャリと、突然、口元を抑えた在姫から鮮血が洩れた。魔力の通し過ぎで内臓、特に心臓に近い肺が傷つけられたのだ。
大馬鹿者、張り切りすぎだ！
それでも、在姫は躊躇わず、ゴクリと血を飲み込んで、一撃を放つ。
クソ、未熟者がッ！　大人しくしていろと――
俺の身体はそんな考えとは別に動いて、足をまた一つ砕いた。それでも続けざまとはいかず、次の一本からは警戒されているので中々手を出せない。
もう一度――。

俺は槍を地面に刺し、棒高跳びの要領で飛び越える。操者に合わせて、僅かに驚く刹那、振り向き様に回転しながら背後の足を砕く。後、八本。

――未熟者が、絶対に生きてろよ！

＊　＊　＊

－Ｓｉｄｅ　Ａ－

本当に何やってんだろう。私。魔法使いが近距離戦をするなんて、また国定にどやされるな。

悪意を持った機動性が白衣で翻る。夜闇にはためく金糸。

そして今度こそ、魔力の通し過ぎで体が痺れ、足の止まった私の首を白衣の女が掴むだろう。

もう少し、大人な体だったら、耐えられるのに、未熟な身体がこの時ばかりは本当に恨めしい。

暗闇から伸びる様に、

白い手。

ホラ、掴まれた。

「カハッ」

気道と頚動脈を潰すように、右の魔腕が、魔手が私の首を握る。

血を失った脳の反応なのだろうか？　空気中で、魚のように口をパクパクとさせて酸素の在り処を求める。

足掻くための足は地面の所在を無くしている。解こうともがく手は力を無くしている。

「ここまでですね」

金属の擦れる音。その首を持つ反対の手には同じ魔腕、魔手、揃えられた、抉るのに相応しい形の魔指。
心臓がこれ以上打てないほど高鳴りを連続する。
生きたまま、心臓を抉られる恐怖。
あぁ、くそ、ここまでか。体の弱さが嘆かわしい。もっと私が大人の体だったら……。
死線が近い。張り詰めた先、白い空気に埋もれる中で、私の意識は……。

＊　＊　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

そんな光景を俺は見ていた。
――――何をやっているんだ？
こんなデクノ坊に足手まといされ、守るべき対象を戦わせている。
そして、今は、その最大の危機。
ズキリと、前頭部が痛む。失われた、それ以前に失われた幻影が問い掛ける。
『戦え、――のために、力の限り』
削れる体。
そうだ。魔人とて、その魔力は制限無しに通せても、絶対量は決まっている。
魔人の魔力を通す、それは自らを削り取る儀式。ヤスリを身体に当て、それを自らの手で、ゴリゴリと音を立てて、皮を、肉を、骨を、見えない魂を削ぎ落としながら擦る苦痛の儀……
だから、どうした

んって言うんだ。

守ると、ただ決めた。はっきりと約束したあの時。

それ以前の、曖昧な決意を忘却した記憶、その中ですら朱墨に落とした血のごとく、融和して消えた思い出。だが、その中でも感覚は残っている。約束は果たさなければならない。

だからこそ、自らの身の消滅をためらってはならないッ！！

――途端に、浮かぶ。自らの記憶の欠片――

俺は唐突に機像兵の攻防から離脱すると、弓道場へと向かう。

むろん、俺を突撃兵が追い駆けるが、霊気装甲を完全に使った獣の本来のスピード、加えて五本も折られた足が勝てるはずがない。

槍は虚空に消す。今の俺には必要はない。

弓道場正面の、弓を射つ側のシャッターを体当たりで破り、板の間を転がりながら手近な弓と矢を取る。

無意識に取った弓。それは通常の二倍以上の握り、つまり、二倍以上の力を持って引く強弓と言うもの。

矢を弦に番える。おなじく、無意識に取った矢は計らずとも自らの身長に合ったものだ。

シャッターの手前まで迫った機像兵。

弓を射ること。射とは即ち理である。弓と言う利器に自らの技術で中を作り上げる技術である。

八つの工程を持って作られる射の理合。それの射の道から外れる事がなければ、矢はその方向に然るべき業で当たる。

八つの工程とは、【足踏】【胴造】、【弓構】、【打起】、【引分】、【会】、【離】、【残心】である。

【足踏】で大地に右膝を立て、左膝をつく。
身体は天を貫くように真っ直ぐと立て、【胴造】で体の、見えない芯を造る。
【弓構】で左手の微少な形を整えて、右親指の付け根で、矢をごと、弦を引っ掛けるように捻る。
狙いを定める。動くモノではない。既に俺の心の中では奴の身体は捉えられている。いや、既に、俺の中では矢は中(あた)っている。
高々と矢を番えた弓を、銃の撃鉄が上がるように【打起】こす。
弓の本体がまったくぶれる事無く掲げられる。
先に弓を持った左手を伸ばす。ギシリと反対の親指に鈍痛。皮の手袋、ゆがけで保護されるべき、右手親指の付け根の一転に重圧が掛かる。
しかし、心象明快。既に、俺の心は決まっている。この程度のことで、俺は揺るがない。
天と地を一本の垂直線で結び、それを陽光で分けるように弓を引き絞りながら、弓と弦を均等に【引分】ける。
ここまでに一息、無駄などない。幾千と戦場で繰り返し、命を賭けた技に無駄などない。
そして、全ては整い、真が通り、美を享け、善を悟る。必ず矢の当たる筋力の微妙な計算の解を、【会】を得た。
矢は【離】た。

機像兵の体が大きく吹き飛ぶ、その矢は確認するまでもなく、装甲の奥に隠された額の『E』を潰している。

甲矢（一番目）は中った。【残心】が次への射へと予断を許さない。
乙矢（二番目）を素早く構える。
引き絞る弓。

血潮が、剥き出しの親指から弦を伝って紅く染める。
ほぼ同時、狙撃兵の矢と俺の矢は手元から離れた。
俺は着撃すら確認をせずに、次の矢を番える。
二つの矢は互いに先端をぶつけ合い、一方は逸らされ、もう一方が額の『E』を穿っていた。

外に出る。

暗闇に凝らした瞳の先の校舎。黒髪の、少女型の機像兵が、恐怖に駆られたように俺に向かってくる。だが、それは的ではない。狙うはその先。

番えた矢は二本、胴をくの字に曲げながら、それでも芯は保ったまま、『その方向』に向かって、天を射るように、上に向かって構える。
対象は二つ。そして、それらは俺の心中（なか）では、既に中っている。

矢は【離】た。

＊　　＊　　＊

－Ｓｉｄｅ　Ａ－

私の意識は、突然正常値に回復した。

突然、持ち上げられていた体が落とされ、脳に血が行き渡ったのだ。
何が何だか分かったもんじゃない。だけど、今が貴重な勝機だと分かった。

咳き込みながら指先を向け、至近距離で、
「このど畜生ッ！！」
と私はフィンの一撃を放つ。
女性は目を開きながら、腕を交差する。
だが、五撃の内の一撃は腕の間をすり抜けて、吸い込まれるように額に当たった。
眼鏡が砕けて、硝子が校舎のタイルを滑る。
白衣の女の意識は一瞬でブラックアウト。身体が弾かれながら屋上の床に叩きつけられる。

防がれるわけが無い。左肩と右手首。そこに『矢』が、『関節の間』に刺さっていたのだから満足に動かせるワケがない。

「国定ッ！」
柵に体当たりするようにして見た眼下の校庭。
暗闇に抱かれ、爆撃の後のようにボロボロになった校庭のど真ん中で、へたり込んだ国定がヘロヘロと手を振って、
「大馬鹿者」
と親指を下に向けたやがった……。

馬鹿はお前だ、と胸に刻むと、それでも私は笑顔で国定の元に向かって走った。

天頂の立待月は雲の翳りを退けた。夜はいよいよ本番と言ったところだ。
その月光のヴェールを校庭の真ん中で被せられ、野獣は肩で息をしながらもその瞳は未だ滑舌豊かに『大丈夫だ』と物語っていた。
「あぁ、まったく、未熟者のくせにたいしたもんだ」
その発言に思わずスカートとその下を穿いていないこと（勿論スパッツを）など気にせずに、胡座をかいた国定の顔面に前蹴りを浴

びせる。
達磨のように胡座のまま後ろに転がりながらも屁でもないと言った顔つきで、勢いのまま元の姿勢に戻る国定。
「何をする痴れ者」
ブスとした口調にフンと対抗する鼻息は私。
「名前で呼べと言ったでしょうが、バカ」
その口調に朝に交わした約束を思い出したのか？　成る程、確かにそんな事も在った、と反芻するように巡らす。
「オメデトウ、未熟者だが運良く生き残ったぞ、在姫」
「実力だ、ドアホウ」
もう一度、額に前蹴りを当てて転がしてやった。このまま転がしていけば、凸凹になった校庭も埋め立てられるかも知れないなどという名案も思いついたが、こんなバカを転がしても、頭が霊体でスッカラカンだから変な凹凸が増えるに違いないと一人合点した。
「何をする。暴力で自らの都合の良いようにするなど独裁者と変わらぬぞ？」
「バカ野郎、未熟者は余計だと痛みで痴れ」
流石に次の蹴りからは余裕を持って、「そんなの当たるか」と避けられている。

「うーん、いいねぇ。君たちは青春をしているなぁ。僕も若りし頃に立ち返りたいと願いますね」

――あまりの唐突さに、私たちはまったく同時に校門の方に顔を向けた。
大した声調にも関わらず、その声色は、何故か空気を――震――と張るような緊張感を作った。
薄雲の翳りの中、暗中でも分かる体格の良さ、人を食ったような顔と表情、雲の翳りと共に近づく、澱みない足取りは正しく私の師

父。

「生羅師父。何故貴方がここに？」

昨日のような店員姿でなく、表面に呪い除けの加工のなされた黒衣を着た、魔法使いの姿で来た男、双珂院生羅。

「うん、魔術師の襲来を予期してある程度の『隠匿』の準備をした事を伝えようと思ったんだけど……、既に入り用のようだね。妹弟子ながら、いやいや、参った参った」

ボロボロになった校庭、砕けた弓道場の一部、そして機像兵の残骸。

魔法使いや魔女はその性質上、世間に知られる事があってはならない。

神秘は秘匿するからこそ、各々の蓋然性を持って世界が構築され、それを受け入れる者に力は享受される。

言ってみれば、ただ単に自分達の功績やら何やらが『より多くの』世間様から認められないのを知っているため、それぞれの都合のいい場所に篭り、囲って、それらからの被害を受けないようにしているだけだ。『より多くの』世間の間に住む以上、『一般社会での神秘の隠匿』は避けられない事柄なのである。またパワーバランスという物もある。核兵器はそれを運用出来る必要な国だけが持っていればいいのだ、うん（勿論、無い世の中である方がはるかにマシなのは明白だとジョウチョーなら言うだろうし、私も同感だ）。

そのために私たちは『人払い』、『記憶操作』を身に付け、『証拠隠滅』と『上位機関の圧力による報道抑制と操作』を使って、神秘と共に歩むのだ。

そのための手助けをしてくれるのが、師父というわけなのだ。弟

子の不始末は師の責任。甚だ申し訳ない気がする。むろん、死神にも頼めばやってくれるだろうが、今回は魔女間での独自の解決優先ゆえにあまり望むのも気が引ける。

「ありがとうございます」

「気にするな。マイ・シスベらッ！！」

皆まで言わせず、ジェット・リー様を彷彿とさせるような身のこなしで蹴りたぐる。方位磁石のNとSがひっくり変えるように頭と脚の位置を上下逆さにする色ボケ。着地した首が百八十度以上の角度で曲がっているけど気にはしない。さすが、治癒魔法の達者だ。身をもって弟子に示すのは師の鑑だ。

校庭の凸凹が少し増えたけど『元凶』がどうにかするので問題無いでしょう。

「ところで……」

今まで沈黙を保っていた獣が唸るように言う。

「……高校生で動物柄の下着はどうかとおもうぞ？」

嗜めるように言った国定は一人納得するように頷いている。

……あぁ、なんて言うんだっけ、このマグマが煮えたぎるような気持ち。

この際、はっきり言ってやろう、うん。

「どさくさに紛れてスカートの中を見るなぁぁぁ！！」

「たまたま見えただギャラブッ！！」

『熊の顔』を手で隠しつつ、ブルース・リー師匠を彷彿とさせるサイドキックは国定の喉にまともに入り、バカ師父と折り重なるよ

うに倒れ伏した。

……と、言うわけで、師弟のよしみと言ったものか？　事後処理は身体をピクピクと痙攣させて、いつもとは違った首の角度で応対した生羅師父に全てを任せて帰路に着く。

暗闇を駆ける獅子と鷹、そして馬の合成獣であるヒッポグリフに乗る、少年と少女。

ビルの密林よりなお高く、ビジネス街から新興住宅へ。そして、新しき住人の町並みから古い家屋の集まりである私の家までと至る途中である。

だが、飛行の最中、そこで一言だけだが、言いたい事がある。

仮にも今はどうあれ私より年上の男性なのだから、もう少し男性との交際が今で経験上まったくない私の事を考えて貰いたい事が一つある。

私は頬に熱いものを感じつつ、仕方なく顔を背けずに後ろに向かって言う。

「国定、……あなた、高所恐怖症？」

人乗せと言えばヒッポグリフと呼ばれるほど、飛行生物としてヒッポグリフは安定している。その胴体に跨りながら、鷹の如き相貌の横の、ライオンの如きたてがみを手綱のように持つ私に、ちょっと苦しいんじゃないかってくらい国定は必死にしがみ付いて、と言うか腰に抱きついている。子供の見た目の割に発達した、男らしい肉体は女の子である私をドキドキさせる。加えて口には出さないが、国定も見れない顔では無いわけだし。

「そ、そ、そ、そんな事ないぞ？！」

見る場所が無いためか、真っ直ぐと横目で確認する私の顔を見つめながら、蒼い顔をして不敵な笑み。メッチャ動揺してますな。

何だか、旋回したり、宙返りしたりしたいなんて言う悪戯心が溢れてくるけど。

「……あのさ、キツイ」

自らに流れる汗、ボロボロになったスカートやら制服は夜闇を駆けるたびにひらひらと揺れる。制服の代えってまだあったかなぁ？

とりあえず、これ以上しっかり後ろから抱かれても恥ずかしいので、少し憮然としながら言ってみた。

その言葉に気付いたのか、固くなった諸手を微かに緩める。

「スマン」

国定も何故か憮然とした声色。

ジワリと暑い夏が空を飛ぶ風で払拭されているはずなのに、少し、心地よいくらいの気持ちで日差しが暖かく感じた。

「運動して汗臭い事を気にしていたんだな」

「バ　カ　野　郎　、叩き降ろすぞ」

＊　　＊　　＊

－Ｓｉｄｅ　Ｂ－

「ほら、起きろ！」

路傍の小石ほどの気軽さで蹴転がらされると同時に意識が覚醒する。

在姫の暴力的な飛行、具体的に言うと七回ほどの宙返りで人事不省に落ちいっている間に、どうやら九貫の屋敷に到着したようだ。

「乱暴だぞ」と言ったところで人間性の解決にはならないだろうと思い、立ち上がるが……

腰が抜けていた。

「うわぁ、情けなぁい」と言いたげな視線に対抗するように気合で立ち上がる。

フン、在姫。君の思い通りにはならないぞ。

熱帯夜を予感させる空気に反して、冷たさを保った床に俺は伸びていた。感覚器官を遮断しても良いが、気配が探れない。でも感覚器官をそのままにすると熱いわけで……、とにかく、俺は床に伸びていた。

「疲れたからシャワー浴びる」

突然、肩にタオルを掛けた在姫が、微妙に間の抜けた状態の俺に声を掛ける。

かなり、恥ずかしい所を見られたが在姫は気にしていないようだ。……案外、在姫も同じ事をやっているのかもしれない。

シャワーと言うとアレか、西欧の逆式噴水の事か。

確かに多少怪我をしたかもしれない。汚れを落した方が身体に良いだろう。

肉体の構成を常に均一にする事の出来る魔人と違い、人の体はややこしい条件が多いな。

いや、勿論、魔人として生きるのにもややこしい条件はある……。

「承知した。長風呂は控えろ。身体に良くないからな」

「アンタは私を高血圧の爺さんか何かと勘違いしていない？　と言

うか……」
一拍、こちらを逡巡するように眺める。
微妙な間。恥らった、それでも怒ったような表情。
むろん、こう言うときの台詞は決まっている。

「覗かないで」
「覗かん」
コンマ一秒で棄却。
そんなことより魔術師の襲撃に備えろ。むしろ覗くくらいなら『実力行使』くらいはする。男だしな。
「そう言うことはもう少し……いや、酷だからよしておこう。色々と自覚したまえ」
と皮肉で返すと「ウッ」と自分が未発達な事はよく分かっているのか、渋い顔をする在姫。
まぁ、美人で十分守備範囲内だが、手を出すとしたらもう少し成長してからだな。
身長は縮んだ俺よりも指一本上か同じくらいだが、それでも百四十の後半に届いているのか疑問に思うほどだ。
女性としても魅力が、はっきり言うなら色気が足りない。巨乳白刃取りが出来るほどとは言わないが、せめて虚乳くらいからは脱却して欲しい。

って何を考えているんだ俺は……、相手は護衛対象だぞ？
第一に俺は……、まぁいい。魔力が少なくなったせいで少し飢えたのだろう。料理で少し補給するとしようか。
では、在姫の入浴中に料理でも作るか。

フム、御飯は炊いてあるな。冷蔵庫には鶏肉、卵、玉葱、……みりんと醤油、砂糖はあるな。では……煮干で出汁をとって、ワカメ

を戻して……、

「と、言うわけで、今日は親子丼にお吸い物を添えてみた」

「おぉ～」

風呂場から櫛で髪の毛を解きながら居間に来た在姫は、驚愕と言った面持ちでテーブルの上を眺めている。

特盛り用の丼二つに、御飯はどこぞの日本昔話で見るような山盛りとなり、その山自体は黄色と出し汁の混ざった卵の間に透けた玉葱と鶏肉に隠れている。

隣りには透った色の中に二点、緑のワカメと白い『ふ』が浮いている。

「勿論、つゆだくだ」

「……では、さっそく食べましょか」

いや、箸を持ちながら言うな。

「挨拶はしっかりしろよ」

「ＰＴＡのおばさんじゃないんだからオアシス運動なんか流行らないよ」

「礼儀だ」

意固地だが、ここは譲れん。

食事の中途を邪魔されてムッとした表情の在姫だが、素直に挨拶をすると俺は食べるように促した。

一杯目を食べ終えたところで二杯目の半分を食べかけている在姫がコッチをジロジロ見ているのが気になった。

「何を見ている？」

その言葉に戸惑うように「いや、その」と言葉を詰まらせる。そんな勢いで御飯を飲み込んで喉が詰まらない方が俺の場合は不思議なのだがな。

「だって魔人って魔力、もとい霊気装甲だけで生きているんじゃなかったっけ？　ってちょっと気になってね」

もしかして、

「食費が増えるのが気になるのか？」

「そんな事ないッ！」

炊飯器をチラチラ気にしながら喋られても説得力に欠けるな。

俺はおもわず軽く笑ってしまった。

「いや、食うな。と言えば食わなくても動くことは出来る。魔人はその性質上、人間とは同じ生身を仮に構成する事が出来ながら、存在を異とする生命体だ。霊体になればそこらの幽霊や亡霊と同じ様に、現実界に干渉する必要もないから霊気装甲の消費量も微々たるものだ。だが、いつともしれない襲撃のために厳戒に実体化していた方が効率がいいと思ったんだ。そのために、普段の霊気装甲の消費を抑えるために食事と言うエネルギー摂取をするのさ」

「ふーん、つまりエネルギーの摂取方法が他に何もないから食事というわけね？」

「まぁ、それ以外にも『緊急の手段』はあるが、そこまで切羽の詰まる状況でもない。とりあえずは食事摂取が好ましいな」

本当は食事と言うのは効率の良い手段では無いのだがな。一番は魔力を直接誰かから貰う事だ。

大喰らいはしばらく箸を口に咥えながら、それなら仕方が無い、了承とでも言うように頷いた。

そしてそれから暫く箸が進んで、ちょうど、在姫が三杯目のお代わりをしようと立ち上がったところだった。

――電話が鳴った。

ピタリと、双方の箸が止まる。深夜十一時近い、こんな時間帯に何者だろうか？

彼女の師父は連絡の必要はないと言っていたので、心当たりはない。とりあえず俺は頷くと、在姫はけたたましく鳴り続ける電話から受話器を取った。

ゴクリと在姫の喉が鳴る。

「もしもし、九貫ですが……、なんだ。ジョウチョーか」

ホッとするように壁に寄りかかる在姫。

ジョウチョーとは、あの眼鏡を掛けた長髪の女性、斐川　常寵だったな。女性のわりに鋭い目付きをしていた。確か、コチラを妙に気にしていたような気がするが、気のせいだろう。霊体の俺を見えるはずがない。

もし、仮に魔眼の類を所持しているなら、眼の周辺で霊気装甲の流動を確認出来るはずだ。彼女の眼鏡越しからは霊気装甲の確認は出来なかった。まぁ、あの眼鏡が錬金術師による一級の魔眼封じなら別だが、まさかそんな者が必要になるほど、常識外れの能力を持った人間がゴロゴロと身近に居ては溜まったもんではない。

「何どうしたの突然？　明日？　まぁ、予定を見ないと分からないけど……？」

と、思索をしていた俺を窺うようにチラリと見る。まぁ、現代に生きる魔女として、あまり人付き合いをあしらっては不自然なので不味いだろう、と俺は親指を立ててＯＫサインを出す。

「……うん、暇。暇だよ。あぁ、雑誌で見たツィンタワーの古書展覧会に行きたいの？　あ、私も幻の植物ブースに行ってみたいなぁ」

ツィンタワーとは朝に紹介されたあの高層建造物か。時代も変わったものだな。あのような、あまり高いところは苦手意識があるから昇りたくないのだがな。

「じゃあ、ホームルームが終わって、文芸同好会が終わるのは……六時だよね？　じゃあ、その時間まで植物ブース回っているから、六時半に北ビルの大ホールで……、えっ、大ホールってあそこだよ。吹き抜けで大きなシャンデリアのあるところの階。三十七階だっけ？　ホラ、髭面の市長が先週に非核都市宣言していた……あっ、思い出した？　そう、そこだから。うん、それじゃ」

受話器を置くと、手帳に予定を記す。

少し、意外と感じるところを述べてみよう。

「長電話はしないのだな」

「電話代が勿体無いじゃない」

話しより団子（食費）か。まぁ、納得だ。

食事後、洗い物を終えた俺は情報収集代わりにテレビを付ける。高名な量子物理学者が自宅で密室で自殺なんてぶっそうな特番のテレビを見ながら待っていると、歯磨きを終えた在姫がフラフラと戻ってきた。

「眠くなってきちゃった」

目を擦る在姫。君は五歳児か？

だが、今日の魔力と体力の回復が必要なのだろう。『治療魔法』は傷自体に粘土をくっつけるように出来上がった細胞などを補填するわけではなく、たいていは傷の治りを促進するものである。むろん、直す時は傷を治される側の栄養を急激に消費するのだ。在姫はいつも以上に腹が減り、睡眠も必要なのだろう。ちなみに手や足がまるごと吹き飛んだりした場合は傷を癒す『治療魔法』ではなく、魔力によって流素からまるごと手足を作り出す『再生魔法』などが必要である、と理論だけは達者な俺の上司から聞いた覚えがある。

二階に向かう在姫の後ろを俺は付いて行く。

「部屋の前は俺が守る。扉の外だが、もし何かあったら声を出せ」
「アンタが入って来ても声出すけどね……」
据わった目で返答。
そんなに信用がないのか？
別に過去に浮名を流した事は……、俺が『覚えている限りでは無いな』。

「……もういい。それじゃあ、おやすみ」
「ん、おやすみ」
一日の終わり。今回はこの程度の被害で済んだが、次はどうだろう。

部屋の中からゴソゴソとひとしきりベッドで体勢を整える音が続くと、続いて静かな寝息が聞こえてきた。
さて、俺も一度霊体に戻って霊気装甲の消費を抑えよう……。
本当は魔力の消費を減らすために寝た方が良いのだが、俺は寝る気はしない。

繰り返されるあの光景は――に過ぎない。抜け落ちた記憶の残り滓……。

狂うよりかは、幾らかマシだ――

俺はギリギリ、思考が夢想に回帰する限界を保った……。

06. 衆合（しゅうごう）（2／2）（後書き）

The all ends justified the means.

Therefore, I was dead, then I am body.

Provided he is saint, nobody commit guilt.

Ruin is nothing more than way to change an atonement.

07. 幕間　鉄囲線二（前書き）

全ての終わりは意味付けられる。
故に、私の死で、私が屍となる。
彼が聖者とするなら、誰も彼の罪を問わない。
破滅だけが全ての償いとなる。

07．幕間　鉄囲線二

這いずる。

惨めな姿、歪な体。足りない。足りない。

手足は緩慢、意識は混濁、そして時折断絶。ずるずる。

最悪だ。アイツは　人間　じゃない。悪魔だ。でも、悪魔は願いを叶えてくれる。でも、あいつは苦痛しか与えない。

なら地獄の鬼か？　屍徒か？　どうやら、私の思考は地獄に近づいたようだ。

だって、こんなにも、ボヤけた地面が、近い。

私は生き延びた。魔女の呪いは深刻なまでに私に痛手を与えた。

でも、私はあそこから逃げ延びた。ずるずる。

そのはずだった。両腕がつかえないため、矢を関節から引き抜いた口は血だらけで、眼鏡のない視界はボヤけて見える。ずるずる。

私の後ろをアイツが眺めている。這いずる私を奇妙な見世物の動物のように眺めている。

何故、私は這いずっているのだろう。負け犬、いや蝶になれない、醜悪な芋虫のように、惨めに私はただ手足で動く。ずるずる。

いや、大きな間違いを犯した、手足ではなく『胴体』である。顎を擦り、胸をひしゃげさせ、節々の骨の痛みを感じながら、地面を這いずる。ずるずる這いずる。

その遥か、私にとって遥

か後方には、私の手と足があったから……

「貴女、面白いですよ」

そんな私の姿を見ながら、ソイツは可笑しそうに、そして冒しそうに、声を殺しながら嗤っていた。

手足のない、毛虫のような、『だるま』のような、不恰好な私を見下す。

ただ『だるま』と違うのは私には立ち上がる足も支える手も無いと言う事実である。

誰だろう、七転八起などと気安く言った屑は。

そうだ。屑だ。死ね。屑、屑屑屑屑屑、ゴミクズ、屑。ゴミ。ゴメン、殺さないで、お願い。首を締めないで。死んで。私の代わりに死んで。生きたいの。ただ普通に生きたいの。だから、死んで、屑ども死んで。死にたくない、死にたくない、死にたくない……

「……あっ」

気が動転していた中で、初めて私は声をあげた。ソイツは私の背に足を乗せ、まさしく蹂躙（じゅうりん）をしている。

動かす胴体にはそれに抗う術もなく、水揚げされた魚のようにのたうち回る私。

『むりやり捻り取られた』腕と脚の生え際から血が痛みと共に零れる。

また、痛み。あの繰り返し。止めて。お願い。痛いのは嫌い。嫌い。嫌い。キライキライキライ。ごめんなさい。ごめんなさい、刃向かいません。もう噛みません。だから、叩かないで、蹴らないで。お腹に出さないで。いやだ、気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

そう言うと、意思のない偶像少女に近づき服の内側に手を居れて弄り、舌を淫らに頬に這わせる。

私の体が、もう一つの身体が軋む。涙を流さず、泣いて、軋む。

義体である少女の虚無を持った瞳はまるで絶望に満ちた私のようだ……

「劣等感ですかね？　貴女の醜悪な容貌に反して、この傀儡は精巧で、美しい。それでも牡豚の性欲を処理する程度にしか、ぜぇんぜぇん役に立ちませんね。『何処まで精巧に出来ている』のか後で確かめてあげますよ。その程度の価値しかありません。――貴女と同様に、ね？」

まるで、私の生き方、全てを否定するように、嗤う。

まるで、私の生き様、全てが滑稽だと言うように、犯すように、嗤う。

「でも……こんなのになるために、人生を掛けていたんですか？　貴女は、人としても魔術師としても無駄ですね。牝豚以下です。抱いて辱めてあげようかと思いましたが、残念ながら豚と交わる気はありません。くっくく、ぷっ、今の冗句、傑作じゃないですか？　豚が、豚が、ぷッ、がははははははははッ！！　ギャハハハハハハハハハハハハ！！」

私を打ちのめした……　もう、何かもがどうでも良くなって、生きる理由がなくなった瞬間、

「と、ご苦労様です。貴女はもう十分ですよ」

ゾブリと言う音と供に、胸の真ん中から、少し外れた場所が、ポ

ッカリ空いた……

心臓が取られた。夢が奪い取られた。

わ　た　し　は　死　ん　――

07. 幕間　鉄囲線二（後書き）

I'm the son of rage and tear.
Child from the story of none
of the above.
Wake me up when world will be
end.

08．叫喚（きょうかん）（1／4）（前書き）

我は嚇怒と涙滴の落とし子。
物語の外に生れしモノ。
世界が終る時に目覚めさせたまえ。

08．叫喚（きょうかん）（1／4）

七月二十二日

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

――昔の夢を見た

――

少年が一人の眉目秀麗な、若武者と対峙していた。

この武者が他の者とは違う事は、少年は何と無しに分かった。

警戒と言う言葉が脳裏を踊る。

だが、それでも少年に怖れはない。ただ一人、暗闇の山で山獣と戯れていた者。

人とは異にする意思。

相手の若武者は、額に巻いた白い布で長い黒髪は収められ、粗暴な武士とは違う、統一された雅な節が獣の眼からでも見て取れる。他の武士と比べて、明らかに小躯でありながら、その闘気は群を抜いている。

少年の手には大きな斧。鉞（まさかり）を肩に担いで、少年は武者と対峙する。少年の血塗れた粗衣は赤く滴っている。

ざあざあと傍で飛沫を巻く滝は水気で潤わせるが、少年の心はこの上なく乾いていた……

「――様、ご自重くだされ。ここは老い先短い儂（わし）にお任せくださいい」

その後ろからぬっと長大なアカイ色の槍を持った老人が出てくる。

少年は脅威を感じた。

何故なら今の今まで『そこに』居る事に気付かなかったからだ。獣の感覚を騙したのだ。

「坂田、我が部下の半数が手打ちを受けて……、私が黙っていると思うか？」

少年は再び聞いた若武者の涼やかな声を、はばたく直前の小鳥か何かようだと思った。

「――様、相変わらず戯れが過ぎますぞ」

「坂田、戯れぬ人の世など詰まらないぞ」

溜息と同時に老人は頭を振って下がると、若武者は地面に転がっていた木の枝を蹴って真上に上げ、それを持って構えた。刀と同じ構え。

少年は牙を剥く。棒切れで我が身に対峙する蛮行に怒りを撒き散らす。

「お前はいい獲物だ、誰にも渡さないぞ」

若武者の微笑に合わせて、何処からか赤い花弁が一片、風に流れる。

武者と重なった花弁は口に引く紅のようで、若武者を女性ではないかと思わせた。

自身と得物が風を纏い、二人は重なった――

「……暑ぃ～」

寝苦しさと暑苦しさ、その二つで私は夢のようなモノから覚醒した。

ちなみに言うと『暑い』の『つ』は『つ』でなく『ぢ』である。

本当ならクーラーをガンガン掛けて寝汗をひかせたいところだが、どうにも電気代が掛かって仕方がない。食費は元より、魔女を続けるには色々とお金が掛かるのだ。協会指定で正規の『違法ルート』

から色々な魔薬を仕入れたり、希少品の無料サンプルを取り寄せたりしなければならない（無料サンプルなのに配送料が掛かるあたり、協会は詐欺だ）。

「うーん、アゾート剣もそろそろ欲しいからなぁ。色々と節約しなくちゃ」

吹き抜けの階下では私がいつも使う踏み台を使って国定は朝御飯を作っていた。

階段を下り切った段階で国定はエプロンで手を軽く拭くと、テーブルに手際よく配膳していく。

「おはよう、在姫。今日は炒り卵に佃煮、キャベツに黒酢を掛けてみたぞ。味噌汁はワカメだ。加えて、御飯は新しく炊いておいたから炊きたてだ」

テーブル横の、自宅で常時付ける冷房器具、扇風機がこちらに首を振って垂涎物の匂いを運ぶ。

あまりの手際の良さに閉口してしまう。いや、実際はあんぐり開いているのだが。

こいつぁ、すげぇい。

「在姫？　どうした？」

「国定、うちにずっと居て」

そこ、しゃもじを落さない。

「き、君は何を言っているんだ」

よく知らない者同士でイキナリ同棲とは時代も変わった、貴族の悪習の復古か？　とブツブツ呟きながら動揺している。いや、そう言うことじゃなくてね。

「いや、便利だから小間使いとか執事代わりに居て欲しいなぁ、って」

その言葉と同時に目をお馴染みの『ー』の形にして眉根を寄せる。

「在姫、俺を奴隷か何かと勘違いしているだろう？」
「まさか～、都合のいい飯使い（誤字に非ず）ぐらいだとは思っているけど？」
「くっ、不覚。親切心も過ぎれば蛇足か、俺がそんなに苛めたいか、そんなにキライか」
「いや、私は国定は好きだけど？」

今度は茶碗を落した、って今私はなんて言った？！

「ち、違う、違う違う違う！　私国定料理好き」
私まで手をブンブン横に振って動揺してしまう。「私は国定の料理が好きだ」って言い直したいだけなのに！？　助詞が助詞が助詞名詞も名詞が動詞同士が……
「あぅあぅ」

そんな様子を見て逆に国定はキョトンとすると、したり顔と言った笑みを浮かべた。
「食え」
「食う」
ぶっきらぼうに、そしてその言葉に乗せられるように口を尖らしながら「いただきます」と自らに向かって宣（のたま）うと、目を合わせずに御飯をがっついた。御飯と同じ暖かさの頬が、やけに悔しい気持ちにさせた。
しばらくして、味噌汁を飲み込んだところで、起きたばかりでの部屋の様子を思い出した。
「ねぇ、私の部屋にあった洗濯物は？」
「洗ったぞ？　リビングの床に放りっ放しで気になったからな。ちなみに言うが、下着は回収してないし、見てもいないぞ？　まさか、昨日から同じのを穿いたまブッ！」
「昨日帰った時に穿き替えたつーの！」

煙を上げる拳とクソガキの額をを無視しつつ、ある可能性について考える。

もしかして……見られた？

「もー、なんで勝手に人の部屋に入るのさ！？」

「君は自己管理を必要最低限とりあえず出来るが、それでも面倒になると後回しにする気があるからな。そう言うのは個人的に非常に気になる故、整理させてもらった」

「いや、だからって、そんなに気になるなら勝手に入らないで一言声を掛けてよね！　仮にも女性よ、私！」

「何だ？　見られては気になる『モノ』でも部屋に置いてあるのか？」

その『モノ』があるから言ってんでしょーがッ！！　あるから！！　そんな「何かあるの？」って小動物が不思議なものを見つけたような顔をするでない！

まずい。『アレ』を見られるとマズイ。非常にマズイ。いくら劣等感があったとしても『アレ』はやりすぎたと思う。

おそらく、『アレ』の存在を知るのは『もしかしても』師父くらいのものだ。

「全ッ然、そんな『モノ』は微塵としてないよ」

朝から暑すぎるせいか、汗が止まらない。汗のワリにやけに冷たいが。

沈黙すること十秒。

「そうか、別に今の状況を困難にするような『モノ』でないなら止しとしよう」

そうそう、物分りがいいじゃない、と小さく息を吐く。

「ところで」

思わず、箸を取りこぼす。落ち着け、私――！！

「ななななな何？」
「ＤＪのスクラッチングではないのだから……、在姫は普段はキチンと自分から『カジ』をしているのか気になったのさ」
「カジ？　うちは陰陽道じゃないからそう言う呪いを扱ったことはないけど？」
「馬鹿者。それは『ち』に点々の『加持』だ。俺が言っているのは家の雑事である方の『家事』だ」
　あぁ、なるほどと納得しながら、テーブルの下に落ちた箸を拾い、テッシュで拭く。
「それぐらいはしてるよ。失礼な奴だな。第一、これまで料理、洗濯、掃除、他全部を自分一人でやっていたんだからね」
　ない胸（多少自覚はある）を反らしてみるが、相手は納得していないようだ。
「でも君がキチンと家事ができるまで監督をした人物がいるはずだろ？　魔女の家に一般人のお手伝いがいるように俺は見えないがな？」
「あ、そう言うこと。それは師父に教えてもらったけど？　料理以外をね」
「料理以外？」
「あの人、脳みそと全身に砂糖が行き渡れば生きていける人間だから」
　あぁ、と国定も、あの殺人的な甘さの、色だけが珈琲の名残を見せた飲み物を思い出す。
　食べる御飯の度に大学芋やら南瓜の煮物やら、何らかの甘い物が入っていて最後にデザートすら入るのだ。いや、量の配分から言ったらデザートが主食かもしれない。
　ちなみに私も女の子だから甘い物は好きだが、毎食キログラム単位で糖分の入った師父の食事は御免被りたい。私は若くして糖尿病で死ぬつもりは無い。
「おかげで、私は日常でお菓子は誰かがくれない限りあまり食べな

いし、師父の料理は参考にならないから殆ど独学だよ」
とは言っても、パティシエ並とは言わないが、さりげなくお菓子つくりが上手いのはナイショである。
「なるほど。ところで在姫、お椀を差し出されても無い御飯は無いことを分かっているか？」
……そうですか。仕方なく、私は渋々と茶碗を片付けた。

準備のために部屋に戻ると、『アレによる例の日課』をしていない事に気付いた。ここ数日は忙しかったため、ろくに日課をしていなかったからね。
「さて」
ゴソゴソと、口うるさい魔人にバレないように『アレ』を部屋の魔術結界を施した隠し収納から取り出し、壁にぴったりと据え置く。
喉が、ゴクリとなった。こんな事をするのも久しぶりだ。気になるのだからしょうがない、自分の価値観を位置付けるのに必要なことなのだ。
私はそれにしっかりと身を寄せると、静かに『ソレの一部』を動かして、合わした。

「在姫、入るぞ」

……エッ？

私の横では金属製の、一般的な目覚まし時計が規則的に歯車を動かし、秒針を進めている。外、私の庭先の木陰では小鳥が囀っている。
陽光はますます角度を鈍角から直角に近づけ、天頂へと昇りつめていた。

さて、そんな室内の様子は、白い壁に、白い天井。本棚には数々の言語から翻訳された魔導書が積まれ、テーブルには一般人にしてみれば、明らかに身体に悪そうな色合いの霊薬の実験道具が重なっている。

こちらを見ているのは超絶的な戦闘技術と身体能力を持っていながら高所恐怖症の魔人、国定　錬仁。

こちらを見られているのは昨日自分の戦闘経験と戦歴に、華麗なる勝利を初めて記した将来有望な伝統的美少女魔女（仮）、九貫在姫。

両者を比較すれば分かるとおり、私には『欠点はあっても弱点はない』人間だった。簡単に言えば、『弱みのない人間だった』のだ。

私と国定は睨み合っている。いや、睨んでいるのは私だけで国定の視線は私が背にする『ソレ』を『信じられない』と言うように眺めていた。

使用方法を考えれば、それこそ刹那の間に理解は出来たはずだ。が、『ソレ』は一般家庭にあるにしては、魔女の屋敷にあるにしても、てか、一般人が持っているにしてもおかしかった。似たような使用方法のモノなら他の家庭にあっても不思議とは思えないモノだが、それにしては『ソレはあまりにも場違いすぎたのだ』。

「なんで、家に『身長測定器』？」

なんだか……泣きたかった……

身長も変わっていなくて、もっと泣きたくなった……

「許してくれ、在姫」

いつも通り、高校まで至る神南駅まで揺れる電車には魔道書を読み込む『私』しかいない。

私の座る横から何やら喚く存在がいるようだが、私には見えないし、聞こえないし、答える必要も無い。

その存在は何やら答えを求めているようだったが、別に私は怒っていないし、謝罪を受けて彼自身が赦免を受ける必要はないのだ。

ただ、

「君が身長を著しく気にして居る事は誰にも喋らな……」

私は清清しく、その誰かの居る方向に向かって笑顔を向けた。誰も居ないはずのその場所を錯覚なのか？　血の引くような音がした。

「……話題にすら挙げません。俺は何も見てません」

「宜しい、では高校に着くまで減らず口をジップロックみたいに固めておきなさい？　分かった？　了解？」

「りょ、了解」

「ふん」

朝っぱらから泣き過ぎて痛くなった目を軽く擦った。……バカ。

坤高校は今日も至って平和そうな様相である。殺し合いのあった屋上では遠目でも分かる巨人の二人組がボォッと雲を眺めているし、突撃兵の破壊したグラウンドは陸上部の男子がタイヤを曳きながら犬とランニングしても大丈夫なほど整備され、矢の刺さっていたサッカーゴールは毎日サッカーの練習に勤しむバスケ部員が使用しても分からないほど綺麗に元通りになっている。

そしてチラリと見た弓道場、その空気が捩れて壊れていた。

「な、何？」

このおぞましいまでの殺気は？

思わずたじろぐ私。

殺気は殺気でも、むしろこれは人外などとも相対が出来る退魔師の『覇気』だろうか？　いや、これはどちらかと言うと研ぎ澄まされた、刃物のような『剣気』だろうか？　どちらにせよ。『見当は付く』にしろ、一般人のいる場所に似つかわしくない雰囲気だ。

「と、ともかく、行ってみろ、在姫」

同じく、それに気付いただろう国定が促し、私はその場所へと向かった。

「あ、あぁぁ」

『やっぱり』、私はそれしか声が出せなかった。いや、私以外の他の弓道部員や、殺気に巻き込まれた通行人は、その声すら出して

ないのだから……

具体的に言えばこうだ。

『袴(はかま)着た魔女がキレてらっしゃる……』

道場の前、板張りのゲタ箱前には一張りの弓があり、そこに仁王立ちをしながら、弓道着に弓の『弦』が当たらないようにする皮の胸当てをつけ、腕を組んだ私とは遜色の無いような小柄な女性が立っている。いや、仁王立っている。

さて、私の学校には私の知る限り三人、本当に魔女かどうかはともかく、魔女と呼ばれている人物がいる。

予言視の魔女、二年　千塚屋(ちづかや)　御彫(みほり)と、

可能性の魔女、一年　黒伏(くろぶし)　魅九(みく)と、

そして、今、弓道場の目の前で『ブチ切れ』てらっしゃる　弓道部の魔女、二年　葉桜(はざくら)　弓狩(ゆかり)先輩である。

怖れ知らずと言ったモノか？　私は『昨日の件』と関係があることを考慮して私は恐る恐る声を掛けた。

「あの葉桜先輩？」

「あ？」

な、なんか『あ』の横に点々のついた声だよぉ……。

私はそれに気圧されながらも持ち直した。

「な、何かあったんですか？」

「……あぁ、いや、君か。最近、国定に国内フェザー級王者も真っ

青なガゼルパンチみたいなボディブローした後輩の……、九貫　在姫だったかな？」

ジロリと横から「そうなのか？」と訴えかける視線を四方から（特に真後ろの肩辺りから）感じるが完全に流した。

「いや、あれは凶猛で被害妄想趣味な『副会長』との『口喧嘩』で国定先輩が詰め寄っただけなので、そんなの事実無根、清廉潔白ありえませんよ。幻痛ですよ」

「そうか。傷が痛むと言うので僕が診たのだが、指先で脇腹、その反対を拳で貫かれた傷痕があったが、あれはなんだろうな？」

チッ、流したかったのに。しつこい人は嫌われますよ、先輩？と言うわけでその『口撃』にカウンターを合わせる。

「葉桜先輩って『服の下まで』見せ合うほど、国定先輩と仲がよろしいんですね？」

うっ、と『痛い』ところを突かれた魔女は顔を少し、自らの苗字通りの桜色に染めながら動揺する。よし、ペースはこっちが握った。

「……ところで、そんなに怖ーい雰囲気なんか出してどうしちゃったんですか？」

話題が変わった事を暗黙の了解と取って、葉桜先輩は著しく真顔に戻ると、目の前の弓を人差し指で指した。

見たところ、弓道の心得のない私の見る限り、弓を握る部分を含めて全体がやたら太い事と、下の方に『弓狩』と名前以外は彫られて居る事以外は気付かない。いや、もう一つ気付くなら、『弦の部分がやけに血の飛沫（しぶ）いたように赤いこと』ぐらいだろう。

「あ」

何だか、小さな声が私の横から聞こえたが、幸い私以外には聞こえず、同時に私以外には何を小さな声が意味するか分からない。

これは使う弓を誤った国定を責めるべきか？　それとも証拠隠滅を取りこぼした師父を責めるべきか？

本当は師父を責めたいのだが、この場に居るのは国定だけなので、後で国定を罵倒しよう（言い掛かりとも言う）。

「誰かは分からないが、僕の弓を『ユガケ』を使わずに引いたらしいな、勝手に」

やたら語尾を強調して、弓を睨む葉桜先輩。ところで。

「『ユガケ』って何ですか？」

「あぁ、普通は弓を引くとき、矢の刺さる方、矢尻の反対には筈（はず）と呼ばれる溝があって、そこに弦をかませてからさらに弦を直角方向に捻って矢を固定させるんだ。その時、親指の付け根に弦の力が一点に掛かる。その力を安定させ、なおかつ技巧的に弦から【離れ】を得るために『弓』偏に『葉』と書いた皮の手袋、『ユガケ』と言う道具を使うのだが、私の弓を引いた人物はその『ユガケ』を使わずに引いたみたいなんだ」

どうなるのか、弓の引いたことのあるジョウチョーならいざ知らず、私はあまり想像がつかない。

「その道具を使わずに引いたらどうなるんですか？」

「さぁ？　女子が引くような弓、１３～１５ｋｇでも親指の一点、しかも柔らかい掌の側の一点に弦が食い込むからね。掌の皮が厚くても鬱血しちゃうし、僕のは普通の男子の引く弓の重さの三倍、いわゆる三人がかりで弓に弦を張る『三人引き』だからね。たぶん、血が滴るほど皮とかが切れたと思うよ？」

女子高生がそんな冗談みたいな弓を引くのも驚くが、それを素手で引く斜め後ろの魔人も驚嘆する。

「クンクン」

そして、その血の匂いを嗅ぐ魔女。……実はこの人は犬属性と言う奴だろうか？

「……しかもこの血、人間のモノじゃない」

その言葉で、心臓が凍った。

先輩、あなたは本当に犬ですか？

「なんだろう？　とにかく、人間には似ているけど嗅いだ事のない匂いなんだ、よ……？」

弓道部の魔女は私を見ると、スッとまるで瞬間移動のように私の前に移動して、私の前に立つ。背丈もそれほど変わらないはずだが、その気合のせいか、幾分か大きいように思える。

「クンクン」

匂いを嗅ぎ始めた。それと同時に先ほどまで近くにあった、ここ数日間でやっと感じられるようになった国定の微妙な気配がススッと離れる。

それが正解だ、と私は心の中で嘆息して、殺気の薄れて動けるようになった人たちは退散し、後から来た登校中の学生の痛い視線を感じつつ身を任せる。

ぐはぁ、目立ちたくないのに……

てか、年頃の女の子がこんな風にやたら近すぎるのは道徳上良くないです。首筋に埋めるように嗅ぐ姿は在らぬ誤解を一身に受けそうな恐怖なのです。

「クン……気のせいか？　君から似たような匂いがしたのだが……」

「たぶん昨日は血も滴るようなレアのステーキを食べたからですよ」

かなり苦しい言い訳だった。

「嘘をつくな。昨日は親子丼だっただろ？　九貫、嘘は感心しないな？」

コンマ二秒で看破すると、ニヤリとコワイ笑みを浮かべる魔女と呼ばれる女性。心臓は早鐘が堤防の決壊間近のように打ち鳴らすが、本当の魔女ならば、これにもカウンターを合わせるのである。今は本当は打ちたくないけど。

仕方無しに、なけなしのカウンターを打つ。

「そんなふうに匂いを嗅げるなら、夜中に出歩く【怪人（国定先輩）】の匂いで

も追ってみたらどうですか？」
「なっ？！」

私はニッコリと笑う。相手は顔を先ほど以上に明色に染め、それでも柳眉を立ててこちらを睨む。
再び、殺気の嵐が吹き荒れる。
しまったぁ――。今のはブラフだったか。でも、売られた喧嘩は買わなければならない。

九貫家家訓　その三
『売られた喧嘩五倍買い、復唱。売られた喧嘩五倍買い　ｂｙ愛媛』

通行人が凍る殺気で次々と金縛りに掛かる中、

「喧嘩しちゃダメだよー」

のっそりと、あるいはのっしりとでも擬音で形容すべき巨大な影が真横から、その暴風の間を割るように現れた。
独特の間延びする口語表現に、目の下の黒い『クマ』、やたら広い肩幅、白衣のような服を着込んだのは坤の有名人である。
「善通寺？」「会長？」
「二人ともー、仲良くしようよー」
生徒会会長だけあって、戦闘意欲を効果的に削ぐ声の調子は神業的であり、作為的に感じる。または人徳とでも言うのだろうか？
その声に乗せられて、周りで硬直した人々が邪眼から解けたように一目散に校舎へと逃げていった。

ふん、観戦も出来ない根性無しどもめ。見なさいよ。あそこの私と同じクラスの藤城君なんて……、未だ恐怖に身が竦んで動けないみたいね……

「他ならぬ、善通寺が言うのであれば僕は退こう」
「依存はありません。葉桜先輩ゴメンなさい」

ん、と短い返答。

――だが、彼女の敵意は薄れたはずなのに、今だ空間は捻れていた。

――殺意を向ける、奴がいる。

「会長、次の和木市自治連合会の会合事前会議までのお時間がありません。そのような下級闘争程度には割く時間の無い事を重々ご存知でしょうか？」

と、その真横からの冷徹な声は副会長の『アノ』女である。
冷徹さを強調する縁無しの眼鏡。凶暴さを隠すように可愛さをムリヤリ形作ろうとしているお下げ髪。私よりも、僅かに、『僅かに』高い小柄な体格と、それに反してやたらとドデカイ態度。それでも、てんで可笑しい事に私と同じ一年だと主張する胸元の名札。左手にはカッコつけているのか知らないが黒い手袋を嵌めている。切れ長の吊り上がった獣、ケダモノのような瞳。その奥には金色に見えるような――殺意。

その視線と、胸の内の牙が噛み合って、ギシリと本格的に、空間が暖めた千歳飴のように捻れた。
グニグニと熱湯と冷水を混ぜた水槽のように二人の間の景色が

歪む。

「あら、『小さ過ぎて気付きませんでした』。ご機嫌よう、九貫在姫さん、今度は葉桜先輩を巻き込んで、あろうことか会長の目前で『校内テロ』の準備中ですか？」

フフッ、先制攻撃ですか？

「ご機嫌よう、島田（しまだ）　燕（つばめ）副会長、あなたのような政権簒奪（さんだつ）を目論む、いきり立った上昇志向の禿鷹為政者と朝っぱらから顔を付き合わせるなんて終わり無い悪夢の欠片にも思いませんでしたわ」

地響きが何処ぞから響き、流れるような清清しい朝陽が校庭を照らし、その場で固まったままの藤城君は、今度は泡を吹きながら痙攣して倒れている。

乙女とアバズレの視線の間では文句無しに、容赦無く青天の霹靂もかく言う火花が散々と咲く。

この女は、私には合わない。そう、体が拒否反応を起こしている。本能とかそう言うものではなく、魂が嫌悪を抱いているのだ。

この女、島田　燕は私に合わない。戦場で背中を見つけたら敵だろうが、味方だろうが、一般人だろうが真っ先に撃ち殺したくなるタイプの嫌な女だ。有名無実な、死神が殺すために使うと言われる死のノートがあったら、六十ページ以上を改行無しに死に様を埋め尽くしても飽き足りないだろう。

「喧嘩は止めよーよー」って声がどこからか聞こえるが、そんな事で収まるならいざ知らずと言ったところだ。『濡れ衣』を以前から着せられているのだ。誇り高い魔女が校内テロなどと言う暴挙に手を染めるはずが無い。

「平行線でも『歪んだ』平面上なら交わるって知ってますか？」

私の言葉に的を射たようにニヤリと口の端をこころもち上げる大敵。三枝先生の授業を受けているだけはある、どうやら話は通じるようだ。

「ガウスの非ユークリッド幾何学ですよね？　それが何か？」

「さぁ？　平行線の決着をつけるには時に『歪んだ』状態も必要なんですよ？」

チリチリと髪の毛の芯に響く音。魔女の心臓に鼓動が始まる。無意識の内に人払いの魔術にも似た雰囲気でも出していたためか？その場には話題が急に変わって付いて行けずに何処となくいじけている葉桜先輩と慌てふためく善通寺会長、憎き宿敵と少し離れたところに「好きにやってろ」って感じの国定（と完全に気絶中の藤城君）しか周りに居ない。

ここで、化けの皮を被った獣を仕留める！

腰の発射台に拳を据え、体重をやや後ろに掛けた空手構えは坤高校副会長の遣り手、いや今だけは『槍手』の島田　燕。

対して顎に拳をそろえて体重を前に掛けた、師父直伝の『紳士と淑女』の古イギリス式ボクシングスタイルは私。

ちなみに、古イギリス式ボクシングと言うのはつまり喧嘩殺法の事である。突き、蹴り、投げ倒し、頭突き、噛み付き。ヴァーリトードで紳士淑女な世界だ。

どちらも拳の届く範囲内だが、度重ねる踏み込みと視線のフェイントは中々決着をつけようとしない。

それはバズーカを互いの目の前で、引き金に指を掛けながら勝機を見る行動。

しかし時は重ねる。雨だれから水滴が零れるように、善通寺会長が「もう止めようよー」と七十七回目に言った時、自然に同時に踏み込んだ。

「燕ちゃん、喧嘩はダメ」
「在姫、そこまでにしろ」

私と島田　燕、二人の拳は何時の間にか割り込んだジョウチョーの掌によって完璧に、力を吸い取られたかのように止められ、それでも捌き切れなかった島田　燕の踏み込みを、背後から疾風、いや迅雷のごとく駆けて、後ろから抱き止めた女性によって止められた。

「えいねるお姉さまッ！」
「ちっ、いいところだったのに」
これまた『前回』と、国定先輩が巻き込まれたのと同じ状況である。唯一違いがあるとしたら、『誰も怪我人が出なかった』事だけだ。
助けた側にも関わらず、やたら会長に頭を下げている、普通、だけど変な先輩は頼島（よりしま）　えいねると言うようだ。
平平凡凡、並盛、普通定期。そんな言葉しか浮かばない、やたら外見の印象の乏しい女性の先輩。島田燕と比較するなら、悪逆非道な肉食動物に対して略取とか悲恋とか常に不幸を全うする草食動物のような、そんな女性だ。
どうも島田　燕の『ロサ・何とか』様、つまり憧れのお姉さまのようだ。島田　燕は豹のように鋭かった瞳から、借りてきた猫のように大人しくなってやがる。
なんつぅ変わり身の早さだ。やっぱり嫌な女だ。いつか化けの皮を三枚に下ろして剥いでやる。

「善通寺さん、遠吠、じゃなかった、えっと……携帯で、とにかく連絡していただいてありがとうございます」
「気にすることないよー、いつもありがとねー、えいねるさん」

確か、携帯は校則で禁止だった気がするが、島田　燕の弱みを握るために、ココはグッと黙っておこう。私って……策士だ。

「いぇ……　で、燕ちゃん。また、お友達の在姫ちゃんと喧嘩したの？」

「お、お姉さま。私、我を忘れてしまい、お手数を掛けてしまいました、……が一言言わせてもらうと断じて、二度も言いますが、目の前の女は断じてお友達などでも、知り合いでもありません」

「え？　そんな、だって、私と燕ちゃんみたいな仲良しでしょ」

「まさか！？　それこそ天変地異が起こって、黙示録が実現して、アンゴルモアの大王が十四連続に繰り下げで落ちて、牛野屋の牛丼のネギだくが解禁になってもありえないことです。それに……　お姉さまと私は友達というより……」

頬を桜色に染め、視線を僅かに逸らしながら頼島先輩をチラチラと見ている凶猛な、いや知ってはいけない世界に『狂盲な』島田燕。

頼島先輩は困って……、泣いていた。

こ、これも……、弱みか……？

どちらにしろ、とりあえず、場もまったり和んで来たので、

「……んじゃ、ＨＲ行こうか」

退散することにした。

「待て、実行犯その二」

グワッシと私の後頭部を鷲掴むジョウチョーの手。それは地面を掃く私の健脚を持ってしても一向に進まない握力、微妙に私を浮かしている筋力。あなたは花山組長さんですか？

「善通寺会長並びに関係者に朝から面倒を掛けた非礼を詫びたまえ、特に痙攣を起こし始めて保健室に運ばれた藤城君にもな」

「善通寺会長、葉桜先輩、頼島先輩、そしてひきつけを起こし始めた藤城君、ごめんなさい」

「――貴様、私に非礼を詫びぬつもりか」

やたら鋭く見える犬歯を噛み鳴らす獣の如き女。
謝る気など期待していたのだろうか？　はっ、バカな女。

「元はと言えば貴女の方から牽制を仕掛けていたのに、責任転嫁甚だしいですね。失礼、転嫁なんて全国にいる健全な『花嫁』さんに対して失礼でした、ホホホホッ」

唇を噛み締めて、憧れのお姉さまの前であるがために何も出来ない島田　燕。
私の斜め上辺りでは今日で何回目になるのか分からない『憑き人』の溜息が聞こえる。

さて駄目押しに「頼島先輩に迷惑だからとっとと離れて、神南高校に転校したら？」と最後に『色々な含み』を込めて言ってみよう。
まぁ、微妙に言い過ぎかもしれないけど。

そう言い放とうとした私の肩を、眼鏡を光らせながら、ジョウチョーはそれに続くはずだった言葉を止めた。

「在姫、そこまでにしておくんだ！　これ以上の諍(いさか)いは御免被る。我々は学校と言う教育機関に来るために何故にこのような争いと諍いをするのか？　人類皆平等は未成年の幻想の中『だけ』の特権と産物だ。だから謳歌しようぞ、この小さな世界を。これ以上何を争う理由があるというのだ。否、断じて否。良いか、巨視的に見れば、そう、大宇宙の大いなる中点からすれば我々などちっぽけな、塵芥に等しい生命体に過ぎん。我々からすれば微生物など小さな存在だが、刮目せよ。この大いなる大地に立つ大地が如何にちっぽけか。天空にある恒星よりも、それが認識すら出来ないほどこの大地が如何にちっぽけなのか。その天空の巨星を巨大な蒼穹(そら)とそれに続く宙(そら)が如何に比べてちっぽけか。ちっぽけだ。あぁ、なんとちっぽけな

ことか？　天と比べれば、点にしかならないほど矮小すぎて呆れるほどの五分の魂だ。だが、我々がちっぽけな中でも更にちっぽけな小人なのだ。それ故に、全てが覆る。未成年だけでなく特権的に、普遍的に、広義的に、例外なく持ちゆるのは『意志』だ。その意志を何故わざわざ非建設的な騒乱行為、残虐的な行為へと何故に斯き立てる。それは悪なのか？　私達の内部構造にそれは存在するのだろうか？　人の本質たるモノ、根幹、起源は『悪』なのだろうか？

美点は何処に消えた？　我々に持ちゆる意志は崩壊と摩擦と拡散を繰り返すのか？　熱量力学第二則が精神界すら侵蝕するのか！　馬鹿な！　ならば、我々は何故ここに立つ。そうだ！！　ここで覆るのだ！　我々は！　長き積み重ねた歴史が破壊と言う『悪』を否定する！　積み上げた歴史が悪を凌駕、悪を駆逐する。散逸理論ではない！　君も、私も、貴女も、僕も、全てはここに立つと言う事実だけで全てが成り立つのだ。私が存在すると言うだけで悪と言う前提が覆される！　積み上げてきた歴史が破壊と言う悪そのものを、私達の存在自身に因って軽々と否定するのだ。だが、それを読み取る認識はどうだ？　誤解を何故に続けるのか？　我々の脳は正しく見ているのか？　脳が、箱の中の鏡である脳が現実と認識した出来事、いや、全てのモノゴトは正しいのだろうか？　私の見ている色は本当にその色をしているのか？　聞こえている音は空耳ではないのか？　何処までも続く草原はただの夢（幻想）で、その香りは偽りなのか？　唇に残る感触と舌に感じた相手の味は何だったのだろうか？　指先で撫でた自らの肌は牛肉のパックと成分と更に何処がどう違うのか？　正視、正聴、正嗅、正味、正触、五戒を持って偽りより解き放ったれよ。第三の眼を持って正しき世界を認識せよ！　そうだ、思い出した。それはデカルトと仏法の八識が簡潔な答弁をする。そうだな、デカルト曰く、『我思う、ゆえに我あり』と定義した。『当然だ』と誤認をそこでするな、思考しろ、研鑽しろ。あらゆるモノを仮定と論理で筋立てろ。深淵な推察をするだけなら、あらゆる証明と、あらゆる過程と、あらゆる方法で『自分と言う存在』が本

当にあるかを確かめ、それが証明出来なくとも、『疑う事を続ける自分はある』と言う事だ。深淵の縁で迷いかけた時にそれだけが真に正しいのかもしれない。つまり、『疑う事を出来る自分は真実だと当てた』のだ。更に付け加えるなら仏法を要約した般若心経から『空即是色』と……」

「在姫、どうしたらいいんだ？」

そう幾分か、潜めている時より大きな声で私に語る国定。

周りには、私と国定と演説スイッチがピタゴラス的に入ったのトリップジョウチョー以外、誰も居ない。

「……行こうか」

何処か、違う世界に飛んでしまったジョウチョーを『私たち』は放って置いて、そのまま訳の分からない段階に達した演説は誰にも聞かれる事なく、そのまま四十分ほど続いたそうな……、当然、遅刻だった。

ちなみに、普通は怒るはずだが当の本人は全然気にせず、何か言い切れた事が嬉しいのか？　晴れ晴れとした顔でジョウチョーは二時間目に重役出勤してきた。

昼休みの屋上。階下に見える弓道場からは魔に属するモノなら分かる霊気装甲の弾ける音。それと共に一般人でも分かる、鉄塊がコンクリートを打ち付ける異様な旋律が支配している。

おそらく、自分の弓を勝手に魔人に使われて怒った魔女が、射に熱を燃やしているに違いない。ちなみに、私が弓道用語に詳しいのは、新入生の当初に仲良くなったジョウチョーが体験入部したからである。三年生からの熱烈なアプローチ（例の魔女以外）を受けながら、それを蹴って正統な部活動の『文芸部』ではなく、あの坤歴

代変人の一人　戸上　七歩、もとい大師の息子、私の義兄にあたるらしい人が作った『同好会』の『文学部』に入っている。ちなみに私は大師の死の直前までは戸上　在姫と言う性だったが、生羅師父が引き取る頃に元に戻したのだ。ちなみに、あの頃の大師の家での事は……　色んな意味で、思い出すのを躊躇われる。

……話しを戻すと、ちなみに文学部員、もとい『文学部』は二名。一年の『自称非体育会系文士』斐川　常寵と、何故か金髪なのに髪型がちょんまげで語尾が『ござる』の英国帰国子女、ただ今色々な事で傷心旅行中の『自称蒼い瞳と硯（すずり）の何故か似合うの部長』　三年　黒未（くろひつじ）　吾翻（あほん）だけで、目下壊滅中である。いや、その部長すら居ないのだから、もう瓦解したかも。

と、これを言うと珍しくジョウチョーが不機嫌になるので止めておく。あの二人は仲が良いけどやっぱり恋仲なのかなぁ？

何だかどうでもいい事を思い出しながら、屋上に職員室から失敬して作った合鍵を掛ける。前々から取っておいてある私の髪の毛を結んで、さらにそれを編み込んだ縄で屋上をグルリと囲み、私が幾つか知るうちの『魔術』、『人払い』と『普遍』の結界を掛ける。

結界とはその名の通り、場を区切る『結ばれた、閉じた世界』、つまり『異界』である。『人払い』は文字の通り、人を寄せ付けない『異界』を作り出し、『普遍』は私が以前幽霊の大群に囲まれた時に使ったようなもので、結界内の『異常』を外に知らせない結界を作り出すモノだ。

「あ、在姫？　本当にやるのか？」

こんな大掛かりな事をするのは訳がある。

――五分前――

たった二人、昨日の戦闘を踏まえた屋上での魔人との一幕。
片手には国定が早起きして作った純和風のお弁当。
しかし、その穏やかな日常を、製作者本人がぶち壊した。

「在姫」
「何？」
「昨日の行動を見る限り、君は本当に魔女なのか？」
「……上等」

以下、モノローグ終了。いつもながら直情的かつ、短絡思考なのは否めない。が、挑戦を受けた以上はそれに答えるしかない。
母が『アノ場所』に行く前に教えてくれた数少ない教え。

無論、九貫家家訓　その三である。

あぁ、そんな言葉を残され、あの大師に教育され、そして期待に応えてしまった私を誰か罵ってください……

「挑発にあっさりのる君は馬鹿か？」
「見てろよ。コノヤロウ。あっ、と驚くんだから！」

もう、どうでも良くなって来ました……

私の召喚術は通常は刻まれる陣を使う必要はない。自らの血、九

貫の代重ねをした血脈自体が既に身体の中に巨大な『魔方陣』として形成、圧縮され、血の『魔方陣』と『純度の高い血の霊気装甲』が瞬間契約を作成させる事が出来る。魔法使いには出来ない、血脈を重ねた魔女だから使えるトリックだ。

だが、今回の召喚は以前に行なった、風霊種に属するヒッポグリフの簡易召喚とはワケが違う。

召喚とは魔道の奥義の一つであり、素人が迂闊に手を出してはイケナイものの一つである。

召喚は前述の通り、ムリヤリアポをとって、在り得ざる者どもを使役する乱暴な術なのだ。乱暴な言い方だけど、科学も似たようなものだ。何処か、ここで納得しろ、と言った線引きがしてあるのだ。それが世間の常識か、怪異の常識かの違いだ。

むろん失敗すれば、魔方陣によって作られた『門』に『私』と言う概念が『あちら』に持っていかれたり、召喚されたのが気に入らない種による『報復行動』や、魂魄と流素の結合失敗の逆転作用、まんま『大爆発』をしたりだってありえる。

そのため、十分な霊気装甲と『異界に飲み込まれない強固な意思』が必要な召喚術は一回でも使えるだけで魔法使い合格だろう。

しかし、私は魔女であり、それに特化した『召喚士』である。召喚を専門とする手前、『合格点だけでは満足できない』。

「Ｈｉｇｈｅｓｔ ｌｏｒｄｓ ａｒｅ ｇｌｏｒｉｏｕｓ ａｓｔｅｒｉｓｋ. Ｓｗａｙ ｏｆ ｍｏｍｅｎｔ，ｔｗｉｓｔ ｏｆ ａｉｒ，ｓｅｅ ｇｒａｍｓｉｇｈｔ，ｉｍａｇｉｎｅ ｔｈｅ ｔｒｕｔｈ，ｔｈｅｎ ｎａｍｅｌｅｓｓ ｅｎｔｉ

ｔｙ　ａｒｒｉｖｅ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｒｅａｌ――（至高神群は燦然たる星辰。時の揺らぎ、空の歪み、異を持って視、理を偽り（ことわりいつわ）、そして名も亡き名によって汝らが身を現せ――）

魔女の心臓の鼓動、右心房、右心室、左心房、左心室の流れとは違う、力のうねり。血管を焦がすような感覚が全身を支配する。この間の戦闘のようにただ流すだけでなく、その流れを律する。熱とも流れともつかない力、それを自分でアルメデアゥと呼ばれる特殊な儀式用、製法は乙女の秘密、の粉で描いた四万三千九百五十六のエノク語の魔法陣に直接、血液として落す。

門を開ける近い世界で、単体の魔女だけで開けられる門の異界は五つが確認されている。

ノーデンスの名によって治められる　炎界　　火
イタクァ　の名によって治められる　風界　　風
クトゥルフの名によって治められる　深界　　水
ニグラス　の名によって治められる　孕界（ようかい）　土

そして、それらの上位に属する最高の異界、無境を治める万界の王、アザトースの空を持って四界一境を持って完成されるのが五大素式霊素置換法術式、召喚術なのだ。

これ以外にも『世界』は確認されているが、それはよほど極端なまでに専門化しているか、その世界を知らない限りは契約を取り付けるまでが難しい。特に何とかと言う異界の、人を食う『騎士団』。彼らを例え偶然でも召喚できたら私は尊敬どころか五体倒地して、その後にバニー姿でリンボーしたって良い（行動に大した意味はない）。

頭の端でしていた下らない想像を打ち消して、最後の一節を詠う。

「――I summon thee from another universe in Azathoth' name. Derive and repeat, whole five those!（――我はアザトースの名に於いて無境より素を呼ぶ。出で、そして再来せよ、四躯一心群！）」

唱え終わる瞬間に、指先を指した針からルビーの粒のような血液が指先から零れ、

それが撃鉄となり、

不思議な光を放つ魔法陣の上に落ちた。

それが引き金となった。

魔法陣から通じて私の魔力が奪われる。等価交換の原則によって、身体の火照りが冷水を浴びせられたように失せて、見えない門が開く。

門と言っても視認できるものではなく、ただ『なんとなくそれが開いたかも』と言う憶測にも似た感覚だけだ。

でも、それと同時に人体の自然反応によって目が閉じられる。流素と『門』から呼び出された『霊素』が融合する励起光が超新星の爆発のように放ち、あまりの巨大な質量の出現によって、『轟』と風が唸りを挙げる。同じ霊である魔人の国定はどう見えるのか気になったが、どうせ「普通だ」としか答えないような気もした。

そして、眼を開けると、そこには一人の女の子が居た。
「な、なんと……！」
ちなみに、これは国定の声。
黒絹の髪、白い肌に、桜色の唇。坤のセーラー服。
後ろでまとめた髪の毛を揺らし、
「「どうよ」」
ついでに言うと声もタイミングも同じで、まさしく私に『そっくりだった』。

「「大禁呪一歩手前の秘儀、自己召喚もどきよ」」
口調も被っていた。
「なんて……、まさかドッペルゲンガーとは……」
恐れ戦き、同時に感心するように眼を開いたまま、腕を組んでコクコクと頷いている男の子。
「「自分と同形質の存在を呼び出して、感覚同調、流素で固着させ、使役しているのよ。まぁ、感覚も思考も共有しているから単体としての私を作成しているわけじゃないけどね。異界から自分と同じ存在を引き出す秘儀なんて師父も知らないだろう、私のオリジナルの魔法よ」」
フンとない胸を反らしてみる私。
「魔法使いは自らの魔法は明かさないのではないのか」
「いいのよ、この際、あんたを納得させられれば」
呆れるかと思った国定は、「あれ？」と突然一言言うと『もう一人の私』に近づいた。
「「な、なに？」」
同調した感覚越しに見える国定。

フニ

指先が、禁断の領域を侵蝕していた。
「やはり。うわべの服装だけで中身、もとい『パット』などまでは再現出来ていなかったようだ……な？」

――私はどうやら、唇の形から笑っている事が分かった――

素敵な英国式殺人術の時間。
爪先、拳、拳、肘、膝、投げ、さらに踵！！

次の瞬間、『前後』からの連続攻撃が国定を屠殺した。

好奇心などと持ったが故の蛮行と行為者の抹殺。

胸とか、特に気にしていたのに……このッ、バカッ！

「うーん、今日も天気がいいな……ぁ？」

そんな不可思議空間の中、突然の闖入者。

晴れ渡る夏晴れ、真綿のような入道雲は空高く、日差しはそれでも強い。
その空の下、頭から致死量並みの血を流している少年と、まったく同じ格好と顔の女の子が息をハァハァ言わせながら二人……

私もこの人の名を覚えている。学校にいる、私の知る予言視の魔女の友人。

坤高校の二年生　少し長めのツインテールの可愛い先輩。眞木（さなき）愛彩（あや）。

「ど」

私の完璧の結界を当然のごとく破って、何を言い出すのかと思えば七音階の最初だ……、って現実逃避している場合ではない。

「「あの？」」

とりあえず、エコーとかユニゾンしながら二人の魔女とそのドッペルちゃん（仮称）で近づく。

すると愛彩先輩は、フッ、と悟ったように、「なんでこんなのばっかりなのかなぁ？」みたいな顔をすると、静かに、無言で戸を閉め、すごい音をたてながら階段を下りていった。

「ど、ドッペルゲンガ――――――――ッ！！」

しかも叫び付き。

あぁ、何だか、二人分泣きたくなってきた。

実際、泣いていた。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

結局、何処をどのように逃げたのか？　先ほど目撃された少女は見つける事が出来なかったようだ。

在姫は「やっぢまったー」とやたら動揺しているが、俺個人としては一人くらいの目撃なら闇から一般社会への支障は少ないかと思われる。

実際、日本には戸上とか言う、あの奇特な作家が恐怖新聞だか、何だかみたいな、人外との交流を事実の体験記として書いているようだが、現状では書籍の売上以上の社会的影響は特捜室では確認してない。まぁ、個人的には、あのような『真実を書き過ぎた作品』は時として『幻想を壊す』。

適度に話を捻じ曲げて美化した方が民話や神話同様に信じられ易く、それらしく映る。

例え、それが話を描かれた本人の意思と、事実とは違っていても……

「……はぁ、もういいや。落ち込むのは止め。ほら、ツィンタワーに着いたよ」

バスから降りて、暗い空気を吐き出した少女はいつもどおりに俺に澄んだ瞳と笑顔を向けた。そうだな、君らしくしていた方が俺も精神的な負担が少ない。

人込みも多いからブツブツと独り言も嫌だ、とごねるので霊体から実体化している俺。むろん、バスから降りた後である。料金が払うのがそんなに嫌なのか？

そして、その手を掴んで、制服の少女が喜び勇んで引っ張る。

本来は制服のままのお遊びはイケナイと俺は個人的に思うが、目前の彼女の格言では無いが、この際どうでもいい事である。

ちなみに今日は黄色いタンクトップの上に、チェックの半袖のTシャツ、バミューダパンツ、バスケットシューズと夏らしく、適当にお子様がお遊びをしていても違和感のない格好にしてみた。
おそらく、この体格からすれば弟か、……まぁ恋人と言う線も有り得るかもしれない。
彼女を見つめる視線の先、夕暮れのビジネス街を統一色の人間が交差する密林の中、その建物はあった。

一歩離れた、田舎の風情からはトコトン離れた工学的な、圧倒的な金属構造体。

正式名称、季堂総合文化ビル、通称は季堂ツィンタワー。六十階建ての地下には関東の都内まで直通の、超電導磁気浮上式リニアモーターカーの実験施設兼、十年後に完成目処の駅。その上の地下六階から十階までは地元の総合デパート『ニャスコ』と対抗する総合店舗群『バットモール』、二十階の途中から二つに分かれて、三十五階までが総合ビジネスビルディングで、三十五階から四十階は大吹き抜けとなり、イベントホールとなっている。四十一階から五十五階までがホテル『黒羊（ムートンノワール）』で、それより上は季堂総合商社、いや、季堂財閥の関係の専用階層となっており、一般人は入る事は叶わない。
「ほら、いつまでエレベーターのボタンを見て、ボーっとしているのさ」
まさかガラス張りのエレベーターとは聞かなかったからだ。そこに意識を集中するしかなかったのだよ。
四階ほどの高さまで吹き抜けのスロープとその横に広がる展示場、その上には豪奢なシャンデリアが吊られている。スロープの途中には大道芸をするピエロやら、バナナの叩き売りなどをしていて訳の分からない状況だし、シャンデリアが落ちてきたら大変だろうな、なんて下らない戯言を考えながら壁際を伝いつつ、俺は在姫の手に

曳かれている。
「今は五時だから待ち合わせの時間までは余裕があるな。で、何処を見たいんだ？」
エレベーターの横に備え付けられた無料のパンフレット。それを片手に、立ち止まって眺め始めた在姫は悩んでいた。
本当は護衛をする立場上、目立つ所への外出は避けたかったがこの際は仕方がない。いや、むしろ、人目があるのは好都合かもしれない。魔術師など、この世の理の外に身を置く者達はその性質上、その姿を世間に見せたがらない。世間から、いや、より多くの人々の常識から駆逐されないために、隠遁と沈黙と言う殻を被るのだ。いくら、魔女の心臓を求めて派手に動くと言っても、人目がある以上、派手な動きはしないだろう。
「そうだねぇ。植物ブースはさっきチラリと見たけど、目ぼしそうなのはなかったから……」
目ぼしい、って、『天然記念物を買うつもりだった』のか？　何を考えているんだ、この魔女は……
「あ、日本の歴史展でも見に行かない？　交霊武装の参考になるかも知れないし、ね？」
結局は本職（魔女）と一緒くたになるのだな、と口の先で止めておいて同意した。

「在姫、やっぱり……、止めにしないか？」
「えっ、何で？　さっきまで喜び勇んでいたのにどうしたの？」
訝しがるように眉根を潜める在姫に、俺は「別に喜び勇んではいないが……」と淡々と続けた。
「事情が変わったんだ」
今回の展示物の内容は『――歴史の影に隠れた民、日本の鬼・展――』と掲げられている。

「？　なーに、もしかして鬼が怖いの？　高所恐怖症で、さらに鬼恐怖症なんて冴えない男ねー」

誰の物真似かは知らないが眼を『ー』の形にしているのはやたら腹が立つ。

「別に鬼が怖い訳ではない。率直に言って『嫌い』なだけだ。一言言っておくが対鬼戦闘は俺の特技の一つだぞ」

人から離れた存在、それでありながら意思を持ち、身体を持ち、人と拮抗しようとしていた者達。鬼。

社会不適合者でありながら同類で群れる者ども。孤立しながらの集合体。

彼らだけの持つ楽園。そう、『楽園』。

俺の全てが、『それ』を、否定する。

脳ですら忘れた記憶でも、身体への拒否感として残っているのだろうか？

楽園なんて……

「嫌いなだけだったら、別に見てもいいでしょ？」

どうやら我侭魔女はどうしても行きたいらしい。

「分ぁった。分ぁった。そこまで言うならお供しますよ。いざ、鬼ヶ島に……」

両手を掲げて、降参ポーズの俺を再び、魔女は引っ張って行く。

乱暴だ。

……それにしても、男性経験の無いと自称する在姫の小さな手を俺みたいな穢れた【魔人】が、触って良いものか。

俺は真剣に、悩んだ……

＊　　＊　　＊

－Ｓｉｄｅ　Ｃ－

ツィンタワー地下二階　駐車場。そこには一台の、サイドドアが

羽の如く上に向かって広がるガルウィングで有名な、黒のランボルギーニ・ディアブロＧＴが鎮座していた。八十台限定のはずの高級車だが、そんな事よりも中に乗っている面子の顔ぶれは、その違和感よりも遥かに異常だった。

助手席には全身を、口、鼻をを含めた頭部すらも黒タイツのようなモノで包んでいる、痩せ過ぎの男が座っていた。タイツのように見えるが、絹のそれよりも遥かに頑丈な繊維で出来ている事は不気味な光沢から想起される。ゴーグル状のサングラスはピタリと、眼球を密閉するかのように嵌め込まれている。男はそのタイツ越しの口辺りから、葉巻の紫煙を吸い上げ、肺に満たし、首を横に一定のリズムで気味悪く動かしている。年齢は不詳としか言い様が無い。ノッペリとして顔の無い状態にほぼ近い、低い鼻から紫煙が首に揺られて出るのは中々シュールである。

その肝心の運転席には、持ち主であるにも関わらず、その席に窮屈そうに押し込む三十代の男がいた。地味な長袖のＴシャツにジーパンはＬＬ、いやそれ以上のサイズである服のはずだが、その殆どが収めるのに苦労しそうな程の肉体である。男は、頬を揺らしながら、美味しそうにドロップをしゃぶっている。百七十ｃｍほどだが、体重は百ｋｇなどとっくのとうに越しているだろう。その証拠に車が横斜めに異様に傾いていたし、腹筋に力を入れたらハンドルが潰れてクラクションが鳴ってしまい、下手すればエアバックが作動しそうだ。

「……時間では、ないだろうか？」

その風体からは想像も出来ないような張りのあるバリトンヴォイスが運転席の男に渡される。明瞭な音は感極まって舞台男優か、堂々とした識者とも思われる。男はそのどちらにもなれたが、今はどちらでもなる事はなく、ただのイカれた魔術師である。

「そ、そ、そうですね」

オドオドとその身を揺らすのは何とも頼り無さげな男だ。が、誰

も魔術師だと言っても信じなさそうなのも、ある意味美点かもしれない。

「本当に……、するんですか？」

豊満な男の気弱な声に、痩せた男はギラリと、先ほどの穏やかな調子とは一変させて睨んだ。その瞬間に「ひぃ」と声を上げてドロップをゴクリと喉に滑り込ませて、男の身体が折りたたまれる。その様子は窮屈さすら通り越して、圧殺されながらもシートに無理やり沈みこんでいた。ビビり過ぎである。

「オイ、デブ。私が貴様に価値を見出したのはその『技術』についてだ。分かるな？　その為にも休養中の亡霊などと言う『非科学的な者』まで連れてきたのだ。それは絶対的な、勝利の確信があって初めて出来た覚悟なのだ。貴様の染みっ垂れた『周りに迷惑を掛けないなどと言う』道徳なんぞは私の真理探究の道にはないんだよ？　いいかね？　理解したかね？　君の脳に刷り込まれたかね？　Ｄｏ ｙｏｕ ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ ？」

「い、いぇす」

鼻から抜けるような弱い声。

自分への同意に満足のいった男は『二重人格』のように穏やかな、タイツ越しから分かる笑みを浮かべ直した。

「では、時刻が来たら予定通りに私の『手持ちの駒』と『亡霊』で事を運ぶ。では、君は、今から、君の事を成すために行くんだ」

『手持ちの駒』と言ったところで、その隣の明らかに不審な白いワゴンを見る。

そのワゴンには遮光フィルムが貼られ、車内の様子は分からないが、複数の人間が、否、生物が蠢いて居るのが見て取れた。

「……」

「納得が行かないようだな？　君が上手くいけば、『妹さん』と鉢合わせする事もないはずだが、魔女狩りを、失敗したいのかね？」

ん？　と自らの意見の正当性を主張するかのように言の葉を連ね

る。

ランボルギーニの扉が羽のように開くと、車体を大きく揺らしながら運転席の男が身体を引きずり出して出る。

男は申し訳なさそうにランボルギーニを愛でていると、フロントガラス側から助手席の男がエレベーターに向かって指を差した。

男は頷いて、その身体を揺らしながらエレベーターに向かう。

男は途中、チラリと後方を振り返ったが、痩せすぎた男が助手席のダッシュボードをドンドンと叩いて促す。

男は溜息をついた口に新しいドロップを含む。

コロリと舌と歯に挟まれるドロップ。

ちょうどよく着たエレベーターに乗り込むと、絞首台に立った死刑囚のように顔を伏せた。

ドアが閉まった……

＊　　＊　　＊

08．叫喚（きょうかん）（1／4）（後書き）

＜＜－Ｓｉｄｅ　Ａ－　在姫視点へ続く。

09．叫喚（きょうかん）（2／4）（前書き）

＜＜―Ｓｉｄｅ　Ｃ―　魔術師達視点からの続き。

09．叫喚（きょうかん）（2／4）

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

〈　鬼――、その起源は古く日本書記（七二〇）の欽明天皇五年（五百四十四）十二月の項まで遡る。

書に曰く、

『彼嶋之人、言非人也。亦言鬼魅、不敢近之。』
（その島の人、人にあらずともうす。また、おにともうして、あえて近づかず）

『有人占云、是邑人、必為鬼魅所迷惑。』
（人ありて占いていわく、必ずおにの為にまどわされん）

と記されている。

具体的にはここに出てきている「鬼魅（おに）」というのは外国人の海賊か何かをさしているのではないかと思われる。

さて、現代の日本において、幽霊の存在は信じる人が多いが、鬼の存在を信じる人は非常に少数だと思う。しかし「鬼」と呼んでよいものは確かに存在しているようだ。これはたちの悪い悪霊の一種であると考えていただければよいかと思われる。

鬼はよほど強烈なものでないかぎり、一般の人の目には見えない。通常描かれる鬼の姿というのは、こういったものを感じ取ることのできる人が感じ取った雰囲気を絵にしたものだろう。そういう意味では、あの鬼の姿は純粋な想像の産物とはいえない面がある。

こういう霊感的な力というのは実のところ誰にでもあるが、こちらから相手が見えると、それに相手も気付くために、逆に危険で、

普通の人の場合、小さい頃にそういう回路のようなモノは自然に閉じられてしまっている。しかしまれに、そういう回路が何らかの原因で閉じられなかった人たち、あるいは何らかのきっかけ（一般には大病や臨死体験など）でそれが突然開いてしまう人もいる。

まれにこう言った鬼を見る力をある者を『視鬼（しき）』と呼び、鬼同様に敬い、忌避された。

こういった純粋な意味での「鬼」以外に、過去の日本史の中で「鬼」として取り扱われてきたものがある。それは「よそもの」である。

日本書紀の欽明天皇の巻に描かれた「鬼」は実際問題として外国人のようである。民俗学者の一部には、「鬼」というのは通常暮らしている共同体の範囲外に住む人のことである、と捉える向きがある。これは確かにそういう面があったようだ。

一般に昔の日本の村では、村の一番外側のところに、道祖神・地蔵・あるいは巨石・古木などがあって、そこが一種の結界になっていた。そしてその結界の外側に存在するものは「鬼」として処理されたのである。

「おむすびころりん」の物語は心理学的にも面白いものである。おむすびがころがり落ちた穴。そこは外界に通じる、結界の外であると同時に、足元にあるもの、つまり心の中にあるものでもある。

いくら外に結界を張っても、心の奥底には深い闇が広がっている。鬼は私たちの心の中にも潜んでいるかも知れない――〉

「以上、『民族学から見る鬼とは？』でした、と」

私は展示場に備えられたパンフレットを読み終えると、ボゥと暗闇の雨の中で光の傘に入った展示品を眺めるガキンチョを、パンフの角で小突いた。

「何をする？」

急に我に返ったように国定は、こちらをムッとした顔で睨んだ。
「人の解説を聞かないでヌボーっとしているから、現実に戻しただけ」
「別に殴る必要はないだろう？」
「……いや、目がちょっと逝っちゃってたから」
その言葉に何か思い当たる節があったのか？
「いや」と言葉を濁して眼を伏せた。

彼の視線の先にあったのは虎のパンツや、金棒に紛れて陳列されていた『国宝・童子切り安綱』と言う名刀にして、霊刀のレプリカである。

異端の交霊武装『七大魔王刀』と比較するのは躊躇われるが、かの『表の世界で有名な』、最悪の鬼子『酒天童子（シュテンドウジ）』の首を切り落としたと言われる刀『童子切り』はその後に備わった想念と歴史によって一級の交霊武装へと昇華している。
【人外】が通常の物理攻撃で傷付けられないと言われるのは、『装甲結界』という物があるからである。自らの根底に流れる、攻撃を受けつけないと言う強い意志が現実と自らの境目に張られた結界と化したもの、霊気装甲の亜種と言われている。それ自体を破るには死神の対魔兵装か、規格外の交霊武装、インチキめいた結界破りなどが必要なのだ。その規格外の交霊武装に『童子切り』は属するのだ。

酒天童子と言うのはアレだ。
私の微かな記憶が確かなら、源氏の電光だか、閃光だかが退治した、日本史上最大にして最強の鬼である。『表の歴史』では作り話と言う事になっているが、怪異の支配する『裏の歴史』ではどうも本当に居たらしい。
作り話の方では、山に引篭りして、たまに村を襲う程度らしいが、

真実の歴史の方は一味違う。

数々の村を鬼の集団で組織化して襲い、蹂躙し、遂には時の天帝の膝元、京の都まで出兵して天帝を幽閉し、一時は京を支配した鬼の総大将なのだ。

時の、日本最高の魔法使い『安陪清明』とその源何とかが独自に作っていたと言う退魔集団、そして当時からこっそり力を振るっていたと言う噂の、今は公社の死神の総指揮官の、魔王の協力で京を最終的に奪還。

京を根城にしていた最後の鬼は、酒天童子を除いて全滅し、その酒天童子も、最後の抵抗も空しく斬首。その首を断ったのが『童子切り』なのである。

その首は世を呪う言葉を溢れんばかりに吐き、その呪いで生じた瘴気で京の都で伝染病が流行ったとか、切られた首が飛んで源何とかの兜（かぶと）に噛み付いたとか、その身体が地獄に引き込まれたとか、とにかく、最後の真実は曖昧で、酒天童子は死んだ、それだけが、伝わっている。

「で、どうしたの？　そんなに刀を見つめて？」

「……」

だ、だんまりですか？

暗闇の中に立つ少年は、何だか、儚くて、脆くて、壊れそうだ。

望郷よりも彼方の地を望む男。彼の瞳は真っ直ぐで、背伸びをして、決定的なまでに掛け離れた。

何処かまでも続く、夢に見たあの日の、遠いあの場所。

それを求めるために、人は今だ妬み、争い、焦がれて、そして、

貴く、輝いている。

それを昔の人は、なんと呼んだのだろうか？

「――昔を、思い出そうと思っていたんだ」

静寂が耳鳴りをするまで続く。周りには多くの展示品を鑑賞する人が居たのに、自分と国定だけが薄紙一枚だけズレて、世界に取り残されているようだった。

彼は再び目をダウンライトに照らされる、レプリカながらも白銀の刃に向ける。

「魔人になるには、全ての記憶を自ら捨てないとイケナイ。だから、既視感も感じたモノを見ていたら、もしかしたら失った記憶が戻るかも、などと思ってみたりしたのさ」

「嘘吐き」

私は一言、自分でも何故言ったのか分からない内に、その言葉を吐き出した。

「え……、お、俺が何の嘘を付いているって言う……」

「当たり前でしょ、魔人になるのは、全ての記憶を捨てるんじゃなくて、全ての記憶を『奪われる』じゃない」

望むわけでなく、ただ『魔人となる』。

「それに、全てなんてのも嘘。だって……」

最も、悪意を込めた、最悪な記憶だけが、残る。

不可能を可能にするための代償。

例え、伝導率１％以下の人間でも、生と死の狭間で渇望すれば、ほぼ霊気装甲を使う事であらゆることを可能にする、無敵の魔人となれる。

魔人となるために、肉体でなく、魂の伝導率と純度を最高にするために、小さな、一欠けらの人間としての記憶を、何かが悪意を持って残したような初期化される。薄れ、色褪せる幸福に代わって、ただ日々色濃くなる陰惨な記憶の再生が、ただの魔力の塊でなく、人としての形を作り出す。

結果、悪意を持った記憶の再生によって、狂い、さい悩まれながら魔人は生き続け、『回復できない』魔力で魔力自身となった体を削りながら、最後に『消滅する』。

それは、甘い栄光をちらつかされて堕された、無限地獄のようなものだ。

国定は既に狂い、苦しみ、恐怖しながら死ぬ事が定まっているのだ。

例え、魔人となる事を望んだ理由が、綺麗だったとしても……

――そうだった。何故、私はこんなに簡単な、辛い事を忘れてしまっていたのだろう。

この魔人は既にそんな恐怖と矛盾に千年も一人で闘っていたのだ。

そんな、色々な思いを言葉に口をしようとして、私は口を閉じざるを得なかった。

国定はその瞳孔をキュッと絞り、睨むように私を見ている。

私は怖くて、思わず、背後のショーウィンドウまで後擦り去った。

「く、国定？」

私は恐る恐る、小さく口を開いてみた。

その瞳は何かを責めるかのように私は感じた。

「――在姫。こちらを先ほどから見ている人間がいる。俺を正面に午の方角、七時方向。つまり左斜め後ろだ」

私は微かに動揺しながら、国定と同じ様に向き直り、ショーケースのガラス越しに反射した光景をさり気なく窺った。

灰色と虹色に蠢く群衆の先に、柱から顔を出した太った男が視線を私達に収めている。

目が合いそうになった瞬間にサッと隠れる、が横幅が広すぎて柱からはみ出ている。

なんて分かりやすいストーカー。

「非常に不審だ。俺は調べて見る。在姫はそのまま常寵を待って、そして二人で遊んでいろ」

国定の、小さく囁きかける口振りに淀みはない。

私は返答も返せなくて一人黙っていると、フンと鼻息を軽く、優しく微笑みながら国定は言う。

「気にするな。魔人となった事に俺は後悔していない」

踵を返した、国定のシャツの裾が揺れる。

それが、夢の時の紅い衣を幻視する……

「するとしたら――」

「えっ？」

何かを呟き、それに問い掛けようとした時には、国定は駆け出していた。迷いを振り切るように、その身を闘争者へと変えて……

「国定……」

私は、ただ呟くことしか出来ない、魔法使いでも、魔女でもなく、ただ少女だった。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｃ―

「獣臭か」

そう、一人の異様な風体の人物は、後部のドアの開け放たれた白いバンを覗いて言った。

下はまともなベージュのズボンだが、黒く、吸い込まれそうな色の半纏。その下の上半身に、顔を含めて完全に包帯を巻かれ、頭頂の髪の毛だけがヤシの木のように立って、包帯の先から毛の見えている。背中には鎖で肩から掛けられた巨大な両手用の斧、鉞（まさかり）が背負われている。

閉鎖された空間にも関わらず、何か空気のウネリでも生じているかのように黒い半纏が揺れている。

白いワゴンの隣り、黒い、死を運ぶ車、霊柩車、に似た巡回用の車にその人物は近づき、開いた窓から備え付けられた無線を取った。

「こちら四四号車、本部応答願います。類別不可、獣人種の被疑者は六～七人、吸血種の臭いも同時に感知。他、空間の歪みから呪いの類と推測」

小さい声にも関わらず、ハッキリと強い語勢の声。

「『例』の魔術師の件に荷担した亡霊騎士かと思われる。非番を解除、斬殺礼状の即時発行と葬査の許可を求む」

ギョロリと、包帯の間の黒い瞳が動く。

「非番解除、手当て支給、許可を受諾。礼状は追って発行、それ

までは応援の来るまで順次待機」
　無線を無言で切ると、黒い半纏を揺らして口の先で「チッ」と、その人物は毒づいた。
「馬鹿が……、事件が起こってからじゃ、……遅ェんだよ」
　エレベーターに闇よりもなお濃い影を引き連れる者。

若原（わかはら）　曲（まがり）

　日本国冥府所属　死神公社の死神はそう、包帯を歪ませて言った。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

　人と言う水に囲まれた四海の視界。その中にただ一人浮かぶ島である異様な風体で、有体に言えば普通の男がいる。
　遠くから見ても、付近の人とは横幅を異にする男。その横幅に比べて身長はやや低く、形容するなれば『ガスタンク』のような球体にも見えなくもない。真夏にも関わらず、ロングの黒い星が真ん中に付いた白いＴシャツにジーパンを着た暑苦しい男。
　俺が駆け出すのに合わせて、手元に持っていた飴のようなモノを取り落としながら、男は逃げ出した。
　俺は敢えて慌てずに、ユックリと獲物を詰めるように、狩りの場を定めるように男の後を追う。

　平日でも、流石に学業を終わらせた学生達や子供の居ない暇な専業主婦達、残業のない公務員の姿で溢れている。
　色とりどりの人々の間を静かに、太った男と少年姿の俺が追いかけっこするのは、上の階から偶然見つけた人には奇異に見えるだろう。

人の波を掻き分け、ヨタヨタと走る男に対して、俺はその流れに逆らわないように身体を斜めにする擦りぬけるような半身や、身体の小ささのメリットを活用して男を追い詰める。

――にも関わらず、俺と男の間は一向に縮まらない。

「バカなっ……」

自慢ではないが、魔人として記憶を失っていても、記録によれば俺はそんなに脚は遅くなかったはずだ。確かにあの時代では馬術に長けていたはずだが、この身とて野山を駆けていた健足である。いくら子供の四肢でも、現代人の足腰には負けない程度の自信はある。

装甲をわずかに流動させて、スピードを上げたと同時に、魔術か何かで察知した男はヨタヨタからドタドタくらいまでスピードをむりやり上げていく。たるむ皮、揺れる肉、動く重心。

それでも間は縮まず、男はエレベーター横の扉から非常階段に入る。

まずい、早く辿り着かないと。ココはツィンタワーの内、片方の塔。ビルの途中から分かれたツィンタワーの片割れは途中で二つの道に分かれている。つまり、あまり逃げられてはもう片方の塔か、階下かと言う二択を迫られる。

「……これは、俺に対する挑戦状だな」

俄然、やる気が無駄に沸いてきた。

急激に後ろに四肢を跳ね上げるように加速。獣の俊足で扉まで追い縋る。

それを見ていた何人かはあまりの速さに驚きで歩みを止めているか、あまりの速さで気付かないかのどちらかだ。実際、１００ｍを六秒弱で走るスピードを、子供の姿の俺が出していたら驚愕か、見なかった事にするか、どちらなのは当然だ。

その俺を振り切ると言うのは男の何らかの魔術だろうか？

扉を素早く開けて見てみると、非常階段が肉の質量で揺れている。

「それにしても……、速過ぎないか？」

あの男、あの巨体、もとい肥満体にしか見えない体で、階段の間から踊り場まで飛び降りたのだろうか？

「でも、俺はやりたくないなぁ」

この間のように霊体でいくら着地の衝撃が殺せると言っても怖いものは怖い。機像使いの女と戦う直前は興奮していたから図書室からの高さには気付かなかった。だが、既にマジマジとその高さを見せつけられているビルに昇らされれば、まさに一目瞭然。階段を使わないと、とてもじゃないがこんな高い所からは下りたくない。

と下らない事を考えている間に、肉による揺れが段々と遠ざかっている。

「逃がすか！」

俺は手擦りに掴まりながら、一段ずつ、しかし高速で降りていった。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

巨大なシャンデリアが頭上で輝くその場所。頭上三階まで打ち抜いた造りは、こんなド田舎にビルを建設、設計した『遊び人』の心意気を感じる。そのお陰が否か？　建設してからは日増しに和木市の人口は増えているらしい。無論、人だけではなく、人外もいるけ

ど。まぁ、それは日本国冥府の政霊指定都市だからかも知れないね。
たくさんの人々、それぞれがそれぞれに幸せを携えている。それは日頃から歩きながらも熱中する携帯電話のゲームアプリだったり、両手に持った三段重ねのアイスクリームだったり、目の前を楽しそうに互いの幸せを手と手で絡めあって、乳繰り合っている恋人同士（バカップル）だったりする。

で、ベンチに座った九貫の魔女である私は目下六人（マイナス一人）の魔術師から心臓を抉り出されようとしている不幸な少女である。ちなみに言うと雀どころかハチドリの涙に近い母の遺産（魔法の方ではなくの現金の方）をやり繰りしているため、お金が勿体ないので携帯なんてないし、アイスは家に特売日に買い置きしたのを帰ってから食べるために我慢しているし、家族はおろか、恋人なんて存在が居るはずも無い孤独な、幸せの枯れ井戸の状態。生活に、潤いがない。
「つまり、トータルで言えば凄く不幸なんだよね～」

溜息をつくと、頭から伸びた、不自然な一本の、アンテナのようなくせっ毛がピコピコと揺れた。頭の脇の髪はピンで、腰まで伸びた髪は九貫の護符の髪留めで押さえられるが、この一本だけはどうにもならないらしい。まぁ、同じクラスで前日にジョウチョーを「モエー」なんて命知らずな事を言った歌代くんにしてみれば、それこそ萌えなのかもしれないけど……、女の子である私の立場からすれば、まさに収まりのつかないだけである。

「……世の中不満だらけ」

髪の毛はキチンとセットできないし、父親は誰だか分からないし、母親は地獄に行っているし、肝心のジョウチョーは未だ待ち合わせに来ていないし、その理由を携帯で問い正す事も出来ない。つまり、

携帯が無いのは不幸だからであって、ついでにお腹が空いたのにアイスが無いわけで……

「うわっ、不幸で頭の中が循環しているよ、ってか、いくら小声でも」

自分で自分に突っ込まない方が良いって。

だが、いつものこの一人会話（？）に突っ込みをいれてくれる人物はこの場に居ない。あいつの事だ。突然帰ってきて、「未熟者が居なかったから余裕だったゼ、ハハハ」とでも言うに決まっている。アイツの事は放って置いていいや。てか、アイツが不幸の元凶と言う事にしよう。実際、アイツと遇わなければ標的にならなかったわけだし……

んじゃ満場一致（一人）で国定　錬仁は極悪不幸運び屋と言う事で決定。

それにしても……国定か、あいつの事はイマイチ謎だ。魔人って事で年齢は不詳。国定って苗字が正しいなら、かの地獄へと繋がる門を守護する一族である。

【地獄】とは一般的に言われるような悪い事をした人間が死後に到達する場所ではない。

【地獄界】とは人間の住む場所、分かり易く【人間界】と呼ばれる物事の起きる世界に最も近い、魂の集まる世界の事である。魂は、通常死後は昇華されて輪廻の輪に戻り、魂が循環する。しかし、まれに死の直前に『一定の未練』があった場合、地上に留まって死神公社によって昇天させられるか、もしくは別の物質界である『地獄界』に引き寄せられる。これをブラインドなんたら現象とか言うらしいが、私は天才でも変態の神秘院には関わりはないために良く知らない。悪人は現世への欲望が強いために地獄に落ちやすいのが業

界の通説である。むろん、未練が強くあれば、誰でも落ちる場所。故に、その有り方がこの世界で定義された『地獄』と似ている為、そのまま【地獄】と言う名称になったのだ。

一説に寄ると地獄は元々は『闇魔』と呼ばれる支配者によって治められていたそうだが、立て続け（地獄の時間にとってはの意味で）に第一次、第二次大戦での死者の大放出で地獄の人口爆発が始まった。自体を危惧した統治者である『闇魔』は、自らの無限転生の力を使って地獄をそのまま人間界の一部とドッキングさせたとか。無論、これで地獄の人口爆発による『魂同士の摩擦による本当の爆発』は防げたが、代わりに地獄の不死者である『屍徒』や、幽霊の『人間界への逆流』などエライ騒ぎが起きたなんてマメ知識がある。一体誰が今統治しているのやら？

とにかく、繋がってしまったからには私達の世界には扉はある。特別有名で大きなのは『バミューダ三角海域』の【食宙門（くうちゅうもん）】である。おかげで、あの付近はやたらに失踪船と不思議な飛行機事故（百％乗客乗員全て行方不明）が多い。

そしてもう一つ有名なのが、私がこの間遭遇した【四時五分に止まる電車】である。

もしかして、あの『電車』は国定が国定の力で呼び出したモノだったりするのだろうか？

――亡霊騎士との戦闘。不測の事態で負傷した国定。何らかの形で起きた霊気装甲の不具合に、国定は最後の力を振り絞って、線路の上か何処かで召喚。

でも、それはないだろう。私の推理は間違いだ。【国定】の名の通り、その身は『国の境界を定める事』を意味する。つまり、地獄との境を曖昧にして、死者を逆流させるような行為を国定の身は出来ないはずだ。

と言う事は、彼は国定であって、国定ではない。不思議な関係だ。国定の名前は意味があるのだろうか？

魔人はその気になれば、悪夢にさい悩まれる事を覚悟すれば何百年と言う単位で生きる事が出来たはずだ。しかし、人間としての器である以上、大抵の魔人は十数年で力を使い切ったり、教会の『ソロモン王より伝わる魔人使いの秘蹟』によって飼い殺されたりするのが通説だ。しかし、あの偉そうな口振りから、おそらく現世に百年以上に渡って現界を続け、教会の呪縛（いや、聖縛か？）を振り払って、轟然と存在しつづける男だ。

国定　錬仁。あいつは本当に一体何者なのだろう？　驚異の武芸の達者で、家事万能、元は百九十を余裕で越える体躯なんて、まるで何処かの物語から出てきたみたいだ。もしかして、あいつ、日本の歴史に載るほどの有名人だったりして。

「だとしたら、武蔵坊弁慶だね。性格悪いし」

でも弁慶は美形ではないからなー。義経かな？　でも貴族っぽくなくて、むしろ品が無い。でも、子供の姿ってのもあるけど、女の子でも羨ましがるようなスベスベした肌をしているし、体の均整も取れていて子供ながらモデルのようだ。かと言って軟弱そうかと言うとそうでもなく、獣のよう、野生の狼とか子供ような逞しさが顔にも表れている。口の悪さと時折バカにする時に細める『ー』の形の目でも無くなれば、私はいい男だと思う、まぁ今は子供だけど。

……でも、そこまで魅力的でも、どんなに綺麗でも、彼の瞳は見れない。人の瞳、それに縦に亀裂の入ったような黒い瞳は、何故か終わった瞳としか言えない。見つめていると、彼の送った鮮烈な人生が流れ込んできそうで怖い。

夢で見た、あの日の影の軍勢。届かない叫び。彼の戦う姿は苦痛を知りながらも、その先にあるのは更なる苦痛でも、今日の戦いが明日の戦いでも、その先にあるのは空っぽで、何も無くても、ただ一人で向かって行く。彼は人として生まれなかった。だから、人として拾われても、人としての幸せを放棄した。ハッキリ言ってバカだ。愚の骨頂、天然の真骨頂と言っても過言ではない。とにかく、彼は人生を他人のために無駄にし過ぎた、と思っている。それだけは、夢の流れの中で、時折逆らうように見える残滓から読み取れる。

『我は忌み、故に意味無し』なんてバカげている。

……もし、私が魔女だけでなく、人外との半々の出自でも後悔しないだろう。例え、それが人喰いだとしても、吸血鬼であろうと、私は受け入れる。この世に生まれたからには自分のために、目的を持って生きなければイケナイ。母とあの『大師』の言葉が正しければ、私は父と母が愛し合って生まれた子供だ。

私の生まれのために身を隠して、数年間魔女として行動せず、大師に匿われながら私を出産した。その事から私の父親はどんな人間なのかは想像くらい付く。私は父の手に抱かれた事はあるのだろうか？　もし、彼が今だ犯罪者として活動していたらそれを許せるだろうか？　それ以前に私が、私の生を許せるだろうか？　口だけでいくら決意をしても足りない。

私は何かと対峙した事が少ない。現代の仙人、有体に言えば『引篭り』、結界を自宅に付けての『立て篭もり』をしている魔法使いや魔女にはよくあることだ。私が、本当に試されるのは目前で戦う、その時、その瞬間だけだ。

……て、既に待ち合わせ時間の六時半なのに、学校に五分前に登校するように「いや、在姫。待たせていたが、少女趣味な妄想はし

ていなかったかね？」なんて含み笑いをして、片手を地面と直角に上げながら戯言を言うジョウチョーの姿はまだ見えない。実質、約束の時間から十五分遅れだ。何だか珍しいなぁ。何か有ったのかな？

ふと目を向けた、二つあるエレベーターが両方同時に上がっている。どちらかに乗っている可能性は高いだろう。私は暇な時間を持て余すのも何なのそちらに目を向け続けた。

扉が開いた。

異様な風体だった。全身をタイツのようなモノで包み、顔の中央には巨大な、ゴーグル型の遮光器が嵌められている。痩せ型よりも骨と皮と言った方が良いような、『魔術師』にしか見えないの男は、背後に捻子くれた体躯のエレベーターの『両方』から出てきた『獣達』を従えて、こう言った。

「さぁ、皆さん、人質の時間です」

朗々と言った。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

さて、このツィンタワーだが、あの吹き抜けには構造上一つの問題がある。

途轍も無く、広いため清掃が追いつかない事があると言うのだ。無論、昼間の開店中は清掃員をあたら多く出す事は出来ない。

その欠点を見越されたためか、ツィンタワーの反対側には同じ様に吹き抜けがあり、パンフレット曰く、それを四週間のローテーションで交換して使っているらしいのだ。今回使っているのが、その北側の塔である。

「さぁ、着いたぞ。魔術師。ここまで来るなら十分だろう？」

俺は埃っぽい空気が充密して澱んだその場所についた。電灯の落されたその場所は、夕方である事と相余ってやたら暗い。全ての黒いモノが影絵のように意思を持って動きそうな程、そこには埃と同時に闇も充密していた。

息を肩でついた男は、ちょうど北側と同じようにシャンデリアのある場所の真ん中に居た。

俺は男から十歩以上離れた場所から睨みをつける、って何で怯(ひる)むんだよ。

「こここここ、こここここ、こここっこここここ、ここ殺さないでくださぁい」

「……」

生理機能は人間と同じだが、それとは関係なく額を汗が伝った。何なんだ？　こいつは？

両手を掲げて、その後ろに隠れるようにしながら、俺から目を背けている。

脱力感を全身に感じながら、溜息を吐く。とりあえず事が終わるまでは気を張ろうと思い、背筋を正した。

「お前は、魔術師だな？　そうだろ？」
そう言いながら、三歩間合いを詰めた。殺し合いをする気のない人間を殺るのも何なので、素手の当身でも中てて気絶させよう。それから、在姫の魔法で『誓い（ギアス）』の魔法でも掛けて、彼女の師父に何処かに捨てて置いて貰おう。

「はぁい、そそそそそうですよぉ」

やたらオドオドとした口調でコメカミに血液が溜まりそうなのだが、俺はもう一度怒りを吐き出すように溜息をして、また間合いを詰める。

男は震える手でポケットから何かを出す。

俺は一瞬身構えたが、それがただの甘味物、ドロップだと分かった。
それを指ごと口に突っ込みながら満足そうに食べているのを見ていると、またコメカミの一部が膨れていくのがよーく分かった。
と言うか我慢なら無い。
後は大股で四歩弱、さっさと片付けて帰ろう。残した在姫も心配だ。

「で、お前の名前はなんと言うんだ」
答えると同時に終わらせよう、そう思った。

「魔術師同盟　アイオーン　『斬刑』の斐川（ひかわ）荻（おぎ）」

答えると同時に終わらせよう、そう思った瞬間。

俺の胸に『強烈な打撃』、掌低が一瞬で打ち込まれた。

このホールは三十メートル以上の広さがあり、そのほぼ中心に俺は立っていた。だから、何処ぞの騎士のように瞬間移動でも使わない限り、十五メートル先の壁に叩きつけられる事は有り得ない。

有り得ない打撃で無い限り――

コンクリートの壁に叩きつけられてブラックアウトした意識が戻ると、俺はその場から離脱した。前蹴り、俺の腰くらいを砕こうとして外れた打撃は、豪快にコンクリの破片を撒き散らした。

「このほら吹きがッ！！」

左斜めに摺り抜けて、男に反撃を繰り出そうとした俺に、ピタリと『槍を出したタイミング』で必殺を狙うように男はくっ付いてきている。先ほどの肉の暴れるような歩みではない。オーケストラが著名な指揮者の手で高度な、一つの有機体となったような、動きと呼ぶのはおこがましい、まさに舞い。

俺のお返しとばかりに放った拳が、円を宙に描くように廻された掌に柔らかく受け止められ、そこから続く片手の、僅かな指先の伸びだけで弾き飛ばされた。

だが、今度は自らの掌でしっかりと受け止めて着地する。それでも、男は再びピタリと『槍を出させない』絶妙な間合いに陣取っている。掌には抉られた穴が二つ。防御をしてなければ、脇腹の下、

動脈を抉られていた。

まさしく、男はガラリと変わった。

「魔術師ですから……、ホラの一つや二つは当然です」

遅れて、思い出したかのように『余裕』を持った笑みを浮かべた男。

情報によれば、アイオーンで『最も白兵戦能力のある魔術師』、斐川　荻。

両手は僅かな捻れと相反するような余裕を持って掲げられ、手の小指側を俺に向けた手刀で自分の中心を守りながら、こちらの体のど真ん中をポイントしている。胴体は腰の上辺りで捻られ、足先は俺ではなく、俺よりややズレた方向を指している。

「八卦掌（はっけしょう）」

新しい中国拳法の一つ。縦横無尽の歩法の『走圏』と、掌を使った柔らかい千変万化の攻撃である『手法』、そして修練によって力からより剛強かつ統合された力、『勁』を使用する武術である。ちなみに歴代のマスターとなった者で対人戦で敗北した者はいない、武術でも最高峰の部類に属する中国武術。

その実力と威力は咄嗟に後方に飛びながらも、既に半ダース折れた俺の肋骨から証明できる。

「僕の技は、正確には遊身（ゆうしん）八卦六十四掌です」

男の上半身は先ほどの掌低で発した筋肉の流動力、発勁によってロングのTシャツが内側から引き裂かれていた。

Tシャツの下は何とも勘違いも甚だしい、何と言う筋肉の密度だ。腕は年輪を重ねた大木のように太く、胴体は薄い、引き伸ばされた脂肪の下からでも腹筋や脇腹の筋肉の、一筋一筋の厚さが伺い知れる。背中なんて正面から見えるほど広い。おそらく、脚も自分の体重どころか三百ｋｇのバーベルを背負ったまま片足でスクワットが出来るほど鍛えられているはずだ。

この男は『デブ』ではない、恐ろしいまでの筋と肉の密度を持った熟練の『拳士』である。

俺は胸に霊気装甲をより多く流動させて自己回復を促す。

だがそんな時を待ってくれるほど、敵は優しくはない。

「では、自分が殺されたくないので、あなたから死んでください」

微笑を浮かべた魔術師の体が突然視界から消えて、再び俺は弾き飛ばされた。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

吹き抜けは唖然となっていた。当然だろう。目の前には明らかに見覚えのない異形と奇人が存在しているのだから。

二メートルすらやすやすと超える体躯。その人と同じ形の胴体には猪のような、あるい象、牛のような顔が乗っている。それらは一様に、元の生物なら持ってはいないはずの、牙と赤くギラついた瞳を持ち、辺りを眺め廻している。そこに理性のようなモノは感じられない。金属を身体に直接打ち付けられ、急所の大半、心臓、股間、背骨と言った場所を守らされている。その身体に鈍重さの欠片として見受けられず、力強さの大半をその外見から発散させている。

それら、獣と呼ぶのはおこがましい生物が六体。

その中心には、周りを囲む生物よりも明らかに、むしろここにいる人間の大半よりも貧弱に見える、異様な痩身の男。生きた黒蛇の鱗のごとく、奇妙に身体にフィットしたボディースーツに、目を丸ごと覆う遮光器はまるで男の異常性を表しているようだ。

「フム」

男は軽く、周りを見渡す。

周りの人々はあまりの、『常識を越えた』状況故に動けない。

私も、『常識を超えた』存在である魔女、そして『狙われた獲物』故に動けない。

「皆さん、動かないように……　死にたくはないでしょう？」

首を斜めに、ユックリと傾ける。遮光器越しの視線は舐めるように群集から私を探そうとしている。

無論、私は悟られないように、その脅威に対して反逆しようと駆動する魔女の心臓を必死に押さえつける。

魔女や魔法使いの感性でなく、職人のような技術で磨かれた魔術師の、魔力の動きを捉える勘は容易に私の居る場所を見つけるだろう。

だからこそ、私は今にも動きそうな自らの一部を必死に留める。

暫くの沈黙、それと同時に、男が顎をしゃくった。

視線の先には、警棒を構えて、それでもなお動けずにいる若い警備員。

牛の形をした獣が、その巨躯からは計り知れない予想外のスピードで迫り、顔の強張った警備員の頭を、蹄でなく五指に分かれた手で、しかも片手で掴み上げる。

警備員は突然の不条理にもがきながら、警棒をその豪腕に叩き付けるが傷どころか痛みすら与える事が出来ない。

「魔女、九貫在姫さん。いるのでしょう？　出て来ないと大変な事になりますよ？　制限時間は三十秒、です」

狂気の宣言と供に何処からか出した懐中時計。それはやたらと大きな秒針の音を立てている。

その言葉を聞き取った警備員は以前にも増して激しく警棒を打ち付ける。警備員が未知と暴力への恐怖でありったけの力を奮い、警棒がひしゃげても、獣の腕は皮一枚として傷付かなかった。

ちょうど、その光景のあるエレベーターの斜め右。その近くのベンチに私は座っている。

何も出来ない歯痒さを戒めるように歯を食い縛った。今、ココで名乗り出る事は出来る。だが、近接戦闘力に欠ける私が名乗りを挙げても心臓を抉られるのがオチかもしれないだろう。無論、名乗らない事だって出来る。魔女はその身を隠し、秘する者。そして、その身に払う犠牲、他の身に払う犠牲すら省みない者。

しかしそれは、私の『他に犠牲を払わないで魔女でいた信条』に反する。勿論、そんな者は魔女として余計だ。意味すらない。

それでも、私は、その『無意味』すら重要に思えた。

魔女であると同時にある、人の理性。それと遥か昔に見た『澄んだ目、澄みすぎて、逆に済まない眼』。あの優しい魔女、母ならこんな状況にすらなる事を許さないはずだ。

こんな時に国定（アイツ）がいたら……

「……三、二、一。はぁ、遅いですね。ペナルティです。その男の腕を折りなさい」

その言葉に、片手で割り箸でも折るかのように無造作に獣は反対の方向を変えた。

「あぎゃっぁひゃぁぁぁぁあぁあぐぇああ」

警備員は何かの引き付けようにビクンビクンと身体をしならせ、失禁しながらも、それでもなお、まだ無事な手で警棒を握っている。

「もう三十秒、待ちましょう」

表情すら隠したスーツ越しに再びカウントダウンが始まる。警備員の男は再び狂ったように声を挙げ、唾を飛ばし、いや実際狂って、ひしゃげた警棒を打ちつける。

突然と始まった圧倒的な、調律された暴力に子供は泣き叫び、大人は何も出来ずに佇み、あるいは隙を見て逃げ出そうと、もしくは、壁の影に隠れて超現実から逃避している。

「……ゴメン、国定」

私は小さく呟いて、ベンチから「よっこらしょ」と微妙に年寄りじみて立ち上がる。私の小さな胸の奥には、力強く鼓動する心臓。それだけを根拠と勇気の頼りにして……

拳から親指を覗かせると、その先端、噛み切り痕のついたその先端を糸きり歯で噛んだ。

親指から血を滴らせながら、私は男に真っ直ぐ向かっていく。

「……四、三、にぃ？」

男が、私に気付いた。

我ながら小さい歩幅で、それでも拳を振りながら、その獣達の前

に近づく。
　周りの人々は不思議な、そして呆けた顔をしている。獣人に、魔術師、そして、小さな魔女とくれば、常識の九十％は麻痺しているだろう。
　そしてとりあえず、男の五メートル手前で、国定の真似ではないが腕を組んで胸を反らしてみた。
「……何か、呼びましたか？」
　威厳も、この小さな身長、百四十四コンマ三センチ（計測済み）では存在すらもしないだろう。
　それでも、私は負けるつもりはなかった。
　さて、どうしたものか。男は、私が魔女なのか納得し兼ねたように、一定の調子で、ユラリ、ユラリ、と首を傾けている。
「貴女が九貫　在姫ですか？」
　ユラリ、とその言葉を吐いた後に、首を左に四十五度傾けたまま言った。
「そう言う貴方は何処の何様よ？」
　男はユラリ、と右に四十五度の角度で顔を傾けた。
「魔術師同盟アイオーンの『物理学者』　保隅（ホズミ）　流水（リュウスイ）と申します」
　物理学者？　この男は魔術師ではないのだろうか？
　私はその疑問を頭の隅に追いやって、再び自称物理学者の魔術師に鋭い視線を投げかけた。
「アンタ、何考えているの？　衆人環視で吸血種と獣人の『合成魔獣（モザイク）』なんて持ってくるのは協定違反、いえ、反逆行為じゃないの？　しかも違法霊薬のドーピングして、アンタ、同盟からすら抹殺されるよ」
　その言葉に彼は何が可笑しいのか？　シャックリの連続のような笑みをしばらく続けた。
「協定違反？　笑わせないで戴こう。元より、魔術師に協定など意

味はない。歩んだ道のその先にあるのは山屍血河の領域。故に法も違反もない、何にもない」

男は指を高々と上げた。

やっぱり……　この男ッ！！

「それにね。『皆　殺　し』なら、目撃者も居ませんよ――

さぁ、喰い殺せ」

指を鳴らす音に合わせて、獣達はグッと身を沈め、『私はそれより早く呪文を紡いだ』。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

一振りの鉄塊が胴体にめり込む。その一撃で常人なら内臓破裂、脊髄損傷、圧殺滅壊する衝撃。

その鉄塊は人の技。指先を揃えた手刀、肉の刃である。

だが、人体を構成する同じ肉でも、彼の拳は生物を確実に殴殺する鈍器と化していた。玄翁、ハンマー。手刀のような形容表現と同じ刃物とまでは言わないが、そんな殴殺器具にすら似ている。

それでも俺が立っていられるのは、魔人と言う存在である事と残った霊気装甲、そして自らの体術に他ならない。

刹那。魔術師の拳が、勁の作用によって体内で弾ける直前に、床の埃を巻き上げて宙に舞う。

俺は大鎧を着たまま、海に並べた船の間を飛び交うような身軽さで、足の踏ん張りを零にして打撃とは逆の方向に飛ぶ事で軽減する。

舞踏にも似た死の舞いは刻々と時と命と運を削りながら闇の充密したホールを廻る。

俺には反撃の余地すらないに等しい。打撃殺人と間合いの詰め方は今まで出会ったどの武芸者よりも卓越している。いや、出会った中で一人だけ挙げるとするなら、俺を一撃で殺し去った最強の暗殺者がいる。拮抗すら問題なく、ただ最悪の戦況の中でのコンマ以下の勝率。あの暗殺者は絶望の中から勝利を掴み取った。能力無き、ただの人として今代は最強の武人として名高い【拳王】、もとい【大災害】すらあの動きを美しいと言うだろう神業の体術。あれほどの男が極東の島国で、無名のただの暗殺者としてしか居なかったことが異常だ。だから……

「ガァッ!?」

僅かな回想の思いに浸らせる合間すらなく、間隙と感傷を肉で破壊するように魔術師が舞う。

当たったのは顔面。野郎、手加減をそろそろ止めてきたようだ。速度がドンドン速くなっていく。あの鈍重にも見える体の中に凝縮されたスタミナは並ではない。軽自動車にポルシェのエンジンでもつけたような加速と馬力である。いや、装甲のような筋肉や鋼の拳足によって、もはや人サイズまで圧縮した重装甲戦車に他ならない。

「シッ!!」

俺は肺の空気を吐き出しながら拳の反撃。それを魔術師は背中を見せるように回転して避けながら、そのまま背中で回転の勢いでの体当たり、中国拳法風に言うなれば靠（こう）と呼ばれる打撃を炸裂させる。

当たった瞬間は痛みよりも先に、浮遊する感覚が先行するほどの叩きつけられたスピード。再び迫る壁に、獣のようにフワリと、両手両足で猫のように『壁に着地』をする。

そのまま重力に逆らって、壁の微妙な凹凸に指を引っ掛けて張り

付く。

再び、間合いが取れた。だが、彼の神速の歩法を持ってすれば瞬きほどの間に俺を三度即死させる事すら出来るだろう。

彼は独特の胴体を捻った構えを見せずに、ただブラリと手を下ろしている。全身の緊張は完全に解かれている。だが、それは次にどんな動きをするかすら予測のまるで付かないほどの極まった真の脱力である。

達人。この若さでここまで達しているのはこの時代では俺の知る限り【大災害】の直弟子である規格外の【小災害】くらいしか知らなかった。だが、無名とは恐ろしいと、いつも肝に命じていたはずだ……

俺は極東の暗殺者ギルド、【闇殺舎】の魔物【錆びた拘束（ラスティチェイン）】の美しい動きを再び思い返しかけ、回想を断ち切る。いくら、『元の身体』を望んでも、削れ過ぎた霊気装甲故に、子供の体なのは致し方ない。だが、このままでも必ず、勝利を持って在姫を守る。

そう思いながら、無表情に徹した顔に反して、自然と壁を掴んだ手に力が篭った。

「彼女が、心配ですか？」

「俺は守護者だ。勘違いをするな」

よくよく考えてみると『彼女の意味』を俺は取り違えているが、男は大して構う事はなかった。

男はこちらに顔を向けたまま、コロリと口と中にドロップを含んだ。いつの間に？

雲が晴れ、いよいよと待ち望んだ月明かり。立待月よりさらに僅

かに欠け、昨日より遅れて出た居待月（いまちづき）としてボォと燐光で辺りを照らす。

淡い光に浮かぶようにただひっそりと微笑みながら居待つ男。

「運動すると甘いものが欲しくなりますからねぇ。私の体だと常人の二十倍のカロリーは必要なんですよ？」

言い訳をするような弱弱しい言い方に反して、その行動には隙が一片と見当たらない。

そしてこの男の雰囲気は、ただ魔法を求める魔術師とは違って見えた。むしろ、このまま『武芸者』となれば【拳王】に成り変われるのではないかと思う。何故……

「何故、お前は魔法を求める？」

俺の問いに、男はほんの僅かだけ隙を見せたが、俺はそれを狙う気にはなれなかった。

「【魔法使い】になりたい。ただそれだけですよ」

二つ目のドロップを口に含む。回想でもしているのだろうか？自然と視線は宙に定まらないように見える。気になったのだから仕方が無い。もしかしたらわざと見せているかもしれない隙と割り切り、俺は続きを問う。

「魔法使いになって何を求める？」

三つ目のドロップは口に含まれなかった。

「……妹が、居ましてね。彼女は僕が【魔術師】なのに【魔法使い】だと思っていた。微妙な言葉の違いですが、『夢』を壊して、彼女をこれ以上悲しませたくありませんでした……」

三つ目が口に含まれて、しばらく堪能すると再び言葉は切り出された。

「妹には幼い頃に一緒に居てやれなかったのです。その頃、僕は親の作ってしまった借金と妹の無事と引き換えにロシアに売り出されました。ウラン鉱採掘と木こり、他にも極寒での蟹漁など色々やっていましたね。お陰でこの通り筋肉は付きましたよ。あぁ、これは関係なかったですね。実はですね。妹は両親が亡くなった時の火事から僕が救い出して以来、僕を【魔法使い】だと思っていたんです。だから彼女の夢を壊さないようにしようと思いました。そして、いつか借金を返せたら、ロシアの素性も知れない荒くれ者達の噂に聞く【魔術師】くらいにはなれるだろうと思っていたんです」

彼は弄っていたドロップ缶をポケットから出して振るが、音がしない。逆さまにして底を叩くと、大きな、色とりどりの塊が掌に出た。

それを口に含み、缶を仕舞う。

「そして、ロシアで木こりとして出ている時に、見つけてしまったんです。陸上で最大の肉食生物『北極熊』を圧倒する『超暴力』を……、それは老人でした。痩せた手足が奮う拳。そして……、自分でも『何を見たか忘れてしまう』ほどの『業（わざ）』を見せつけると、彼は僕を見つけて言いました。『知りたいですか？』と、日本語で。僕は魔法だと思ったのですが、ちょっと違ったみたいです。まぁ、色々と手順を少々変えて僕の魔術があるわけですが……」

畏敬を持った沈黙の後、俺はそれを言葉にした。

「その、暴力の名は？」

「『大災害（オーヴァーハヴォク）』と、それしか聞きませんでした」

「貴様、だ、『大災害の直弟子』だというのか？！」

霊気装甲を持たず、魔術すら使わず、交霊武装、そしてナイフ一本すら帯びるの拒否し、ただ肉体の一つを持って人外の戦場を狂わ

す【人類最強】。

驚いた彼はその厚い皮に包まれた掌を振る。

「まさか！　大災害の直弟子はただ一人『捕食者（プレデター）』ならびに『小災害（デミハヴオク）』と呼ばれる彼だけです。僕はただ単に『イロハ』を学んだだけのペーペーですよ。確かに彼、【大災害】は『挑戦しますか？』と聞きましたが、僕は【魔法使い】を目指していたので断ったし、それ以前に無理だったんですよ」

微笑み、その中にでも垣間見える自分の肉体と技への信頼。長年の技術と才能。加えて【大災害】に『挑戦を許可された』存在。『夢』を壊さぬため、故に【魔術】としてまで昇華した彼の技があの歩法と連撃だけに止まるはずがない。

「――ところで、身体も冷めてきましたし、続けますか？」

男の微笑みに俺は、【亡霊騎士】と対峙した時とは別の感情の高まりと共に笑顔を浮かべる。

「魔術師、【魔人】を舐めるなよ？　そろそろ、お前の、【魔術】を見せろッ！！」

壁を蹴って空中への疾走。死の舞は二度目の幕を上げた。

＊　　＊　　＊

09．叫喚（きょうかん）（2／4）（後書き）

＜＜－Ｓｉｄｅ　Ａ－　在姫視点へ続く。

１０．叫喚（きょうかん）（３／４）（前書き）

＜＜―Ｓｉｄｅ　Ｂ―　国定視点からの続き。

10．叫喚（きょうかん）（3／4）

―Side A―

『――I summon one from blaze universe in Nodence' name．Repeat，Efreeti，Psalamander！！
――I summon one from abyss universe in Cthulhu' name．Repeat，undine，Slime！！
――I summon one from blow universe in Ithaqua' name．Repeat，Sylph，Hippogriff！！
――I summon one from deep universe in Niggurath' name．Repeat，gnome，Spriggans！！
――I summon one from another universe in Azathoth' name．Repeat，null，Shadow corps！！』

私の喉が一度に『五つの呪文』を紡ぐ。急激に、いつもとは在りえない程の魔力が失われ、『私が地面に零しておいた血液が触媒となって』魔法を起動させる。

それぞれの呼び声に応えて、世界の扉が開き、その場の空間を満たすエーテルによってそれぞれの仮の肉体を閃光と爆音と共に与える。

ノーデンス、クトゥルフ、イタカ、ニグラス、アザートスの世界から、火霊素、水霊素、風霊素、地霊素、そして失名素の力を持ってして、私の世界に五つの異生物召喚を成功させた。

火竜（サラマンダー）、スライム、ヒッポグリフ、そして、久しぶりに召喚し直した地の守護妖精スプリガンに、実体を持たない影の兵士であるシャドウコープスが勢ぞろい。

「Ｇｏ！！」

私の意志を読み取り、火竜は伝承では数千度と言われる業火を撒き散らして獣達を後退させ、十ｔ級の二体のスライムはその身を伸ばして業火の熱波から人質の人々を守った。

緑色の帽子を被った老人の妖精は私の膝くらいの背丈からドンドン身体を巨大化させて、警備員を掴んでいた獣人を殴り倒す。獣人が取り離した所をすかさず、ヒッポグリフに騎乗していた私が警備員の人をキャッチ。それを追撃しようとした獣達を、薄い影が直立したようなシルエットの西洋の兵士三体とスプリガンが行く手を阻んだ。

「何ッ！　馬鹿な！　呪文は一つしか唱えられぬはずだぞ！！」

その通り、魔術師の彼の言う通り、確かに一つしか呪文は唱えられない。人の口は一つで有る以上、言葉は一つに付き、一つの呪文しか紡げない。魔法を刻み付けられた身体は一つの呪文にしか反応しない。故に一つの呪文につき一つの召喚しか出来ないのは世界の理（ことわり）である。

だが、何事にも『例外』なんてものを作り出すことは出来る。
それが魔女ならなおさらである。

九貫の秘法、『圧縮連唱（パイルコマンド）』。
左右二つの声帯を別々に震わし、横隔膜で音を作り、骨を震わせ、全身を口として同時に五つの呪文を唱えられる秘中の秘、理（ことわり）を偽（いつわ）る技法である。

無論、どんな呪文でも唱えられたりするわけでない。予め、パソコンのプログラムのように決められた、選択して練習した呪文のみを同時に出すのだ。つまり、私は今召喚したのと同じ異世界の魔物しか毎回呼べないのである。言うまでもなく、一発で一日分の魔力の九割を持っていく技法のため、むやみやたらと使うわけにはいかないのも理由である。

スライムの中に既に気絶した警備員を放り込んで避難させると、私はヒッポグリフを再び旋回させる。シャンデリアの真下、煌々と照らす灯りを受けて、私は魔術師を見下ろす。
人質を避難させた今、やるだけやってやろうじゃない！

獣人の背後に隠れ、恐れ戦く奇怪な男。
私は口の端をニヤリと曲げて命じた。

「Ｂｅａｔ　ｕｐ　ｔｈｅｍ　ａｌｌ！！　（ブチかましなさい！！）」

火竜はその存在を心の底から震わせる雄叫びを挙げながら、今までで最大の火力を持って口腔から火焔を渦巻かす。

だが、

「やはり魔女、油断も隙もあったモノではないな」

その業炎をまるで団扇で仰ぐように、二つの鉄塊が薙ぎ払った。

業炎の『切り裂かれた』場所には溶けたタイルとショーウィンドウガラス。そこは人では決して歩めぬ焼却場を、甲冑を着た『呪い』が歩く。

熱の巻き上がる風で棚引く黄金の鬣（たてがみ）。その熱波すら凍らせて燃える蒼い瞳と銀白の鎧。その両手には『竜』すら打ち殺す刃物に似た爆発物。

現代最大の【呪い】、テンプル騎士団の亡霊騎士。ガーブリエル・オギュースト。

「ガぁぁーブリぃぃぃエぇぇぇルぅッ！！　貴様、何処へ行っていたのだ！？　私と言う賢者を差し置いてッ――」

そこから先の言葉はゴーグル型のサングラスに、ピタリと、傷付けずに当てられた剣が止めた。残念ながら私の目には、いつ動いたかのかすら分からなかった。

「【魔術師】、我が身は【地獄使い】の攻撃で傷付いていた。それを貴様が『勝算がある』と言うから乗ったのだ。――だが蓋を開けてみればなんだ？　貴様は無実の民を人質に取り、傷付け、あまつさえ皆殺しにしようと企み、あまつさえ失敗するとはなんと言う『体たらく』だ。騎士を呼ぶ戦いではない」

剛剣がスルスルと引かれ、それは私に向けられた。

「だが、ココまで来たなら仕方ない……　【魔女】、貴様の心の臓、

意地でも貫うぞ！！」

その言葉に反応して、五メートルをやすやすと超える火竜が地響きをあげて顎（あぎと）を開く。

牙と言うより乱杭歯に近い、三十センチの刃物群が襲い掛かる。

だが、騎士はそれを真っ向から、一瞬で、一撃で叩き切った。

音も立てずに縦に頭が割れ、同時にこの世界に留まれぬほどのダメージを受けた火竜は風に吹かれた砂粒のようにザラリと消えた。

背後からのスプリガンの巨拳。それを騎士はまるで後ろに目でも付いているかのように鮮やかに回転して交わし、振り向き様に胴体を斜め下から上に撫で斬る。

僅か三秒かそこら、騎士は私の攻撃手段を二つも奪った。

でも空中に居れば、亡霊は空を飛ぶ事は出来なかったはずだ。攻撃する手段なんかない。今のうちに、もう一度召喚を……

だが突然、騎士は剣を逆手に持ち替える。一体何を？

その問いの答えは、次の思考の瞬間には目前に有った。

視界が意に反して動く。ヒッポグリフの羽が翻ったのだ。

制服の上をスレスレで引き裂く白光。

背後のシャンデリアが物凄い勢いで弾ける。

「剣投げた！？」

驚きのあまりに助詞すら抜かす。

レイザービームにも匹敵する投擲剣。ヒッポグリフが反応して避けなければ、確実に私の心臓を抉っていた。

しかも剣は彼の呪いの霊気装甲から湧き出たモノ。次の瞬間には両手に魔力で作り出した剣を携えている。

影の兵士達は獣人の牽制のために動けない。

再び、騎士は剣を逆手に持ち替える。ちょっと待て、その攻撃は抉るとかそんなんじゃなくて胴体ごとブッ潰す気でしょ！？

私はヒッポグリフの機動性を信じて、かわし続けるしかないのだ

ろうか？

いや、大丈夫。私は、いや、『私達』はきっと勝てる。

今はそう信じて、私はヒッポグリフの鷲羽と判断に、今は身の全てを委ねた。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

空中から襲撃。俺は全身のバネを使って飛び蹴りを放つ。狙うは顔面と顎の一点のみ。筋肉の鎧で打撃を止められる以上、顔面への、さらに一撃での気絶を狙う事以外に絶対の勝利はない。

顔、顎、それに類する場所であれば脳を揺らす事が出来る。脳が揺れれば、意識の断絶、気絶させることが出来る。

身長差のある以上、空中での攻撃なら高さでの利はこちらが持てる。

俺はシャンデリアまで届くほど上に跳んで、その顔面を打ち抜くように落ちた。

だが、その俺の機動性に男はやすやすと追いつく。飛び上がりながら、俺の蹴りを外側から魔術師の内回し蹴りが打ち落とす。

俺がそれに対して、魔人の持つ驚異的な空中機動性を使って宙で廻ると、反対の足での蹴りを出す。

狙いはほぼ背中を向いている、がら空きの後頭部！！

――瞬間。

魔術師の攻撃が『それだけではない事』に気付いた。

蹴りを行なった足、その『反対』の足の踵が、横から竜巻のように渦を巻きながら迫る。

二段回転蹴り、中国風に言うなれば旋風脚か。
だが、そこまで分かっているのであれば避けるのは容易い。その足を手で払い落とすように受けるだけ。
瞬転。真下から俺の下腹部に超絶の衝撃。何が起こったのか、俺はその相手の姿を見て、気付いた。

――なんて空中バランスだ。俺の蹴りを打ち落とした蹴りで、もう一度蹴りだと?!

空中三段回転蹴り。それを使える人間、しかも実戦で、これほど使いこなせる人間がこの世界にどれだけいるのだろう? 一連の動きに遅滞はなく、ただただ洗練された舞いである事に変わりはない。人の身で魔人の運動領域にまで達する人間。

俺には何故、そこまでの力が無かったのか? 何故、俺は何も出来なかったのか? 何故、願いは叶わないのか?
混濁した意識は地面に、斜めに叩きつけられる事で再び回復した。受身など取る間もなく、ぶつかった勢いのそのままでゴロゴロと後ろに転がり、間合いを取る。
優雅に、プリマのように着地した魔術師は、ユッタリとした歩みで隙無く近づいてくる。

再び飛び掛る俺。
俺の顔面に逆った男の掌低に合わせて、あえてぶつかるように額で受ける。額に留まったままの、掌低を行なった手首を両手で掴み、腕に密着するように飛んだ。
両足を腕に挟み込み、同時に首と胴に掛け、手首を掴んだ両手と背筋で肘を逆方向に持っていく。
関節技、飛燕腕十字固め。いや、固めるつもりはない。肘を逆に折る。

だが、後ろに持っていこうとする腕は、男が掴まれたのとは反対の手で、俺が掴んだ手首の下辺りをガッチリと掴まれていた。
つまり、俺はまるで抱っこちゃん人形のように魔術師の腕に抱きついているようにしか見えない……
子供の体重とはいえ、ありったけの、魔人の筋力で関節の方向に逆らう動きを止め、さらに同時に支えている男の筋肉も凄まじい。
だが、男は支えるだけでなく、そのまま俺を『地面に叩きつけた』。

「ガッハ?!」

再び持ち上げる。先ほどよりも高く、落とすと言うより叩き付けるための上昇。落下に加えて、地面への急発進、急加速。
内臓がそれぞれを固定する膜を破って、全てが飛び出るほどの打撃。俺の口から自然に出た、胃の破れたドス黒い血が魔術師の顔を染める。
その中央の両眼はただ破壊のためだけにあり、敵意も、驕りもなく、無機質な虹彩。
五度の直撃を受けてから、数瞬。意識が白濁に濁った。
そして、俺は朦朧とした意識の中で、自分が組み付きを解いて本能の内に後退した事に気付いた。
慌てて、睨みつけると同時に構えた俺に男は超然と佇んでいる。

依然として武器を取り出す暇も無いほどの緊張。男のダメージは零のまま、俺との間合いと呼吸、タイミングを計っている。
男が狙うのは完璧なる勝利に他ならない。圧倒に次ぐ圧倒。凌駕する術を持って構築する戦闘支配。
打撃も関節も勝負に、いや小話にすらならない。

ふと、男の輪郭から僅かに外れた先には黒い、澱んだ空と車の証明が発する光の軌跡群が映った。

鼠色の雲が緩々と中天を這いずる中で、俺も這いずり掛けている事を自覚してみる。

空がやけに近い気がするのは何故だろうか？　俺の死期が近いからだろうか？

いや、違う。そうか、ここは地上百メートル上空か……

――もし、ココで魔術師を投げ飛ばす事が出来れば、奴を窓の外に放り投げる事が出来れば、戦況は一気に逆転。それどころか打ち勝つ事すら一瞬で出来る。

……取っ組み合いか？　彼我の能力と彼の筋力の差、それを埋める事は叶うのか？

記憶が蘇る。

――そうだ。俺にはあった。彼に対抗出来る技があったのだ。長い間、この二百年は使った覚えはない。身体に残っているのか、それすら疑問と疑念に駆られる月日。

いや、それでも俺は負けるはずがない。特に取っ組み合いで俺が負けるはずがない。

熊すら片手で投げ飛ばすと、歌にすら詠われた、俺の『力技』が負けるはずが無い。

俺は両足を開いて、身を屈める。両手は拳のまま、軽く地面に付ける。

「相撲ですか」

男はちょうど、土俵の仕切り線と同じ位の所に立つ。そして、同じく、両足を開いて構えた。

「余興と言うか、貴方に挑戦してみるのも悪くないですね。ちなみに僕は身長こそ百七十センチかそこらですが、体重は六%の体脂肪を除けば百二十キロはやすやすと超えています。それは承知ですか？」

相撲は最初の立会い。ぶつかり合いの衝撃で、頭部だけでも掛かる衝撃は一ｔ近い。体重が違えばその全身に掛かる衝撃の量もまさに段違いに、桁違いに違う。

それでも、

「発氣用意（はっきよういー）……」

勝てる自信は有った。

全身を巡る霊気装甲が今まで駆動しなかった人の神秘を為そうと漲（みなぎ）る。

それは俺の体内でしか伺い知る事しか無い事。体表からは計り知れないほど俺の『力』が体内で背骨を伝って螺旋し、隆起する。

それは絶対的な勝利に結びつく、ただ一つの奇跡。

「――残ったァッ！！」

仕切り線、七十センチ内での剛力と剛力のぶつかり合い。妥協の余地もなく、体一つを弾丸と化す最強の国技。

百キロを超える男達が互いの腕力と突進力を信じて臨む神聖なる闘争。

そしてぶつかりあった瞬間、勝負は決まった。

魔術師は声を出す間もなく、『押されていく』。四捨五入すれば百キロ近い体重差を、俺は物ともせずに押していく。

靴の摩擦係数など関係なく、二日前に嗅いだゴムの擦れる音と臭いが発生。彼の筋力全てに俺の突進力が反逆する。

既に魔術師の背後、一メートルまで迫った一枚板のガラス、それより先は目下百メートルまでの垂直落下のコードレスバンジージャンプ。

「噴ッ！！」

魔術師は気合と供に筋肉を全稼動させる。押し出す力に絶対的な体格の差が現れる。

それでも、俺の突進力は些かも衰えない。肉体、技術、気力、そのどれでもない、絶対的な勝利の方程式を叩きつけていく。

ゴムの臭いはますますきつくなり、さらに彼と俺の爪先の抉りこんだタイルが砕ける音を立てながら背後で弾けていく。

覆い被さるように俺を止めようとしていた魔術師の体が、ついに俺の突進力で、完全に浮いた。

「しゃだらぁぁぁぁぁッ！！」

弾ッ！

子供の手垢のついた一枚板のガラス。そこにピタリと、魔術師はまさに肉薄した音を立てた。背中につくガラスの冷たさは死への冷たさを予感しているかもしれない。

精緻なガラスに罅が入るかもしれないな、と思った瞬間、俺はそこで突進を止めた。

濛々と煙立つ背後。俺が魔術師の攻撃を避けた結果、破壊され、竜巻に巻き尽くされたようなコンクリートの背景。それに比べれば、その線路のように刻まれた二本の線、爪先がめり込んだ痕など大した事はないだろう。

「何故、止めてしまったのですか？」

魔術師は、あくまでも戦闘への中断へではなく、絶対的な勝利を持った技。それを止めた事について聞いた。

俺は持ち上げていた魔術師の身体を下ろすと、魔術師に顔を向けたまま後ろに下がった。

あぁ、昔の悪い癖が出ちまったな。

俺は皮肉げに口の端を歪めて、その問いに答える。

「あんたの技を見ない内に倒すのが惜しくなったんだよ。等ぶるに力比べけむ、って相撲の神様も言っていただろ？　ただの殺し合いじゃなくて、熱くなったら互角にしないと詰まらないだろ？　日本書紀を読んだ事無いのか？」

当代の天皇の名によって、最強と伝えられた二名が召喚された。最強に名高い相撲の達者、當麻蹴速を負かすため、出雲国より呼び寄せられた闘争者、野見宿禰。

日本で最初に行なわれた打蹴投極、何でもありの、殺人すら許容された角力と呼ばれた頃の原始の喧嘩相撲、その最初の記録である。そして天覧試合で蹴速は腰を砕かれ討ち死に、最終的に神として祀られた相撲の神、宿禰。

「神様達が『等しく力を比べたい』って言っていたんだ。俺が相撲への恩寵を受けて、それを使っている以上――」

再び、架空の仕切り線に身を沈める。

「――魔術師のお前も等しく【斬刑】を使わないと意味がないだろう？」

在姫が目の前に居なくて良かった。実に馬鹿だ。救いようもない悪癖なのだ。それでも、その熱さが俺の、記憶以外に残った唯一のものである以上、俺はそれに従いたかった。

熱く燃えるのも、長生きする秘訣だ。

「大陸では孔子様が『礼記（らいき）』で「武を講じ、射御を習し、以て角力す」って言っているしな。ここは礼を持って、等しくしようでないか」

未だに劣勢ながらも、思わず晴れ晴れと笑ってしまった。魔術師も苦笑とも何とも取れない表情を醸し出していたが、何かに納得するように頷くと、構えを変える。

異様だった。八卦掌の構えではない。足先を俺からズラして、斜めから俺の攻撃を効率良く受けていたのが彼の技法だった。

しかし、今や肩幅よりやや広げた両足先はコチラを向け、肉弾のようでありながら、筋肉塊の胴体が限界までに捻られている。柔軟性などとも言えない程、肩関節やら肋骨やら背骨の限界可動域を試す、そんな捩れ方。螺旋の力を効率よく使う『勁』の技法、纏絲勁（てんしけい）とはまったく異なる、中国拳法のどの構えにもない異常性が滲み出る。しかし、肘を天井に向けて鉤状に曲がった右腕の先と胸に添うように当てられたそれぞれの手は八卦掌で『牛舌掌』と呼ばれる『手刀』のままの形態だった。

足だけをコチラに向けて、顔をコチラに向けてほぼ背中を見せた状態。これで必殺が繰り出せるのか疑問よりもインチキさの漂う体法。

……それでも、魔術師から発せられる殺気や兇気は尋常でなく、今までで一番放射する気配で最も強い。

俺の戦闘思考が『警　告』の二文字を浮かばせる。

俺も顎を引きながら、必殺の構えを取った。次の一撃、俺が疾(はや)ければ魔術師が吹っ飛び、魔術師が疾ければ、おそらく名の通り斬殺されるのだろう。

「発氣用意……」

魔法使いの呪文にも似た言葉の暗示。それは再び俺を一つの弾丸へと変える儀式。山獣の王者を放り投げるほどの能力(ちから)、ここで見せてやろう！

「魔人、首斬に処(しょ)す」

魔術師もそれと同時にまったく呼応するように、短く、謡うように自らの呪文を唱える。

常人なら吐き気を及ぼすような圧迫感と危機感。お互いの額から汗が垂れる。

肌の汗腺から、汗が滲む間にも視線で七度殺し合う。

瞬きたりとも出来ぬ、緊張すら廃絶する圧迫感。

お互いの言葉が、鐘の音のように――静寂、無と消えた瞬間に、

動いた。

「――残ったァッ！！」

「――殺（シャ）ッ！！」

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

粉雪が飛ぶ。それは幾千モノ、散り散りと舞う硝子の片。ホール照らす燐光に乱々と反射、屈折、光輝し、辺りに降り積もる。

燦々と木っ端する硝子達の元は豪奢な、私の後ろのシャンデリアである。そのシャンデリアを撒き散らすのは一つの凶器。

硝子とは対比にもならぬ荒々しさと重厚さを持つ鉄塊。それは剣と呼ばれる武器であり、人の手で振るわれる物である。

だが、その凶器は振るう使用者の手中では無く、一つの弾丸となって宙を疾走している。

投擲剣。実際にある技法にしろ、その威力は人の手で巻き起こせるモノではない、純然たる怪奇中の怪奇。

【亡霊】、生前の思いを遂げられずに天使に回収される事も、地獄に堕ちることも無く現世に留まり続ける現象。不可視の束縛よりも強く、地上へと束縛される記憶の宿った力の塊。その最も強く、その思いによって【呪い】として現実に干渉、いや現実を掌握しようとする存在を【亡霊騎士】と私達、魔女は呼ぶ。

その亡霊騎士でも西欧で最悪の部類に挙げられるのが、ガーブリエル・オギュースト。悪名高き『テンプル騎士団』の騎士長で

ある。

約六百年前、テンプル騎士団は教会の人間によって打ちたてられた騎士の組織である。しかし、何時からか？　教会の理念は失われ、象徴である赤い十字が象徴するものが罪を流す血でなく、罪、そのものであると知れる頃には教会が隠匿出来ないほどの事態にあった。

曰く、神でなく、魔王に身を捧げた。
曰く、儀式の為に妊婦の胎を裂いていた。
曰く、その嬰児を取り出して魔王に捧げた。
曰く、赤子の生き血を啜り、丸呑みにした。
曰く、そして魔王の眷属となった。

それが真実にしろ、虚偽にしろ、教会がそれを許す事なく、その組織は解体、全ての当事者と責任者は処罰された。

その中の一人、高名な【責任者】にして、その身を『本当に教会の目的のみに捧げた真の騎士』【ガーブリエル・オギュースト】は無実の汚名を着せられ、その断罪のために生贄の子羊となった。

私財没収、縁者皆殺、名誉剥奪、汚名授与、そして、当時のあらゆる拷問刑を受けた上での首斬刑……

その背後で手引したのはテンプル騎士団のあり方を変えた一人の【魔女】と言われていた。噂が噂を呼ぶうちに彼は【亡霊】として蘇生し、主人は無く、自らの復讐に従事する【亡霊騎士】となったのだ。

海を越えた大陸では、殺した魔女は百年の間に千を超え、教会の昇天呪文【聖葬詠唱】すら断ち切り、教会の斬殺を繰り返す悪鬼。

その数にも比する魔女への怒りは凄まじいモノだ。怒りによって漲る力はランゲヴェリツ・プロセスなんか通り越して、限界どころ

か人外の所業であることは明白だ。
自然界から怒りと怨念を持って、強制的に引き上げる力。そして、それをありのまま渦巻き、吐き散らしている。
そして、散らすのは突風では無く、剛直な剣風。

一直線に魔女を狙う剣は、心臓を抉ると言うより圧壊させると言うべきだろう。しかも、わずかに掠っただけでもその箇所が勢いで斬殺、爆殺させられる。

それをヒッポグリフィスは鷹の双眸を持って、最初の動きを見切り、避け続けていた。召喚者を守るために双翼を翻す姿は、神話と同じ勇猛さと主への忠実さを表す。
しかし、その身体は私のスッカラカンに近い、そこから僅かに流れるか細い魔力の維持のみで支えられているのだ。普段の百%の供給量なら悠々と避けられるモノが、時折白い羽毛や黄色の毛皮の下から細かな鮮血を撒き散らす。
痛みが召還獣に感じられるかは分からない。彼の見て感じたモノを知覚することは出来ても、それをどう感じたかを共感する事は出来ない。だが、彼はその意思を言葉でなく、ただ回避と言う行動で表されている。
私の頬も、後方のシャンデリアが砕ける度に硝子片で赤い糸を引く。しかし、そこに痛みはなく、ただ私の中に内在する魔力を流動、維持させる一つの機械となって私は、私の心臓は動いている。

眼下では三体の影の兵士達はそれぞれの体が他と入り混じりながら、七つの獣との攻勢を続けている。魔術師の男はウロウロとただ右往左往するだけで何も行なってはいない。
お陰で反対の非常階段からは、男が手札として残すべきだった人質、一般人達は逃げる事が出来ているようだ。あの警備員も神南高校の制服を着た学生達に、背負われ、運び出されている。

イカれた獣達から私の兵士達には支障はない。ただ影、二次元の住人である彼らには三次元の物理攻撃は意味の無いモノだ。しかし、影に有りながら三次元への影響力を持つ影の騎士達は、硝子を爪で引っ掻くような音、奇声を挙げながら獣達の体を引き裂いていく。大して獣達はそれを引き剥がす事も出来ずに、それぞれの武器、棘の付いた球体や鉄爪と言った原子的な武器を自らの身体に叩きつけて自滅しかけている。

それでも吸血種の因子を埋め込まれた彼らは、獣人種の生命力と合い余って全身から血噴を撒きながら生き続けている。影の兵士達が居なければあの狂戦士（ベルセルク）が解き放たれると思うとゾッとする。

そしてその感覚と合わせるように、電気が背中を駆け上るほど、近くを飛び荒ぶ無骨な鋼。

さっきよりも投擲の間隔が早いッ！　見れば猛り狂った亡霊は片手で剣を呼び、片手で投擲をしている。効率を上げてきているのか？！

攻撃的な呪文を一通り考えたが、どれもビルを丸ごと吹き飛ばし兼ねない上に、霊気装甲としての格上の亡霊にはかすり傷さえ負わせる事は出来やしない。

彼を傷つける事が出来るとしたらより上の、ハッキリ言って大禁呪級、大魔法級の存在消滅法か、己よりも強い者のみを斬ることのできる交霊武装、魔王刀でも無いとやってられない。

もしくは彼と同じ霊体の【魔人】のような男でなければ倒すことは出来ない。

まったく、あの高所恐怖症馬鹿は一体何をしているんだ！？　か弱い魔女を一人置いて、デブちん如きにまさかボコボコにされて、あまつさえ余裕も無いのにその勝負を楽しんでいるのでは無いだろうか？！

その私の怒りに血の昇り掛ける思考を、目の前の鋼（げんじつ）が呼び戻す。
頭を伏せる。轟音重来。
頭の元々在った位置を凶器が通過。手を当ててみれば一本だけ出ていた癖っ毛が少しだけ短くなっている。

あの野郎……　女の命（髪）を切り取るとは何事だぁ！！
私の微妙に泣きそうな気持ちとは裏腹に、蒼く燃える瞳が直視する。乙女の怒りを矮躯に秘めた、睨み返す私に尚のこと執念を燃やす。
そこで私は気付いた。今まで片手で投げて、もう片方で作り出していただけの剣が、今は両手。その双拳に握られた剣は小指に刃を向けている。その先ほどのダーツに似た投擲スタイルに使っていた逆手ではなく、今は剣を振るのと同じ、親指に刃を向けた順手。いつかの国定と戦った時の構え。
どれほどの怪力を秘めたのか分からない双腕が、苦も無く鉄塊を二振り、同時に頭上にまで上げられ、肩の、鎧の上に置かれる。重みで鎧を破壊しないかと、そんな下らない事を考える暇は一瞬しかなかった。

そこから両肩に担ぎ上げた剣が、それまで真っ直ぐ、ダーツのように投げられた状態から『横に振られる』。

斜めに、カーブするような変速的な軌道を持って迫る双つの剣。
霊気装甲の作用を付加された剣は中途から、曲がった軌道からにも関わらず、それを無視して加速する。直線よりも速く、到達する時間も瞬きよりも早く。
その片方が斜め右下と左真横から迫る。避ける暇なんて零、零、零、零、零、零、零、零……

熱い紅が、私を赤く染める。

ヒッポグリフィスが鷹に似た甲高い悲鳴を挙げた。

私のヒッポグリフィスは、その片方、斜め右下を振り切り、左真横に胴体から突っ込んだのだ。

私の乗っていた、ヒッポグリフィスの背中からちょうど後ろが吹き飛ぶ。巻き上げられた血の量は消滅を意味するほど、それでも彼は最後にもう一度、千切れ掛けた羽を大きく動かし、スロープになった場所、逃げ遅れている人質からも、亡霊騎士から遠い場所に墜落した。

背中から転がるように飛び降りて私が抱いた鷹の頭は、光の粉を飛ばしながら、短く「好（コウ）」と鳴いて、重量を完全に無くした。

悔しい。確かにこの世に仮初の肉体を与えられただけの、他の世界の住人だ。何度でも、呼び出そうと思えば呼び出せれる。それでも、私を慕い、私を命まで賭けて守った存在が消滅させられたのは、途轍も無く悔しい。

眼に力を込めた私を、剣を投げた場所からまったく動く事無く、そのまま再び剣を持って佇む【亡霊】。

生き残らしてくれた命を無駄に散らすわけにはいかない。

それでも歯痒いほど、霊気装甲の薄くなった私を【呪い】が束縛

する。必死に力を込めても鼓動は私の全体に響かない。

「爆砕しろ、魔女」

二度を持って、担ぎ上げられた剣。それは再び回避不能な軌道を描きながら、私を爆殺するのを幻視する。

本当に、どうにも、何か方法はないのか？　魔力の枯渇しかけた体が、少女としての心を取り戻して、ただ震えてくる。怖い、単純にあの巨大な刃が怖い。国定、お願いだから、意地悪しないで早く……、早く来てよ……

亡霊の瞳が一際大きく輝いた時。

些か間抜な、エレベーターの到着音。遅れて扉が開かれる。騎士はこの事態に驚いて、剣を僅かに挙げたまま硬直している。

私はすかさず柱の後ろに隠れたが、騎士は反応すらしなかった。

異様な人物だった。下はまともなベージュのズボンだが、黒く、吸い込まれそうな半纏姿。その半纏の下の上半身に、顔を含めて完全に包帯を巻かれ、頭頂の髪の毛だけがヤシの木のように立って、包帯の先から毛の見えている。両手には鎖のついた巨大な両手用の斧が握られている。

黒い鹿皮のブーツが音を立てて亡霊に近づく。

影の兵士を無視して、その怪人に改造獣人が殺到する。

次の瞬きの瞬間には、獣人達、全てが斬殺されていた。再生能力を破砕する兵器によって回復は覚束無い。そして、最終的にはグズグ

ズとミュータンジェンのような桃色の液体に変わってしまった。

怪人は周りを見渡すと、騎士に、標的を定めた。

「日本国冥府所属　死神公社　死霊課　若原　曲　警視。ガーブリエル・オギュースト、魔女連続殺人容疑、及び不法越境に加えて私物損壊と魔女殺害未遂。死神公社の名の下【現行犯斬殺】する」

騎士が剣を降ろす。それは降伏でも、剣を投げるためでもなく、唯一戦いのための洗練された構え。

騎士は獲物の私よりも、目前の、自分を斬殺に追い込む脅威を殲滅する事を選択した。

「死神だな？」

騎士の確認に、包帯越しの瞳が細められ、巨大な斧が無言で、両手で腰だめに構えられた。

「そうか……、私の邪魔する者は……、例え『死』でも踏襲しようぞッ！！」

銀光が目映く煌めき、刃金と刃金がぶつかった。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

地面とほぼ平行。前に進める、足と言う支え棒がなれば、顎を着くほどの低い弾道で俺は突進する。

一歩にして高速、二歩にして音速、三歩を経て、光速へと至らんと加速。

体当たりと言うものほど、単純で、合理的で、これほど凶悪な打撃はない。全体重を持ってして、あらゆる古来の打撃技法で効率良く目標を粉砕し、転倒させる極技中の極技。

その虎のように伏せた俺がそこから僅かに舞い上がると同時に、

相手である魔術師が「屍(シ)ッ」と短く呼吸をする。

――同時に、筋肉が弾けた。

始めは、ユックリとした海の胎動のような動きだった。だが、それは俺が三歩目を踏み出す頃には津波のように、水面に隠された大きな対流が全身を流れている。知覚出来ないほど細かく分けられた筋力は、それぞれの方向性を持って正しい流れを定める。それは雷雲の彼方で今か今かと落ちるべき場所を静かに探している雷雲のごとく、その一撃はそれ以上の必殺。伝説にもある雷神を切った刀、『千鳥』のような研ぎ澄まされた技。

俺の荒々しさに対抗すべく、電光の一撃のみに掛ける。

そして、俺の小脇を締めた体勢の、額と掌が当たる直前。

光が奔走した。

視界の端に映った両腕の肘から先が、あまりの速さに見えない。単純な速さ、音速の手刀、首斬、斬撃、斬殺、斬刑。

だが、頭で分かっていてもコチラも必殺となって居る事は分かっている。今更、攻撃の軌道は変える事は出来ない。出来たとしても更なる、追撃の的になるのみ。

――つまるところ、俺が光よりも速ければ倒せるという事だ。

光を両手に纏った魔術師を突き抜けるような、強引なイメージ。

意識が気力を導き、気力が力を引き出し、力が技を変える。

更なる加速。その加速で、スレスレで斬撃の結界の内に入った。
横に振られた剛刀、左の手刀を直前で潜る。痛快な程に凶悪な空裂音は僅かに俺の背後。
魔術師を轟然と吹き飛ばした。

だが、その刹那、魔術師の、右の指先が俺の左腕を触れていた。
斬、と冗談のように骨と骨、関節の間を縫って手刀が左腕を吹き飛ばす。
まるで本物の刃物のように、人の体が肉を斬った。筋や肉の吹き飛んだ腕はその身体を繋ぎとめていた圧力の反動でクルクルと回りながら、斬撃の衝撃によって後ろに戻っていく。左右の手刀の二段構えだったのか?!

だが、それでも俺の踏み込みは止める事は出来なかったが……
地面と言う支えを失った魔術師の、吹き飛んだ体の制御など出来るはずはない。熊殺しの秘法とも言える体当たり、まともな人間が食らえばダンプカーの衝突、いや、飛び立つ直前の大型旅客機の衝突と変わらない。
魔術師の男のぶつかった衝撃で、たわんで砕けた闇色のガラスが四散する。ガラス達は重力を忘れたかのようにそのまま同じ位置を留めて、やがて落下した。

「な!」

肝心の魔術師は――、なんて奴だ!
『先ほどの俺と同じ様に』、清和源氏に伝わる秘法である【浮身】で衝撃と共に飛んで、反対側のビルにまで跳んで移っていた。
重力に引かれて落ちたため、彼は俺よりも僅かに下の階に留まっている。
一瞬でもタイミングでもズレて、遅ければ体当たりの衝撃で頚骨

くらいは衝撃で粉砕され、早く跳び過ぎれば反対側のビルまで辿り着く加速を得られない中での、刹那の十分の一以下での判断。

この男はヤバイくらいに強い。

割れたガラスのコチラとムコウから、覗くように三度、魔術師と俺は睨み合う。

だが、魔術師は体当たりで胸骨が凹んだためか？　先ほどの木目細やかな呼吸をせず、遠方から見ても分かるほどに肩を使って粗くしている。口の端から血をダラダラと垂らして、視線の方向を見失い欠けている。

対して俺は、腕を切り落とされたとは言え魔人。この程度の負傷は障害にはならない。

――左肩関節神経群痛覚域遮断。一時的措置による部分循環止血完了。偽装措置。再生組織の為の帰還措置組替え――

視線を伏せるように背けた魔術師は胸元を抑えながら踵を返す。足も引き摺っているのは、やはり人の身体では落下と飛ばされた着地の衝撃に耐えられないと言うことか。膝くらいは壊しただろうな。あの負傷と機動性の度合いなら在姫のガントでも一撃で何とかなるだろう。

俺も魔術師の退却に合わせて、振り返って自分の腕を拾ってくっつける。

――患部接合。全神経接続。霊気装甲復元、展開、流動。情報流転再開――

途端に、我慢していた痛みが顕在化した。嫌な、熱を持った粘り気のある汗が額を通って首筋に垂れる。白目を剥きそうになったと

ころで歯を食い縛って、右手で左肩を抑える。
強制再生した細胞が熱を挙げて、白い煙を挙げていた。
とにかく、荒い息を隠さないと後で在姫に何かを言われそうな気がした。
在姫……
振り返った、反対側のビルのガラス越し。そこには在姫と【魔術師】と【亡霊】と、【死神】が立っていた。
＊　＊　＊
―Ｓｉｄｅ　Ａ―
三つの鋼の舞踏曲（ロンド）。
打ち重ねられる音と共に、その見えない速さの刃と音を視覚化するように火花が散り散りと霧散する。
二つの鋼の打楽器を遣うは亡霊騎士。なんど説明しようと信じてはもらえないような二振りの剛剣。一刀の長さは一メートルほどの普通の剣とは変わらない。しかし、その太さと幅は一つ半倍、いや二倍にまで重ねた鉄塊だ。それを両手に持って、身体を正面に向けたまま、肩から先の筋力だけで打ち重ねる。しかし、一見力だけの打ち込みに見えるそれは、そこには力だけでなく技の加味された至極の殺人撃が待ち構えている。生前に鍛えられた肉体は呪いと言うプロセスを経て、正しく最高最悪の亡霊の騎士へと達している。その肉体の大半を覆う白銀の、美しい薔薇の意匠を施した鎧は絶対の防御を施している。しかし、顔面には額当てすらなく、その凄烈とも言える異国の美しさを晒している。金髪の、右の片方のもみ上げをお下げのように結い上げ、金糸のような金髪を肩より上までに伸ばした碧眼の男性。いや、碧眼と言うよりも時折チラチラと光を上

げる瞳は蒼い、呪詛の冷たい炎と言っても過言ではない。
その炎を切り裂こうとするのは黒衣の怪人。おそらく、ほぼ全身を包帯で締め上げ、頭頂ではチョンマゲのように、あるいはヤシの木のように包帯でそのまま結い上げた髪が揺れる。闇を、夜の帳の一部を切り取ってつけたかのような半纏は怪人の動きに反して、まるで意志でもあるかのようにのたくり回る。アメコミのコスチュームかしら、アレ？　そして、その怪人の両手には剛直な、亡霊にも負けない刃が携えられている。両手用の斧、鉞（まさかり）が空気を割るように、横から振られる。あの細身の体の何処から力が湧き出るのか？　腕と同じくらいの長さと太さの鉞の柄と人の頭部より重たく大きな刃を持って、二本の騎士の剣を巧みに反らして打ちかかる。その動きは魔人と比しても劣らない。

【死神】、魔術と錬金術の粋を規して造られた転生による人造の人外。下級の神、魔すら問わずに打ち殺し、昇天させる対魔組織の尖兵。

打ちかかる騎士の剣に対して、身を屈め、同時に翻った半纏が騎士の足元を払う。布のように見えた断面はまるで意思を持って巻き付き、その足を掴んで転がす。しかし、転がる直前に騎士の肉体がボヤけるとそのまま霊体の形を変えて、直立の状態に戻しながら再び実体化する。その実体化と同時に唐竹を割るような、真上からの斧の斬断。しかし、瞬時に身を斜め、半身の状態に変えて、その場の勢いで片手での突き。それを斧の刃の横にある部分、刀と同じでそれよりも断然に広い鎬（しのぎ）で斜めに弾く。

と、ここまでが私の目で捉えられたところだ。それから先は魔力を通して強化した視覚にも捉えられない。例えるなら、走行中のタイヤのロゴを判別するのに等しい、それほどのスピードなのだ。少しでも好奇心で近づいて巻き込まれたら、あまりのスピードの凄ま

じさに弾けるように体が四散するに違いない。
だが、亡霊騎士は下級の神魔にも通じる程だと言うのか？　一切の油断の無い変わりに、死神の挙げていく力とスピードと技に易々と着いていく。

私はこのまま逃げるべきだろうか？　私の与えた魔力でなら、暫くは影の兵士達で獣人は足止め出来るだろう。
だが……、

「よくもここまで、やってくれたわね？」

背後に近づいてきた、イカれた魔術師を逃すつもりは無かった。
片手を腰に当てて振り向く。先ほどの秘術で魔力は細々としたものだが、まさか
に負けるほどでもないだろう。
加えて、スロープのお陰で些か視点が上のため、見下すように言えるのはやたら心地が良い。
スロープ下、十五メートル先のモジモジくんもどきの変態全身タイツをどう調理しようか、と考えながら見据える。
しかし、その魔女の不敵な視線にも関わらず、魔術師はクツクツと嗤い出した。
「何がおかしいの」
私の睨みつける所作にも気に止めず、首を縦横に、いや回転させながら狂った嗤いを続ける男。
そして、キッカリ五秒でピタリと嗤いと同時に珍妙な動きも止まると、魔術師は言った。
「これから魔女を殺す事が出来ると、楽しくてままならなくてな」
色々と事前の準備が掛かるために元々から動いているはずである外部の、魔術を起動させるための霊気装甲の流動は無い。この距離なら魔術の発動の前に、フィンの一撃どころか、ガントの一撃で倒

せるだろう。まったくおかしな魔術師だ。魔術師が準備無しに魔女の前に来るのは可笑しいとしか言い様がない。

「遺言は何かしら？」

私の台詞に男は再び狂った嗤いを見せた。イライラする。

「一体全体、何が可笑しいのよ」

私の殺意の篭った視線を、肩を震わせながらも視線を向け返した。

「まさか、一日に同じ台詞を二度も受けるとはな」

男はカクカクと首を震わしながら、一歩踏み出す。

「どう言うこと？」

私の問いに男は立ち止まった。それと同時に首を斜めに傾けて嗤いだす。

「昨夜の事件を知らないかな？　見せ掛けの実力を持った量子物理学者もどきを殺してやったが、どうやら無能な警察は自殺としか判断出来なかったようですな」

……そう言えば、そんな特番を見たと国定はさっきのバスで言っていたかもしれない。確か三年前に新しい物理理論を学界に突然持ち出して、無名からノーベル賞受賞で一躍有名なった人だったのは記憶に新しい。

「……まぁ、私の研究を盗んだ罰だ。まぁ、彼の実力では私の出した真の研究の成果を出す事が出来なかったようだがね」

「なっ、あ、アレは盗作だと言うの！？」

「その通りだ」

私の声に男は指立てて肯定した。

「四十年も研究を続けてきた。妻も娶らず、子供作らず、私はただ一人研究に没頭し、ついに新しい理論とその研究成果を生み出したのだ」

男の指先が拳と変わり、片方の手を後ろの腰辺りに当てて、演説のような自らの独白を繰り返す。

「大学からも見放され、隣近所からもイカレていると言われている事もまま在った。それでも私はただ一つの事実、真実のために、全てを犠牲にし……、それを全て奪われた」

男が、ゴーグル型のサングラスを外して、頭のタイツを剥ぐ。その下は爛れて、蝋のように崩れ、一部の肉が剥がれた顔だった。瞼は肉が溶けてほぼくっ付いた状態のため、開けているのか閉じているのかも判別できない。頬の一部の穴から呼吸のために横から空気が漏れ、透けた肉がゴム膜のように膨らんだり、縮んだりを繰り返す。その肉の腐った臭気に思わず、顔をしかめて、背けたくなるのを我慢して睨みつける。

「奴は何処からか聞きつけて私の助手として志願した。資金作りと話術以外は無能としか言い様がなかったが、私の研究は大いに飛躍した。その完成と同時に奴は私を焼き殺そうとしたのだよ……。未だ体表の八十%が皮膚呼吸も不可能だがな。そこを私は【元魔術師】と言う男に偶然にも助けられた。そして、始まったのだよ。復讐が。そして、昨日呆気なくも終わったのだがな」

男はタイツを被り直す。

「そして私にその元魔術師は言ったのだ。全てを元に戻すために時間を戻すのは現在の科学では不可能だ。だが、【魔法】なら可能だと」

男は私に近づいてきた。

「研究と復讐に費やした私の身体は長くはない。願わくは私は元に戻りたいのだ。分かるか？　全ての無駄を削ぎ落とし、その費やしたモノを奪われ、それに朽ちる男の惨めさがッ！！　結果は全て分かっている。私はもう一度、別の人生をやり直したいのだよ。それが、科学に反するとしても願い、叶うなら欲しいのは当然であろう？」

男は揺ぎ無く進んでくる。

「さぁ、この憐れな男に第二の生を与えられるのなら、ここで退こう。もし、叶わぬのなら……」

男は腰に当て、振るっていた双方の拳を広げて、何かを、頭上から迎えるように広げた。
「私自身が、再び研究して叶えよう」
……なんと言うか、呆れて私は物が言えなかったが、ようやく口に出した。
「つまり、自分の研究が無駄だった事に気付いて、人生を無駄にしたと思ったからやり直ししたいってこと？」
「貴様」
魔術師の首が、コキリと左斜めに傾いた。
「人生無駄にする研究だなんて気付くなら、最初からやらなければいいじゃない」
私の人生は私が選択し、私が望み、私が目指し、私が叶える。
「今更自分のした事に未練を持つなんて男らしさの欠片も無いわね。だから、貴方について来るような女性もいないし、慕うような隣人も居ないし、隙だらけだから実験を奪われるのよ」
私の、原初の理由が憧れだとしても、それを目指すのは私の意思に他ならない。だから、私は私のする事に後悔はない。
と、言うわけで。
「とっとと未練を昇華させて、見逃してあげるから一人で整形外科病棟に行きなさい」
私の溜息と同時に吐いた言葉に男はおこりに掛かったかのように震わせながら、コチラを禍々しい瞳で見入る。
「……そうか、ならば強制的に心臓は頂こう」
……アンタ、そんなカンシャク持ちだから友達居ないんじゃないの？　と言って更に沸点を上げるのも可哀想に思えてきた。
「交渉は元から決裂してるのよ、惨めったらしい言い訳でも電波でも聞かせたいなら……」

指先に溜める魔女の呪い。
「精神病院のカウンセラーにでも行きなさいッ！」
打ち出す。反動は無く、ただ、脱力感と体の熱が奪われる感覚。
凶悪なまでに凝縮した魔女の呪いが指先から放たれる。

それを男は地面に『沈んで』避けた。
男が完全に地面に『　沈み込む　』。
「……へっ？」
と気の抜けた、実際何が起こったのか理解してない私の頭に、同時に危機感と言うものか？　そんなモノを感じて飛び退くように体が無意識に後退する。
ほぼ同時に、タイツの装着した手が水面から出るように私の居た位置を薙いだ。
男は顔だけを地面から出す。

「これが、私の研究成果の真価だ。全身のタイツの発する振動が他のあらゆる物体、微粒子の綻びの間を通り抜けさせる。つまり量子的な隙間に私が同時に存在すると言う研究の成果だよ。もっとも彼は『実演』をすることは出来なかったようだがね」

そりゃそうだ。そんな気持ちの悪いタイツなんて誰も着たくはない。
「さて、私の【魔術】、いや、『　科　学　』にどう対抗するのかな！　実験開始だ！」
男は再び、地面に潜る。

つまり、私の残り１０％を切った数少ない魔力による、ガントを使ったモグラ叩きの開始を意味していた。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｃ―

死神は焦っていた。何を焦っていたのかは言うまでも無い。

――騎士のその技量。
――騎士のその速度。
――騎士のその膂力。
――騎士のその切迫。
――騎士のその存在。

全て、死神として凌駕すべき要素を亡霊は追従してくる。

その性質は死神の枢機、静謐の死に対して、激情たる憎悪。
怨と殺を持って振るう凶器は、死神の、両手斧と言う特大の得物や最小の梃子の力で最大の力を引き出す槍を持ってしない限りは弾く事すら出来ないだろう。
呪いとは二つある。相手に叩きつけるモノ、そして、自らを蝕むモノ。
彼の中心にある呪いは、相手に叩きつけながらもその実は自らを未来永劫に渡って蝕むものである。
呪いが狂気を生み、狂気は力と成り、力は凶器を振るう。

殺意を振り撒く永久機関と化した者。

戦う死神自身も、若原（わかはら）　曲（まがり）もその本質はよく似ていた。曲の所属する家系、若原は古来より戦闘至上主義を旨とする武闘派集団にして、死神でも屈指の、最高の戦力とも言える【交通忌動隊】の面々を弾き出すエリートの血筋である。彼らは幼少の内に狂気を身に受け、その身を【亡霊】と化して、さらに転生して死神として永遠に

戦う姿に変化させる。
　無論、曲も傍系の血筋。直系ではないながらも若原の名を受け、曲は死神公社の本部で、戦闘とは関わりの薄いながらも課長に冠するほどでもある。無論、本部の課長クラスとも言えば、中級から上級の神域にも手も届こうかと言う化け物の別称である。

　しかし――

「ぐっッ……」

　横殴りに頭と腹、同時に叩きつけられた場所を縦に構えた斧で防ぐ。しかし、その衝撃を感じたと同時に、軽装甲、低重量の曲は吹き飛ばされた。更に、空中に吹き飛ばした曲を追い駆けるように空を疾駆する騎士。その騎士の三度、両手のそれぞれの剛剣での突きを斧で回転させて受ける。飛散する火花。そして、僅かに二階のフロアに曲は先に着地。いや、接地したその場で斧を背中から、弾けるように斜め下から切り上げる袈裟懸け。
　空中の騎士は叩きつけるように双剣を振り下ろす。ならば、無論の事ながら宙にいる騎士が不利のはず。が、一瞬よりも僅かに長い拮抗。

　跳ね飛ばされた騎士は元の広間へと、金属の足鎧を僅かに音を立てて着地する。

　睨み合い……

　死神としての優位の見せつけられなかった曲は目に見えた疲労は無い。しかし、常日頃から蹂躙にも等しい制圧と斬殺を繰り返していた僅かな精神の欺瞞から、精神に微少にして微小の亀裂が走った。

熱く滾る力が奔走し、身体に巻いた包帯を弾けそうな程である、自らの力の劣りに対する怒り。

兜の被らない騎士の顔には、その冷徹な容貌にも似た余裕の空気が読み取れる。

舌打ちをした事に曲は気付かずに、数瞬後、僅かに心の亀裂を増やしながら、二階から踊りかかった。

＊　　＊　　＊

－Ｓｉｄｅ　Ａ－

人差し指の先から放たれた黒い燐光が、同じく黒い光の筋を引きながら疾走する。直後にちからと熱が私の体から奪われる。その燐光は黒いだけでなく、その燐光の周囲の風景を魚眼レンズのように禍々しく歪ませている。それは【呪い】。魔女の呪い。魔力によって凝縮された呪いが物理的圧力と攻撃力を伴っているの示す、魔女の即戦力である。

ガント撃ち、強力なモノはフィンの一撃。その魔法はそう呼ばれる。かの大魔女、待崎死織のような鬼神の拳とは言わないが、その気になれば人の頭蓋骨を砕く事すら出来るほどの物理衝撃は私でもある。本来は凝縮した呪いで相手を即席の病や身体の悪変調を引き起こすモノだが、霊気装甲の密度と伝導率が極端に高い私は、生物に当たった時に物理的な反発、肉体的なダメージすら引き起こすのだ。

勿論、同年代で、しかも攻撃呪文の不得手が使うのだから自分ながら大したものだと思う。それでもそれは『当たらなければ意味がない』。

白い床から音も無く出てくる渇色の怪腕が、私が五秒前に居た場

所を薙ぎ払う。その腕に向けて放った黒い呪いは、腕があった場所を通過し、無機物に当たる。瞬きの後にエノク語で記された藍色の文字の渦を巻きながら、呪いを辺りに拡散させる。霊気装甲の密度の薄い空気中ならまだしも、無機物、『物』として容(かたち)を為した物はその『物』の持つ霊気装甲によって呪いが解かれる。生物に作用する呪いは無機物には、魔力としての僅かな衝撃しか痕を残さない。

「このッ、うろッちょろッ、鬱ッ陶しい！」

私の悪態を嘲笑うかのように水面、いや壁面、そして床面から顔を覗かせるしたり顔の男。ゴーグル型のサングラスがいつの間にか天頂から射した月光を鈍く照り返す。覆面の下の唇が孤を描いたように見えた。

私の再び飛ばした一撃を奇怪に腰と頭を左右に揺らしながら悠々と避ける。イルカか何かのようなしなやかな動きで地面に向かって潜水を行なう。あの長身痩躯の何処に力があるのか気になるところだ。

いつもなら膨大な魔力で円筒機関砲(チェーンガン)の様に両手の五本指で連射するのだが、今日は大魔術を使用したお陰でかなりセーブ気味である。私は頭に昇り上がる血と魔力を抑えて、冷静に敵を分析する。

敵は一人の魔術師。物体を通過する【魔術】を行使。結界は皮膚表層のスーツ。未だ獣人を保有しているが、私の残存の魔力と召喚生物でギリギリの足止めが出来る。亡霊騎士と死神は私の見る限りは互角の戦いを見せているので、此方まで来るような事が無ければ剣風に巻き込まれて爆殺、細切れになる事は無いだろう。

それにしても、魔術師は何故私を、『物体越しの私を物体の中から捕捉出来るのだろうか？』　透視の類である魔眼なら霊気装甲の流動が出来るため、つまり『魔法使いとはなり得る』。だが、奴は霊気装甲のまったく無い魔術師なのだ。魔術師はどんな手段で壁越しから私を見ているのだろう？

X線？　ソノブイ？　ソリントンレーダー？　とにかく、彼は何

らかの手段で私の居場所を突き止めているのだ。
「気ッ色悪い」
その言葉と同時に、魔力で強化した全身の受容器官に悪寒。魔力を足に込め、壁に向かってジャンプ。そのまま直角を保って二階に跳び上がる。
私の踏み込んだ壁から二本の痩腕が飛び出る。B級のホラー映画、しかもゾンビ系で壁から手がウヨウヨと無数に出てくるのを思い出したが、二本の味気ない手が空振りをする。それは不気味と言うより、何処ぞの前衛芸術家が壁から生やすように作った彫像のようで、何処か陰鬱な気分にさせる駄作だ。
空中から腕に向かって打った二連射のフィンの一撃を、魔術師は再び察知して壁の中に潜る。

残るは影の兵士達を五分間維持するのと超人的な身体能力を発揮させる、ギリギリの魔力を除けば、フィンの一撃を放てるのは五発。
焦らず、虎視眈々と、好機を窺う。この間のように精神の糸で網を作り、私の半径十メートルを覆う結界を作る事も出来るが、奴は魔術師。職人技で私の結界の解(ほつ)れを見つけて、入り込むかもしれない。
私は逡巡に入り込まれないように、動きながら考えている。そうでなければ簡単に取っ掴まる。
魔力を通した体でスカートを抑えながら（しまった、今日はスパッツ穿いてない！）、後方宙返り。今度は片足に絞って狙ってきた手が空を切る。フィンの一撃の二連速射(ダブルタップ)は外れ、残弾数が三に減る。
大量の魔力の通し過ぎで血管が痛み、太股の少し上が鬱血して青くなった。うぅ、ただでさえ美貌とは掛け離れているのに、青痘(あおたん)なんて出来たらますます惨めじゃない！
ふと、掴まれる瞬間を狙う事も考えたが、今はそんなリスクの高い賭けをする機会ではない。
どうする？

白馬の王子様（むしろ年齢的には小公子様か？）を期待する案もあった。だが、『未熟者』呼ばわりされるのも癪なのと、同朋を殺した意味も含めて、魔女の私自身が魔術師だけでも断罪しなければならない。

ともかく、先ほどの、亡霊に拘束された弱気など切り捨てて、私は今一度立ち向かわなくてはならない。

……そう言えば、あの魔術師は私の足を狙ってきているが、私の足を擦り抜ける事は無いのだろうか？

『量子的な隙間に私が同時に存在する』と言った魔術師。スーツとゴーグルで塞がった全身のみは同時に存在すると言う状態なのだ。つまり、光の粒子、光子（フォトン）すらゴーグルを透過すると言う事は光を得られない。つまり視覚は塞がれている事と大して変わりはない。

では何故、彼はそれが出来るのだろうか？

その答えが、何かが閃こうとした瞬間に当事者の横槍、もとい腕が入り込む。

白と黒のソックスを掠った指先が赤い線を宙に引く。

痛っ～～！　微妙に引っ掻かれた。どうやら、結界の一部のオンとオフは自在のようだ。痛みの罰に比べれば安い情報収集だ。奴は確実に、私を触れる事が出来るのだ。しかも細身は霊薬のドーピングで筋力強化してあるようで、私の胸から心臓を抉り出すのは恐らく造作も無いことだ。

残りの呪いは後三発……

＊　　＊　　＊

－Ｓｉｄｅ　Ｃ－

「……脆いな」

騎士は、目の前に崩れ、倒れた死神をそう評した。

鈍いくらいに、粘り気のある液体の落ちる音が二度、三度。

死神の黒い、闇の帳のように黒い半纏が、腹の辺りで切り裂かれ、上半身を固めた包帯の一部を赤く滑らせている。
荒く、未だ熱い息が包帯の間から漏れた。

コロしアいのトチュウでタオれたら、シぬ。

緩々と、その四肢に限りある力を込めて、立ち上がる。
その姿は、満身創痍にして、窮地だった。斧の柄を握る指だけがやたらと固く締められている。それに続くように、曲の目元は鈍く、それでも奥底から鋭い眼光が騎士の蒼く、仄暗く燃える眼孔を射抜き返す。
「死神とは疾く速く、魔を風塵に帰す化け物どもだと聞いたが、私の聞き違いだったようだな」
斧の柄に重心を幾ばか預けて、再び足元だけでも倒れないように固める。
騎士の剣風が僅かに、触れたとも感じぬほどに掠ったその場所は、皮膚を抉り、筋を分け、衝撃で肋骨をすら砕いていた。
口元まで巻いた包帯が一点に赤を注すと、そこから湿るように広がる。胃にまで達した衝撃が胃を破裂させ、血が逆流を繰り返す。音を立てて、口許まで血を飲み干した曲は斧を両手で掲げる。それは守りでなく、未だ攻撃を重視する型。
「螺(ラ)ッ！！」
倒れ込むようにしながら、死神は己ごと旋転させながら斧を振るう。
僅か一歩、それを騎士が避けるだけで、斧の質量に、己が質量に耐え切れぬように倒れた。
僅かながらに力を受けた斧が床を滑り、……回転して止まる。
「なりふりを構わなくなってきたか。だが……」
次の一撃で終わりだと、蒼い焔が視線で答えた。
「……ンッ、ふ、……う」

熱く漏れるのは血潮だけだろうか？　包帯から覗く目元が微かに潤む。

悔しさ。ただそれだけを訴えながらも、曲の身体はそれ以上動く事は無く、意志を失った。

振り上げられた刃金。

「……」

死神は死んではいなかった。ただ、騎士はこう考えただけだった。

『止めを刺すにも値しない』

屈辱を唾棄する以外の、何物でもなかった。

騎士はユックリと百七十年間も忘れた呼吸を思い出したようにすると、背もたれの些か壊れたベンチに腰を降ろして、しばし、【魔術師】と【魔女】の戦いを見る事にした。詰まらない戦いを忘れるように、彼は吸った空気をもう一度吐く。吐いた空気は呪いで穢れ、濁っている。

その行為は騎士時代、一度も行なわなかった余興に過ぎない。無論、魔術師が倒れるようならば、それを叩く。無限の時を過ごす中でのイレギュラー、ただの余興なのだ……

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

イレギュラーフリー、接合特異点、輪廻外。

とにかく、魔女などが使う言葉で、これらはある専門的な事を意味する。大抵、普通の一般人は『そこに何かの意志があるように』その『怪異に触れる事はない』。怪異とは場が捩れない限りはそこに一般人を磁力のように引き付けるわけではない。大量殺人のあった怨念の溜まる場所、神隠しのあった山、自殺者のための崖。そう言った狂った場所は魔女などの常識から外れた、怪異側の人間しか訪れる事はない。

とにかく、常識の捩れた場所、『常識の軸』から外れた場所を【輪廻外】などと呼んだりする。

本来は場に使うのだが、稀に物凄い、それこそ天文学的確率で『身体自体が怪異を引き付けてしまう』不幸な人もいるとの事。これは蛇足。

先ほどの通り、怪異を磁力のように引き付けるのであれば、一般人を磁石のように跳ね除ける、斥力（せきりょく）を輪廻外は発揮する。人は常識の軸である【輪廻軸】に捕らわれて、怪異に出会う事は滅多にないのだ。

さて、呪いの塊に魔人、魔術師、魔女。これだけの怪異が揃った中で……

「――遅くなって済まないな。少女趣味な妄想はしていなかったか？　在姫」

何故、一般人の女はココにいるのだろうか？

「ジョウチョーッ！！」

「何だね？」

走って学校から来て、更にエレベーターが止まっていたから非常階段を昇ってきて疲れました、と如実に汗の量で語る少女。空色のハンカチで額の汗を拭う右手。学校帰りのままの汗で透ける制服。

「う……ぉ」

――そして、左手には、壁から生えた魔術師の頭が握られていた

――

もう、ビックリだ。何が何だか分からない。魔術師に足元から詰め寄られて、突然、後頭部を強かにぶつけた、そのぶつけた本体、非常階段の扉から出て来たのはジョウチョーだったのだ。

コンマ二秒以下、唖然とする私と魔術師の関係を把握すると既に無力化していた。

魔力を通した私の筋力と同じでは無いか？　そう思えるほどのあきれた膂力。

確か、「冗句だ」と言って、十円玉を親指と人差し指で半分に折り曲げたのを見た事が有るかもしれない。それを目の前で見ていたナンパ師軍団は三秒で逃走した記憶もある。何処の空手家だ。

魔術師の鼓膜は骨を伝えて、頭蓋骨の軋みを聞こえさせているだろう。

魔術師は両方の手刀を閃かせて、ジョウチョーの手を叩こうとする。その直前、魔術師の顔が吹っ飛んだ。

発勁と言う奴だろうか？　指を離した瞬間に、頭部に零距離で加えた打撃は脳震盪とかじゃ済まされない凄みがあった。

魔術師が弾け飛ばされて壁から出た魔術師と同時にジョウチョーは跳ぶ。倒れた魔術師の顔面に踏み降ろし。

が、寸前に魔術師は床に沈みこんだ。

ジョウチョーの顔が強張る。当たり前だ。一般人が魔術を見て平静で居られるはずがない。

「しまった、サービスで女子高生のスカートの中を見せてしまった！」

「ごっつ変な状況で普っ通ですな、貴女！」

ジョウチョーは憮然とした顔で、それでも微妙に顔を赤らめつつ、スカートを押さえていた。そもそも、貴女は「蹴りも使うからスパッツ常着」と言っていたではありませんか？　あっ、今度からもう一枚予備を買って私もそうしよう。

「で、これは一体どんな参加型アトラクションかね？」
「貴女、遊園地の戦隊物ショーと勘違いしていらして？！」
混乱して自分でも何を言っているのか分からない口調で言いつつ、周りに気配を巡らす。
「こっちだ」
私を人生で始めての『お姫様抱っこ』で抱えると、壁を足場にして香港映画のように駆け上がり、宙返りをして、さらに後退。魔術師の真下から突き上げた手先が空を切って、再び沈む。
「なるほど、あのような手口で婦女子に手を掛けるのか、犯罪だ」
「それ以前に突っ込みどころがドエライあるでしょうが貴女ッ！！」
「少し、落ち着きたまえ。あぁ、それにしても在姫。君は……、私の腕の中に収まるほど小さくて、可愛いんだね。ふふっ」
うわぁー、こんな状態に関わらず背景で薔薇が咲き乱れるおかしな精神状態と情景描写になってるぅー。うひゃ！　しかも、何で支えている手が脇を通して私の胸辺りに？！　何で？　何で！？　何でッ！？

混乱の絶頂の中で、互いに顔を赤らめて百合百合状態を維持しながらも、ジョウチョーは華麗な、舞踏のようなステップで魔術師の追撃を空回りさせていた。

再びおかしな状況に引き摺られる前に視線を巡らすと、死神の倒れる傍には亡霊騎士。

死神が、倒れている？
――嘘。魔獣、妖魔、人外、何でもござれの対魔の尖兵、死神が倒れている。
私の絶望的な心境の中、騎士は双剣を床に突き立て、片方の剣に両手を掛けて寛いでいた。
そして、その頑強な、過去は実直であった容貌をわざと歪ませる

ように笑みを浮かべた。
『楽しませてもらうぞ』
そう、語るように聞こえた。
絶望的な戦力を嘲笑うように、騎士の唇の片方、その端だけが上がった。

「ふむ、地面に潜って気配を消されると、中々難しいものだ」
そんな私の失望と裏腹に、落ち着いた眼鏡越しのジョウチョーの表情。
怪異にこれだけ反応したなら大したモノだ。でも、ここから先は私の仕事だ。だから――
「――を出す」
遠くを見据えたまま、彼女は何かを言っていた。
「え？　何？」
「――を出す。私の眼鏡を取ってくれ」
「……えっ？」
「二の句は告げないぞ。『本気を出す』、眼鏡を取ってくれ」
彼女は淡々と宣言した。
何の本気を出すかは分からない。多少、と言うかかなり腕が立つと言っても、相手は【魔術師】なのだ。一般人が手を出せるような相手ではない。
……でも「本気を出す」と言う、その言葉に誘われるように、私の諸手はジョウチョーの眼鏡に手を掛けて、外した。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

恐る恐る下を見る……
指先に触れた、割れていたガラスの小片が月光を吸い込みながら、

闇に落ちる。
車が何かの模型のように小さく、煌々と眼下を照らす光がやたら遠い。
……高ぇ。
ほんの少し前にした決意が揺らぐ。
言い訳がましい言い方だが、トラウマやら精神病、強迫観念の類は一人の手でどうにか出来るモノではない。
以前、上司にムリヤリ付き合わされて見せられた映画は、恋人を助けるためにトラウマを克服、幸福、終章。と、言った構成だった。
あまりのご都合主義な展開に、映画で眠れないのに大いびきをかいたフリをして、レンジン一行は出入り禁止と映画館の看板になったほどだ。
とにかく、強迫観念などの類は克服する事などは並大抵では出来ないのは臨床師が公認する事実である。

だがそれでも、より大きな目的と言うもので、一時的に打ち消す事が出来る。
俺はいつもそうして、仕事では平然としたフリをしている。
今回はその決意が少しばかり大きい。いや、大き過ぎる。

高所恐怖症一時的忘却の心得その一、ここは地上であると想像する。
……ほら、地面の感触が気持ち良い。このまま歩けば……、百メートル下に真ッ逆さま……
今のは無しだ。熟れたトマトがアスファルトに広がる不吉な想像、じゃなくて、これは妄想だ。

鷹のように高めた双眸。もう一つのビルには、魔術師と戦う在姫。亡霊騎士は傍らで、優雅に観戦している。
まさか、神殺しの死神が倒れるなどとは想像もしない展開だ。く

そ、誰だこんなくだらない展開を考えた奴は?!

悪態も程々に、俺はビルの内部の、もう一つのビル側の壁とは反対側の壁ギリギリまでに行く。

もうここまで来たらヤケクソだ。こんな下らない事を考えた奴の鼻を明かすぐらいの展開を創ってやる!

地面に手を付けて身体を倒す。足は前後に僅かに開いている。膝は折り畳まれ、顔は正面。陸上競技で見られるスタートダッシュの体勢。爆発的な、相撲の時よりも超爆な加速を得るための予備動作を用意。

もう、後には退けない。呼吸と精神を整えて、後はただ真っ直ぐと進むだけ。

「在姫、先に死んだら承知しないからな……」

霊気装甲の静かな流動を確かめながら、目を瞑る――

＊　　＊　　＊

１０．叫喚（きょうかん）（３／４）（後書き）

＜＜－Ｓｉｄｅ　Ａ－　在姫視点へ続く。

11．叫喚（きょうかん）（4／4）（前書き）

＜＜―Ｓｉｄｅ　Ｂ―　国定視点からの続き。

11．叫喚（きょうかん）（4／4）

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

白金（しろがね）の瞳は天を凍らす。
魔を持つ瞳が空間を抉る。
眼鏡が、否、強力な【魔眼封じ】が外れた瞬間、視界が凍った。
騎士の蒼い瞳を圧倒する畏怖。
白金の双眸。そこにいつもの、日本人らしい漆黒の瞳は無く、ただ他者を圧倒する異様な輝きが見える。
全てが、物事の有らん限りが、服の下も、皮も、肉も、腸（はらわた）も、骨も、心もそして、魂すら見透かされるような極光の砲口。
この魔眼。魅了や忘却の類でなく、この世界。すなわち本質そのものすら革変させる禁断級の魔眼。
魔女の間の通称は、『秘眼（アイズ・オンリー）』

「……見切った」

一言、鮮烈なまでの異界の輝きで唯一、己の輝きを失わない可憐な、桜色の唇が動いた。
次の瞬間、抱き抱えた私を放すと同時に、真後ろの壁に両方の掌を叩きつける強烈な掌打。
女子高生だと言う事を忘れさせるような、強力無比な衝撃音の伝播。鉄球がコンクリートにそのままぶつかるような、そんな表現しか出来ない凄まじい轟音の響きが満ちる。
それは魔眼封じが取れた瞬間に起こった霊気装甲の超流動。眼を媒介に全身に広がる膂力。
鼓膜が破裂するほどの衝撃の直後、壁の中から鮮血が吹き出た。

ホラー映画のワンシーンのような、それでいて間の抜けた画。
壁から覆面の男の顔が出た。
「な、……何ッ……故？」
コキリと魔術師の首が傾いた。
ジョウチョーは腰に片手を当てながら、さも当然と言うようにもう片方の手をあげる。
「箱の中の猫みたいに誤魔化そうと、私の眼を誤魔化す事は出来ない。私の瞳は魂を見るための瞳。私の眼の前には如何なる視覚を対象とした幻術も、科学的な光学迷彩も、物理的な遮断物も意味が無い。視界、視野など関係無しに魂ごと、本質を捕捉するのだ。つまり、眼鏡を外した状態の私はな、三百六十度上下左右斜め、位相、異界、結界、『何処にも死角が無い』と言う事だ。どうしても私から隠れたいのなら、魂を亡くす事だな。まぁ、それは死と同義だがな」
しかし、と白金の瞳の彼女は続けた。
「貴様の魂は腐って、濁り過ぎて、人とは認識しにくかった。目的を違え、冥府魔道に堕ちると言うのは、かくも醜き事か……」
ゆっくり歩いて近づいたジョウチョー。微かに、撫でるように触れた程度の掌低は瞬時に魔術師に痙攣を起こした。壁に仰け反るようにして気絶をさせて、そのまま沈み込ませる。
呆けかけていた私から眼鏡を受け取って掛け直すと、ジョウチョーは少し、体勢を崩した。
慌てて支える私に「久しぶりに少し、見慣れないモノと認識過ぎただけだ」と眼鏡の位置を直しながら、軽く笑みを浮かべた。
「……魔女として君に会うのは初めてだな。封印級秘眼の保持者、斐川　常寵。関係者には通称、王魂の賢察者の常寵と名乗るようにしている」
魔眼には、見るモノを特化した魔眼と視界として認識した世界に影響を与える魔眼の二種類のタイプに分かれる。

見るモノに特化した、遥か遠くを見通す千里眼や霊体などの見えないモノを視る妖精眼、未来を観る龍眼に結界を見通す見破の魔眼。

世界に影響を与える、見た者を呪殺する邪眼や相手を催眠状態に陥らせる魅了の魔眼に、見たモノを石に変える石化の魔眼。

この二種類に分かれるのだが、彼女の魔眼の特徴は基本的には前者であるのに加えて、前者と後者の特徴を多く保持している。保持者としても珍しい魔眼を同時に幾つも保持しているのだ。

視界を拡大する魔眼に、透視を行なう魔眼、霊体などを含めて、魂を認識る魔眼、威圧を与える縛鎖眼などなど。

もし、普段から常に魔眼を晒していれば、更に魔眼は強化を重ねていただろう。

「インチキだ」

私は驚いた顔に反して吐いたのは、思わずムスッとした声。

まったくインチキだ。そう、彼女はその眼で、私が魔女だと言う事に気付いていたに違いない。それに在りえない、いや、在ってはならない神話の類で語られるような魔眼の保持者が、魔眼封じを身につけて、魔女の目の前で隠れていたのだから。しかも気付かせないなんてインチキにも程がある。

「インチキとは……まぁ、失礼したね。実は大分前から君の事は魔女だとは認識知っていたのさ」

口元に浮かべた微笑につられて、私もようやく苦笑が漏れた。

私も中々未熟だ。仮にも友人の擬態に気付かなかったのだから、もう少し魔法やらの前に観察能力を持った方がいいのかもしれない。

確かにそうだ。魔道書に対する言及に、帰り道の警告。全ては私の身を案じた事だったのではないだろうか？

・　・　・

「お嬢さんに加えて魔女。この世で語らう『最期の言葉』は吟味した方がいいぞ」

タイルを叩く金属軍靴の音階。
両手に携えた剣を揺らしながら、亡霊が迫る。
「ふむ、貴公が今までの連続殺人の、いや『魔女狩り』の主か」
呪いで禍々しく威圧する蒼い瞳に対抗する眼鏡越しの峻烈なまでの白金の光。
それを青い炎が否定する。
「残念ながら私は主に非ず。一介の雇われ騎士に過ぎぬ」
遠くを見通すような瞳は何故か、残念そうだった。
「なるほど、魔術師が雇用者と言う事か。私の推理とは幾分か違っていたようだな」
騎士の大双剣が持ち上がる。
「どちらにしろ。魔眼保持者は霊気装甲のある時点で魔女ともなり得る。抉り出すのは心臓の代わりにその眼だがな」
頭の真上、大上段と肩と同じ高さに並んだ剣達。
「魔眼で動きを捉えられようと、今度は身体が追い付かぬだろう。死神を圧倒した私の剣技でその心の臓と両の眼、頂こうか？」

「貴公は何かをお忘れでないかな？」

返す言葉。爆発直前だった噴火のような剣撃を、巫女のように鎮めるジョウチョー。
「……なに？」
「何かをお忘れではないかと言ったのだ。彼女には、『最強の守り手』がいるのだぞ？」
皮肉げに曲げられた、美麗な唇が真実を紡ぐ。
私も気付いた。そうだ、彼女は『彼』の事を認識知っているのだと。

次の瞬間、何かが反対の塔から爆発した。

＊　　＊　　＊

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

眼を再び開いた。目の先の先には守るべき人が友人と共に騎士と対峙している。

俺の出番のようだ。

人が敵わぬなら、人を超える者、魔を帯びた超人の出番だ。

月明かりが分厚い雲のカーテンで遮られる。灯りのまったくないこの場所では視覚が遮断された事と同義である。それ故に体内の血の一滴までが感覚によって捕捉が可能である。

軍用射出機（カタパルト）に備えられた戦闘機にように、魔力を全身に秘めながら静かに佇む。しかし、俺が戦闘機と違うのが、その攻性能力が護衛戦艦と変わらない事だ。

通常、魔力や霊力を魔法の類によって使う際に効果を表すまでは、消費する魔力などは体内に留めておく。それは異種の霊気装甲が接触した際に起きる反応、『拮抗』を防ぐためのものである。例えば、低能力な術者が体外で魔力などを固定化させようとすると自然界の霊気装甲に反応し、強い方、大抵は自然界の霊気装甲によって反発され、押し潰される。在姫などの高濃度の装甲を持つならその圧力に均衡するだけの力を出せる。それは能力者同士でも起りうる現象でもあったりする。

そして、俺が利用しようとしているのは……

点呼開始（カウントスタート）。

――伍、霊気装甲、全装甲駆動開始。

――肆、装甲濃度出力八拾七％

誤差発見、装甲濃度出力低下状態、現最大値二十七％迄移行。

――参、対衝撃装甲結界展開。
――弐、同時展開、魔力放出走行準備。
――壱、肉体制御、推力、平衡感覚統制。
――零、発射。

自らの霊気装甲を反応させて【推進起爆剤】にすることだ。

急激な加速に負けそうになる身体。それを支える足で思いっきり地面を踏みつける。地面から浮き上がらないようにするように。
留まる事は無い。最初の一歩を踏み込めば後は容易いものだった。顎が摺れるほど身体を前傾させながらも、足が接地するより先の身体は揚力を受けた翼のように空気と密着しながら進んでいく。

目前。崖の高さを考える前に、あの日、あの夜、傷付いた俺を見て、泣きそうな少女を思い出した――

＊　＊　＊

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

「……なんだ?!」
ジョウチョーの言葉で固まっていた騎士の動揺を、さらに何かが引き出した。
反対側の塔からの爆発音。直後のあまりの衝撃に反対側の塔の内側から、それを越してこちら側の塔の外側から、ガラスの全てを破砕した。
それは何かと何かの霊気装甲が『拮抗』したモノだと、私は理解した。
しかし、今までに見た事が無いほどの最終戦争神話級（ラグナロク）の反応規模だ。

神話時代、神と呼ばれる存在同士が戦ったような戦争の咆哮。戦の始まるを示す鏑矢（かぶらや）。

眩みそうな光の中を小さな、速い何かが飛来した。

着地。爆発には比べようも無いほど小さなモノだったが、人では到底耐えられないような圧力を両足に受けて、直前に、再び霊気装甲によって相殺する。

濛々と立ち上がる煙と沸騰した空気熱がビル風で轟と吹き荒らされ、散らされる。

その中心に居たのは、小さな魔人。

「未熟者が居なかったから余裕だったな。さて待たせたようだが在姫、後は任せろ」

「馬鹿、女の子を待たせるとは何事だ！」

小さな魔人は苦笑する。

その影で、蒼い炎が揺らめいた。

「国定、左ッ！」

その私の言葉よりも早く、騎士によるタイルから更に下の階まで突き抜ける剣撃、爆撃を国定はかわす。

「くっ」

吹き荒れる暴風が、魔人の戦闘域から離れた私達にまで風塵を巻く。

風を受け止めるために交差した両腕の隙間では国定はまだあの槍を握っていない。

徐々に、人の視認を超える動きを亡霊が見せ始めた。

それは振り切った残像なのか、それとも振り上げた残像なのか分からない。ただ二つの剣があまりにも速すぎてより多く見えるだけだ。

国定はその剣撃の範囲から僅かに抜け出すように後退しつつある。

しかし幾ら抜け出せても、騎士にダメージを与えるのには徒手空拳では不可能だ。あの呪いの凝り固まった鎧ごと、貫く、もしくは破砕するような武器が必要だ。

槍を出す暇は無い。

もしも、私が『何かを作れれば、呼び出すのではなく作り出す事が出来れば』……。

国定と騎士が止まった。国定の後ろには瀕死の死神が居る。後退は、出来ない。

「再び、終章（コーダ）へと導こう、魔人」

必殺の一撃だと宣言する騎士に、

「いいだろう。亡霊の鎮魂奏（レクイエム）を、貴公が終える最後まで聴き惚れよう」

国定は未だ素手で迎える。

私達は手を出す事が出来ない。竜巻に生身で飛び込めば打ち砕かれるように、この闘いは超人同士、人外同士のみの殺し合いだ。

でも、国定の手には何も無い。どうするの、国定？

無音。しかし、物質的な段階でなく、心の水面下では闘いが繰り広げられている。

素人の目にも見えるように、互いの見えない、心が打ちかかる残滓が見える。

普通なら、武器の無い段階で負ける騎士の一閃を、国定の心が『何か』で受け止めて返す。

騎士にもそれが掴めない様で、苛立ち、そして、遂に爆発した。

あの時の、普通の剣撃の十倍の威力と速度に相当する爆撃が始ま

ろうとしている。
一撃でも、国定は素手で受ければ死ぬ。
武器、何でも良い。あの超重武器である双剣を打ち落とし、なおかつ重装甲を叩く『超重兵器』が必要なのだ。あの国定ならどんな兵器でも扱える。長大な槍を奔らせる技量と膂力がある。後は、武器のみ。
国定は身体を崩さずに後退する。初撃の、それ以前でさえ爆殺させることは必死の剣撃に怯まず、ただ直前に避けるためだけに後退する。
だが、後はもう無い。国定の後ろには傷付いた死神が倒れていた。いくら死神とて、この剣撃をまともに受ければ斬殺される。

「いくぞ」
双剣が莫大な呪いと魔力を纏って踊る。卑怯と言う間もない戦術。
「1(アンッ)、!?」

その爆撃の直前、国定は身を屈めると同時に、『それ』を手に取った。
直後に膨大な力と力がぶつかり合い、それが熱量に置き換わって二人の間にあった空間が広がるように胎動する。あまりの急激な空気の流動に私は眼を瞑る。爆風が髪とスカートをたなびかせ、駆け抜けた。

――静寂。国定の断末魔の叫びも、何も聞こえない。

恐る恐る眼を開けた時には、双剣は同じく無骨な鉄塊に止められていた。
無骨な、叩きつけるための武器は『死神の使っていた鉞』。

「どうした？　手が震えているぞ？」
不敵に、いつも通り不敵に笑う国定だが、今回はいつも以上に相応しいものだった。
この間とは逆転して、国定の握る鉞の圧力に堪えているのは亡霊の方である。双剣は唯一つの鉄塊によって止められ、身長も、体重も、武器の重さも、魔力も、全てが上回りながら、国定の鉞によって止められている。
「ばかなッ」
つい先日までは圧倒に近かった実力は当然の摂理のように凌駕していた。
千年の魔人と六百年の亡霊騎士では格が違うという事か？
「手元がガラ空きだぞ？」
国定のその一言と共に火花が散る。
鉞による零距離からの力任せの一撃で吹き飛んだ騎士は、両足と双剣を真下に突き立てて、タイルにしがみ付くようにしてギリギリ、ビルから飛び出る直前にその場に留まった。
幾ばか離れた間合い、国定は鉞を肩に担いで、斜に構える。
「次はどうするんだ？」
騎士の双眸が燃えた。呪いの大気侵蝕によって全てが歪んでくる。冷水の混ざった熱湯のように、異なる大気と瘴気が平衡して明確な境界が不明確な視界として表れる。
そこに表れるはずの恐怖は最強の守護者が全てを受け止めている。大剣が磁石の両極のように呪いを渦巻いて、騎士は再び国定に打ち掛かる。
「１（アンッ）、２（ドゥ）、３（トロワッ）、４（キャトルサンクッ）、５（シスッ）、６（セートッ）、７（ユイートヌッ）、８（ディスッ）、９、１０！！」
十連続の閃光。しかし、国定はそれを鉞の側面の鎬や柄で巧みに反らし、逆に騎士の体勢を崩した。
「でぁぁぁやぁぁぁッ」
そこに獣声が轟いて、閃光を国定が掛け返す。
身体を丸ごと捻りながら、駒のように、それ以上に速く廻る。打

ち掛かる。
　疾風迅雷。超重武器には似合わない形容で身体ごと飛び込むように国定は刃を振るった。
　それに初めて畏怖した騎士は一歩下がりながら双剣を十字にして受け止める。
　しかし、氷の軋むような音と同時に剣が弾けるように砕けた。
「輝ける陽光（セクトールオーブ）が？！」
　騎士の呟きは剣に付けられた名だろうか？　砕け散った剣は呪いと言う枠組みから消えて大地に塵以下になって落ちた。
　肩に鉞を担いだスタイルが当然であるように佇む国定から、素手の騎士は人外の速度で離脱する。後ろ向きにも関わらず、視界から一瞬で失せて、ガラスの割れたビルの縁に立っていた。
「逃げるのか？」
「負ける戦いはしない」
　騎士の国定の更に奥を見つめるような遠い目は、何故かは分からないが何かを憐れむようにも見える。
「終わりが近いのだな」
「……」
　終わり？　終わりとは何のことだろうか？　いや、本当は分かっている。私は、ただそれを認めたくないだけなのだ。
「敵ながら天晴れと言ったところか？　その献身に私は称賛をし、今回はココで退こう」
「……能書きは良い。今ここで俺が妄執の亡霊を倒すだけだ」
「それは無理だ。ここで私を倒せたとしても後に残る魔術師から魔女を『誰が守る』？」
　国定は瞳孔を開きながら、獣の眼差しで騎士を威嚇する。その奥には終わった瞳。
「貴様――」
「分かっているはずだ。たかだか思いの塊が、六百年も恨むのも、あるいは千年も無意味に生きる辛さを。貴公もこの世界への固執も

薄れ掛けている。加えてその霊気装甲、後五日間持つか否かと言ったところか？」

「……それだけで十分だ。最後の仕事を終わりにさせて、俺は」

「敗北思想だな。私も貴公も、この無意味な円環を断ち切ろうと言うのか……。忘却と呪詛、互い似て非なる、か……」

遮るように語る騎士。国定が何かを言い返そうと噛み締めて固くなった口を開いた直後、騎士は流れるように後ろに向かって飛ぶと、階下へと重力に引かれていった。

国定は追わない。いや、ビビッて追えないのか？

「在姫」

鉞を肩から下ろすと、重い荷を下ろすと、国定は疲れたような笑みを浮かべた。

「……スマン、ちょっと限界のようだ」

そして、そのまま地面に向かって倒れこんだ。

「なッ！？　ちょっ、ちょっ、ちょっとちょっとちょっと！！」

寸前で私が抱きとめるが、そのまま国定は眠ったように身動ぎもしない。

ただ眼を瞑って、まるで止まったかのように。

「くに、さだ？」

無言。しっぽを引っ張られた猫型ロボットのように、スイッチの切れたパソコンのように、発条（ぜんまい）の使い切った空繰人形のように、鳴声の止んだ蝉のように、国定は止まった。

国定は止まった。魔人が止まった。

……死んだ？

「え、な、なに？　どうし、え、ちょっ、まだ、私――」

「落ち着け在姫。私の『眼』では彼は生きているように見える。おそらく、ただの一時的な機能停止だ。とりあえず、今はココを去ろう。死神ならともかく、この騒ぎだ。人の警察に余計な記録は残したくあるまい」

ジョウチョーの諭すような言葉に私は我を思い出す。確かにそう

だ。このままゴタゴタに巻き込まれても都合が悪いだけだ。
　動揺する私に「私が死神の彼を負うから、君が彼を負え」と的確に指示をする。まったくこれではどっちが神秘に属しているのか分からない。だが指揮するほど統率力の無い私に比べて、ここはジョウチョーに従った方が無難だろうと、私は彼女に従う。
　私とさほど変わらない身長でありながら男の子だけあって国定の体は重たい。
　彼女ほどの筋力でも重いのか？　背中に死神を乗せたまま器用に、鉞の刃に近い重心の部分を気合と共に持ち上げて、両手で持ちあげる。
「むぅ……、これは、一苦労だな。うっかり足に落としたら開放骨折だな」
「表現がグロイって……、うーん、別に置いて行ってもいいんじゃないかな？」
「死神に助けられた義理もあるだろう？　彼……、とにかく死神に助けられたのだ。容疑者に逃げられて、死神の鎌の現場放棄、更なる始末書処分と言うのも可哀想だろう。死神殿に助力の一つは差し上げようではないか、無償の葬査貢献だよ」
　それもそうだと納得するように頷くと、非常階段からこそこそと逃げ出した。
　階下で待ち構えていた表の警察の特殊車両群。大きな騒ぎになったためか？　かなりの台数が待ち構えていた。機動隊の影もチラホラと見える。
　傷だらけの子供に包帯姿の怪人、加えてジョウチョーの両手には言い逃れの出来ないような馬鹿デカイ凶器とくれば、職務質問や補導だけで済まされないだろう。
「裏口が確か反対側にあったな」
「えっと、あっちの方は鍵が掛かっていたはずだけど？」
「大丈夫だ。ヘアピンさえあれば魔眼で透視でも行使すればディスクタンブラー式の錠前は大抵開けられる」

物凄くこの友人の将来が気になった。本を専門で盗む泥棒とかになったりはしないだろうか？

途中の通路の角で遇った警察官達。指先を突きつけて残り少なくなった私のフィンの一撃で昏倒させたり、ジョウチョーの魔眼で目を眩ましたりと、申し訳ないながらも色々な手段で回避をさせてもらった。まぁ、狐にでも化かされたと思ってもらえれば好都合だ。そんな保障は何処にもないが、まぁ、政霊都市和木市なのだから、それくらいの事例の一つや二つは有ってしかるべきだろう。

裏道で見かけたタクシーの運転手にジョウチョーの魔眼で催眠を掛けて、色々と記憶に残りそうな事を真っ白にさせておく。

帰り道の車内で私とジョウチョーは互いに無口になりながらも、大体は目で会話をしているような状態だった。

視線の先にはこれからの事をどうしようかと、ジョウチョーですら漠然とした不安として語ってはいた。

いつもの乗降するバス乗り場の手前に何事もなく到着をする。財布の口がスッポンよりも固い私に代わって「釣りは取っておけ」と二倍近い金額を渡すジョウチョー。まぁ、シートが血で汚れたし、これくらいはサービスだ。私は払ってないけど。

おかげでスムーズにあの昇り坂の手前は帰ることが出来た。ちなみにココから先は車両進入禁止であるためにタクシーが乗りつける事は出来なかったのだ。

「面倒だな」

「仕方ないよ。でもこの辺りは安心して。昔は今よりも多く魔女が住んでいたから、協会による普遍の結界が効いているよ」

「なるほど、不審な行動をしても気に止まらないと言う魔女の結界坂か」

「そう言うこと。まぁ、昔はそんな感じでも、この辺りで今も住んでいる魔女は……」

私だけと、続けようとした。だが、それを遮るように、その音の

届く先には一人の少女が立っていた。
　既に暗く濡れた夜の中で光る金髪。西洋の全寮制私立学園にありそうな、ネクタイ付きの黒い制服に身を包んでいる。その全体的な姿は私よりも幼いながらも、僅かな曲線を描いた胴体部や手足は危険な色気を発する。月明かりに照らされた紅い双眼が閉じられて、妖艶で無邪気な笑みを浮かべる。私達を、私を迎えるように両腕を開いた。
「待っていたよ、在姫お姉ちゃん」
　背筋を電気が駆け登る感覚が『彼女は敵だ』と告げた。
「――魔術師？」
「ありゃ、バレちゃったか。そうそう、私はシャラン。苗字は斜めで、名前は花の蘭って書くの」
　魔術師の彼女、シャランの手には、小さな人形が握られている。彼女をそのまま小さくしたような雪色の肌に淡い金糸の髪。しかし、双眸に当たる部分には黒い布を巻かれて、その上から釘が刺されていた。
「かぁいいでしょ？　ドロシーって言うの、さぁ挨拶してドロシー」
『こんにちは、【魔術師】のお供の、忠実で矮小な下僕のドロシーなの』
　人形に語りに些か驚いていると背後のジョウチョーから「ただの腹話術だ」と覚らされた。
　その驚きが可笑しいかのように小さく笑うシャラン。
それにしても、こんなに、私よりも遥かに幼い少女が魔術師だと言うのだろうか？
「あぁー、その『こんな幼い可憐な美少女が魔術師なのか』ぁ、ってな視線はまるっきり私を子供扱いしているなぁ？」
　私の視線から考えている事を予測したのか？　微妙に違うけど。
　警戒する私達に対してシャランは人形を抱えると、突然クルクルと廻り出した。
「い・かすざぶ・おぷと・んおと・すえいはあぉ・よるぉこ・るぃ

ういあ」

「旧エノク語？」

私達魔女が使う簡素な現代エノク語ではなく、複雑な文法と難解な語句、加えて聞こえた音通りとしか言えない筆舌し難い発音を持って構成される難語である。身体性能を著しく拘束する【静止―レスト―】や全ての事象を停止する【停止―ハルト―】、力を持った言葉を使う魔法使い、物理系の言霊使いには劣るが、旧エノク語を操る魔法使いは私のように現代エノク語から更に英語に変換して呪文を使う魔法使いに比べて絶大な世界への影響力を持つ体系に属する。

しかし、霊気装甲の無い彼女、魔法の使えない魔術師には意味が無いもののはず。……、いや、違う。旧エノク語に重ねられたもう一つの役割があった。その【星】との会話を求めた難解性は外界の霊気装甲へと直接の交信を図る記述式となる。つまり、旧エノク語そのものが【魔術】の装置となるのだ。そしてこの【音声魔術】の真骨頂は『外界の霊気装甲に音声を利用して、どんなに離れた場所からでも別の魔術結界などを起動させる事である。』

つまり、生霊などの擬似生命体を使わずに行なう直接遠隔制御である。

組み上げられた体系によって霊気装甲が共鳴現象を起こして、世界の隅々まで意志が響き渡る。

身構える私。しかし、外界、周りへの変化はまるでなかった。

「在姫！　逃げろッ！！」

その鋭過ぎるジョウチョーの言葉に突き動かされるようにして止めていた足を動かした。視界を後ろに向けると、何時の間にか眼鏡を外していたジョウチョーは重荷の鉞を投げ出して死神と共に飛びながら地面を転がっている。

直後、その僅かに闇に沈んだ光景が、ぐにゃりと『光ごと曲げられるように』歪んだ。

熱で浮かされた光景のように白い明滅と背景が鍋をかき混ぜたよ

うに混濁する。
かき混ぜるための熱も、混濁させる衝撃も無く、元居た場所には人が丸ごと入れるほどの大穴が空いている。
……洒落にならないッてば！　何、一体何が起ったの？
爆風も、音も何も無く、ただその場所は一瞬にして全てが分解して、空気に溶け込むように消滅したように見える。
「まだまだ行くよ～～！　んし・りびえ・ぷあ・くぅろぶ」
今度は私にも分かった。空気を破壊するように、厚い雲を散り散りに引き裂くように、渦巻く何かが中天から降り注いだ。
それは待ちくたびれた月が布を引き裂くように哭いたような――
先程から二割ほど回復した霊気装甲を走らせる。血管が警告を発しながら装甲を纏わせる。スレスレの離脱で、真後ろのレンガ作り道路が消滅する。
「うわぁ、こんなに活きの良い娘は初めてだぁ。狩り甲斐があるねぇ」
何時の間にか、彼女は高い電信柱の上に立っていた。いったいどんな力で飛んだと言うのだ。翼の無い魔術師が飛ぶ。もしかして、この娘は魔術師ではなく人喰いなどの人外で無いかと錯覚させられる。
「うみゅ。もうこんな時間かぁ。良い娘は早く寝なくちゃイケナイしぃ……、終わりにしようかなぁ？」
殺意の一つ無い狂った笑みを私に向ける。ヤバイ、さっきのダッシュで霊気装甲は空になってしまった、次は避けられない！
彼女が不安定な足場で再び廻る。繰る繰る、狂々（くるくる）廻る。
「すんれと・すあぉよ・るお――？！」
彼女が吹き飛んだ。魔術の失敗ではない。電線の上を、あの細い紐の上を有り得ない速度で別の【魔術師】が駆けてそのまま突き飛ばしたのだ。
吹き飛んだ彼女は頭から真ッ逆さまに落ちる。
「いばい・らふ！」

しかし、激突の直前に再び月が哭く。するとまるで魔法のように彼女は『空を飛んだ。』箒も無いと飛べない魔女とは違う、大禁呪一歩手前の大魔法に等しい行為。

再びスカートを押さえながら重力を無視し、その先のもう一つの電信柱に自身の片足を委ねた。

「もぉ！　何すんのよ、このブゥ太郎！」

彼女の視線と私の視線の先に交錯する人影。それは先程の挙動不審としていた太った魔術師だった。

いや、今では挙動不審としていた所作は何処にも無く、一人の戦士として堂々と立っている。見た目に騙されると言うのはこの事を言うのだろうか？

「僕の親類縁者を危険に晒すのであれば、僕は如何なる者との敵となりましょう」

威厳ある戦士の宣戦布告だが、仲間割れを起こすような家族などこの場の何処にいるのだろうか？

「荻お兄様」

私は、背中の国定を地面に落としてしまった。いや、何よりも、戦闘態勢にいる魔術師の前であろうが、その言葉が私は判断力をごっそり落としてしまった。それは地面に頭から落ちて「ぐぇっ」と呻き声を挙げた国定を気にも止めないほどの破壊力を持っていた。

何よりも台詞は、頬を一刷毛の朱で頬を染めたジョウチョーの口から漏れたからだ。

シスタープリンセスならぬ、ブラザープリンスだろうか？　先程まで私を狩ろうと画策していたはずの魔術師が離反をしてまで私達を、いや、巻き添えを食らいそうになったジョウチョーから守ろうとしていたのだ。

「僕は紳士からは程遠い者です。斜蘭、君が彼女、いや彼女達を殺すなら全力で巌の如き楯となります」

「同盟を抜けると言うのですかぁ？」
少女の柳眉を立てた表情は、子供が約束を破られたような顔付きだった。
「元々僕は同盟に入ったワケではないですよ。保隅博士に付いて行ったのも彼女の一面においては師となる方だったからです。まぁ、あそこまで暴走をすれば呆れもしますが……、そして最後の理由は彼女にくっ付いて来た義理による忠義でしょうか。無論、このことで幾らか彼女からお叱りを受けるでしょうけど」
しれっと言い返す魔術師に「うにゅぅぅぅ」とワケの分からない奇声を挙げてもう一人の魔術師が電信柱の天辺で地団太を踏む。
「もぉ怒った！　魔術師同盟を裏切ったらセツカの恋人だろぉが何だろうが、後でヒドイ目にあわせるからね！　でも、今日は眠いから寝る。お休み、バイバイ、あばよ、くたばれ。……あい・はぷ・あい・みとふ・り」
一瞬にして地上への拘束を失った少女はそのまま星の一つと変わらないほどにまで小さくなって消えてしまった。
な、何だったんだろう？　どちらにしろ、あの斜蘭と言う少女は生粋の実力を持った旧エノク語と遠隔操作による『無音の粉砕魔術兵器』を操る魔術師であり、加えて私の心臓を狙っている危険な一人であると言う事だ。
ふと気付けば、電信柱の上と下でシェイクスピアの劇中のように兄妹が視線を交わしている。
「荻お兄様、あなたは在姫を狙っていたのですか？」
「そう言う事、になりますね」
微笑みながら言う彼には悪意の一片も無く、ただ妹へと真実を伝える姿が垣間見える。
「でも、もう無理です。昨日の、常寵と在姫さんの電話を偶然聞いて思いついた計画ですが、既に失敗に終わってしまいました。僕は舞台を降りる事にします。……ごめんね。常寵。僕も君に憧れられるような魔法使いになれれば良かったけど」

「そんな事！　お兄様、あなたからの罅割れ、渇いてどうしようもない私へと注がれる慈愛は止め処なく、私の全てを満たす馥郁（ふくいく）たる霊泉です。お兄様が魔法使いである必要は古き契約においてのみ。大人となった私にそんな幻想はもう無用なのですよ」

「でも、約束は守らなくてはいけません。兄妹なら、それは尚更です」

指を立てて、月光を背景に語る男は容姿の考慮など入る余地もなく、ただ崇高で気高かった。妹のために魔法使いになる優しい兄。

「在姫さんの『鼓動』は諦めます。とりあえず、僕を同盟へと誘った彼女を説得してみようと思いますが、どこまで出来るかは私の交渉次第でしょうか？」

ジョウチョーはしばらく目を伏せて、それから柱上の戦士へと尋ねた。

「互いに愛する仲でも、魔術師である事は枷となるのですか？」

ジョウチョーは『愛する』と自らの口から放った言葉に瞼を震わせている。嫉妬では無く、ただ相手の穏やかな幸せを気遣うような視線を当てていた。

「えぇ。そして、これは共有する者でしか理解し得ない幻想（かせ）です。でもまだ別の、心臓を抉られても仕様が無いような悪い魔法使いを索敵する事はこれからでも出来るはずですからね。問題は彼女の深い業を、僕のつたない口先如きで止められるか……」

魔術師の深い溜息と同時に、四散した雲が元の形へと戻り掛けて、徐々に月を覆っていた。

「今日は散々でしたでしょうね、在姫さん。でも、これからはあなたの親友である斐川常寵の愚兄、斐川荻が日陰と日向で一つの楯としてあなたを守ります。宵（よい）、夜を」

優雅に一礼すると同時に月明かりが完全に閉ざされる。再び切れ目から漏れた白光は何もない電信柱を照らすだけだった。

「……ジョウチョー」

何も掛ける言葉も無く、私は無体に彼女の名を呼んだ。ジョウチ

ョーは考え込むように、地面の一点を見つめている。
敵であり、同時にその敵の同盟を裏切って妹の友人の味方についた兄を、彼女はどんな複雑な思い出で見ているのだろうか。
不意に、僅かに顔を俯かせていた彼女は顔を挙げて私を見た。その顔はいつも通りの不敵な笑みを浮かべていた。
「まったく、お兄様も強情だ。……さて、死神と魔人を連れて君の自宅、いや、魔女の工房へと向かおうか」
……心配させるほどか弱い少女では無かったようだ。まぁ、日頃の行動を見ていれば当然だろうけど。やっぱり、ジョウチョーはジョウチョーのようだ。
「うぅぅぅっ――」
そろそろ熱気の未だ残るレンガへの雑魚寝を止めさせる頃合だろうと思い、国定を背負って自宅へと向かった。

国定はどうも無事のようだ。でも、亡霊の言い放ったあの言葉。
「終わりが近い」が妙に私の心に根を下ろしていた。
遠い日の約束、国定は、何故【魔人】となってしまったのだろうか？

11．叫喚（きょうかん）（4／4）（後書き）

Mind is killing me.
Body is killing me.
Pain is killing me.
Fang is killing me.

Violate me forever.
I want to forevermore.
But I am nevermore.

12．幕間　鉄囲線三（前書き）

心が殺す。
体が殺す。
罰が殺す。
牙が殺す。
我が身は永遠に冒涜される。
永劫を望んだ。
しかし、存在すら無かった。

12．幕間　鉄囲線三

覆面越しの口腔から血塊を吐きながら、一人の魔術師は汚泥に満ちた円形の下水道に横たわっていた。

その体から発する倦怠した気力は『　敗　北　』に他ならない。

自然の霊気装甲とのリンクの切れたスーツは、元の素材が何であるかと言うのを思い出したかのように、錬金術の保護を無視して破れかけていた。

魔女と魔眼持ち、まさか彼の妹がコチラ側の人間だとは想像も付かなかったのだ。しかもあの戦闘性能は彼の直伝と魔術師は見た。

第五から第七頚骨まで粉砕される直前の打撃だったが、僅かに沈み込む事で回避する事が出来た。そして、沈んで、沈んで、遂には季堂ビルの地下、その下水道で息を長らえていた。

だから、

「まだだ。我が身は未だ生にしがみ付いている」

魔術師は独白しながらも、どん底に落ちながらも、次の策を練っていた。

だが、朦朧とした意識の中で練られるモノは策と呼ぶにはおこがましいほどの単純な殺戮に過ぎない。

「ぐひ、げへはははははははは」

あの魔女を剥いて、曝して、バラして、刻む。

執着は既に魔法とは掛け離れた場所を行き来してそれは逆恨みにも等しかった。

しかし、もはや生きるのも胡乱げな肉体が生き延びるのは妄執でしかありえないかもしれない。

「なんて無様なんだ。保隅くん」

そこに、彼があのビルで言い放ったような、弱者を見下すような、朗々とした声色が響く。

下水道の閉じられた空間で木霊を繰り返しながら、悪の呼び声がした。

それは這い出てきた闇とそれと同じ色の法衣を纏った魔法使いの言葉だった。

「貴様は【脱皮者】！？」

「お目覚めはどうかね？　敗北の苦味は生温かい下水にも等しいだろ？」

そう言い放つと同時に巨大な手が魔術師の後ろ頭を掴んだ。そして排水溝の下水に魔術師の頭をむりやり浸す。

もがく。息の詰まると同時に、口から鼻から、割れた頬から腐臭と粘性を帯びた下水が流れ込む。全身を重度の火傷で爛れ、腐りかけた体に拷問のように汚泥が流れ込む。彼の頭を掴む剛力の主は霊薬の切れて枯れ枝よりも貧弱な肉体へと戻った魔術師には抗い様のないものだった。

何よりも窒息と言う本能に訴える感覚が恐怖を煽る。

汚泥とは真逆、白濁意識に溺れる直前に魔法使いは後ろ頭を掴んで下水から引き上げる。爛れていやらしく割れた頬から黒くヌメった液体がゴボリと音を立てて零れた。

時折、痙攣する魔術師の身体は細身と合い余って糸の絡まったマリオネットのようにも見える。

魔法使いは奇行を楽しむかのように下卑た笑いを浮かべて、元々は端正な顔を歪めた。

「どうしたのかい？　お得意の魔術の【すり抜け】は？　それとも、僕の【体温】が高過ぎて意識してしまうのかな？　ん？」

彼の魔術は自らが物体を知覚しないと言う事で物体を無視して透過するものだった。そのために、ゴーグルが視覚、マスクが嗅覚と聴覚、スーツが触感を封じて、彼独自の、ただ一人、意志のみでスーツの中のみで存在しえる不可思議な自己存在空間を形成したのだ。自己の存在と言う形を自らの意志と知覚によって補い、存在すると言う状態を明確にするのが人と言う者だ。しかし彼はそれを封じて、自らの存在を知覚という本能から零に近づける事と同時に、ゴーグルと覆面とスーツの外側も知覚しないという事で両面から存在の濃度とでも言うべきモノ、特に自身を零の領域に近づけて結果的に『自らの存在を透けさせて』摺り抜けていたのだ。

しかし、そのままでは全てを透過させてしまう事になる。つまり、彼自身が知覚する手段が一つでも何か必要だった。

彼は閃いた。

生物であれば必ず特有であるべきモノ。それは体温、赤外線と呼ばれる電磁波の一波長。それを自己発生させるモノのみを不気味なゴーグルの遮光器が収集し、演算し、知覚できるようにしていたのだ。

つまり、彼は体温だけを見て獲物を追い詰めていたのだ。背格好がその熱の形でチビっこい在姫であれば、それは容易に判断できていたのだ。

しかし、この魔術の機能の誤算は、一つの入力装置、つまり体温のみの視覚のみに敏感に反応する事で必要以上に意識してしまう事であった。

そして、魔法使いは先程身体を動かしてきて、今はその巨躯から発せられる体温が異常なまでに高い状態だった。

温められる事で凝固したような葛湯のように、それを魔法使いは生掴みにする。

まさに取って食うには都合の良い状況だった。

「騒ぎを起こしたお陰で僕の計画は大きく修正が必要になりました。死神はおろか他の機関や魔法使いにも覚られぬように長年辛苦を飲んできました、と言うのに……このド低脳が」

通常はしないような、普通よりも固い瀬戸物が割れて砕けるような音と何か圧力の掛かったモノが内側から弾ける音が下水道に響く。

魔法使いはおそらく今世紀でただ一人、科学の力のみで魔術へとたった一人で至った男の頭脳を赤と灰色の液体へと変えた。

そして間髪いれずにその反対の手が偉大な科学者の鳩尾を抉る。そして、拳よりもやや大きい、赤黒い心臓をゴムのように伸びた大動脈と大静脈を引き千切りながら取り出した。魔術師の心臓は生を貪るように拍動を繰り返す。

黒い下水道管の一部が、深紅の丸い額縁の絵画へと弾けるように変わる。

糸の切れたマリオネットが巨躯の手を離れた。粘液の汚泥が跳ねて魔術師だったモノの上半分を取り込んだ。

「なるほど。魂は汚れていましたが、霊気装甲に蝕まれていない分は存外に綺麗な血潮の色ではありませんか」

魔法使いの男は弱まりながらも逝き惜しむかのように脈動を不規則に繰り返す心臓を胸辺りに掲げながら、両手だけを朱に染めて、法衣と同じ色の中へと馴染んでいく。

「残る【私の城】までは後四つ。私の予測が正しければ、新月までには数合わせできますね」

魔法使いの声すら暗色に失せて、それでも残っていた骸も粘った下水が多数の恨みがましい亡者の群れのように飲み込みながら、押し流していった。

そして、誰も居なくなった。

12. 幕間　鉄囲線三（後書き）

Once upon a time, I am in you.
You are still out of you.
Lend me your ear. Ain't you a gainsting again?

I am hear. Now immediately find and face with me.

13．大叫喚（だいきょうかん）（前書き）

悠久から私はココに。
彼方は未だ己自身を背けている。
耳を澄まして。彼方はまた戦いに行くのかしら？

私はココ。さぁ、早く見つけて、私と立ち向かおう。

13．大叫喚（だいきょうかん）

七月二十三日

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

躯（からだ）が燃えている。

全てを捨てて来て、それでも残り滓が燻っている。

元の体温を思い出して、疼くように躯が呼吸と鼓動に似た燃焼を繰り返している。

灼熱のようで、燃え残りのような、炎の織り成す呼吸と体熱の鼓動。

燃えながら、そして、その燃え滓をボロボロと零しながら落ちていく。アノ感覚。

俺は底まで永遠に堕ちている……

目を覚ませば、天井に小さな、橙色の灯りが付いた和室に俺は寝かされていた。

半自動的な霊気装甲の流動によって魔術師との戦いから体自体の調子は幾分か回復はしている。

しかし、その流動に回復だけでなく丁寧に傷ついた脇腹と骨が肉から飛び出る開放骨折を起こしていた両腕にはきちんと骨が戻して包帯が巻かれて、昨日までは筋断裂によって酷い熱を持っていた頬などには湿布が貼ってあった。

誰かによる丹念な治療が功を相したのか？　傷の具合はまったく

戦闘に影響しないほどになっている。

……そうだ、在姫は何処だ？

俺は布団を跳ね除けて立ち上がると、襖を開ける。

急激な光が俺を駆け抜けて、同時に俺の眼が素早く対応する。

そこには、日差しの具合から昼頃、その暑苦しい中で、扇風機にあたりながら食卓で極めて平和的にくつろいでいる湯呑みを持った在姫と常寵が居た。

「遅い、もう何時だと思っているの？」

湯飲みから匂い立つ緑茶を啜って和み、目を細くして見つめながら在姫は俺を嗜めた。

「……すまん、寝過ごした。俺の失態だ、すまない」

まったく、俺はどうした事だろう？　護衛対象を放置するとは特捜室官失格ではないだろうか？

もし、この間に残った魔術師が総じてやって来たときには彼女を守る事なんて出来ない。

幾度も失敗を繰り返すのだろうか？　失敗を忘れ、それを繰り返すのは懲り懲りだと言うのに、なんて俺は馬鹿なんだ。

「い、いや、別にそんな鬱っぽい顔で素直に謝られても……」

昨日はアレだけ頑張ったんだし、別に良いわよ、などとブツブツと在姫は顔を背けながら小さく言い放った。

いつもは俺の上司でも軽く出来ない俺の心境を、たったそれだけの言葉で魔法のように胸を少しだけ撫で下ろさせる。俺はそれを微妙に不思議に思いながら、在姫の対面に座る。

在姫は横に据え置いたポットから自分の分の新しいお茶と俺の分を入れ始めた。

「ふふっ、想像以上に二人とも仲がよろしいのだね」

「別に、普通よ」

在姫はやたら不機嫌な表情で返した。何故そこで怒るか？　それ

が現代の乙女の作法とやらなのだろうか？
そしてその表情を導いた、何故か家長が座る、もしくはお誕生日席と呼ばれる位置にやたら堂々と座る常寵を俺は見つめてしまった。
「在姫。ところで何故、彼女はココにいるのだ？」
在姫は熱過ぎた緑茶に息を吹きかけながら上目遣いに応対する。
「あぁ、昨日あんたが倒れてから季堂タワーの反対側で何が遇ったのか言っていなかったよね」
そして、彼女は順序良く語り始めた。

魔術師の改造獣人による空前の無差別殺戮劇を寸前に召喚魔法で止めた事。
その魔術師には負傷したはずの、戦闘不能だったはずの亡霊騎士が護衛で付いていた事。
それを死神が止めたが、逆に討たれて死に掛けてしまった事。
その間に常寵と魔術師が戦った事。
そして、俺が駆けつけて倒れた事。
そこから上手く逃げ出した事。
新たな魔術師との出会い。
そして、俺の戦った魔術師にして、常寵の兄が同盟から離反した事。

「つまり、常寵。君は殺戮寸劇に参加しようとした魔術師の親類、と言う事になるのだな？」
俺は話しの途中で、その眼鏡の奥に隠された金色の魔眼を射抜くように俺は視線を向けた。
「そうだ。……やはり、君は私を疑っているようだね」
淡々と俺の睨みを外して語る常寵の反応を見ると、在姫はテーブルに両手を叩きつけて、
「ジョウチョーを疑うなんてどう言うことよッ！」
と俺に啖呵を切った。お茶が零れてるぞ。

まったく、この未熟者は何処まで暢気なのだ？

「当然だ。昨日今日で在姫に魔術師の関係者がいるのだ。間諜（スパイ）か何かだと思わない方がおかしいだろ」

俺の核心を突いた物言いに閉口して、それでも在姫は「ジョウチョーが、……そんなはずがない」と言い訳がましく言い放つ。

「そこまで私を信じてくれるのも嬉しいが、彼の言う通り君も少しは私を疑って欲しいものだ。君はあらゆる意味で潔癖過ぎるのではないかな？　無論、私も疑われたら反論はさせてもらうがな」

自信タップリに口元を歪めて常寵は湯呑みを啜り、そして反撃の狼煙を挙げた。

「さて根拠として、たかだか魔眼が使える程度の人間が【地獄使い（ジャックインザボックス）】の居るところに行く愚行をするはずが無い。そして、もし私が本当に在姫を狙うのであれば魔眼と言う切り札を見せる事は無いはずだ。切り札は最後の最後、敵の油断と隙を見せる直前までは取って置く物。まぁ、この状況ですらを演技と言うのであれば魔法でも何でも使って自白なり何なりさせると良い。それでも私がこうして余裕で居られるのは詰まる所、私は在姫側、『シロ（味方）』だと言う自信がある、と言う事に他ならない。以上だ」

澱み無く言い切り、光の加減で眼鏡を光らせる少女。余裕ぶった態度が妖しさと清廉さを半分半分に醸し出す。俺と言う存在からしてそこにノコノコと出てくるのも珍しいと考えると、演技である可能性を考えて今はシロに限りなく近い灰色。敵味方不明と言う立ち位置に彼女を相関図の片隅に置いておいた。

「納得はいかないが、その言葉は考慮に置いておこう」

「物分りが良くて助かる」

と、そんな会話を進める中で一人、首を傾げて蹲いている未熟者がいた。

「あのさ……、じゃっきんだぼっくすって、何？」

君は……本当に魔女なのか？

「その名は俺の二つ名、いわゆる仇名のようなモノだ。東西問わず

に魔女から異常なまでに恐れられているはずだが、それを君は知らなかったのか？」

あまりの知識面の薄弱さに俺は目を細めると、

「いや、意味は覚えているはずなんだけど、靄が掛かったみたいに上手く思い出せないのよね？」

何でだろう？　と不思議そうに再び短い首を傾げていた。

それはこっちが聞きたいくらいだ。

「ところで、先程の話題で死神が出てきたが、彼はどうなったんだ？」

在姫の指先が二階を指し示した。

「和室に国定が居たから私の部屋のベッドで一緒に寝かしたの」

「俺と違って随分待遇が良いのだな」

……ちょっと、待て。

「『私のベッドで一緒に寝かした』だと？」

「そうだけど？　何か問題が？」

俺は恥ずかしげなく、小首を傾げて言い返す在姫に、逆に目を白黒させながら言い返す。

「だ、だから、君は死神と一緒に寝たのか？！」

「そうよ。霊気装甲が怪我で急激に低下していたから『一緒にくっ付きながら』寝て、直接身体を通して魔力で代わりに回復させてあげたの。言わば湿ったスポンジを乾いたスポンジにくっ付けて湿らせるような感じ？　とにかく緊急手段なのだから仕方ないじゃない」

大胆な事をした割にシレッとした物言いは脳を直接棍棒で強かに叩かれたような衝撃にも近く、俺は緑茶を一気に飲み干して湯飲みを静かに置く。

そして、そのまま食卓に頭から倒れこんだ。その直前にしたり顔をした常寵の顔が見えたがどうでも良いものだ。

しかしなんて事だ！　嫁入り前の婦女子が『見知らぬ者』と一夜を共にするなど、道徳が狂ってしまっている。まるであの頃の貴族達と変わらないでは無いか？！　いや、自ら進んでやる分に彼らよ

りも問題だ！
守る対象が、穢れてしまった……
「ど、どうしたの？　ね、ね、国定」
近代道徳観の破壊していた魔女があたふたと驚いているが、俺には毛ほども同調しえない。それほどまでに、打ちのめされた。
君はもっと貞淑な人間だと思っていたのだが、失望した。
あの包帯のざらざらした感触に特殊な感性が働いたのだろうか？
何を持ってしてそんな下品な事が起きたのだろう？

「一体、何事ですか？」

男性っぽい女性の声が真上から響いた。俺は面を上げて見てみるとそこには見知らぬ女がいた。
一重の少し垂れ眼気味の瞳に長い睫毛、紅を差したようにやたら厚く艶っぽい唇が日の光を浴びた事の無いような肌にボンヤリと浮いている。
階段から降りてくる女性は黒い『半纏』を素肌の上に何も着ずにただ羽織っている。ヒラヒラと揺れる隙間からは在姫は論外として、発育の目覚しい女子高生の常寵ですら圧倒する体の凹凸具合が垣間見え、男性として目を釘付けにしてしまう光景は絶句と言う表現に相応しい。とりあえず、下は茶色のズボンを穿いているようだ。黒く、艶やかな髪は食卓に座る髪美人の二人に負けず劣らずの色合いで、その髪は二人よりは些か短く、肩より少し長いくらいまでで止まっていた。倦怠感の漂う妖艶な美女と言った感じだろう。
とそこまで、あくまで人物の観察をしていると途端に額に打撃。
額から衝撃を生じさせた物体が食卓に落ちる直前に受け取る。その

猫柄の湯飲みは明らかに在姫のモノで、何をするのんだ、と問い質す前にその嫉妬に酷似した視線に口先から出る俺の言葉を止めさせられた。

「……えっち、どこ見てるのよ」

「これくらいの反応は正常な誤差の範囲内だぞ、在姫」

嗜める常寵の意見、いや異見など露知らずに在姫は眉を潜めた視線を向けてくる。

幸い、相手の女性は俺が僅かに向けた不躾な視線には構ってはいないようだ。

ここまで勝手に暴走されると既に埒すらあかないので、ちょうど階段を降りきった女性に言葉を向けた。

「国連特捜室下の魔人、国定　錬仁と申す者。貴女の所属と名前を聞こうか？」

彼女は無造作に、半纏の中に手を入れる。かなり危ういところまでギリギリ見えるほど開くと、半纏の内側のポケットから小さな免許書のようなモノを見せた。

「日本国冥府　死神公社　本社　死霊課　課長　若原　曲、と申します」

……何？

「黒い半纏……、死神？」

「だからそうだ、って言ってるじゃん。気付かなかったの？」

在姫の言っている事はご尤もだが、

「昨日のように包帯を体中にグルグルギチギチに巻いて、まさか女性だと気付くはずも無いだろう！」

その言い方に些か怒りでも覚えたのか？　在姫はその小躯をいっぱいに伸ばして俺に指を差し向ける。未熟者、俺にフィンの一撃を

食らわせるつもりか。
「何それ、あぁ――――！　もしかして、さっきしどろみどろになっていたのって私が、『男』の死神と一緒に寝ているって思ったでしょ?!　こっんの不潔！　そんなふしだらで猥褻かつ淫逸な繁殖未然行為を誰構わずするはずないでしょ!?」
　そう言われても男装を見抜けるほど、残念ながら俺は観察力のある人間ではない。
「女性と想像するのに難(かた)かったのだ！」
「硬いのはあんたの頭の中身でしょ?!　何処をどう考えればそんな風になるのよ?!」
「それは『かたい』違いだ。この似非日本人が母国語をもっと勉強しろ」
「あの……、お二人方、高々私の事で喧嘩はしないで頂きたいのですが」
　昨日の僅かに垣間見た高圧的な印象とは思えない、肩を僅かに竦めてしょぼくれた死神の言い方に二人で思わず口を閉じる。加えて何時の間にか二人とも同時に立ち上がった状態からもう一度睨みあって、同時に席に付き直した。
　在姫は俺の方を納得のいかないように睨みながらも、丁寧な手つきでお茶を入れる。しっかり手元を見ろ、零れるぞ。
　急須から一度も茶葉を変えていないのは在姫の貧乏性だ。白湯になるまで使い切るに違いない。そこまで頑なで無駄な信念で、どっちが頭の硬い人間だか。
　そこまでで思考を区切る。
　死神は常寵の対面である一番下座に席を付き、俺は背筋を直して改めた。
「この度の件は特捜室の独断専行による越権行為と魔女協会サバト、三重遥(みえはる)派からの突然の要請に寄るもの。本来なら然るべき外交手続き後に【合同葬査】を行なうものでしたが、差し迫った事態故に甚だ申し訳ないと存じ上げます。今更と言った形ですが、死神公社と

しての意見を上司である貴女の立場からお聞かせ願えないでしょうか？」

美しい死神は若干俯き加減で、こちらを前髪の毛の間から覗くように見ている。その様子がまるでこちらが叱っているようにも見えなくもない。

「公社本部の朱月（あかつき）　永女（ながめ）副総監はいつものように激怒しながらも、特捜室の、彼方の上司に当たる方との直接交渉で、現場の死神公社神南支部との共闘を条件に今回の件を水に流していただくようです。今回、私は季堂のとある方に個人的な用事があって訪問しただけで私自身はその事情に聡いワケではありません。あくまで中間管理職者として情報を軽く通して貰っただけですので、この程度の情報しか知りません」

なるほど、彼女はたまたま巻き込まれただけで、この事件とは関わりは無かったのか。

「ですが、私は結局関わってしまいました。公社の一定の規定で、非常勤であっても、少しでも関わった事件には例え労災無しのタダ働きでも管轄に協力しなくはなりません。それに……、これほどの多大な被害を出したままだとおそらく神南町の交通三課辺りに飛ばされるのも時間の問題でしょう。人にも、奇堂のおじ様にもご迷惑を掛けてしまいました」

昨日と打って変わって、自信の無さが面に出ている女性に慙愧の思いを重ねてしまう。それもこれも、早目に魔術師達と亡霊騎士を仕留めなかった俺の責任とも言える。

「すまない。特捜室の一員として、今回の件を私的に迷惑を掛けた一個人である貴女に謝罪したい」

彼女は長い睫毛を揺らし、「そんなに自分を責めないでください」と弁明の言葉を返してきた。

何故か、見詰め合う形となってしまう。昨日の包帯越しには分からなかったが、綺麗な、深い瞳をしていた。

「……さて、在姫。かなり面白い状況だが、どうするかな？」

「知らない」
お子様は一人だけ話に見ざる聞かざる言わざるの態度で緑茶を啜りながら、どこから取り出したのか少女漫画を開いていた。まったく、未熟者め。
「私たち公社側の情報網では敵の正体もまったくとして判然としません。唯一分かったのは敵に魔法使いの指導者と亡霊騎士が憑いていると言う事だけです」
「それは情報不足は当然でしょう。敵は海外から渡ってきているために海外の部署との兼ね合いが悪いと聞く公社では、島国である大和（やまと）の外から情報を仕入れるのは難しい事でしょうね」
国内の情報と言えど死神公社はあくまで対魔機関。諜報機関とは違い、善悪問わずに各組織から柔軟に情報を仕入れて、さらに偽情報を流して内外から戦力を操作、相殺などと対応する、と言うのは特捜室と違って困難なはずだ。死神公社はあくまで妖魔人外による犯罪への対応力であって、事前抑止力、事件を未然に止める力になる訳ではない。犯罪が起こってから動き出す為に常に後手将棋をやるようなものだ。
しかし、それでは情報戦と言う手段を無しに先手を打つにはどうするべきか？　つまる所、地道な情報収集により相手より上手に立つしか方法は無い。
さて、気は進まないが、手持ちから足りない情報を室長から聞き直すか。
「在姫、電話を借りるぞ」
魔女は未だ少女漫画を睨むようにして見ながら、顔を合わせずに「好きにして」とのたまった。そろそろ大人になれ。
千年生きた中で近年普及しているパソコンとインターネット並に使うのは電話である。特捜室としては次世代を担う汎用精神通信網を開発しているらしいが、まだまだ工作員の強行使用に耐えられるほどでは無いらしい。よって特捜室では独自の静止軌道衛星から電波送受信をする衛星携帯電話を支給されている。だが、どうも最初

の騎士との闘いでその電話を落としたようだ。また経費で機体の代金が落ちる事を願いながら、受信者支払通話サービス（コレクトコール）に取り次ぐ。

そして、オーストラリアの上級工作員のみが知りうる特捜室室長室への緊急用回線を開いた。本来はあのいけ好かない男から協力を仰ぎたくはないが、どうも差し迫った状況のようだから仕方ない。おそらく、電話番号への自動追尾機能で在姫の家から電話を掛けている事は覚られるはずだ。よって、その機能に連動した自動識別機能で滞り無く俺の上司、椋（むく）緑牢（ろくろう）室長と電話が繋がる。

「室長、俺だ。国定だ」

［Ｈｅｌｌｏ，ｍｙ ｆｒｉｅｎｄ．どうやら色々と梃子摺っているようだね。流石の魔人でも、また例の症状で、霊気装甲不足で縮んでは仕事がやりにくいかな？］

まるで今までの事を見たように言うこの男は魔法使いだ。が、その技量は三流どころか地を這う勢いで、それに反比例して諜報能力と作戦指揮の絶妙に優れた出来る上司の鏡と国連の各機関で言われる。それでも人間としては一番最低の男である。

おそらく自前の特捜室の最新の科学技術と最先端の錬金術の粋で組まれた偵察衛星で映像から密かに俺の仕事の様子でも確認しているに違いない。公私問わずしてあらゆる情報は『機関の内外の人、人外問わずに』この男に捕捉されているはずだ。俺を含めて、この男からしてみれば大抵の人と人外には私生活など有ってないようなものだ。

「そこまで分かっているなら再度情報交換をしたい。任務中の事故で幾つかの記憶に欠損が見られる」

［おやおやそれは大変だね。病院に行って注射でも脳に打ち込んでもらったらどうかな。まぁ、君は嫌いだったかな？　それはどうでもいいか、ところで護衛対象の自宅から掛けているようだけど、情報漏洩諸々の危険性は無いかな？］

「それ以前に貴様は漏洩しても組織が痛く無い情報しか俺にすら渡さないだろうが」

［当然だよ。それが僕の危機管理と言うモノ。全体を把握するのが僕だけで、その僕自身が部屋から出なければまったく持って情報は機密性と蓋然性を保たれるのさ］

「俺にはただの引篭りと底意地の悪さにしか思えないがな。で、情報の再確認を願おうか」

［あぁ、ちょっと待ってくれ。うーんあのメモは何処に……、あぁ、有った有った］

脳裏には特捜室の電子情報化が進む中で、覚書を記した紙のみの箱庭を形成している室長部屋は特捜室の全体の情報改革に逆走を図った様相だろうと思い出された。あのアナログ人間め。俺ですら五年前から電子機器の使用を必死こいて覚えたのだから何とかして貰いたいものだ。おかげで長年の紙埃であの部屋にはあまり立ち入りたくはない。

［アイオーンについてのメモが十二項目まで全部、じゃなかった、これとこれを含めて十四項目全部あるけどどれが知りたい？］

「全てだ」

［切羽詰っているね。じゃあ、今から暗号化した音声データで君の脳内に直接ダウンロードするから受け取って］

「了解」

受話器越しにキーボードを叩いて情報を直接入力する音。それと同時に受話器から不協和音に似た音の塊が零と一のデジタル情報として流素で生成された義体の耳小骨を通して、俺の脳内へと直接情報を送り入れられる。無論、こんな事が出来るのは魔人である自分くらいだろう。

魔術師能力。既知の背後関係。亡霊騎士戦力。魔術師の履歴。統率者情報、現段階での『A計画』詳細……

「情報受信完了。まったく負傷によって記憶破損があるとは初めての経験だ」
［あまり聞かない事例と症例だね。特研のエヴァちゃんに魔人体組織や生体反応でそんな現象が起きるのか調査しておこう］
「あぁ、頼む。ところで死神公社との連携は？　正式な交渉はしたのだろ？」
［勿論ね。ただ、あ～んな漫画でしか見ないような押しの強い婆さんに会った事ないよ。ＴＶ会議なのに画面越しに雷が落ちるかと思って冷や冷やしたね、クワバラクワバラ］
「朱月副総監は火龍系の龍人だから、怒りを表すなら落雷より火山爆発の方が適切ではないか？」
［どっちでもいいよ。まぁ、早く仕事終わらせて帰ってきてくれ］
早く、終わらせる……か。残り戦闘で、俺の霊気装甲が持つか、持たないか……。
ダンマリする俺に室長が続ける。
［これは……、命令だからね。命令無視して勝手に敵と刺し違えたりしたりなんてしちゃダメだよ。君は特捜室の貴重戦力で僕の所有物なんだからね。まともに戦えるのが魔人だけ、ってのも国連の組織としてはしょぼ過ぎるとは思うけどね。あそこに戻ったら『これまでの二の舞』だよ。はぁ……、『アノ計画』が成功していればなぁ］
「エヴァさんを責めるな。あの人は努力をしていたのだろ？」
［簡単に言うけどね。うちは研究機関じゃなくて諜報組織なんだから、努力をしても結果を出さないと意味が無いの。そんな姿になって思考まで子供に戻ったのかな？］
「理解はしている。だが、現状でエヴァさんを言葉で貶める理由にはならないはずだ」
［まぁね。彼女も最近は開発部長として失地挽回しているみたいだし、上司としては責める理由は何も無いけどね］
「だったら何故責める？」

［ただの愚痴だよ。現段階ではこの『最重要案件』の不安要素は解決されていないからね。イライラするさ。『尻尾（魔術師）』よりも危険なのは、『頭（魔法使い）』の方だ。『魔法使いの例の計画』が匿名の情報の通りなら世界規模で……］

例の計画、その言葉が『何かの呪文（キーワード）』であるかのように、突然電話の音が紙を丸めたかのように割れて歪みだす。まさか、魔術師達はこの辺り一体の電子情報関係まで把握しているのか？！

［特定の波、帯に……電、ぱ攻撃……、以、降の特、そぅ室のバッく、アッぷ……皆無ぽ……任、務の遂、行を……続、こぉ］

「了解した。後は任せろ」

皆まで言わせずに俺は受話器を下ろした。

――厄介な事になったな。

「どうかしたのか？」

常寵が聞き質すが、この怪しい女の子を信じるには俺の中で至らず、「別に」と素っ気無く返した。

「ところで、二人とも学業の方はどうした？」

二人は高校の二時限目の始まる時間にも関わらず、暢気に緑茶をしばいている。

「昨日の事件、死神と師父が事件を目撃した人への記憶操作と治療とか器物の修繕とかの隠蔽工作はある程度したみたいけど、ちょっぴり、『無関係者』に漏れたみたいでね。と言うわけで、公社を通して学校とかで戒厳令みたいのを敷いて、ほら、例の二人組テロリストの時みたいに人も人外も満足に外に出れないような厳戒態勢、って訳。つまり、今日からもう夏休みなの。このままの勢いで先生達も宿題を全部忘れてくれたらいいね」

「その事についてだが、先日、兄から私の携帯に連絡が有ってな。私の自宅にＦＡＸの受信が有ったらしい。毒島教諭からの宿題範囲通知だそうだ」

「……うちにはＦＡＸがついてないって事で最後まで押し通そうかな」

「そんな事をしたら休み明けにはここぞとばかりに追求されるぞ」
「あぁー、もっと愛されるキャラになりたいわ、私」
在姫は食卓に力無く倒れる。死神の曲さんはこの学生をどう受け止めていいのか？　そう判断しかねているのか、無表情の顔で微妙に慌てている。その証拠に意味も無く勝ち誇った顔をした常寵と食卓に接吻をしている在姫を忙しそうに見比べている。……意外に良い人なのかも知れない。
「ところで」
立ち上がった常寵は空の湯呑みを洗い場の水桶に付けながら、こちらに問い掛けた。
「今の在姫の口から出た二人組テロリストとは一体何なのだ？　無政府主義でも気取った低脳集団か？　それとも例の北朝せ」
「残念ながら、違います」
その問いに遮るように答えたのはやはり、と言うか、死神である曲さんだった。
「百年以上前、三人の『人』が死神公社に襲撃を掛けていました。彼らは人でありながら破格の、十五禁名にも等しい霊気装甲と特殊能力で公社に致命的な痛手を与えてきていました。その彼らの名が兄、偶院（グウイン）　刹那（セツナ）と弟、偶院（グウイン）　永久（エイキュウ）、妹、偶院（グウイン）　未来（ミライ）。彼らの内、弟の永久は、副総監の曾孫まで殺す暴挙に出て冥府全体に悲しみを与えたのです。六年程前、ラスヴェガスからロシアまで逃亡した未来を現地の機関と協力で封じ、そして今年の初めに中華人民崇神会の、とある要人を拉致しようとしていた二人を拘束し、封じました。……忌まわしい事件でした。私の友人もそこで負傷をしたりと、まぁ散々な事がありました。嫌な事件です、はい」
死神に逆らうと言う意味で、【逆神（ぎゃくしん）】と自らを呼んでいた彼らは特捜室でも監視をしていた。無論、その気になれば『俺』と言う手段で彼らを拘束する事も出来た。だが、彼らが過去に失われた十五禁名、偶院の名で近江影との魔王大戦の戦線に加わっていた事。そしてその内一人が、たった一人で、十五禁名の三眷属を相手にして

いた、近江影七人衆の一人だった【魔人】である『彼』に止めをさした事。その二つの事実が魔人である俺と彼らとの交戦を室長直々の命によって禁止する理由だった。

今の状態でも、おそらく吸血鬼達の、例の西欧攻性機関をまるごと相手に出来るだけの実力を俺は持っていると思われる。しかし、それでもあの室長は却下したと言う事は、彼らには魔人を即死させるだけの何かがあると言う事なのだろう。どちらにしろ、現在は公社に彼らは拘束されている以上は公社側に分がある上に、現在の敵とはまったく関係は無い。つまりは脳内シミュレーションの無駄と言うものだ。

「なるほど、あの頃に妙なところで道路工事で封鎖などがあったアレがそうだったのか」

「あら、ジョウチョーってば鋭いんだね、ビンゴ。焼き物は備後」

「その冗句はもう少し捻りを入れた方が良いように思えるな」

「んじゃ、白猫のタンゴは？」

「彼は現在ではむさ苦しいおっさんだから少年少女の夢を壊すべきではないだろう」

まったく訳の分からない会話を繰り返しているが、どうでも良いだろう。

「ところで朝食は何を食べたい？」

そう聞いた俺に髪の毛の生え際から一本、はみ出た毛を揺らしながら在姫は一歩先に台所に向かった。

疑問に思いながら俺も立ちかけたところで、

「あっ、国定は座っててていいよ。まだ昨日の今日でしょ。私が作るから休んでて」

「わ、私も戴いてよろしいのですか？」

「勿論ですよ、曲さん」

「ふむ、私も手伝おうか？」

「ジョウチョーもお願いだから座ってて」

「大丈夫だ。この間の調理実習の時のようにバックドラフトを起こ

したり、鶏を蘇生させたりはしない」
　およそ料理とは無縁な不吉な言葉がもたらされたが、在姫が黒糖味のカリントウを常寵に与えて収まる所に収まった。
　では在姫の待つとしよう。それまでの間は、まぁ、色々と情報を集めるかな。
「ところで常寵、君はどうやって、初めて在姫と出会ったんだ？」
　常寵は不満そうにカリントウを咥えていたが、記憶を反芻させるように心持ち上目使いとなる。
「そうだな……、この通り、私の【眼】は魂の色を観る事が出来る。『異を持つ者は異を引き寄せる』。いわゆる『因力（いんりょく）』とか、『縁』とかそう言ったものが私に有った。スタンド使いみたいなものだ。正式な言い方は『輪廻外』だったか？　知らないか？　まぁ、故に昔から様々な事件に巻き込まれてきた。だから私は『誰』とも一切関わり合いを持つ気が無かったんだ。坤高校の噂は、いや、政霊都市の噂である『異形の集まる』と言う秘密のようなモノはある程度は知っていた。兄がそれを聞いて普通の街から『ココ』に移り住む事にしたんだ。私に『異を持つ者でもいいから』友達が出来るように、とな。内心『なんて余計なことを』と思った。私の引き寄せるモノで人に迷惑を被るのが嫌だったのだ」
　その瞳に映ったのは慙愧の思い。迷惑だけでは言い尽くせないような、それは『喪失』。
「だから今年の入学式の時、私は『拒絶の仮面』を被った」
　想像に難くない。彼女の冷徹な視線で、まるで出エジプト記のモーセであるかように人波が音を立てて割れていく。整然と、常寵は颯爽と、その人垣で出来た道を通っていって、
「そこで、」
　彼女に会った。
「在姫に会った」
　割れた人波のど真ん中でただ一人だけ、腰に手を当てまるで小さい子供が背伸びをするように、それでもただ一人何かに逆らうかの

ように在姫は立ちはだかっていた。
「そこで彼女はなんと言ったと思う？　『この身長だから人に巻き込まれて大変だったのよ、じゃ、先導してくれない？　私の名前は九貫　在姫。貴女は？』。そして、手をムリヤリ掴んで握手」
仕草は子供のようで、態度は怖れを知らぬような魔女の風格。瞳は何よりも意志が強く、気高く。例えるなら大胆不敵。
彼女は生まれながらに自然と荒野に目立つ、宝石のような輝きと強さを持っているからだ。
「思わず『仮面』を取り落としたわけさ」
クツクツと思い出して笑う常寵は本当に楽しそうである。どうでも良いが握手のときに別に俺の手を使う必要性は見受けられない。
とにかく、彼女は出会えたのだ。条件や馴れ初めや、当人の思惑は何にしろ、最高の友に。
料理を製作中の本人は集中しているようで一切こちらに顔を向けない。しかし、チラリと見えた横顔が心なしか、恥ずかしがっているかのように赤かったが、突っ込んでも玉葱を切っている包丁を顔面に向かって投げられるだけなので止めておこう。

「五目御飯に冷シャブサラダ、ワカメの酢の物お待ちぃ」
「「「おぉ」」」
俺は常寵と、死神で声を挙げて思わず驚嘆した。
色合いから見受けられる味の濃淡、配膳と量の配分まできっちり終わらされ、ついでに洗い物も済ましてある。
「すごく、おいしそうです」
死神さんの口から涎が垂れている。
「ふふん、魔女ですから」
「安易に魔女の名を引き合いに出すと質が落ちるぞ」
俺の皮肉に子供のような膨れっ面を見せる。
「食・べ・た・く・な・い・の？」
「戴きます」

両手を付いて、俺は礼を済ますとやや先駆けするように食べ始めた。
その様子に死神の曲さんは呆気に取られつつ、常寵はクツクツと何かを噛み殺すように笑いながら膳を取った。
ちなみに在姫の料理の評価は、無理にケチつけようと思えば言える程度の、おおむね合格の、言わば美味いと言える腕前だった。あぁ、残念。

「で、今後の予定だが、何か提案はあるだろうか？」
本日始まって二杯の出涸らしの緑茶（曲さんは猫舌なので冷たい麦茶）を飲みながら、今後の対策を練る事とした。
「私は」
緑茶の熱さを絶叫して以来、終始無言だった曲さんの口が開かれた。
「公社に、あくまでも護衛と葬査の一任をして、特捜室には撤退してほしい、と思っています」
俯きながらも視線を逸らし、口を一文字に結んでから、への字を作り、そこから僅かに歪ませた。
「死神では一度関わった仕事には『最期』までやり遂げる、気風のようなものがあります。だけど私は……、実戦の肉弾戦ではまるで役に立ちません。私の所属する派閥である若原は最も武闘派で、それを鳴り物にしている分家でした。私はその家系でも底辺。下手すれば、そこらの巡査クラスの一級死神に負けるかも知れません。課長とは肩書き上では名乗っていますが、私は……。その資格などまるで無いほど、――弱い死神です。私は無力でしたが、それでも、死神として職務を全うしたいのです」
ポタリと閉め切ったはずの水場の蛇口から、水滴。滴って、皿をくべた水桶から溢れる。
「無力だなんて言うな」

俺はその言葉が自然と口について出た。
そうだ、誰であろうと、小さな力は持っている。そうでないと悲しすぎる。
「曲さんは、曲さんのやれる事をやればいいじゃないか。俺は曲さんがキチンと仕事を果たせるように手伝うよ。それが『若原　曲のお仕事』じゃないか？」
それしか出来ないほど、人間は不器用で、目の前しか見れなくて、……傷つく。
「弱い強いなんて事は関係無い。何かをしなくちゃいけない時に出来るか、出来ないか。それだけだ。曲さんは俺が来るまでに在姫をしっかり守っていてくれたじゃないか？」
例え、それが出来なくても、それには意味が無いと空しい……。
「じゃあ、つまるところ公社と特捜室が正式に手を組めば万事ＯＫじゃない？」
「……」
「在姫、それが出来ないから曲さん達率いる死神の方々は苦労しているのではないかな？」
「ジョウチョー、それを出来るようにするの。現場の状況を理解出来ない上司なんていらないって。まぁ、ぶっちゃけ私もちょっと状況に混乱しているけど、その辺りを踏まえて報告すれば考慮してくれるんじゃない？　どうよ？　国定もそうするんでしょ？」
「……ではその報告の前に、在姫の小さな頭脳が混乱してきたからそれぞれの戦力解析と情報分析をしようか」
両肘を食卓について、手の上に顎を乗せる常寵の眼鏡が光った。
君は凄く司令官らしいね。

自他ともに認める（自らの比率三割り増し）一流の魔女候補である九貫　在姫の心臓を狙った魔術師結社『アイオーン』。そして、それを護衛するのは彼らから不穏な空気を予感し、調査し、確信した室長の命を受けた千年級の魔人である国定　錬仁、つまり俺だ。

対抗するのは六百年級の亡霊騎士、ガーブリエル・オギュースト。現在は俺の致命的な一撃を二度も受けて離脱中。

例の結社では六人中二人、摩壁　六騎、保隅　流水の両名は迎撃し、在姫の師匠の双珂院　生羅からの連絡によると彼の城で現在【拘束】されているらしい。

また、魔眼使いである斐川　常寵の兄、斐川　荻は魔術師であり、彼自身は彼の恋人らしい人物に誘われて同盟を組み、現在は妹を想って同盟から離反中。無論、誰が裏切るか分からない状況下で常寵ですら本当に味方になのか、そもそも兄の命で最初から在姫に取り入っているのではないのかと、失礼ながら疑問に思う。

未見の敵として存在するのは『斜　蘭』、『女性魔術師　セツカ』、『鞍路　慈恵』。そして、彼らを纏め上げた元魔術師の魔法使い『脱皮者』。

そして、保隅との戦いで偶々戦闘に巻き込まれ、あえなく負傷した死神の若原　曲さん（女性）。

「と、いう感じかな？」

「あ、後は曲さんが業務連絡で聞いたって言う、魔術師殺しのプロの二人組は？」

「どうも直接的に関わっている要素とは考えづらい。ここまで事態が発展して私達に関わって来ていないのだから、この際は俺達とは無視した形で考えた方がいいな」

何より、もしこれを物語にして外で見ている人がいたら、登場人物がただでさえ多いのだ。混乱する要素は出来るだけ省くべきだろう。

「とりあえず、当面の敵は亡霊騎士に、斜　蘭、セツカ、鞍路　慈恵だっけ？」

「在姫さん、黒幕である脱皮者の存在を忘れてはいけません。彼を取り逃がせば、同じことは再び起こるでしょう？」

曲さんが食卓に乗り出して力の篭った宣言をする。

室長辺りならあえて逃して裏から手を回して知らない内に操る形にするぐらいはやりそうだ。が、俺にはそこまで考える案もやり方も思いは浮かばない。それに珍しく室長が「奴を必ず殺せ」と言っていたので遠慮なくそうさせてもらう。

「では、今後の対応について何か意見のある者は？」

「夏休みにも半ば強引になったし、私の屋敷に死神のバックアップを入れて引き篭もると言うか立て篭もるって言うのは？」

「それが一番安全だな。だが、ある程度は積極的に打つ手を考えないと季堂ツィンタワーでの件もある。君を誘き出す強硬手段に訴える可能性も捨てきれないがな」

君が、在姫が一般人への被害を度外視出来るなら別だが。

「じゃ、じゃあ！　何処に居るとも知れない敵と戦うために徘徊やら探索をするとでも言うの？」

一般人の被害などは毛ほども考えていない。むしろ、目撃すらされずに討つ。そんな考えなのだろうか？　未熟者め、そんな事が通用するか。

ふと、何かに思いついたように緑茶を飲もうとして在姫は目を向け直し、常寵の目をじっと見る。

「私の眼、千里眼の能力で見つけようと言うのか？　なるほど、確かに『見つける』『見分ける』事に関しては私の眼ほど都合の良いモノはないな」

「別に、私はジョウチョーを道具みたいに見ているつもりなんて……」

「いや、私をあてにしてくれた事にむしろ感謝しているくらいだ。だが、私の眼は一日三分、いや一分持てば良い方だ。充電のようなモノが必要で、それに使った後は極端に視力も視野も色彩感覚すらも失う。探索だけにあてるのには時間制限が不利だ。それに私は正面からの殴り合いの方が性に合う。光の国の使者以下の活動時間だな、うん」

騎士は無理にしろ、作動原理が不明である事が強みであり、それ

を隠す事が勝利である事が多い魔術師に絶大な優位を誇る魔眼使いの常寵を探索にあてるのは勿体無さ過ぎる。だからと言って敵方と通じている可能性を捨て切れない俺はどうしても俺が探索をして、在姫を常寵が守るとは選択できない。死神が居るとは言え、目の前の魔女を半年も一般人として誤魔化してきた女だ。信用が何よりも置けない。それに俺の代わりになりそうな死神さんも結構騙されやすそうな顔もしているしな。

「あの、何か？」

じっと俺が曲さんを見つめていると、熱風の中で必死こいて回っている扇風機だけでは涼み足りないのか？　何故か顔を赤らめて逸らしながら、長い睫毛を瞬かせて視線だけこちらを見返した。

「で、結局どうすんのよ？」

在姫は明らかにイラだしいと短い足を突然組んで、踏ん反りかえりながら座りなおしている。一体何がしたいんだ君は？

「敵の動向が分かるまでは暫く待機を」

しよう、と言う直前。ワレキューレの行進が何処からとも無く携帯電話の着信音として流れてくる。

「誰だ？」

「私は持ってないよ、お金無いし」

「無線なら持っていますが……？」

「私だ」

それぞれのズレた発言を構う事無く、常寵が昨日からそのままである制服のポケットから携帯を取り出した。二つ折の携帯の背面の常時表示画面を見て着信相手を確認すると、

「……荻お兄様？」

いきなり背景が桃色で薔薇とかの花に変わりそうな常寵の声色のおかげでで、在姫は緑茶を噴きかけていた。……初めて聞くが、破壊力は抜群だ。しかし、このタイミングで兄からとは？　どういうことだ？

俺の疑惑の視線には眼もくれず「いや、困っ、どうしよう」と片

方の拳を口元に当てて、顔を赤らめていわゆる在姫のよく閲覧している日本の漫画で言うところの乙女状態を満喫している常寵。ちょっとばかり普段との差が大き過ぎる。二回ほど落ちた事のあるナイアガラの滝ぐらいの落差はある。

「いいから早く出なよ。お兄さん困るよ？」

呆れたように息を吐く在姫に軽く同意。

「あぁ、でも、こ、心の準備が」

今更、何を言っているのか、この娘は。

「……とりあえず、掌にレモンって書いて落ち着いて」

「れ、檸檬だな？　れ・も・ん、じ・ょ・う・し・ょ・う・ふ・は・い、……よし」

難しい漢字で頭が冷えたのか？　十八回目の着信音で着信ボタンを押す常寵。電話連絡に勝敗なぞが関係あるのか甚だ疑問だが、また慌てられると困るので黙っておこう。

「も、もすもし、ひ、斐川　ジョウちょでっす」

「声が裏返っていますね」

「ジョウチョー、言い方もおかしいよ」

それよりも相手も分かっているのに本人だと名乗る必要は無いだろう。

「あぁ、はい。うん。お兄様も息災で何より。あいや。うん。しかし……」

二十分ばかり中身が訳の分からない、たまに裏声（女性本来の声か？）の混ざる会話を俺と在姫と曲さんは聞いている。早く、終わらせてくれ。

「分かりました。記憶しました。脳に深く刻みました。思い出になりました。御尤もです。はい、お兄様」

会話を切ると、盛大に詰まっていた息を吐き出す常寵。何をそんなに苦しがっているんだ。

「で、そのお兄様は何と？」

死神さんの問い掛けに常寵は訝しがりながらも、こういった。

「スクール水着を持って海水浴場に来てくれだそうだ」

俺は椅子を巻き込みながら後ろ向けに倒れ、しばし呆然とその意味を考えると、その意味自体すらまったく理解出来ない事に気づいて椅子を綺麗に戻して座りなおした。

「で、なんと言っていたんだ？」

「だ、だからスクール水着を持って海水浴に来てくれと」

そんな！　と突然大きな声を挙げる曲さん。

「スクール水着なんてもう五年も着てません！」

死神って年齢不詳だけど、意外に若いんだね、……とそう言う事では無くて。

「しかも、サイズの合うのあるかしら」

と敵意を持った視線で曲さんの胸元を注視、いや凝視する在姫。

……確かに丈の合うのはなかなか無さそうだが。

「いや、そう言う意味では無くてだな」

「私もこんな事があろうかと、スクール水着は常備していた」

と、眼鏡馬鹿が鞄から本当に『一ねんＢぐみ　ひかわ　じょうちょう』と白い布を付けられた紺色の水着を出してきた。どんな事を予測していたのか？

「くっ、旧式スクール水着とは、ジョウチョー、やるじゃない！」

「ふっ、お子様体型の君の方がお似合いさ」

「それは認めるしかないね、残念ながら」
「貴様ら落ち着け！！」
俺の悲痛な叫びによって、常寵が後ろから曲さんを羽交い絞めにして常寵のスクール水着を当てて大きさの違いを測ろうとしていた在姫を止めた。何だ、この空間。それよりも、死神があっさり後ろを取られるな。
早くもこの面子で、魔人にも関わらず、夏風邪をひいたかのように頭痛がした。

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

潮騒の流れる和木市海水浴場は九貫の屋敷よりバスに乗って二十分ほどである。
中都市に程近いながら、環境に関する様々な取り決め（おそらく近くの河川を取り締まる口煩い河童の一族によるもの）によってパッと見た限りはゴミ一つ無いキレイな海岸を形作っている。夏休みも始まったせいか小学生とその子供の保護者達、ちち繰りあっている腹の立つカップル達が群雄割拠していた。
「本当にココなのか？」
お弁当とスイカ、木刀とその他諸々を持って更にパラソルを肩に下げて、場に似合わない緊張感を持った発言をしたのは実体化している国定だ。ちなみに白いタンクトップに麦わら帽子、競泳用水着（短パン型）と言う完全装備である。
「あぁ、間違いない。あの海の家『江頭』で待ち合わせと言う事になっている」
白色の光を照り返す眼鏡。そしてその豊満かつ悩殺で、その肉を分けろと恨みがしい視線を投げ掛けたくなるような体をスクール水着に包んだのはジョウチョーだ。

「本当に彼らはいるのでしょうか？」
そんな気弱な発言を投げ掛けたのは、私とジョウチョーで嫌がるのも無視して剥いで着させた同じくスクール水着姿の曲さんである。普段から日の当たらない格好をしているせいか、青い血管の浮きそうな白い肌に紺のスクール水着はやたらと映えている。加えて、ジョウチョーをあっさりと超えた大人のボディラインは道行く男性が首の向きを固定するような事態へと発展している。と言うか、その肉分けろ。
「居ようが居まいが、この布陣と攻撃力（色んな意味合い）で負ける事は無いわ」
そして腕組みをして、一番貧相な体を意識的に隠しているのは私である。無論、スクール水着である。何やら視線を一番集めているような気がするけど、おそらく奇異の視線に違いない。

で、私達が海水浴場に来たのは訳がある。
遡る事三十五分前。
海水浴場に来てくれ発言の後に常寵が補足したのは衝撃の事実だった。

「お兄様が魔術師一人と停戦の交渉機会を設けてくれた。その際に人目について、更に余計な武装の出来ないように海水浴場を指定したのだ」

この時期であれば、プライベートビーチでもなければ何処の海水浴場も満員御礼である。加えて『常識の外側』にいる私達はむやみやたらな戦闘や秘術を尽くすことの出来ない、持ち札を潰し合った五分五分の状態に持ち込める訳である。無論、それを誤魔化す事の無いように最小限の服装である、水着での謁見を双方が納得の上で望んだわけである。
人払いの結界と言う手段も閉鎖しやすい学校や廃屋などの一定の

空間で有効になりやすいモノなので、開けた海の場合は、沖までまるごと魔方陣でも描かなければ発動はしないだろう。
　幸い、曲さんが応援を入れているのでそこかしらから強い力の圧力を感じる。たぶん、死神の何人かが補助の監視をしているのだろうか？　曲さんのお陰である。
「焼きそばが美味しそうですね、じゅるり」
　昨日からの死神の見た目とテンションを豪快に崩している死神さんの腹ペコ発言を無視しつつ、海の家へと入る。
　あまりの外と中の光量差に、僅かながら暗がりとなった海の家の中は誰が居るのかを判別しがたい。
「突っ立っていても暑さで体力を消費するだけだ。奴らの狙いかも知れん」
　こんな時にも物事を裏返して考える国定に呆れつつ、店内へと入っていた。
　最初に目に付いたのは座席に、脂肪、否、筋肉で弾けそうなアロハシャツを着た常寵の兄、魔術師である荻さんだった。何ですか、机の上に鎮座している腕。二の腕が私のウェストよりもあるんですけど？
「やぁ、どうもお待ちしていました」
　この人の柔和な笑みを見ると、昨日国定と死闘を繰り広げ、更に同盟に離反した剛毅な男とは疑わしく思う。まぁ、世の中には身長僅か百四十五センチ以下の魔女だっているのだ。不思議に思う事なんて無い方がいいのだ。
　その隣に、三枝先生。本名、三枝（ミツエ）　石火（セッカ）先生が、いつもの眼帯を付け、白いセパレートの水着とフードの付いた空色の薄手のジャンパーを着て、荻さんに寄り添うように座っていた。
　……えっ、――石火？　まさか！
「やぁ……、君達に学校外で会うのは、そして『こう言った形で会う』のは初めてかな？　アイオーンへと荻を誘致したのは私、連刑

のセツカに他ならない」
　理知的に見えた灰色の瞳が、圧倒的な勢いで凶器に染まっていくように感じられた。
「やはり、一般人よりも遥かに低い装甲濃度だと思ったら……」
　低い声と同時にパラソルを槍に見立てて構え、体を僅かに沈めた国定は明らかに戦闘態勢だ。
「待て待て錬仁くん、だったかな？　折角の交渉機会を潰すとは、特捜室の浅はかさが滲み出るぞ」
　灰色の、理知的な瞳を国定に向けた三枝先生。
「浅はかさと、ここまで来て言える神経の方が感慨深い」
「まぁまぁ抑えて抑えて」
　いつの間にやら『椅子に座っていたはずなのに国定の背後に居る』荻さんが国定の肩をポンと叩いた。その動作には友愛を示すものしか感じられない。視線では何とか追いつつも、反応する事が出来ずに後ろを取られた国定はしぶしぶと、不機嫌そうに戦闘態勢を解除した。
「さっさっ、皆さんもリラックスして座ってください。冷たいジュースに焼きそばと焼きトウモロコシを頼んでありますから、遠慮なく、召し上がってください。無論、僕の保障する限りで毒など入っていませんが、信用出来ないのでしたらお好きなようにしてください」
「今日は私の奢りだ。学生の身分に景気良く甘んじたまえ」
　ニコリと微笑みかけた三枝先生に、「じゃあ、お言葉に甘えて」と眼前の席に座る。それに納得がいかないながらも、国定は私の横に座る。ちなみに向かいは荻さんで、その更に横には曲さん。荻さんの隣をちゃっかり取って、それでもやっぱり誕生日席にジョウチョーは座った。
　しばらくは無言で食事だった。食事中、国定と私は繁々と、ジョウチョーは努めて無表情で見つめ、曲さんは構うこと無く黙々と食べながら、三枝先生の食事風景を見ていた。

三枝先生には右手が無い。そのために先生は左手が『荻さんによって』おかずを盛ってもらった皿を持ち、『荻さん』によって食べさせてもらっている。

「（やべぇ、これがバカっプルってやつか？）」

些か違う気もするが、本来なら左手だけで箸を持って食べればいい訳だし……、やっぱりバカっプルなのだろう。

「荻くん、私はピーマンは常日頃から肌に合わないと主張しているのだが、その箸の間にある緑色の固形物を帰納的に解釈するならば、聞き入れてもらえないと言う意味なのかな？」

「健康に良いですよぉ」

箸で摘んだ焼きそばのピーマンを三枝先生に三センチ近づけると、その分同じ距離だけ後ろに上半身を退いた。

「健康とかそう言う関係ではない。私はピーマンが生理的に嫌いなのだ」

「好きとか嫌いとかどうでもいいんです。ピーマンを食べるのです」

「荻、私は君の事を愛している。だが、それでも断る。私が好きなのはニンジンなのだ」

何か、私の想像していた先生のイメージが砂上の楼閣よりも、波打ち際に作った砂のお城よりも早く崩壊しているのですが……。

食事が終わって暫く、誰と言う訳でも無く、波の音に聞き惚れていた。

漣。九十九（つづら）に重ねた潮。

潮間に消えた残響を耳で浚う。そして、

「……本題に、入りましょうか」

私は切り出した。先生は答えるように頷いた。

「確かにお腹も満たされて、消化も十分に行われた……、うむ、次はスイカ割りの時間だな」

浜辺に据え置かれたスイカ。

自称他称ともに心眼使いの錬仁と荻さんはメンバーから抜かされ

ている。木刀をたどたどしく構えた曲さんは見事に外し、私は微かに掠った。そして、最後のジョウチョーの一撃。『手刀』で真っ二つに割れたスイカを更に空中で細かく荻さんが手刀で分けると、各自に配られた。

「うん、スイカに塩は美味い……って違うだろっ！！」

国定が物凄い勢いで地面に白い部分まで食い終わったスイカをぶつけた。その後ろでは『浜辺の美観を守りましょう』の看板が寒々しく揺れている。

「ちょ、国定！」

「なんだい、次は泳ぎたいのかな？」

カナヅチの曲さんは浮き輪を腰に回して気楽そうに漂い、私は同じく実はまったくカナヅチのジョウチョーにバタフライを教えた。荻さんと国定は泳ぎ対決をし、途中から何故か水面走行対決に変わっていた。と言うか、人って水面って走れるんだ。

「え？！　……ちょっと、何で私達泳いでいるの？」

国定もその言葉に気付いて急に水面で我に帰って立ち止まって何か言おうとしたが、そのまま海面に沈んでいった。

私は不甲斐ない国定を無視して、国定が立てたビーチパラソルの下で何やら分厚い本を読んでいる先生へと歩み寄った。

「……先生、先生はこんな衆人環視と死神監視の最中で【魔術】を使いましたね？」

眉毛を少し挙げて、意外に気づくのが遅かったね、と口元でほくそえんだ。

予想外の、まさかこう言った形での魔術だとは思わなかった。このタイプの魔術なら人に覚られる事無く、人を陥れる事が出来る。

「いやいや、食事の段階から簡単に魔術に掛かるからついつい遊んでしまったのだよ」

私の僅かに敵意の篭った視線を独眼の女教師は、若いな、と言う様に目を細める。ところで、女教師って響きは妙に卑猥だね。

「九貫くん、ここまで余裕を持ちながらも、手を掛けてないのだから友愛の証とでも思ってくれても良いものだが？」

片手で本を保持しながら口で器用にページを捲る。

「人を小馬鹿にするのも大概にしてください」

「ふふ、若いうちは幾らでも失敗出来るのだ。だから馬鹿みたいな失敗や馬鹿自体の内の一つや二つは有って然るべきさ。最もそれは取り返しの付かない失敗には当てはまらないがね」

本からパタンと空気を漏らすと、今度は浜辺で何処からか持ってきた地引網を対抗するように曳く国定と荻さんを見つめた。

仕方なく私は質問の矛先を変える事にした。

「……先生は何故、魔術師なんかに？」

眉毛を微かに挙げて「やれやれ、人の身のみで人外の術に手を出す狂い者だぞ？　普通ならば、その意味の存続理由などは聞き難い台詞では無いかな？」と苦笑をもらした。

一際高い波音を身体に染み込ませるように先生は目を閉じた。

「私の家系は珍しい事に魔術師の家系だったのさ。エジプトにある、世界規模に展開する巨大研究施設【大統合全一院】の事は知っているだろ？　私の家系はそこに所属する元々は魔女だったらしいが、ある日を境に霊気装甲の因子が急激に退化してしまったのだ。本来なら次世代の血統を弄ることで多少は存続が出来るはずだったが、先代の、私の母の段階で私の家系から全ての霊気装甲が消えてしまったのだ。しかし、私の家系に魔女であった事によって溜まった膨大な【遺産（アーティファクト）】が残っていた。それからだ。私の家系は魔女では無く魔術師を目指し始めたのだ」

有り得ない話では無い。元々は魔女の才能、もとい霊気装甲は著しく劣勢遺伝に属するモノだから契りを結ぶ相手を間違えればそう言う事は多くある。そのために魔女は血縁間での婚姻、もしくは『出産だけ』などは多々にあるらしい。そのために遺伝的に先天性の肉体異常、つまり奇形を含んだ子供を孕む確率は非常に高いとの事だ。もしかしたら、先生の片目、片腕も本当は事故ではなく遺伝に

寄るモノなのかも知れない。
「つまり、先生は魔術師から魔法使い、魔女の家系に戻したいと思っているのですか？」
「うん、そのつもりだよ。荻くんも『魔女を嫁に貰う』なら魔術師のままでもいいか、とか言っていたしね。魔女の心臓は君のでは無くて、別の、悪い魔法使いのでも戴こうと話をつけたのさ」
……どうやらジョウチョーの禁断の兄妹エンドは免れたようだ。アブねー。それにしてもこれは『ゾッコンＬＯＶＥ』と言う境地では無いだろうか？
「私も彼も、別になりたくて魔術師になった訳では無いからね。気付けば目的と手段が入れ替わっていた観も無きにしも有らず、と言ったところか……」
そう言うと私の腰辺りで潮風に揺れていた髪をクリクリと指に巻きつけた。
「ちょっ、先生ッ」
何と無しに気恥ずかしい気持ちになっていると、それを分かっているのか、先生も笑った。
「それに君のハートを奪おうにも、こんなに可愛いければ虐める事なんて出来るはず無いだろうしね。代わりに苛めさせてはもらうがね」
「せ、せんせぇ」
と、恥ずかしがっている私を笑って見ていた先生の視線が突然、奇妙なモノを見るように私を、いや、私の斜め後ろ辺りを見つめた。
「私のセツカに何してるのよー！！」
私の身体が何かによって『く』の字に折れながら飛んだ。って、痛ぇぇぇぇぇぇ！！
スナを盛大に撒き散らしながら、二転三転と回転を繰り返した。
沈黙。
――再起動。
……何者かは知らない。ただこれだけは言える。次に相手が目の

前に立った時、私は『ブッチン』とするだろうと。
顔を砂地から抜き出して、やや上を見上げてみれば金髪緋眼の少女が、やたら黒と白で統一されたやたら際どい水着で私を見下ろしていた。仁王立ちで。
それで、ブッチィィィィィィィンと、来た。
「中々しぶといじゃない。私の回転飛び蹴りを食らって息をしているなんてやりゅバラッ！！」
台詞の途中でクルリと前方に回転しながら、その勢いでそのままアッパーカットを見舞わせた。
若干軌道を変えて斜めから入ったアッパーで、錐揉んで砂地を転がっていく魔術師、斜蘭。
私と同じように砂地に突っ込んでしばらく倒れている。私は近寄らずにその場で生羅師父直伝のボクシングでシャドーを繰り返して身体を温めた。二秒にも満たない程で砂に埋まっていた金髪を抜き出し、砂を撒き散らし、柳眉を立てた表情を見せた。
「このッ！　人が喋っている時に殴るなんてどぉ言う了見よっ。普通悪人とか正義の味方の口上の時には攻撃しちゃいけないんだからねっ！　セオリーでしょ！　セオリー！！」
「知るか！　不意打ちした人間に言える事柄か！　このパープーリン魔術師。あんたなんて私に飛び蹴りしくさってくれたじゃないの！」
「知らない！　心臓さえ無事なら他はどうでもイイもん」
「そんな適当な考えだから荻さんに横から知らない内に突っ込まれたりするのよ！」
「ブゥ太郎の事なんかどう良いじゃないっ、ハハン、もしかして何？　年上とか他に人が居ないと何も出来ないくち？」
「あんたに比べられれば子供に見えないよ。人をどうこう言う前に態度から滲み出る子供っけを抜いたらどうかしら」
「何だと、言わせておけばくぬぬぬ、そりゃ！」
よく分からない口喧嘩の末、業を煮やした斜蘭はテコンドーのよ

うな片足立ちから中段、上段と分けた二段蹴りを放つ。お腹を狙う中段を私は後ろに仰け反るスウェーバックで避け、反動で戻った頭狙いである斜蘭の上段の踵蹴りを、両拳を顎近くにくっ付けたピーカーブーのガードスタイルのまま右に振り子のように頭を振って避けてから、

「うりゃッ」

振り戻す勢いでカウンターの右フックをあわせる。しかも拳の捻りと変則的な軌道の加わった裏拳気味のロシアンフック。

それをニヤリと笑みを浮かべながら、片足立ちで蹴りを加えた足を折り畳んで脛辺りを使って受ける魔術師。

私はそのまま後ろに二、三歩ステップを使って後退した。

「ふふん」

「ふふん」

あんまり書くのが早く無い格闘小説の先生とかが好きそうな展開だった。と、なると――

互いにどちらとも無く自分の間合いに向かって飛び込む。

振り上げられた斜蘭はその足が指し示す空で故アンディ様が笑っていそうな踵落とし、対して私は死神が背後で笑っていそうな肩越しから拳を切るように打ち込むチョッピングライト。

互いの全力の攻撃を止められるのはどちらも皆無。だからこそ――

「やぁ、僕のプリンセス達痴話喧嘩は止めぐぼぉあ！！」

――無粋な闖入者がそれを止められる唯一の人物くらいだろう。

「師父！」

「あっ！」

妙に黒光りするビキニブリーフだけを履いて、この場に出現した師父は前後から威力重視の攻撃でサンドイッチされた。

実は視界の端で大体分かっていたが、止める気はなかった。

たぶん、斜蘭もなかった。

変な当たり所のせいか？　水面を切るように横回転を繰り返して弾んで行くと言う、不恰好で不自然極まりない勢いで二メートル近

い男が海原を飛んでいった。

小休止。

「そう、つまり彼女を私が捕らえた事によって在姫の心臓を取られる事が出来なくなったのだよ」

口から不自然な程に大量の血を吐きながら師父は腕組みをして立ち、私たちを睥睨して『斜蘭を捕らえて無効化した事』を報告した。

「そう言う事！　残念ながら在姫の心臓は取れないんだよね！　本っ当に残念」

「本ッ当に残念、捕虜をネチネチと虐め抜く事が出来ないなんて」

互いに睨み合って「んふっ」と笑みを浮かべ合う。国定が何故かその様子を見て、肩を縮めてブルリと背中を震わせた。

「まぁ、そう言う事だ。君達も仲良くしたまえ」

「誰が」

「こんな女と」

ギリギリと空間が圧縮されるようなプレッシャーを掛けつつ、互いに睨み合う。

「急展開だな。今日に入って三人も魔術師を無効化させるなんて、すると、後は鞍路と脱皮者のみか……」

と中々ブツブツとモノを考えている少年が一人。

「で、師父。コレをどうするつもり何ですか？」

ビシッと指先を銃口のように突きつけると、相手の小娘はムッとした表情を醸し出した。

「そうだねぇ。私が……うふ」

その『うふ』に到るまでにどんな妄想があったのかは与り知らないし、計り知れないが、その時だけはちょっと斜蘭が可哀相に思えた。

実際、その妙に男の癖に似合わない白い肌に黒い笑みを粗雑に貼り付けられると性犯罪の常習犯にしか見えなかった。

「ウワ――――ン、セッカー！！　助けてー、犯されるぅぅ！！」
本気で怖がっていた。
師父はそこに追い討ちを掛けるように、やたらと猥らに指のそれぞれ別に動かして迫る。
「だ、大丈夫、い、痛く、しないからね……――――、はぁはぁ」
「うわぁぁぁぁぁ――――ん！！」
滂沱の涙を浮かべて、恐怖に仰け反る女の子。足に力も入らないのか。そのままヘタリと座り込んでいた。……まったく。
「いい加減に止めんか、ド変態」
師父の後ろからサッカーボールでも蹴り上げるかのように違うボールを蹴った。
一瞬、呆けたような顔になりながら後ろに居た私を見て「マイシスター、マジですか？」と呟いて、そのまま砂浜に倒れこんだ。
ＫＯ――、別名再起不能。
「正義は勝つ」
「暴力にしか見えないがな」
ジョウチョーの冷静な突っ込みに言い返すのも束の間、私に抱き付いて来たのは斜蘭だった。
「えぐ、怖かった。怖かったよぉぉ」
「ちょ、ちょっとぉ」
困った。さっきまで敵対雰囲気バリバリに出していた魔術師が、こうも無防備に抱きつかれると非常に困った。ちょうど私の状況を例えるなら、先程まで噛み付いていた小さな動物が、逆に服に潜り込むほど親密になった感触を受けているのだ。
「うぐ、在姫は、在姫お姉ちゃんは斜蘭の事、虐めない？」
「……えっと」
上目遣いのまま、私の顔をジッと見つめる女の子。白に近い金髪のさらさら髪に、人とは違う種とも言えるアルビノの紅い瞳。小さな顔に均整の取れた体は、同性から見ても可愛いものだ。
敵意も無く、こうして見てみれば保護欲をそそられるような素敵

な女の子な訳で、ここで「だが、断る」などと戯言を言える筈もなかった。

「べ、別に苛めないよ。貴女は、斜蘭はもう私の事を狩らないんでしょ？　三枝先生にちゃんと保護してもらうように言ってあげるから泣かないの、ね？」

私の目前で斜蘭はコックリと黙って頷く。うわぁー、その動作だけで、今までの事が全部許せそうだね。

その様子を国定は色々と含めたかのように、それこそ「それは罠だぞ」とでも言いたげに、目を細めて見ていた。

でも、国定。この可愛さには逆らえないよ。魔性だよ。魔性。魔女の私にも無い部分だよ、これは！

「えへへ、さっきはごめんね。改めて、在姫お姉ちゃんは斜蘭の友達」

ニコニコと擬音が伝わってきそうな笑みを浮かべて、ぎゅっ、と抱きつく斜蘭。思わず、撫で撫でしてしまう私。かわぇぇ。

「ちなみに私は友達でなく、親友だがな」と、何故か海原を腕組みして眺めながら、勝ち誇った笑みを浮かべているジョウチョー。

それに何故かカチンと来たのか、眉根を顰める斜蘭が反撃を切り返した。

「じゃあ、私も親友だもん」

「では、私はここで親友の一線を越えようか」

「じゃあ、私はそれすら越えるッ！」

「越すな、バカモノ」

と、お馬鹿なやり取りをフフッと笑いながら、同じようにホフォと謎の笑い声を挙げながら、二人のカップルが腕を組んで見ていた。

気づけば橙に染まった夕暮れ時。大禍時（おおまがどき）、輪廻の軸とその外に向かう力が交錯する一瞬だった。

そこから、切り取られたように、切り離されたかのように、自ら拒むように、周りから退いて見ていた国定と私の視線がぶつかり合

う。
相変わらずのように、今度はジョウチョーを攻撃対象と認めたのか？　斜蘭は私の胸元で口喧嘩を始めたがその罵詈雑言すら音にもならない。
私は、ただただ一人佇む、寂しげな国定を見つめていた。
潮騒がただの一つの境界かのように私達の間を通り過ぎる。
国定は私の目を見ていない。何処か遠く、億戦を過ぎたの戦場跡を見つめる孤独な戦士の瞳。だが、戦士が本当に渇望する光景はその戦場では無く、戦場の先、人々が求めるあの――――。

「タースーケーテークーダーサ――――イ」
その間抜けでハスキーな声にようやく気付いた。遥か沖に点になるほど流された、浮き輪付きのカナヅチの曲さんが一生懸命に、半泣きになりながら手を振っていた。
二人で見詰め合っていたのを思い出したかのように再認して、妙に気恥ずかしくなったので、テレを隠すかのように泳げない死神を助けに行った。

「じゃあ、さようならだ。九貫くん」
「バイバイ、在姫お姉ちゃん」
何故か白衣を羽織っている三枝先生に、例の外国の制服のような私服を着た斜蘭。
その後ろにはこの蒸し暑い夕方に、未だに長袖を着ている荻さんが居た。
「常寵は今日も九貫さんのところに泊まるのかい？」
「は、はい、そうです。お兄様」
何だ。この夕暮れとかで情感を高めるトーンは。
「そうか、僕らはさっき言った通り、このまま欧州に向かおうと思

う。どうもきな臭い事が起きそうな気がするんだ。たぶん色んな魔女とかが集まるだろうし、狩りの絶好の時だから、次に帰れるのは何時になるのか分からない」
「はい」
「何か、僕に言っておく事はあるかい？」
ジョウチョーは少し下を俯いて、チラリと三枝先生を見ると、
「……三人とも生きて、帰ってきてください」
小さく呟いた。
荻さんは丸い顔を更に丸く見せるように円を描いた笑顔を見せた。
「約束するよ」

闇が天蓋を覆う。何かが急いで、カバーを掛けるかのように広げていく。
ふと、それに気を取られていた瞬間、魔術師達は忽然と目の前から消えていた。

彼らは本当に行ってしまったようだった。
「気を抜いているようだが帰りも気をつけるぞ。魔術師を敢えて離反させて、隙を作る作戦かもしれない」
「国ぃー定ぁー、あんたの頭には陰謀とか、そう言う言葉しか無いの？」
「可能性の話だ。無論、離反した彼らも、俺は未だ敵だと思っている」
「何さ、あーんなに楽しそうに荻さんと遊んでいたくせに」
「違う。技と力に勝負を掛けた時に真剣にならないのはおかしいだろ？」
「論点がズレてるってば、楽しかったんでしょ、ホレホレ」
「どうでもいいだろ」と無愛想に、パラソルとその他諸々を担いだ国定は言うと先を争うように歩き出した。
まったく、素直じゃないなぁと感慨に耽っていると「あの」と海

に浸かり過ぎて唇が青くなっている死神が私に静かに問いかけた。
「九貫さんは、国定さんの事がお好きなのですか？」
……はっ？
「曲さん、それはどう言う意味で？」
「……昨日から見ていて、在姫は国定さんの事を意識しているように見えて、まるで長年連れ添った夫婦のような雰囲気を感じたので」
その口ぶりを聞いてクツクツと笑って見ているジョウチョー。貴女は後で荻さんのことを『詳しく、そしていやらしく』聞くから待っていなさい。
「そんなのは誤解ですよ。だって私は国定と会ったのは初めて――」
何故か脳裏に浮かぶ、三日前のあの草原の夢の光景。本当に私は、いや、その光景よりももっと昔の、一昨日みた夢の、あの若武者と対峙していた光景の頃から、彼の事を知っているのでは無いだろうか？
遠い昔、千年以上も前の……。
「――そう初めて何だから、別に凄く仲が良い訳では無いですよ」
「あ、そう、なんですか。でも仲が良き事は良い事です」
その言葉と自らの胸中に釈然としない物を抱えながら、「早くしないと置いて行くぞ」と呼ぶ国定を追って、久しぶりに何事も無く自宅についた。
国定が夕飯を作り、その間に今日のノリで調子にのって三人でお風呂に入る。
曲さんが半泣きであがる頃には、国定は何処で見つけたのか捻り鉢巻をして鍋奉行をしていた。
「うむ、土用丑の日に鍋とはこれ如何に？」
「常寵、元々丑の日は平賀源内が鰻屋のために作った宣伝文句だ。

元々は精の付くものを食べるための風習だっから、鍋物でも問題は無い。むしろ正解だ」

「確かにそうだったが、あぁそうか、この海では鰻は取れなかったな」

「なんでジョウチョーはそんな事知っているよ」

「……精の付くモノ……、つまり今晩はお盛ん、ムグッ」

ポロっと言ってはいけない事を言いそうになった曲さんを慌てて止める三人。何処で誰かが聞いて見ているか分かったものじゃないのだから、余計な事は言わないのが吉だ。

気を取り直して国定が網で揚げた海鮮類の鍋物を突っつきながら、四人で談笑やら学校の愚痴（主に目の敵にする教師に関して）やら、仕事の愚痴（主に自分の失敗や上司に関して）やら、恋の愚痴（主に鈍感な親類に関して）やらを繰り広げられ、

「在姫、中々良いものを持っているではないか」

と、仕舞いには常寵は私が奥底に秘蔵していた焼酎を持ち出してきた。

「ちょっと、それ。私専用で高いんだからね！」

「あ、在姫さん、並びに常寵さん、貴女方は未成年では無いのですか？」

曲さんは鍋の湯気のせいか結露して、汗のようなものをだらだらと大量にかいている。

「悪い魔術師達が四人から二人に減ったんだから、パッと少しは羽目を外してみようではないですか？　さ？　固いことは言わずに、まぁ、部長、さぁさぁ御一献、御一献」

「私は課長ですッ！　はっ！　いつのまに私はお猪口をッ！？　く、国定さんも何か一言言ってください！」

「ん……、程ほどにな」

意外な事に青少年育成の為の飲酒は魔人にも認められているらしい。

「な！　国定さん！」

「正気を失うほど呑むのは素人のやる事、この程度で警戒が解けるくらいでは寒空での夜警などは務まらんのです。記録が確かなら、夜警中の適度な飲酒で恐怖を消し、新陳代謝を高めていたものだ。過度でなければ、多少は問題ない。今晩も俺が夜警を兼ねるし、在姫達は羽目を外しても構わないし、俺も多少なら大丈夫だ」

国定は今日は妙に物分りが言いみたいだけど、もしかして今日の遊んだ反動だろうか？

「国定くんの言う通りだ。と言うわけで、聞き分けの良い魔人にも、さぁさぁ、在姫、ボォとしていないで国定くんに注ぎ給え」

「え、あ、うん」

いつの間にか用意された徳利を傾け、これまたいつの間にかお猪口を掲げた国定へと注ぐ。

国定はぬめった液体を一口で呑み干し、僅かに、笑みに見えない程度に口の端を曲げる。

「ん、中々の味だ」

「芋焼酎、九州の富乃宝山（とみのほうざん）。高いんだから味わって呑みなさいよ」

「あ、在姫さん！　そんな事に使っているからエンゲル係数でも金銭的に圧迫されているんじゃないですか？！」

う、その感も無きにしも非ず。しかし、習慣と言うものは中々変えられないものですよ、と心の中で二秒掛かりで反省して、私もお猪口を傾ける。……くぅー、たまんねー。あれだけ、鍋物食べたのに胃がカッカと熱くなってくる。

「うむ、まぁ、曲さん、反省はとりあえずそれを飲み干してからにしないかね？」

「な、何を！？　はっ！　いつのまに私は置いたはずのお猪口をッ！？　しかも注がれて！　ちょ、死神を馬鹿にすると――」

その時、私はタイミングを見計らったかのように、わざとらしく常寵に問いかける。

「あっれ～、ジョウチョーさん、死神さんが何か言いたいようですね～」

「ふむ、と、言う事は、言いたいことは『呑んでから』ですよね～、在姫さん」
　独特の手拍子と共に一体私達は何処で憶えたのか？　クラブなどの盛り場でありがちな一気呑みのコールを掛ける。
「今～なんて～今なんて～」
「え、あの、うぇ、うわ」
「言いたい事は呑んでから！　あ、それ」
「パ～ラパ～！！」
「私、弱いので、あの一気飲みは本当に……。そ、そうだ、国定さんも何か言い返して、って何で『ぱ～らぱ～』って国定さんも混じっているんですか？！」
　このまま呑まないと場が冷めると言う無駄に大きなプレッシャーに負けたのか？　曲さんはまるで敵でも見る様に水面に写った自らの顔を睨むと、
「も、もぉ、知りませんからね」
　ぐぃ、と一息で呑み干す。
　そして、その呑んだ合間よりも短い時間で最高の笑みを浮かべて、
「やっぱり、無理です」
　真横に倒れて、真っ赤になりがら、曲さんは目を回し始めた。
「ふむ、一杯でバタンキュウとは、死神もこんなものかな？　このまま漏斗を口に咥えさせて注ぎ込んでみたらどうなるだろうね？　ふふっ」
　妙に黒い笑みを張り付かせてジョウチョーは楽しんでいるが、流石にそれは犯罪である。でも、死神って戦闘以外で死ぬのかな？　急性アルコール中毒で等々力医院に担がれていく死神もそれそれで面白いかもしれない。
「まぁ、色々と想像通りで良かったけどね、……あのさ。徳利ごと下げて要求って事は、国定はもう一献？　早過ぎじゃないの？　私のなんだから呑み過ぎないでよね！」

その後よく分かった事は、国定はザルで、ジョウチョーはそこそこで、死神でも下戸は居ると言う事だった。

「では私と曲さんは隣の部屋を借りよう」と取り付く島の無いうちに顔を桜色にしたジョウチョーは未だ顔を真っ赤にして「私ぁ、もぉ、呑めまっせぇん」と唸る曲さんを嬉々とした表情で小脇に抱えながら、部屋に入っていった。あの部屋で何されるのかしら、一体？

二階の廊下に佇むように残された私とあれだけ呑んだのにも関わらず素面顔の国定。

頭が酔いで蕩けているせいか、小さな守護者である国定とじっと見詰め合う。

「……今晩はきちんと在姫を守るから安心して寝てくれ」

始まりの日から変わらない真摯な瞳。

でも私にはその奥の、底の無い終わった、絶望の続く物悲しい瞳の理由をまだ問う事は出来ない。

「毎晩、そんな事まで心配されなくてもグッスリ寝るんだけどね」

そう何とか言葉を整えて言う私に柔らかく、今日の中で一番緩んだ顔を国定は見せて「君らしい」と頷いた。妙にくすぐったくなるような、居心地の良いのか、悪いのかよく分からない気持ちが疼いた。

この男に、もっと素直に笑って欲しいと、私は思った。

「じゃあ寝るね、国定もちゃんと休みなさいよ？　いい？　分かった？」

感情がなみなみのコップから零れる前に慌てて飲み干すように、私は早口で捲くし立ててみた。

「分かっている」

「それから……、色々と……、ありがと。お休み」

私は頬っぺたが急に熱くなるのを感じて、そしてそれが恥ずかしくて、自室へと駆け足で入っていく。

「……あぁ、お休み」

国定が扉に背を向けながら私に声を掛けた。ちらりと垣間見た表

情は、私の名前を初めて呼んだ時と同じだった。

私は寝室の扉を押さえるように閉じて、そのまま国定の声に軽く後押しをされて、そして倒れるようにベッドに泳ぎ疲れた体と悶々とする心を預けた。

寝室の扉に体を預ける音。隔てるモノは壁だけで、それでも、国定は何か別の壁を作っているような気がした。

今夜は臥待月（ふしまちづき）、ちょうど寝具に潜る頃、床に臥して待つ頃合に月が顔を出す。

誰もが見向きもしない頃、ようやく彼が少しだけ本来の顔を見せた気がした。

13. 大叫喚（だいきょうかん）（後書き）

The night has come.
Waning moon is laughing above
the stagnated sky.
The man start to accompany th
em on tragedy.
He knows what will happen thr
ough and through after this to
night.

１４．幕間　鉄囲線四（前書き）

夜が来る。
欠け始めた月が澱んだ空で笑っている。
男が悲劇の伴奏を始める。
男は今宵から始まる事を知り尽くしている。

１４．幕間　鉄囲線四

生温い水槽を、巨大な、アロワナのような魚が悠々と泳ぐように、三つの影が歩みを進めていた。

二人の女に一人の男。

内、二人は大人で一人は子供。

内、一人は片腕、片目で、後の二人は健常者。

女性の隣にくっ付く様に足を進める子供は金髪に緋眼と言う瞳。故に、黒髪の日本人である男女からは生まれ出る事は些か難しく、詰まる所家族のようにはまったく持ってして見えない。

しかし、彼らには目に見えない、同じような独特の雰囲気があった。

何か決意を秘めた、空気と言うものか、そうとしか表現しえぬ何かが纏われている。

チグハグな彼らに共通する言葉はただ一つ。

魔術師、である事だった。

「在姫お姉ちゃん、結構、いい人だったね」

金髪の少女、蘭の問いかけに、独眼を細めた笑みを浮かべ、石火は頷いた。

「ラン、私は前々から彼女に関しては『良い子だ』と何度か言っていたはずだが？」

「何さ、魔女を狩るって決意した直前まではあんなに嬉々とした顔していたのに、急に相手が在姫お姉ちゃんだって分かったらデレデレしちゃって。何だか、ちょっと妬ける」

焼きたて餅のように膨れた面を浮かべる蘭を、荻と石火は柔らかい視線で見つめる。

「ふふ、彼女を非常識の世界の住人だとは分かっていたが、まさか

狩る対象になるとは思わなかったさ」
「教師になって初めて質問しに来た子だって石火は言ってましたよね？」
「荻君、君はどうでも良い事を覚えているのだな？　まぁ、偽造の教師免許で三ヶ月もったモノだとは私も思うさ」
「石火が優秀だからさ」
「ふふっ。世辞はそれくらいにしておけ」
「（あ～ぁ、バカップルが始まったよ）」
ちなみにそんな風に彼らがまったりとした空気を醸し出しているのは、先程在姫達が遊んだ海辺側の都市部にあたる神南町の小さな公園の一つである。
彼らは無断で魔術師同盟を脱退したので、今までの住処とその痕跡を消してただ今宿無し街道をまっしぐらに進んでいる。現在は先程まで濃厚に感じた、おそらく牽制のために態と目立たせていた死神達の尾行は消え去り、緊張はしていても緊迫した状況ではなかった。死神達は人を守るための機関であるため、死神側により近い、死神公社のお偉いさんの一人が同時に治める魔女協会所属の、在姫を守ると言う名目で魔術師達を監視していた。しかし、本来は人である魔術師達も対等に守られるべきなのである。もっとも、彼らの同盟者達が出した被害、公共物（学校と道路の一部）と建造物の破損（季堂ツィンタワー）のペナルティと言う事で彼らは放免され、同時に魔術師同盟からの追撃による被害も、亡霊騎士さえ関わらなければ死神公社からは度外視されると言う状況に陥っている。仮に亡霊騎士が出なくても、魔術師同士の争いはイコール人同士の争いとなるので、結局のところ公社は介入すら適わないのである。
未遂ながらも襲撃を行った蘭はともかく、荻は流水に抱き込まれただけであり、石火に到っては襲撃すらまだ加担していないために蘭等からのばっちりみたいな罰である。無論、それでも笑って許すのが、蘭と荻に対する石火の立ち方なのだが。
ともかく、そのために彼らは魔術師同盟の追跡から逃れる手段の

一つとして、ダンボールハウス群の中に身をしばらく潜めて、それから街を出ようと画策しているところである。
つまるところ、リアルにホームレスな状態である。
「むぅ、……ブゥ太郎、喉渇いた。抹茶コーラでいいよ」
蘭は唐突に渇きを訴えると、その台詞に「やれやれ」と頭を振りながらも少し遠めに離れた自販機まで荻は歩みを進めた。幸いお金だけは魔術師らしく非合法なくらいあった。この辺りも魔女や魔法使いとの違いとも言える。
蘭と石火はベンチに腰を掛けて、身を寄せ合った。
ムッとする真夏の空気すら介さずに、ただただ二人の間を埋めあう。
「ランはどうする？　私達と一緒に来るかい？」
最近、欧州で予言の書が現れたと言う話で、教会と吸血鬼機関の間で緊張が奔っているとの事だ。おそらく、彼らの異界の理を狙って、隠者である邪悪な部類の魔女達も乗り出すはずだと荻と石火は睨んでいた。
「どうしようかなぁ？　もう二人とも子供とか欲しいでしょ？　私とか居たら邪魔じゃない？」
とぼけたように言う蘭に、石火は少し悲しそうな表情を浮かべる。
「邪魔だとは思わないよ。ランは……、私と同じだからね」
「……」
片腕のみでギュッと蘭を抱き締める。それは『孤独』を埋める為の方法の一つだった。
「あのね……、セツカ。在姫お姉ちゃんはね、私達と同じで、でも違うと思うんだ」
「私達と同じで、違う？」
「うん、たぶん、在姫お姉ちゃんも、最初は『孤独』だっただと思うんだ。同じ匂いがするの。でもね、強いんだ。立ち向かうの、それでも、何だか知らないけど、とにかく根拠も無くガンガン進んじゃって、気付いたら、友達とか居るの。私達みたいに、似た者同士

で身を寄せ合う必要なんて無いんだよ……」
眼差し。魔眼とは関係無く、ただただ強い意志。挫けそうになっても、押し潰されそうになっても、何時の間にかケロリと克服する。そして、ただ単純に貫く。
「やはり魔女でなければ、出来ない事なのかも知れないな？」
「……うん。ところでさ、抱っこされるの好きだけど、ちょっと暑くなったの、セツカ」
「あぁ、済まない」
身を離しても浮かされた温い空気が揺らいだだけで、むしろさっきと同じでも構わないように思えた。
夏の熱気で妙に鮮やかな彩色を散らす月を見上げる。
「とにかく、二人でいる時間は作った方がいいよ。夫婦は夫婦でいるべきだぞっ？」
「私達は法的には、まだ赤の他人なのだがな」

足音が高く鳴り響いた。公園のレンガを打つ皮のブーツの音。
急に、予報では聞いていたはずの雷雲が、今まで気配すら見せなかったにも関わらず、それに引き連れられるように、従うように迫ってくる。
雲が月の周りを包囲するかのように風が一陣と薙いで覆い出し、直後にまったく、自然すら緊張して動けないかのように全てが凪いだ。臥待月が、暗黒の雲海に囲まれ、逃げる事が出来なくなった。
男が居た。
その場に居たのが当然であるかのようにその男は居た。突然、男を照らし出したスポットライトであるかのように月明かりが降り注いでいる。煌々した月光で輪郭だけが縁取られて、巨大な黒い男が聳え立っていた。
黒いローブは魔法使いらしく羽織られ、左右に伸びる鎖骨と白い

肌が何かの祭壇のようにその狂った神性さを主張している。その祭壇さえなければ、影絵のような男だ。

男の左手には、全身が血塗れになった荻が首を掴まれて、白目を剥きながら痙攣を繰り返していた。

誰も一言も発しない。発せられない。

ただ周りの空気が鉛に変わったかのように、彼女らは眼球一つとして動く事が出来なかった。

「楽しい夢は見れましたか？　裏切り者ども」

男は楽しそうな声色でそう言った。

「モ、脱皮者（モルター）……」

搾り出すように、蘭は呟く。

一度として、本当の声は聞いた事は無かった。だが、その声色は聞き覚えがあるようで居て、耳に覚えのある相手の印象とはてんで違っていた。だが、例えがこれが凶器だと教えなくても、ゾッとするような怖気を感じるように、血に塗れた刃物を曝すような、言い知れようのない明らかな存在感と圧迫感があった。

この存在は議論する余地すらなく、中世の頃に常人と魔女を問わずに二万人に実験をし、心臓を抉り出し、魔術師から魔法使いへとなった究極の実践者。魔術師の皮を脱ぎ捨てる事すら出来た最高の元魔術師。【脱皮者】。

直後に、ゴミの回収員が投げ捨てるような気軽さで、百三十キログラムを超える男を片手で石火の足元まで放った。

首から落ちた時に、彼の首元から、何かが不自然な圧力で砕ける嫌な音が響いた。

彼女は思う。

あれほど愛した男なのに、今は何も、何も考えられ無いほど、何も感じない。

可笑し過ぎて笑っちまいそうなくらいなのに、何一つとして、心に去来するものがない。

踏み潰すかのような圧倒的恐怖で心の機能が麻痺でもしたのだろ

うか？

「おそらく、君が思っている事とは違うはずです。単純な事ですよ。君が愛していたと思っていた男とそれに伴う事象は、錯覚だったに過ぎなかったのです」

魔法使いに口を押さえられて、無理矢理粘りつく濁った液体を飲ませられたような、胃の気持ち悪さ。

思い出と名のつくモノが愛の名の下から地の底へと崩れ落ちていく。

悲しみを思うはずの感情が狂って、あれほど近くにあったはずの存在感が急速に離れ離れになるように感じた。

「いや、錯覚に過ぎないが『愛』と名のつく仮初の衝動はあったかもしれませんね。それよりも、今の君を生かす、より強い衝動があったのを忘れたのではありませんよね？」

その言葉が引き金となった。

石火は頭蓋の内側から発する鋭過ぎる脳の痛みに片手で頭を抑えながら、ベンチから転がって地面に臥す。声すら挙げる事は出来ないほどの痛みともう一つの感情の嵐。

いつもなら駆け寄れるはずの蘭は、無敵とさえ思っていた荻が廃棄物のように投げ出され、ただただ増大してく魔法使いへの恐怖に身を震わせて動けなかった。

そして、石火の脳裏を抉るのは、いや『実際に抉られていた経験』で疼くのはあの光景。

吹雪く雪原、周りには何もなく、白い粉が肌に痛いほどの風で胎

動する。
それに混じる赤く湿った粉。
それを発する中心には千切り取られた首から、鮮血をスプリンクラーのように振りまく、父と母と呼ばれたモノの抜け殻。
その中心には血粉をただのシャワーのように浴びて、先程までの鋭い目つきを緩め、恍惚とした表情を浮かべるセーラー服姿の少女が立っていた。それを見つめるのは、まだ同じ程の少女と言っても過言でない頃の石火。
「気ぃん持ちいぃ～～、この暖かさ、最っ高」
赤い舞台の上をくるくると少女が廻る。その両手には、掴まれ、砕かれ、捻り取れて、歪んだ、肉親だったモノの頭部。
石火の口からガチガチと歯の根の音が絶え間なく流れ出る。両足は既に彼女に折られ、普通では曲がらない方向に曲がっている。逃げられはしない。
辺りに散らばるのは大量の、既に消費された重火器とその残り香を発する薬莢、使えないほどの魔力の残滓しか感じられない魔女の遺産。そして、肋骨を素手で観音扉のように開かれて撒き散らされた母の臓物と、肩と股関節から先をそれぞれ虫のように捻り取られた父の残骸が白い野原に突き刺さって散らばっていた。
ロシア、モスクワ郊外で暴れると言われていた魔獣。それを討伐し、サンプルを取るために大統合全一院、通称神秘院から三枝家の派遣の命が降りた。まだ中学を卒業したてにも関わらず、その魔術の頭角を同年代から引き離す程に現した石火を連れて、三枝家はその場に乗り込んだ。
しかし、彼らに取って酷く残念な誤算があった。その場に居たのは魔獣では無く、もっと賢く、厭きれるほど強く、そしてより残忍な生物だった事だ。
「見て見て、ほらほら、清里（キヨサト）　鋼音（ハガネ）のリアル首人形劇ぃ始まり、始まりぃ」
そう言いながら、肉を掻き入れる鈍い音を立てて、首の切断面か

ら頭部に向かって手を押し込んで鋼音が玩ぶ。手を押し込まれて反対にダラリと出てきた、母の舌。その下顎部が、イカレタ少女、鋼音の手でカパカパと、まるで手袋を使った人形劇のように動いた。

「『おねがぁっ、セツカをごろざないでぇぇぇ、げふ』、……ハイ死亡。ってこれって死んでるのか、もう。……笑えない。冷めた。あんた要らない、ぽぃ」

そう言いながら、片手を横に振って、雪原に石火の母の頭部を投げ捨てる。人を超えた力で投擲された頭部はあっと言う間に真っ白な背景からは見えなくなった。

「さぁ、次はお父さんだよぉ。『馬鹿な！　魔術が効かない、セツカ逃げろ、がはっ、ぎゃっ、痛ぃ痛い痛いいだ、ごぅっ、ぉ』……、逃げろ？　プッ、ごめん、無理。この子、全然長生きできません。……ひゃは」

鋼音は自分よりも明らかに大きな石火を、寝そべって動けない状態から片手で引き揚げる。

彼女の顔の目前で、それぞれの目が意志を失って別の視線を向けている彼女の父だった肉塊を使い、垂れ出たままの舌と供にカパカパと口を動かした。

石火は見る影も無い家族の姿に目を瞑って顔ごと逸らす。

「はぁいよく見てねぇ、て、目ぇ瞑っちゃダメでしょ。お父さんなんだよ、あなたのお父さんだっただよぉ。そら、よく見なさいなぁ？　ね？」

固く瞑ったセツカの瞼に少女の細い指が引っ掛かり、勢い良く引かれる。瞬間、右目の奥まで何かが入り、そしてコードが切れるような音が耳の奥でした。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

雪原に埋まるように、ぽとりと落ちた彼女の一部。

「ほらぁ、ちゃんと目ぇ開けないから、指が入って眼球が抉れちゃったじゃん、あらら。えいっ」

その落ちた球体を鋼音は踏み潰した。ぐじゅりと中の水晶体を撒

き散らす。その動作は、あくまでついで、と言った感じの挙動だった。たまたまその場に有ったから踏んだ、その程度の理由だった。

ピクピクと震えながら、セツカは両手でがらんどうとなった肉の穴を押さえる。

眼窩に滑り込んだ際に目玉をぐるりと囲む、頭蓋骨の一部である眼底の骨すら砕かれ、脳も直接傷が付いていた。それでも生きていたのは運が良いとしか、いや悪運が強いとしか言いようがなかった。

滂沱の血涙とただの涙が赤と透明の一筋の流れなって雪原を潤ませる。

まるで世界の捩子が締め上げすぎて狂ったようだった。

しかし、その確実に常識が狂った状況で転機が訪れた。圧倒的なまでの生命の蹂躙。尊厳の剥奪と陵辱にも等しい暴行。それに対して、心は抵抗を生み出すために恐怖の変わりに一つの感情を生み出した。

殺意。

恐怖を殺意で塗り潰した。

「……良ぃ感じじゃあん。人間だったら、あのすちゃらか兄弟達を引いたら世界で一番強い殺意だよ。でも、そのままにしとくのもウザイから、終わらせてあげるね？　きしししししししししししししっ」

もう一つの頭部が雪空を飛んでいく。父だったモノも無くなった。

鋼音の指先が、人外の殺意として顕現し、その形状をそう言うモノだったかのように、『常識』を従わせるように形を凶器へと変えていく。爪が煙を上げ、音を立てて、指と一体化した獣の鉤爪のように変えていった。歯茎から抜けるように漏れる笑い声。まるで虫がゾロリと這いずるような、掻き毟りたくような笑い声。

痛みは恐怖を塗り潰すと同時に、セツカの中で生まれた奇妙な脳の快感物質でとうに失っていた。しかし、気概はあっても、その暴力に立ち向かう術は無い。

「じゃあ、死ん、うあっわ」
鉤爪がセツカに届く刹那、鋼音の体が吹き飛んだ。
少女の居た場所には、肥満、否、屈強な筋肉で覆われた男が飛び蹴りを終えて、赤い舞台へと乱入して居た。
鋼音は倒れた状態から地面を叩いて、足を伸ばしたまま勢いだけで立ち上がる。
「――きみは邪魔するの？　ねぇ？」
男、斐川　荻は少女の問いに答える代わりに親指で後ろを指した。
そこには枯れて年輪すら刻まれたような、それでも妙に筋骨の発達した小柄な老人が、僅かに老人よりも背の高い、一人の灰色のコートを着た女性の肩に手を置いていた。
付け加えて言うならば、老人は肩を押さえている相手が身長と体重が三倍ほど違っても、軽く手を置くだけで体の自由の全てを奪い続ける事が出来た。
「鋼音、実験は終わりだ」
老人の気が少しでも変われば八つ裂きどころかこの世から消滅させられる事すら可能なのにも関わらず、女性は、双葉宮（フタバミヤ）　咲貴（サキ）と呼ばれる最悪の研究者は表情を一つとして変えなかった。淡々と、惨殺のそれが実験である事すら疑わず、怒りを煽る事すら分かりながら、言い切ったのだ。
「えぇー、お母さん、こいつらぶっ殺しちゃってもいいんじゃない？　ねぇ、殺しちゃおうよ、ひゃは」
そう言う鋼音に「いや」と短く答える。
「鋼音は、まだこの老人、【大災害】に勝てるほど進化はしていない。大人しくここは退くんだ」
彼女は常人では数日で発狂するほどの複雑な思考を持ちながらも、答えは簡潔なものしか言わない。そしてそこから導かれるのは全か無か、二者択一。そして、彼女の選ぶそれは大抵正答であり、覆された事は殆ど無いに等しい。
つまり、鋼音はこの面子に勝てない、そう言い切ったのだ。

「む、それは遺憾。でもお母さんが言うならしょうがない、撤退、撤退、……とその前に」

倒れたままの石火。右目を押さえていた右の腕が鋼音の見た目に似合わない豪腕で引き伸ばされ、そのまま二の腕を踏み潰された。千切れ飛ぶ。痛みは、悲しみは、今蹲る永久凍土よりも凍結していた。

そして、ぶつ切りにした腕の断面から鋼音はボリボリと咀嚼し始めた。腕を食っているのだ。石火の指先はまだ反射だけを残しているのか？　ピクピクと薬指が震えていた。

石火は叫び声すら挙げずに、その光景を決して忘れないように瞬きすらせずに、鋼音を見続けていた。

それと目を合わせながらウットリとした視線で、まるでこれから樽で熟成するワインの味を想像するような、目の前で膨れ上がり後々に爆発する憎悪をただただ楽しむように食事をしながら眺めていた。

そして指先までを飲み込む。喉が揺れ動いて、三十秒弱で、少女の腕が同じく少女の胃の中に収められた。

「女の子の生の腕おいしぃー。じゃ……、お母さん。私は帰るね」

そう言うが早いか、次の瞬間に、背中のセーラー服をズタボロにして、背中から捩子くれた、羽のような、同時に触手のようなモノが生え出でる。地面を扇ぐが早いか、一振りで風と雪が舞い踊る天空へと消えていった。

「治療しようか？」

実験のために、とでも付け加えられそうな咲貴の言葉に、痛みと湧き上がる憎悪、甚大な被害で動く事すら適わない石火に変わって、大災害は「いらぬ」としゃがれて、それでも深みのある声で返答した。

そのまま、徒歩で、ロシアの雪原から立ち去ろうとする咲貴が不意に立ち止まり、石火を見据える。

「この世界の常識では私の子供達は殺せないよ」

彼女とその家族が、家に先代が魔女として残した遺産で作り上げた、世界の常識に属する魔術では役に立たなかった。

「魔法使いでもならなければ無理だ」

雪原と向こうへ彼女は消えていく。同時に流れ出すぎた血で朦朧としていた中で、それでも三枝　石火はその心に穴が開くほどに刻んだ。

イカれた女の作った子供達。十二人居ると言われ、【死を裏切る者】と呼ばれる者たち。

蟻登（アリト）　啄木（キツツ）

偶院　刹那

偶院　未来

偶院　永久

宗我部（ソガベ）　八重

真藤（シンドウ）　夏彦

他の名も亡き者達に続いて、

そして、最後の、最高傑作と呼ばれる、最悪な殺戮者、清里鋼音。

こいつらを殺し尽くすと誓った。

誰も邪魔させない。家族を奪い、腕を奪い、目を奪い、先祖の功績である魔術の意味を奪った女とその眷属達。

奴らを殺す、と誓ったのだ。

一人ずつ、殺す。

同時に親類縁者、形振り構わず殺す。

出来る限り、生かしながら殺す。

もったいぶったように最後に、傑作を殺す。

そう誓った。

穏やかな毎日で埋もれそうになる中で、決して、一時足りとも忘れ得ない執念。

「そんな貴女に朗報です。この街に、貴女の宿敵である眷属の男の一人娘が居ます」

脱皮者の声に、たった一つの目が爛々と、月明かりすら無視するほどに明るく見開かれた。

「魔人殺し、漆黒の覇者、千の闇を飲む破顔、そして、闇の神である事の知られている極悪兄弟テロリストの弟、偶院　永久に娘が居たとは誰が知りえるでしょうね？」

「名前を、言え……」

スイッチが入る。そこに居るのは、知的な数学教師でも、恋人と戯れる女性でも無く、灰色の瞳をした復讐者にして、魔術師の貌（かお）をしたセツカが居た。

「母の名は、九貫　愛媛と言うのですよ？」

はじめて、反応すらなかった蘭の顔が強張る。まさか、こんな偶然があるのか？　まるで仕組まれたような、計画されたような、望むように切り取られ、分かったように嵌められるパズル。そして、知りえたように組み上げるような悪行の絵図。

す」

「九貫　在姫、それが娘の名です」

復讐者の歓喜の叫び声が、畜生のように、街を、月を揺らがせた。

二十四分後、市内の緊急病棟に一人の異常に筋肉質の男性が搬送された。

直後に、その男性を運んだ少女が病院から行方を絶った。

男は七月二十四日、午前三時十四分現在、未だ昏睡状態のまま眠っている。

14. 幕間　鉄囲線四（後書き）

When it come to push, memories always betray me.

Summer's memory begin to rest.

I don't look back to her.

I retrace once again deep past events...

15．焦熱（しょうねつ）（1／2）（前書き）

いざと言う時に、思い出はいつも裏切る。
夏の眠りが午睡に沈み始める。
彼女へは振り返らない。
遠い過去をもう一度振り返る……

15．焦熱（しょうねつ）（1／2）

七月二十四日

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

夢では無い、ただただ何処かに沈み込んで、それでもそのまま漂うような妙な感覚に私は浮かされていた。
足元は定まらず、ただただ感覚に流されるままに、体を浮かせるようにゆらゆらと動かしながら保っていた。
指先一つすら動く気配が無いので、仕方なくその任せるままに漂わせているしかない。
そして、遥か遠くのようで、もしくは私の耳元でボソボソと囁く声達が聞こえる。

「……つまり、あいつの復活は……」
「……無理です。それに、だとしても遅過ぎるでしょう。彼はたぶん変わりません。魔人のままです」
「どうすんだよッ！！　このまま、奴の思い通りになるのかよ?!」

怒り、それと同じくらいに、それぞれの、三人の男の声は各々の感情を秘めていた。
望み、諦め、怒り。
何だろう？　この声に懐かしさを感じるのは？
そして、何だろう？　誰か一人、足りないのでは無いか、と感じる喪失感は？

「奴のした【予測】は何処までだ?」

「千年後かと。私でも、それ以上は【予知】では見切れません」
「その時まで、あいつも生きているのか?!　奴を打ち殺した方が早いんじゃねぇか?」
「彼は、奴については公式上死んだ事になっています。足取りも既に掴めていません。おそらく大陸まで逃亡したのでしょう。加えて、千年後まで彼が生きているかどうかは分かりません。ですが、彼は【地獄使い】となったのです。おそらく、その時まで苦痛と忘却と殺戮を繰り返すのは確かでしょう」

苦痛と殺戮。そのまま言葉どおりに考えれば相反する要素の言葉に思える。だけど忘却と言う中間要素によって、彼の言葉の重みが単純な話で無い事を容易に考えさせた。

「千年なんて、気が遠過ぎるぜ……」
「だが、俺達はやり遂げなければならない。大将とアイツをこのままにしていいのか?」
沈黙。彼らの言い知れようの無い気持ちをその無音が代弁する。
「では、手筈通り。私の法力で時間を掛けて『彼女』を少しずつ転生させます。千年後は、彼の力が最も弱まる頃、彼が気付けば、もしくは彼女が気付かせれば魔人としての苦痛と忘却と殺戮をどうにか出来るはずです。それを秀武(すえたけ)殿には補正して戴こうかと思っています。次世代へと、己の血をもってして、知識と魂を継承させていくのです」
「お、おいおい、よりよって俺を選ぶのか?!　それなら綱(つな)の方が妥当じゃないか?」
「……実は、俺の命は長くないんだ。核の病だ。もって、五年かそこらだろう。それに【繁殖】なら、お前の方が得意だろ?」
「わざわざお上品ぶって言うな、交尾と言え」
男達の場の空気に合わないような軽口で僅かに空気が緩む。こうやって、彼と彼らは乗り切ってきたのだろう。

「で、爺と同じ病に掛かってやがんのな。お前」
「黙っていたが、俺と翁は父子の関係だ。血の連鎖、病も血脈を通して伝染すると言う事だ。俺の子供達が次に血と魂を継承する前に死んだらどうする？」
「父親？！　本気（マジ）かッ？！　あの爺とか？！　と言う事はあいつとは兄弟だったんだな！　いや義兄弟か？」
「まぁ、普段から醸し出していた雰囲気からして今更と言う感じですが」
　緩んだ中で再び、緊張を走らせる三人の男達。
「そうだな。代わりに俺は、残りの人生を掛けて、アイツの息子に、武術と、知識の全てを伝えようと思う」
「お前の全て……、伝わるのか？」
「悪いが、アイツと才能は似通ったもんだ。筋が良い。三年もあれば『矢止め』と、その先も教えられるはずだ」
「矢止めの先が、使えるようになるのか？」
「あぁ、あれはアイツの血筋なら出来るはずだ」
「……と、言うわけですが、相模（さがみ）さん。貴女はよろしいのですか？」
　そこで、私はもう一つの気配がある事に気付いた。翳りを感じる女性の気配。それは何故か、感覚的に言えば、私に凄く近い雰囲気に思えた。
「私は……、彼を貶めたようなモノですから償わなければなりませんでも。でも、それ以上に」
　愛しているから、と言うのもあるんですと、ただ真っ直ぐに、素直過ぎるくらいに、騙されてしまいそうなくらいに、彼女は言い切った。
「……と言うかよぉ、『　』ちゃんと同じくらいあの唐変木に強い思いがあるのって相模ちゃんしか居ないんだけどな」
「まぁ、あいつの妻であるくらいだから当然だろう」
「あぁ、腹立つぜ。何であいつはこう良い女に求められるだろうな

？　俺の出会いと春は何時じゃッ――！！」
「器の差では無いか？」
「うるへぇ」
「では、決まりましたね。相模さんを母体として、少しずつ『　』様を転写しながら、転生させていきます。完全な復活のそれまでは貴女は一本の木、【クヌキの木】となって、彼女の一部をより分けた魔女を生産し続けるでしょう。完全な彼女を生み出すまではそのままです。その過程で貴女は少しづつ自我を転写で、分け与える形で失います。無論、最終的には彼女の中に霊的に溶け込む形となり、主人格は彼女のモノとなるでしょう。むろんの事、私達は『彼女の完全な転生』を望みますが、それは貴女が待ち続けなければならない苦痛となる可能性があります」
　淡々と事務的な口調で自らの考えを告げる。それは、その法力を行う者として術自身の恐ろしさを知っている故の言葉だった。
　むろん、残りの二人の男達も彼女が拒否をしたとしても責めるつもりはまったく無かった。彼らは同罪だったからと言うのと、待ち続ける事の虚しさを知っているからと言うのが心の中にあるからだ。
　しかし、彼女は柔らかく、微笑んだような気がした。
「確実に訪れる幸せな時を、何故恐れる必要があるのか私はまったく分かりません。私の想いが、ちゃんと届かなかった想いが『　』様を通してあの人に届くなら、それは幸福と言うものです」
　彼女の決意が、千年の間待つ事への虚しさと自我を失っていく己、その全てを肯定した。
「やべ、……俺も負けたわ。ならやってやるさ。俺の転生なら『　』ちゃんより簡単なんだろ？　アイツらと相模ちゃんが幸せになるように千年後までせぃぜぇ女の尻の後ろでも駆けずり回ってやるさ」
　下品なようでいて、その癖やたらと陽気な笑い声を挙げる。
　先ほどまでの絶望的な声色の中に、微かな、希望の篝火（かがりび）がまだ奥底で燻っているかのように仄かに暖かさを感じた。

「では、彼の『呪い』を解いて、全てが元に戻るように――」

「どうした、在姫。朝から呆けて？」

そこで私は覚醒した。左手には水の入ったコップ、右手には歯ブラシで、その先端はまごう事無く私の口内に納められていた。

鏡には、起き立てたのまま、ぼんやりしている寝巻き姿の私の顔が映されている。左の頬が歯ブラシでプクリと膨らんでいる情けない顔だった。

「ヒョウチョ～、おぁよぉ～」

しょぼつく瞼を起こして、鏡越しに映る友の名を呼びながら挨拶をすると言う面倒くささを見せびらかしてみてみた。

「どうした、在姫？　朝っぱらからスッキリしないのか？　……キスして欲しいのかい？」

「イランわ！」

と、そんな朝っぱらからの寝惚けも覚めるあほなやり取りに、「朝御飯ですよぉ」と呼び掛ける本人自体が明らかに楽しそうな曲さんの声が聞こえた。

今日は朝から雨。昨日から急にふって沸いたような台風予報。近年の異常気象によるモノとの予報らしいが、魔女が言うのもなんだけど、誰かが作ったような気配もしてきそうなくらいタイミングの怪しいものだった。ジョウチョー曰く、「気象なんてモノは混沌の学問だ。晴れを導く数式に気象予報士が匙を投げて、数学に転向するくらいだからな。その辺りは三枝先生の専門ではないかな？」との事。

和木市は進路とその暴風圏からは多少外れるが、雨は降り頻っている。

外の風景を透かす窓は灰色に塗り潰されていた。

「昨日の内に遊びに行って正解だったな」
ジョウチョーは緑茶をまったりと啜り、そう、朝食後の会話を始めた。
キッチンから几帳面に皿を磨く音をさせるのは国定である。
曲さんは腰から首元まで包帯をきっちり巻いて、黒い半纏を羽織り、昨日の惚けた状態よりも些かに真剣な目付きをしている。どうやら包帯の巻き方で性格的な部分が変わるようだ。ところでその包帯を巻いた体付きが、昨日の恥ずかしがっていたスクール水着よりも非常にイヤラシイ気がするのは錯覚だと願いたい。
ちなみにその妙に真面目な視線は、国定に「お残しは許さん」と言われたピーマンの肉詰め、の残りであるピーマンに向けられている。朝食終了したはずの時間から三十分ほど経っているが、曲さんはロダンの有名な彫像の方が躍動的なくらいピタリと動きを止めている。将棋なら長考のし過ぎでアウトになりそうな時間だ。
「遊びか、まぁ、本当にパァッと遊べるのは、事件が終わってからだろうけどね」
昨日のあの降って沸いたような馬鹿騒ぎが三枝先生の差し金と悪戯だと気付かないジョウチョーに苦笑しつつ、残りの魔術師と魔法使いについて考えた。
「奴ら、ここまで攻めてくるかな？　国定、残りの魔術師について何か知らない？」
ちょうど洗い物を終えて、手をエプロンで拭く国定に問いかけた。
「鞍路慈恵についての情報なら昨日上書きされた差分がある」
椅子に座って、食卓にごく自然に腕組みのまま腕を置く。ちなみに私と同じように身長が合わないためか、若干肘の位置が高めの気がする。
「奴の魔術の名は【磔刑（たっけい）】、奴が欧州で魔術を発生させた時に、その魔術を受けた者の体の何処かに『十字』の紋様（サイン）が刻まれる事から名付けられた。詳しい作動原理は分からないが、欧州ではその魔術によって千人単位で昏睡状態に陥り、二日程魘（うな）された後に衰弱死し

ている。加えて、鞍路　慈恵と言うのも本名なのか怪しいらしい。どうも【双頭蛇（アヌビス・バナプィエ）】と言う別の魔術師結社にも過去に属していたらしい。既に自ら破門したらしいがな」

「あー、聞いた事あるなぁ、それ」

確か、人の体から人外へと転生させる方法を研究している大きな魔術師結社の一つだ。ちなみに人から人外へと転生に公式に成功しているのは、目の前にいる国定のような魔人転生と、その隣でようやく泣きながらピーマンを咀嚼し始めた曲さんの死神公社の死神転生、そして双葉宮　咲が行った純粋なエネルギーと概念の塊にする神転生のみだったはずだ。奇しくもその成功の二例が顔を付き合わせて、片方が御飯を作って、片方がそれを食べている図は結構凄いと思う。

双頭蛇は神秘院に属する正式な団体であり、言わばモグリの魔術師が多い中で、きちんと組織に属した魔術師を輩出している結社であるのは魔女協会の中でも知れ渡っている。バイオなんちゃらとかを使って新しい転生生命体を作り出す研究だった気がする。

「でも、彼は人体改造系や環境操作系って感じじゃないよね。能力的に」

「どうもその様子だと記憶などを操る輩のように感じるな」

ジョウチョーの眼鏡がキラリと光る。前から気になってるけど、それ、どんな作動原理なの？

「でも、記憶とか操るタイプの魔術師って人外とかに転生なんか出来るの？」

その私の問いに曲さんが「可能だ」とようやくピーマンを飲み込んで口元と目元を拭きながら答えた。

「公社では『寄生』、『乗っ取り』、『肉体交換』などで実質上妖魔の体を我が物にしている奴らは少なくない。無論、私達によって彼らは『人外として』手配、検挙も、それ以上の事もされているがな、中々鬱陶しいものだ」

曲さんは包帯の締め付けによる性格の引き締め効果（？）のため

か、些か厳しい口調で返答をする。
「でも、磔刑に掛かった人は衰弱死したって話でしょ？　魔術って効果が限定指向性だから、一つの効果しか及ぼせないんじゃないかな？　衰弱死させる事と妖魔の体を手に入れることなんて関係あるかな？」
「未熟者。魔術による効果は一つでも、それを利用した『結果』は応用によって様々に引き起こす事が出来るだろう？　例えば、【轢刑】の摩壁　六騎は機像兵の使い手だが、それを利用して自らの義手、義足を操作していただろう。同様に【流刑】の保隅　流水は物体をすり抜けると同時に、前回は気付かれなかれる事はなかったが、魂を直接見る【魔眼】以外の様々な電子、及び霊的な探知などをすり抜ける事で様々な探知を無効化していたのだ。偶々彼らが自然に魔術の効果を応用していただけだが、それぞれ実際は凄い術式なのだぞ。特に君は侮っていたようだが、保隅の魔術を使えば人体から血も一滴も出さずに心臓を瞬きの内に抜き出す事だって可能だったんだ。俺は魔術師の中で一番危険だと思っていたのは彼だったのだからな」
……マジですか？　あのちょっと別の次元に逝っていたおっさんが本当の意味で危険人物だったとは俄かに信じがたかった。
「戦力分析がどちらにしろ甘い。もっとよく考えろ」
まったく、この三日間で進歩したかと思ったら、云々と続く国定の苦言にイライラを募らせながらも、コホンと咳払いをして「ところで今後の対策だけど……」と切り出す。それに合わせてさり気無く自分の履いていたスリッパを国定の脛に飛ばす事も忘れない。
「どうしたんだ、国定さん？」
予想外の攻撃だったのか、それでも最後の砦のためか「別に何『とも』ない」と脛を摩りながら曲さんに返答するクールフェイスの国定。流石に「何『でも』ない」と言わずに、皮肉を返せるくらいの気力はあるみたいだ。
「私が思うに、積極的に魔術師を探した方が良い様な気がする。何

ていうのかな？　何だか、魔術師とか、その背後に居る魔法使いとかを超えた、魔女狩りよりも、もっと大変な事が起こっているような気がするの」

そう言う私に同意するようにジョウチョーと曲さんも相槌を打つ。

「魔女の予感と言う奴だな。確か、異世界の理を操る、この世界の外から外観を観測する事に長けた魔女の能力と言ったところか。公社でも信用に足るモノとして、魔女の予感による事件予知も有力情報として処理しているし、有力な判断となりうるな」

曲さんの付け加えるような言い方にも関わらず、国定はウンともスンとも言わずに、眉毛の間をくっ付けるような難しい顔をしていた。

「……もし、在姫が自ら魔術師を足で探したいと言うなら、俺はその考えに賛成できない」

「なっ！！」

何で、とも続けられない。彼の射抜くような瞳が私を見据える。

「魔女狩り以上に大変な事が起きる可能性があるなら尚更だ。魔人や死神のように霊的処理を施した体なら関わらず、君は生身なんだぞ？　流石に魔女狩りの枠組みを越えるなら、人の世界の事柄と言えども公社は動かざるを得ないはずだ。双葉宮　咲貴の事例もあるだろう。まぁ、あれは担当死神の暴走行為による無許可の【斬殺】だったらしいがな」

死神の手によって人が死んだ事例が死神にとっても痛い事なのか、曲さんは口をへの字に曲げて納得のいかない表情をしている。私の方からしてみれば双葉宮は噂に聞く限りは色々トンでもない事をやった魔術師との事なので斬殺されても仕方がないだろうし、それの報いを受けるだけの事はやったはずだ。むしろ、殺される事位は彼女の想定の範囲だったかもしれない。公社が人が死ぬ事を気にする事の方がおかしいくらいだ。何でも噂では千年も生きている、実は妖怪だろうと言いたくなる様な魔法使いや魔術師もいるらしい。

人にはそれぞれ、個人が選択した人生がある。それに後悔するの

は、選択した時からの全ての自分とそれに関わった全ての人と事柄を否定しているに過ぎない、と私は思う。良い事だろうが、悪い事だろうが、それを完遂した、御祭りが終わった後のような、不思議な疲労感のような気持ち以外は私はいらないと思う。だから私は終わる瞬間まで駆け抜けていたい……

と、少々思考が脇道に反れて転がってぶっ飛んだが、国定の続ける物言いをとりあえず聞く事にした。

「……と、まぁ、死神をとにかく責めている訳ではない。むしろこの段階では十分な抑止力になるはずだ。しかし、魔女であろうと在姫は諸々の部分に置いて人の領域を超える事は無い。大蛇どもが蠢く巣に裸足で歩かせる事など出来ない。ここは昨日も言ったとおり、曲さんに守られながら大人しくここに引き篭もっているんだ。昨日からの挙動を見た限りは常寵も信頼に値する。俺が魔術師と魔法使いを狩る間は大人しくしている事だ」

何ですって？

「つまり、何？　私は魔術師に一般人を盾にされたり、学校に侵入を許したりされてコケにされたのに黙って、しかも指を咥えて家の奥で縮こまって見ていろって言いたいの？！」

「君は戦士では無い。戦で死ぬのは魔女の本懐では無いだろう？」

「そう言う事を言いたいんじゃなくて、それに、私は国定を一人にはさせられ……、え？」

そこで、私は違和感を感じた。

黒い金属をピタリと後頭部に突き付けられて、それが銃口だと分かるような、そんな硬く鋭い視線。

それは流血の殺意を十分に含んで、生理的に受け付けられないケダモノがヌルリと撫で回す舌先ような嫌悪感すら感じた。

私の感覚と、それを拡張する屋敷の魔術的な簡易結界が何かの襲

撃を掴んでいた。それが異常なまでの、知覚出来るほどの襲撃者の攻撃衝動の正体だ。

その視線とは別に、ほぼ同時に館の敷地に忍び込んだ小さな気配。それは玄関に手を掛けて、そのまま入ろうとしていた。封印魔法ごと破壊して押し入ろうとする者。

「どうしたのだ、在姫」

私の硬直に気付いたジョウチョーがそう言った直後。

魔女の館に爆音が響く。

私は衝撃でボールのように飛んで、床に強かに打ち付けられた。

続けざまに振動がもう一度。

ピンボールのようにまたしても吹き飛ぶ。

余りの衝撃と空気の破裂に耳鳴りがして、周りの音も満足に聞こえない。

ばしゃりと、何か熱いものが私の身体に掛かった気がする。

爆炎による華麗な閃光のためか、衝撃のためか？　目元も白く濁ってチカチカとして定まらないうえに煙が濛々と漂っている。

「――PGだ、対戦車砲が――、在姫――連れて館の奥――」

対戦車砲？　何でそんな戦場で使うようなモノが出てくるのだろう？

衝撃でフラフラとして、残骸を手に立ち上がろうとしていた私の手が滑りつく感触を得た。

私の身体に降りかかった紅い血潮。まさか、国定！

それを確認する前に誰かが先に手を掴んで、玄関まで一直線に引っ張る。

「在姫お姉ちゃん、こっち！」

「あ、あなたは！」

朦朧とする意識と私の寝巻きの袖を掴んだのは小さな魔術師だっ

た。

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

「国定さん、しっかりしろ！」

痛み。

転げ回りそうなほどの激痛。

曲さんの言葉に白く濁りそうになった意識が再びはっきりと戻る。

気を抜けば、今にも支えと雛形を失ってバラバラになりそうな俺の体と意志を纏め上げる。

人間なら痛みだけで、精神が活動を拒否して死に向かいそうなほどの激痛を堪える。

館の外から放たれた対戦車砲。簡易結界とは言え、物理的防護では無いそれはやすやすと弾頭の侵入を許し、さらに屋敷の壁を粉々に爆砕させた。

その直後、もう一度放たれた、在姫に向かう弾頭を素手で受け止めたために俺の左手は吹き飛んでいた。骨は髄から露出し、肉が筋が垂れ下がるほどバラバラになった左手はもう戻らないが、霊気装甲を集中させた左手は戦車装甲よりも硬かったために弾頭の炸裂で吹き飛ぶ事以外は在姫に傷が付くことはなかった。傷つかない事は良かった。良かったが『奴らに在姫を奪われてしまった』。

「――大丈夫だ。意識はしっかりしている。右手もまだ使える」

本当なら、あまりの痛みと不甲斐無さに怒り狂いそうだ。だが、爆煙の中から現れた小さな魔術師が在姫を連れ去ったのだ。早くしなければ、あの小娘と隻腕の魔術師に在姫の心臓が抉られる。ここは冷静にならなければいけない……。

うつ伏せに倒れた状態から膝をついて一気に胴体の力だけで立ち上がる。

……死神が居るからと高に括っていたつもりはなかった。雨の日だから、襲撃もしにくいだろうと思ったのも言い訳にならない。ただ、居心地の良い、この場所に皆と居たかった。そう願って、見張りを怠ってしまった俺の大失態だ。

そんな状態で、冷静になんてなれはずがないッ！

「畜生ッ！」

残った右手で残骸となった食卓をぶっ叩いた。食卓が砕けて散らばる。

しかし、いつまでも怒っている暇は無い。開いた壁から打ち降り注ぐ横薙ぎの風雨が、俺の体と荒れる心を冷やし、それに合わせて状況を見極める。

いや、冷やす必要は無い、熱く焼けた鉄のように、痛くなるほど雪のように白く輝いて、キレた中で最速の手段で在姫を助ける。

それにしても館の外から飛来した爆発性の弾頭の命中精度。混乱する俺達の隙をついての在姫の『拉致』。見事過ぎる連携の手際だった。

そして、……奴らは俺達を騙したのだ。

「常寵さん！　しっかり！」

「……うっ、拙い、な、……これは」

キッチン側に横たわる常寵の鳩尾の下辺り、吹き飛んだ館の破片である、小さな鉄柱が刺さっていた。

幸い出血は少ないが、動かせば鳩尾の真下にある胃の過敏な神経を刺激して、悪化するかもしれない。

彼女もそれを知っているのか、身じろぎもせずに、目を瞑って静かにじくじくたる痛みに耐えていた。人間でしかも、戦闘はあっても戦慣れはしていない中で、この冷静さは逆に驚嘆させられる。

死神の曲さんは黒い半纏、もといあらゆる物理的かつ霊的な攻撃に耐える不壊黒縛衣の守りのために、対戦車砲程度で傷ついてはいなかった。

呼吸が整った。糸が更によれて切れそうなくらいの中で俺の意識と枠組みが整われた。

「……曲さん、在姫はどっちに！？」

「玄関を通ってそのまま南の高速道路方面に向かった。現在は道路工事と言う名目で封鎖中のために他に人は、あっ！　国定さん！　彼方も治療を！」

曲さんの制止を振り切って、左腕の付け根から漏れる霊気と仮の肉体から零れる血とそして崩れていく枠組みを抑えながら在姫を追った。

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

空を飛ぶのは非常に難しい。

昔の人は船により水の境界を乗り越える事は出来たが、気球や飛行機が出来る以前は空は隔たりよりも厚い異界と考えていたと言われている。届かない空は天空の、神の、人以外の領域だった。それ故に人は天にまで届く塔を作ったり、蝋で作った羽で飛んだりと、神のいる座まで届かせようと様々な努力をしていた。しかし、それは人故に道具を借りるのが常だった。

何かの力を借りる、それが箒だったり、魔獣だったり、鉄パイプだったりするのが人の限界である。人が何の力も借りずに単体で飛ぶとしたら、それは魔法すら超えている。潜在意識化の頚木すら引き千切る、『人は何も無しに飛べない』と言う常識を打ち壊す。トンでもない大魔法に属するだろう。

それを小さな魔術師である斜　蘭が必死な顔でしかも魔法よりも汎用性に劣るはずの魔術で行っている。作動原理が不明とは言え、見た目はただ彼女の力で飛んでいるようにしか見えない。

私を抱えて山側の国道に沿って飛行を続ける。流石に私を持ち上

げているためか、若干速度は以前見た時よりは遅い。それでも疾走する車よりは早いはずだ。

私達の周りには不思議な事に雨が降ってきていない。見上げてみれば、雲の一部がポッカリと開いて、見えない何かの力が私達を牽引しているようだった。

そして私達の沿う国道を疾走する一台の外車。その左ハンドル席に座るのは、三枝先生だった……。

「セツカは怒りに惑わされているの。今は誰も止める事が出来ない」

斜蘭は私を抱き抱える事とは別の、他の苦痛に耐えるような顔をしている。

私は訳が分からなかった。何故、昨日まで親密にしていた先生が仇でも追うように私を追うのか？

私が何か悪い事でもしたのだろうか？　そんなはずは無い、私は三枝先生を慕っていて、無礼を働いた事やましてや殺されるほど理不尽な事をした覚えない。

「どうなってるの？　本当に……」

思考の迷宮とやらが存在するなら私は今現在彷徨っているところだ。私は一体どうすればいいのだろう？

何気ない関係だったはずの教師が生徒の私を殺そうとしている、頭がこんがらかりそうだ。

「――在姫お姉ちゃん、今は逃げる事に集中して、お願い」

「……うん、分かった」

その状況を察した斜蘭によって促され、ようやく気が動転している状態から抜け出した私は噛み切り馴れた親指から血を滴らせて詠唱を始めた。

「Ｉ　ｓｕｍｍｏｎ　ｏｎｅ　ｆｒｏｍ　ｂｌｏｗ　ｕｎｉｖｅｒｓｅ　ｉｎ　Ｉｔｈａｑｕａ' ｎａｍｅ. Ｄｅｒｉｖｅ Ｓｙｌｐｈ，Ｈｉｐｐｏｇｒｉｆｆ！（我はイタクァの名に於いて風界より素を呼ぶ。出でよ、風霊素、ヒッポグリフ！）」

世界に不可視の大きな扉を作り上げて、光の尾を引きながらヒッポグリフを呼び出した。

羽ばたいて寄ってきたヒッポグリフ。

しかし、斜蘭の負担を減らそうと彼に飛び乗ろうとした瞬間、彼は私を制するように鳴き声を挙げて旋回した。

「あれ？」

その途端、彼と私を結ぶ線上を閃光が駆け抜ける。

後ろを向けば、運転手側の扉を羽のように上に向かって開き、黒い車体から黒い銃身を先生は覗かせていた。

ヒッポグリフの鋭い視線が彼女の発砲を見切ったのだ。片手での照準の保持に関わらず綺麗な射線。それは死を描くには、美し過ぎる殺戮の方程式だった。

「愛用のスコーピオン？！　セツカ……、本気で殺す気なのね……」

そう斜蘭は呻くと僅かに速度を挙げて、蛇行と旋回を混ぜ合わせるように立体的な飛行をする。

そして、私も彼女に甘えてるだけにはいかない。

「Ｇｏ！（ゆけ！）」

私の魔力の篭った一言で全てを従者は理解すると、ベッドほどの面積もある片翼をそれぞれ翻して三枝先生、否、魔術師へと立ち向かう。

射線外に相当する左の運転席の反対側、助手席の右側から回り込んで車の天井に降り立つと、私の胴体なら軽々と掴める前足の鉤爪を突き立てた。鋼鉄の天井にバターにナイフでも突くかのようにあっさりと抉りこむ。

だが、天井が爪で捲り上がったと同時に、彼は勢い良く飛び立った。

捲くれ上がった天井から光の線が十数発、映画で聞くものより甲高い銃撃音を立てて飛び出した。

天井に向けられた銃口が硝煙を雨に吸わせていた。

怒り狂った彼女を止める手段はあるのだろうか？

車に体当たりして彼女を止めると言う手も考えたが、流石に時速百二十キロ以上で車が横転したら大惨事になるのは目に見えている。何があったのかは知らないが、彼女を殺す気には私にはなれない。

「まったくどうなっているのよ?!」

悪態付いても仕方が無い。とにかく今は逃げるのが先決だった。

風切り音。

頭蓋を撃ち抜かんと迫る弾丸群を体を傾けて斜薗は避ける。

華麗なる機動性で魔術師が縦横無尽に飛び回る。

「セツカ、お願い、正気に戻って……」

少女の小さな叫びは届かないのだろうか……。

―Ｓｉｄｅ　Ｃ―

彼女は右足でアクセルを踏み、ハンドルを左足で御しながら、残った左片手で、口にくわえた蠍（さそり）の名の付く銃に、弾の詰まった弾倉を込めると言う器用な事をしていた。車の運転と弾込め作業である再装填（リロード）を同時に行っているのだ。

それを終えると、銃の手入れのためにつけたあったガンオイルにも気にも留めずに、この五年間の今までで無いほどに潤った唇をペロリと舐め挙げた。

舌先が化粧っ気の無い口唇をなぞると、セツカは歓喜に震えた。

「あぁ――、やっと、ブチ殺せる」

口に咥えていたガンオイルの光沢でギラギラと脂ぎった口唇が怖気を巻き起こすほど淫靡だった。

興奮で鼓動は高まり、血流はアドレナリンをヘモグロビンと混ぜ合いながら、瞳孔を収縮させ、呼吸は性的な興奮を得たかのように明滅を繰り返していた。

五年間。魔術の研鑽を積みながらも、あくまで確率の高い手段の

一つである、魔法を捜し求め、それでも見つからずに奴らを倒そうと放浪を続けて、五年、ようやく手の届くところに獲物は現れたのだ。

加えて獲物は心臓まで背負っている。

彼女の活発な生体反応に比例しつつ、心が在姫の白肌を切り裂き、顔を砕き、命乞いの大叫喚（うた）を聞きながら嬲り殺すと思うと、セツカは一種の快感にも似たおこりに応じて、身体も雨の冷気を吸ってゾクリと震えた。

冷たい雨など問題にならないほどに、彼女の肉は燃えていると言うのに……。

再装填（リロード）終了。左肩からスリングベルトで銃を下げ、左足がギアをシフトさせるためのクラッチへ戻り、残った片手が猟犬の鼻先を決めるステアリングに添えられる。が、今一度ステアリングから離すと、額から眼帯のように右目のポッカリと空いた眼窩を隠すように袈裟懸けに掛けた、少年漫画の忍者のような鉢金を軋む音を立てながらながら掴んだ。残った左の瞳をいっぱいに開いて痛みに耐えるように鉢金を掴む。

例えば、それは犬に噛み殺された親族と自らの噛み千切られた身体を心に刻み、世界の犬も、犬の子すらをも憎み、自ら牙を持って犬を追い回して惨殺する感覚に似ていた。

まさしく、犬を憎みながら狗へと成り果てた復讐の走狗である。

あくまで狩る側と言う圧倒的な立場にある彼女は、例え元凶で無くとも、更に子であるにも関わらず、在姫を酷く憎く感じられた。

憎悪を憎悪で塗り固め、復讐の彼岸に旅立って対岸に降り立ち、殺意で殺意のキャンバスを狂ったみたいに塗り潰し、もはや、彼女は人のなりをしていながら、自身の執念に凝り固まった化け物だった。

そう、彼女は魔術師で無く、化け物だった。

その彼女の無くなった右目の奥で、その光景は何度も再生されていた。人形のようにバラバラに玩ばれた両親の骸、その一部始終を忘れずに、右目の奥が痛みとなって幻視させる。

そして、痛み。踏み潰され、千切り取られた右二の腕の中心からチリチリと、成長痛に似た鈍い痛み、幻痛を感じている。

いつまでも続く過去の疼痛。

しかし、其処（右腕）とは違う痛みも何故か同時に体が覚えていた。心臓から広がる染みのような小さく、か細い嘘（いたみ）。

だが彼女は、強烈な右腕の痛みと鮮烈なまでの右目の記憶と、信頼と友諸々の全てを裏切った小さな矛盾を無視するかのように獲物を見据えた。

開かれた天井から左目が最適な仰角とタイミングを、左手が最速でアグレッシブな射線までを位置づけた。

蠍が二十発の毒を放つ。

前方から襲い掛かろうとしていたヒッポグリフが甲高い声を挙げながら、翼に走った痛みと負傷で飛翔を鈍らせ、そのまま高速道路の看板を避けきれずに激突。

魔術師は絶妙な荷重移動でハンドルを切って、目の前の地に落ちたヒッポグリフを轢かんと後輪を滑らす。普通なら横転の危険もある事も、狂った彼女には邪魔する相手を殺す事しか思い浮かばなかった。無論、仮に横転したとしても今の彼女は在姫を殺すまで追い続けるだろう。

しかし、ヒッポグリフはその巨体に似合わないスピードで転がり、その轢殺を回避した。

「……」

「――――」

一瞬の交錯。

鷲の上半身に天馬の胴体を持つ魔獣。その異様な体には似使わな

い知的な鳶色の瞳がサイドミラー越しに隻眼と交わった。
それはまるで悲しみを、狂気を理解し哀れむかのような瞳の色だった。
「そこに佇んでろ化け物、貴様の主人は私が殺す――」
その言葉はまるで、決意を、無理に塗り固めるような、言葉の戒め。
三ヶ月の教師の思い出を、八年に及ぶ復讐者の重さで押し潰す。
小さな少女が、教師だった彼女に投げかけて憧れの視線を、頭から取り除く。
その間の思考と言うには短過ぎる時間は雷鳴よりも早く頭から消え去った。
高速道路の防音壁に軽く掠るボディはフットブレーキを駆使した高難度のドリフトとステアリングを切るカウンターでかわされる。
片腕故にサイドブレーキの使えないセツカが体得したドリフトだった。雨が降り、必要以上に滑りやすくなっている路面を魔術師は確実にタイヤから情報を読み込んで、操作に反映させていた。
再び、道路のど真ん中に戻る車体。
左手を胴体に食い込ませるように窮屈にシフトレバーに伸ばして、利き手の反対に位置するギアを止まらない早さで一段階挙げた。
一トンを越える黒い悪魔が更に甲高い咆哮を撒き散らし、エンジンの回転数と速度を上げた。

―Ｓｉｄｅ　Ｘ―

空間作成は魔法でも奥義に当たる物である。
通常空間とは僅かに異なる層である位相空間や、まったく別の地点と地点の距離感覚で騙す圧縮空間などがある。大抵の場合はその場にあるものを用いて、それを応用して感覚器官から受ける認識や

印象を変える空間などの、有り合わせのモノで作られるのは空間魔術である。

しかし、魔法による空間『作成』は違う。

世界は無数の可能性とその分岐点と時系列によって成り立っており、そのどれかが違う世界を異世界（パラレルワールド）と呼ぶ。異世界は無限であり、同時に決して他の世界とは交わる事、世界線が交錯することが無いために、その存在性を保っている。

だが魔法は、その邂逅を、既存世界と異世界を接合する事を可能にする。

魔法使い達は無数の特異点の中から自らの同期するモノを見つけ、それを魔力で引き寄せるのである。

それはあたかも自らの望んだ世界を作るように見えるため、空間作成と呼ばれる、との事だ。

身体の内の能力、零から始まる事が可能な魔法使い。

身体の外の技術、コンマ壱からの飛躍をする魔術師。

言うなれば才能のある芸術家と技術の有る職人のような違いだろうか？

残念ながら、魔術によって空間を作成する事は不可能に近い。

存在を証明し真似る事は出来ても、現実界と異界とを邂逅させる手段が無いのである。

それを文字通り、容易に成し遂げる食人騎（しょくじんき）と言う異世界の騎士もいるが、彼らの場合は、それは魔力の制約のある魔法ではなく、ただの能力であり、彼らは呼び出されるのでは無く、望む世界へと侵入するのである。懐かしい思い出、と言ったところだろうか？

「では、例えば、邂逅させる事無く、改変、つまりこの世界を再び創造する事は可能だろうか？」

そんな疑問が魔術師の私の心の中に去来した。

世界は何か、人などでは計り知れない、トンでもない何かの存在によって成り立っている。運命を定めたり、時に流れがあったり、記憶が失われたり、何かが簡単に滅びてしまったりする事。それらを司る【時守（ときもり）】と呼ばれるモノどもが世界の、秘密を支配しているようだ。

しかし、彼らとて、むろん世界最大の宗教機関である教会の神とて、その名状しがたい、万物の根源とも言える存在を超えることは出来ない。彼らも、また人によって作り出された神も、その神とすら呼ぶにおこがましい、全ての一である夢幻にして無限の夢を見る【ジュー・ショクァッ・キュキ】と名付けられたモノを超える事は出来ないはずなのだ。

だが、混沌で有る故に世界に綻びはある。

それを利用し、まず、【私】はこの世界の【神】となる。

私はこの三千世界を遍く統べる万能者と成り代わるのだ。

神とは純粋な力である。

雷神、風神、水神、守り神、邪神……。

力の純な傾向を示すのに、その冒頭に自身を形容する言の葉が付くだけなのだ。

そして、私が目指すのは【魔】、そのものの神である。

神となり、巨大な魔の純結晶の概念と化した私は、世界の綻びに

伝手に巨大な穴を開ける事出来るであろう。
それは世界の望む場所を裏返すための穴。
改変と同時に、私は名状しがたいもの【ジュー・ショクァッ・キュキ】を支配下に置く。
そして、私は、私の知り尽くした世界も、その先の世界も統べる真の神と成り代わるのだ。

「まずはそのために、この肉体を捨てねばな」

幾度と無く肉体を捨ててきたが、今度は人間である事が最後である。
千年にも渡る計画も大詰めとなってきていた。

「六人中五つでも魔方陣の形に問題は無い。五芒星（セーマン）か六芒星（ドーマン）であるかくらいの違いだからな。神へとなるための、穴さえ開けられれば良い」

この駆け引きで私の予測が想定範囲内であれば、今日中に彼らのうち、三人中二人は必ず死ぬ。
志低き魔術師とは本当に小賢しく、それでいて愚かで、弄りがいのある玩具である。
いや、玩具とは失礼か。むしろ奴らは道具だ。実用に適さない玩具と使える道具は分けるべきだろう。
道具である者どもの魔力の無い心臓が必要不可欠である。
空洞の骸、空の心臓は無限の負の穴、そこを通すだけなら流れを作るのに都合の良い代物だ。
空虚は無への奈落に結界を落とす綻びなのだ。

「逆月の宴まで、後、九日、……か」

瞼を開けた瞳に雨が突き刺さる。その一つ一つの飛沫が、自然の事象が終わる事が、私の計画到達への秒読みのように感じられた。
全てが満ちている確信をしながら、私は豪雨と暗雲の奥の、蒼天で白い隠する更待月（ふけまちづき）を見据えた。

―Ｓｉｄｅ　Ｂ―

走る。
全力で走る。
圧力で砕けかけている足が魔力の供給が追いつかずに一歩踏み出すごとに震える。
既に人の出せる速度では無い。皮膚を叩く暴風と瞳に当たる雨飛沫を意に返さず走っている。今にも足場から砕けそうな脆い歪さ。それでも倒れない。それでも転げない。それでも崩れない。
針一本の上に自らの爪先を合わせて乗るくらいのバランスで、拙いほどの感覚を手がかりに足を運ぶ。
地面を蹴りこむような走りは身体を必要以上に浮かせてしまう。それでもそれを押さえつけるように獣の感覚で着地、同時に力の解放。

車の走行能力など問題にならないスピードで俺は駆けていた。

肉体の痛み以上の心の苦味。自らの油断が胸の奥の全てを掻き乱す。
怒りだけに任せて、ただ猛り狂うように吼える事も出来たが、俺の一角の理性がそれを押し留めた。
単純な衝動よりも優先させるモノが俺にあったからだ。

「在姫、在姫、在姫……」

俺には生前の記憶が無い。故に、この身に時折甦るあの狂った記録が理解出来ない。

実感のある俺の記憶だと断定できないものは例え、頭に残っていても何かに記しただけの記録と変わらない。

歴史に名の残る人物でありながら、俺のその実態は判然としない。

霞の掛かった山の麓のように、その裾を垣間見る事が出来ないのだ。

魔人となり、一つを残して、全てを捨てた。

ただ、その残した理由も目的も失い、存在するだけの者になってしまった。

残る一つはただの狂気である。

怒り、憤怒の記憶、悪夢。

立ち塞がる父親を殴り殺し、呆然としながら子を抱く母親を切り倒し、残されたか弱い嬰児を踏み潰す。

焔が舞う。狂った舞人は俺を焦がし、地に熱風を轟かす。

広がっていく紅い風景。それはあまりの小気味の良さに喜劇のようで、

顔に張り付いた笑みが零れていた。

それ以前の何か、一つ、大事な事を忘れていたような気がするが、欠片も思い出す事が出来ない。

そう、何かを失って、もう二度と失いたくなくて魔人となったのに、なった途端に、掌の指と指との間から水が毀れていくように足元へと消えていった。

とにかく、今度は失ってはイケナイのだ。

俺は、普通の魔人の分類とは異なる。

通常、魔人は内部の魔力を失えば、その枠組みが崩壊して完全に消え去る。

それは『菅原　道真』や『平　将門』、『織田　信長』や『天草四郎』も例外では無かった。

しかし、俺だけはどうやら別枠のようだ。

地獄の門番と同時にその使い手である領主となった俺は、地獄の負の力によって引き寄せられて何度も魔人転生を繰り返すような摂理に囚われている。

再び魔人となるからには、その力を再生されると同時に初めからやり直し。つまり転生前の記憶は全て失われるのだ。

だからもし、俺と親しき人となった者でも、力を失って地獄で転生すれば、何も覚えていない。

そのお陰で俺は何度も裏切りを繰り返したようだ。そのつもりはなかったのに、魔人として再び召喚された時には立場が変わっているのだ。そして、それも覚えてはいない。

ある時は親しい友となった者を殺し、

ある時は育てた子供を置き去りにし、

ある時は慕っていた部下を裏切り、

ある時は恋仲となった女を騙し、

ある時は最も嫌悪した敵に捨て駒に使われた。

俺は既に矛盾を何度繰り返したか分からない。

一度で存在が消えれば良いのに、何度も繰り返している。

存在の否定は認められない。終焉である死は在り得ない。存在の否定理由を俺は再認できない。それは何が間違いなのか分からないからだ。遠い過去、最も望みながら、最初に失った誓いの記憶。

俺は何度も地獄の住人達に慟哭のように問うたが、彼の者は一様に「彼方が最も望んだものだ」と答えた。

俺はそこまでして何を求めていたのだろうか？
俺は何をしたかったのだろうか？
俺は何者だったのだろう？

記憶喪失とは違う。記録はあってもその記憶が無いのだ。俺には何も手がかりは無い。全てが知覚出来ないほど細切れで、しかも破片が足りない。

例え記録があってもそれが俺だと断定できなければ、それは朝焼けと夕焼けが分からないと同じだ。記録と記憶は等しくないのだ。俺の転生の初めから続いている連続した感覚の記憶、実感が唯一俺自身だと断定できるのだ。

だから、俺がまだ転生していない、この残された時間、と実感が全てだ。

思えば十六年前、まだ特捜室でなく、特別捜査準備会と呼ばれていた頃の、十代で異例の大抜擢により室長となった馬鹿に間違って召喚されなければ、あの灼熱の大地の底で燻っていてあの魔女との出会いも無かったはずである。

あのいつまでも柔らかな風の吹く幻想の大草原の真ん中に生えている、大きな『くぬき』の木の下で、二人の魔女と小さな魔女候補を迎えた。

二人は見送り、一人は門を通った。

その一人の女と俺は、俺自身の名を掛けて約束をした。

『地獄から王の持ち物を持ち出すのは重罪だぞ。古き付き合い故に、

直々に門を開けてやると言うのに、俺の物を盗むとは不愉快な女だ』
『その時は、その時、人間、誰でも死ぬ。だから、『元は人間の』お前でも死ぬはず』
『ふん、魔女如きが。門番にして、王となった【魔人】と闘り合うのか？　不愉快を通し越して愉快だ。この間の暗殺者と女騎士を思い出すぞ』
彼女は俺の不意をつくように、背伸びをしながら片手を俺の頬に掛けた。
その表情は何故か記憶も無いのに懐かしく感じた。
『悲しい人。未だ……、囚われている』
人を忘れ、自らを忘れ、誰からも忘れられる時を過ごした俺は、その言葉に、肯定するしかなかった。
『……世迷いごとを……、俺は昔から、地獄の底に、奥底にただ独り、
叶えられなかった夢のため、
永遠に続く復讐を求め、
最後まで失敗した覚悟によって、
自らに科した業を背負い、
過去を捨て、
それらに続くモノを使って、ただ生き延びるのみ、
故に俺は【地獄使い】と呼ばれるのみだ。貴様こそ、下らない世界の秘密に執着したまま、同じ底で死ぬがいい』
女は清々しく、俺の真後ろのアカイ。壊れた空とは比較にならない、蒼い空のように笑った。
『じゃあ、あるかもしれない決闘のため、約束。もし私、死んだら、『あの娘』、責任取って、――　守って』
その魔女の覚悟に負けた俺は頷いた。
『了承した。王と、境界の門番たる【国定】の名にかけて、命を賭

けてあの娘を必ず守ろう』

彼女は死んだ。

彼女の約束のため、いや、この残る記憶のために彼女は守らなければならない。

また零れ落ちる事を俺は許さない。妥協しない。諦めない。

途方も無い繰り返しを俺はしているはずだ。断片すら残らない記憶の中で、俺は何度も己の悪意に際悩まされる。

それでも、俺はやらなければならない。

俺は一本の槍にならなくてはならない。折れても、曲がっても、朽ちても、貫かねばならないのだ。

たとえ刃先が無くとも、俺は貫く。

意志の無垢なる刃を秘めて。

雨が一段と酷くなった。

下からも雨が降るような激しい豪雨。その路面で足元が滑り、俺は無様に転げた。

四輪駆動の限界走行と変わらない速度で駆けていたのだ。それは形容すべき車体の座席から路面に放り出されたのと同じようなものだ。

皮が背中から削げる。しかし、そのまま受身を取って転がったままから再び走り出す。

曲がった道路標識、爪痕、道路に残る護謨（ゴム）の跡。散らばる薬莢。

それを手掛かりに彼女らを追い続ける。

在姫は誰にも渡さない――。

―Ｓｉｄｅ　Ｃ―

私、斜　蘭の人生は生まれから狂っている。
私は家族の繋がりを求めて、それを断絶された故に世界を彷徨う事を決めた。いつか、私が心地よいと思える繋がりを求める為に。

私の家族はそれは仲が良かった。
父は優しく、母は思いやり深かった。
父はあの少しおかしくなってしまった物理学者の保隅　流水とも親しく、高名な物理学者として名を成し、母はそれを手伝っていた。
共に愛し、睦まじかった。
誰もが羨む家庭だったと思う。

ただ一つ、夫婦二人が実の兄妹であると言う以外。

何時だろう？　私の家族は突然狂った。
母が父を罵り、父は母を皮肉った。
愛情は憎悪の裏返しとも言えるが、激しい憎悪の棘が殺意すら巻き起こした。
それは身内であるだけに近親憎悪と言うだけでは言い切れない、凄まじいものとなった。
三人だけの小さな世界だったのに、その殻が壊れた。父が女に入れ込んだと母が言い、母が父に隠れて密通したと父は蔑んだ。私はそのどちらも目撃しておらず、どちらも奇妙に思えた。それを言っても互いは納得せず、互いと、それを指摘した私への憎悪だけが倍加していった。
時に暴力が振るわれ、私はそれを受け入れた時があった。

殴られ、時には陵辱すらされた。

でも、良かったのだ。私が我慢すれば、再び二人は元に繋がり合うのだ、とそう盲目的に信じ続けた。それ以前に私は、信じる事しか出来ないほど幼かったのだ。

両親は互いに刃物で刺し合い、私の目の前で死んだ。
死ぬ直前まで、私すらを呪っていた。
私はそれから、時が止まったかのように成長すらしなくなった。
本当は二十代などとうに過ぎた年頃なのに、私の身体は大きな心のショックで、元々よりも更に壊れたようだった。

見えない繋がりを信じていた。
それは父と母が研究していた重力のようなもので、目には見えないけど、確かにあるものだと思っていた。
とりあえず、埋葬も終えて誰も居ない家で、私は両親の研究を続けた。何もする事がなかったが、それでも両親との繋がりが欲しかったのだ。私は彼らの残した研究に没頭し、気付けば重力を自在に操れる装置を作り出していた。
それでも、作り終えても繋がりは感じ取れなかった。
茫然自失で佇んでいたところに、何処から嗅ぎ付けたのかは知らないが、悪い魔法使いは私の研究を横取りしにきた。
別に取られる事はどうでも良かった。研究の成果は全て頭の中に入っていたし、繋がりはそこには無い事を知ってしまったからだ。
ただひたすら老衰を待つ老人のようにそのまま終えるつもりだった。
だが、繋がりを無い事を確認したそれを、そのまま自分だけの物にしようとした魔法使いを許せなかった。私の繋がりだと錯覚でも思ったのは私のものなのに、その見えない繋がりとそれを信じた、私の命すら奪い取ろうとした。

許せなかった。
でも、抵抗する力は無かった。
繋がりなんて何処にも無いのだろうか？
繋がりなんて幻想（たわごと）なのだろうか？
そう、思っていたとき、悪い魔法使いの体が吹き飛んだ。
散弾を喰らって床に叩きつけられ、更にそこから逃げようとした魔法使いを、身体の丸い男が足で繋ぎとめた。

二人の魔術師、オギとセツカ。あの巨大な院に許可された、人道と魔道を無視した人間に対する各国家間の密約によって完全殺人許可を持つ三百六十五人の、国際的に合法化された魔術師と魔法使い専門の殺し屋の内の二人。
人体創術師（ボディメイカー）のオギと連続修士（コラテラルマスター）のセツカ。
彼らが追っていたのはテンプル騎士団の流れを汲む極悪の魔法使いの団体で、その大元まで追いかけ、手掛かりまで近づいて来ていたと言うのだ。
無論、それだけで無く、彼らには目的があった。
『魔法使い』になる事。
私の研究を横取りしようとした悪い魔法使いから心臓を取り出し、魔法使いに生まれ変わろうとしていた。
しかし、私を殺そうとしていた魔法使いの心臓はもう使い物にならないほどのギリギリの許容量で、ぶっちゃけて言うならあまりにも魔法使いの才能は無くて、そのまま捨てられた。

彼らに私は教えられた。
『魔法使い』は見えないモノすら作り出せると言うのだ。

私は彼らにくっついて行くことにした。
彼らの見つめる先に、もしかしたら、見えない繋がりがある事を

信じて……。

子供のように狂ったように面白おかしく過ごす日々が楽しくも感じられた。

いつしか演技は日常となり、それが私自身となった。

最年長のはずの私が、何時の間にかセツカとオギの子供か妹のように、くっ付いて廻るだけの存在になっていたのだ。

そして、私は在姫と出会った。

彼女には見えない何かがあるように感じられた。

確信にも満たない、それはただの予感。それを信じる事にしたのだ。

私は、日常を捨てて、重層可変子（マルチレイヤー）シャランへと戻る事にしたのだ。

雲の切れ目から光が降り注いでいた。私は橋上手前で在姫と分かれて、田舎町と都市部を分ける太臥河の橋の上に居た。辺りの道路から跳ね返る雨の冷気が火照った身体を灌ぐ。

目前には狂ってしまった魔術師。いや、それは私もか。

静止軌道上に打ち上げられた私の重力制御衛星が水を、雨を弾いている。

グエーザーと呼ばれる重力の束。レーザーが光を励起させ位相を揃えたものなら、グエーザーは特定の重力子を励起させて位相を揃えたものである。物体の固有振動数に位相を合わせる事で特定の対象を分解させる事も出来る。一昨日、在姫に警告代わりに放ったのもそれだ。重力子は狙った物質以外は無傷で通り抜け、素粒子レベルまで分解させる。勿論、それを逆転させて、私の身体周辺などを

対象にして重力の位相を反発させて無重力状態、そして牽引して空を飛ぶようにすることも可能だ。つまり衛星軌道上で捕捉させれば、例え核ミサイルでも放射性物質まで分解させ、無効化可能させたり、飛ぶ向きすら変える事も可能なのだ。

それをセツカに放たなければならない。

黒い、オギのランボルギーニ・ディアブロGTが文字通り悪魔のようなスピードで襲いかかってくる。

完全に私すら轢く気だ。

「ぷあ・んくろ・ぶ」

エノク語を通して衛星軌道上から黒い悪魔に狙いを定める。搭載済みの量子コンピューターでの軌道計算と地磁気やローレンツ力などの影響を受けない重力子の超直進性により、誤差の修正まで一秒以内に片を付ける。重力の影響は光の速さで伝わる。演算処理の一秒は流石に縮まらない壁とはなってしまったけどね。

悪魔は音も立てずに崩れ、形を失う。

鋼のみを分解した結果、エンジンと外殻を失った車体の残骸。

衛星の重さの関係上、射出口は一つしか設けられなかったために、雨を弾くためのグエーザーの効果範囲から外れた私はバケツをひっくり返したかのように雨に塗り潰された。

「――――?!」

車外に慣性の法則で放り出されるはずだったセツカが見当たらない。

そうだった。

日常から外れ始めた今頃になって、彼女の『魔術』を思い出した。

「とぴ・り、ど・んあどり・すれ・い」

二節のみのエノク語で私の方へとすぐさまグエーザーを戻す。その際に弾く、いや消すのは水と鉛である。
目前で鉛玉、もとい銃弾が粉以下の物質になって掻き消えた。

どうやら直前で間に合ったようだ。

時折横薙ぎに降りつける雨の中で、硝煙を漂わせる銃口を向けるセツカと対峙した。

15．焦熱（しょうねつ）（1／2）（後書き）

＜＜―Ｓｉｄｅ　Ｃ―　魔術師視点へ続く。。

16．焦熱（しょうねつ）（2／2）（前書き）

＜＜―Ｓｉｄｅ　Ｃ―　魔術師視点からの続き。

16．焦熱（しょうねつ）（2／2）

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

橋の横に置かれた、その昔荒ぶる河の神様を鎮めるために建てられたと言う伝説のある石碑に私は隠れていた。
水気を吸って張り付く髪と薄手の寝巻きが僅かな不快感を醸しだしていた。
降りしきる雨でとっくに身体は冷え切り、私の小さな吐息は雨の音で掠れていた。
石碑の陰越しに、そして霞むような視線の先に二人の魔術師がいた。

雨に打たれる隻腕隻眼に見えない方の目ごと顔半分を額用の防具である古風な鉢金で覆った、黒ベースの軍服の女と、雨に濡れない領域に入っている制服のような服を着た女の子が橋上で対峙をしている。
水かさの増えた河が豪々と橋梁へと打ちつけ、土を含んだ茶色い濁流が二人の今の関係を表しているようだった。
彼女達の関係は分からない。ただ、昨日の様子を見る限りは、一朝一夕であれだけの打ち解けた雰囲気が築けるようには思えない。
今では私自身の認識は改めたとしても、あくまで魔に属する中では彼ら、魔術師達は「無意味に足掻く者ども」ような形容をされる人種なのである。人の摂理に囚われながら魔道に入り、それ故に人の通らない道を通り、時に人自体を避けることとなる事は必死である。華やかな魔法使いに対して、彼らはその技量を持ちながら、何て日陰の立場に居るのだろう。そして、そんな互いの切磋琢磨ですら疎ましく思えるような魔術師達の骨肉の闘争の日々の中で、あろうことか奇跡的にその親交を深めていったはずの彼女らが、こうして対

峙しているのは深く事情は知らないにしろ私はとても心苦しかった。
決して信頼を取り持たない魔術師が、互いに心を許しあっていた関係が、私で崩されたのだ。

魔道とは茨の道程である。古より伝わる魔道を歩む者達が噛み締めて言った格言である。
時に人と決別し、時に自らの選択に苦渋を飲まなければならない時がある。それでも、私は生き残らなければいけない。母のような魔法使い、魔女になるには正に茨の道を時に裸足で踏まなければならないのだ。血が吹き出ても、痛みの嵐に晒されても前に進まなくてはならないのだ。でも、出来るなら犠牲は出さない。きっとそれを許したら、私は魔女でなくもっと卑しい存在になってしまうだろう。

そんな時、ふと、我武者羅に進む彼の背中を思い出した。
私よりも一歩も二歩も先を進む彼の巨大な背中を……。
遥か昔から血塗れの裸足で魔道よりも茨な道先を歩き続ける、行き先の忘れた彼。

何かを思い出しかけてそんな事は無いはずだと思い直すと、私はセツカに手に添えられた、斜蘭が蠍（スコーピオン）と呼んだ毒針を見据えた。
魔法使いに取って近代兵器は最大の敵である。引き金を引き終わり、火薬を燃焼させて、金属片をばら撒く時間の方が、呪文を、意識を現実に反映させる速度よりも早いのは当然なのだ。
技術として発動の早さも到達の速さも突き詰めた魔術と違い、魔法使いは芸術に似て、その魔法の実効の遅さと言うハンデが付きまとうのだ。むろん、それすら突き抜けてしまう天才も中には居るが、言霊使いの殆どはエレンと言う魔女を最後に消えたはずだ。どちらにしろ、私の召喚術などは最も時間の掛かる術の一つで詠唱が覚られば、無効化（キャンセル）させられるのは目に見えていた。

つまり、私が今で出て行ったとしても即狙撃されるのがオチである。

魔術師になってしまった三枝先生、いやセツカは躊躇無く私の眉間を撃ち抜き、心臓を抉り出すだろう……。そこにはおそらく一瞬の予断も無く、最短最速で私を殺しにくる。

「――――」

「――――」

二人の女の間を冷たい雨が風でカーテンにように吹き付けられてお互いを遮る。そのためか？　カーテンが翻った瞬間、彼女らは双方の動きも表情も把握する前に先手を打ち合った。

一直線。まるで槍で突くが如く、半身から肩に顎を乗せて、右腕を振り上げるように銃口を向け、セツカが銃身から火を吹かせる。直後に斜蘭の短いエノク語の、現実までの反応が零の詠唱によってふわりと体が浮かび上がり、それを回避しながら、まるで氷上を滑るかのように、水溜りに線を引きながら回避した。その後ろを飛び飛びに追いかける銃弾の足跡。

五秒かそこらの間に空となった銃。それに合わせて斜蘭は身体を捻って、低く沈み、そこからバネで跳ね上がるように今度は爆発的にセツカへと向かう。

空中で反転、くるぶしの見える革靴が翻る。

昨日、二メートルの大男を薙ぎ倒した回し蹴りでセツカの頭部を狙う。

刹那、セツカはそのまま斜蘭の間合いへと踏み込んで蹴りをかわし、軸足の裏側に足を掛けながら肘で顎を押した。プロレスで言うところのＳＴＦの変形技みたいなものか。

地面にそのまま叩きつけられる前に、持ち前の魔術でふわりと、セツカの腕と自らの顎を支点にして逆上がりのように回転する。

互いに切り抜ける。
宙に浮いたまま、無防備に背中を見せているセツカに斜蘭がその空中から後ろ回し蹴り。。
だが、その蹴り足の踵は目標を失って空回り。代わりに、地面にグッと沈んでいたセツカは銃を口に咥えたまま片手を地面について、そこから真後ろに伸び上がるように両足で蹴りを入れた。
「くっ！」
胴体にまともに食らって吹き飛ぶ少女。空中で乱れた体勢を整える頃には、隻腕の魔術師は弾を込めなおして、構えていた。

より一層強くなった雨のヴェールが互いの表情を覆う。
すえた硝煙と雨の湿った香りが交じり合っていた。

「セツカ、もう止めよう？　あなたが好きだった生徒でしょ？　そんな、幾ら復讐相手だからって感情を殺して、その子供まで恨む必要は無いよっ」
「……」
セツカは表情一つ崩さない。
「確かに、あなたの大切な人や身体は奴に、面白半分で奪われたのかもしれない。でも、彼女が、その兄弟の子供だからって、殺す必要は無いでしょ？」
「……」

――――どう言う意味？
私の両親のどちらかが、彼女をあんな姿にした狂人の同胞だと言うの？
ありえない。他人の目や腕をただの楽しみで奪い、子供の目の前で殺す人間が居て良い筈がない。

「ラン、悪の子は悪なのだ。君も知らないとは言わせないよ？　清里鋼音（やつ）の眷属、彼女の父親、偶院　永久（グウイン　エイキュウ）が一体今まで何をしでかしていたのか？」

偶院永久――？

思考が止まった。

それは、痛いほどに、嘘だと願いたかった。

それは例えるなら「お前の父親はイカれた犯罪者だ」と言われ、認めたのも同然だった。

百二十七年前の大戦で類稀なる戦果を挙げながら、死神公社に背信し、世界中であらゆる人殺しと人外殺しと神殺しを行った全ての生物の反逆者。

常にその相貌は下卑た笑みに包まれ、特に意味も無く、陵辱と殺人と解体と遊戯をしていた男。

笑う暗黒。千の闇を飲む笑顔、魔人殺し、漆黒の覇者、そして、闇の神。

三人組テロリストの一人。

禁忌の大罪者、【死を裏切りし十二人】の内の一人だった。

禁固拘束年数十四万年で死神公社本部である闇の奥で佇んでいる、あらゆる活動、思考、知覚すら禁じられ、束縛された犯罪者の中の犯罪者。

こんなエピソードがある。

ある女の子が死神に追われて怪我をした彼を助けて、橋の下で匿った。彼女は彼女の友達の助けを借りながら献身に介護し、彼は九死に一生を得た。喋れない彼は身振り手振りで「君と君の友達に贈り物を挙げよう」と橋の下に呼び寄せた。

彼は彼が呼び寄せた人喰いの魔物達に彼女らを殺すところを張り付いた笑顔で眺めてから、満腹になった人喰いを最後に殺して、立ち去ったと言う。

その女の子はその無念さから、未だに魂がこの町を彷徨い続けていると言われている。

とにかく、彼には禁忌と言うものが無い。

面白いものは楽しみながら笑って殺し、つまらないものは勢いで笑って殺し、目に付いたものはたまたま笑って殺すのだと闇の奥で囁かれる。

誰もが名を呼ぶことすら嫌悪し、秩序を狂わす鬼すら忌避する魔。

それが、私の父親、……なの？

「でも、セツカは永久（かれ）にやられたわけでは無いでしょ！　それに関係有るとしても在姫はただ彼の子として生まれただけじゃない！　子供に背負わせる罪なんてないっ」

「では、反証してみよう。君は、両親を目の前で殺され、片目を抉られ、抉った目玉を勢いで潰して、腕を喰うところを見せられて正気でいられると思う、かな？」

「そ、それは――」
「そうさ、狂うだろう。狂うのさ。狂って狂い過ぎて、思考が捩子だとしたら捻じ切れそうだよ。いいかい？　私がブチ殺してやりたいと思っていた男達の娘がノウノウと才能ある魔女でいながら、日常生活に適応し、なおかつ友達まで作って生きていたんだよ？　それを君はどう思うかね？　嫉妬と羨望で狂わない自信はあるかな？　いや、無いね。憧憬にしては彼女は眩し過ぎるだろ？」
「……」
「君もそう『過ごしたかった』はずだ。でも、ブチ壊されたんだ。何でもない、運命とでも言うべきものに圧解したのだ。君の時間も、私の時間も戻らない。唯一、私達のようにそのがらんどうになった心の隙間を埋めるとしたら、自らの成功と成功者への蹂躙のみだ。そして、彼女をブチ殺す事が唯一、私にとってその両方の気持ちを満たす最高の埋め合わせなのだよ」
「でも、彼女は――」
「彼女に関係無いとは言わせない。十六年も生きて父親の存在を欠片でも疑問に思わない方がおかしい。蛆やバクテリアであるまいし、複雑な生命体は湧いて生まれ出るものじゃない。誰かに催眠術でも掛けられて忘れさせられたのか？　だとしたらそのメリットは？　どちらにしろ、贖い切れない罪はその関係者が全員で償うべきなのだよ。罪はあるのだよ。背負わないなら、背負わせるのみだ。それが自覚する私は追い詰め、追い続ける。認めないなら首を掴んで縦に振って認めさせる」
「……」
「言っておこう。この復讐は私の自己満足だ。そして、それが私の生き甲斐だと、君は知っているはずだ。誰にも邪魔はさせない。それは例え君でもだ」
狂った灰色の瞳が銃口の方向を探り出す。
背中越しから斜蘭の頬を雨とは違う雫が零れ落ちているように感

じる。
　それはセツカの凍てついた心に触れて、斜蘭があまりの凍える痛みで涙したようだった。

「……それでも、セツカは言ってた。可愛い生徒だって。私は知っているよ。生き物は湧いては生まれない。そこに理由は有って無くても生まれる事はある。それが生命だからね。だからそこから生まれて、始まった因果は付きまとう。だからさ……、何かの感情は生まれたのに、理由が無いはずがない！　在姫を思う気持ちは偶然だけなはずは無いでしょ？！」

―Ｓｉｄｅ　Ｃ―

　つっ、と銃口が始めてぶれた。
　それは年月と呼ぶ、不確かでそれでも確実に経ていた時間と言う経験が、彼女の頑なになった心に分け入ったものなのかも知れない。

　三枝　石火は天才と呼ばれる部類の人間である。
　連続修士の通り名の通り、彼女に霊気装甲を使う異端と人の身を超える特殊能力以外で、実戦レベルで使えない技術は無かった。
　射撃、狙撃、戦術、各種操縦技術から医術、薬学、心理学、流体力学、あらゆる分野の体系的知識と技術を彼女の魔術で圧縮学習、高速修得していったのだ。
　それは魔術でも同様であり、彼女は専門外の魔術を二十以上実践で遅滞無く動かせるほどマスターしていた。一つの魔術体系を実践レベルまで高めるのに十年を要する中で、彼女は彼女の魔術で二十三年の歳月の中で、魔術を極め始めた十年の中に二百年近い分の経験を蓄積させていたのだ。

先日、在姫を翻弄したのも『心の一法』や『空間合気』、『強制音声』などと呼ばれる誘導催眠術の魔術を言葉を通じて使ったものである。しかも、それは彼女の専門外の技術であった。それをまるで自分の修得した技術のように惜しげもなく、そして自然に使うのは最早才能にも等しかった。

しかし、それは技術の話し。技術以外である心の有りどころ、置き方などは専門家が過ごす特有の時間、『馴れ』でしか克服できない。

彼女が和木市で魔女を見つけるために、現代数学の基礎理論を四週間でマスターし、イスタンブールでとある魔法使いと交戦していた荻や蘭、それ以外の他の魔術師より先に坤高校に偽造教師免許と架空戸籍で潜り込み、数学講師として潜入していたのは、今年の春先の事だった。

無論、様々な経験を高速でマスターする事が出来るのも彼女の魔術とは言え、独特の『慣れ』だけは年月の経過以外で経験させることは出来なかった。

彼女はクールな見た目に似合わず、何事にも思い悩む方だった。仮の仕事だとしても手を抜くのは性分ではなかったし、それ故にいずれ居なくなるからとてそれを甘えにする事も出来ないために必要以上の緊張をしていた。

初めての授業、しかも教育実習すらすっ飛ばした本当にぶっつけ本番の教師の真似事を終わらせて、その始めての授業の直後に、あろう事か始めての質問をしてきたのは生徒、九貫　在姫だった。

――九貫在姫

伝来不明の魔女、クヌキの家系の長女。

母、九貫愛媛　行方不明

父、存在不明

霊気装甲の上位五％に入る九十六，二％の到達者。

魔術師から魔法使いへの転換手術後の適合可能率九十七％
魔法適正不明。
大禁呪継承可能者。

当時の石火の脳内にもいずれは狩る予定の魔女として登録されていた。
いつも彼女なら魔術によって冷静に挙動などから彼女の弱点やら何から何まで魔術で丸裸にする事が出来た。
でもその時、ポーカーフェイスの彼女の仮面の下では「うわー不意打ちで初っ端から質問するなよー」と言う些か文句めいた言葉しか踊っていなかったのだ。
授業終了で滅多に無い事に気の抜けた彼女には、在姫の奇襲に似た質問に対応するのは一苦労だったのは記憶に新しかった。
授業以上に慌てながら、それでもその態度だけは見せずに見た目どおりにクールに行う事が出来たのは僥倖だった。
質問を終えた後、在姫は飛びっきりの笑顔で言った。

「ありがとう、先生は教えるのが上手なんですね？」

その言葉の瞬間、石火の胸の奥が何かがジワリと湧き水のように溢れた。
生きていれば何時かは、いつでも聞く事が出来る言葉だった。
しかし、復讐を始めた凄絶な暮らしの中でその言葉を真の意味で、荻や蘭のように親友としての偏りも無しに彼女に伝えたのは在姫が初めてだった。魔女ゆえに宿る言葉の魔力だったのか、タイミングだったのかは分からない。
在姫は覚えてないかも知れない。
だが、それでも、石火の中ではそれは忘れられない出来事の一つ

となったのだ。
そのため、彼女は意識的に魔術師結社での活動を始めるまでは意図的に、それでも自然と、彼女を避けるようにしていた。
もしも、彼女を狩る時に情に流されたくはなかったからだった。
だから一角の親愛の思いを凍らせて、目覚めないように奥に仕舞いこんで。仮初の日々を続けた。
ようやく亡霊騎士が和木市に侵入して結社として本格的に活動する時に、彼女は今一度、彼女の席へと夏休み直前の授業後に自ら訪ねた。

《九貫くん、相変わらず良い成績を出しているようだね》
魔法にもおいても、体格は小さいながら運動においても彼女は優秀だった。そこに秘められた心臓の価値は、舌なめずりが出来るほどだった。
《いや、校内でも卓越して優秀な生徒がどんな者かと個人的な興味に惹かれただけだよ》
個人的な興味どころではない、彼女は、悪の修羅道に落ちた者どもを狩る側に居たはずの彼女は、狩られる側の非人道的な、悪の魔道へと手を伸ばしてしまっていたのだ。そして、戻れないところまできてしまっていた。
《先ほども言っただろ？　『個人的な興味に惹かれただけ』だよ。将来的に君が、私が担任するであろうクラスで伸び伸びと勉学に励むと考えると喜びに満ちてくるのだよ》
在姫の体内で生きる心臓が、その自らの糧となる瞬間を考えるだけでも、彼女の空虚な鼓動は高鳴る。
《――おや、しまった。学生の貴重な休息を奪ってしまった。私は教師失格だ》
そう、教え子をこれから殺そうとする人間失格。それが彼女だった。僅かな休息の代わりに与えるのが永遠の静止。
《あと、数日で夏休みだ。それまでも、夏休み中も、気を抜かずに

勉学に励みたまえ》
　他の魔術師に殺されないように気を抜かずに生きろ、とそんな思いも込めていた。

　でも、心の何処かには、あぁ、ここが彼女と私の分岐点なのだろう、と哀愁に浸る、自らが小さく裏切った気持ちがあったのかもしれない。
　小さな嘘がちくちくと痛む。

　そんな思いがちゃんと仕舞いこまれているか確かめるための行為だった。
　でも、それはあまり意味の無いものだった。
　仕舞いこんでいても、隠し切る事は出来なかった。憎み切る事すら出来なかったのだ。
　だから、彼女の銃口は揺れていた。
　既に経験した事を彼女は覆しきれなかったのだ。
　経験すれば、それは彼女の一部であり、隠す事は出来ない。
　そして……、

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

　そして、彼女は斜蘭に向かって引き金を引いた。
　灰色の瞳が凍り付いていた。
　隠し切れないなら使わなければ良い。思わなければ良い。あらゆる人の心の動きを凍らして、セツカは瞬時に復讐の化け物に戻っていた。
「ぁがっ」
　今まで消滅させていた銃弾があっさりと斜蘭の魔術を通り越して

いた。
今まで覆われていたはずの不可視のフィールドは術者の統制を失って途切れ、空中に居た斜蘭は水溜りに落ちた。上から降りしきる雨と下から染み渡る水溜りで少女はずぶ濡れになった。
ゆるゆると雨気を吸いながら、硝煙が昇っていた。
「――非殺傷性のゴム弾だよ。鳩尾に正確に当てたから動けないはずさ。いつも金属弾だけを使うとは限らないのはランも知っていたはずだな。君の魔術はいつもごく一部の金属の分解しかしないからだ。まぁ、金属を全て分解したら君の体内の無機質も失う事になるし、いちいち飛んでくる物体の構成物質なんて考えていたらキリが無いから設定の変更が面倒なのは仕方がないけどね。まぁ、残念だったな」
斜蘭は強い衝撃を胃のあたりに食らって、蹲っている。
ヒュウヒュウと音にならない声を挙げ、口が音の形を作ろうとするがそれが形になる事はなかった。

「さぁ、闇の落とし子、出てくるんだ。出て来なければ――」

口で銃を保持し、地面に非殺傷用弾を詰めた弾倉を落とし、腰のポシェットみたいなところから弾倉を入れ替え、殺傷用の金属弾に入れ替える。
その狂った銃口を斜蘭に突き付けた。
「ランを殺す」

……無茶苦茶だ。
復讐の化け物に友愛の倫理は無いのか。
次の瞬間、雨音には著しく似合わない渇いた音が一つした。
斜蘭は先のゴム弾の衝撃で動く事も叫び声も挙げる事すら出来ず、

滂沱の涙を流しながら口をパクパクと動かすだけだった。
「私は本気だ。五秒後には今の左足の次に右足、右手、左手、頭の順で撃ち抜く」
頭が混乱してくる。
彼女は【死を裏切る十二人】の誰かに両親を奪われ、重症を負った。そのための復讐とは言え、ただ一時のために同じ時を過ごした者すらを手段の一つとして殺そうと言うか、そんな事が出来るのか？
いや、出来るのだろう。元に、彼女は二発の弾丸を斜蘭の右足に撃ち込んだ。
赤い血潮が噴きあがる。
「次の五秒で右手だ。いや、待ちきれない、三秒にしよう、一、二、三」
斜蘭の可憐な細い右腕を彼女は容赦なく撃ち抜いた。
蹲った斜蘭の腕から赤い血が流れていた。
陸に上がった魚のように斜蘭はピクピクと小刻みに動きながら、うつ伏せに震えた。
「彼女の命は後六秒だ、早く出てくるんだ、一、二、三、ほら、左手も終わったぞ」
「在姫、着ちゃダメぇぇぇぇ、うあぁぁぁっ！」
そう叫んだ斜蘭の細い両肩を、セツカは有無を言わさず吹き飛ばした。
二つの銃声と同時に赤い彼岸花がアスファルトに咲き乱れ、水溜りで散らばった。
「うるさいぞ、この裏切り者め。だが、安心しろ。私は友達思いだからな、頭をちょっと吹き飛ばしても生きているくらいにはしてやる。安心しろ、荻の真似事くらいは私は出来る」
ピタリと斜蘭の頭部に突きつけた猛毒の、鋼鉄の毒針。
彼女は手元の鋼鉄のように人ですらなくなったのだろうか？
私は未だ傷のくっ付き掛けていない親指ごと握りこんで、何をするか分からない人間への恐怖と自分自身の出生の混乱でカタカタと

動く歯を食いしばった。精神的ショックでフラフラとする頭を石碑に一度預けてから、勢い良く橋梁の影から出た。

彼女は私を闇の落とし子と呼ぶ。だがその事実よりも、私は自らが魔女である確信を優先させ、同時に、私の理想を壊すつもりは無かった。

斜蘭は私を守った。次は、私が斜蘭を守る番だ。

魔女である私は、私の運命にすら抗ってみせる。闇の落とし子？上等だ。その落とし子が人を守れるところを見せてやる！

「止めなさい、極道教しっ！」

そう思いの丈ごとぶちまけるように言った直後、体が反応して右斜め前方へと、橋梁を乗り越えて汚す河の泥水すら気に止めずに転がった。

風切音三発。

私はかろうじて弾丸を避けた。

通常、銃は脇を締めて撃つものだ、とどんな経験があるのかよく分からない、私の師父から聞いた事がある。

『そのため、拳銃は右利きなら相手から見て右手側に、左利きなら左手側に進めば、銃口の向きによって脇が自然と開く。そうすれば、普通は当たらない。拳銃などの短い筒の類は狙いのブレがシビアなんだ。動かない的で素人で十五メートル、玄人で五十メートル、自在に動く的で素人で五メートル、対テロも行うSAS（レジメント）やその専門であるデルタフォース、米軍の複合部隊であるネイビーシールズなどの軍の特殊部隊、CIA（ラングレー）やイスラエル諜報機構のモサドの諜報機関、そして国連管轄の特捜室の初期対応部隊（カウンターレスポンスチーム）などでの射撃訓練を積んだ玄人で十五メートルから二十メートルと言ったところか。最近かの【峠事件】で、四百メートル先からオートマチックピストルで十五発を七秒でピンヘッドさせた化け物が居るらしいが詳細は分からない。ど

ちらにしろ、そんな四百メートル先から銃弾をトンカチ代わりにして七秒で全弾を釘打ち出来るような化け物級の狙撃手に出会う確率は億分の一のはずだ。とにかくは脇を締めた正しいフォームや射撃大会のように肩を一直線にするようにしない限りは当たりにくい。中途半端に脇を開かせれば、射線は簡単に乱れさせる事が出来る』

素人離れ、玄人慣れした彼女は体勢を整え、二十メートル先からピタリと私の頭部を狙った。

《だが、稀に多少不自然な体勢でも、それでも当ててくる厄介な相手が居る。玄人以上のその道の『プロ』だ。奴らは敵に弾丸が絶対当たる距離まで気付かれずに接近する事に一番長けているが、むろん当てる事も『一般人』の玄人すら逸脱している。先の四百メートルの奴が極端な例だが『その類』だ。そのためにフォームを崩して相手に外させるのではなく、自ら避ける方法の修得が必要なのだ。》

頭部を狙う銃口だと、私が感づくと同時に動いていた。

《銃が狙っている方向を、弾の出る銃口を観察して推理するんだ。銃口が真ん丸ならまっすぐ顔目掛けて狙いをつけている》

左頬を伝う三つの金属の感触、そんな合間でも私は彼女の銃口から目を離さない。

《少し楕円なら、胸か腹か、あるいは手足か、ともかく顔以外のどこかに狙いをつけているんだ。まぁ、楕円の形を見れば大体は分かるがな。次に、射手がいつ銃を撃つかだが、これは目と肩の動きを見るんだ。何かしようと決意したときに人は目にその印を表す。それをしっかり読み取れば、銃を撃つ直前の目つきがわかるんだ》

右斜め下を向いた銃口、狙いは右足。灰色の瞳のぎらついた輝きと同時に左後ろに飛び退いて避ける。続く左足も体重を移す前に動き出す。ジグザグに狙い続けた最後に右のお腹を狙い、それを背中をみせるようなターンで沈みながら回避した。その間も銃口からは目を離さない。

《また、肩がほんの少しだが、銃を撃つとき特有の筋肉の動きが現れるからそれも参考にする。銃の反動を抑えようと、または逃そうとすると肘が動いたりするからね。肘が動けば連動する肩にも兆候は現れる》

肩の僅かな硬直に合わせて避け、肘のブレによって避け、指先の動きに合わせて避ける。

《つまるところ、見える範囲で拳銃を避けたいなら射手の反応を読み取る洞察力を鍛えろ、そしてそれを読み取って瞬時に避けるようにしろ、とこういう事だ。魔女ならガントの撃ち合いの決闘などもあるはずだからな。銃口を指先に置き換えれば代用は利くはずだ。鍛えておく事に越した事はない。熟練者はその兆候が読み取りにくいから、しっかり相手を見る事を練習しておくと良い。分かったかな？　マイ・シスろべぎぁッ！》

で、鍛えた結果。今のところ、九発の銃弾を避けていた。

魔術師はそれくらいは予測済みのようで大した動揺も無い。

魔女の心臓を限界まで駆動させ、運動能力と知覚、認識能力を火事場の馬鹿力で高めている。そんな風に感覚と筋力を高める事が出来るからこそ出来る、感覚と努力で何とか出来る魔女の才能だった。

さきほどから数えていたところ、彼女が銃を撃てるのは二十発。

それから先は弾倉を、弾の詰まった別の容器を入れ替えて、銃にセットしなければならない。何処ぞの弾幕ゲームでは無いのだ。弾切れをしたら取替えをしなければならないのは当然だ。

残り五発。

左肩狙いを避ける。右の脛を空中に引いて空かす。頭を沈ませてボクシングのダッキングみたいにやり過ごす。ブレイクダンスみたいに手をついて、横に転がりつつ頭を更に下げてやり過ごす。

『いたたた、……そうそう、それと跳弾（ちょうだん）なんてものもある。弾は壁などの硬い面に弾かれても、まれに弾丸は獣のように進行を続ける。だがその弾かれる角度は大抵は三度から八度と決まっている。何も無い場所なら地面に寝っ転がれば当てられる事はない。そうすればアスファルトの地面で無い限りは地面で跳弾は起きない。アスファルトの地面なら反射断面の粗さと侵入角度の開き方から予測出来る』

検討違いの方向に向けられた銃口。アスファルトの地面を狙っている。

跳弾だと確信して、私は最後の弾丸を更にもう一度横に転がってよけた。

耳元を金属がアスファルトで弾かれる音。避けなければ、側頭部に当たる位置だった。

彼女が口で銃身を咥えた。

弾切れ！

ここから勝負！

再装填（リロード）の際、弾の入った弾倉を入れ替えなければ、当たり前ながら銃は撃てない。むろん、それは弾が入っていないからでそれは当

然のことだが、徒手空拳の私にはかなり重要なことだ。
再装填の時の無防備な状態。ましてや魔術師セツカは片腕。もう片方の腕を使う事が出来ないために、装填は健常者に比べれば、何倍も細かい作業が難しいのは自明の理だ。しかし、それでも彼女の熟練具合をみれば、再装填も健常者の軍人並みに早いのかもしれない。
しかし、再装填のこの瞬間だけは、彼女が最も無防備になる瞬間である。

私は陸上選手のようなスタートの四つん這いから駆け出す。
霊気装甲は駆動を始めて、高鳴る一方。

「Ｉ　ｓｕｍｍｏｎ　ｏｎｅ　ｆｒｏｍ　ａｎｏｔｈｅｒ　ｕｎｉｖｅｒｓｅ　ｉｎ　Ａｚａｔｈｏｔｈ'　ｎａｍｅ．　Ｄｅｒｉｖｅ，　ｎｕｌｌ――（我はアザートスの名に於いて無界より素を呼ぶ。出でよ、失名素――）」

装甲で筋肉の『これが限界だ』という場所を突破させて、本当の全速で彼女に肉薄する。
後、数歩もしないで彼女に辿り着く。魔女の渾身の左ショートアッパーを叩き込みながら、そこから影の兵士達で束縛させ、彼女を沈黙させる！

その時、何故か彼女が口に咥えていた再装填をしようとした銃が自然と口から落ちて、左手に収まり、自然に間近で魔弾が放たれた。

――――――。

渇いた音と同時に胴体に広がる衝撃。大したダメージでも無いはずなのに、私の足元とそれに伴って視界が乱れて、そのまま、隻眼隻腕の魔術師の前に倒れこんだ。

地面に倒れこんだら無い胸の下の、更に下辺りから熱い何かが込み上げてきて、続けようとしていた呪文の代わりに、思わず込み上げる物を口から吐き出した。

「かはっ」

黒い塊のような血だった。

お腹が痛くて、痛くてたまらない。

「程よい形で内臓に当たったみたいだな。ふむ、肺では無く、胃のようだな。どす黒い……、魔女と化け物らしい小汚い血が物語っているようだ」

くすくすと灰色の目を細めて、半月よりも細く魔術師は笑った。

何故？　私は弾丸が空になるまでちゃんと数えていたのに……。

「何故、無いはずの弾が撃てたのか？　気になるようだね。解答を教えよう。何、簡単な事だ。ランの左足に放った最初の弾丸は銃の中の薬室に入ったままの、先ほどの『ゴム弾』だったからだ。その証拠に血は出ていないはずだろ？」

……確かに、私は血を確認していなかった。最初の銃撃には血潮は飛んでいなかったのだ。

「薬室の中の残弾と弾倉の弾、賢い君ならこの足し算は分かるはずだ」

一発のゴム弾足す事の二十発の銃弾。そう、私は単純に数え間違えていたのだ。

「まぁ、無理も無い。銃の構造を知らないと出来ない引っ掛け問題だったからね。テストの時もそうだ。優秀だが、君は非常に初歩的な間違いが多い」

蹴り。

「あっ　ぐ！」

顔を蹴られた。私は撃たれたところを中心に一回転する。仰向け

になったところに更に蹴り。爪先で更に撃たれた場所が抉れて痛い。
「途中式が間違う事も多々あるが、そもそも問題を取り違えていたり、見逃していたりなどもしている」
鼻血が出てる。以前に装甲の流動に失敗して、全身の穴と言う穴から血が吹き出た以来だ。今回は穴の無い場所から出ているために以前よりヘビーなような気がする。
呼吸が苦しい。体が重たい。いつもなら気合で何でも無いはずなのに、まるで、知ってはいけないことを知って、私の中の思考も体の調子も狂ったみたいだ。
「そして最大の間違いは、この世に生まれ出たことだ」
「あ、このぉ、ごぼ――」
何か言い換えそうにも、喉の奥から続きと流れ出る血塊に取られて、まともに喋れない。
じくじくとした痛みは毒に体が侵されたように、滾る意志とは逆に無力感を伝播させる。
そんな地に落ちた鳥のように足掻く私の前で、恍惚とした顔で悠々と、魔術師は再装填を終わらせて銃を構えた。
「間違いを正すのも教師の役目だ。最後の指導に取り掛かろうか？」

―Ｓｉｄｅ　Ｃ―

石火の魔術はとても原始的なものである。
【読解（よみとき）】と呼ばれる古い起源の魔術とそれに付随する【再現（ふたあらわし）】と言うものである。
『読解』はあらゆる事象を法則の形で読み出して理解する。『再現』はそれを頭の中で【予測】、シミュレートするものである。
この技術は陰陽道から深く続く、式を読むと言う技術である。
式とは陰陽道においては『物事の繋がり』であり、式を読む事は

自然の運行や法則を読み込む事で式を頭の中で再構築して、それをシュミレーションすることで森羅万象の出来事を予測することである。当時天文博士と呼ばれた陰陽道の博士は、星の運行から国の行く末たる吉凶を占っていたと言う。

とんでも無い上級者ともなると意図的に自然の法則を人為的に捻じ曲げて望む結果を算出させながら、その自らの作った台本を正確に【予測】するという。

さて、彼女の魔術は若いながらも卓越しているが、その領域に達したモノでは無い。それは技術や魔術であるものを【読解】し、【再現】する事で人より格段早く経験をすませたり、後の展開を高確率で【予測】する程度のものである。

むろん、彼女でも【予測】しきれないことは多い。事象として現れない人の心や、その心の中での結果が現される魔法は彼女は理解自体が出来ないし、技術的に不可能なのだ。

そう、だから彼女は左足一本で身体を引き摺り、泥まみれの傷だらけになって彼女の左腕にしがみ付く、殺そうともしていた友人の行動を理解出来なかった。

「セツカ、……止めて」

路面に描かれた赤い軌跡。

身体を引き摺って、彼女は復讐の最後の一コマを繋ぎとめた。

「邪魔をするな！　私は待っていたのだ！　この時を！　この瞬間を！　この悦楽を！」

凍った瞳で彼女は激情を吐き出す。

「こいつらの眷属は『死』が無い！　だからこそ人も人外も関わり無く、玩ぶように殺し尽くす！　そんな末裔は一匹足りとも人としても生かしてはおけない！」

握る手に音を立てるほど銃を牙で噛み締めるように握る。今にも引き金は絞られて、在姫の頭を吹き飛ばしそうだ。

「あなたは、本当に……、復讐がしたいの？」

「あぁ、そうさ、復讐がしたい」

彼女は澱みなく言う。

それをボロボロになりながら縋りつく、彼女の友が否定する。

「違う。それはセツカの心が、その時から凍ったままなだけだよ！　復讐なんて無意味だって、不可能分かっている。セツカは復讐じゃない、ただ心が凍っただけの固執なの！」

「――――ッ！　違うッ、で……、出鱈目を言うな、……私を惑わすな！　私は、あの化け物に復讐しなければならないのだッ！」

――そうなのだ。彼女の本当の持つ感情は憎しみでは無かったのだ。あの怪物に殺される瞬間、心も殺されないように、硬くその時の状況のまま凍らせただけなのだ。

たかが十五歳の復讐心が人類など圧倒的に超越した生命体に適うはずは無い。それは幾ら子供でも彼女は分かりきっていたはずだった。でも、それを納得していたら、その確実に来る死を受け入れていたら、彼女の心までも化け物に殺されて砕け散ってしまう。だから、彼女は途方も無い試みの不可能さを忘れるために、それを考えるための心を凍らせたのだ。

彼女の心が凍っていたのは、必死にその事実を忘れようとして、復讐と言う行為だけを繰り返すものだったのだ。

それはつまり、固執である。

心の方向を一つに定め、それ以外の方向に動かないように全てを無視する状況を自ら作り続けていた。

しかし、聡明な彼女は、斜蘭の大きな叫びで心が無視できないほど戦慄かされ、気付いてしまった。

復讐をする行為の無意味に。

心が砕けそうで、キシキシと軋んでいた。
精神崩壊と固執からの解放の狭間で彼女の心はあまりにも脆く揺れ動いていた。

「違う！　固執じゃない！　私は、私はこの化け物の娘を殺したいんだ！」

銃身が震えていた。今にも泣きそうな顔を、銃の握り手で必死で耐えている。
それに震えながらも斜蘭は立ち上がり、全身でそれを押し留めていた。

「セツカは！　これ以上時を止めて、心を凍らせる必要は無いの。動いて、動き出して！　セツカと繋がりを求めている人がいるのだから！！」

そこで始めて、子供と大人の狭間で揺れながら、それを拒絶して魔術師として歩み、そして死に掛けていた時に、助けてくれた彼を彼女は思い出した。

凍っていたから、本当の意味で気付かなかったのかもしれない。
昨日よりも前、全てが凍りついた雪原での惨劇から、彼はずっと隣に居た。
あの時、あの場で、狂って捩子くれた爪が突き刺さるのを止めたのは、事実、彼だったのだから。
心が凍った直後、それに体の反応も引き摺られて何も行動が出来なかった頃、それを献身に介護していたのは彼、荻だった。
それからも彼は事あるごとに助けてくれた。復讐をするつもりだと言っても彼は黙って着いて来てくれたし、それに掛かる労力や負

担にも不満を漏らすことは一度としてなかった。
それでも率先はしなかったが、彼は復讐を快く思っていなかった。
それ故に、彼を最後まで身体を受け入れたとしても心から受け入れる事は出来なかった。彼は復讐が無理だと分かっていて、それだから彼女を止めた訳ではない。純粋に彼女を愛していて、彼女の一挙一動が不安だったのだろう。
彼はいつでも暖かかった。
極寒のシベリアで、常春の太陽ように仄かに暖かい彼の優しい眼差しが彼女を照らしあげた。

氷が、砕けた。

「荻……、私は、あ、……」

軋んで壊れた灰色の氷の間から、暖かみで溶け出した液体が、ジワリと石火の目尻を伝って流れ出た。
彼を何度「魔術師に似合わない」と蔑んだりしたのだろう。それを何度笑って誤魔化されたのだろう。彼は、彼女を暖かく包んでいた。それを硬く凍って拒絶し続けてしまっていた。魔術師として、それでも彼は同時に『人』としても生きていたのだ。

そう、彼女の凍った心は人の温もりでしか解けなかったのだ。
だから……、温もりで涙が止まらなかった。

「……あぁ、荻、……荻、……済まない」
銃口が在姫からそれて、地へと向けられ、そのまま滑り落ちた。

－Ｓｉｄｅ　Ａ－

左腕に巻きついた斜蘭も、そして私もようやく安堵した表情を見せていた。
魔術師セツカでなく、私の父親の兄弟が与えた呪縛から溶け出した三枝先生はしゃくりを挙げて、子供のように荻さんに謝りながら泣いていた。
……加えて残念ながら、常寵には二人の間に入り込むような隙間も無いようだ。まったくもって、お騒がせなカップルだ。
父親が大犯罪者である事は、……事実なら仕方が無い。どう足掻いても私はそう生まれたのだ。だったら受け入れるしか無い。それからどうするかは特に何も考えては無いけれども。それにしても母も、なんていう人と結ばれてしまったのだろう？　その辺りの経緯は生きていたら聞いてみたいけど、まぁ、もう後の祭りだ。
さて、そして私の知り合いが誰一人死ななかったのはとても幸福な事実だった。今回の私は少し無様かもしれないけれども、その幸福の形を掴み取ったのは私では無く、三人の魔術師達の絆なのだからしょうがない。これくらいの不幸は許せる範疇だろう。胃が凄く痛いけど。
絆の強さ。三枝先生が見た目とは裏腹に危なっかしく、一番頼りなさそうに見える荻さんが外見に似合わず縁の下の力持ちでキーパーソン、そして斜蘭は何かがあるとちょっと口を出して全体の道筋

を正していく。それを考えると、まるで斜蘭が最年長者みたいだ。
それにしても全員、外見と構成する関係が全然違う。魔術師は魔法使いよりもその成合や素性を隠すけど、性格にいたるまでまるっきり違うのも珍しい。
そんな彼らが色々と、父親が大犯罪者など、ビックリな落し物を残してくれちゃったが、激しい戦闘の中で誰も死ななかったのは凄い拾い物だし、大切にしたいと思った。
そう思いながら痛むお腹を押さえて、「等々力医院って国民保険効いたかな」と金銭面での事へと考え始めた時だった。
風雨の中で大翼の翻る音が響く。
それは聞き慣れた、ヒポグリフィスの両翼の羽音だった。
あの看板にぶつかってから、自分の異界へと戻らずに彼は留まっていた。それは何故？
「！？　セツカ危ない！」
その羽音の方向へと頭を巡らせる前に突如、斜蘭が三枝先生の腕を引いた。
地面に倒れる先生をかばうように、傷だらけのまま両手を広げる少女が何かに立ちはだかる。

「るぁぁぁぁぁぁぁぁつぁ！」

その場に残った斜蘭をアカイ槍が切り裂いた。

右肩から腰までを一気に切り裂かれて、左右に分かれながら彼女は崩れ落ちた。

血みどろになって、ボロボロになって、同じ満身創痍のヒポグリフィスに乗ってきた紅の獣が飛び降りながら切り裂いた。

獣の左肩から腕の先が無い。足はスニーカーの端だけでボロボロで、足の裏も背中も赤黒い、荒い息と血を吐き続ける口は獲物を喰いちぎった野獣の剥き出しの牙みたいで、胴体には鉄の破片とかの細かいものがびっしり刺さっていた。ギラギラと脂ぎったナイフみたいな終わった瞳が斜蘭の縦半分になった身体を睨んでいた。

斜蘭を斬割した槍を途中で止まった腰辺りから無理やり引き抜くと、鮮やかなまでに赤い血をひいて今度は先生へと向ける。

先生は驚いた子供のように目を大きく見開いていた。

「ラン……、え、何で」

ドンと言う音がして、先生も心臓を抉られた。

音を立てて槍は引き抜かれて、地面に点々と飛ぶ血の滑り。
先生はよたよたと後ろ向けに後退りながら、橋の手摺りに手を掛ける。胸辺りを押さえた手からはどくどくと有り得ないほどの血が漏れ出していた。
その胸から流れ出る、粘ついた血を手に翳してみると、先生は何か納得したように微かに笑って、
「九貫くん、……済まない」
そのまま、橋から落ちて濁流に飲まれていった。

私はその出来事の中で、体が麻痺したように動かなかった。
幾ら血が足りなくても無理にでも動けたはずだった。それでも私は動けなかったのだ。

「在姫、……大丈夫か？」
今にも何か飛び掛かりそうな、凶暴な、それでいて虚ろな顔で、紅色の化け物が槍を杖代わりにして近づいてきた。
皮肉だ。復讐者が悔い改め、狩人の一人が獲物を守り、突然の自分の悪夢にも耐え切ったのに、そんな私の壊して欲しくない穏やかな日常を、そうなるかも知れなかった可能性の一部を、守るものが全て壊した。
――何よりもその姿が鬼のようで、あまりにも恐ろしくて、何かも壊してしまいそうで、私は耐えられなかった。

「近寄らないで！　化け物！」

雨音がより一層強く降りしきる様に雨脚を挙げた。
私と化け物の間が、目で見えるより……、遠い。

「……在姫、俺は……、君のためを思って」
鬼がまるで人のように話しかける。
……いや、嘘だ。彼には人の心なんて無い。いや、『これ』は強き壁である守護者でも、人になつく事もある獣でもない。ただただ殺し尽くす戦鬼だ。
「いや……、もう、いや！　先生が折角正気に戻ったのに何でアンタは殺したの！　おかしいよ。斜蘭なんか私を助けようとしたのに何で殺したの！　アンタなんて、守護者でも何でもなくて、ただの狂った人殺しじゃないッ！」

雨なのか、涙なのか、救われたはずなのに取り零れた事が納得できなくて、狂っていて、私の視界は世界ごと歪んでいた。
鬼の顔も歪んでいる。

「アンタ、何て要らない！　お願いだから……、もう誰も殺さないで……。だから私の、そばにいないで……、う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

雨音に遠く慟哭が響く。
あぁ、何て、理不尽。
魔女でも、人を救いきる事が出来なかった――

「……分かった」

―Ｓｉｄｅ　Ｃ―

斜蘭はおどろおどろしいほど渦巻く灰黒色の空から、必死になりながら満身創痍の魔人が落ちてくるのを見て、流石にこれは死ぬな、と納得していた。
右肩から槍の鋭い刃で切り裂かれながらも、彼女はそれでも満足していた。

繋がりはあった。
見つけられた。
既に、石火と荻の間にあったのだ。
絶望的なまでに、世界の何処にも繋がりを意識できなかったのにも関わらず、彼女が引き金を引こうとしたあの瞬間に自然と、探していた彼女自身の言葉から出てきた。
繋がりは感じていたのだ。それを気付かなかったのは斜蘭の鈍さだったのかも知れない。
いや、もしかしたら、彼女と彼の僅かなわだかまりを逆に感じ取る事で、繋がりがまだ弱い事を敏感に感じていたのかもしれない。

とにかく繋がりは愛情の結晶とか、見えるもののようなそう言う

ものではなく、彼の暖かさが彼女の凍った時間を動かした。そして、それに答えた彼女も、彼自身を受け入れたのだ。

目に見える必要は無かった。検証するようなものでもなかった。ただ自然と二人の間に分かつものがその瞬間には感じられなかったのだ。それが事実だった。

だから彼女は、在姫を守ろうと死に物狂いになる魔人に対して、ただ一つも恨み言はなかった。

彼は在姫を守るためなら何でもするのだろう。そう思うと言い訳する間も無く殺されるのもしょうがないことだと諦める事が出来たのだった。在姫は斜蘭が殺された瞬間は、彼の必死さを理解出来ないかもしれない。でも、繋がりを感じる事が出来た斜蘭は、魔人と魔女の間に石火や荻よりも強い繋がりが感じられた。それが分かったのは、もしかしたら、死ぬ前に彼女が魔法を使えたのかも知れない。

そして、憑き物の落ちた石火も今までの悪意を受け入れるように、儚げに笑いながら消えていった。

それでもたぶん、死ぬのは自分が先だろうと、斜蘭は思っていた。自分自身の怪我の軽重は関係ない。濁流に流れる途中、病院に居る筈の『彼』が泳ぐ姿を彼女の視界が捉えていたからだ。

彼女はきっと助かる。彼が彼女の命を繋ぎとめるはずだからだ。そう思うと安心して死ぬ事が出来た。生きる事を放棄しかけた人生が伸びに伸びて、最期に魔術師以外の、憧れである魔女で、それ以上に短い付き合いの友達まで出来たのだ。安寧と言うに等しい感覚だった。

ただ、それでも彼女には残念な事が幾つかあった。

「もっと、在姫と遊びたかったなぁ……」

その在姫が慟哭しながら斜蘭の死を悼んでいる時、国定が今にも泣きそうな顔で失意のまま在姫の元から歩き去る時、彼女は耳も目も満足に使えなくて、ゆっくりと暗闇と何かの繋がりを感じてその方向に意識を沈ませていった。

濁流に飲まれたはずの石火は、周りを取り囲んでいたはずの自然の暴力を感じられず、ふと目を開けた。
茶色の、自らの罪のような色に塗れてそのまま死ぬはずだった彼女は彼に救い上げられたのだ。
だから、目の前にはこの世で一番会いたかった人が居て、彼女は自然と口が動いた。
「荻、済まない。二度、いや三度も、命を助けられてしまったな」
子供のように素直な面持ちの彼女の、徐々に体の冷たくなり始めた体を荻は抱き締めていた。
「――喋るな、傷に響く」
抱き締めながら、心臓から流れ出る血を大きな掌で止めながら、彼は真剣な瞳で見つめていた。
「ハハッ、ダメだ。幾ら現代医療でも、細切れになった心臓は流石に元に戻らないさ。……あぁ、もう諦めたはずなのに、こうして君に会うと何かも惜しくなってくる」
瞼が緞帳のように閉幕を促す。
「私は、もっと君と居たかった。もっと君を抱き締めたかった。もう、抱き締めたいのに手には力が入らない。もっと君を心から愛したかった。復讐なんかしたくない、君ともっと一緒に居たい、……ずっと生きたい。あぁ、復讐の事を考えていた時は感じなかったのに、今は死ぬのがとても怖いんだ」
彼は彼女の一言一言にいつものようにゆっくりと頷いていた。
「あぁ、私は欲まみれで我侭で本当に嫌な女だ。君の思ったことを一度も満足させたことが無いかもしれない……、済まない」

彼女は口元から赤い血を吐き、瞳から未だ解け続ける氷の雫を零しながら訥々と語り続けた。

国定の槍捌きが余りにも俊敏だったため、穂先は無いにも関わらず、彼女の心臓は綺麗に半分に分かれていた。断面組織は完全に死んでいて、手術で縫おうにも心臓の複雑な筋組織がズタズタで再生は出来かねる事は明白だった。何よりも病院や集中治療室に運ぶような時間はなかった。

彼女自身の涙と死への思い出したような恐怖、そして着実に死に続けてぼやける彼女の視界の中、彼は覚悟を決めた精悍な顔をしていた。

彼は最後の彼女の言葉に、始めて首を横に振って否定した。

「大丈夫だ、君は必ず生きる。それが……、君が叶える僕の望みだ」

いつものように優しい笑顔で彼はそう言うと、彼女の残った片目を覆い隠した。

「……まさか？　やめろ……、君の魔術を使うな……、お願いだっ」

斐川　荻の魔術は人体を斬割する事が目的では無い。むしろ、その魔人を圧倒する肉体を作り上げた優れた、そしてそれを可能にした異常な程の医術が魔術だったのだ。

医術を通じて自身の肉体を把握する事で栄養バランスもコントロールして強化を図り、その人類の究極に近い肉体で鉄の斬術までを素手で成し遂げるのが彼の魔術である。通常なら練習で明らかに必要な肉体の余暇も無くす事で百％の時間を使って肉体への技の刷り込みを行い、二十代半ばで拳術だけなら魔人や拳王にも匹敵する技術を完成させたのだ。解剖学的に人体の壊れやすい場所と角度を学ぶ事で、人体を無刀でバラバラにし、時にはそれを元に戻す。故に、彼は先々日の国定との戦闘の直後でも、遊びの過ぎた斜蘭を電線を全速で走りながら弾き飛ばす事が出来、その次の日には海水浴が楽しめるほど人体のダメージを回復させる事が出来たのだ。

そして、今の彼の技術ならメスも何も無くても短時間で『心臓を入れ替える事』が出来た。

「石火、君をずっと愛している。僕の魔法使いの夢は君に託すよ？」

彼は一度言い出したら、頑固者でどうしても考えを変えない男だった。

義理の妹でも養うと決めたらロシアまで出稼ぎに行くし、魔法使いみたいになるために拳王に弟子入りする。決めた時には拳王自身に殺される危険があっても、ロシア軍の爆撃でも動かない。雪原で死に掛けの彼女を助けると決めた時に究極に近い生命体が眼前に立ちはだかってもドロップキックをする度胸があった。そして、彼女が復讐に生きると決めた時も、彼女を最後まで守るために自らの修行を投げ打って、一緒に生きると彼は決意していた。

そして、今度は本当に命と魔法使いになる彼の人生の根幹たる使命を打ち捨てて、代わりに彼女の命を拾い上げるのだった。

理由は説明するまでも無い。

だから「（そんな頑固な彼の最期の決意くらいは私から受け入れよう）」と、彼女は思った。

「……私も荻を愛しているんだ」

「うん」

額と瞳を覆う荻の手が震えている。当たり前だ。決意したとは言え、自ら心臓を引き摺り出したいとは思わないのが普通だし、それに伴う死を恐れない方がおかしいのだ。

それでも、そんな最期まで魔術師に見えないほど一般人みたいに普通で、ちょっとだけ魔人より強くて、少しだけ勇気がある彼に愛

されるのが彼女は嬉しかった。

「妹をよろしくね」

最後に少しだけ妬いてしまった。

本当に普通で、御節介で、彼女は少しだけそれが可笑しくて、愛しくて、それが最後だと思うと、止め処なく涙が零れる。

「……むろんだ。『私達』の大切な家族だからな」

「ありがとう、僕は、君と出会えて本当に良かった」

その言葉と僅かな唇の感触を最後に、彼女は意識を失った。

16. 焦熱（しょうねつ）（2／2）（後書き）

——The sound of rain was like pain.

They are laughing at pain which came from remained recollection.

Thirst scratch thou throat.

They are laughing at the scarcity.

17．幕間　鉄囲線五（前書き）

――雨音は痛みのようだった。
思い出が残す痛みを奴らが笑っていた。
渇きだけが喉を掻き乱す。
その渇きを奴らは楽しんでいた。

17．幕間　鉄囲線五

雨の中、駅の売店で売っているような安い透明なビニールの傘を差して、二人の怪しい男が居た。
二メートル近い、黒いローブを白い素肌の上に直に羽織った大男に、その横にへらへらとした笑顔を見せるサラリーマンのようなスーツを来た若い男が居た。

その男の見つめる先には、荻が、荻だったものが河川敷で膝をついて座っていた。
彼の右目と丸太のように太い右腕は無く、鍛え上げられた高密度な上半身には心臓のあるべき場所にポッカリと穴が開いていた。
その足元には半分に分かれたズタズタの小振りな心臓はあったが、その持ち主の姿はなかった。

「どうやら彼、右腕と右目を彼女に挙げてから心臓を移植したみたいですね」
「そりゃ、先に心臓を挙げたら残りのパーツは挙げられないからな。まぁ、片手、片目で大手術を短時間で終わらせたのは彼の驚異的な集中力だろうね。【予測】どおり、彼女は自分の心臓は置いていったみたいだな。過去を捨て、自らの新たな生を得る、か。魔術師らしい」

本来なら有り得ないことである。心臓を取り除いても、十五秒以上意識を保って生き続けた記録は医学上はありえる。しかし、それはあくまでの低次元での肉体の反応であり、人間的な、意志を持った活動が出来る事など到底有り得ない。ましてや、自らの心臓を自分の意志で引き千切り、他人に渡すなどは狂気の沙汰である。

しかし、彼はやり遂げた。そこには彼女に生きてもらいたいと言う一身の願いがあり、同時に綿に包まれた中にある針のような、武人らしい剛毅な覚悟と彼女に対する強い芯のある想いがあったからだった。

故に奇跡が起きた。

彼は自ら瞳を抉り彼女に与え、腕を切り取り彼女に取り付け、最後に自ら心臓を取り出し彼女に詰め替えたのだ。

その正座した膝の上に置かれた血塗れの左手には一種の、愛故に形作った狂気があり、同時にそこには神聖な、人として何か感動を与えるような、静けさがあった。

黙した彼はまるで淡々と正座をして禅を組んでいるようで、死んだようには思えないほど穏やかで晴れやかな顔だった。

たった今、心臓を愛する相手に与えたとは思えないほど、痛みの無い安らかな表情だった。

「……それにしても素晴らしい、彼は根性があるよ！　彼は誉むべき魔術師だ！　その心意気、いや、その愛ゆえの狂気、この最高の『魔術師』である私が評価し、感動してやろう！　確かこの国の、今代の総理大臣も言っていなかったか？　痛みによく耐えた、とな」

その彼だった骸にパチパチと拍手を巨大な黒い男、脱皮者が送り、それに申し訳程度にスーツの男、鞍路慈恵は続いた。

不可視の神聖さを二人のイカれた男が穢していた。

冒涜を文字通り、自らの興（きょう）のために行っていたのだ。

悪を行いたいが故に神聖さを汚す。悪のための悪があった。

目的も、意味も無く、ただ純粋に悪になるための行為であり、在り方なのだ。

「……それにしても計画は怖いくらい【予測】通りに進んでいますね？」

「当たり前だ。この私が千年間も考えたのだぞ？　あの自称『大魔

女』の邪魔さえなければもっと早く始められたのだが、まぁ、『彼女』を『人質』に取る事で上手くいったようなものだがな」

彼は白い歯を見せながら、ゲラゲラと、世界で隣に居る男くらいしか心地よいと思えないような黒い笑い声を挙げた。

「騎士もどきのアレはどうなっているのでしょうか？」

「私の居城にいる。魔人が来た時に捕らえて、魔人を君に渡す手筈だ。その後はどうでも良い。儀式に滞りさえなければ好きに弄って構わん」

「そうですか……、橋の上の彼女ですが、僅かながら蘇生処理は施しました。予定通り、魔女の戻り坂まで運び、それから『心臓』を摘出します」

「魔人が左手を爆砕した時は冷や冷やしたが、私の読みどおり、風の揺らぎで僅かにそれて心臓は無事だったようだな。逆に惜しいのはあの復讐鬼モドキの心臓だ。割れたのは惜しいが、あれだけ思いが強ければ組織片でも多少は使える。拾っておこうか。逆月の宴、その前日まで彼女が見つからなければ、儀式はセーマンで行う」

「……それなら後は私の『心臓』だけですね。で、どうしますか？魔女（彼女）自身は？」

黒い男は敢えて、答えは既に決まっているのに、意地悪くそれでも考えるような素振りをした。

黒い影に白い、かみそりのように整えられた歯が下弦の月のように見えた。

「そうだな、君の魔術で魔人を捕らえて、彼女に彼の事を教えてあげるのはどうだろうね？　喧嘩別れしたままは可哀相だろ？　絶望する前に彼の事で希望を残さなければならないからね。絶望だけでは闇は出来ない。適度な希望の明かりがあるからこそ、その後の絶望がより暗くなるのさ」

「ふふっ、彼方は本当に弟子思いですね？」

「一度も魔法を教えた事が無いけどね」

げらげらと嫌悪感を煽るような二つの声が木霊した。

17. 幕間　鉄囲線五（後書き）

——Well, let me tell you one folktale.

Once upon a time, one infant who was like a beast lived in some mountain.

He lived alone in the natural dark, fed on beasts, and the ys were followed as it like his shadows.

Even though bear could not grapple with his force, he was top of lives in the mountain.

18．大焦熱（だいしょうねつ）（前書き）

――一つ、物語を聞かせよう。

昔々、ある山に獣のような子供が住んでいたそうな。
彼は自然の闇に生きて、獣を主食とし、獣達は彼の影のように随っていた。
熊でも取っ組み合いで勝つ事はなく、彼は山の王者だった。

18．大焦熱（だいしょうねつ）

八月一日

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

「……あ」

何かが内側からドンドン失われていく。

それは自制する事すら出来ず、ただただ垂れ流されていた。

誰にも止める事も出来ず、まるで濡れたスポンジに許容できないほどの水が含まれ、そこから溢れ出るようだ。

満たされていたはずの身体が周期的に、時に突発的に、零れ落ちる。

一滴。

二滴。

三滴。

一滴ごとに自らの境界から外へと、取り入れたはずの一部が解放されていく。

雫は何時の間にか流れとなり、大河となり、怒涛の洪水となる。

洗い濯ぐ物ではなく、氾濫による肉への反乱。

私は徐々に自分の一部を失っている。

しかもそれは与えられたものだった。

その喪失によって、私は渇きを覚えた。

求めるもの、得るもの、その大逆に拒むもの、失うもの。

私の内側は何も求めていない。

そう思わないと、自らの怠慢を認めてしまうようで怖い。

恐怖は自らの変化。未知への絶望的な俯瞰。

しかし、私の本性は留まる事を許さない。

いつかは、いや、今ココで、私は真実を認めるしか無い。

絶望は何処にでもある。例え、それが『立ち上がる』のに豪い努力が必要であってもだ。

立ち上がるためのそれは、人が文明社会の中で多くが打ち捨てた、本能とでも呼ぶべき代物なのかもしれない。

昔の、何と言う名前かは忘れたが、哲学者は言った気がする。

本能とは、火事の時に食卓の昼食を忘れ、消した後の灰の上で飯を食べる事だと。

私はきっと複雑な理解よりも前に明らかに分かっているのだ。

現状を維持しているのが如何に無意味な事なのかを。

それを認めないのはただ単に複雑さを求めようとしている小賢しい生き方なのかも知れない。

そう思うと、私は腹が立ってきた。

だから、瞳を開けた。

「暑ッッ苦しいっ！」

あまりの寝苦しさとダラダラと止め処なく流れる『汗』にタオルケットを跳ね除け、ベッドから飛び降りる。

枕元に置いてあったタオルを取ると、それで半ばやけくそ気味にゴシゴシと顔を拭いた。

消し炭のついたカーテンを跳ね除けるとそこには一面の青い空――、ではなくブルーの工事用のシートで崩れた窓枠が覆われていた。

「……そうだった。まだ家、直ってないんだった」

どんよりとした重たい入道雲がシート越しに見えたような気がした。

事件から八日。

あの日の爆発は館のガス管が老朽化したための爆発事故と言う表向きの原因となった。

ジョウチョーは季堂ツィンタワーでの爆破テロ事件（と言う事になっている）以降、そのまま夏休みに入って偶々私の家に泊まっていたために、爆発事故に巻き込まれた事にさせてもらった。
私はたまたま風呂側に居たために、構造上無事だった事になっていた。まさか、魔法で直したとは学校には言えない。
あれ以来は事後処理のために曲さんにも会う機会も滅多に無く、常寵の携帯に来た連絡に寄れば、その後急遽正式に組み込まれた亡霊騎士の葬査展開と交戦経験を踏まえた陣頭指揮で忙しいようだった。
そして、今日は少し早い時間にジョウチョーの陣中見舞いに行く予定だった。ん？　陣中見舞いで合っていたっけ？　入院見舞いだっけ？
斜め後ろを振り返る。
「ねぇ、どっちが正しいだっけ……、なーんて、訊く相手がいないから分からないよね」
朝っぱら狂っている調子を正すために顔を洗いに向かった。

「よく来てくれたね。在姫、君の怪我の方は大丈夫かね？」
と、まるで怪我人に見えない元気な様子で、雑魚寝をしながら本に目を落としていたジョウチョーは病院のベッドから身を起こした。
起き上がった瞬間に僅かに顔を歪ませるが、意外と気丈に振舞っている。空元気では無いと良いけどね。
一人部屋には何時の間にか病院の本を殆ど読破したのか、三日前に訪ねた時とは違うラインナップの塔が幾つも積みあがっていた。本を読むくらいの元気はそこそこあるようだ。
「私は全然平気よ。家帰って、怪我専用の霊薬（エリクサ）飲んだり、傷口の軟膏塗ったりしたし、病院にも行って診てもらったからね」

手持ち無沙汰なので、クラス委員長の鳥越（トリコシ）　九楼（クロウ）が代表で持ってきた、彼女へのお見舞い品のりんごを、椅子に腰掛けて剥く事にした。

鳥越君は名が体を表す通り、心配性なだけはある。全身麻酔が切れ、ジョウチョーが普通に寝起きが出来るようになると彼は直接来たようだった。

ちなみに私に対しては……、

館の爆発事件から五日ほど経って、壁を直す大工作業中の私の家に鳥越君から電話が掛かってきた。

『も、もしもし、九貫さんの御宅でしょうか？』

何やら後ろの方からクラスの男子達の声が聞こえた。たぶん、鳥越君が代表で電話を掛けてきたのだろう。

それにしても（よし、今は傷心中だ。その事を念頭において好感度メーターを上げるんだ！）（敵要塞、クヌキバラードに侵入し、姫の心を奪還しろ）とか妙な盛り上がりを見せていたようだ。一体電話一本でどれだけ楽しんでいたのだろう？

少し呆気に取られて閉口してしまったが、口に咥えていた釘を吐き出すと、片手にトンカチを持ったまま、応対をすることにしたのだ。

『はい、そうですけど』

『在姫さんはご在宅でしょうか？』

『私ですけど、何か御用ですか？』

『うぁ、え、その、お怪我は大丈夫でしょうか？』

（馬鹿訊く事が違ぇだろうが！）（焦るな、お前には男子二十二人の魂が付いている！）などと言う意味不明の野次が聞こえていた。そう言えば鳥越君は赤面症で、私と目が合ったりするとすぐに顔が真っ赤になる。他の女の子では無いけど、一体どう言う事なのだろう？　取りあえず、緊張させないようにゆっくりとした口調で、『

えぇ、別に大して目立った外傷はありません』と返した。
『そうですか……（よかった）』
（よし、そこだ。次のイベントへのフラグをすかさず立てろ！）
（セーブ機能はない。慎重に言葉を選ぶんだ。シュネーク。）と何やらよく分からない事で騒いでいるみたいで少しうるさかった。
もしかして鳥越君は罰ゲームか何かで私を不快にさせるために電話を掛けたのだろうか？　だとしたら、私はそれに乗れるほど気分は良くないので凄く不愉快だった。
『え？　今何か言いました？』
少しきつめの声で言ったせいか、電話口の鳥越君は『あの、その』としどろもどろになってしまった。受話器の口を押さえて『ねぇ、次はどう言ったらいいの？』と、情けなくも他の男子に助言を求めていた。……あのねぇ、たかだか女の子と話すくらいでここまで挙動不審にならなくてもいいのに。
一度、軽い咳払いで息を整えると、彼はこう言った。
『え、いえ、その、在姫さんが何も無くて良かったです』

私は何も無かった。
その代わりに失ったものが多過ぎた。
冷たいアスファルトに横たわる赤く咲いた彼岸花。轟々と流れる泥水に落ちた白百合。
そして、それを踏み荒らした鬼。

『……――　何も無かった訳ではないです。ジョウチョーが大怪我しました。双方、大事には至りませんでしたが、正直、私も傷ついています』
虫の居所が悪かったわけではないが、その時の光景がありありと思い出されて私は少し気持ちが沈んで、同時に腹が立った。
電話口の後ろの方では（しまったブラフかー！）とか（ロードしますか？　↓はい　いいえ）とか魔女の窯の中より混沌とした様子

で更に私の気分の悪さを煽る形となった。
『あ、あの、別に気分を悪くしようとしたわけでは』
『分かっています。ですけど、ちょっと今日はあまり話をするような気分ではありません』
『……あの、実は、僕は』
『もう話しは終りですか？　こっちも色々と忙しいので』
『はい、……ご迷惑掛けました、それでは』
相手側から通話が切れると、他人に八つ当たりしたのが逆に腹が立って、トンカチを投げた。お陰で無事だった最後の窓ガラスが割れた。

「ちょっと彼には悪い事したかな、とは思っているんだけどね」
「誰の事を話しているんだい？」
「別に何でもない。……そうそう、昨日、院の執行部が斜蘭とお兄さんの遺体を引き取りに来てた」
「……そうか」
その詳細を、ベッドを背もたれにしてニーベルンゲンの歌（ドイツ語版）を読む常寵に報告する事にした。

荻さん達は詳しくは知らないけど、院のある機関（何でも日本の闇殺舎と言う暗殺組織よりも有名らしい）では有名な三人組だったらしい。
佐武（サタケ）と言う偽名のような引き取り人が言うには院でも十本の指に入る忠誠と成果の持ち主の人達で、魔女狩りをするなどは考えもつかず、逆にショックだと語っていた。
彼らの遺体はそのまま院の方で霊気装甲の研究のために回されるような契約をしていたらしく、常寵の事もあって何とか出来ないかと交渉してみたが、無駄骨だった。
『院の支援や資金提供を受ける代わりに、研究のためにその身を死

後も捧げる事は規定になっています。それが出来ない場合には契約違反となり、他の家族の魔術師などが罰則を受ける規定となっています。彼らも死後までそんな事を望んでは居ませんでしょうし、分かっていただけませんか？』

と、終始そんな口調で、丁寧にそれでも頑として私の交渉に屈する事はなかった。

交渉の交換材料になるものの無かった私はそこまでで、まさか個人で巨大な院に逆らえる事が出来るはずもなく、膝を着くしかなかった。

『これも規定なんです。荻さんや蘭さんはその事を承知で、受け入れた上で院と契約しました。彼らの遺志を無駄にしないでください。誇り高い魔女の貴女にそれが受け入れられるか分かりませんが……』

結局、彼らの遺体はエジプトへと送還された。

執行委員の佐武さんは残りのメンバーである三枝先生の遺体を探すために残っているらしい。

三枝先生はどうしてしまったのだろう？

下流を流れ、彼女の遺体は何処へと流れたのだろうか……。

「兄の事は過ぎた事だ。私には過ぎた身内だった」

「ジョウチョー……」

ジョウチョーは珍しく、章も変わらない途中で読み止め、栞も挟まないで本の塔へと積み上げた。

「可笑しいな、幾ら身内なのに、それを家族愛と言う気持ち以上に愛してしまって、やっと気持ちに整理がついて信頼できる人に預けられるかと思ったら、その人は消えて、兄は亡くなってしまった……」

瞳を閉じて、点滴が抜けないように押さえながら横になる。

「私は滑稽なのかな」

そのまま自嘲気味な笑みを浮かべて「今日は、疲れたから寝るよ」

と言った。
私は彼女をそっとしておこうと思って、「んじゃ、よく寝て、早く元気な姿見せてね」と、そう言ってそのまま部屋を出た。
私に出来る事はこれ以上は何もないのだ。
出来る事、それは、本当に無いのだろうか？

病院の薄暗い廊下を歩くうちに、一週間以上前に一度だけ見た包帯姿の死神を見つけた。
「曲さん、お仕事は大丈夫なんですか？」
「あぁ、私は大丈夫だ。現場の連中と相変わらず反りは合わないが、まぁ、何とかやっている」
若原と言う名家に生まれた、いわゆるエリートの曲さんと現場の叩き上げの人達とは色々と意見が対立するのだろう。
事件は会議室ではなくて現場でとか何とか、って奴かな？
「ジョウチョーは今寝付いた頃なので、そっとしておいた方がいいかもしれませんね」
本に目を通す瞳が赤く充血していた。おそらくあまり寝ていなかったのだろう。
「そうか」
そう言いつつ、後ろ手に和木市の銘菓の袋を隠す曲さん。たぶん、この人は後々自分で食べるつもりなのだろう。
「そう言えば『あれ』以来から国定君の気配が無いけど、どうしたのかな？」
「……」

雨。去り行く背中。赤黒い幽鬼のような姿。
そこから前後に有った事は、ジョウチョーにも、誰にも言ってはいない。

「ここだけの真面目な話し、特捜室と足並みを合わせないといけな

い事態に陥りそうなのだよ。詳細は話せないが、相当厄介みたいなんだ。もし、彼に会ったら私の無線に連絡をしてくれ。周波数は１４６．３７、ジャミングコードはΦ、コードネームはベンダーで私に通じる。宜しく」

そう言うと、背を向けて病院の廊下を歩くうちに、彼女はその中に霧のように消えていった。忙しい最中にお見舞いにきてくれた事を後でジョウチョーに言っておいてあげよう。

しばらくは、変な事に巻き込まれたくないから、ボゥとしたいな、と思った。

―Ｓｉｄｅ　Ｃ―

曲は黒い霊柩車に似た死神専用の乗り物に乗り込んだ。

霊気装甲と組み合わせれば、その気になればマッハのスピードの出る乗り物である。課長クラス専用の最新の霊波探知機や電磁装甲結界発生装置、魔力妨害装置、はたまた前面のライト部分に吸血鬼を一発で焼却する強化紫外線放射機のついた戦闘機のような車だが、乗り心地は四年前、最後に座った学校の木製の椅子よりややマシであるくらいだ。

曲は無言で紙包みを開けて、和三盆をポリポリと食べ始めた。ちなみにそれは常寵への見舞い品だが、渡せないなら仕様が無いだろうと食べる事にしたのだ。

休暇中に、知り合いである季堂財閥の主に会いに行く途中に偶然巻き込まれた事件だった。

現場は、現場にしては珍しく、シルクハットを被った男以外ヤル気が見られないし、その男も定時なったら『新婚』と言う免罪符を掲げて帰ってしまう。

加えて、その上司のヤル気のない顔と言ったら……、

「どいつもこいつも！　気概を見せろッ」
ハンドルを備品と言う事も考えずに殴りつけてしまう。
そんな憤りはそれこれも、神秘院の遺体引取り人からのおかしな報告によって齎されたのだ。

『斜蘭の遺体は橋上でなく、魔女の戻り坂の手前、人払いの結界の掛かった林の中で、心臓を摘出されてみつかりました。また被害者側である魔女の報告にある三枝石火は見つからず、代わりに下流三百メートルで先月二十三日に病院に収容されていた斐川　荻の右腕、右目、心臓を無くした遺体を見つけました』

「……何なんだ。この事件は」

最初は魔女が襲われていた事件だった。だが、気付けば、何時の間にか魔術師の行方不明者の方が増えている。
七月二十日、ちょうど九貫在姫と国定錬仁が接触し、魔女の被害者が五人となったところでピッタリと魔女の被害は止まった。
そして現在、斜蘭と斐川荻、それ以外の『在姫と国定が撃退したはずの魔術師達を誰一人見かけていない』。
霊的な力で守られた政霊都市は霊紋など言うそれぞれの生物（時に交霊武装すらも）固有している指紋のようなものを一定の地域で調べている。魔女の被害と、その背後にある秘密結社である【アイオーン】の【脱皮者】以外のメンバーが判明して以来、出入りは厳しく調べられている。
地域から出れば、彼の霊紋は死神公社の神南支部へと転送され、今、都市内に居るのか居ないのか簡単に判明するのだ。
心臓を刳り貫かれて見つかった魔女五人と、同じ死因で見つかった斐川荻、斜蘭の両名の遺体に、摩壁六騎、保隅流水、三枝石火の三人の行方不明。そして、未だ活動を続けていると見られる鞍路慈恵。

摩壁六騎の最後の事後処理は彼女の兄弟子で、現在は師父にあたる双珂院　生羅が担当したようだ。彼曰く、事後処理後に誓いの魔法を掛けて和木市外に追放したと魔女協会に報告している。
だが、しかし、死体として見つかった彼ら以外は誰一人として、公社の葬査網に引っ掛かっていない。
彼らは、突然消えたのだ。

彼女はピラリと、神南支部のコピー機で刷った和木市全体の地図を見据えた。
「まず、摩壁　六騎はここ、和木市の西側に位置する坤高校のグランドで捕縛され」
キュポンと音を立てて、赤いマジックの太い方の蓋を取って丸を付ける。
「次にそのほぼ東、在姫の住居である戻り坂を越えて反対側のツィンタワーで保隅　流水は行方不明になると」
キュキュキュと音を立てて、ビル名の示された場所を丸で括る。
「次に斐川　荻の遺体が発見されたのが海際。北西に位置する太臥河の橋の一つの三百メートル下流」
河の印である線の横、ちょうど見つかった辺りに彼女は丸をつける。
「そして、彼女、斜蘭が見つかったのが坤高校と季堂ツィンタワーの間、よりも魔女の戻り坂は少し南よりか」
荻と同じく検討のついた場所を丸を記す。
「妙だ……」
青いマジックを取り出し、彼女は今度は『殺された魔女』の場所に印を付け出した。
「馬鹿な、……同じだ」
同じだった。坤高校、季堂ツィンタワー、太臥河の橋の下流、魔女の戻り坂、そして、この和木市に存在するもう一つの高校、ツィンタワーの北側、橋の東側に存在する神南高校。魔女の被害者も同

じ場所で殺されていた。
ただ、神南高校だけはまだ『魔術師の被害者』は出ていない。
ただ違うのは順番。魔女達は神南高校、魔女の戻り坂、太臥河の橋の下流、季堂ツィンタワー、坤高校の順番で殺されていった。
「まさか、次の現場は神南高校か？　……いや、重要なのはそれだけではない！」
そして、印にして始めて彼女は気付いた。青い五つとこれから赤丸の付く場所を含めた五つの二重丸はそれぞれが等しい距離関係にあったのだ。
「全て、現場が同じ距離にあるだと！　正五角形で形作られた現場。いや、【形が違う】。これは五角形ではない！　そうか、その中心は……」
その中心はビルが山を連ねた市街地、神南駅から十分ほどの距離だった。

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

しばらくは変な出来事に巻き込まれずにボゥと過ごしたいな、と思っていたのだが、病院を出て行くばかもしないうちに、今度は包帯ぐるぐる巻きの死神以上に変な人に会ってしまった。
「こんにちは。僕は戸上（トガミ）　七歩（ナナホ）と言う小説家を営む者です。失礼ですが執筆協力のために取材のお時間を戴けないでしょうか？　大した事ではないのでお時間はそれほど取りません。個人的な質問を拒否する一切の権利の保障、プラバシー保護の確実性は僕の小説家生命を掛けて誓うのでご了承ください。そこで出来れば、人以外の生命体との遭遇や異星人による拉致、異次元人の自宅への押し掛けや神話級の拾い物、もしくは未来人に機械生命体からの抹殺（ターミネート）から守ら

れるような経験、複数の呪いの対象になったり、地下帝国に投獄されたり、見た事の無い生物の居る無人島に漂着した生活の話、などのお話を聞かせていただけないでしょうか？」

読者への説明だか、今までの自分の体験談なのだか分からないような事を途切れも無くスラスラと言ってきたのは一人の男だった。百七十センチの後半くらいの高い身長。それに対してひょろい訳ではないが、頼りなさそうな、しっかりしない立ち方。柔和な顔、と言うか『ヘタレ』と言う言葉を体現したような情けない面の男が居た。洗って薄くなった空色のTシャツに濃い柄のジーパン、白いスニーカーと言う装いである。空色のTシャツには白抜きで”Ｕｓｅｙｏｕｒｗｏｒｄ”と小説家らしいような文句が書かれてあった。

私はため息を吐くと、『久しぶりに』会ったその男に言ってやった。

「久しぶりですね。七歩兄さん、一時的とは言え、義理の妹の顔すら忘れてしまいましたか？」

「……げ。あ、あ、在姫ちゃん。お久しぶりです」

「ええ、本当に。あんまり久しぶり過ぎて殴りたくなるくらいですね」

昔一緒に住んでいた仲と顔すら忘れる、取り繕った笑顔の義理の兄に心から悪態を吐いた。

義理の兄による熱心な説得をされ、長年に渡る久闊を暖めるべく病院に程近い場所にある『時計堂（クロックハウス）』と言う喫茶店に案内された。

硝子張りの床にはその中にショーケース状にズラリと大小様々な

時計が並んでいる。壁にも、天井にも、窓ガラスにも透かして時が刻まれている。

何処も彼処も針とそれを動かす歯車の音が響いている。

どうやらこの店は兄のお気に入りのようで、彼の母、もとい私の本当の師匠である大師『戸上　悠紀』、魔女名『アーキ・オリアクス・ゲヘン・ユキ・バシレイオス』から紹介されたようだ。

幼少の頃、私は母の旅立ちに合わせて大師の許に引き取られた。その間はしばらくは『戸上　在姫』として暮らしていた。その頃に大師から多少の魔法の基礎を習ったが、召喚術を習う直前くらいに彼女が死亡して、私は彼女の最後の直弟子である双珂院　生羅に魔女になるために引き取られたのだ。

つまり、彼は師父のようなおふざけ（本気かも知れないが）での義兄ではなく、れっきとした本当の義理の兄なのだ。

そして、対面に座す元義理の兄、七歩には魔女の、魔法使いの才能は無いらしい。

代わりに【輪廻外】と言う、要約するなら超常的なものに出会う確率が極めて高くなる運の悪さを持っているらしく、私が居た一年の間に二回人外の女の子に失恋と生き別れして、三回ＵＦＯに攫われて、五回も別々の妖精の国まで理由無しに拉致られているナチュラル不幸男なのだ。

どうやら先の話しを鑑みると、もっと余計な事に出会っているみたいだ。

ちなみにその不幸をリアルに書く才能もあるらしく、零細ながら『怪人同盟』なんて言う小説を出版してそこそこ売れているらしい。ところでジョウチョーがこの義兄を師匠と仰いでいるみたいだが、書き物自体はどうあれ、本人の方は安い店屋物の割り箸の割れ方よりも微妙な性格と成りのためにあまり素性と関係を明かしたくは無いものなのだ。見てくれは出して恥ずかしい人間では無いが、彼の経験が特殊過ぎる上に、それを魔法も魔術も何も無しに彼の悪運の

良さだけで乗り切っているために、大抵の人とは話が噛みあわないのだ。それ故に一般人並みの能力しかないのに異端視されているのである。

ちなみに彼の上にもっと性格的にも人格的にも行動的にもハチャメチャな兄である戸上（トガミ）　熾盛（シジョウ）なんて言うのが居るだが、彼は一体何をしているのだろか？

「そういえば、在姫ちゃんは学生だからアレでしょ？　もう夏休みだよね？　僕みたいな小説家は年中休みだか仕事なのだか分からないからさ。日々の感覚が曖昧なんだよね」

「で、七歩兄さんはここで何をしているんですか？　私はミルクティとカスタードパイお願いします」

喫茶店に訪れるのも久しぶりなので、師父にも最近会っていない事もあって、たまには甘いものを注文する事にした。

「あぅ、質問と答えが噛み合ってないよ。えぇっと、僕は最近少し面白そうな事件が起こっているような気がしたから、とりあえず市内を歩いてみる事にしたんだ。あ、店員さん、僕もいつもので」

犬も歩けば棒に当たる。七歩が歩けば事件に遭遇する。『七歩き八転び』とは一番上の兄の熾盛義理兄さんがよくよくそう言っていたが、言いえて妙だったし、本人もその状況に慣れているようだ。

長針のようなネクタイをつけたウェイトレスが注文を取って厨房へと静かに戻る。

「この間、ツィンタワーを歩いていたらさ。ケルト人っぽい顔した中年の甲冑姿の亡霊が空から落ちて来て、危うく鉄塊みたいな剣で斬殺されそうになったんだよ。近くに知り合いの死神さんが居なかったらやばかったね、うん」

……たぶんそれはビルの三十五階から逃げてきた人だと思うけど。

三度も同じ相手に負けて殺気立った亡霊騎士に殺されなかったの

は彼の悪運が強いとしか言い様が無い。
「まぁ、例のテロ事件って報告されている関係者に『遭遇』が出来ないから記事で書きようが無いし、どうしたものかなぁ、ってフラフラ歩きながらおかしなものに出くわそうと思っているんだよね。不思議な事に今回は収穫は零なんだよ。歩く方向間違えたかな？はぁ、このままだと来月の生活費が親父の借金で無くなっちゃうよ」
実は既に事件の当事者の内、犯人にも被害者にもドンピシャで出会って、被害者の方は目の前に居るだが、自分の事をネタにするのはテレビのタレントだけで十分なので口を噤んでいる事にした。
それにしても実はこの人、自覚していないだけで水面下ではもっと危険や事件の当事者に会っているのではないだろうか？

「と言うわけで仕方ないからね。僕は先ほど女子高生にあって色々と別の噂を聞いたけど、三つくらいしか収穫は無かったね。その一つは、白い蝶が願いを叶えてくれるって話しなんだ」
「ふーん、それってどんな話し？」
時間が狂っているんじゃないかと思えるくらい早く、ミルクティとカスタードパイを運んできた店員に会釈しつつ、食べながらでも暇潰しに彼の話を聞いてみる事にした。

「確か、公立の、神南高校だっけ？　襟や袖が緑に染められたセーラー服で原色の赤と緑のチェックのスカートの可愛い奴」
「ムグッ、なんで、そんな女子高生の制服ばかり覚えているんですか？」
思わず、私はミルクティを口から零しそうになる。
「僕の友達が制服マニアだから詳しくなっただけだよ。あいつの今の彼女も高校生らしいし、まったく犯罪だね。剣呑剣呑。まぁ、とにかく話を聞いてよ。そこでね、スーツ姿の男が校門の前にひっそりと立っていて言うんだ。『あなたの願いを叶えさせていただけませんか？』ってね」

そう言うと、彼は横に置いた車のセールスマンが使うようなトランクから、掌よりも小さい硝子の小瓶に入った白い蝶を渡すらしい。
アゲハチョウよりも一回り小さい蝶。間近で見れば醜く感じるはずの昆虫の外見が、僅かに人の顔のように感じて生理的な違和感が無いそうだ。瓶の口よりかは蝶自体は大きいはずなのに、どうやって収まったのか分からないけど、その蝶は生きたままでいるのだとか。

その蝶の入った瓶のコルクを開けたまま、願い事を口にしながら寝るとまず夢を見るらしい。最初はおぼろげだけど、段々それは自らが望んだ願いの通りだと気付いて、そしてその夢を見続けて、七日目で願いが叶うと言う話しらしい。実際、叶ったものは居ないのにその噂はどんどん広まっている。いわゆる、学校の教室で聞きかじった事のある携帯のチェーンメールみたいなものだろう。私は携帯すら持っていないけどそれは概念的には似たようなものだろう。努力をせず、僅かなメールをコピーして貼り付けるだけの労力で願いを叶えると言う下らない迷信に、魔術によって幻覚でも付加されたのだろう。

「それにしても、妙に瓶とかの描写が詳しいですね」
「えぇ、調査のために僕もその人から一瓶貰ってきました」
「って既に巻き込まれているのかよ！」
そんな私のドスのような鋭い突っ込みも何処吹く風で、彼はジーンズの小さいポケットの方からその硝子の小瓶を出した。

小瓶の中で、白い蝶がゆっくりと羽を広げている。透き通った檻の中で夢を叶える蝶、願望機が生きていた。
二本の触覚が蠕動しがら頭を巡らし、羽をゆっくりと上下させていた。

「……魔法、じゃないみたいね。魔力は感じない。でも、何か別の術式かな？　魔術？」

「不思議でしょ。まぁ、これも十分面白いんだけど、もう一つ面白い噂が合ってね。何でも、最近夏休みに入って、急に寝込む女子高生が出始めたらしいんだ。正確には、僕がさっき在姫ちゃんが出てくる前に病院で照会してもらったデータと合わせると八日前から六日前からだね。まず、五人の女の子が病院に原因不明の昏睡状態で収容されて、今では三十人くらいになっているのかな？　首筋か、何処かしらに『十字のような痣』が出来るのが徴候らしいね。病院は夏風邪の変種型ウィルスによるものじゃないかとか、異常気象に伴う身体の変化や社会不安による精神病じゃないかとか言っているね。偏見かもしれないけど大半の女子高生は社会不安なんて感じる子は少ないと思うけどなぁ。まあとにかく、医師も原因は特定はしていないみたいだね。でも、僕は思うに被害者はまだまだ増えると思う。おそらく『百二十四人以上』にね」

そう言いながら、コーヒーカップの縁に橋掛けにしたスプーン。それに乗った角砂糖にブランデーを少し垂らしてマッチで火をつけ、蒼い炎を揺らがせる。カクテル扱いであるコーヒーにスプーンの横合いからミルクを入れた。それって確か香りを楽しむものなんじゃ無いの？　ミルクでコーヒーの味を潰すのを見ると、砂糖漬けの師父を思い出した。

エグイと言うように思春期の豊かな表情で極度の甘党への嫌悪を見せつつ、「ところで、何で百二十四人なんて人数が分かるの？」と聞いてみた。

「簡単な事さ。『スーツの彼が配った小瓶が百二十四個以上』だからさ。患者、いや、『被害者』で運ばれた子の家には何処にもベッド際に『空の小瓶』があったみたいだね」

炎は消え去り、解けた角砂糖をそのままコーヒーに入れて掻き混ぜ始めた。

「まぁ、それ以上は調査とそれからの推測でしか僕は分からないし、

仮に因果関係が分かっても解決する手段がない。ただの小説家だからね。とりあえず、友達のそう言う関係に抜群に役に立って詳しい友達に声は掛けたけど、生返事だったからねぇ。はぁ、彼女の制服を拝みすぎて頭がおかしくなったのかな？　あいつ。ちょっと前に比べて殺気とか殺伐とした雰囲気が無いんだよね。でもそれで一般生活が送りやすくなっただろうから良いと僕は思うけど」

どうやら、制服好きの友人と怪奇系列解決専門の友達は同一人物のようだ。流石、義理兄の友人だけあってダメ人間のようだ。

「……言っておくけど、魔女に出来る事は限られているからね？　あてにはしないで」

「そりゃ当然だよ。元でも、家族を矢面に立たせる奴は居ないさ。でも、世の中には赤の他人の矢面に積極的に立っていく酔狂者も居るらしいね。僕の見解だとそういう人は自分の命を軽く見ているから、助ける人間の命を重く見過ぎて、助ける人以外の命の重さや自分自身の存在の重さを忘れる事が多いみたいだけどね」

「……」

「んー、ブランデーの良い香り。ちょっと話が脱線しちゃったね。やだね、年を取ると説教臭くなって。まだ十代ギリギリなのにこんな風に老成するのは良くないかな」

「程ほどの方が良いと思います。恋人とかが居たら口うるさいとうざがられますよ」

「あぁ、そうだね。そんな気がする。行（ゆき）にも爺むさいってこれ以上言われたくないから気をつけるよ」

そう言って、七歩兄さんはカップを口に含む。と言うか、あれだけフラれても恋人出来たんだ……。

……そう言えば、今、七歩義理兄さんは何か大事な事を言った気がする。

そうだ。あの日も、館が爆発する直前、『彼』は確かこんな事を話していたはずだ。

魔術師、鞍路慈恵。正当に人外へと転生させる研究を行う魔術結社【双頭蛇】の元一人。【磔刑】と言う魔術を使う男。欧州で千人以上の『昏睡患者』を作って、その魔術の発症から二日で衰弱死させている。

彼はその時、続けてこう言ったはずだ。

『奴が欧州で魔術を発生させた時に、その魔術を受けた者の体の何処かに『十字』の紋様（サイン）が刻まれる事から名付けられた』

もしかして、彼の魔術でこの犠牲が出ているのだろうか？

分からない。そうだとしても、ここまで被害が拡大されると私みたいな未熟者の魔女の介入では死神の葬査妨害になるだけだ。

身の程を知った訳ではないが、物事を何かするにあたって躊躇するだけの理由が夏休みになってから出来すぎたのだ。

魔女が森深くに結界を敷いて隠遁する理由も、何となく分かったような気がした。

きっと、魔法の限界を知ったから、自分の能力の限界を知ったから、その無力感に溺死しないように、きっと人から遠ざかるのだ……。

テーブルの下で、軽く無力な拳を握った。

私は何も出来ないほど、無力なのだろうか？

「そうそう最後の噂だけど、この一週間の間、君が住んでいる戻り坂の辺りで、甲冑を着た男と槍を持った傷だらけの少年がずっと戦っているんだってさ」

「なんですって！！」

あまりの大声に、しかも魔力も何時の間にか込めたせいかお皿とコップが砕けていた。
七歩兄さんは木っ端微塵に砕けて取っ手だけになったカップを持ったまま、フルフルと生まれたての小鹿みたいに震えている。
無表情なだけにそれが、逆に本気で怖がっている様子に拍車を掛けていた。
その無表情な顔のまま、取っ手だけで機械仕掛けに何度も飲むような仕草をしている。
むろん、カップは砕け散って、中身は台いっぱいに広がっているので飲めるはずが無い。
短針のようなネクタイをした店員さんが慌てて台拭きを携えて、店内は一時騒然となった。

二杯目のコーヒーが来る頃には七歩兄さんの震えも納まっていた。
「一週間前から彼らは戦っているらしいね。決まって夜、人が寝静まる頃に彼らは戦うらしい。彼らは武人らしく、コンビニに行こうとした人が居るとちゃんと止まって間を空けて、彼が逃げるまでどちらも手を出さないらしい。変な話しだよね。たまたまそこでランニングしていたランキングにも載るボクサーの人が一昨日の夜に見たらしいけど、少年の方がかなり苦しげだったらしいね。片腕のまま、大人でも振り回されるようなドデカイ槍を振るうんだけど、その騎士には圧倒されっぱなしなんだよね。でもさ、そのボクサーの人が言うには、気迫、って言うか、『こっから先は通さんぞー』みたいな何かを守るような気合が見えたんだって。不思議な話し、それの気迫だけで騎士が何度も攻撃を躊躇したんだってさ。その人も今度全国三位のランカーと闘う試合直前でナーバスになっていたんだけど、我武者羅になるのも大事なんだなーって、立ち姿だけで感動させられたんだって。不思議だな、戻り坂なんてもう在姫くらい

しか魔女は居ないでしょ？　一体、その侍の少年は誰を守ろうとしていたんだろうね？」

そんな事は決まっている。言うまでも無く、彼は約束に忠実で居ただけだったのだ。

「昨日、僕はそれらしき人物を探しに行ったけど、結局会う事は出来なかったな。どっちかはもうやられちゃったのかな？　って、在姫ちゃん、あれ、ど、何処？　ふむ、入り口のドアは開いている。と言う事は……。ぼ、僕の奢りなんですかー！　ちょっと、勘定！　家族間でも明朗会計！」

彼の全ての言葉を聞く前に私は駆け出していた。

私は、馬鹿だった。
彼の必死さを全然理解していなかった。
彼は、傷つく事も、再び死ぬ事も恐れずに今でも戦っているのだ。

能力の限界？
無力感からの逃避？

馬鹿な事を言うな。だって、元にそんな苦しみを千年続けた男が

未だ私を守っているじゃないか！

謝らなきゃ。

一言でも、彼に伝えなくてはいけない。

一週間、彼はどんな気持ちで、坂の下で立ち続けたのだろう？

一週間、彼はどんな気持ちで、坂の下で守り続けたのだろう？

一週間、彼はどんな気持ちで、坂の下で待ち続けたのだろう？

背中からじゃなく、真正面から、色々と伝えなくちゃいけない事がある。

中途半端に、誰も彼も幸せになろうと帳尻を合わせようとして果たし切れなかった自分と、真剣にただ私のためだけに守り切って、未だ立ち続ける彼、国定。

国定　錬仁。

私の覚悟なんて霞んでしまうくらい、彼は真剣だった。何よりも子供のように無垢だった。人に始めて懐いた獣のように純粋だった。そして、約束を果たすために孤高だった。

そして同時に、今私は気付いた。

彼の事を国定と呼ぶばかりで、ただ一度も名前で呼んだ事が無い事を――。

何故だか、その事実が悲しくて、涙が溢れ出そうになるけど、堪える。

まだ、泣いちゃダメだ。

いや、後でも泣いちゃダメだ。笑ってやる。アイツの、『錬仁』の前で飛びっきりの笑顔を見せるまでは泣いちゃダメだ。

「待ってなさいよ、ポンコツ魔人。勝手に死んだら、許さないんだから！」

陽炎を突っ切るようにアスファルトの道を我武者羅に走った。
目指すは神南高校の校門、あそこに魔術師と亡霊騎士と、魔人はいるはずだ。

―Ｓｉｄｅ　Ｃ―

曲はただ一人で、敵の魔法使いである脱皮者の居城と思われる場所を詮索していた。
彼女の知識では五角形、いや街全体を形作る巨大な図形は魔法陣。儀式によって何かを成す為のものだと思われた。
いや正確には五角形はただの外側の殻に過ぎない。
魔女の殺害は神南高校に始まり、魔女の戻り坂、太臥河の橋の下流、季堂ツィンタワー、坤高校の順番で行われていた。
そして、行方不明の魔術師達はそれぞれ坤高校に始まり、季堂ツィンタワー、太臥河の橋の下流、魔女の戻り坂、そして、神南高校で締められるようだった。
それぞれの点、それを結んだ時に、驚くべき図形が現れた。

五芒星。

その昔、陰陽道と言う魔術の一派の鬼才、安陪晴明がセーマンと

呼ばれる星型（☆）、五芒星とも言われるの呪術図形を生み出したと言われている。

剣指（けんし）と呼ばれる、伸ばした人差し指と中指で『バン・ウン・タラク・キリク・アク』と真言を唱えながら形作るものだ。

地図上と同じように、五つの頂点はそれぞれ自然界を概念化させたものと見なされる。

土、金、水、木、火の五つが象徴である。

土に始まり、金（金属）が土より堆積して生まれ、金が結露し水が生まれ、水が木を育て、木のより火を燃え上がらせ、火の灰から土を作る一つの円環を成す。これをそれぞれの特性が最も生き合う事から相生（そうしょう）と呼び、この繋がりが外側の円、正五角形を作り出す。

その真逆に、土が水を止め、金が木を切り倒し、水が火を消し、木が土を縛すること、これを生きる事の反対に停滞、それぞれの属性の削る死を意味する事から相剋（そうこく）と呼ばれた。そして、その形は正五角形のそれぞれの頂点を結んで出来た星の形をしているのだ。

これほど巨大な、都市丸ごとを殆ど覆う術式で死神にも悟られずに書いたのは始めての事だった。しかも、死神が管理をする政霊都市の内側で、である。

いやむしろ、膝元にあるからこそ灯台下暗しと言ったように、術者は計画的に、そして、それ以上に大胆に呪術図形を作り上げたのだろう。

本部の死霊課の記録によれば、六百年前に大魔女・戸上　悠紀が打ち砕いた、正体不明の魔術師が同じような計画をしたはずだ。

確か、今回追っている亡霊騎士。テンプル騎士団の騎士団長、ジャック・ド・モレーと共に処刑された騎士長の一人、ガーブリエル・オギューストもその渦中の人物だったはずだ。

彼らは当時から生きる敬虔な信徒の『吸血鬼』達の一派の調査に寄れば、当時のテンプル騎士団の指南と儀式を司る教会司祭長補佐を行ったヨハネス・ウルベスと言うのが怪しいらしい。そして同時に詳細に調べた結果、なんとその男はテンプル副騎士団長バネッサ・

バシコフとも名も変えて同時に騎士団内部でも暗躍していたらしい。ヨハネス・ウルベスとバネッサ・バシコフの二人は同一人物で、それは東方の魔術師ザイン・ウロボロスと自ら称する男によってテンプル騎士団は崩壊を起こしたらしい。つまり、ヨハネス・ウルベス、バネッサ・バシコフとザイン・ウロボロスの三人の男は全て同一人物だったのだ。

敬虔な活動の裏で魔術師は異端審問を行い、その異端者の身体で様々な魔術を履行していた。

つまり、彼は自ら指南した教義を自ら行い、それを全て、自らの所属する団体の責任にして、その国に処罰させて自分はトンズラをこいたのだ。

彼の異端審問で膨れ上がった騎士団の私有財産目当てで国は動き、取り潰され、搾取され、無実の団員の殆どはガーブリエルと共に処刑されたのだ。

彼らはその魔術師が行っていた魔術を証拠にされ、闇に葬られたのだ。

その魔術師が最後に、仕上げとして異端審問に似せて同時に行っていた儀式も今回と同じ方式だったはずだ。

心臓を抉り、それを使って築き上げた五芒星の呪術図形で『何かを行おう』としていた。

ただその時はセーマンを欧州のほぼ全域を対象にしたため、その当時に欧州にぶらり途中討伐の旅を行っていた大魔女に計画をあらかたブチ壊されたらしい。

それ以降、彼の消息は掴めておらず、魔女に殺されたとか、逆に弟子になって助かったとか、日本まで実は来ているとか、色々と噂されているらしいが、それ以降は足取りを消されたために詳細はまったく不明となっている。

とにかく、セーマンは効果範囲とそのための呪術式を描いた内部に属する生贄の対象を広げるものとして使えるのだ。実際は小さな紙片に掛けるほどのモノだが、それを作り出した安部晴明の様々な

補正の入った強力な術式の理論では都市を丸ごと包むのは容易い事の様だ。それは京の街並みが作り上げた霊的な都市配置が彼の理論を物語っているのである。無論、そんな事を正確に成し遂げるのは彼本人くらいでしか有り得ないのだが、どうやらそれをやってのける天才が他にも居るようだ。

しかも何故か今回は二度、霊気装甲のまったく無い空の身体の魔術師の心臓と魔法使いと魔女の心臓で、星型のみを作る外側の円の無い、相生のまったく無い相克のみの図形を二度も、反対側からそれぞれ作り出しているのだ。

それの真意は分からないにしろ、彼女には何処にその儀式の張本人が居るのか分かっていたのだ。

さて、何故彼女がその図形の中心に居るのか？

それはセーマンは口伝によると『五芒星の中心に点を打つ』と言うのだ。

概念の中心にして、力点の中心。

五つの大自然の霊気装甲による力の流れの最中でありながら、同時に特異点として介在する奇妙な場。

それが、このビル街の中だった。

神南町駅付近は大都市では無いがビジネスビル街で構成され、近代的な町並みを作り出している。

駅前にパチンコ屋と言うのはもはや仕様のようである。あれほど、堂々と違法のはず賭博（内実はパチンコ屋の敷地に『偶然』ある質屋での換金行為）をしているのは日本が狂っている証拠なのだろう、と生真面目な公務員らしく彼女はそんな感想を思った。

路上は地方都市なりにスーツ姿のビジネスマン達が革靴を削って

闊歩している。
その中をこんな茹だるような雑踏の中心を、上半身包帯グルグル巻きに黒い半纏と言う奇妙な格好でありながら彼女には誰一人として視線が向けられていない。
それは視線遮断と言う魔術の類であり、誰もそこに意識を向けることが出来ないのだ。それは眼球を通じて観測者の脳みそにそこに人が居ると認識出来ないようにする事で『人が見ていない』のと同じ状況を作り出すものである。ちょうど、本や漫画を真剣に読んでいると横に人が居ても気付かないのと同じ理屈である。

そして、彼女は同じような魔術がある付近一帯に掛けられている事に気付いていた。
道行く人、それ以外の視線が彼女とそれ以外のビル間の一点に向けられていないのだ。
暑苦しい天気のためか、時折立ち止まりひぃひぃ言うような恰幅の良い男性が居るが、その彼がその一点に視線を向けようとすると何の気紛れか、その方向には向かずに、わざわざ太陽に顔を向けてポケットからハンカチを出して汗を噴出すのだ。
それと同じような行動をしたのが、今までその場所に六人。統計上のサンプルとしては少な過ぎる方だが、偶然にしても太陽に顔を自ら向けて日焼けを促進させる営業の人達は居ないと思われるので、確実に考えられるのは、その統計を操作する何かの必然があると言う方が結論が早いのだ。
明らかにそこは、魔術師や魔法使いが嗜む、魔術が掛けられた場所だったのだ。
実際、魔女や魔法使いの人口はそう多い者では無いが、霊的な優位性などから指定政霊都市へと人口は集中しやすい。
おそらく人数は十万人に対して一人ほどだ。しかし、政霊都市による偏向が起こり、一つの都市に潜在的な者も含めて二百人ほど居る事はざらである。

彼女らは闇の隙間に佇み、その塒（ねぐら）と存在をひた隠す。
彼女らの塒は廃坑や廃校、使われなくなった駅舎、殺人現場や行方不明者の多いマンションなど人があまり来ないような場所が普通だが、まれにこのような街のど真ん中を操作をして人の出入りを制限している場所があるのだ。
彼女はビルとビルの谷間、死の谷を髣髴とさせる場所に同じく死の象徴である半纏を揺らして入り込む。
そこは四方を城壁のように囲んだ要塞のような場所だった。
聳え立つコンクリートの壁。そこはつい最近何かの戦闘があったようで、砕けたアスファルトと強い霊気装甲の残滓、そして血の跡がそのまま残っていた。
彼女は慎重に、その都会の街に些か似合わない木造建築へと侵入する。
静かに敵に気付かれないように侵入する。
無論、これは礼状の無い葬査のために下手をすれば、減給、停職ものの処罰受ける違法行為である。しかし、この数日在姫達とのわずかな生活を通して、始めて、彼女は死神として役に立ちたいと思った。

彼女は以前在姫達に独白した通り、武人的な性格である若原でも下から数えた方が早い死神だった。それは若原でも珍しい女性と言う不利であり、同時に彼女には死神としては体術の才能に乏しかったのである。両親、特に武を継承する大本である父からは何も言われなかった。それは優しさで無く、彼女自身の存在に対する諦めに近かったように思えた。それからも家族に認められようと数々の武術的な努力をしたが、それは全て、若原と言う名前にそのまま帰っているだけに彼女は感じた。彼女自身の居場所は徐々に無くされ、死霊課と呼ばれる、本部でも零細の部類に属する役職に追い込まれたのだった。
だからこそ、世界規模で畏怖される魔人に認められ、魔女に頼ら

れた事は彼女の中で大きな変化だった。
友達の、私を認めた人の役に立ちたい。
だからこそ、彼女の手で犯人は捕縛しようと思っていた。
魔法使いの城に入れば思ったとおり、室内は呪術製品で溢れかえっていた。
壁一面に掛かる無数の儀礼剣（アゾート）、罪人の手を触媒にして強力な呪いを掛ける栄光の手（ハンズオブグローリー）が机に置かれ、人工魔人を作り出して陶器の瓶に封じたインプの小瓶が棚に並んでいる。扉の直ぐ横には体の形状を変化させる呪いの椅子、吸血鬼の血を注入する事で吸血鬼に変えてしまう石仮面が何気なしに置かれている。
そして、巨大な顎（あぎと）のように開いた地下室への喉。
そこに足を踏み入れようとして、何か奇妙な音がした。

慌てて鉞を構えれば、それはただの魔力仕掛けの鳩時計だった。
鳩は台座から離れて、天井をデポポプッポウソーと鳴きながら飛び回っている。

ホッとするのも束の間、彼女は構えたまま、暗く広がる暗黒の喉奥へと誘われていった。

それを闇の奥深く、石仮面に取り付けた小型監視カメラから眺める男が椅子に身体を預けていた。
煌々と光る液晶ディスプレイが男の祭壇のように白い肌を照らす。
「ようやく来たか、【予測】どおりだが、予定より二十秒早かったな」
男が哂った。

―Ｓｉｄｅ　Ａ―

馬鹿みたいに突っ走って何時の間にか市内を半分横断し、神南高校に辿り着く頃には遅まきの夕暮れが血のような赤色を作り出していた。

足は鉛のように重たく、身体は急に動かしたせいでギシギシと軋む。

それでも夜に追いつかれないように駆ける。

ただ駆け続ける。

赤が徐々に色濃い紅を帯び始め、ついには星の光も弱弱しく、月明かりも無い夜の帳（とばり）を下ろした。

確か、今宵から新月が始まったはずだ。

月は古来より魔の象徴であり、それを受けて満月で狼男が遠吠えしたり、魔女が儀式を行ったりする。

しかし満月に対して、朔月とも呼ばれる月明かりの無い夜は、殆どの場合は魔に属する儀式事は行われない。一般では月の満ち欠けが魔力にダイレクトに作用するように言われているがそれは違う。むしろ逆なのだ。溢れ出るような魔を塞ぐのが月の役目と考えられている。この新月に何らかの儀式を行えば、魔はまったく反応しないか、トラックの超重積載のようになって自ら潰れる。つまり、自らの限界を超えて、身体を破壊してしまう事があるようだ。

つまり、新月の夜は何が起こるのか誰にも分からないのだ。

そんな時にも関わらず大胆にも、校内をグルリと平気で人払いの結界で囲んでいる魔術師が居た。

熟練の魔法使いでも、朔月では魔法が失敗すれば、力の元であり同時に魔に対抗する霊気装甲が防御反応として身体を守り、全身が焼かれたようになる。下手すれば魔法どころか、日常生活の使い物にならないような身体の状態にもなるのだ。そして、その抵抗力す

らない魔術師が失敗すれば、何らかの静電気のような蓄電作用が体内に起こり、何かの拍子に点火、プラズマ融解を体内から起こすらしい。いわゆるオカルト雑誌で言われる人体発火現象も、超能力の暴走よりはむしろ、知らず内に魔術の儀式手順を行い、精密な操作も知らないために出来ずに死んだ潜在的魔術師の末路なのだ。

学校の柵に沿ってその横に止められた白いバンを通り過ぎ、校門を潜り抜ける。むろん、校門の敷居を跨いだ時点で彼には気付かれたはずだ。

だから、堂々と噛み切り痕のついた親指を食い千切りながら、召喚魔法の準備をしておく。

魔女の血が濃く、決意する。

鼓動が、戦のための銅鑼の如く打ち乱れる。

呼吸を整えて、前を見据えた。

ただ広い、寂しい校庭には、一人の男と奇妙な柱が立っていた。スーツ姿の男。セールスマンのような格好だが、その張り付いたニヒルな笑みは営業向けよりもその横に置いたトランクに核ミサイルの取引契約書でも入れた武器商人の方が似合うような皮肉れた面だった。

その柱は斜めに立てられていて、そこから左右に翼を広げるように飛び出たもう一つの木に錬仁が釘で手足ごと打ち付けられていた。だが、左片手だけが無いために、彼は右手だけを広げ、手首に釘を打ちつけられていた。

それは不自然な磔（はりつけ）にしか見えない。

その身体には蝶になる前の、人面の白い蛹（さなぎ）のような生き物やニヤけた人面の白い芋虫が数十匹、それこそ彼の身体を覆うように這いずり廻っていた。

「錬仁ッ！」

私の声に、ピクリとも彼は動かなかった。

そんな私の様子を男は声を押さえて笑いを堪えている。
一つ一つの動作が神経を逆撫でする様な行動だ。
「おやおや、仮とは言え、私の居城に来たのですから主への挨拶の一つでもしたらどうでしょうか？　姫君」
私の名前を掛けておちょくって言っているのか、大業そうな、大げさな仕草でサラリーマン似の男、外国人であるかのようには両手を肩の少し下辺りに置いて竦める。
「下賤な者に名乗る名は無いわ。魔術師・鞍路慈恵」
苦々しい顔を向ける私に、一度大きく、それは面白いとでも言うように目を見開いてから、
「そう、その通り、この私が【磔刑】の鞍路慈恵ですよ。くぬきの木の魔女、九貫　在姫さん」
胸に指先を当ててそう言った。
「本日はどう言った用件でしょうか？　貴女の願いを叶えたいのですか？」
「恍けるのは態度だけにしなさい。その柱の男を解放しなさい」
その言葉に鞍路は首を傾けながら、同じ方向に「くっ」と唇を顔半分だけを不自然に吊り上げて笑う。
「面白い冗談ですね。守られる魔女が敵の前に出てくるなんて、愉快過ぎですよ。彼方には喜劇女優の才能がありますね」
僅かな抑揚を付けた言葉は詩のリズムのようで、それは感情を動かすものだ。
動かす感情は激情。効果的に人の心を付け入るような、嫌な言葉使いだ。
「……この魔術は一体何なの？　答えなさい」
男のペースに巻き込まれないように、私は質問の矛先をダイレクトに変えた。
その反応に「ふーん、そう言う反応、いや、戦術ですか。彼のお陰で成長、いや、思い出したのでしょうか？」と言うと、悠々と片膝をついてスーツケースを開けた。

その動きに身構えるが、そこから出てきたのはあの蝶の入った小瓶だった。

「此処にご足労した御礼に教えてさしあげましょう。これは私の発明したものです。これは『幸せへの欲望』に『寄生』する生物（プログラム）なんですよ。人の欲望は果てしないものです。幸せを生み出す金、土地、地位、名誉、愛、もっと本能に根ざした身体、それ以上の形而上の人のそのもの、あるいはその人間の願う幸せの概念そのものにこれは寄生します。欲望に寄生する事で、その所有者に幸せな夢を見させるのです。そして、所有者自身が現実と判断すれば、夢と現実の等価式を作り出し、そっくり入れ替えるのです。この蝶は鏡の作用を持つのですよ」

鏡の魔術。おそらく白昼夢を見させる魔術は幾つか聞いた事はあるが、幸せだけに限定する魔術も珍しいものだ。

「不思議そうな顔ですね。何故そうするのかといえば、人は頭の中に適度に歪んだ鏡を持ちます。自分が苦いと思う物が、他の人にとってはそうでも無かったり、時には幸せそのものだったりします。個人の差。それを延長させれば、例えば運動神経の良さもその現実を如何に自己の肉体へと反映させるか言う歪みの差なのです。その歪みを人は個性と言います。その通り、鏡とはつまり脳の事です。人は目で見たもの、耳で聞いたもの、鼻で嗅いだもの、舌で感じたもの、手で触ったもの、全てを直接感じ取る事は出来ません。それらは全て神経を通じて情報は再構築され、相似形を持ちながらまったく別の感覚を作り出します。私なりの見解であればそれは鏡へと投影される行為です。それが脳と言うものの機能です。歪みとは脳の神経ネットワークの僅かな本数と作り方と反応経路、そして偶然的な神経のスイッチのタイミング誤差などの個人の差だけです。ところがこの差がある事で私達は誰もが等しく本当に幸せに満足する事が無いのです。だって、人はその差によって情報を鏡でもう一度見直しているからですね。しかも個人の歪みはそれぞれまったく違うものです。それ故に、頭の外では『誰もが等しい幸福』なんての

は、まさしく脳だけの、歪んだ鏡を更に歪めて像を作る妄想みたいなものなのですよ。既に鏡が歪んでいるのにそれに合わせた幸せの外枠を作ろうなどと言うのはお笑いですね。だから、私は外枠ではなく、現実を個人のそれぞれが適度持つ感じ方を映す鏡をもう一度、今度は有りのまま脳へと返して映す綺麗な鏡を作ったのです。それが蝶です。ただ、残念ですが、脳が今まで映していた現実を現実でないと思いますと、鏡に映っていた現実の肉体を放棄してしまうのです。故に、脳に依存する肉体は死を迎えます。まぁ、当然ですね。目の前の都合の良い鏡を置けば、その裏側を見たいとは思わないでしょうからね。宗教やら何かの強力な存在に依存した者はその鏡を自ら作り出す事もありますけれど、私はそれが誰でも出来るように、幸せな世界を映せるように私の魔術で鏡を作ったのですよ」

それは、恐ろしい事だった。

彼の魔術は現実を否定させ、自らの都合の良い夢の中に埋もれさせるものだったのだ。

そしてそれは夢の世界に依存する事で、肉体の生存活動すらも否定し、夢の都合の良い世界だけで生きる。いや、死に続けるものだったのだ。

私には喫茶店で少し可愛げのあるように見えた蝶が薄気味悪いものにしか見えなくなっていた。

蝶は私の見た時に比べて、今にもコルクの蓋を打ち破りそうなほど激しく動いていた。

「激しく動いている？」

そう私が呟くと、ニヤリと彼は笑った。もしかして、この反応も奴らは七歩義兄が小瓶を見せる事まで何か【予測】した結果なのだろうか？

「何故、こいつの反応が激しいのか？　私の蝶は願いの強さに反応するのです。簡単ですよ、魔人は自らが願い、それによって願いすらも忘れるほどの力の手段を得て、その力の強さ故に目的自体を忘

れて永遠に叶えられなくなった存在ですからね。詰まるところ、願いを叶えたくて仕方が無くて、それを克服する力が本当にあるのに、その叶えたかったこと自体を忘れてしまって、『願いを叶えたい』と言う気持ちだけになった生命体ですからね。言わば、願いにしてそれを叶える力を持った塊。あまりの魔人故の純粋さでこんなに蝶達は大騒ぎなのです」

そう言うと彼はコルクを開けた。

そこから身を捩るように、焦るように蝶は瓶口から抜け出すと、錬仁の身体に張り付いた。

張り付いた瞬間に、それは羽を畳んで蛹へと戻り始める。

それは夢から現実と至る覚醒へのプロセスを逆転するように感じられた。

まだ可能性のあった夢のあった頃の卵へと孵る、真逆の生誕。

「ここから後は芋虫に戻って更に、鏡となる核の卵に戻れば良いだけなのですが、難しいですね。流石、千年も経ったせいか、記憶が劣化しているようですね」

「え？」

今、彼はなんて言った。

それは魔人には『記憶がある』と言う事か？！

「あぁ、君は知らなかったですか。魔人はね、記憶を消すわけでは無いのですよ。記憶との繋がりを失うだけなのです。ちょうど、ハードディスクからデータを消すのと同じ要領です。あれはデータ自体を消した訳では無くて、データとの繋がりを消しただけなのですよ。だから、データの復元が特定のソフトなどで可能なわけです。まぁ、その繋がりを消したデータの上に新たに上書きされたら元のデータすら無くなるのですがね。逆に中には繋がりを消したにも関わらず、頑固に『転生前の記憶』を持つ人も居るみたいですけどね。魔人は他のシステムの効率化のために、特定のデータ、とても強固な、けっして自らの外殻を失わないだろう悪夢だけにアクセスを留めさせて効率化した生命体なのですよ。だから、記憶が無いんじゃ

なくて、『記憶がどれだか分からない』だけなのです」
　魔術師は磔の錬仁に近づくとゾロゾロと動く無数の芋虫をいとおしいように撫で上げた。
「私の蝶はもっとも幸せを見せるために効率的な鏡を作り出すために、記憶を綺麗に、そしてドラマチックに繋げる事も出来るのです」
　彼は芋虫の一匹を摘み上げるとそれはジタバタと錬仁を求めて動く。その足掻きを無視して自らの口の中に放り込んだ。咀嚼。まるで躊躇いもなく、不気味な、蠢く芋虫を食った。
　喉を鳴らして、麻薬中毒の患者がやっと薬を手に入れたような、法悦の表情を浮かべた。
「あ、あぁ、なるほど、これが、生前の、『魔人になる前』の彼ですか。実に猛々しく、強く、そして最期は哀れです。涙を誘います。何故、獣でも、兵（つわもの）でもなく、ただの鬼と化したか納得がいきます。その純粋さは憐憫による感情だけでは表現しえませんね。八十％の記憶の復元といったところでしょうか。今まで二度魔人の人生を見てきましたが、彼ほど『真実を知らない方が良い魔人』は居ないですね。成る程、こいつは『幸せにしがい』がありますね」

……なんですって？

「もしかして、あんた。このまま記憶を戻しつつある錬仁を芋虫が作る鏡の牢獄に入れるつもりなの?!」
「それ以外に何をしようと言うのでしょう？　彼の人生は既に大過去、故に現実の手段で全てを叶える事が出来るはずが無いではないですか？　彼に幸せがあるなら私は叶えてあげるだけです。それが私の原則です」
「何故、そんな事を続けるの？」
　核心を、私は貫く。
「それは、私には『幸せ』の概念が無いからです」
　彼は掌に新しい蝶の瓶を載せた。

確かに蝶は錬仁へと向かおうとするはずで、目の前の硝子一枚で隔てる彼には見向きもしていなかった。

「私は何を見ても、聞いても、嗅いでも、触れても、味を知っても『感じる事』しか出来なかったのです。無感動に近かったのです。私の脳が恐らく『幸福を感じる歪みを持ち合わせていなかった』のです。しかし、身体だけはそれでも生きれるように、不自然では無いように人と同じように笑う事だけを覚えました。まぁ、無様でしたけどね。私はそれによって人並みの生活は送れたつもりです。だけど、それを続ける事には飽き飽きとした私はふとした事から魔術を少しずつ学んでいきました。その間もこの姿どおり元はサラリーマンの営業でした。魔術によって人の『幸せ』だけは分かりますから、そのニーズに答えれば営業成績は上がり、小さかった会社は私の居ない今でも大企業と呼ばれるものにする取引をして会社から感謝をされましたし、それを通じて妻を持てましたし、子供も得ました。だけど、彼らを幸せに出来ても、自らの幸せの実感を得ることは無かったのです。だから、私は幸福の追求のために私は自殺を装い、全てを捨てて魔術師の道へと本格的に歩み始めました。私は以前、人間の身体に縛られているからだと思い、人以外に転生しようとしました。だが、途中でそれは『人の幸せでは無く、人外の幸せに摺り代わっている事に気付いた』のですよ。そして、私は本格的に魔術師になり、同じように他人を客観的に眺める事で、その人達の幸せの共通項から幸せの概念を抽出する事にしました。ですが、抽出すればするほど、それは絶望と変わらない事に気付きました。人を幸せにすればするほど、自らの不幸、いや『幸せの無さ』が浮き彫りとなっていくんです。幸せは個々に違うのです。それ故に、私の個であるはずの幸せが無いのです。それは十字架で高々と自らの幸せの無さを晒すような、奇妙な感覚でした。幸せを求めれば求めるほど、己の手足を束縛する、突き刺さった無意味さに気付いてしまうのです。私には不幸は無くても、同時に幸福も無かったのです」

それは、あまりにも悲しい話だった。誰よりも、おそらく他人の、その人自身の幸福を理解しながらも、ちょうど硝子越しの蝶のように、触れようと思っても触れられない、自らの幸福だけは実感できない男。それは己の人生を無感動な悪夢として見続けるのと同じ事だろう。

「そして、『慈善事業』はもう終りにしよう。そう思った時に【脱皮者（かれ）】と会ったのです」

絶望だけの空虚な男の前に現れたのは、動く悪夢だった。

「彼は言いました。『私の計画を手伝え。私のためにその捨てた命を預けろ。忠実な駒となれ。盤上を【予測】して支配する、『私の願う幸せの一つ』と成れ……』そう、それは表現するなら、甘美でした。脳が蕩けそうなほど、甘い誘惑でした。だから私は選択したのです。私に幸せが無いなら――

――私は誰かの幸せの一つとなろう。

――私が幸せそのものになるんだ、と」

それは、最悪の出来事だった。よりにもよって、親でも、友達でも、会社の同僚でも、妻でも、自らの子供でもなく、彼は幸せと同一視するべき人間の、最悪の選択肢を選んでしまったようだ。

もし、魔術師を選択する事なくそのまま生きていれば、彼は例えようも無いほど、他人の幸福を本当に追求する人格者となっただろう。きっと、家族を、同僚を、友を、親を幸せにする純粋な意思を

見せただろう。
だが彼が選んだのは、魔法使いとなるために手段を選ばない、人として最低最悪な人間の屑を崇拝対象として選んでしまった事だった。

「魔女が五人、いえ、それ以前に何人も死んだのは」
「彼と私の幸せのためです」
「じゃあ、欧州で千人以上の人が死んだと言うのも」
「彼と私の幸せのためです」
「あなたが、もし彼のために自ら死ぬ事があっても」
「彼と私の幸せのためです」

彼は両手を広げて、ちょうど磔にされている国定と同じような形になりながら、
「今、彼の使命を遂行している私は、とても幸福なのかも知れない」
そう、言葉と涙を零していた。
今まで、歪んで見えたはずのその笑い顔は、今まで無理をして、幸せがあるふりをしていた悲しい笑顔だったのだ。

狂っていた。否、狂わされていた。
まるで『計画したかのように』、予め作ったパズルのピースを嵌めるようにしていく元魔術師の魔法使い【脱皮者】は、幸福の感じられない、他者の幸福を叶えるための人間で、いずれ人との幸せで幸福分かち合うはずだった男を、知らずうちに歪んだ道へと堕落させたのだ。
恐ろしい男だ。
今まで、誰にも姿を見せず、奴は【予測】して、全てを駒のよう

に操っているのだ。
私自身にも、その操り糸があるのかも知れないと不吉な事を考えると、ゾッとしてしまった。

「ほら、見て御覧なさい。卵が幾つか出来てきました。これだけの蝶を二日間、フルで記憶の復元に使ったのは始めてでした。千年前の叶えられなかった幸せを私が叶えないと……」

……拙い、余計な感傷を持ってしまった。
今、ここで【魔女の呪い】をぶっ放す事も出来る。だが、初めて、こんな道先を間違っただけの綺麗な人間に危害を加えようとするのが躊躇われた。
指先に呪いの魔力を込めるだけで出来るものの筈なのに、その呪いの枠組みさえ、男の前では作れない。
幸せを求める事が当然である事を如何にして否定しようか。
どうすれば、良いんだろう。

「君は非常に初歩的な間違いが多い。解答が分からなかったら適当にマークをすればいいのだよ。どちらかは正解だ」

その声と同時、癇癪玉の弾けるような音と共に、幸せそうな男の身体が前のめりに崩れた。

その後ろには、眼帯のように鉢金を斜掛けにし、『白衣』に身体を包んだ、

「三枝先生？」
が左手に硝煙の漂う銃を構えていた。
「先生！　え、し、死んだんじゃ、無かったんですか？」
銃を片手での華麗なガンアクションと共に腰の右ホルスターに収めると、敵意の無い、むしろ荻さんのように穏やかな笑みを浮かべた。
「ふむ、指導不備が有ったようでな、冥界から教師の職務怠慢で送り返されてきたんだ。最後まで職務を果たせ、と言う事さ。さぁ、この男は終わった問題だ。次は国定君を助ける方程式を立てるんだ。これは非常に難解だ。私も手伝おう」
「は、はいっ！」

そうだ。重要な事を、優先順位を間違えそうになった。
私が大事なのは今、錬仁を助ける事だった。
そのための障害を突破する事を小賢しい、大本の魔法使いの姦計に引っ掛かって見失う事だった。
確かにそうだった。
それはそれ、これはこれだった。
他者と自分を混同してはいけない。
他者を尊重する事は自由だ。でも、自分と他者の理屈（イデオロギー）が対立する時には両方が妥協するか、双方が戦うしかない。同じ土俵でなければ、それはただの一人相撲なのだ。
私のやるべき事は錬仁を助ける事、揺らいではいけないのだ。

「記憶層の第六層までの侵食か、進行度が酷い。私はこれに似た魔術を知っているが、これ程多くては卵を全て取り除く事は出来ないだろう」
「チクショウ！　先生、どうすればいいんですか？！」
「質問の際に下品な言葉遣いは改めたまえ、淑女らしく、魔女らしくするんだ。まぁ、同時に君らしくと言うのも忘れてはいけない。

君は可愛いのだからな。さて、回りくどい言い方になったが、君は魔女だ。彼の話し振りからする彼の技術に対する【予測】と私の知識から導かれる方程式で、ベストなものは一つだ。魔女には『魔法の紡ぎ糸』と言ったか？　初歩的な精神ハッキングをする魔法があったはずだ。あれで、国定君の精神にコンタクトして、内側から彼を揺り起こすんだ。おそらく、君もコンタクトする事で彼の悪夢に引き摺られる可能性があるかもしれない。だが、あらゆる時間と労力を【予測】した限り、これがベストだ。目覚めれば、彼の防衛反応で卵と芋虫は一瞬で焼き切れるはずだ。さぁ、解法の手順は用意した。そして、それが出来(答えら)るのは、魔法の使える君だけだ。私は魔術で精神を観測する事は出来ても、鏡のように全てを返す事無く、それに特定の対応が出来るわけではない。出来るのは魔女の君だけなのだ」

私はその言葉に頷くと、儀式を始めた。

聖別された釘を抜いて柱から彼を下ろす。その身体は亡霊騎士との、いやそれ以前からの戦闘のためか？　未だ癒えていない、傷の無い場所の方が少ない、痛ましい身体をしていた。

彼を地面に横たえると、常時携帯していた、正確な儀式のためのアルメデアゥの粉で四万三千九百五十六の現代エノク語を使い、魔法陣を描く。

『魔女の紡ぎ糸』。

それは一週間以上前、初めて魔術師、摩壁　六騎の居場所を探るために使ったのと同じ技だった。

心臓の緩やかな高鳴り。それと共に両手の間にアヤトリのように、意思の、魔女の紡いだ糸を巡らす。

その両手の間に錬仁の頭を添えた。

瞼すらも動く事なく、小さな魔人は眠る。

「彼は魔人化した事で、身体を全て霊気装甲に置き換えられた。いわばそれは全身が脳になるのと同じだ。全ての魔人はそのようにし

て、自らを回路のようにして世界に刻まれている。だから、仮に彼らが全てのエネルギーである霊気装甲を失っても、何者からか魔力やら霊力やら妖力やらを与え直せば再び彼らは召喚され、蘇る。パソコンのフラッシュメモリーのようなものか？　そう、だから彼は魔人の特性のために記憶を忘れている、いや『判別出来ない』だけなのかもしれない。だが全ての記憶は霊気装甲を通じて全身に刻まれている。脳の十倍もある全身が全て脳にもなっているのだ。失われる事はない。だが、そこから真実を得るのは鳴門の渦よりも壮大で過酷なものとなるだろう。君は千年分の記憶から彼の本質となった記憶を見つけて、彼を『白い蝶』の誘惑から解放しないとイケナイのだ。そうしないと、彼は千年前の、彼を魔人へと決意させた時より最悪な事となるだろう」

指でそっと触れる彼の幼い顔。
苛烈な闘争に矮躯で挑む勇者。
夢に敗れて彷徨う、まつろわぬ者。

その彼の正体と本質を取り戻させる。

「『白い蝶』によって、おそらく記憶が判別出来ない彼のために、記憶の回想というよりはむしろ御伽噺（おとぎばなし）のような形式になっているはずだ。そのようなタイプの記憶操作には読み手が登場人物に同化しようと思うために、同調しやすい。引き込まれれば、君も蝶に囚われる。良いかい？　私が言うのも何だが、過去を振り返っていけない。それはただの事実の確認のためのものだ。流されるな、君なら出来る」

私は錬仁の中へと入り込んでいった。

次の瞬間、超新星の爆発のように、魔法の時に感じるような、あまりの日常ではありえない情報量の多さに脳神経がパンクしそうになった。

ノイズの掛かった景色と彼の激烈なまでの心理、感情、本能。
それは自己矛盾との攻防の記録だった。
過去へと怒涛の大河に抗う鮭の如く遡っていく。

ある記憶では彼は無数の零戦の間に佇んでいた。
戦争末期、最後の決戦の望みのために、彼は地獄から召喚された。
敵国により、全ての物資を封鎖され、彼らの国はただ緩慢に死を迎えるものとなった。だから彼らは戦う事を決めた。そのために彼は呼ばれた。
南国の陰鬱なジャングルの中を、護国のために駆け回る槍兵。
時に空母を真っ二つにし、零戦を足場にして戦い、戦艦を投げ飛ばす人知を超えた戦い。
それに対抗するためにあらゆる世界の魔人が召喚された。天地を揺るがす戦い。その全てに赤い槍の兵士は勝利していった。
その姿に突き動かされ、兵士達は獅子となって戦っていた。
――霊気装甲がゼロに成った時、彼は再びリセットされ、地上へ全ての記憶を失って戻った。
マンハッタン計画。
敵国が進めていた『原爆製造計画』。彼は、敵国だった国に二つに原爆を落とすための地上戦力からの護衛として、その被害を間近で確認させるためだけの存在として、敵国に捨て駒として使われた。
二度の、当時最高の悪夢の被害を受けて、彼は地獄に戻った。

――ある時は最も嫌悪した敵に捨て駒に使われ、

ある記憶では、一人の女が居た。
西欧と侍が邂逅する最中、当時の幕府は権力の維持のため、西欧の悪鬼からの侵略に対抗する兵器として呼ばれた。それは正式な手順を踏まなかった不完全な召喚だったために、彼は歴代の召喚で最弱となった。それでも、西欧からの進出を目論む吸血鬼の軍団に負ける事はなかった。
その件とは別に、人知れぬ山間に静かに暮らしていた女とひょんな事から会った。
彼女は過去に彼に会ったと言い、彼は魔人故に思い出すことは無かった。
それでも彼は彼女の楽しそうな思い出の話し振りと、不思議と明かさない好意の理由に自然に惹かれていった。彼は彼女を好いていた。
しかし、蜜月は突然と途切れる。
不完全な召喚は地獄へと帰還を促された。
「再び会ってもオレを忘れないでくれ」
そう彼女は告げた。
――霊気装甲がゼロに成った時、彼は再びリセットされ、地上へ全ての記憶を失って戻った。
戻った時には彼は開国派の手に落ち、その尖兵として戦い尽くしていた。
古きを尊ぶ彼女がもう一度目の前に現れた時、彼は彼女を敵と認識した。
壮絶で、それで居て物悲しい戦いがあった。
「やっぱり、オレとお前は敵同士なんだな」
そう、地面に倒れた彼に、互いにボロボロの姿のまま彼女は言い放っていた。
――ある時は恋仲となった女を騙し、

ある記憶では男は戦場を騎馬で駆けていた。
それは怒りを自ら示すような、自暴自棄にも見える戦い方だった。
侍の大将に仕え、彼の手足となり、同時に彼に付いた十人の部下の長となった。
熾烈になる戦いで、彼は十人の頭となり、侍の見本となって戦い、尊敬された。
ある時、天下を取るために自ら魔人と成り果てた男と直接剣を交え、死傷を負った。
――霊気装甲がゼロに成った時、彼は再びリセットされ、地上へ全ての記憶を失って戻った。
戻った時には戦国は終り間際、彼は部下だった部隊を掃討する任務を与えられ、彼らの断末魔の悲鳴と口惜しいと嘆く声を聞きながら戦場の幕を下ろした。

――ある時は慕っていた部下を裏切り、

ある記憶では彼は子供を連れていた。
彼は同じように、私を守ると言った時のように、子供を守っていた。
その子は禁断の子だった。有ってはならない、帝のもう一つの家系を作り出す血筋。
時の権力者達は血眼になって探し出し、子供を殺そうとしていた。
彼は守り続けた。
背中の稚児のために自らに矢が当たる事すら厭わない。
そして逃亡の日々の中、時に飢えと渇きを凌ぐために自らの霊気装甲を削って分け与えた。
しかし、それは子供を連れると言うハンデ故の無限の消耗戦だっ

た。
権力者は幾度と無く何百人の暗殺者をあてがい、徐々に、効果的に疲弊させていった。
そして、それは蝋燭がフッと消える瞬間のようにあっけなく来た。
泣き叫び、彼を呼ぶ幼子の声。
――霊気装甲がゼロに成った時、彼は再びリセットされ、地上へ全ての記憶を失って戻った。
彼は以前の記憶と繋がる手掛かりを得て、稚児を探し回った。
探し続け、自らが来た場所の木の根元に、小さな石が墓標として立っている事に気付いた。
そのまま、彼は巌のように、戦場で騎馬を駆るまで動かなかった。

――ある時は育てた子供を置き去りにし、

ある記憶では一人の破戒僧が居た。
地上を彷徨っていた彼に出会い、巨躯の破戒僧は契約を交わし、友にして、彼の武器となった。
彼は主君を守るために、橋の上で荒法師から武人へとなった。
錬仁は彼の持つ七つ道具の一つとして、動く武器として、そして、その者の友として動いた。
時に互いに舞いを踊り、橋の上で友が敗れた主人を鼓舞し、互いに称え合った。
ある戦で、彼は友を守るために自らを盾にした。身体にびっしりと刺さった矢。
――霊気装甲がゼロに成った時、彼は再びリセットされ、地上へ全ての記憶を失って戻った。
そこには主君の兄である男が、彼と彼の主君ごと殺そうと目論んでいた。
そして、錬仁は弓を執り、友だった男に幾度と無く矢を打ち込ん

だ。
奇しくも、男は守られた彼に矢を突き立てられながらも、主君を逃しながら、立ったまま死んだ。
――ある時は親しい友となった者を殺した。
それはどれも彼の責任では無かったように思えた。
それでも足枷はあまりに重く、彼を引き摺り続ける。
魔人となった故に彼らに出会い、魔人となった故に彼は自らとその周りを傷つけた。
彼が魔人となったのは何時からなのか？
そして、何故なのか？　何を求めるのか？
それが今、明かされる――

18. 大焦熱（だいしょうねつ）（後書き）

Every thing, never coming true
e dream.
Every thing, eternal ending a
venge.
Every thing, freeze on forbid
den secret.
Every thing, failed prepared n
ess at last.
Every thing, imagined vice by
himself.
Every thing, own charged caus
ation
Every thing, past cast away f
rom him.
Every thing, never killing bo
dy.
Every thing, never dead soul.

It was a what truth was in th
e memory of his story.

The story is just wanted by a
ll he want.

接続≫≫

——地獄使い生誕へ

19．蝶の語る幻想

さぁさぁお立会いお立会い。
羽揺れる記憶の中、君と私が会えた事を感謝しよう。
如何にも、ここは過去の記憶にして記録。彼が望んでも決して見る事の出来ない、封印された、いや、繋がりを絶たれた記憶の奥底だ。
彼とはもちろん、狂気地獄（パラノイア・インフェルノ）に囚われた魔人、国定錬仁の事だ。
知っての通り、彼は今代に置いて異論は色々とあるにしろ、多くの他者に認められる最強の魔人だろう。
魔人とは自ら願い、そのために力を得たのに、その目的を忘れた悲しい生き物だ。彼ら魔人の殆どには前世との記憶の関連が作り出せず、幾度と無く自己消滅と自己転生を繰り返す。
そんな彼らの内の一人、国定錬仁と呼ばれるもの前世を魔術で覗いてみようと言うのが今回の趣向だ。
彼自身の身体に刻まれた記憶と世界に遺された記録、それらを総括して、真の物語を作り出す。

今までの君たちの物語を覚えている者ならこの物語は大きな意味を持つだろうが、そうでないならまだまだ早い。
君たちの物語に戻ってきっちり体験し直すんだ。

さて、体験を経た者なら、

赤き武者、山獣の王者、相撲の達人、童子切り安綱、

これらのキーワードから既に彼が誰かと言う答えの出ている者もいるだろうが、ところがどっこい、真実にはまだまだほとほと遠い。

さて、今回は君たちの【本当の敵の正体】も劇中で堂々と明かす気前の良さだ。
人と物語の交錯の中で、真実は何ものにも耐え難く重要で、同時に瑣末な事。
蓋を開ければ、意外にどうと言う事でも無いほど、呆気ないものかもしれない。
まぁ、それを決めるのは君自身だが……。

答えを得るまでは少し時間が掛かるだろう。
何せ人一人分の人生だ。それは例え四十年に満たなくとも長く感じるはずだ。

長らく待たせたが、真実の物語を始めよう。
時代は遡る事、約千年。
人と神が隔てつつ、同じ領域に生きていた数少ない時代で、同時にそこから徐々に双方が離れていった不可思議な時代だ。
物語の起点は足柄山と呼ばれる、箱根付近の古い森林が鬱蒼と茂る山奥より始まる――

19．蝶の語る幻想（後書き）

【八寒地獄】

？部陀（あぶだ）地獄：

八寒地獄の第一層。生前争いが好きだったものや、反乱で死んだものもここに落ちるといわれている。寒さのあまり鳥肌が立ち、身体にあばたを生じる。

刺部陀（にらぶた）地獄：

八寒地獄の第二層。殺生のうえに偸盗（ちゅうとう）を行った者がこの地獄に堕ちると説かれている。鳥肌が潰れ、全身にあかぎれが生じる。

？听陀（あただ）地獄

八寒地獄の第三層。殺生、偸盗に加えて淫らな行いを繰り返した者が落ちる。寒さによって「あたた」という悲鳴を生じるのが、名前の由来。

？？婆（かかば）地獄：

八寒地獄の第四層。殺生・盗み・邪淫・飲酒。ただ酒を飲んだり売買するのみならず、酒に毒を入れて人殺しをしたり、他人に酒を飲ませて悪事を働くように仕向けたり、などということも条件になる。寒さのあまり「ははば」という悲鳴を上げる。

虎々婆（ここば）地獄：

八寒地獄の第五層。殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄語を重ねたものが落ちる。「ふふば」という悲鳴を上げる。

青蓮地獄

八寒地獄の第六層。殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄語・邪見を行った

ものが落ちる。邪見とは仏法の教えとは相容れない考えを説き、また実践すること。全身が凍傷のためにひび割れ、青い蓮のようにめくれ上がる事からそう呼ばれる。

紅蓮地獄

八寒地獄の第七層。殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄語・邪見・犯持戒人（尼僧・童女などへの強姦）が落ちる。ここに落ちた者は酷い寒さにより皮膚が裂けて流血し、紅色の蓮の花に似るという。

大紅蓮地獄：

八寒地獄の第八層。殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄語・邪見・犯持戒人、父母殺害・阿羅漢（聖者）殺害を行ったものが落ちる。ここに落ちた者は、紅蓮地獄を超える寒さにより体が折れ裂けて流血し、紅色の蓮の花に似るという。

20．?部陀（あぶだ）（1／2）

――今は昔、時の都、京より遥か東の地。

鬱蒼と葛木の繁る未開の地。獣は獣らしく振舞い、山は名も無き神の領地だった。

しかし、誰も、普段は人っ子一人でさえ居ないようなその地に、大鎧に大槍、大太刀を携えた徒歩（かち）の集団が獣道以下の道程を行脚していた。

それぞれは黙しているように声を挙げない。それとも、それは己が任に非ずとしているのか？

徳川以前を遡れば、侍と呼ばれた武闘集団は大抵山賊とは変わり映えのしないものである。

しかし、何故だろう？　その集団には透破（すっぱ）や乱破（らっぱ）などの盗賊に見られる荒々しさはありながらも、それとはまた違った統率性、統一性を見せていた。言わば、訓練のされた武装集団なのである。現在のように、何処ぞの国家のような強制的な兵役制で大量の兵士を生産するようなもの、健身（けんじん）とは訳が違う。彼らのはむしろ志願制、そして選抜制であった。幾千、幾万の若者がこの集団に関わる事を望み、心半ばで折れる者も多くあった。だが、それでもそれを貫き、辿り着いた彼らは生え抜きの、いや百戦錬磨の兵士達である。足運び一つとっても無駄は無く、その身に怖れも知らない。

総勢百二十人の忠実な兵士達。

その頭、主人はこのような人物である。

「ふぁぁぁ～～～～ッ、眠っ」

顎が外れそうで外れないほどの欠伸。徒歩ばかりの集団で唯一、白馬に乗る鎧姿の者。肌は舶来の陶磁器のように白く、烏帽子に収めた髪は創世神話の鴉のように黒く、それでいて艶やか。眉目は宮廷でも天皇による選り好みの側女の如く美しい。欠伸で涙のかかる瞳は最高級の漆器のような煌びやかさを放つ琥珀色。うら若い少女のような容貌である。

細身であろうその体躯を、白絹衣を通して赤銅色の胴鎧で堅め、腰に普通よりもやや小ぶりな太刀を帯びていた。そのなだらかな背中には、弓と矢筒が負われている。その矢の一本々々は最高級の鷲の羽根。意匠のみならず、その他の持ち前の気品を表し、位が他の兵装よりも明らかに高い。

雅と美。その結集が都から遠く分け離れた地で馬に揺れていた。

摂津河内源氏の祖となる源頼光（みなもとよりみつ）、と呼ばれる若武者である。鎌倉幕府を作り上げた征夷大将軍源頼朝（みなもとよりとも）、その弟であり同じく戦歴を称えた歴戦の武将源義経（みなもとよしつね）を遡ること百年近く前の、その先祖筋にあたる者だった。

そして、頼光の名を当時轟かせたのは妖魔覆滅。つまり『人外狩り』である。

民に仇をなす怪異を討伐する、現代風に言えば特殊部隊にあたる退魔特化武装兵団、【闇殺舎（あんさつしゃ）】が制定されていた。時の権力者の命によって編成された、今居る兵を含めて総勢で千と百八十人の兵はどれも人外との闘争を前提に考えられ、誰もが怖れを内に秘め、指揮系統に忠実な闘犬、いやただ武器の刀剣となる荒武者だった。

死神公社が出来る百二十七年前の、更に遡ること約八百年、人が人外と境界を引くためにその集団は居たのだ。

その発足当時の総大将が源頼光である。後に左馬権頭、馬の調教と支給を兼ねる馬術の専門政府機関長となり、日本で隠された戦歴と輝かしい政治歴によって正四位、帝の家系を除けば当時の権力

の位で上から四番目に偉くなった人物である。当時、馬は貴重であり、貴族階級のモノの独占物だった。同時に騎射と呼ばれる、現在で言う所の流鏑馬（やぶさめ）にあたるモノのために馬は使役されていた。そして弓は平安貴族でも、後々武者の萌芽となる家系に広く根付いていた。つまり、そこを治める者は当然馬の達者であり、同時に弓などの武術の腕も達者であった。

正規の古文書では頼光よりもその弟、頼信（よりのぶ）の活躍が目立つ。しかし、頼光は表沙汰には出来ない怪異討伐により、史実として記録に残される事は控えられ、代わりに伝聞流布された噂が人々の間で歪曲誇張した物語として目立つ形となってしまったのである。つまり、頼光は伝説ではなく実際に人外達の屍骸でその地位に上り詰めた、外見には似合わぬ豪胆な人物なのである。

ちなみに平安時代は上司に当たる貴族の真名を呼ばず、役職などを通例では呼ぶものだが、やたらと親しさが著しい頼光は、公式の場でなければどう呼ぼうと気にせず、むしろ奨励していたのだった。頼光の『本名』を呼ぶこと以外は。

「頼光（よりみつ）様、そのような気の緩みでは奇襲の際に如何致しましょうか？」

そして、その頼光の隣りを寄り添うのは白い口髭と顎鬚蓄えた独眼の老兵である。周りの兵よりも一回り大柄な体格の老人。その彼より更に大きく上回るアカイ槍を含めて、全てが赤い色をしている。その老人の名は、

「坂田、このようなツマラナイ景色が続くからイカンのだ。海沿いを通れ。東海道の漣（ささなみ）を見た方がこの陰気な空気も何とかなる」

と仰せのとおりである。先ほどのあくびとは異なる涼やかな声色は、変声期前の少年のような、まるで年若い娘のような声色だった。

「頼光様、樹木のささやかな違い、老いた身には十分眼の保養とな

りますが、何か？」
　しれっと返す、老人のとぼけた口調は長年の信頼に寄るところが大きい。
「眼の保養になるか、否かの問題ではあるまい。私の主観でつまらないか面白いかのだけの違いだ、なぁ、彪凪（あやなぎ）？」
　白馬は主の言葉に「そうだそうだ」と答えるように、ぶるる、と大きく鼻を鳴らした。
　ヤレヤレ、いつもの我侭が始まった、と髭で隠しながらブツブツと、いやモシャモシャと文句を繋ぐ。
「ところで坂田。我らの手勢であれば迂回せずとも、さきの山村を突破する事くらいは容易いはずだ」

　さきの山村とは斥候（偵察）にあたる者達が発見した、山間の間の平野に存在する比較的大きな村である。
　当時より更に二百年前、西暦八百年頃に桓武天皇は東北制圧のために出兵をしたが、逆にそれによって政治機構は疲弊し、出兵以降も民に圧政を敷いたために反逆される事も少なくは無かった。それを西暦九百九十六年現在まで引き摺る形と政治的になってしまった。つまり、個々の村が暴走して逆徒となる可能性は十分にあったのだ。
　だが、頼光の頭の中ではその程度のおもてなしを五倍にして返せる自信は有ったし、無論、それは無謀でなく、人よりも遥かな脅威である人外を相手にした実戦を経験した上での確信のつもりであった。
　しかし、近習（きんじゅう）と呼ばれる身近な護衛で、そして副将にあたる坂田はそれを渋ったのだ。
「先ほども申した通り、斥候の報告どおり、その付近の村は『全滅』致しておりました。それもつい昨晩の出来事かと」
「ふむ、確かにそこそこ大きな村だったが、それを全滅させるのは相当な武力であろう。組織化された盗賊か？　くくっ、秀武（すえたけ）との戦を思い出すな。思えばあれ以来は人との戦はしてないな。で、斥候

の事実報告では無く、その印象は？」
　頼光は片目を瞑り、その美麗な眉を片方上げる。考え事をしながら人の話を聞く時の癖である。
「一人の兵の見立てに寄れば、皆殺しをしたのは熊か何かが大集団で暴れたようだと」
「今の時期、腹を空かせた熊が、しかも集団で起きる時期ではあるまい。大体、腹が減った熊同士は普通は共食いをする」
　老兵を「やれやれ、耄碌したか？」と言うように馬上から睥睨する頼光。
　老兵はそれに構う様子も無く、淡々と続ける。
「もう一人の兵曰く、皆殺しをしたのは鉞を担いだ童子だとも」
「鉞だと？　力自慢の兵でも三人がかりで無いと持ち上げられない、大木を倒すアレを子供が？」
「左様です。それを伝えた重傷の村人は同時に生き絶えたと……。まぁ、どう見ても素手で人の背中を毟ったようとの事で、ともかく、妖魔、人外の類では無いかと斥候は疑いを掛けていますが……」
　この老人は、それら怪奇と長年刃を交えた身である。都付近一帯を跋扈した鬼の集団を狩った際、片方の瞳を神格まで届きかけている鬼の大将の首と引き換えにした兵だ。
　その老人の、戦闘に先端化した理論が、『　それら　』とは違うと告げていた。
　人と表面上は交戦状態にある妖魔が、先に近くで闇殺舎と交戦を遂げ、一部を除いて全滅させた事を知らないはずがない。現在、人外どもは、神格のついた人側の守り神を除けば、幅広く種族を問わずに団結をしている状態だ。つまるところ無駄な戦力の消耗をするような戦はする事はないため、これは妖魔人外とは別の第三勢力であると考えるうるのだ。
「面妖な、だが……」
　持ち上げた眉を定位置に戻し、チラリと赤い舌を出した口。それは軽く孤を描いていた。

「面白そうではないか。綱と秀武も連れるべきだったか？　貞光はつまらない事しか喋らないからな、それでも置物代わりには出来ただろう。ククッ」

危機感を楽しむ主人に老兵は大きく溜息を吐いた。

日が暮れ、野営の時間となった。月明かりのみの、暗闇に練られた中を手馴れた兵士達が蠢く。早々と渇いた保存食の握り飯、糧を水で軽く湿らして夜食を済ませると、互いの背を相手の背に押し付けて暖を取り、死角を消す。奇襲対策と体自体の代謝を高めていた。構えは円陣。自らの主を囲む陣形、防御の陣である。

老兵はただ一人で、横になった馬の腹を枕に代わりに寝る主人の前で、大木を背に座り、一つだけの瞳を閉じている。だが肩膝を立て、大槍と太刀を傍に立てて置いた姿は常在戦場の構えである。完全に覚醒している監視も座って寝たような状態に見えるが、それは『ふり』だけであり、大抵は薄目で、暗闇をじっと監視している念の入れようだった。

時は丑三つ時、現在で言えば午前二時を僅かに過ぎた頃。

ピクリと彪凪の体躯が揺れた。

「――――！　敵襲ッ！！」

彪凪の体躯の微震と同時、頼光は誰よりも早く飛び起きて叫び、太刀の鞘を腰に構えた。

太刀専用の抜刀の型である。長めの刃から抜き出すため、やや、柄を下にし、刀その物の自重で抜刀速度と拍子を見出すためである。刃を固定させるためである、鞘からの刃の出入り口、鯉口は僅かに外す、いわゆる鯉口を切った状態にされてある。つまり、太刀の自重を支える指先の力を緩めれば、一瞬にして自重で地の方向へと引かれながら、刃が閃くのである。そして、その型は何万回と繰り返され、何十匹の妖魔を塵殺してきていたのだ。

しかもその太刀は蟲と呼ばれる巨大な昆虫妖魔を容易く切り殺し

た、現在で言う所の交霊武装に当たる、【蜘蛛切（くもきり）】と呼ばれる霊刀の一種である。

老兵もほぼ同時。やや遅れて、監視の兵、続いて寝ていた兵士達は体勢を整えた。

加えて言うなら、彼ら全てが同じような訓練を積んでいた。異能無き人が強大な魔に対抗するために、誰もが平均的にある程度の才と力と根気があれば修得出来る型、身体を効率的に動かし打倒する知識によって武装した結果、現在、彼らは妖魔を圧倒するほどの立場に立っていた。

簡単に言えば、牙や爪、異能の代わりに、武器や技術を取った彼らは無敵だったのだ。

静寂――。まだ若い兵の何人かが、何かの気のせいではないかと思った瞬間。

突然、四方から大木が同時に倒れた。

動揺、そして隊形の乱れ。

「――チッ！　子と午は構えを崩すな！　丑と虎と卯は散開、見敵殲滅ッ！！　残りは退路を確保！」

十人ごとに一つの隊となった部隊。十二支の動物が割り当てられ、それぞれが厳密に役割を定められて展開する。日頃の訓練の通り、兵士達はいち早くそれに従う。

指示の直後、闇の奥から何かが飛来する。
人為的に尖った枝と幹を蔦に括りつけられた罠が二十五。
ぞぶり、と肉に先端の突き刺さる鈍い音。
「丑、やまじ、さんたが負傷！」
「虎、気をつけろッ！　罠が仕掛けられているぞッ！」
「丑、崖側に敵影！　包囲！　包囲！」
大柄な兵士達が崖側に殺到する。猛者達は大太刀を大上段に、重武装の苦もなく駆ける。
「鳴ォ」と猛々しく吠える様は並みの兵士では腰を抜かすほどの気合。
隊の十人でも秀でた者は隊の独自の指揮をする十人長である。その独自の判断は戦況にいち早く対応する。しかし、今回はその判断系統の早さが仇になった。
崖側への追い込んだのか？　いや、違うと、頼光が気付いた時には始まっていた。
「それは罠だ！　追うな、ッぁ？！」
轟音の饗宴。それは『先ほど倒された大木』が崖に向かって転がる音だった。
「虎、きしまるが谷に落ちた！　至急、増援！」
「巳は大木の道筋を辿れ！　そこに罠はもう無い！」
咄嗟の老兵の指示が奔った。大将ではなく副将の指示。何故なら、頼光は真闇に意識を集中していたからだ。
老兵が気付いたように、頼光も気付いていた。
『敵は頭が良い。集団に少数が仕掛ける時には撹乱、兵力分散の次は……』
遥か頭上、枝のしなりと同時に何かが地面に着地する。
その背には、僅かな月光を返す、月よりも巨大だと錯覚させる刃物。ヌラリと刃を照り返す月光が頼光を舐め挙げた。

『大将の首を獲るッ！』

暗闇を疾駆し、黒く飛ぶ影。視界の中で頼れるのは微細で、繊細な感覚のみ。その目標に向かって頼光は神速で抜刀して、頭上へと切り上げながら跳ね上げた太刀を更に振り下ろす。

琥珀の瞳と太刀にわずかに映った、赤い衣。

「面ッ！！」

頭頂から地面ごと斬断するような鋭い太刀筋と呼気。だが、暗闇の中では敵が大幅によく動けていた。

何か、重い物が空気を割る音。上体を弓よりも柔らかく反らしてギリギリで避ける頼光。

暗闇で頼光の頭の部分が欠けた。

「下郎がッ！！」

その超大な武具の重さごと当然の如く弾く、独眼の老兵が密なる五月雨の突き。枝に阻まれた森林でも、その捌きに衰えはまったくない。

迸る閃光を闇に紛れて敵はかわす。

長大な槍の長さの理を取られ舌打ちをした、意外にも小さな敵は再び深い闇に身を投じる。

大木へと背中から張り付き、そのまま幹を蹴って太目の枝へと飛び移る。

「頼光様！？」

「――私は大丈夫だ。『お気に入りの』烏帽子が壊れただけだ」

いつも通りの口調の中に、わずかな不機嫌な声色。烏帽子から零れた、腰に届くほどの長い黒髪は、木の間から射す銀の月光を鏡のように返していた。

「敵は襲撃に失敗した。追い詰めるぞッ！」

「頼光様！　深追いは『今は』危険ですぞ！」

「馬鹿者！　敵は仕留め損ねて動揺している！　『今が』狩り時だ

ッ！　辰、鶏、戌と亥の後に続け！　罠には構うなッ！　申と未は怪我人の収容、遅れるなッ！」

男達の吠える声が山を木霊する。

その時、樹上で小さな敵は今までは違う敵だと認識し、同時に恐怖に駆られた。

「坂田、援護しろ。彪凪、そこで待て」

「把ッ」と老人の短い返答と馬の鳴声が重奏する。

『逃がさないぞ……』

頼光はペロリと舌先で、先ほど額をわずかに掠り、鼻の間を分かれるように流れ出た血を舐めあげた。

跳ぶが如く、敵が、魔性が跳ぶ。

暗闇と地の利、この二つを手に小さな敵は大勢を相手に闘争を行なっていた。

大木を人ならぬ身の軽さで駆け上がり、猿のように枝をしならせて、跳ぶ。

時折仕掛けた罠や、敵自身のみが知りうる窪みや茂みで兵士達をやり過ごそうとした。

だが、その尽くを兵士達は看破した。

相手の指揮官は相当な者だ。下手すればこの山に住まう、どの獣よりも山を熟知した敵がそのあらん限りの地の利を使う。

それでも雑兵の一人二人を仕留める事は出来ても、それ以上は無い。兵士の練度は並みの、麓の村を護って居た者達とはまるで違う。

加えて、地の利を知りうるはずの敵が逆に追い詰められている。

何故だ？　敵の問いに答えるのであればこうだ。

敵に闇の利と地の利があるなら、彼らには知の利があった。

老獪な、一人の兵士は地形の癖から地形の全容を把握する事が出

来た。そして指揮官の繊細な感覚は敵の罠の仕掛ける頃合、機を読んでいた。

闇に紛れてきた夜行性の獣。しかし、もう数刻もしない内に彼らに最後の利が移る。

紫色に山の裾が割れ、朝陽が迎合する。

闇の利が裏返った。

同時に、頭上から何かの飛来する気配。鷲か？　と、敵が身をかわすと地面に突き刺さったのは鷲の意匠を施した矢。

続けざまに二度三度。

樹から落ちて、地面を転がる影。

敵の視線の先には弓を構えた琥珀色の瞳の若武者がすくっと立っていた。

視線が合うと、ニヤリと目尻を挑戦的に下げた。

何処かへと追い込もうとする先、敵の記憶が正しければ、その先は三方を崖に囲まれた崖である。

追い詰めて仕留める気だ、と獣の一欠けらの心で納得した。しかし、獣性の敵に降伏の、従性の二文字は無い。

ならば、ただ最後まで足掻くのみ――

片手で支えた大きな斧。鉞（まさかり）を肩に担いで、敵は、少年は、三十の重装兵に対峙していた。幾ばかの掠り矢傷を受けて、そしてそれ以前からの、他者の血で塗れた粗衣は赤く滴っている。

背後でざあざあと飛沫を巻く滝は水気で潤わせるが、少年の内側はこの上なく乾いている……。

身の丈、四尺（百二十センチ）と少し。兵の中でも、そこそこ年がいったら居るであろう我が子と大して変わらない年頃。

だが、その肩には、表情すらひた隠すざんばらの髪と、その中のどの兵でもただ一人で持ち上げられるか曖昧なほどの超重武器。

三十の内の五の兵が、顔のすぐ脇に太刀の柄を構える、八相の、

守りの構えで輪を縮める。少年は身を縮め四つん這いとなり、あたかも獣が飛び掛かるように、力を込める。
ざんばらの髪の間から垣間見える、獣の虹彩が小さく凝縮した。
「辰、動くな。下がれ」
その時、玲瓏な、少年が自己も曖昧な幼少の頃、『ハハウエ』と呼んだ人の飼っていた小鳥の囀りを思い出した。
その真綿のような声色に含まれた、針のような、圧倒的な、有無を言わせぬ命令。剛の者達は不満も、何も無く、それにただ従うように八相のまま下がる。
むさ苦しい男達の輪が開いた。
そこに居たのは、その男達よりも厳しい面をした髭だらけの老人だった。
『まさか、こいつがあの声を?』
その男は横にズレると巨大なアカイ槍を肩に立て、そのまま片膝をついて、それを迎えた。

思考が止まった――

少年にも、美しさを理解する心はあった。だが、それが、身体の奥底を破裂させ、自分と言う枠を飛び出すほどのモノだとは知らなかった。
目の前の若武者は、少年の一握りの理性を破壊するほど、美しい侍だった。
若武者は、少年には勝気に見える、女性のような笑みを浮かべた。

「お前は熊でも投げ飛ばせそうな怪力だな」

その言葉で未だ闘争の最中だと言うことを少年は思い出した。幸

い、ざんばらの髪が表情の類を少年の敵に知らせないように出来ていた。

少年は一人の眉目秀麗な、女性とも見紛う若武者と対峙していた。どの兵より小さく、それでもどの兵よりも侮れない相手でいながらも、少年に怖れはなかった。

この者が他の者とは違う事は何と無しに分かった。だからこそ警戒と言う言葉が脳裏を踊っている。

烏帽子の壊れたためか？　髪は額を一周して白い布で収められ、それでも粗暴な武士とは違う、統一された雅な節を魅せていた。

口元に侮る気があるのか？　ただ楽しんでいるのか分からない笑み。

「頼光様、ご自重くだされ。ここは老い先短い儂（わし）にお任せください」

その後ろからぬっと長大なアカイ色の槍を持った老人が出てくる。少年は脅威を感じた。

何故なら今の今まで『そこに』踏み込んだ事に気付かなかったからだ。先ほどまで片膝を付いていたのを省略したような老人の奇を感じるほどに訓練された動きが獣の感覚を騙したのだ。

「坂田、我が部下の半数が手打ち受けて……、私が黙っていると思うか？」

少年は再び聞いた若武者の声を、はばたく直前の小鳥か何かようだと思った。

「頼光様、相変わらず戯れが過ぎますぞ」

「坂田、戯れぬ人の世など詰まらないぞ」

溜息と同時に老人は頭を振って下がると、それに合わせて若武者は地面に落ちていた、手になじむほどの木の枝を蹴って顔の前までに上げて掴み、それを持って構えた。

少年は牙を剥く。刀代わりの棒切れで、我が身に対峙する蛮行に怒りを撒き散らす。

「お前はいい獲物だ、誰にも渡さないぞ」

若武者の微笑に合わせて、何処からか赤い花弁が一片、風に流れる。

それは口に引いた紅のようで、若武者を女性ではないかと思わせた。

自身と得物、双方に風を纏って二人は重なる。

飛び出し様に鈍重なはずの鉞が高速の円を作る。

右から左。

空気に重さをもたらすほどの金属の咆哮。

先ほどの勝負は確実に少年が取っていた。

しかし、闇に隠れた中で発揮された威力は太陽の威光の元、まさしく相手の名前の一文字と同じ、敵の陣では功をなさなかった。

見切った敵は鉞を半歩、身を退くだけでかわす。

音の後に僅かに遅れて、それでも絶妙な拍子（タイミング）で若武者は間合いを侵略した。

あまりにも速過ぎる突撃。少年の鉞は振り切ったまま。

焦り。

引き戻す。

鉞の重さは少年の怪力ならばどうにでもなった。

だが、腕を引き戻すために、反対側に振り切った肘を若武者の手で抑えられては、幾ら戻す怪力でも戻す事も出来ない。

「胴ッ！」

そこから片手で抑えられてがら空きになった胴の、特に肋骨の薄い、肺に近い部分を若武者は片手で激打した。

息が全て抜け落ちる。

膝をついて鉞を落とす少年から、若武者は残心で気を張ったまま離脱。

突如、後ろの方に下がっていたはずの兵士達に囲まれて少年は一斉に殴られる。それは戦友を奪われた復讐の走狗の瞳。
視界が拳で埋まると言うのは人生で滅多に無い機会であろう。
彼らの拳を掻い潜って、最後に槍を携えた老人の蹴り。鳩尾への一撃を最後に、肺に残ったの空気と共に意識が抜け落ちる。
「少年、そなたの名は？」
そんな崩れて重たく暗い視界の中で紅の蕾が名を問う。
少年が獣となる少し前、鬼婆と近辺で蔑まれた、それに反して美しい母から名付けられたその名を少年は呟いた。

「……金太郎」
更に息を振り絞って、少年の意識は途切れた。

21．?部陀（あぶだ）（2／2）

「……で、頼光ちゃんの道中の御土産を期待して来て見れば、何ぁんで小汚ねぇ童子（ガキ）なんざ拾ってくるんっすか？」
「秀武殿、いい加減、上士（じょうし）へは口を慎めと！」
「るっせーな、良いだろうが頼光ちゃんが『何と口調を使おうが、何と私を呼ぼうが構わん』って言ってんだぞ？　貞（さだ）ちゃん如き一介の兵卒が上士様の決定に口挟んで良いことなのか？　ぁあ？　そこんとこ、どうなのよ？　え？」
「秀武殿、それとこれと別でございます。武士道に士は在っても『私』は在ってはならない！　これぞ、武士、士道なりッ！！」
「カッ、一人で感動して咽び泣いてるよ。うぜぇ、これだからお堅い奴はよぉ……」

何日か気絶し、それから眼を覚ますたびに理不尽な鉄拳を食らいつつ、それでも耳に残るあの声で、気絶する一歩手前で助けられる夢を何度も金太郎は見ていた。無論夢でなく、猛烈に痛い、腫れた顔が現実だと主張しているが。

さて、身動きのまったく取れない上、目隠しをされてしまった金太郎はとりあえず、その場の会話にしか耳を傾ける事しか出来ない。口を挟めば今度は猿轡の出番か、またまた土砂降りのような鉄拳制裁の出番なのでいい加減懲りたと言う理由もある。

先程から切り出した岩石の如き堅さをもった人物と、雨上がりに見られる猪の泥風呂の如きゆるゆるの軟弱さを持った口の悪い男、の二人が少年自身を何やら評しているようだ。会話から聞けば、何故かそこそこ歓迎のようなモノはされてはいるようである。

一体誰が、在ろうことか帝直属の、しかも退魔兵団と戦闘を仕掛けた金太郎を取り成したのだろう？　その辺りは大体予想はあの若

武者だろうと検討は付くが、少年はその理由が分からなかった。
　何とも言いがたいが、土牢の中で無く、どうやら感触からすれば板の間の上と言うのは、縛られて目隠しされている事を除けば、かなりの高待遇のようである。
「――と言うことです。武士の素晴らしさ、その生き様。それを今こそ理解して、秀武殿、さぁ、僕と武士を謳歌しましょう！」
「一人でやってろ、ばーか。俺はてけとーに自分のやりたい事ができりゃいいーの、気まま勝手が俺の主義主張なの」
「秀武殿、未だ理解していただけないのか？」
「あぁ、魂の底からな」
　何故か、堅物の方が泣き出してしまった状況に秀武と呼ばれた男は「えー加減にせろ」と言い、それらの反応に対して、とりあえず、金太郎は戸惑った。
「秀武、貞光、やれやれ、お前等は目を離せばまたそれか」
　春風を吹かすように出てきた爽やかな声色。声の調子と言い回しから三人の武士の中では比較的年上に位置するようだ。
「訊いてください、綱殿、秀武殿が未だに僕を受け入れてくれないのです」
「テメー！　何勘違いされるような事言ってんだよ！」
「御前等、やっぱり仲悪いように見せて、そう言う関係（衆道）だったのか？」
「はい、そのような関係（親密な同僚）です」
「チゲーよッ！！　テメーまったく理解してねーよッ！！　俺は女に溺れても、そんな邪道に反れても堕ちても囚われてもいねーよッ！！」

「プッ」
あまりにも滑稽なやり取りに少年が『吹く』と、目隠しても分かる、あからさまにムッとした態度を秀武と呼ばれた男は見せた。ちなみに貞光と呼ばれた男はまだ泣いている。綱と呼ばれた音はただ気配を消し、いや、自らの風を凪いで何をしているのか覚られないようにしている。いや、微かに笑っているのかもしれない。
そのまま声を殺しながらも笑っていると、気付けば、金太郎の笑い声にもう一つの、涼やかな笑い声が重なっていた。
「頼光ちゃん」
「頼光様」
「大将」
秀武、貞光、綱と男の声に続いて、金太郎の耳に聞き覚えのある、あの若武者の姿が反芻される。
「よぉ、お主達はいつも面白いな」
「礼に及びません、大将」
「ヘッ、頼光ちゃん、勘弁してくれや」
「頼光様、東方僻地への人外討伐の任、御苦労様でした」
それぞれの男の返答に「うむ」と短い言葉で応える美声。

そして、突然視界が開けた。閃く光に眼を奪われて、金太郎は一度、目を閉じると、再び瞼を開けた。

目前には、目隠し用の血の滲んだ布を持ち、白い仮絹衣のみを纏った、何とも乱暴な格好（無論、血と泥で汚れた赤黒い腰巻一枚の金太郎に言える事ではない）の頼光。
その後ろに胡座（あぐら）をかいた眉毛の太い、更に口に比例してかついでに目付きも悪い長髪の男。この男が秀武だろう。左手には酒の臭い

のする竹筒が握られている。
その横に坊主頭の神経質そうな細目の男、もちろん座り方は正座、よってこの男は貞光に違いない。ちなみにまだ泣いている。涙もろいのだろうか？
そして、その横に柱に寄りかかり、太刀を持って立つ眼帯をした男。先の二人よりも少し大人びた、それでも十分と若い片目の男が居た。女のような雅な容貌だが、底知れない実力を秘めているように思える。この男が綱に間違いない、と金太郎は検討をつけていた。
男達は小柄な頼光の身長に眼を瞑っても、明らかに並みの男達より長身で身体の至る所が鍛え上げられている。少年は、彼等は若いながらも、あの山で闘ったどの兵士達よりも抜きん出て、あの老人のように強い事を見極めた。
客間であろう場所。戸は開け放たれて、山の自然とは違う、精美を凝らした庭が見えていた。赤から黒へと充密した天蓋は、庭の外の灯り、都の灯りによって些か星は見難く、その代わりに、大きな白い満月が存在感を誇っていた。
「お主達はどう思う？」
頼光は悪戯をする直前のような、子供じみた笑みを見せながら、少年を指差した。
「なみ（生意気そう）やいいきひょう」
竹筒を咥えながら、秀武は応えた。
「どうと言われましても、我が兵団に甚大な被害を与えた大罪人に他なりません」
涙目を擦りながらも、そう貞光は答弁する。
「大将は、どうお考えなのでしょうか？」
風が柳を往なすように、綱は疑問に疑問で返した。
その問いにニヤリと、「お前分かっているではないか」と笑った。

「いいか、今日からコヤツを、金太郎を我等が郎党の一員に加える」

金太郎は何を言っているのか理解しかねた。

「……え？　何？　コイツが俺達の『四人目』なんすか？　こんな奴が？」

「そんな、僕は、反対です。子供ですし、無茶苦茶怪しいですよ！」

「……私は大将を支持しますよ」

驚愕の後、二つの男の反対の声に一つの賛成。

「儂もそれには反対ですぞ」

更に、この間の老人、坂田も何時の間にか板の間の外、廊下から顔だけ出して声を掛けている。反対足す一。

一瞬何かを考えた頼光は辺りを小躯にも関わらず見下ろすように睥睨すると、片手を広げながら挙げて今度は男達に『宣言』をした。

「では、こうしよう。坂田を筆頭に、渡辺（わたなべ）綱（つな）、卜部（うらべ）　秀武（すえたけ）、碓井（うすい）　貞光（さだみつ）の四人でそれぞれ、彼を、金太郎を鍛え、錬磨し、我が郎党に相応しい一人前の武士にしろ。私の【四天王】に相応しい武士にするのだ。以上、異見は聞かない。逆らった奴は首ちょんぱだ。簡単に言えば、これ、【命令】だから守れ、いじょ」

それだけ言うと頼光は『二コッ』と破顔一笑して、その場を去った。

「わーい、横暴だー」

やりどころの無い怒りを飲み切った竹筒を庭に向かってブン投げて解消し、同時に「大馬鹿者」と坂田に殴られて床に叩き付けられる秀武。

「頼光様がまた訳の分からない事を……」と頭を抱えながら再び涙を流す貞光。

「んー、俺、明日早番だから寝るわ」とあくまで自分の調子を崩さない綱。

一頻り秀武を殴ってふと我に返ると「頼光様、そのような事は儂が許しませんぞ」と、頼光を追い駆ける坂田。

そして気付けば、今度は檜で組まれた風呂に金太郎は入っていた。湯浴みでは無いが、暑い時期は滝で水浴びをし、寒くなると近場の天然の温泉にボス猿と場所を争いながらも背中を付き合わせて浸かっていた金太郎は意外に綺麗好きだった。

縄を解かれると同時に、何時の間にか現れた自分と同じ年頃の短髪の女の子に「何かあったら声を掛けてくださいねー」と何故か縄と同じ様にテキパキと服（赤い腰巻）を脱がされて、金太郎自身、今は湯船の中である。恥ずかしがる間も無い程の早業だった。

「なんだ、この状況は？」

普段はあまり使わない、獣でなく人の言葉で金太郎は独白した。殺される危機は逃れたワケだが、どうやらそれ以上の危機に飛び込んでしまった感も無きにしも非ず。

外には足音からして武装した衛兵が四～五人に加えて、あの間抜けな茶番を見せた男達と侮れない老人、そして頼光なる若武者が十重に囲んでいるのだ。金太郎自身、得物の鉞の失した状況で、現状を打破出来るほど楽観視はしていなかった。

つまり、こっそり抜け出るのも何とも難しい。しかも、自分の住み慣れた山の匂いのしない事から、自らの領地から大きく離れた事が分かった。

兎に角、暫くは、ここに世話になろうと胎を据えた。幸い、目隠しをしながらも齧り付いた硬い握り飯はとてつもなく上手かった。山に住むからには狩りをしなければ飯も食えない。ここではタダで飯が出るのだから儲け物だ、と言う些か姑息で合理的な考え方だ。

……とりあえず、身体も十分温まったようだと判断し、水音を立て風呂からあがる。

それと同時、引き戸が開かれ、そこには頼光が居た。
いつものように結われた長髪は今は解かれ、腰ほどまで艶やかな色を保っている。乳白色の肌は些か見慣れた、自らの、獣との闘争で傷付いた金太郎の浅黒い肌からは程遠いところにある。
ただ色々と頭の中で出来上がっていた金太郎の想像と違った。
胸元から膝上まで巻かれた布の下、上半身には男性よりも女性の方が目立つものモノがささやかに、そのもっと下の方には男性には本来あるはずの二つの『モノ』が女性だから無い状態で。
実際のところ、頼光は『彼』では無く『彼女』であった点だ。

「よっ、ちゃんと体洗って入ったか？」
「なっ！？」
金太郎は妙な恥ずかしさを覚えて湯船に慌てふためきながら風呂場を四つ脚で急転身し、飛沫を上げて元に戻った。
しかし視線を戻せば、飛沫の掛かって透けてきた頼光を包んだ布に『自分が見られた時以上に』ドギマギとしてしまう金太郎である。
「お主ー、道楽と言えど浸かれる程の湯沸かすの面倒なんだからな？　湯を零さないように静かに入れよ」
そう言うと、桶で掛け湯を終わらして小さな一人では僅かに広い、小さな二人では僅かに狭い風呂釜に頼光は身を委ねた。
先程まで、広広としていたはずの湯船が圧倒的な勢いで小さくなったように金太郎には感じられた。
「おいおい、何膝折って角で縮こまっているんだよ。仲良くしよー

ぜー」

そう言って、嫌がる金太郎の肩を掴んで引き摺り、ついには同じ方向を向いて並んで浸かるようになっていた。

肩越しに触れる柔らかい、自らの体とはまったく違う体。この相手に俺は負けたのかと、金太郎は自問自答を繰り返す。勿論、念仏などを知らないので気を紛らわして落ち着く代わりである。

「……びっくりしたか？」

上気した頬で、にこやかに微笑む頼光に顔を合わせないように前を向きながら、視界を彼女の裸体から完全にそらして「当然だ」と応えた。

「……まさか、女人だとは、想像つかなんだ」

「まぁな、大抵は驚かれる。でもな、獣のお前なら分かるだろ？裸の付き合いって重要だろ？　何かも晒せば、話しやすくなるってもんだよ。だが、坂田には内緒だぞ？　アレはウルサイから内緒だからな」

実はとっくの昔に気付いているのだが、もう何も言うまいと思っている。ちなみに、闇殺舎の構成員は誰しも一度は一緒に風呂に入っている。むろん、その後は坂田が怖くて、頼光に誘われても辞退する者の方が多い。ちなみに秀武の場合は「俺好みの体格じゃねーからいいや。やっぱ、ぼんきゅぼーんでしょ？」と意外にあっさりと止めている。

とにかく、

「……俺の山の事なら知っているが、下界の事情は、よく知らん」

予想以上にムスッとした少年の声にカラカラと笑い声を男装の少女はあげた。

「……何故、アンタは男の格好して闘っていたんだ？」

金太郎は横目で盗み見るように頼光の顔だけに眼を定めた。ちょっと驚いたような顔をする頼光は、一転して少女らしい柔らかい笑みを浮かべた。

「少し長くなるが、いいか？」

金太郎はゆっくりと頷いた。

皇紀千六百三九年、同西暦九六十九年、千年弱前の日本は人と人外にとっての転換期でもあった。人は魔の住む領域まで侵食するほど発展し、ついには各地で突発的、散発的な小競り合いが起きた。人が団結し、その力を高めるように、人外も人に似た階級性、貴族階級の『魔族』と下っ端の『魔属』などのように分かれて、龍や山神、蹈鞴神のようにそれぞれのの種族ごとにまとまっていった。組織内での序列が決まったのだ。

生命体の集まり、国家が出来れば、次に始まるのは、国家同士の資源の源である領地の奪い合い。戦、戦争である。

山深い近江地方（現在の京都の北東の側、岐阜、長野付近一帯）に集結しつつある人外の集団にして、兵団。それに対抗するために十六年前、第一次対抗武装集団として坂田（きんとき）公時、つまり今の頼光のお目付け役の老人が選ばれたのだ。

ちなみ坂田　公時は当時の貴族の日記である【御堂関白記】などにたびたび登場する優秀な近衛兵であり、実際に源頼光に仕えたと言う記録がある。文中では『見目もきらきらしく、手利き、魂太く、器量ありて……』、つまり『器量に優れ、見栄えのする好男子で、かつ腕自慢の豪傑』と言われていたとの事だ。おそらく若い頃のことだろう。都から相撲使として、力自慢や腕自慢の兵を探しに大宰府（今の九州）へ出掛けるなどしていたため、力自慢や腕自慢程度の兵士に負ける事はないのは当然である。儀式偏重の中で唯一実力を公正に認められた兵である。

さて、話は戻る。熾烈な戦の末に遂に総大将同士のみが残る形となり、当時の人外の長としていた龍ノ目（たつのめ）　時雨（しぐれ）と長い交渉の末、無効二十七年の停戦条約を結ぶに至ったのである。

その当時の三月頃、『安和（あんな）の変』と呼ばれる臣籍（しんせき）、天皇の家系でなく一般人の家系として下った大物政治家、左大臣の源　高明（たかあきら）が朝廷転覆を狙う狼藉者として無実の処罰を受けた。それは当時の人外

との大戦を政界や民草から逸らすため、同時に政界での自らの力を確固たるものとするために藤原氏の上層部が練り上げられた代理脚本（カバーストーリー）であった。それほどの大事件を代理として必要とするほどの大事件だったのだ。無論、それは諸所の御伽噺へと流れ込んで、桃太郎などの鬼畜生を倒していく伝奇活劇の骨組みなったのだと思われる。

そのため実際、平安時代に入ってから国の境界を守るための代表的な関所を越前の愛発関（あちらぜき）と言う場所から、もっと京都よりの決戦予定地である近江の逢坂（おうさか）へと移している。関所などが変えられるのは政変や帝の代がわりなどの儀式的な理由が多かったが、これだけは人外との戦争に備えるために、『聖帝』村上天皇の崩御の際に合わせて補給などの観点から軍事目的で移行したようだ。

ところで、その条約の無効後までの二十七年。人外は着々と都を乗っ取るために龍ノ目を中心に兵力を増強しつつあった。そこで、坂田と、ちょうど頼光の家から都の大路を挟んで反対側に住む、実力であれば京随一の陰陽師、安陪晴明（あべのせいめい）以下数名の天文博士とで協議が開かれ、結論に至ったのはこうである。

第二次武装集団を組織化し、戦争に供える。

そこで出来たのが退魔集団【闇殺舎】である。呪術支援のための陰陽寮と法力の達人集団である延暦寺が組み合い、そして増兵鍛錬の要である侍院から兵を選抜し、加えて当時の戦車にあたる馬を駆使する馬寮を枢軸として機能する、帝公認にして直属の退魔戦特化集団が生まれたのだ。周辺の龍ノ目との関係の薄い人外を狩りつつ、敵を近江に追い込んで的を絞り、戦を決すると言う事だ。

そして、その頭、大将に入るのは都でも認められた武の名家である源の家で、左大臣とも繋がりの深い源満仲（みなもとみつなか）の嫡子（長男）が選ばれたのだ。

それが源頼光である。

だが、しかし、

「ところがどっこい、源　頼光は確かに武才に秀でていたけど、三年ほど前に突然の病で万年床についてしまったのだ。だが、帝の決定を覆せるワケでもなく、仕方なく、こっそりと源家の中から代役を立てなければならなかった。武才に秀でて、器量も良く、顔付きも似ている人物。と言う訳で私が、『源　頼光の双子の妹』源　光（みなもとひかり）、私が選ばれたワケだ」

何だか、話途中から想像の尺度（スケール）がデカ過ぎて金太郎はついてはいけなかったが、とにかく目の前の人物が頼光と言う男でなく、その妹にあたる光と言う女の子なわけなのだ。そして、その女の子はどうやら恐ろしい妖魔と戦わなければならない運命にあるようだった。

手でお湯を掬って自らの肩に頼光は、光は掛けると、そのまま話を続けた。

「兄上の病状は芳しくない。今のところ、ちょうど条約の終わる四年後には病状も良くなるはずだが、あくまで仮として、もし仮に病状が良好にならなかった時には私がその戦場に立たねばならないのだ。そのとき、『私の事情』を知り、補佐となる人物が必要だと坂田は考えた。それが『四天王』制度だ。私の直接の側近として、坂田に代わり、護衛としても、作戦立案、陣頭指揮、直接戦闘も個別に可能な特に優れた四人の武者が必要だと考えたのだ。

今のところ、

矢伏せの達人で武芸に通じた、私の腹違いの兄でもある最年長の渡辺　綱、

二刀使いで地理掌握、陣地形成と諜報戦の長けたの元盗賊頭、卜部　秀武、

攻性呪術や祈祷など、対魔術戦に専用に直々に陰陽寮長、賀茂殿からの指導を受けている碓井　貞光、

が坂田の武術指導の下、訓練を受けている。そして、そろそろ最後の一人を見つけて、軌道に乗せなければならない頃だ」

「だが！」
金太郎は反発するように光の眼を見た。
「だが、何故、俺を？」

身元不明。名は金太郎の三文字。姓も無く、山を根城にする小童が何故眼鏡に叶ったのか？

そっと、金太郎の顔が白い手に挟まれ、互いに眼を覗き込む形となった。
「お主の、眼が澄んで、活き活きとしていたからだ。お前なら、多くの人を救える。人が魔を退け、いや、人が魔と共存出来る『楽園』を作り上げられると、私は直感したのだ」
「……らくえん？」
「ああ、誰も戦う事も、飢える事も、蔑まれる事もなく、全てが公平で、誰もが幸福を感じる場所だ。獣が持っているのだ。人が努力して地上に極楽を持っても罰は当たらんだろう。そのために人外を虐げる事になるかもしれないが、仕方が無い。私は人よりだからな」

光は湯船から上がる。胴に巻いていた布は取れ、その鍛えられても闇殺舎の誰よりも華奢な背には女性の身体に似つかわしくない、幾らかの傷痕が見えた。
この傷痕は一体何時からのモノなのだろうか？
「少し長く話し過ぎたな。今日はここまでにしよう。湯冷めしないようにな。金太郎、お主もそろそろ上がれよ」
引き戸が閉まるまでジッと光を見て、金太郎は口元まで湯船に沈み込んだ。
ぶくぶくとお湯に息を吐きながら思った事は「色白の人の尻って、温まると桃みたいな色になるのだな」と言う、どうでも良い事だった。

「あがりましたねー。それじゃー、金ちゃんも拭き拭きしましょうねー」

アンタ何様だと言う間も無く、体を勝手にいたる所まで拭かれて、白い、光と同じ仮絹衣を着せられて、今は寝床に寝かせられている。しかも、子守り唄を唄いながら添い寝され、気付けば甲斐甲斐しく世話していた方が寝ている。

その女性は（相模：さがみ）と言う名で、実は金太郎より三つも上なので十四、五のはずだが、見た目と言動がそれ以下だったりする。

金太郎をしっかりと抱きしめていた腕を起こさないように静かに払うと、少し長めの絹衣を床に引き摺りながら光の住む本宅から少し離れた、相模などの世話をする端女が住む住居の縁側に出る。ちなみにそこが金太郎の与えられた住処となっている。

縁側は春先とは言え、僅かに肌寒い。温もりと共に松明の光が煌々と火種を爆ぜさせながら周囲を照らしている。口から出た息が人の温もりを白く形作った。

「金太郎」

気配をわざと気付かせながら、男は、綱と呼ばれた男は庭の樹の陰から出てきた。

「座っていいか？」

「好きにしろ。おまえは元々住人だろ」

相変わらず金太郎のムスッとした口振りに、大人らしい苦笑を浮かべて単眼の男が横に座る。

共に向かう視線の先は大きな、冷たい白月。

「大将の、光の決定であるから、私は文句を言わない。命令ともなってしまえば、坂田翁も、秀武も貞光も最後には従うしかない」

何か、決意を求めるような口調を綱は続ける。

「だから、後はお前次第だ。望まぬまま、私等の郎党に組入るも良し。もしくは望むまま、このまま外に抜け出るのも、お前が望むなら私が今手伝うぞ」

金太郎はハッと綱を見据えた。綱のただ一つの黒瞳が暗い中で何故か蒼く光ながら、金太郎の奥底を見透かすように見ている。

「お前は嫌な予感がする。眼は活き活きとしているだが、その先には、何とも言い難い、『終わり』に続いているように見える。私は片方の眼を失ってから、『矢伏せ』、射られた矢を空中で落とす事が出来るようになった。それは少し先の未来が見えるからだが、時々、ずっと先の未来すら見える時がある。こうして、お前の目の奥を見ていると本能が警告を発する。だが、理性ではお前の怪力や運動能力を大きく買っているのだ……」

「……俺は」

「何故こんな事を話したのだろうな」と綱は返答を聞く前に一言言うと、別れも早々に、出てきた時と同じ様に勝手に暗闇に沈みこんだ。

一人残された金太郎はそのまま縁側にゴロリと転がった。冷たい床が未だ風呂でのぼせた頭に心地よく、久しぶりに夜行性の金太郎は夜中に寝てしまった。

「ハイハイ、起きてくださーい。朝ー、朝ですよー、起きなくちゃダメですよー」

勝手気ままに過ごしてたいたはずの金太郎の日常は、いつの間にか相模の制御下に置かれているような気がした。朝、妙な寝苦しさに起きてみれば何時の間にか縁側から寝床まで戻されて、しっかりと抱き枕にされていた。ムカついたので二度寝していると、暫くしたら今度は起こされた。かなり自分の意思を蔑ろにされているような気がした。

その事実にむすっとした顔のままでいると、そのまま仮絹衣ごと背中側を持って引き摺らされ、屋敷でも些か高級であろう、畳張りの部屋に通された。

目前には髪をいつものように若武者の如く結った頼光、もとい光の正座姿。昨日の今日の浴室での事を思い出して面食らっていると「何しているんですかー。ちゃちゃと座ってくださいよー」と相模に肩を押されて尻を着かされた。

その横には「ねみー」と言いながら寝癖気味で整えたつもりなのかよく分からない、中途半端にボサボサの髪型の秀武と朝っぱらから御眼々と姿勢がぱっちりと整えられている貞光。そして、直衣と呼ばれる正装をした坂田と綱が同じよりに礼儀正しく正座をしていた。

片足を立てて尻をついている金太郎の前には、相模によって御膳に乗っけられた朝餉（あさげ）が運ばれてきた。

一般の貴族向けの、堅粥（かたがゆ）と呼ばれた今の御飯ではなく、武士向けの、顎を鍛えるためのただの玄米をそのまま炊いたものである。横には野葡萄を発酵させた地酒ならぬ、地葡萄酒（ワイン）が木の杯に満たされていた。隣の皿には昔の味噌である中国の（醤：しょう）が鮭に塗り付けられている。　醤は、獣や魚の肉をつぶし、　塩と酒を混ぜて壺につけこみ、百日以上熟成させたものである。芹の若菜、煎り豆に、瓜のなます、小皿に塩が同じく膳に載せられていた。それとは別の膳に焼いた猪の肉が載せられていた。

摂津河内の源家は当時の権力者に擁護され、国司（こくし）と呼ばれる、いわゆる地方知事などを頼光の父である満仲から歴任している。国司は当時の貴族間での人気職であり、一年間で現在にして億単位の財源を稼ぐ事が可能であった。それ故に食事などで困るはずが到底なかった。つまりがこの食事が平安貴族の上位の基準なのだ。平民などは米ではなく粟やひえ等の雑穀や下手すると木の根を食していた。むしろ当時としては十分な食事を郎党に賄う源の財力が窺える。武士の富豪と言えば源満仲の家系を指していた。だが言うなれば、武士は粗忽者であり、帝に直接仕える正式な近衛兵である坂田の翁など以外は現在での成金の暴力団と同じ認識だったそうだ。

ちなみに当時は仏教が広く信じられていたが、彼らは本職は武士

であると自覚していた。そのため、やっぱり肉を食わないと身体に筋肉は付かない。そのために彼らの中でも仏法を尊ぶ貞光も「猪さん、その生きた年月を宿した命を……戴き、ますっ、うぐっ」と言いながら、泣く泣く肉を日々食っていた。

そんな複雑な宗教事情などを金太郎が考えられるはずもなく、狩りもせずにただ座っただけで飯が出た来た状態に唖然としていたが、思い出したような空腹と腹の音でそろそろと手が伸びる。が、その前に鈍器が肉を打つ音が鳴り響いた。金太郎の頬で。

「この野獣が、礼儀に従うことも出来ないのか?! 食事の前の礼くらいせんか馬鹿者!」

煙をあげる老人の拳が金太郎を廊下まで弾き飛ばしていた。

ぷっつんと何かのキレる音。

間も置かずに老人との子供の取っ組み合いである。

二十三貫(約八十キログラム)の老人を立たせたまま逆さまに、力任せに持ち上げる金太郎に、その現代風に言うなればブレーンバスターに似た投げを空中で体勢を整えて逆に投げ返す坂田。

返し技で庭まで吹き飛ぶ金太郎。

「この糞爺」と罵る子供に「掛かって来い獣が」と年齢を考えない闘争本能剥き出しの爺さんが庭で暴れる。

クツクツと笑う秀武に呆れたような貞光の溜息。

「ふむ、獣を飼い馴らすのは難しいようだな」と光は訊くと、綱は「まぁ、なんとかなるでしょう」と返答した。

口煩い老人に口と鉄拳で注意されながらもがっつくように金太郎は飯を食い終わると、巨大な白馬、彪凪に光の後ろに乗って連れられて来たのは源氏の屋敷の一つだった。

板張りの廊下を通って薄暗い床の間まで通される。

そして、光に横に窮屈な正座で金太郎は座らされた。

「兄上、加減は如何ですか?」

金太郎の目の前に居るのは、光に似た風貌の、些かにやつれた床に就いた男性だった。

おそらく、彼が本当の源　頼光なのだろう。

顔は死人のように動く事は無く、あまりにも重たく、身じろぎのしない雰囲気に死人を想起させる。時折、喉がひゅうひゅうと鳴るのが、生きている証拠のように思えた。

「兄上、四天を治める持国天、増長天、広目天、多聞天の名を冠する四人、四天王をようやく見つけました」

俺はまだその気は無いぞ、と言いたい金太郎だったが、あまりに深刻な雰囲気に突っ込む事さえ出来なかった。

「敵は強大ですが、まだまだ時はあります。養生なさってください」

一礼をする光を見ながら、何故、兄の代役まで続けて戦うのか獣は不思議に思った。

屋敷を後にしたのち、頼光によって京の様々な場所を案内された。

帝の住む荘厳な、木造の精緻を極めた内裏に、様々な貴族の住む煌びやかな屋敷、内部からはお天道様の高いうちから宴の賑やかな喧騒。平安京の中心を貫く、二十八丈（約八十メートル）の朱雀大路の壮大さ。近場の鍛冶場で響く鍛造の小気味良い音。賑やかな市の光景。

しかし、華やか街並みは南下すればするほど、道端に死体や乞食の広がる場所に変わっていった。そして、雑木林のような荒地に、枯れた田んぼなどが目に付いた。内裏より遠ざかった、四条大路以降の荒んだ光景である。

「例の戦争で疲弊して、民に廻すほどの余裕が無いそうだ」

無言の続く中で、彪凪に揺られる頼光がポツリと言った。

例の戦争、つまり、人外との戦である。

「まだここはマシな場所だ。戦のあった場所は……、地獄だ」

地獄。

その言葉の意味は、知らなかった。だが、全てが、彼の全てがそれを、拒絶していた。

おそらく、極楽、楽園の逆。無限にして無限に続く、刑罰のためだけの悪夢。

寂れた街道の両脇には転々と崩れた家屋が立ち並ぶ。夜盗の横行により、放火によって未だ燻る家もあった。

気付けば、彪凪のすぐ傍に痩せこけた一人の女の子が立っていた。その後ろにはそれよりも僅かに小さな男の子も手を引かれて立っている。どちらも辛うじて引っ掛けた程度の、拾いものであろう袷着を着ていた。

光は馬から軽やかに飛び下りると、懐を弄り、そこから魔法のように笹の葉に包まれた柔い握り飯を渡した。

呆ける女の子と男の子に片目を瞑ってみせる頼光。

「姉弟は仲良くするだぞ？　さぁ、大人に取られぬうちに行け」

そう言って、頼光が彪凪に飛び乗る頃には弟は笑顔を見せながら、意外にも少女はペコリと礼儀正しくお辞儀をして、子供達は走って街の角に消えた。その瞳には僅かな涙が混じっていた。

「……私が始めて戦場出た頃、私が十五だったから二年前か。あの時はまだ突然戦争に出されて、その理不尽さに憤慨していた頃だな。兄上に倣って武術をやっていたとはいえ、女子の身だ。戦場では坂田に守られているに等しいモノだった。『もう二度と戦争には行かん』と腹に決めて命からがらに戦場から帰ると、一人の娘が赤子にも等しい小さな弟を連れていたのだ。……その娘はな、乳を出ないのに一生懸命に、路傍で母親がしていたように乳を吸わせようとしていた。何かに突き動かされるように私はあの子達を引き取れと坂田に命令した。そうだ、命令までしたが、ダメだった。理由は簡単だ。坂田は言ったんだ。『あのような娘達を増やさぬために、今は戦ってください』とな。それから、私は必死になって命を削る思い

で強くなろうとした。戦場の角で重傷を負って死にそうになっても『あぁ、あの娘達や同じような子供はどうしているのだろう』と思うと不思議と力が湧いてきて乗り切った。それから戦場に帰る度にココに来る。あの娘達は見なくなったが、今でもこうして握り飯を似たような娘達に渡してしまうのだ。……気休めにしかならんが、これも私だ。焼け石に水。腹の虫が治まるとでも思えば、それで十分だ」

遠い、何かを望むような視線。

「……」

踵を返し、北上、都の中心地である我が家への帰路へ向ける。

「後四年だ。戦争に勝てば、それでこの都も、いや、ここだけでなく至る所で人外との境界が出来れば、全ての人も人外も幸福に暮らせるそれぞれの【楽園】が出来るはずだ。そのためにお前の力が欲しい。当意即妙な風の如き綱の武術に、秀武の水のような柔軟さを持つ情報収集力と解析力、堅牢な大地にも似た貞光の魔法の結界形成能力、そして、燃え盛る炎のようなお前の闘争力が加われば、四つの柱が揃う。私に、力を貸してくれ」

獣として生きていただけの少年に突然のように人のように生きる意味が与えられた。それは進化と言っても過言で無い程の激変である。未だ単に山に帰ると言う、ただ自分のためだけに生きている金太郎の人生に対して、全ての民を救うために、傷だらけになりながらも生きると決めた一人の少女。誰もが望む、ただ楽しく生きるための【楽園】。

獣には有って、人に無いもの。

今更のように、人としての生き方を示された少年の生きる道は――

「ひか……、頼光。犬は飯を食った恩を忘れないと言う意味を知っているか？」

頼光の眉毛が「ほぅ」と意味を問うように掲げられる。

「山に帰っても特にやることも無いしな。飯も上手いし――、ちょっと付き合ってやるよ」

「……お主がここまで物分りが良いとは思わなかった」
金太郎はフッと笑うと「獣から人となるのも悪くはない」と格好をつけてみた。

次の日、礼儀作法に口煩い坂田に色々言われるのは可哀相だろう、と言う相模の配慮で先に金太郎は朝餉を食べさせてもらった。二日に渡る満腹感に気を良くしていると、計ったかのように現れた光に中庭に連れられた。そこには長い木刀を担いだ綱や足の裏で座る、現代風に言うなればヤンキー座りで左肩に二本の小太刀を載せた秀武。錫杖を持ち、そのまま黙想をしている貞光。刃に当たる部分に皮を巻いてある槍を持った坂田が居た。
「では、皆の衆。手筈どおりこいつを鍛えてくれ」
そう言うが早いか、光は金太郎の背中を押す。
「ちょっ、得物も無いのに何をするもるさっ」
反論する間も無く、綱から木刀での横殴りの一撃を受けて真横にもんどりを食らう。
「隙だらけだぞ」
奮、と微風のような鼻息一つする綱を睨み付けると、手足と胴体の反動を使って起き上がる。
「くたばれッ」
肩から振り回すように殴りかかろうとする金太郎が綱に拳が届く直前、もう一歩のところで足を躓かせた。
「足元が留守だぞ」
と、嬉々とした表情で先ほど足を引っ掛けた膝から下を見せるように挙げてプラプラさせる秀武。
顔面着地を見事に成し遂げたところから、土埃を挙げて金太郎は跳ね上がるように立ち上がる。
目前には貞光が居た。

「さぁ、どうぞ」
背格好も三人の若武者の中で一番一般人に近く、一見は飢餓に陥っていた金太郎よりややふっくらとした程度の細身の貞光。手加減無くやれば、一撃倒せるだろう相手に金太郎は獣が爪で襲い掛かるように掴みかかろうとした。
「あーぁ、やっちゃった」
秀武の言葉と同時に、貞光はその場から眉間、鼻下、喉、鳩尾、臍下に息も吐かせぬ、連突きを放った。
全ての直撃を受けて、金太郎はそれぞれの打撃箇所から煙を上げながらその場に仰向けに倒れこんだ。
「流石、俺達の中で一番容赦が無い」
「痛くなければ覚えませんから」
さらっと怖い事を言うと貞光は錫杖の柄の先を地面に叩きつけ、幾つもついた鉄の輪を『しゃらん』と鳴らした。
「まだ終わっていませんよ、さぁ！　さぁ！」
そのまま、倒れたままの金太郎。
「なんだ、もうくたばったのか？」
そう訊く秀武に応えるように、「ぬ？」と倒れこんだ金太郎を手近な綱は覗き込もうとした。
瞬間、
「掴ーまーえーたーッッ」
牙を剥きだしにした形相で覗き込んでいた綱の胸倉を両手で掴んだ金太郎。
「うらぁっ」
立ち上がりながら、ぶんと音を立てて、綱を地面から引っこ抜くかのように空中に投げ飛ばす。
「甘い」
だが、飛ばす直前に手首を逆に掴まれて、何時の間にやら空中でバランスを整えた綱は地面に着地すると、逆に横回転の竜巻のように空中で三、四回転をして投げ返された。関節に逆らえずにふわり

と浮き上がった金太郎を今度は綱は地面にうつ伏せに引き倒すと、そのまま胸倉からすっぽ抜けて、掴んでいた直前の交差した手首をそのまま踏んだ。ちなみに金太郎にとっては投げた筈の相手に一瞬で手首を踏まれて束縛されている状態だった。

「うぉぉ、離せ、この野郎」

「戦場でそう言って離す奴は居ないな」

やけくそになった金太郎はうつ伏せの状態から背を反らして綱の胴体に踵を叩きつけるような蹴りを浴びせる。だが、綱は分かったかのように真後ろからの避けようの無いはずの踵を掌でやすやすと受けて掴むと、そのまま足首を掴んで引っ張って金太郎をえびぞりの状態に持っていった。現代風にいうとプロレス技のＳＴＦである。

「おっ、ぬっ、うぉ、なんで力、が入ら、ないんだよ」

「んー、煮るも焼くもお好きに感じだな」

綱は余裕ぶっこきの表情で空いた片手で腰元から竹筒を取ると水を飲み始めた。

「綱の【触れ合気】か。あれやられると、触ってる場所から力が抜けるんだよな」

「えぇ、あれは綱殿独自の技ですからね」

かなりやばい角度のえびぞり金太郎を眺めながら暢気に解説する二人。

「んじゃ、金太郎が昼飯まで耐えられないに布一端」

「秀武殿、私は賭けは致しませんぞ」

「では私が一口のろう、耐えられるに米一石でどうだ？」

「光様！　賭け事はほどほどになされ、と私は常々と……」

金太郎の努力も虚しく、四人の会話を最後まで聞く事なくそのまま気絶した……。

眼を開ければ、既に夕方だった。夕暮れの遥か遠方から時を打つ法隆寺の鐘の音が聞こえる。

辺りを見回せば中庭には誰もおらず、ただ無数の人の動き回ったと見られる足跡があった。

呆然と尻を突き、そのまま金太郎は膝の間に顔を伏せた。

あまりの寂しさと久しく感じなかった孤独感、そして、今まで獣にすら負ける事のなかった金太郎は圧倒的な強さに悔しさで自然と涙が零れてきた。押し殺そうにも後から後からポロポロと涙が零れる。

「く、くぞ、うくっ、ひっ、うぅぅ」

初めての敗北。

それにより近づく足音にも気付く事はなかった。

「金ちゃん」

相模の呼びかけで、肩をびくりと震わせる金太郎。

「な、泣いてなんかねぇぞ」

顔を隠しながら言う明らかに説得力の欠けた物言いに相模は苦笑すると、洗いざらしの白布を渡した。

「はい、泣いてなくても少し顔を拭いた方が良いですよ？」

しばしの沈黙の後に布をひったくるように取ると、目元をゴシゴシと拭いた。

「悔しかったんですか？」

拭きながら、コクコクと頷く金太郎に静かに相模は頷いた。

「男は悔しい時こそ、泣いた方が良いんです。きっと、金ちゃんは明日も負けるでしょう。でも、少し、今日より強くなります。また明日も負けるでしょう。でも、今日よりずっと強くなっています。今日の事は涙を流した時点で終りです。明日の涙を流さないように、何時か、あの三人に勝てるように頑張ってください」

ピタリと頷きが止まる。いぶかしんだ相模が近寄ると、その胴体に金太郎はぎゅっと抱きついた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

京の北東、頼光宅で野獣の慟哭が響いた。

「ち、何だよ。気になってきてみれば、相模ちゃんの年齢に合わない巨乳に必至と抱きつきやがって」
邸宅の襖から覗きながら、邪な感情を抱きながら感動的な場面をぶち壊す秀武。
「まぁ、いきなり全力でいったにも関わらず、三人とも手を合わせられたのですから、彼は才能が有ると思います。今までの兵士は綱殿に掛かった時点で『参りました』ですからね」
その頭の真上に位置する貞光。
「まぁ、負けん気だけは、今のところは優秀だな。翁、彼をどう見ますか？」
稽古疲れで大の字に寝っ転がる綱を、今日の日記を書く坂田がちらりと外の金太郎を一瞥して、
「明日もぶっ潰すだけじゃい」
とのたまった。

一方、金太郎を慰めに一足遅れた光は相模に抱きつく金太郎を見てぽりぽりと頬を掻くと、口を窄めて少し不満そうに「ま、いっか」と言い捨てて、すごすごと私室のある本殿へと戻った。

次の日も金太郎はボロボロだった。その次の日もボロボロだった。
一週間経ってもまだボロボロだった。
「くそ、何で全力で行っても掠りすらしないんだよ」
いつものように夕方、獣は座っていつものように唸るでなく、人のように考え始めるようになった。
速度（スピード）、筋力（パワー）は小さいながらも三人を驚かせるほどだった。しかし、それでも何か、彼らに到達するものが足りなかった。
「大体からして俺の方が速いのに何で当たらないんだよ」
鬱々とした感情を夕暮れに、掠れた遠吠えのように解き放った。

「教えてやろうか？」
　ひょっこりとそんな金太郎の頭越しに出て来たのは、今まで教えたくてうずうずしていました、と距離感でバッチリと表す、おでこが金太郎の鼻にくっ付きそうなほど躍起になった光だった。
　絹糸よりも細く真っ直ぐな髪が金太郎の前にカーテンのように掛かる。本来なら顔を覆うように囲む、うざったらしく感じるはずのそれが、夕日の光を受けて髪と髪との小さな隙間から金糸のようにキラキラと輝いていて金太郎はそれを綺麗だと思った。
「何だよ、最近見ないと思ったら、急に出てきて」
　でも、何故かそれを口に出すには些か安っぽいように感じられて、何故か逆に突き放すような言い方を金太郎はしてしまった。
「ははっ、すまんな。私とて武官とは言え官人の端くれだ。一時は公務に追われる時だってあるものなのさ」
　むすっとする金太郎を面白がって頭を振って髪をゆらすと、前に立って金太郎の手を握って立たせた。
「さて、簡単な事さ。どうだ、私に全力で掛かってくれば、直に分かるはずだ。と言うか私は親切だからな、存分に教えてやるぞ」
　にこにこと楽しそうな顔でひらりと軽快に後ろに下がる。その間合いはいつもが金太郎が飛び掛るのと同じ間合いだった。
「女のお前に全力で掛かれるはず無いだろう？」
「その全力で女に負けたお前は女未満だな？」
　呆れた金太郎の口調を光はさらりと返すが、とうの言った本人が先にぶち切れた。
　弾（ダン）っと地面を蹴って、縞馬に飛び掛る獅子の如く両手で光をわし掴もうと跳ぶ。
　しかしそれが届く前に光にあっさりと頭を片手で押さえられて、そのままその手を支点に回転して投げ飛ばされる。
「まず最初にお前の攻撃は馬鹿正直で真っ直ぐだ。真っ直ぐな事は良いが、相手には真っ直ぐには向かえていない。攻撃が荒いからだ」
　再び起き上がる。しかし、背中を可能な限り曲げて四つん這いに

近い、野獣の構えを見せる。そこから、今度は真っ直ぐでは無く横に飛んで、斜めから鉤爪のように曲げた拳を振り回して突進した。

しかし、光は金太郎に逆に真っ直ぐ向かう。だが、当たる瞬間に脇の下をするりと抜ける。金太郎はそれに呆気を取られていたら、そのまま光の真後ろにあった庭木に激突した。

「次に、お前の攻撃は何となく読み易い。反射だけで勝てるほど甘い人間にはここには居ない。考えて、それからそれを雷光の速度で実行しているから早く、そして確実なんだ。攻撃の到達する速さで勝負する前に技が出る早さに負けているんだ。云わば、武は後出しジャンケンなんだ。勝てる状態を作って読んでから勝てる手段を実行しているんだ」

庭木から顔を引き剥がすと、そこから庭木を登り上がって真上から飛び掛かった。落ちたとしても、光の真後ろは池で左手は雑木林。逃げる場所も足場の確実な、前か、右手しか無いと金太郎は考えた。

しかし、光は動かなかった。

そのまま、金太郎の掴みかかる両手を片手で腕を撫でる様に巻き込んで、そこから喉に手刀で打ち据えた。

「ガハッ」

「後は単純な事だ。お前は背が小さいのだから間合いの取れる武器を使え。鉞も良いが、振り回すだけの攻撃は反撃が簡単に取りやすい。本来なら小さい時には懐に潜り込んだ方が良いが、それは一対一の時だけ有効だ。お前の場合は力もあるし、それを揮う得物を小さくするのはおしい。以上だ。後は頼むぞ、相模」

物陰に隠れていた相模は「バレちゃいましたか」と舌を出しながら金太郎を助け起こそうとした。その横を光は晴れやかな顔で過ぎ去る。

「さぁ、金ちゃん、ぼぅとしてないで起き上がっ、熱っ」

反撃を無防備な状態で受けて倒れた金太郎。しかし、彼の眼には、この間のような悔恨すらなかった。

燃えていた。

金太郎の体が焔のように熱くなっている。
助け起こそうとした相模がその助け起こそうとした掌を見ると、少し火傷のように赤く腫れていた。
「金ちゃん？」
人間では有り得ない、焚き火のような放射する熱を四方に撒き散らす金太郎がついに、笑い始めた。
「楽しいな」
強い者と戦う事。一度敗れた事で余計な自尊心（プライド）を捨てて、金太郎は渦巻く力の方向が分かり始めてきたのだ。己と他の強さを比べる。敗れれば、それでも生きていれば、強くなってから挑む。弱さを臨む事で、強さの形が、そこへ到達するための最短手段が見出されてきたのだ。
何よりも、渦巻く力を全力でぶつけられるのが楽しかったのだ。
「金ちゃん、そんなところで寝ていたら、風邪をひきますよ」
そんな気もしらずに、ほかほかになった掌をふぅふぅ息を吹きかけて相模が冷ます。
「知るか。いや、今は動きたくて、動きたくてしょうがないんだ。何かに今は思いっきりぶつかりたい気分なんだ」
「……え、ぶつかるって、まさか、私を押し倒す気じゃ……？」
窮屈そうな胸元を押さえて、金太郎から驚くほどの速さで後摺り去る。
「何だ？　押し倒すと何かあるのか？」
「いや、その、何でも無いのですけども」
「……あぁ、頼光は行ってしまったし、綱は自宅、貞光は読経をしに寺に行って、秀武は歓楽街か……。誰か他に今手合わせてしてくれる奴居ないかな？」
童子に突然押し倒される妄想で悶々とする相模の気も知らずにそんな事を金太郎が呟いた時、稽古場のほぼ正反対にある表門から開いて、誰かが中に入る馬蹄音が聞こえた。
「あ、公時様がお帰りになられましたね」

「爺か、アイツくらいなら俺の相手にはなるだろう」
「何を言っているんですか、公務から帰ったばかりですよ？　大体からして急に言われても心の準備が、きゃぁぁぁぁぁぁ」
突然、相模は真っ赤になった顔を覆っていた。何事かと金太郎は寝っ転がった状態から飛び起きると、庭のど真ん中には褌（ふんどし）だけになった筋肉隆々の老人がいた。
「朱雀通りまで届くほど屋敷からとんでもない気を発しおって、久しぶりに、……騒ぐわい」
むん、と胸を張りながら、両腕を掲げ、二の腕と胸筋、迫り出した腹筋を強調させるような独特な姿勢を作り出した。後世の肉体開発家（ボディビルダー）が見たら、元映画俳優の合衆国州知事の現役時代を思わせるような見事な体格だった。
棍棒で殴られてもびくともしなさそうな太い首に、力が綺麗に抜けた、それでも肉が付いたために矢印に見えるでかい肩。矢が二、三本刺さってもびくともしなそうな厚い胸板。腹筋などは殴った相手の方が痛くなりそうな厚みを持っている。丸太のように太い腕に、それらの上体を支える足は野鹿のようだ。所々にある傷跡は様々な戦闘経験を経た事を暗に物語っていた。ほぼ素っ裸にも関わらず、重装備と形容できる肉体美を誇っている。
体からは金太郎と同じように、言うなれば気のようなものがチリチリと放射されていた。
「ほれ、何時まで突っ立っておるんだ、野獣（小僧）」
坂田はやたらと楽しそうな顔で拳を作って、地面に付いた。
「禁じ手は拳と眼と玉だけだ。後は蹴ろうが地面に叩きつけようが何しようが」
グッと地面に伏しながら、下から気合だけで吹き飛ばしそうな姿勢をつくる。
「自由じゃわい」
坂田の言葉と同時に、今まで煩わしかった、とでも言うように着物を剥ぐと金太郎も同じように構えた。

相撲だった。必要な距離である立ち合い線の間を身体で測って、七十を越える老人と十代が始まったばかりの子供が立ち合った。本来なら孫と祖父の楽しい戯れに見えるはずのそれが、周りをぞっとさせると殺伐とした空気を纏っていた。

そして、何故かは知らないがやたらと熱い。二人のまだぶつかり合う直前にも関わらず、形容しがたい磁力のようなものがぶつかり合って膠着し、鬩ぎ合って二人を中心に熱を帯びていた。

「発氣用意（はっきよういい）……」

老人の単眼と金太郎の未熟ながら燃える瞳が見合う。

「――残ったァッ！！」

長徳元年（西暦９９６年）五月、内裏北東で鳴り響いた怪しい破裂音は肉と肉のぶつかりあう音だった。

翌日、一番早く稽古場に来る貞光よりも早く坂田と金太郎が居た。金太郎は坂田の槍を持って延々と一定の動作を繰り返し、坂田はそれをじっと見つめている。

「おや、お二人とは珍しい。ところで御二方、その額の瘤はどうしたのですか？」

ピタリと金太郎は止まって、貞光を見る。同じように坂田も見て

いるのに気付いて、流石に鈍感な貞光も「何かあったのだろう」と察して、杖術の型に没頭する事にした。

その日からのは金太郎の日常は凄まじいものだった。

ついに始まった老人の武術指導（鬼の扱き）は熾烈を極め、型に始まって、礼儀作法、一度でも受身やら受け手を仕損じれば「未熟者」と罵られながら更に拳骨の嵐を受けた。

綱の『合気』とか言うシロモノは金太郎の熊を投げ飛ばす膂力を持ってしても、投げたはずなのにまるで赤子の手を捻るかのように逆に投げ返された。それ以上に太刀を持たせれば人とは思えない程の強さなのだ。本当に刀で矢を落とす、矢伏せの術を見せられた時には金太郎は唖然とした。四方から射掛けられながらもそれを竜巻のように落としてしまう。それでも、それ以上に調子の良い時には【矢止め】、矢を素手で掴めると言うのだ。その内には雷ですら止めかねないと金太郎は心底思った。

秀武も秀武で軟派な態度と口の悪さをしながらも、二刀を持たせれば一つの凶器となった。流れる水のように攻め手は刻々と変化し、気付けば横、背面、間合いの内へ入り、一本取られていた。肝心なところで勝利を目前にしながら足場を取られるところに誘い込まれたり、砂を顔面に掛けられたりと、勝機を掴んだ瞬間に逆に奪い取る事に秀武は長けていた。「まだまだだな」と皮肉げな眼で語る秀武に負けぬように金太郎も掛かっていった。

貞光も貞光であの性格だから手を抜く事はない。刃の無い棒が肉を裂いて骨を砕く凶器となるのを身を持って知った。お陰で貞光が「まだ終わっていませんよ、さぁ！　さぁ！」と言う度に錫杖とそれに付けられた金属の輪が『しゃらん』と音を鳴らす癖が耳に残った。お陰で以後、道端を歩くまったく関係の無い僧兵が出すその音に微妙にビビッてしまう金太郎が居たりする。

得物は超重武器の鉞から同じく超重武器の大槍に自ら金太郎は変えた。同じ超重武器なら短躯による間合いの不利を克服するために

も良いだろうと言うことだ。それに源の郎党では知る人ぞ知る大槍の達人中の達人でもある『神槍』と呼ばれる坂田からも指導を仰ぐ事が出来る。

だが、何よりも金太郎が好きだったのは弓の時間だった。公務で忙しい光が合間を縫って手取り足取り教えられた弓は、気付けば都でも騎射で右に出る者は居ないと言われた光にも月に一度くらいで届くほどの的中率の技量となっていたのだ。

光が「弟子が師以上に上手くなると妙に悔しくて嬉しくなる気持ち。私にも分かったぞ」とこっそりと金太郎の昼寝中に坂田へ語ったと言う。

ともかく自然と、金太郎は日々ボロボロになる中で強くなっていったのだ。持ち前の運動神経の高さによって僅か六ヶ月で貞光に、九か月で秀武に即死と断言できる寸止めの一撃を与え、一年半を過ぎる頃には綱にも冷や汗を掻かせ、二年目には公時を唸らせる打ち込みを加えるほどまでになったのだ。十二、三の子供が、運動能力で勝る十七、八を圧倒し、経験を積んだ変態級の達人七十代に肉薄するのだ。尋常ではない。最初は敵意と殺意を持っていた闇殺舎の兵団員達も、その実力を認めて馴染むようになり、遠い未来を見越して四天王に相応しい南の方位と掛けて『南の若』やら『持国天様』、その誉れる怪力から【怪童丸】殿なんて呼ぶ者もいた。

姓の無かった金太郎には『坂田』、老人の性が与えられた。都の役所には老人の妾との間に出来た隠し子とされたのだ。無論、老人に若い子供が居たと言う事になった（光の独断）ので、宮中で坂田に「若き元人妻歌人との愛びいき」や「実は先帝の妹の娘との悲恋」がなどの尾ひれや背びれ、オマケに触覚まで付く勢いで根も葉もない噂が何処からともなく立てられ、「本当にそちにそんな事があったのか？」と内裏で現帝である一条天皇に問い詰められて大いに老人は冷や汗を掻いたと言う。ちなみに翌週、ボコボコにされて逆さに木に吊るされた秀武が発見されたが、理由は言うまでも無い。口

は災いの元である。

ところで一番金太郎の教育で苦心したのは礼儀だった。食事はつい、いつもの癖で手掴み、鷲掴み、礼は無し、後片付け無し、素足で土足、夏の暑い日に床下に穴を掘って犬のように寝るなどの、獣っぷりの大盤振る舞いだった。老人の旨とする士道において無作法が断じて許されるはずも無く、「未熟者」の怒声と共に鉄拳と足蹴が飛んでいった。そんな事に一計を案じたのは光だった。相模の家事の手伝いをさせる、と言うトンでもない思いつきは功を相した。金太郎の視点からして、いつもヘラヘラしているように見えていたはずの相模の手際の良さ、食べ物を粗末にしない折り目の正しさや、光で無く、頼光として接する際の細かな礼儀は感嘆させられた。実は源家に拾われた没落貴族である女房、いわゆる現代で言う所のメイドに値する相模は元々の育ちの良さを持っていた。その礼儀と立ち振る舞いは劇的に作用し、金太郎は食卓を手伝いながらも礼儀を同時に学んでいったのだ。気付けば、炊事洗濯掃除を「金ちゃん、最っ高！」と親指を立てて相模に褒められ、「実は武術より才能があるのではないか？」と光にからかわれたりもした。

そんな中、相模の影での炊事の苦労を見つめながら「お前も努力家なのだな」と不意に言って「金ちゃんも、裏手でよく一人で武術の稽古しているのだから同じじゃないですか？」と言い返し、お互い何時の間に見ていたのだろう、と逆にドギマギしてしまう場面があったのは二人の秘密である。

と、そんな今までの二年間を思い返しつつ、金太郎は風呂に入っていた。

何時の間にやら、四天王で一番身長の低い貞光を追い掛けるように大きく成り始めている。今風に言えば成長期と言う奴だろうが、当時の近辺ではあまりに突然大きくなるので「実は鬼の子供ではないか」などと噂をされていた。実はただ単に栄養不足で成長しなかった分と成長期の時期が重なっただけだが、当時の事情と言うか、取り繕う理由としてはそれで十分だった。ちょうどその頃、「実は

老人の子供は鬼婆との子だったらしい」と言う新しい噂が流れて、またボロクズ同然、死に体の秀武が頼光の庭の先の木に吊るされた。その時は金太郎が目の前で自分の作った飯を空腹の秀武の前で食う暴挙に出たが、老人の鉄拳はまったく無かったと言う。それに「おのれ爺が色気を見せやがって」と訳の分からない呪詛を秀武は吐いたと言う。

金太郎の鍛えられた肉体はガリガリとは言わないが、子供時代の引き絞られすぎた身体に更に潤いが満たされ、そろそろ相模も赤らめた顔を隠しつつ「うわああ、色気感じてきちゃって私もう無理だわ、負けました」と何時の頃からか敗北宣言と共に拭き拭きを無くされたりした。「楽だし、結構気持ち良かったのになぁ」と金太郎がちょっぴりしょげたのは誰にも内緒だったりする。

僅か二年で多くの物が変わった。

それでも、変わらないモノはある。

突然、金太郎の入っていた風呂場の引き戸が開かれ、戸口には光が居た。

「よっ、ちゃんと体洗って入ったか？」

「いつも同じ台詞なのだな」

いつも通りの展開に呆れつつ、風呂の隙間を空ける。掛け湯を済ませて入る光の挙動。触れ合う白い肌と浅黒い肌、そしてその隙間の温もり。

「ふぃー、日頃の疲れが取れるねぇー」

「今日も内裏に行ってきたのか？」

肩に光と同じように湯を掛けながら金太郎は問うた。

「あぁ、明日頃にはお前の始めての帝のお目通しだ。正式に、とりあえず、綱の侍童（身の周りを世話をする子供）として推薦した。帝の竜顔を拝するのだ。この間、覚えた正装の着方、忘れてないだろうな。現帝との御目通りだ。竜顔を歪ませるような、私に恥をかかせるなよ？」

「無論だ。もう着物の右前と左前を間違えたりはしない」
その言葉にカラカラと笑う光にムッとしつつ、金太郎は返した。
「本来は十二からなのだが、お前には礼儀を教える方が難しかったからな、少し遅れたが、まぁ良いだろう。それにしても……」
同じく肩を並べる金太郎の爪先から眼までを光は見つめる。
「大きくなったな」
嘆息するように光は言った。
「頼光が小さくなった……、ワケでは無いな」
「馬鹿者、私を鈴繰（すずくり）の亜人のように伸縮自在のはずがあるか」
「何!?　ダイダラボウシのような巨人やら逆に小人になると言う種族！　あれは真実なのか?!」
とぼけた顔で「どうだろうなぁ?」と光ははぐらかす。
ムッとなった金太郎は光の顔にお湯を掛け、まともに掛かった光もそれに負けじと掛け返しを始め、気付けばお湯は肩口から鳩尾くらいまでに減っていた。
ズブ濡れに成りながらも、金太郎と光は笑い、そして沈黙に戻った。
ゆったりとした今でも変わらないモノを感じ取る。

「大きくなったと言えば、光の胸は全然変わらな、痛ッ」
「そこから先を言う事は命令する。禁句だ」
光はむくれた顔で拳を湯船に戻す。
「了解。俺もジジイ以外からの拳はいらないからな」
「……私でも、少しは気にしているのだ。比べて相模の大きさはなんだ!?　何だか怪しい加地祈祷でも行なったのではないか?!」
「いや、個人的にはアレが普通の成長だと思うが?」
「むぅ、あれがやはり標準か」
嘆息しながら自らの胸元に悲しそうな眼を寄せる。本当は標準よりも相模は遥かに上なのだが、光を落胆させないためにも黙っておく事に金太郎はした。実際は教えた方が良いのだが。

「確かに男性として変装する分には問題無い、と言うより都合が良いが……。十九女子（おなご）としてはまったくもって悲しいぞ」
「ご尤も」
それだけ言うと金太郎はそそくさと上がり出す。
何も変わっていない、そう金太郎は思っていた。
しかし、金太郎の中ではムズムズとする、あまり良くない変化が最近起きはじめていた。
それは身体でなく、心の変化。
「なんだ、もう少し浸かっていかんのか？」
「明日の朝餉の準備をする。相模だけに任せて置けない。唐土（もろこし）から土で作った鍋と言う物が届いてな。昨日鹿肉が届いたから、それでまた新しく創作料理を作ってみようと思う」
背中を向けながら金太郎は顔だけ向けて返すと「おぅ、お主は時々変な事を料理でするが、全部上手いからな。料理は期待しておるぞ」とぼぅと湯に浸かりながら返した。
「では、また明日」
「あぁ、お休み」
脱衣所に戻ると光の体の一部始終が鮮明に脳裏に思い出されて金太郎の体の奥が疼いた。自分が発情期の獣のようになるのかと思わず、人に成りかけていた理性が反応して顔が赤く染まった。
「確かに、そろそろ、ヤバイかもな」
具体的にどうやばいのかは言えないが、とにかくそんな感じだったのだ。

翌日、昇殿のその日。
昇殿とは帝の御座所である清涼殿の南に殿上の間と言う控え室があり、ここに上ることが出来る資格である。位において五位以上、現代風に言えば公務員のキャリアとノンキャリアの境くらいから入

る資格を有する。しかし、大変名誉でありながら平安時代の武士、大物に属する源や平の家系でも入った事は記録には残っていない。何故なら先に記した通り、この当時の武士は名誉職でなく暴力団扱いであり、狼藉者風情が天皇の膝元である清涼殿まで入る事は許しがたい事だったのである。

しかし、ここで一つの特例が生じる。源頼光の郎党である坂田公時は近衛府に属する者である。近衛の名から察せられる通り彼は帝の本当の直属の護衛兵士の一人であり、当時の六衛府、近衛、兵衛、衛門の最上級に属し、内裏の最奥の警備をするエリート中のエリートなのである。その彼が、彼女、もとい頼光の下に就く事により、権力の不可思議な逆転現象が起こり、彼女ら郎党が嫉妬深い藤原実資（ふじわらさねすけ）に睨まれたりしながらも、清涼殿に入る事が出来るようになるのである。

加えて坂田公時は平安後期の博識者である大江匡房（おおえまさふさ）の著書、『続本朝往生伝』に一条天皇によって二十の専門職から精選された八十六人の様々な技能の達人の一人として掲載されている。ちなみに、頼光もその一人として入っている事も付け加えておく。この昇殿は帝との直接の意見交換が必要とは言え、記録には残っていないにしろとても異例な出来事であった。

目前には、人としての理性を圧倒する巨木の門。そして、その門は理性を極限まで高めた者のみがくぐる資格がある。建礼門と承明門の二つが目の前に立ちふさがる。

獣の嗅覚が拒否の色合いを見せたが、それを理性で押し留める。

「怖気づいたか？」

いつもよりも些か着飾った光の姿に、後ろには馬子にも衣装と言った感じの、意外に正装の似合う秀武。明らかに僧兵にしか見えない黒尽くめの貞光。いつもの格好にちょっとだけ洒落た、狂猛に睨む虎の柄が入った眼帯をつけた綱と、いつもはボサボサの髭を油で今回は固めてある坂田。

「ほら、とっとと行け」
秀武からの尻を蹴り上げを前に出て避けて、そのまま金太郎は奥へと進む。
人の持つ権威の重厚さが見られるような建物の造りを目の端で眺めながら、先頭を進む光を追う。

帝との御目通りのための清涼殿に通じる紫震殿の出口前、右手に桜、左に橘の木の立つ間を大男が立っていた。
身の丈は六尺六寸（約百九十九センチ）、烏帽子を頭に重ね、白い着流しに白い手甲、白い足袋。それだけ白に身を包みながらも、その全体の清純さに狂ったように逆らった、黒い印象の男が立っていた。
「これは、これは闇殺舎、もとい左馬寮の長、源　頼光殿では無いでしょうか？」
嫌味ったらしい笑みを浮かべ、両腕を広げて男が迎える。
まるで、それは闘争者を迎えるような……。
演技なのか、素なのかを判別しないうちに金太郎は無意識の内に儀礼刀に手を掛けていた。
その抜き打ちの構えの柄元を手で、さり気なく秀武は押さえていた。貞光と綱は何時の間にか金太郎の前に立ち、まるで飛び掛るのを止めるかのように立っている。
「これはこれは、安陪晴明どのではござらぬか。今日は帝への用でいらしたのであろうか？」
安陪晴明。当時の都の陰陽寮の天文博士の一人であり、闇殺舎の呪術的支援を行なっている者の一人である。実力は折り紙つきだが、当時の権力構造は家柄が重視されたため、安陪氏より賀茂氏が陰陽寮の長として優先されていた。齢は坂田よりも多く、既に八十をとうに越したはずだが、まるで二十代か三十代のように見える謎多き男である。貞光の呪術の師の兄弟子でもあるが、兄弟弟子であるはずの貞光自身から見ても掴みどころのない人間である。

「再び、北東の方角の呪が歪みましてね。あそこの結界を強化するように、との申し付けがございました」

一体どうすればこれほど下品に笑えるのか、理解出来ないほど小さな笑み。それは人を見下すかのように僅かな孤を描いていた。まるで、その結界を消して、周辺の人がどう死んでいくのかを見つめるのような禍った眼に金太郎は見えた。

「で、そちらの子は？」

禍った瞳が向けられる。背骨の下から冷たい氷柱が捻りこまれたように金太郎は感じた。冷気が多足虫のごとく、ゾロリと這い上がる。そして、獣の感覚が告げた。この男の本性は『悪』だ、と。

「我が臣下の一人に過ぎませぬ」

ピシャリとそれ以上の詮索は止せと言葉巧みに綱が切る。

「しかし、この面々の一員ともなれば、ただの殿上人（昇殿を許された上級役人）の付き人の一人とは思いますまい。噂の、頼光殿の拾いし『鬼子』、獣を、人外をも引き裂くと言われる怪力から『怪童丸』とも呼ばれる子だと思うのは私の思い過ごしでございましょうか？」

如何にも玩具に飢えた子供のように、その悪は引き下がらない。

「詳細は帝よりお伺いください」

切り札を出して坂田が最後を締めた。まさか帝の名を出して追求はしないだろうと言う見込みである。

「そうですか。それは……、楽しみです」

クスリと笑う晴明は悪びれた様子を見せている。懲りてはいない。そのまま、音も無く光達の一団の横を過ぎる。

彼の後ろには赤い、人が着るとは思えない奇妙な衣を羽織り、口元には上に向かってはねた髭を持つ男と、至って普通の、何故か妙にイヤラしい視線の男の二人が付き従っていた。

「なッ」

何時だろうか？　何時彼らが現れたのか、最も感覚の鋭い金太郎

も、未来すら見通す綱すらも気付かなかった。突然、『異界』から抜け出たように、まるでこの世の者とは思えないほどの性質を備えているように、その怪人達は見えた。

そのまま、角を曲って三人は視界から消える。

「前鬼と後鬼」

光の声。それは珍しく、畏怖の分かる声色だった。

「何だ、それは？」

「晴明が使役すると言う異界の鬼だ。何千里もの距離を飛び越えて現れる人喰い鬼、ショクジンキとも言うとか……」

そんな、異界常識を従える狂った男……。

その後の帝の御目通りも記憶に残らないほど、あの陰陽師は印象的だった。

22．刺部陀（にらぶた）（1／4）

――蒼ひ焔が蝋燭の芯の上で踊る。その命尽きへるまで、踊り狂ふ。

煤が閉じられた空間の中で所在無く上に舞い上がる。暖められた空気で舞い上がった煤は再び塵となって舞い落ちる。

蝋燭に揺れる光の中では闇の中は完全には判別し得ない。正に混沌だった。

その闇と光の境界に男が居た。

目を閉じて語らうのは異言、大陸の詩。いや、そんな詩に似た、――呪詛。

最後に「怨」と一声で世界の奥底、予め決められた法則を発動させた。

陰陽道で【式】とは特別な意味を持つ。【式】は『物事の繋がり』で自然の運行や法則を読み込んで、人為的に干渉することである。しかし、その結果は至極まともなモノである。【呪い】と言う【式】を打つことで他者を意図的に精神錯乱（ヒステリック）にさせて、自殺や病気にさせることも【式】を打つと言う最古の【魔術】となるのである。星詠み、もとい太陽の黒点の具合による天候の変異や電磁波干渉を予測する事だって【式】を読むと言う、やはり【魔術】となりえるのである。言わば古代の【魔術】の一端は進んだ、進み過ぎた超科学（オーヴァーテクノロジー）の一つとも言えるのだ。

そして、京で最も【式】を読める男はこの男を置いて右には居まい、と言われるのは安陪晴明と言う一介の天文博士である。陰陽寮の長では無いが、実力は形式で置かれた賀茂と言う呪術の師だった

者、その息子である長を明らかに凌いでいると言われている。
現帝からも頭蓋骨の軋む痛みを取り去って（実際はただの偏頭痛の催眠治療）からは、現在では事あるごとに現帝から信頼を置かれる男である。

男が、目を開けた。

「前鬼　あるでひど、居るのであろう？」
「ここに」

まるで空間を飛び越えてきたように、赤い見慣れない衣を羽織った男は片膝を立てていた。ピンと跳ねた髭は上方を向いている。
「『例の女』の息子は捕らえただろ？」
「はっ、我が身に留めております」
時も場所も異なる場所から来た異次元の鬼、いや騎士は応えた。

彼らは、次元も、空間も、法則も違う場所から召喚された騎士である。
彼らの口は異次元と繋がり、王の命を尊守して、様々な接収、言わば、王のための話し相手を拉致ったり、異次元の品を無断で集める異次元の人間であり、彼の世界の言葉を訳すと騎士と呼ばれる、帝のような者に仕える武士の一人なのだそうだ。

本来は彼らの、異界の騎士王の為に激務で謎の緑色の液を栄養剤代わりに飲みながらも飛び回る日々だが、騎士の掟である「　呼ばれた者には終わるまで応えよ　」があるために現在は晴明に付き従っている。
先の掟はつまり静養の意味でもあるのだが、それでも王からの激務と晴明の命令が大して忙しさが変わらないのは応える相手を間違えたと言った所だろう。個人的には彼は自らの世界である小さな騎

士候補の女の子の召喚に応えたかったが、僅かなタッチの差だった。羨ましいです、騎士団の二位の男である上司のヴァカンスを思って心中に刻む日々。加えて、静養中でもくっついてきた騎士候補の男はどうしようもないくらいにだらしがないのだった。胃は無いが、同じような辺りが痛むのは万国共通、いや、全異世界共通と言ったところだろうか？

「そうか、あの女も愛息子を捕られては流石に、手も足も、あるいは尾も出まいて」

宮中では決して見せられないであろう、げらげらと下卑た笑いを晴明は挙げる。

「あとは【予測】と実践のみだ。これで戦を決する事が出来る。あの女は無駄に義理堅いからな。負けさせればその後は結果に従うだろうさ」

「左様ですか。その頃には、私はお役目御免と言ったところでしょうね」

「あぁ、俺としては君ほどの式神を手放すのは惜しいが、契約は契約だ。むろん我が家の十二、三の女中ばかりをたぶらかす幼女趣味の騎士候補とやらを一緒に連れて帰れ」

「分かりました」

「それと奴に言っておけ。アノ娘達は俺専用だ。手出しするな、とな」

「……わ、分かりました」

その返事に機嫌を良くすると、自らに酔うように手で顎を撫でながら顔を傾け、晴明は呪文の効果を高めるために焚いた、香を含んだ蒼い焔の蝋燭を反対の手で摘んで消した。

暗転――。

23．　刺部陀（にらぶた）（2／4）

無数の手が褌のみの男達の間を走る。
首の裏、脇の下、手首の周り、肘の外、腿の横。
足元は高速で動きながらも砂埃すら立たず、二人の男の、互いの足を鎌のように狩ろうと動く。
それは【相撲】だった。
槍も、矢も、刀も無くなった時、最後に頼るは己が肉体。
それを金太郎と坂田は鍛えていた。
金太郎の握力は青々とした竹を握り潰しながら、引き千切るほどであり、妖とて掴まれれば、大蛇の如く拘束され、そのまま地面へと叩きつけられるのだ。
現代でも柔道の試合などと見ての通り、取っ組み合いなどの投げ極めるの術は相手の身体を音速で捉えるために、相手の掴もうとする手を叩き、逆に掴み返す場面などが見られる。その手の速さは時として、拳闘家（ボクサー）の左の拳（ジャブ）を越え、眼で捉えるのも困難である。
故にそこから先、相手の攻撃を捌くには、金太郎の如き動物的勘や坂田のような無数の戦闘経験から導かれる洞察力での先読みでしかない。
ちなみにその技量はただ頼光のお墨付きだけであり、彼は未だ、一度も魑魅魍魎（ちみもうりょう）どもと戦った事が無い。
金太郎がついに坂田の首と褌を掴み、地面へと叩きつける。
二十貫を超えるの坂田の巨躯が蹴鞠（けまり）のように楽々と浮かび上がる。
しかし、その直前、坂田は首の裏に回された手を、首を回転させながら解き、逆に金太郎の手首を掴んで、空中で肩に乗っかった。
音を立てて金太郎は顔面から地面に叩きつけられ、そのまま完全に肩を極められた。
金太郎の投げに逆らわず、逆に金太郎の投げで逆に極めながら、坂田は投げたのだ。

「くそ、まいった」
「いつも、言っておるだろう。貴様は膂力に頼り過ぎて、力に振り回されておる。残身、『投げ切る』までが相撲の極意だとな。それと、勘に頼りすぎるな。勘は一時的なものに過ぎない。戦闘に於ける理は最初から最後まで貫ける。槍の如く、意を集中させるのだ。戦闘のための理論が貫ければ、思考そのものが攻撃となる」
「……。済まん、最近、何か集中力が欠けているんだ」
「……分かっているならもういい。儂も疲れたから休む。その場で槍の内受けと外受けを左右、両手と片手、それぞれ千回やったら上がっていいぞ」
「……分かった」

金太郎から別れ、本宅へと荒布で傷跡だらけの身体を拭く坂田。
「（今まで、圧倒的に少ない経験を補うために『東』の、金太郎の妖魔覆滅の代わりは儂がしてきた。だが、この身体もそろそろガタが来ているみたいだな）」
突然、坂田の手がガクガクと震えだし、布を取り落とす。
それを取ろうと、膝を突いて、そのまま動く事も出来なかった。
「（やはり、儂も先は長くないのか？　だが、大丈夫だ。金太郎はもう完成しておる。武士として、四天王として……）」
坂田は「怒（ぬん）」気合を入れて、立ち上がると、そのままいつもの足取りで本宅へと隆々とした肉体を動かして戻った。

金太郎はあの昇殿と呼ばれる稀なる帝との御目通し以来、ボォとした日々を送っていた。
鍛錬は無論のこと熾烈を極めていていたが、それでも何処かあの【白くて黒い男】安陪晴明なる術師が気になったのだ。無論、その事を坂田も分かっているためか、自分の中で整理がつくまで放って置くつもりだった。
獣の感覚があの男を敵だと断定していたが、人として培った理性

がそれを押し留めていた。
しかし、彼も内裏の最終防衛線の戦線に立つ者の一人である。いつまでも子供や獣のように感情に振り回されて敵意を見せても仕方がない。再び相手の意をよく見極めるべきであろう。簡単なのは相手と面を向かわせることだ、とやや早計に、しかし野生の本能に従って金太郎は敵ともつかない男と二度目の対峙をする事にした。

宮中にほど近い、土御門大路、その北町小路西の一条戻橋を挟んで、安陪晴明とは向かい合う形で源頼光は邸を構えていた。そこは近辺の京都御所からすれば鬼門に当たる位置となっている。
北東は陰陽道の理からすれば悪い氣、呪いの霊気装甲の生成されやすい、鬼の出づる方角と呼ばれるモノであり、同時に近江地方に近いこの方角は突然の人外からの物理的な襲撃に備えるために源頼光の家を中心に、防衛の要としても同時に機能していたのだ。

金太郎は別に彪凪の伴侶にして金太郎の愛巨馬である『羅王号（らおうごう）』に乗る必要は無いだろうと、そのまま徒歩で晴明の邸宅へと向かう。
黒籐に磨かれた正門に立つ。殿中にも上る貴族階級にも関わらず門番が一人として居ない。だが、晴れ渡る青空にその邸宅だけが薄雲が掛かるように影を落としている。場が乱れている、と野獣の直感が告げる。それもその通りで、魔術的な結界の一つ【尊大】によって近づく者を圧倒するようにその場は設定されていたのだ。しかし、立ち向かう事を前提した金太郎に取っては僅かに邸宅の雰囲気が違うと言う程度しか気に掛けないのだ。
「正四位が源　頼光様の郎党にして渡辺　綱殿の筆頭侍従、坂田金太郎。天文博士　安陪　晴明殿に御目通り願いたい！！」
金太郎の名乗りと共に、固く拒むように閉じられた扉が、獣が顎（あぎと）を開くように誰の手を借りる事も無く音を立てながらゆっくり開けられる。
「虎穴に入らんば、虎子を得ずか。問題は虎子でなく化け物虎が待

ち受けているかも知れない、だろうか……」
金太郎が喉の奥へと飲み込まれるように入ると、扉は同じく誰の手も借りる事も無く、顎のごとく閉まった。

廊下も、居間も、金太郎の目に付く場所全てがガランとしていた。人のいる気配が感じられるにも関わらず、その姿形だけが写らない違和感を感じる。
もしかしたら背中に張り付くように居て、そして耳元で囁くのを待っているかも知れないと金太郎の思った。
――矢先、
「その通りだ。待ち兼ねたぞ、小童（わっぱ）」
金太郎の体が硬直よりも先に、初めて背後に感じた気配に腰から短刀を抜く。
振り返りながら背後への一閃。
それはあろうことか、二本の剛直な指で止められていた。
素人ならば腹が斬割。玄人でもかなりの刀傷となる一撃をまるで『そう来ると分かっていた』、【予測】したかのようにその男は止めた。
「無礼な、尋ねた人物に刀を向けるとは、あの老人の教育も大したモノではないな」
金太郎の睨む先にはあの時と同じ白い絹衣を着た晴明が立っていた。
「無礼はどちらだ？　向かい入れた客人を茶化すのは大概にしろ」
そこでクスリと白い歯を見せて、男は黒く笑う。
「決まっているだろ？　君の主人と同じだ。興だよ。ただのお遊びだ。それに本気になるとは、まだまだだね」
短刀を指先から離す。流石に金太郎の剛力を受け止めきれなかったのか、血が滲んでいた。それをペロリと舐め上げる。
「だが、怖れる獣に噛み付かれたのは私の責任だ。気にする事はな

い。……客間に来たまえ、もてなそう。酒は呑めるな？」
「……そこそこな」

一刻の時の間、二人は無言で何処から取り出してきたのか知れない新鮮な川魚の焼き物と、瓢箪に入れられた酒を、角が僅かに掛けた御猪口を持って飲み交わしていた。時折、視線だけが隣りの男をなぞる。
敵意ともしれない感情を持て余すように金太郎は片膝を立て、落ち着かない様子を見せている。
黒い男、晴明は悠々と胡坐を掻いて、御猪口を傾けている。

「神は何だと思うかね？」

突然、白装束の男が放ったのは疑問だった。
金太郎は、何かに後ろから押されるように衝動的に、それでも逡巡の後に澱み無く言い切った。
「力だ。圧倒的かつ抗い切れない力。それを祀り、敬う事で人は神を作り出した。山の神秘と憧憬は巨人に、稲妻の轟きと畏敬は雷神になるように、力が神となったのだろう」
「……まさしくその通りだ。完璧な解答だ。坂田　金太郎殿」
膝を叩いて、その事を喜ぶ晴明。
「そうだ。抗い切れない死を祀ったモノは冥界の領域では死神とも呼ばれたりするな。では、逆に【人】が祀られる事があれば、逆説的に『力を得て神に成ることは有り得る』かな？」
「……」
金太郎は答えかねていた。いや、答えは出ていたが、それを出すにはおこがましいような、そんな心境を湛えている。

「最近では菅野道真の神格化もあったくらいだからな。可能なはずだ。もし、人を【生きたまま神として祀る』ほどになるには強い、人の感情を一点に集めるような感情が必要だろう。それは例えば、『恐怖』などが都合が良い。恐怖は魔そのものだ。魔性を帯びる代物だ。では、人が『恐怖自身』となった時、それは何と呼ぶべきだろうか？」

金太郎は背中から電撃が走って、脳まで痺れるほどの衝撃を感じた。そして覚った。まさか、この男は本気で……

そこで着物に隠れた晴明の袖の中で指がパチンと鳴らされる。

「それ以上を『考える必要は無い』。今日は、然る時までの役者の確認だ。君の持つべき力はここで私を相手に発揮するモノではない【予定】だ」

脳に染み渡るように響く言葉が、波紋となって、これまで邸宅に入ってからの出来事を、いやそれ以前の決心した直前まで揺らいで消えていく。

「なるほど、強い『運命』だ。異界の隠者ども、時守（ときもり）の運命を作る筆が成せる御技か。さて、私はそれを乗り越える事が出来るか。予測は予言を、いや、神の作った『預言』を覆せるか？　神に、運命に挑む、か」

そして、揺らぎは風呂から栓を抜いたように渦となって消えた。

金太郎は気付くと大路のど真ん中に立っていた。手元には酒の入った瓢箪と桶がぶら下がり、桶の蓋をずらして見てみればその中には川魚の焼いたモノが入っていた。

「はて、これは？」

『君は鴨川に釣りに行った帰りだろ？』

誰かが耳の後ろから囁くように声を掛ける。

「そうか、そんな事を忘れてしまうとは、日々の稽古で疲れたかな？」

納得するように、誰かに糸を張られて、操られるように言葉を続ける。

操縦者がクスクスと下品な笑いを挙げたような気がしたが、それは直後に馬蹄音によって遮られる。

「何をしているのだ？　金太郎？」

そこには昇殿帰りの、金太郎が自ら絶対の忠誠と微かな想いを誓う大将が居た。

騎馬である彪凪もデカイ舌でベロンと金太郎の顔面を撫で上げる。獣同然の金太郎は、人なら馬の口臭でムッとするところを平気で捉える。むしろ笑顔だ。少し前、山に居た頃なら何処かの動物王国の王様みたいに「よしよし」と言いながら逆に舐め返したくらいだろう。

「そうそう、鴨川まで行って釣りをしてきたのだ。そこで晩酌にコレを使わないか？」

金太郎の申し出に嬉しそうに「いいな」と了承し、「乗れ」と言葉を続ける。

金太郎は馬具も使わずに跳躍のみで光の後ろに飛び乗る。

短い距離にも関わらず、光と金太郎は互いの体温を確かめるようにして、帰路に着いた。

その後に金太郎の持って帰ってきた酒に触発されて、坂田が遠出をして居ないこと良い事に全員で酒宴を催された。

見た目通り酒に弱い貞光はそのまま一杯目で意識不明になり、実はそれほど酒に強くない綱も秀武と光の「呑んで呑んで」の煽りを「いや、ほら、明日もあるし、あれ？　言いたい事は逆に呑んでからじゃないですか？」とノラリクラリと交わしながら自分の呑みたい調子で呑み続ける。秀武がいつか山賊時代にやったと言う呑み比べを光としている最中、金太郎は冗談で光が言ったつもりだった命

令の樽の丸ごと飲みを二杯目まで進んでいた。相模もこの騒がしい面々を世話をしながら同時に混ざると言う離れ業をやってのけた。

結局夜通しで起きていたのは樽四杯目でようやく酔いの廻ってきた金太郎と、途中で光の家の宿舎とは別の自宅にさっさと帰った綱だけだった。相模は途中から疲れてきていたようなので「先に寝ていろ」と金太郎に言われて「それじゃお言葉に甘えて」と女房の宿舎に向かった。

「んー、眩しぃ」

金太郎の筋肉で硬い、それでも竹の枕よりは柔らかい膝枕をして貰いながら寝ている、無防備な光が呟いた。未だ微睡(まどろ)んで瞬く琥珀の瞳。

秀武は都の南方の歓楽街にある一番可愛い女の子の名前を呼びながら……、貞光に抱きついて居る。ちなみにその貞光は応えるようにひっしと抱き返している……。論評(コメント)回避。

とりあえず金太郎はその二人が寝ているのをしっかりと確認すると、光に視点を移した。

髪留めを取った黒髪は乱れて顔に寝汗と共に張り付いている。琥珀色の瞳は白い瞼の裏へとひた隠しにされている。こうして見慣れても、未だ高鳴る金太郎の鼓動は、一つ一つが彼女のために奏でているようだ。

そして、白い肌の中に浮かぶ赤いくちびる。

眩しいと言う朝陽を、光の顔を覆うように金太郎が頭で遮る。

鼻先と鼻先が触れ合うほど近く、そして、鼓動に合わせて、すこしづつ、くちびるとくちびるの間が縮まる。

ピクリと揺れ動いた、光の睫毛も気にする事無く……。

「頼光様ー。お客様ですよー」

相模の不躾な呼び掛けと足音でピタリと、金太郎は【間合い】への侵蝕を止める。

頭をぴったり戻したところで、ひょいと顔を出す相模。

「あっ、金ちゃん、頼光様に膝枕してるー。ずるーい」
「……何がずるいのだ。で、客人とは？」
必要以上にブスッとした、そしてやや慌てた、まるでムリヤリ背筋を伸ばしたような金太郎の態度と物言いに相模は首を傾げつつ、
「分からないのよー。『頼光殿に会えば分かるの一点張り』で」
心底困ったと言う言葉使いと溜息をし、それを見ていた金太郎の強張った眉間を弛緩させた。
時は『男尊女卑』の華々しい平安時代。男性の応対には男性が出るのが務めである。女性を軽視というワケではなく、そうである事が普通だった時代なのである。無論、頼光の場合は彼女が男性であると言う前提なのだが。
「分かった代わりに俺が出よう」
「お願いします」
玄関を抜けると、牛車用のではなく、徒歩用の、貴族用で無い門の外で一人の男が待っていた。
禿（はげ）だった。年は肌の張りと声色から三十歳と少し。それでも剃ったわけでもなくツルリと、額が干上がった湖のように毛髪が枯渇していた。それでも幅広の烏帽子で隠すこともなく、堂々と構えた恰幅の良い男だ。綱や秀武のように流線的な、速さを醸し出した筋肉のついた体つきではないが、ただ単にガタイが良い、骨格のしっかりとした男性である。太刀のような武具の類は身に付けていないようだから恐らくは武家の者でなく、文士の者だろうと金太郎は思った。
徒歩で来て、しかも簡素な身なりのわりには要所要所がこざっぱりとしていて気品が嗅ぎ取れる。しかも、そこに貴族特有の嫌味ったらしさは無く、同じ武士と同時に貴族である頼光のように自然とした、生まれの良さが見受けられた。口元に生えた髭は切り揃えられているが、それは威厳よりも人の良さを見せているようだ。
「そなたは何者か？」
が、山から人の住む【下界】に来てその辺りの感覚と日の浅い金

太郎には、庶民風の禿たおっさんが何か来た程度の印象しかなかったので、片手を腰に当てながら不躾とも言えるような誰何（すいか）の声を挙げた。

「こいつぁ失礼。宮中で、ちょいとばかし頼光殿と交流のある『みちなが』と言うただのおぢさんだよ。ちぃとばかし、頼光殿が気になってな。こうして御目通りを希望したわけだ」

「みちなが？」

何処かで聞き覚えの有るような名だったが、金太郎の脳裏には浮かぶ事は無かった。

「ふむ……、残念ながら、俺の記憶には無い名だ。素性の知れぬ者にこの門をくぐらせるわけにはいかない。今日はお引取り願おうか？」

すると男は残念そうな顔をし、

「そうかい。ならまた機会があれば会うとしよう。と言うか君ぃ酒臭いぞ。程ほどにな」

ってな具合に納得してそのまま歩き去った。

「変な禿だ」

「……聞こえてるぞぉい」

八丈（三十メートル）も離れて居るのに聞きつけるとは、まさか妖怪の類では無いだろうか？　「すまん」と横柄に返して、「まぁ、光を煩わせるのも何だし、別に報告する必要も無かろう」とそんな益体のない事を考えつつ、金太郎は屋敷の内へと戻った。

次の日は金太郎も含んだ昇殿の日程であった。参議と呼ばれる貴族達が無駄に凝った儀式に則って、やれこうだ、いやいやこうだ、と延々と理屈と屁理屈を繰り返す退屈極まり無いものだ。帝と言う最高責任者が居ながら、その命を受け取った後で、更に茶々を居れてツマラナイ時間の浪費を繰り返す時間だ、と金太郎は思っていた。綱の背後で、頼光の面目を潰さないように如何にあくびを噛み殺すか。その程度のものだ。同じように思っていただろう坂田の言葉を

借りれば精神修養の時間でもあるだろう。こんな下らない牛の歩みのような儀式をしているくらいなら、そのうち部下になる予定の闇殺舎の兵士五人と同時に戦う時の戦術を頭で考えていた方が楽だと金太郎は思っていた。無論、彼を含めて、横で不精髭を弄りつつ、歓楽街の女の子をどう同じ夜に口説こうかと考えている秀武やら今日の晩飯のことを考えている綱と同列に非常に退屈な時間だった。

真面目に聞いているのは、そろそろ統括者として、現場のお目付け役からは引退を考えている坂田と石細工のように硬く、まさにくそ真面目な貞光。そして最高責任者として真っ向から本気で真っ当している、一生懸命な頼光くらいのものである。

「――では、以上のように取り決める。それでは良い日頃を」

ようやく日も明けて幾ばかもしないうちから天頂に昇るまでに至った会議が終わった。金太郎達は足の痺れを気にしつつ、立ち上がるとそこに、金太郎の目には見覚えのある人物がいた。

紫の衣に狩衣を羽織った、先程まで一番上座に座っていた恰幅の良い男性。ちなみに昨日とは打って変わって、しっかりと幅広の烏帽子で額を隠していた。

「あ、昨日の禿」

直後に反射的に暴言を吐いた金太郎の後頭部に思いのよらぬ衝撃が走った。

その後ろには拳を握って嫌な汗を流している頼光の姿。

「ば、馬鹿者!!　そこの方は我が直轄の上士にして、左大臣藤原道長大殿（みちなおおとの）だ」

時の最高権力者、帝に次ぐ権力を持った男。数々の政敵を退け、宮を手中に治め、後に摂関政治を行なって藤原氏の栄華を誇らせる男である。

現在彼の冠する左大臣は、『聖人君子』である必要もあるために不在の多い超名誉職である『太政大臣』を除けば、帝の家系以外の平民で頂点に立っているのである。

そして、帝の意向もこの道長の手に掛かれば捻じ曲がってしまう事も政治の体系上罷り通っている。故に、実質の政権の最高権力者と言っても過言ではなかったのだ。

「そうです。このおぢさんが道長さんなのです、ははは」

「……も、申し訳が無い」

流石に金太郎も理解はしてはいなくても、耳がシュンと垂れた犬のように、頼光に掛けた迷惑を思って大いにしょげた。

「この馬鹿者」と金太郎の後頭部を持って光は、詫びをさせるようにがんがんと板の間に叩きつけた。強制土下座である。

「うわははははっ、気にするこったぁない。おぢさんがちょーっと魔が差して若いのに悪戯をしてみただけやて」

豪快に、無論の事ながら帝がその場におらず最高の権力者の一人だからこそ出来る、周りを気にしない笑いを放ち、頼光たちの気を和らがせる。

「……しかし、坂田の息子くぅん、昨日の今日の『禿』は、……戴け無いのぅ」

一転してやたら低い声色に金太郎一同から汗が流れ出る。しかも、滝のように。

「これはのぅ、禿じゃないのだ。ちょっーーーぴり色ーんな心労で髪が進退窮まっただけだ」

前進どころかどう見ても全力で後退しているようにしかその場に居る人間には見えなかったが、突っ込んでも嬉しい事が何一つ無いので口を噤んでいた。いわゆる、どうみても禿です、本当にありがとうございました、と言う表現だ。いずれ出家する際にも頭を剃る必要が殆ど無いだろう、と彼の頭を一度でも見た人は統一の見解を持っている。

「いいけぇ？　おぢさんの事を呼ぶ時は年長だから藤原さんかー、もしくはイカした良いおぢさんって呼ぶんだよ、分かった？」

パッチリと現代風に言うなれば、ウィンクする姿はイカれた禿にしか見えなかった。

「左様でございますか……」
　頼光一同はふかぶかと、それこそ直立したまま額どころか後頭部まで付きかねないような礼をしていた。
　そこを公務用の狩衣の袖から洗練された動作で手をだして「まぁまぁ」と道長は諌める。
「そうそう、頼光殿にあった用が一つ有ってな。明後日に私の邸宅で宴を催すのじゃが、そこに『魔族』から脅迫状の類が叩き付けられての」
　頼光達に衝撃が走った。
「なんと」
「私も取り止めにしたいのは山々なのだが、ちぃとばかし身内だけでの宴のつもりが客が多くてな。遠客も含めて中止するには骨が折れるし、前『院』までお越しになるから中止自体も出来んのだ」
　当時、摂関政治の根幹となるように彼は帝に妻として自らの娘を差し当てたのだ。つまり前の院とは、つまり『先々代の帝』を指す、と言う事である。引退したとはいえ、やんごとなきお方の血筋である。それを狙ってくるのは、偶然か何かとは思えない。情報が漏れてるかもしれないにしろ、彼らには黒幕の検討すらつかなかった。
「それは……一大事ですね」
　唸る頼光に、
「うむ、そう言うわけで、宴の警護は宜しく」
「はっ？」
　満面の笑みで親指を立てながら命令する道長さん。
「うん、着飾って出れば武家の者とは人外も気付かぬはずだ。特に頼光殿、そなたは女性客を護衛するために『元々の女装』は必須ぢゃからな。……と言うわけで我等に紛れて屋敷の警護に当たってくれ。何も無ければ、特別に、まぁそれぞれ楽しんで貰っても構わん。それぢゃ」
　頼光の「ちょ、左大臣大殿、無茶な」と引き止めようとする言葉は、相手の「ぬはははははははっ」と言う快活な笑い声に塞がれて

しまった。
「……あの御仁、大将に『女の格好』をして来いというのか？」
そう一同にあえて聞く綱に誰も、俯きながら拳を握ってプルプルと震える頼光を見て答えようとは思わなかった。

そして当日。
昇殿の時と大して変わらない窮屈な服装に身を包んだ金太郎が門の前に居た。ちなみに基本的に金太郎は裸族なので、素のままに鎧を直で着たり、何も着ない方が具合が良いらしい。
羅王号も装飾のついた鞍を付けられて、同じく窮屈そうな顔をしながら金太郎を負っていた。
いつものメンバーもそれぞれの愛馬に乗って、頼光を待っている。だが、雰囲気はいつもとは違った。
「……ぷふ、おい、金太郎」
「なんだ。秀武、普段以上に薄気味悪い笑みを見せるな」
「ばぁか、頼光ちゃんが久しぶりに『女装』してくれんだぜ？　これが笑わずに居られるか？」
ククククッと音を立てて、歯茎を剥き出しにするような下品な笑いに金太郎と貞光は冷たい視線を向ける。
「秀武殿。いくら頼光殿がその……、お美しいからと言ってなじるような発言は聞き捨てなりませんぞ」
「おめぇ馬鹿か？　ちゃんと褒めてるっつぅーの……ぷふ」
「秀武。貴様、今、笑わずにと言っていたではないか」
「さぁなぁ？　金太郎も気になるだろう、な？」
「知るか、ただの服装の変化だろうが、動揺する方が阿呆だ。それに、俺は頼光の女の姿など見た事は無いから笑いどころが分からん」
「いや、笑いどころは関係無いですよ」
「大将が来たな」
綱の呟きと共に、牛車用の正門が開かれた。
赤を基調とした十二単を羽織る。黒髪の少女、いや正しく美少女。

もとから紅を注したような唇には、更に印象付けるように魔性の赤が上乗せされている。琥珀の双眸は胡乱げで、見た者自身が何かの目映さに当てられているようだ。

当時は中肉中背で垂れ目、眉が太く、顎が丸い女性の方が好かれたようだが、そんな事を押しつぶしてしまうような圧倒的な輝く美貌が彼女にはあった。

それと同時に出てきた坂田の無駄に厳しく顰めた爺っ面を見て、漸く呆けた状態から元に戻る一同。あまりの美観の差によって秀武は「うぉえ」と一度吐き気を催し、頼光の従者としてその後に出て来た、予想以上に着飾りの似合う相模を見直して、「うん、これもいいねー」と口直しをしていた。

ちなみに相模は眉毛の太めで痩身だが、代わりに胸周りは当時最高峰だった。元々、凹凸の目立たない日本人らしい体型にあう着物が、胸元がきつめに感じられ、紙一重で神秘の領域だった。

「可憐だ」

貞光の、いつもは何処かズレている発言が今回は的を射たと見え、続く「俺たち阿呆決定な」と言う秀武の発言に押されて、「うんうん」と一同は首を上下に振った。男とは皆こんな生き物なのだ。

「うぉぉ」と歓喜の声を挙げて目を輝かせる秀武。

「なんだ……、この感情は！　ただの女官で見慣れているはずの単(ひとえ)が俺の心を惑わせる、狂わせる。分かったぞ！　この草の芽が自然に萌芽するようなこの感情！　よし、俺がこれを【萌え】と名付けよう」

「誰か、この馬鹿を黙らせろ」

光の冷ややかな突っ込みに「んじゃお言葉に甘えて」と気を取り直した綱が馬上から飛び蹴りで答える。蹴られながらも「ごふっ、どうやら俺の時代は早過ぎたようだぜっ」と、親指を立てて無駄に爽やかに地面を転がっていた。ちょうど千年くらい早過ぎたようだった。

「こほん……、大将」

「美観についての意見は以降禁ずる。命令だ」
「りょ、了解」
光は気丈に振舞ってはいるが、その姿に慣れていないせいだろうか？　若干心細そうに、そして同時に恥ずかしそうに顔を赤められると説得力と言う言葉からは程遠い。恐らく十二単の袖の下では固く拳を握っている、間違いない。
「それでは、留守は頼むぞ。……身体を大事にしろよ、坂田」
「……發（はっ）、お任せくださいませ。ほれ、童子、とっとと行かんか」
「ほら、金ちゃん、もう行きますよ？」
頼光が牛車に乗るまで見届けていた金太郎は、坂田と相模に声を掛けられるまで見届けるどころか魅入っていた事に気付き、それでも「あぁ」と分かったかのような返事をしてみた。
「童子」
その背に、坂田は声を掛ける。
金太郎が振り向くと布に包まれた、金太郎の身長よりも大きく、分厚く、重い何かを放り投げられ、それを掴んだ。
「これは――、まさか！？」
「『交代（かたじけ）』の時間だ。後は、任せたぞ」
「……忝い」
「馬鹿もん、渡すのが遅れたくらいじゃわい」
そう言うと、何時の間にか持っていた杖をついて、邸宅の奥へと坂田は戻った。

牛歩で揺られること四半時。邸宅の前には公務時の派手な紫とは対照的に、質素な黄土色の狩衣を纏った道長が喜悦を浮かべて待ち構えていた。
「ようこそ、お出でなすった頼こ、いやいや光女君（ひかりのにょくん）」
「今回は女御かつ端者ながら土御門邸にお招き戴き、恐悦至極に御座います」
いつも声よりもやや高めに、本来の女性らしい声色で光は応える。

晴れやかな笑顔とは裏腹に、それでも精神的な重圧のせいか？　こめかみに微かな青筋が浮かんでいるようにも見えない。

「ぬはははははっ、堅苦しい挨拶はまぁ、そこまでに。では舟を庭の池に出しました故、漢詩の舟、管絃の舟、和歌の舟の中から好きなモノを選んでくださらないか。今回は、諾子女房や藤式部女君、赤染衛門の夫妻も呼んで、盛況も盛況。さぁさぁ、どれに致しますかな」

金太郎は貞光の耳に口を寄せて問うた。

「道長様の仰った先の御仁達は何者だ？　赤染衛門の女房は【栄華物語】で名を聞き及んでいるが……」

「諾子女君は枕草子に名高い【清少納言】女君、藤式部女君は我らが郎党、綱殿の美麗な容姿を発想に得たと言われ、現在執筆中の【源氏物語】と言う作品の作者、【紫式部】女君ですよ、金太郎殿」

「あぁ、日記とも付かない悪口やら感性の華々しさを独りよがりに書いた雑記と同人官能文を道長大殿の支援の上、妄想で適当に公卿の爛れた生活を書いているらしいと言う腐れ女人どもか。確かお互い仲が悪いと聞いたような気がするが、顔を合わせて大丈夫なのか？」

当時の主流文学のと言えば大陸流れの漢詩文を指すのであり、平易の文などで綴った物語はあまり公の舞台に出るものではなかった。いわば、現代で純文学が尊ばれ、ライトノベルや同人文学、二次創作が蔑まれるのと似た現象があり、金太郎の評価は割合平安のこの時代では一般的なものだった。

「き、金太郎殿、それは噂だけによる偏見と言うものですぞ。それに本人達はあちらで……、いがみ合っておりますなぁ……」

先程から笑顔で向き合う先に挙げた二人の女性、どちらもこの時代の日陰の女性とは思えないほど、文才を放つ才媛として中心を作っている。しかし、その笑顔と沸き立つ集団の内側は棘どころか針のむしろ、と言う状況であり、双方の付き人があたふたしていて、更にそれに混じるのは高みの見物、もとい野次馬の貴族達である。

二十代前半の紫式部は妙に大人の、余裕ぶった笑みを見せている。素直で冷静（クール）に何事もこなすタイプである。「君の事が好きかもしれない、性的に」と言ってくれそうだ、と秀武は思った。

対して、そして年齢とは裏腹に逆に、勝気で強気の笑みを浮かべ、三十代前半の清少納言（パツイチ）。おそらく、清少納言はエビフライのように外はツンツンしていて内側はデレデレでは無いかと言う後世の私見もある。

「……あまり仲は良くないようだな」

「若い割りに余裕のある紫式部女君の方が若干上手のようですな」

あまりに気の強く「一番じゃなきゃ何でも嫌なのよ」と言うちょっと自惚れ気味の清少納言の事を紫式部は嫌っていたらしく、『紫式部日記』で「何事も小難しく風流ぶって、行く末はろくでもないわ」ときっちりこき下ろしている。

ちなみに後にその没落後の清少納言に出会い、ちょっとした記録に残らない恋愛劇を見せるのが杓子定規の貞光だったりするのが不思議な話である。ちなみにこの話はまた別の機会で話そう。

さて、女御二人はそろそろ宴会の雰囲気になれようと無言で視線で合意して、同時に「ふん」と声を出しながら、逆方向に向かってそれぞれ一時解散をした。

邸宅の外まで響く雅楽の竜笛や太鼓、笙の音色。それらに混じる僅かな美酒の匂いが華やかさを彩っていた。清酒の類はなかったが道長の手に掛かれば当時最高の発酵酒を揃える事は可能だった。

ところが未だ楽しそうにどの舟を選ぶかと思案している頼光を眺めていた綱が、ちょうど隣りに居た金太郎くらいには聞こえるように「まずいな」と呟いた。

「何がまずいのだ」

金太郎もその妙に危機感の迫る声色に何かを感じ取ったのか、隣りの人間にも聞こえるか聞こえないかの声で返した。

「人は良くて七癖、と言うが、大将の【音程】諸々の外し具合は並

大抵のモノではない。あれは三十癖つけても釣りがくる」
「ま、まことか？」
綱は静かに頷くと一人回想にふける。
「まさに――、音の刃物。常人の耳を引き裂き、大陸の虎を悶絶させ、渡り鳥の大群を地に落とす――。大将の最大の武器だ」
サッと顔の体温が下がるのが分かるほど、金太郎から血の気が引いた。
「が、雅楽なら……。声を出さねばどうにかなるのでは？」
「ダメだ。例え楽器でも、俺が耳を塞いでいる横で、たまたま通りかかった猫が土塀から泡吹いて落ちた事があるからな。終わった後もしばらく痙攣していた。大将の音感は致命的に、絶対的に、非合理に、不可抗力に、無遠慮に、壮大に狂っている」
金太郎の知る限り、和歌の代筆までも歓楽通いと軟派で鍛えたそこそこ上手い秀武に任せているのだから、実際のところはどの文芸、音芸分野も全滅である。天は人に二物を与えずと言うが、二物以上与えた分はきっちり引き算で回収するようだった。天もこんなところで妙な平等性を発揮して欲しくない。
「み、道長殿はそれをご存知なのか？」
「金太郎。今のご時世、昇殿する人間が詩の一つも読めなくては出世にも響くだろう。ましてや三十六歌仙や百人一首の名前入りの名人をこの通り屋敷に呼ぶほどの道長殿の歌好きだぞ？」
「……つまり、いままで隠し通していたわけか」
「その通りだ。まったく、あの河童親父め余計な事を」
「――何か言ったかにゃ？　綱殿」
十間（二十メートル）先で頼光と話し込んでいたワリに道長は罠仕掛けのように、コワイ笑みを浮かべながら金太郎の方を拍子無しに向いた。目が笑っていない。
「「何でもないです、道長大殿」」と二人で冷や汗を掻いて二重唱しながら、これから始まる惨劇に頭を抱えていた。

旬の山菜と熱心な仏教徒である道長の唯一好物である兎の肉、そして、金太郎が野生の血を最大限に活用して釣ってきた鮎を更に相模の味付けで仕上げた軽食を終えて、今日の主な催しである歌詠みなどが始まった。

綱は持ち前の竜笛の腕前を利用して雅楽の舟に、貞光も日頃から読みこなしている漢詩の舟に、秀武と相模は二艘ある内の片方の和歌の舟に、そして金太郎は頼光に連れられて、あろうことか道長の乗る和歌の舟に乗ってしまった。

「（最悪の展開だ）」

傍らには熱心に、その後は空回りどころか周りまで空回りの回転速度で引き裂きかねない読誦（どくしょう）、いや毒唱を引き起こす、その自作の和歌を一人でブツクサと今のところは小さく唱えながら考えている頼光。それは先程から季語や枕詞どころか「豆御飯」とか「絢爛武闘」とか「かつおの叩き」などと言うデタラメな語句しか聞こえてこない。まったく才能が無いと自覚している金太郎がそう思うのだから相当なものだ。と言うか、殆ど昨日食ったモノばかりじゃねーかと池に落とすくらいの勢いで突っ込みたかった。

それでも、その姿を見て、その一生懸命な姿勢に心打たれながらも、後の展開で意識が朦朧としている金太郎はもう一度「（最悪の展開だ）」と胸中で呟いた。

道長はニヤニヤと笑みを浮かべている。彼は恐らく、彼女の致命的なまでの技量を知らずに、ただ単に恥ずかしがっているだけだとでも思っているのだろう。それは安和の変以来の大きな間違いだと声高々に言いたかったが、それをやると金太郎の政治生命と頼光のコメカミの血管が音を立てて切れるような気がしたので、なおさら頭を抱えた。

人はそれを板挟みと呼ぶ。

「（何か、何か止める方法は無いのか）」

チラリと貞光の方を見れば、釈迦も驚くほど全てを諦めた顔でユックリと顔を振り、秀武は秀武で「あ・き・ら・め・ろ」と妙に楽

しそうに口パクで伝え、綱は自らの持ってきた竜笛をそれだけに集中するように磨いて都合の悪い事を忘れていた。
最後の頼みの綱にと相模に視線を向けるが「（頑張：ガンバ）」と何か憐れなモノを見るような目と共に両拳を握る、精神支援だけだった。
「（ど、どいつもこいつも役に立たない！！）」
心の中で毒づくも、宴会の最中ながら後の祭り、金太郎はただ静かに終わりを迎えるまでしかなかった。

そこに突如、青天を遮るかのように邸宅全体に影が差す。
「（なんだ？）」
狐の嫁入りならぬ突然の暗雲が立ち込めたように暗くなり、宴会に呼ばれた人々は、ふと空を見上げた。
だが、その正体よりも早く、その邸宅全体を取り巻く違和感に気付いた五人が居た。
「「「「「（これはッッ、人払いの結界？！）」」」」」

巨大な百足（ムカデ）がいた。
禍々しいまでの多足は一本一本が家屋の梁（はり）ほどの大きさもあり、その百の足をそれぞれに不規則かつ不気味に動かしながら、巨大な、人など丸ごと飲み込むような複雑な顎を咀嚼するように動かしている。黒い甲質は磨かれた金属のようで、大抵の刃物を通さないような威圧感を感じた。身体をうねらせながら空中に浮く様はまさに人

外の、人では贖いきれないような圧倒的に最悪な人喰い蟲だった。
空に位置するその巨大な蟲の頭の辺りに、一人の男が立っていた。
やたら手足のひょろ長い、目が鋭過ぎるほどに細い男。胴体に比べて異様に手足が長いためか、実際の身長以上の長さ以上に見える。七尺(二メートル十センチ)をやすやすと越える、柳のような細く、それでいて強靭な体の男だった。
眉毛が薄く、髪の毛が短い。瞳は人ではありえないような濃緑色をギラギラと放っている。
彼の着る灰色の粗衣は裾はボロボロにも関わらず、内面からは支配者のような威厳が垣間見えた。
彼は周囲を睥睨すると、高らかと右手を下界に翳して名乗り挙げる。
「我が名ハ美濃の人外王、蟲魔の皇帝、和足(ワタリ) 霧宮(キリミヤ)。猛将の坂田公時トの不可侵の契約を我等蟲魔眷属(ちゅうま)は無効と見ナシた。よってココに、早々と宣戦布告を王直々に申しツカまった」
蟲魔――、高度な知能と階級性と、肉食種の殺戮性を持ち合わせた虫に似た魔族達。
戦の狼煙(のろし)。
図らずしもそれは、華やかな宴の最中で始まったのだ。
「マズは戯れに……、」
ニヤリとやたら白くて歯並びの良い口と微妙に外れた発音を蟲の王が見せ、
「貴様等を皆殺シしよウか」
と殺戮を始めようとした。

次の瞬間、ビンと何かが弾けて音を出しながら空気を切るような音。霧宮は横の屋根伝いを向くと同時に左手でその何かを叩き落とした。
それは鏑矢。開戦の印し。
「こノ矢筋、……頼光か？」

しかし、霧宮はそれはすぐに間違いだと気付いた。
視線の先には狩衣の上に、大きさの僅かに合わない、赤く塗られた皮の鎧を纏った二足歩行の野獣が矢筒を背負い、弓を手にして屋根に立っていた。
第二射。
弦音と共に、弓に二本の番えられた矢がそれぞれ霧宮と大百足の眼に奔る。
二本の矢は大百足の体のウネリだけで避けられ、甲質の皮によって見た目どおりの鉄同士が打ち付けられるような音で弾かれた。

「（よっしゃ――――！！）」

金太郎は心中で喝采。
いつもならこんな展開にウンザリするところだが、この騒ぎで『全　て』（主に頼光の暴力みたいな歌唱とか）が有耶無耶になると思うと、金太郎を含めて頼光の配下は心の中だけでも叫ばずにいられなかった。
（戦闘的な）

加えて、これが金太郎の初めての人外との戦だった。

和歌の舟に居た貴族達は突如現れた蟲魔族と、自らの舟に乗っていた『子供』が見せた陸まで大跳躍で腰を抜かしていた。
たった二人、道長と彼とやたら親しくしていた謎の女君を除いて。

「源　頼光が郎党にして、その一番槍。怪童、坂田　金太郎」
弓を屋根に捨てる。それと同時に牛車に隠匿するために巻いていた布ごと渦巻かせながら、大槍を振るって名乗り出る。布が背中側で広がって、怒涛の津波のように見えた。
それは坂田より渡された、南の門を守護する四天王に相応しい、赤い槍だった。
「なルホど、貴様ガ【怪童丸】か」

納得するような頷きと同時に、人では決して出来ないような、空を羽で舞うような急角度の跳躍と金太郎が仁王立つ屋根への柔らかな着地。まるで自宅に玄関から入るように気軽で、殺気立つ獣の前に降り立つ。

「斗黒、他の戦士達ノ相手をシろ。コやツは私が殺る」

「オデ、ワガッダ」

大百足の頭の悪そうな声の響き。直後に殻の内側の身体から怖気を及ぼすようなビキビキと筋の発する音。目前の三人の小さな戦士達を巨大な黄色い複眼で睨む。

「金太郎、てめー！　一人で気取ってんじゃねーぞ！　こんなデカぶつなんか普通ヤラレ役だろうが！　おい！　そっちの主人公向けと変われ！　俺の出番を増やせこの野郎！　てか一番槍とか勝手に名乗るな、この野郎」

屋根に向かって訳の分からない事で憤る秀武の両手には太刀と短刀の間くらいの愛刀、備前吉岡守恒の二つで一つの名刀【字丸】と【友切】が構えられていた。

「まったく、演奏を披露する間も無かったな」

ちょっとだけ悔しそうに呟く綱の両手には和足　霧宮の妻であり、蜘蛛女であった魔のモノを切った大太刀、名刀【髭切丸】が緩やかに頭上に掲げられる。

「ここの結界を張るまで、二人ともあの巨蟲の相手、よろしくお願いします。くれぐれも舟には近づけないように」

貞光の【石切】と呼ばれる錫杖が先に付けられた金属の輪を揺らしながら、蟲の禍々しい音と邪気を浄化するように鳴らす。

「お前等ならやれるはずだ。――行け」

和歌の舟で唯一人震える事もしない見目麗しい、琥珀色の瞳の女性は、その容貌に相応しく無い、勝気な台詞を呟く。

それと共に、二匹の蟲と四天を守る武の王達がぶつかり合った。

大槍から突きが放たれる。心臓をまるごと消滅させるような技量と威力を持った槍は蟲の王の笑みと共に、手首から肘までの部分で弾かれる。

蟲の王の両手首の外側には小指側から反り返った蟷螂のような鎌が生えていた。雷光の閃き以下の触れ合いの一瞬でそれを見て取ったのは金太郎の並外れた動体視力によるものだろう。

続けざまに蟲に額、首、心臓と三連続の槍での突き。卓越した槍の技量は音よりも速く、三度、パンと大気を破る空裂音を発する。

それは金太郎が終止、坂田から教え込まれた基本の攻めである。内側から外に弾く内受け、外から押さえつけて攻撃を打ち落とす外受け、そして、その螺旋の受けから超音速で放たれる突きである。

火花に遅れて金属同士の擦れる音。無表情な、蟲の中に僅かに愉悦を浮かべた男は前進と全身で回転するように受けた。そして、その勢いのまま、それよりもなお速く廻る。

先程の突きとは比べ物にならない、連続した空裂音と鎌の密集した塊。それは刃を巻き上げて動く、意志を持った竜巻のようだ。

「行くゾ、下等種！！」

眼が廻る事すらなく、それどころか更に加速しながら、蟲の王が暴風となって襲い掛かる。

圧倒的な回転速度に刃、当たれば即死。鎌鼬（かまいたち）も縮み上がるような斬撃の乱舞。

足場に対して横に回転するその人外に、金太郎は槍を縦に、盾にするように回転させる。

全てが鋼で出来た金太郎用の、猛将公時から賜った特注槍。大人が三人がかりでやっと柄の側が持ち上がるそれが暴風を止める。桜花のように鋼で橙色の火花が咲き乱れた。

が一瞬の拮抗の間もなく、単純な体格差に負けて、金太郎の体が飛んだ。

体は足場の外に。
舟で見物していた貴族達の驚きの声。
しかし、金太郎は大槍を宙で一振りすると同時に、その槍の重さで体勢を一気に立て直して、屋根の外側から内側へと舞い戻る。戻る間でも槍の先はピタリと蟲の王へと向けられて隙は無い。
一度身体を止めていた霧宮は踏み込もうとした瞬間の、彼のその動きに「ホぉ」と感心をするような声を挙げると、少し離れた間合いから再び回転を始める。
金太郎は屋根の縁。次に落ちて隙を見せれば後はない。
ならば、
「だぁらぁぁぁぁぁぁっ！！」
最強の一撃をかますしか無いだろう。
金太郎の最大の膂力で長大な、本来なら馬上で使うはずの大槍が捻るように、そして大気を貫くように投げられる。その場の誰かが大陸の巨大兵器を知っていたなら、それはその兵器、石弓（バリスタ）以上の威力。巌で固められた城を破砕するための弓すら、その前には児戯に等しかった。
しかし、近距離投擲と言う意表を突く離れ業でありながらも相手は人外。そう簡単に行くはずがない。
「馬鹿め、武器ヲ失って、何？！」
両手の交差と同時に絡めて落とす。だが、あまりの威力で蟷螂の王が人生の中で始めて数歩のたたらを踏んだ瞬間でもあった。
霧宮はその回転の勢いを投槍によって大幅に止められたが、未だ双つの鎌はいつでも踊れる凶器である。
しかし、奥の手は別。そう、金太郎の真の凶器は、
「発氣用意……」
その、如何なる獣でも魔でも止められない、
「――残ったァッ！！」
超越した突進力。
立ち合いから一気に、伸び上がるように獣が飛び上がるように突

っ込む。
事の重大さに気付き、『やっと動き始めた』鎌と鎌との間に体当たりで突っ切る。遅れて、屋根伝いの一部が最初の衝撃に耐えられずに盛大に吹き飛んだ。
金太郎の額と肩を掠って赤い線が宙に引かれる。しかし、そのまま密着した蟲の王を抱き抱え、
「貴様、マさカ？！」
自らを巻き込んで、屋根から地面に投げ飛ばす。
それは極意。掴んで、投げ落とすまでは相撲は投げ終わらない。
土煙と爆音。

その戦闘の間、巨大な蟲を相手にしていた綱と秀武の二人は巨蟲の天空からの体当たりを何度も食らいながらも、刃を腹や甲質と甲質の間の柔らかい場所に突き立て、斬り付ける事で幾度と無く貴族達の乗る舟への侵攻は防いでいた。
綱は当たる直前に一陣の風となって目前から消え、僅かにズレた場所から高速で通り過ぎる大百足の柔らかい部分だけを見極めて斬り付ける。
そこまでの技量の無い秀武は片方の刀と腕で超重の突撃の衝撃を防ぎながら、自らの吹き飛ぶ瞬間、自らの体が蟲と当たる事で一体となり、ほぼ同じ速度となった状態で通り過ぎる大百足に刃で抉るように突き立てる。
「イデェェェェェェ！　イデェェェェェヨォォォォォ！！　チビドモガァァァァ！！」
黄色の体液を噴出させて身悶えをしながら空へと戻り、蟲魔特有のイカれた闘争心で大百足は再び突撃を繰り返す。無論、体が大きい分だけ生命力も旺盛で、人と同じ大きさの化け物なら七度は殺せる斬撃と刺突を幾たびも受けながら、些かも衰える事もない速さで

迫る。
「綱よぉ、しばらく休ませてくれよぉ。突進を抑える時に受け止めた左手の青痣が痛ぇぞ、泣くぞ、喚くぞ、騒ぐぞ、このヤロウ！」
「泣き言を言うな。秀武の突きの方が俺の斬撃より効いているぞ。ちゃんと動け」
「どの動きを見て言ってんだよ、……って来るぞ」
「知ってる」
「ところでよ、なんか俺の唾液が付いた時にデカイ奴の動きが止まった気がするんだけど、気のせいか？」
「……試してみるか」
二人は同時に竹筒を開けて口に唾液と水を混ぜ合わせて含み、それを刃に吹き掛けた。
直後、予め決められたような動きで、再び大百足に刺突と斬撃を浴びせる戦士達。
巨蟲の動きが目に見えて減速した。

その間、貞光は陰陽寮の者達が使う日本の呪とも大陸の呪とも異なった異言を唱えていた。
「い・てみねどん・あじいれ・ずりりてす・い・てみねどん・あじいれ・ずりりてす・い・てみねどん・あじいれ・ずりりてす・

す・い・てみねどん・あじいれ・ずりりてす・い・てみねどん・あじいれ・ずりりてす……」

繰り返される異言に合わせて、複雑な図とも絵とも字とも似つかないモノを、屋敷の全てを囲むように錫杖で地面へと一心不乱となって描いていく。

その線と音は世界に意志を響かせるために生まれた旧き言葉、慧(え)埜(のく)駆語である。陰陽寮長から直接その指南を受け、更に密教の高僧、万物を操る法力を使いこなす彼らは現代で言うなれば『魔法使い』である。その魔法使い達の中で一角の地位を築いた天候操作術の達人にして、今で言う魔女協会認定の第二位、大魔導師級(メイガスクラス)の仁海から「百年に一人の傑物」と言わしめられる素養を持った貞光にとって、自らの想像する魔法の効果を更に現実に深く広く及ぼすには絶大過ぎるほどだった。

彼の組み上げているのは【溶解呪法】の一つ。自らの『養分』にするために、生物を、それこそ妖力や霊力などと呼ばれる霊気装甲の塊のような『人外』を溶かし尽くすための左法(さほう)、外道の術である。

「い・てみねどん・あじいれ・ずりりてす・ぶおどん――えじ」

始まりと終わりが繋がる無限の円環。錫杖の先が描かれきった陣を突きながら、当時の日本最高の魔力を打ち込む。

魔法陣が完成した。

霊気のみの見えない、そして皮膚には触れない強い風が渦を巻く。

大気が澱む。急に大気中の水分濃度が四十倍に増えて、温度が春先から初夏に移動したような飽和感。そうとしか表現し得ない、肌を通しての胸糞の悪さを貴族達は感じた。

種族の違う人にそれだけ影響を与えるのだから、

「アデ？」

人外なら尚更である。

「ウギェァエエエァルラォォォォォウッ！！」
甲質の体の内側が火脹れのように膨れ、同時に灰色に腐食して崩れていく。最も柔らかい部分だった片方の瞳が弾ける。触手と顎と無数の脚が痙攣を繰り返しながら、全身を掻き毟るように小刻みに揺れ動かしていた。殻の間から黄色い汁が音を立てて滝のように迸る。
しかし、大百足が居住区である殿の一部を破壊しながら落ちると突然、その精気の吸収が止まった。
「ここまでが、限界ですか」
その精気を吸っていた本人である貞光。彼の右半分の体は真っ黒に爛れて裂けた皮膚に変わり、片方が目玉は黄色く濁り、胴体と四肢のいたる所から皮膚が裂けて血が噴出していた。魔方陣の効果も止まった。
異種である霊気装甲を略奪した代償は自らの身体に受け入れられずに毒となって自滅をし掛ける事となっていた。
「いやはや、流石に触媒無しでは無理のようで……」
「当たり前だ。バカたれ、無茶しやがって」
そのまま倒れこもうとした貞光は秀武に受け止められた。流石に強力な魔法使いだけあって、その身体は既に自らの血で浄化され、罅割れた皮膚から血液を脈打ちながらも身体は再生を促している。
「金太郎の方も、終わったようだな」
太刀を静かに納めながら、綱は獣と蟲の戦場跡を眺めた。
「蟲の王よ、貴公の自慢の鎌は腕の外側を向いている。故に突き抜ければ暴風圏からは過ぎていたのだ。その腕の内側に入ればコトは済んでいた」
地面に大穴を開け、地面に形どおりにきっちりと埋まっていたのは霧宮。

「今ここで引けば、現在の交戦規定通り、貴様の部下にもこれ以上は手は掛けない。さぁ、……去ね」

「……きんタ、ろう」

荒い息を挙げながら蟲の王は地面から身体を引き抜きながら、その魔法陣の溶解などは自らの展開した装甲結界で歯牙にも掛けず、ただ禍々しい、殺戮に特化した憎悪の瞳で金太郎を見つめていた。

だが、圧倒的な投げ技によって負った衝撃は身体に完全に伝播していた。大げさに言えば、富士山の頂上から二呼吸で地面に到達する速度で投げ落とされたくらいの衝撃である。技でなく、とにかく勝つ事を運命付けられたような、呪いのような相撲だった。並みの妖魔なら地面に叩きつけられた段階で全身が砕けて、体の部品が飛び散っていただろう。しかし、身に纏った驚異的な妖気が層を成した鎧、【装甲結界】がその身を辛うじて形を保っていた。しかし、それでも甚大な被害を受けた事に代わりは無い。

無言の睨み合いは数瞬で終わると、部下である大百足の頭によろよろと四つ脚で寄りながらも乗って、大百足も満身創痍で飛んで逃げ帰った。

「流石だ！　素晴らしい！　一条天皇陛下に闇殺舎の設立を進言したのは無駄では無かったな！　十分な成果だ」

常人なら夢まで見てビビるはずの化け物に席巻しながらも、手放しで部下を褒めている藤原道長の方が流石だと金太郎たちは思った。

やっぱり、従兄弟の影を踏む勢いなら頭くらいも軽く踏めると権力簒奪宣言したり、京都を騒がす亡霊にばったり内裏で会って「あんた誰？」と訊けるほどの豪胆な男だ。

「被害はいかほどに？」

澄ました顔で綱が問うと、馬鹿でかい百足に潰された本殿と馬小屋に居た護衛が二人が死んで、女中が三人怪我しただけだ、と答え

た。
「被害が出たのですね」
淡々と、努めた無表情で貞光は言った。頼光もわずかに眉毛を揺らした。
「なぁに、大事な賓客も、特に前院には怪我一つ無かったのだ。十分な働きだ」
「「……」」
喋るとボロが出ると分かっている金太郎と秀武はしっかりと口を結んでいた。
しかし、それに目敏く道長は気付いて、「失礼した」と一言漏らした。
流石に人の命に軽重は無いだろうと、当時の貴族としては理解はしかねながらも彼は察して部下に詫びた。
この辺りが彼の強力な人望を支えている部分なのかも知れない。
「とにかく、お陰で租税の無駄使い、内裏のお荷物とも言われていた【闇殺舎】の実力を公で、しかし、陰ながら示すことが出来た、礼を言うぞ。皆の衆」
「はっ、忝う(かたじけの)ございます」
ようやく終わったんだ、と一堂は息をついた。
惨劇は終わった。色んな意味で。
「例と言っては何だが、私個人の宴会の第二幕（二次会）にお主らも招待してやろう」
「ありがとうございます。道長様」
「「「「「……えっ？」」」」」
「つまり、私の歌を披露出来ると言う事ですよね？！」
喜びをキラキラと煌く瞳で現した光を誰も止める事は出来なかった。
惨劇は終わることはなかったようだ。

何故かその時、彼ら四人は脳裏に「私は頼光、侍大将～♪」と（邪威闇罹災足：ジャイアンリサイタ）ると言うよく分からない言葉が浮かんだと言う。

その日の二次会以来、光に歌の披露をさせる事を道長は固く禁じたと言う。

24．刺部陀（にらぶた）3／4

――近江の国、人外北方最前線要所

暗澹たる闇の中でチロチロと舌のように遊ぶ蝋燭の紅い炎。その洞穴に影で写る、得体の知れない大きく胎動を繰り返す何か。

その影の元に六尺一寸（百八十四センチ）の大柄な女が居た。

とぐろを巻いた蛇のような、それ以上の圧倒的な威圧感（プレッシャー）を持ってして、岩で出来た玉座に自らが覇者であることが当然の如く座していた。

妖艶さに加えて、規格外の女性として機能の比率。その胸は垂れ下がることも無く上へと吠え、それを薄い獣の皮の腰巻と胸当て、加えて外套のようなもので覆っていた。結い上げた髪を無造作に肩に掛けている。

その左手には遥か彼方、この地の裏側にある大陸からの煙管。反対の手で新たにそこの野生の煙草を詰めて蝋燭に近づけると、再び紫煙が管先から挙げる。濡れそぼった口元に含めて、肺の中にその濁った煙を迎え入れて味わうと、ふっ、とやわらかく吐き出した。

そのゆるゆると向かう煙の先、洞穴のもう一つの岩座に座るのは、満身創痍の蟲の王だった。

「和足　霧宮。今回の事、あんたはこのオレ様にどぅ筋通すんだい？」

女は、龍ノ目（タツノメ）　時雨（シグレ）は、人外の現在の総大将はそう、部下の一人に問うた。

龍神の王者として、全ての人外を纏め上げる立場へと祀り上げられた女。

その王者に同じく蟲の王は敗北をしても、あくまで一介の王として睨みを返す。

「筋もへっタくれも無イ、『人憎シ、皆殺し』と賛同者ハ数多と居

タ。私はそレを代表者トしテ行動シただケだ」

途端にギシリと空間が軋みをあげた。己の意にそぐわない事に怒る龍が柳眉を立てていた。

「それじゃぁ、筋が通らねぇぜ、蟲の大将。坂田の御仁との約束はまだ無効にはなってない。それを反故にして戦を仕掛けるのは些か卑怯じゃないかね？　それにあんたは今はオレ様の配下だ。勝手な行動は戦の指揮系統の乱れ、ひいては軍団全ての士気に関わる。あんたも、頭ぁ張ってんなら分からないとは言わせないよ？」

ニヤリと浮かべる怖い笑み。逆らうならここで殺す、と語っていた。

流石に今、死ぬわけにいかないと冷静に、金太郎の矮躯を思い出して静かに燃える憎悪で判断すると、王は呟いた。

「以後慎モう。日に日二募る闘争本能に耐えラレなかッたこの愚鈍さ。こノ身に刻まレた創（きず）を持っテ誓オう、王は誇リ高く、決メられた戦のミでコノ研ぎ澄マシた鎌を振ルおうと」

腕からにゅうと出した鎌が洞穴の中の冷気を更に荒ばせる。実力としてはわずかに上の戦力を持ちながらも、創だらけの身で龍神に適うとは霧宮も思ってはいなかった。蟲と言う他種の人外から疎まれる立場で無ければこの男が総大将となっていたはずだった。だが、現代的に言うなれば、彼は同属以外に統率力（カリスマ）がなかったのである。

「しかし、人の子があんたの鎌と立ち向かうとは、オレ様もうかうかしてられないねぇ。で、あんたは次の殺り合う時には勝てんのかい？」

蟲は鎌を翳しながら、構えを取る。

「本性を見せナカったとハ言え、内側に入ラレたのは我ガ慢心と失策。内側に入る前に、倒ス。ソレには鎌以上に自在ナ凶器が必要だ。槍のよウニ鋭く、鞭のよウにシナるのは……。我が身以上に使エルのは我が身デしかない。ナラば、そレハ我が身が、我が指先が凶器とナレば良いのデハなイのか？　我が身の内側に、手首を曲ゲテ、もう一ツの鎌を……」

ブツブツと呟きながら己の裡に埋没していく蟲。
それを何処か遠い目で見ながらも、人外の総大将は遠く、失ったモノを求めるように、暗い中で見えない宙を仰いだ。

25．刺部陀（にらぶた）（4／4）

「頼光様、お疲れ様です」

暗黒の二次会と道長のぶち切れ説教がようやく終わり、邸宅の風呂場でわしゃわしゃと頭を相模に洗われながら、光は「うむ」と頷いた。

この時代、長く美しい髪と言えば、地面に着くくらいを意味していた。光は運動性重視のためにそれよりも些か短く腰くらいにしてあったが、それでも質から言ってもあまり手入れをしていないのが不思議なくらい艶やかな色をしていた。ちなみに現代の標準である肩くらいの髪型はその時代の尼になるために切るのと同じくらいの長さである。

さて、昇殿し始めた年くらいから金太郎が急に「いや、そろそろ不味いだろう?」と訳の分からない風呂への同行の拒否の仕方を最近し始め、光が強制連行する前に羅王号に乗って逃げられたために「んじゃ、代わりに」と今日は相模を無理やり連れて入れたのだった。

相模が音を立てて光に頭からお湯を掛けると「はー、やっぱ、女御の格好は疲れるからダメだわ」とお湯掛けられた格好のまま、目を瞑りながら言った。

直後にパッと目を開くと「よしゃ、次は私が洗っちゃるぜ」と、文章表現をしたら発禁になりそうな、流石に不味いような、読者サービス的な事を一重に光はあれこれとしてから、湯船にゆっくりと浸かっていた。

「あぅー、頼光様ぁ、あんなところ弄るなんて反則ですよー」

「ふん、戦に汚いも何も無いもんね」

その勝ち誇った笑みは、今日の不慣れな女御の格好と、「おんどれは歌を舐めているのか?!」と誘っておきながら理不尽なキレ方をした道長の叱責（と嫌がらせ）から解放された表情だった。

「まったくあの禿は、人が気持ち良く歌い始めたら急に止めやがって」とブツブツと続けた。だが、これ以上悪口を続けると何処でどうやってその情報を道長が仕入れるのか分からないので止めておいた。

そして、あの場に同行していた相模としては愛想笑いをしながらも「道長大殿でなければあの形容しがたい音の凶器を止められなかっただろうなー、さすが左大臣、そこに痺れる、憧れるぅ」と胸中に残した。

「ところで、何で金太郎は入浴を拒否しはじめたのだろうな？　あの野獣の臭いをそのままにしていたら清涼殿の公卿の鼻が曲がるぞ」

妙にムスッとした顔で腕にお湯を掛ける光に不思議そうな顔で相模は返す。

「金ちゃんなら頼光様が入った後に、夜中にちゃんと入ってますよー。金ちゃんは案外綺麗好きですからね」

「なんだ、それは……？　別に風呂に入るのが嫌な訳ではないのだな？」

「つまり、あれじゃないですか？　金ちゃんもそろそろ大人なんですよ？　頼光様とお風呂にこれ以上入るのは教育上不適切と言うことです」

「私は一向に構わないのだが……、で、何がいけないんだ？」

「（この人は何も分かっていない……）」

仕方なく、「んー」としばらく檜風呂の縁を眺めてからから、相模は口を開いた。

「金ちゃんは頼光様の事が好きだからなんですよ」

「私も好きだぞ？　綱だって、秀武だって、貞光だって、坂田もそうだ。あいつは良い奴だからな、よっぽどの事が無い限りは嫌う奴なんて居ない筈だぞ？」

「いや、そう言うことでは無くてですね……。だから、金ちゃんは、そのぉ……、男と女の関係として、頼光様が好き、頼光様と言うより『光様と言う存在』が、えっと、好き、になり掛けているんだと

思います」
「は？」
　頼光の琥珀色の瞳が点になった。
「ぶっちゃけて言っちゃえば、光様と逢瀬を重ねたい、つまり身体が成長をしてきて性欲を持て余して始めているんですよ」
「――――――――」
「あれくらいの子なら性欲の塊みたいなものですからね。毎日、どんな気持ちで光様の裸体を眺めながらお風呂に入っていたんでしょうね？」
「……」
「たぶん、金ちゃんは獣系ですから直接的に『うぉっ、光様孕ませてー』とか思っていたんじゃないですか？」
「　　」
「それなのに光様の女性としての考え方じゃなくて、頼光様の男の勢いで無理に誘うんですよ。理性とかそう言うのが切れて、いきなり風呂場で押し倒されてもしょうがないですよ。金ちゃんとしてはよく我慢した方です」
「――――……　　」
　相模の怒涛の『口撃』で頼光の魂魄が口から漏れて魂と魄に分かれ掛けていた。
「んにゃ――！　頼光様しっかりするのですー」
　相模が肩を持ってガクガクと揺さぶり、ようやく「経基大爺様が……河の向こうで手を振っていた」とかなり憔悴してから現実に戻ってきた。
「相模、私はその……、金太郎を男性としては見ていなかったんだ。あいつの事を部下とか友達とかそう言う風に思っていたんだ。それに私自身も、女だと言う事すら忘れていた」
　女も羨む容貌をしておきながら忘れるとは、生霊に祟り殺されかねない所業である。
「頼光様、いつまでもそう言うわけにはいきませんよ。金ちゃんだ

って男性になっているんですよ。そりゃ、秀っちみたいに欲望が態度や行動として全開じゃないですから分かりにくいかもしれませんけど。もう少し、金ちゃんの扱いを考えてあげないと金ちゃんを男性として逆に傷つけてしまいますよ」

今日の相模は辛辣だった。それは主人の不甲斐無さだけでなく、何か別の感情が働いている事が光の目以外からは分かっただろう。しかし、この場にいるのは、そういった浮いた話の影も形も無い光だけだった。

「私は、どう接したらいいのだろう？　私はそういった形で人を好きになった事も、好きになられた事も無い。それをいきなり理解しろだなんて、奇襲よりも唐突だし、その敵には実体が無い。何だかもやもやして捉えどころがない。それに私は、今は武人だ。それがこ、恋をするなどちゃんちゃらおかしいではないか？」

いつもはくつろぐ風呂の中で、彼女の小さな身体が金太郎が始めて入浴していた時のように更に縮こまった。

「そのままの……、頼光様で宜しいかと思います。貴女らしさを失うのは良くない事です。戦が終わったら……、頼光様も光様として戻ります。そしたら、金ちゃんのことを真剣に考えても良いのではないでしょうか？　もし、真剣で無いのなら、それは金ちゃんを裏切っているようなものではないですか？」

相模のやたら気迫の篭った物言いに光はしばし呆気に取られたが、それから持ち直すと微かに笑った。

「……何だか、年も位も上のはずだが、相模には私はいつも負けているな。今回は恋に関しても完敗か」

「経験の差ですよ」

「ふむ……。相模にはそう言う風な、人を想うような経験があるのか？」

その言葉で逆に相模が虚をつかれた顔となった。予想外の問いかけのために顔の表情が薄れていた。

だが、光はそれがただ単に、質問に驚いただけだと思ったのだっ

た。
「まぁ……、そうですね。私にも好きな人は居ましたよ。『その人』が『他に好きな人』が居たから、諦めてしまいましたけど」
それ以上訊くのは流石に野暮かと光も思い、「そうか、でも諦めない事も重要だぞ」と言って先に上がった。
脱衣所から光の気配が遠ざかってから、
「好きな人が誰が好きか分かっているのに……、好きになり続けるなんて辛いだけなんですよ?」

恨みわび　ほさぬ袖だに　あるものを　恋に朽ちなむ　名こそ惜しけれ

そう雅に、同時に悲しく、小さく詠んだ。

26．?昕陀（あただ）（1／3）

霧宮の道長土御門邸襲撃事件から後も、暴走した、幾らかの妖魔人外からの襲撃は幾度と無くあった。

だが、そのいずれも闇殺舎の名を内裏の内から轟かせ、京の外のあやかしを慄かせるだけのモノだった。

冷静な集団は着実に力を蓄えていった。

――時は流れ、歴史が動き出す。

京の外れ、蓬莱山付近。

「戦場は目前である」

琥珀色の瞳の武者が吠えた。その一段高い木組みの下には五千を超える完全武装の武者の集団。

戦の始まりである。

「貴様らへの命令はただ一つ。勝てッ！！　以上」

これまでで一番短い演説を終えると同時に、猛り切った武者達の「応ッ」と短く大きな返答が木霊した。

戦勝祈願も終わり、残るは決戦を行う、近江の地までの行軍のみである。

この場に四天王の金太郎と秀武、貞光は居なかった。金太郎は斥候、つまり敵状、地形等の状況を偵察させるために既に近江の地、深くに潜っていた。秀武は斥候では無く築城、つまり要塞の建設とその警護のために既に最終防衛線である近江と都の境に構えていた。貞光はその要塞で祈祷や呪術戦の準備をしている。

「大将、時間です」

いつもは薄い、胸のみに当てる胴鎧だけで殆どを軽装で過ごしているはずの綱が戦のために兜や手甲まで付けた完全武装をしていた。

「――頼光様」
彪凪に乗りかけた彼女を引き止めたのは杖を突き、相模に支えられながら出て来た、核の病（癌）に侵されて痩せた坂田　公時だった。
少し前までの隆々とした身体はずの体に面影はなく、幽鬼の如く痩せ細っていた。
頼光、もとい光は彪凪から飛び降りた。
「坂田、馬鹿者。御主と言う奴はッ！　今すぐ床に戻れ、命令だ」
坂田はそのまま、手を地面につく。
「申し訳無い、吾が身一生の恥にして、屈辱。この大局に何も出来ないとは……」
罅割れた巌から染み出す滴。
それは公時が頼光に見せる初めての涙だった。
かつて戦場を駆けた武者は、既に馬に乗れないほど衰えていた。
光は公時の些かに痩せた肩を、躊躇せずにハシっと叩いた。
「愚か者。坂田には御主が自ら育てた、誇るべき武者達が居るではないか？　それを信用せぬとは御主の育てた武者、いや息子を信用しない事では無いか？」
坂田は何も言わずに、独眼から流れ出る涙を拭った。
「宣言しよう。この戦は御主の息子らの勝利、言わば御主の勝ちだ」
勝利宣言。震えるほどに健やかな笑顔。
「だからもし、この場でくたばっても安心して、逝って来い。お主が勝せた戦を何をこれ以上心配するというのだ」
カラカラといつものように笑う男装の麗人に、独眼の老人はようやくいつもの「やれやれ」と言いたくなる笑みを浮かべた。
「頼光様がそう言うのであれば、老兵はただ去るのみ。まぁ、戦勝報告までは頑張って生きてみましょうか」
と、踵を返すが、何かを思い出したように再び頼光に向き直ると、耳元に口を寄せた。
「光様と金太郎の結婚式までは生きた方が良いですかね？」

その瞬間、頼光の顔がめったに無いくらいに紅くなり、「こ、この色呆けの老体がッ！」と返す。それを半ば嬉しそうに眺めて、公時は先ほどとは打って変わって、病人にも関わらず心地よさそうな足取りで自らの寝屋へと戻っていった。

たぶん相模の入れ知恵だろう、そう綱は結論付けた。

頼光が「むぅぅっ」と悶々していると、綱が溜息を吐いて背中を押した。

「綱……」

「大将、出発の時間ですよ」

うむ、と気を取り直して掛け声一声。彪凪に飛び乗ると前代未聞、王朝時代最大の千の騎馬隊を引き連れて、一路を走り出した。

所変わって近江の地深く。

獣がそのままの形で生きる場所を三つの影が疾駆していた。

一人は狡猾そうな面をした顔に唇、鼻、額に三つの傷跡を持つ男、もう一人は顔の目鼻口、あらゆる部位が垂れた貧相な顔をした男である。しかし、どちらも体躯のしっかりした男で、あまり大きな男の居なかった時代でありながら六尺（百八十センチ）を軽々と越えた男である。

彼らを引き連れるさらに巨大な男、いや、少年と青年の中間の男が居た。

三人は粗末な、森林に紛れられるようなくすんだ茶色の衣を羽織っている。だが、その下にはなめした皮の鎧が隠れて見えていた。

止まれ、と先頭を走っていた男が手で合図をすると同時に、ぴったりと自ら予備動作も無く止まり、後ろの男達も慌ててたたらを踏んで止まった。

巨大な男が地面にへばり付くように寝転がると、蛇のように音も立てずに枯葉の上を匍匐で前に進む。男たちもそれに習って、静かに進んでいく。

木陰からフイに覗けば、下は千尋の崖。その目下には巨大な岩の

要塞があった。
霞む様な遠方には異形の者どもが不気味な戦渦の声を挙げていた。
背筋を刃物で撫でられるような、ゾッとするほどの大兵団が広がっている。切り出した石の尖塔を有翼の妖魔が取り巻いていた。
金属を歯で噛むような、歯根から揺れるような居心地の悪さを感じる。
「篤五郎、見えるか？」
先頭を直走っていた巨大な男の声に濁った声で「へぇ」と付き人が返答する。
「西に烏族のモノが四百、具足がしっかりしてまっせ。飛び道具対策はバッチリみたいでんな。東に龍族のモノが二十、かなりの脅威となるでしゃろのぅ。南に鬼が三千、オイラが思うにおそらく主力部隊かと。北は……要塞に隠れてさっぱり見えんで」
「ふぅん」と巨大な男はそれからもダラダラと続きそうな言葉を手で「もういい」と留めながら言うと「由近、何か気付いた事はあるか？」と顔全体が垂れた男に問う。
「ワイが思うに、北は何やどえらい感じがするけん。東の岩場の影にけったいな魔の力が渦巻いておるなぁ。それに南のウチら攻め寄る方に鬼を置けるような遊びがあるき。ちょっと怪しいかと思います。あんな風に兵が居易い空きは普通は作らへんじゃろ、と。加えて、真下の方から気持ち悪いくらいの力を感じますねん」
「お前もそう思うかと」
と、巨大な男はニヤリと笑った。
「で、奴らの本拠地は？」
の答えに、
「「「この崖の中」」」
と三人同時に、地面を指を指して答えた。
「俺が思うに、明らかにあの要塞は急造のものだな。組み方が怪しくて、東側なんか今にも崩れそうだ。岩の置き方が載せただけに見えるから、おそらくは小山に岩で小洒落た細工でもしただけだろう

な」

それぞれが別々の観点から、一つの結論を持ち出してきた。

「つまり、金の旦那。オイラの居るこの山ん中に奴らの大将が居るって事で、合点っすか」

「若、今、三人で攻めませんけ？　ウチらで今ならチョッパンと大将首挙げられるん違いますか？」

二人の従者の言葉に沈黙で返すと、来た時とは逆方向に向かう巨大な男。

「若、攻めんのですけ？」

「今は無理だ、由近。やるとしたら、中の兵が居なくなった時だ。大将を取って、鬼に撲殺されても洒落にならん。生きて帰るのが原則だ。兵士が死ぬのは仕事ではない」

二人の従者が顔を向け合わせると「あんなに気の早い旦那が自重してるぜ」と笑う。

「言ってろ」と二人を無視して先を行く巨大な男。

と、林を抜けてバッタリと言わせた不運な、角ある異形。

「て、敵襲ぅぅぅ、ごぼっ！！」

指を揃えた巨大な男の貫手が鬼の喉に突き刺さっていた。鍛え上げた指先は分厚い皮を破き、肉を潰し、気管を破壊し、鬼を絶命させていた。

「何だ？！　敵か？」

鬼の断末魔が山全体に伝播していた。先に倒された仲間である、手近に近づいた鬼を石で切り出した短刀を打ち込んで殺す篤五郎。

背後からこっそり近づいて来た鬼のさらに後ろを取って、背を反り返して手近な岩に頭から叩き付けて倒す由近。飛び散る脳漿。

「ど、どないしやしょ？」

「まずいで、若」

まだ息の残っていた、倒した鬼の首を踏み抜いて折ると、

「全力離脱ッッ！！」

巨大な男、いや少年は皮の襤褸を鬼に投げつけ、視界を封じると

同時に飛び蹴り。
群がる鬼どもを文字通り蹴散らした。

皇紀千六百六十年、同西暦千年　卯月、陰暦四月の頃、近江の地の最奥で表の記録には残らない大戦争が始まった。
人と人外の第二の戦争。後に近江の乱と呼ばれ、日本で人と神魔霊鬼が間近に暮らした神代の時、最後の人と人外の戦争が始まった。
当時を持って本当に正式な元服（十五才の誕生と成人）を迎えた、金太郎は鬼を散らしながら獣のように吼え声を挙げた。

その頃、その崖の中、真の砦の奥深く。
鱗状の鎧を身に付けた蛇の目をした精悍な士官が慌ただしく岩屋へと駆け込んだ。
そこには悠々と石の玉座に身を湛えた大女が、龍ノ目　時雨が居た。
恐ろしいまでの堂々とした光景にゾクリと一瞬恐怖を覚え、気配に押され伏すかのように士官の男は面を下げ、片膝と片拳をついて「申し上げますッッ」と奉る。
「龍ノ目将軍に伝達。要塞の真上に鼠を三匹発見しました！！」
「報告は良い。――捕まえる必要は無い、即刻殺せ。我等の犠牲は出すな。拾った戦鬼どもを使え」
「ハッ」
士官は再び戻っていく。崖の居城はあわや騒然の様相となった。
その士官の帰っていく様子をつまらなそうに彼女は見つめると、片手でクルクルと遊ばせていた煙管を思い出したかのように口元に咥えた。そして、戦渦の様子を感じて、思い出したかのように笑む。
「もう開戦（はじま）ったか――、今晩でも、『遊び』に行くか」
禍々しい笑みを浮かべながら、フッと吹き出した煙草の煙で、岩

屋の中の蝋燭がブルリと震えた。

光が築城後間もない砦に辿り着くと、ちょうど何かの小競り合いが終わっていたのか？　矢がびっしりと突き立てられた鬼の死体から、まだまだ使える矢を丑の部隊に属する者達が胡坐をかいて抜いていた。

彼らは光の姿に気付くと、直ぐに姿勢を正して正座をし、おでこを地面に擦り付けた。

「止めろ、指揮官を狙撃されたらどうする。で、何があったのだ？」

その言葉に慌ててだらしなく座ると、

「斥候の途中で巡廻路を変更した鬼に見つかり、偵察をしていた金太郎様達が命かながら逃げてきたそうです」と告げる。

光の瞳が揺れた。

「誰か怪我人は？！」

「残念な事に先ほど一人が息を引き取り、あ、大将！　三番の救護所です！！」

部下の言葉も早々に、馬を降りてただひたすら走る光。

「（うそだ、頼む。嘘だと――）」

救護所から出てきた他人の血に塗れた救護兵の二人組みが「酷い傷だ」「顔の原型が」と物騒な言葉を投げ交わしていた。

光の肩の後ろの辺りを冷たい風が撫で上げた。

皮の前垂れを跳ね上げて、野営用の天幕の中、そこに赤黒く変色した男が横たわっていた。

その横には、傷一つ無い金太郎と左肩を赤くした篤五郎が並んで座っている。

「自分の顔が不細工だから気に入らないとか言ってよ。こんな死に方をする必要ねぇじゃねーか」

篤五郎の瞳からポロポロと滴がこぼれた。

由近は近道のために崖から滑っていた時に、岩肌に取られて足を

折り、最後に囮として、そして殿（しんがり）として奮戦した。絶命するまで石の短刀一本で奮戦したが、物量に敵うはずも無く、後ろからの不意打ちを食らい絶命。鬼どもに棍棒で何度も息絶えた後も、何度も叩き付けられ、神速で元に戻った金太郎と弓兵達が辿り着く頃には、鼻から上はただの肉塊と化していた。

そして、金太郎らによる怒りの射殺劇。二十匹近くの鬼に一匹頭、二十本もの矢が穿たれたのだ。

安堵と同時に、部下の死を悼み、そして数瞬で過ぎる慙愧の思い。だが光は敢えて、上司として心を凍らせて言った。

「……たかだか一人の兵のために二十の兵と矢を消耗するな」

「お頭！！　うちらは命（たま）ぁを張ってッ戦って！　あんたには血も涙も無いん――――、旦那……」

金太郎は掴みかからんとする篤五郎の肩を、万力のように掴んで押し留めていた。

「俺の部下が済まない、頼光。撤退の退路判断を誤った俺の責任だ」

「交戦規定の無視も有った。正式な開戦まではある程度は自重しろ。四天王の坂田　金太郎、夜半の開戦までお前は部下共々に夜間の巡廻歩哨。そして、そのものの骸（むくろ）を丁重に埋葬後、敵情偵察の報告をしろ。以上だ」

宿舎に戻っていく光が一度、目深に被った兜越しに悲しげな視線を浴びせかけたが、それは僅かに一瞬だった。

「旦那、幾ら何でも酷過ぎるとは思いませんけ？！」

噛み付く篤五郎をまぁまぁと、駄目押しで押し留める、いつの間にか隣りに居た綱。

「大将、まるで泣いているみたいだな。初日から飛ばし過ぎなければいいが……」

金太郎はその綱の言葉を気にせず、埋葬のために変わり果てた部下を持ち上げた。

その頃、内裏では今頃になって、会議中に第二次人外戦争の勃発の報を受けて、殿上人のしかも国政の中枢を担う公卿（くげ）である者たちが右往左往していた。

国政を司る最高幹部達だが、どうしようも無い人間は何処にでもいる。例えば、道長の異母兄である大納言の二位の道綱とかはなまじ家柄が良いのに頭が悪すぎて逆に持て余すほどだった。「一ヶ月で良いから大臣成らせてー、そしたら辞職するからー」とか訳の分からない事を言い出したりして失笑を買うのは常日頃であり。この場で一番「うわー死ぬ、こうなったら左大臣になってから死ぬー」とか騒いでいるのはこの男である。と言うか、今の左大臣が道長なので後十五年くらいは役職が動く事は無い。

無論、こんな事態が予測され、会議が乱れるから事前まで道長が伏せていた訳なのだが。

「あぁ、馬鹿な！　物の怪が攻めて来るだとぉ！！」

「やだぁ、死にたくない！！　まだ逢瀬も重ねてないのに童貞のまま死ねるかぁ！！」

「済みません。明日辺りから物忌みなんで南西の実家に帰ります。後、それから二ヵ月くらい暇貰（有給）います」

などと道綱以外でもただ自分の境遇を嘆く者、欲望を吐露する者、仕事を放り出して逃げ出す者と様々な中、ただどっしりと厳のように道長は構えていた。

四納言と後に呼ばれる、彼と似た血統の公任（きんとう）、斉信（ただのぶ）、俊賢（としかた）、行成（こうぜい）もその報を近親に伝えようとそわそわとはしているが、周りよりは歴然として落ち着いてはいた。

前述の通り、道長は以前、為政者の影のみならず頭まで踏みまくるとか言って、権力簒奪の暴言を吐いただけはあって、肝も達者だ。何よりも、彼自身が手勢である闇殺舎に全幅の信頼していたのだ。

その横に座して、戦報を伝えに来た今回の戦の呪術補佐で、結界維持のために内裏まで来れない陰陽寮の長の代理の、天文博士　安

陪晴明は薄笑いを浮かべている。
「情っけない奴らだのぉ」
「おや、道長殿、もうこの世に見切りを付けたのでしょうか？　お早いのですね」
その晴明の微かに邪悪な笑いに負けず劣らずの腹黒い笑みを道長は返す。
「いやはや真逆（まさか）、私と御君の勅命を受けた九千の兵が物の怪の烏合の衆に負けるはずが有りますまい。ハッハハハ」
互いに眼を合わさずに、機先を制する。
「（流石、内裏に胡坐する魔物、晴明。八十を越えたとの噂は伊達ではない。確か母は妖狐だったか？）」
「（ふん、齢たかだか三十四の癖に、この禿頭、中々やるな）」
ちなみに間違えてはならないが、老け顔の禿頭の道長が三十四で、二十代後半に見える晴明が八十越えである。
「そう言えば、晴明殿。この戦、本戦には参加しておらんが、晴明殿は戦況をどう見るかね？」
「勝ちます」
淀みなく、むしろ道長が戸惑うほどに言い切った。
「……その根拠は？　敵方は西方不敗、最強の魔、龍神。龍ノ目時雨、傘下の兵力は人で換算して五万を優に越え、更に神魔霊鬼を問わずに勢力を未だ拡大していると聞くが？」
「最強の魔、……ですか。陰陽道で、最強など賛辞するのは本当の最強を知らず、愚の骨頂と申すものです」
「ほほう、では最強は別にいると？」
「最強とは文字通りです。、その称号は唐土（中国）を越えて天竺（印度）、果てはそれより先の砂の国から、大河を越え、その先の『ぶりてん』なる島国まで果てし無く轟いているとの事。まぁ、化の者は個人主義故に戦などには出ないでしょうがね」
「ほぅ、そんな遠方までか。して、その者の名は？」
そう訊く道長をちらりと、意味深に晴明は横目で見る。

「秘密です。その者の名は魔に属する間でも禁句なので」
そう、横目で見る晴明に同じく横目で視線を交わす道長。
「ほほう、それは残念だ。さて、会合も混乱してきたし、終わりにするかな」
「そうですね」
晴明が【予測】して耳を塞いだ直後、内裏の木材と殿上人達が道長の一喝で震えた。

夜半。一人、金太郎は城の外縁を歩いていた。勝手に兵を指揮した罰による歩哨である。
あの場で由近を見捨てた事によって彼らは未熟な装備で生き残れた。それを分かっていて、更にあそこに残ったのは死体だと分かりながらも、金太郎は彼の骸を見捨てたままに置けなかった。兵を連れて疾駆した。そして、嬉々として死体を玩ぶ鬼を見て、我を失った。
「射(テ)ッ」と短い命令と同時に、同じく憤怒を感じていた射手達による一斉射。
指揮官でありながら我を忘れた事は、由々しき事態だった。
何処か遠くから「未熟者ッ」と叱咤の声が聞こえる。
先日の元服を終えてからは、綱の付き人である侍童では無く、一人の兵にして侍、そして闇殺舎を統べる四柱の一つ、頼光を守護する最強の四天王の一人と金太郎はなっていた。
そう今は、一兵卒では無く指揮官、軽率に動くべきでは無い。
グッと拳を握る。
だが、フトした瞬間。忘我の勢いで溢れる殺意を制御出来なくなる。
それは狂戦士と呼ぶに相応しい暴れっぷり。怪童丸と呼ばれるのはまだマシな方で、返り血を浴びて、自らの象徴である紅の鎧をド

ス黒く、そして赤く染めた姿は時折単純に【鬼】と呼ばれた。
血に染まるたびに人としてあるべき倫理、もっと単純な理性。ここで止めるべきだと言う境界が、時に金太郎が分からなくなる時があった。特に成長が著しく始まった頃から、体が大きくなるに連れてその傾向が強くなってきた。まるで中で何か別モノが成長しているようだ。
心を鬼してなどと言うが、人が規制しなければならない、躊躇ったり、後悔したりと、踏み止まらなければならない境界を軽々と越えていってしまう。
鬼よりも鬼らしい獣。
そんな自分の中でまさか本当の鬼が育っているのでは無いか、などと金太郎は思っていた。

「よぉ、オレ様と手合わせしてくれないか？」
そんな事を考えた矢先だった。
忽然とそれは現れた。気配を探る事に関しては四天王の誰よりも獣に近い金太郎が発達していた。だが、その女は一度、消えたはずの蝋燭がまた戻るように自然に、それ故に不自然に、風景に嵌っていた。
首から下の全身を包む皮の襤褸。手、そして膝まですら隠れるほどなのに、それでも女性だと分かるほど魔性をもってして体を発達させている。裸足で地面を踏みしめている。
彼女までの、三十歩なんて間合いは金太郎であっても矢を持ち出す距離で、切った張ったをするには遠過ぎた。
だがそれでも、金太郎は身震いが止まらなかった。圧倒的な威圧感。離れているのに喉元に剣先を突きつけられているような戦意があった。
「あんたがあいつらん中で一番なんだろ？」
兇器めいた雰囲気に似合わず、快活に笑顔まで向けながら、やた

ら女性として体の至る所が発達したその女が問い掛けた。
「残念ながら、俺は二番だ。四天王の一番は渡辺　綱だ。殺り合いたいのなら、何なら呼んでくるぞ？」
そう言って踵を返そうとする金太郎に「チゲェよ」とその意味全てを女は打ち消した。

「一番ってえのは、そう言う意味じゃないよ、坊や。あんたが【こっち側】に一番近いってことさ」

心臓が強く鳴った。
こっち側、それは人外の血溜まり。

「嘘だッッ！！」
「嘘なもんかい。そんなことを怒るこたぁ無いさ。でも人みてぇに存在を主張するなら、ここまでゲロみたいにプンプン腐った人外の臭いを半分でも体に巻いていて、坊やは自分が属していると思っている、同属（人）として恥ずかしいとは思わないかい？」

呼吸が間に合わない。動悸はますます強くなる。喉が空気を求めて音を立てる。

「人との合いの子だけど、中々だね。半端モノのくせにオレ達の中でもその力は一、二を争うよ。自分が、人としてそんな怪力を出すなんて不思議とは思わなかったとしたら、周りも馬鹿だね。でももしかしたら、彼らが気ぃを使ってくれていたのかも知れな――ッ」

張り詰めた刃金の音が遠い森林にまで反響木霊した。
槍の穂先は、女の首筋の皮一枚まで肉薄していた。
が、そこから先は皮の襤褸から始めて出た、同じく刃金の両拳を守る籠手で、手の甲と甲で挟んで受け止められていた。しかし、そ

の籠手は棘の付いた殺戮用のモノであり、防具としてのナリは潜めていた。

それの兇器を捻り潰すかのように金太郎は獣の総毛が逆立って、瞳で噛み付きそうなくらい睨んでいた。

「良い踏み込みだけどね……、遅すぎるよッ！！」

受け止めたその場から槍の殺傷圏の内側に蛇のようにヌルリと入り込み、下から振り上げた、重たい、肉を潰す拳が金太郎の土手っ腹に炸裂する。

しかし、重い音すら響くこと無く、後方に向かって華麗に金太郎は後退した。跳躍による、身の軽い金太郎ならではの回避術である。殴られるのに合わせて飛び上がり、拳に乗っかったような形だった。後にこれが【浮身】と呼ばれる打撃回避術や【八艘跳び】の跳躍力を生み出す技として知られるのだ。

着地地点の真後ろには、先ほど金太郎が思いっきり踏み込んだせいで抉れた地面が見えた。

金太郎は信じられない事に三十歩の間合いをほぼ一跳びで踏み込んだのだ。

強力な人外と戦い、人外の血の本質に近づく事で、金太郎はその存在を人外に近づけつつあった。

「ハハッ、いいねぇ、オレ様の名は時雨、龍神にして、人外総大将、龍ノ目　時雨さぁ」

片方の拳を掲げながら、総大将がノコノコと敵陣の砦目前まで出てきていた。

「四天王、南の闘将、坂田　金太郎」

一呼吸の間と伴う痛いほどの静寂。

「「参るッ」」
自らが鬼でも良い、ここでこいつをぶっ殺すと、金太郎は心に誓う。

二つの強者が地を疾走する。
長大な槍がその鋼鉄に意志があるかのようにのたくった。
不可思議な軌道にも関わらず、その軌跡と速度は最短かつ最速。
植物の、薔薇の棘のように触れれば自然に刺さる突き技。だが、華のような可憐さは無く、ただ死狂って裂く猛攻。
金太郎は一呼吸で五月雨の突きを放つ。
並みの魔であれば接触した瞬間に分解すらされそうな突き。
しかし、それを時雨は単純な腕力と反射神経で、金太郎の化け物を殺すための武術に籠手と膂力のみで張り合っていた。
女である事を忘れるようなデカイ体格のみならず、その力は魔族の力によって倍加され、拳の破壊力は尋常で無い様相となっている。
外された金太郎の突きが地面を一度穿った。その時に巻き込まれて石の欠片が吹き飛ぶ。吹き飛んだ石がそのまま飛び続けて今度は大木に大穴を空けた。その大木が音を立てて倒れる。そんな大木が三〜四本。
芯を外し、地面で減速した突きにも関わらず、その威力は落雷すら超えるほどの威力があるのだろうか？
しかし、その超人の突きを攻撃的な笑みを浮かべながら、諸手で受け凌ぐ時雨。
ある瞬間、彼女の待ち望んだ瞬間、目に見えて金太郎の突きの威力が弱まった。人外と人と持久力の差が見えてきたのだ。
「そるぁッ――、どうした、坊や？　へバッたかい？！」
「――　朱ッ」
普段は決して疲れる事が無い故に見せなかった、小さな呼吸で喝を入れて、突きから急変更して刃で薙ぐ。
この場に来て、弓矢のような単純な点の軌道から、三次元の複雑

な軌道を燕の飛翔のように描く。長い柄を利用して石突で牽制しながら、背中越しに体に纏わり付くように長い柄を回して、後ろ回し蹴りのように刃を叩きつける。完全に不可思議な軌道。

「征ッ」

時雨の闘気。拳を刃に打ち付ける。

圧縮された空気と空気の振動と同時に甲高い金属の悲鳴。空間の圧縮、歪み、反動。

全力でどちらも踏ん張ったのにも関わらず、同時に互いが吹き飛んだ。

空中から猫のように体勢を変えて着地。

「へぇ」と半分まで砕けた、水魔一族の技術力の粋を結した自らの籠手を眺めている時雨を、金太郎は激しい衝撃でズルリと向けた手の皮ごと力強く握り、槍の柄から地面に血を滴らせて睨む。

砕けた彼女の籠手に対して、猛将坂田の赤い槍はその激しい打ち合いでもまったくの無傷だった。

空気との接触点が痛いほど、肌に刺さるほどに金太郎の感覚が高まっている。目はこれ以上ないほどに吊り上って広がり、歯は音を立てるほどきつく固めているのに、緩んで同じく吊り上った歯茎までを見せる唇。薄皮の内側で、得体の知れないモノが出る場所を求めるように引っ掻き回していた。骨がギシギシと引き攣るほど、隆起した筋と肉に引かれて餌付くように震えている。それは正しく飛び掛る直前の獣のよう。

「あんた気づいているのかい？　人外と戦えば戦う程、力を解放すればするほど、アンタの理性は失われるよ」

金太郎に彼女の声など聞こえない。

「……――――はぁぁ、――へッへ」

蒸気が毀れるように、金太郎の歯の間から空気が漏れた。

金太郎は無理やり力を抜いて、次の攻撃のために力を抜いて、抜け切れずに力で震える歯の間から舌を出して、ペロリと唇の横を舐めた。鬼のように振舞う槍使い。

獣は、唇を引き裂くほどの狂喜を浮かべていた。
時雨もウットリと逢瀬でも交わしているような艶やかで甘美な笑みを浮かべて、同じく唇の横を赤い淫靡な舌で舐めて、二の腕を掴んで震えた。
「まぁ、あんたの理性が無くなろうと。オレ様の格好を付けられれば、」
金太郎の背後で突如生まれる大量の土砂。爆発的な加速と野獣の咆哮。
「構わないけどねッ！！」

跳躍と共に反対の籠手を振り翳して、魔拳を振り被ろうとしたその時。
踏みとどまった時雨は突進する金太郎をかわしつつ、一瞬で全身を回転させて、己に降り注いだ矢雨を身体を包む皮の襤褸で全て弾き落とした。

時雨の右前方、左前方、そして、その間に程よく配置された、金太郎への誤射による相打ちもしないように計算にされた布陣の三百人の弓兵が、ただ一匹を狙っていた。
楓の視界右の弓兵の僅か後方に、琥珀色の瞳の戦士がジッと時雨を見つめている。
彼女は、殺意を向けていた。もし、そいつにこれ以上傷つけたら殺す、と視線で語る。
時雨は力を抜いた、狂気の消えた笑顔を向けた。
金太郎は狼の大軍ですら総出でチビって震えるような視線で睨みつけ、地面に伏しながら唸っている。
「やれやれ、良い主人を持ったな。お前がやばくなる直前まで戦わせられる事が出来る、信頼を寄せる主か」
闇夜に広げるように剥いだ僅かな皮の襤褸の下は、僅かに胸に当てる皮の鎧と同じ素材の褌のみ。溢れんばかりの胸と尻を僅かな生

地が包んでいる。
「流石に呪力処理された矢を何千本も食らったらオレ様でも怪我するからな。今日はここで御預けだよ、坊や。……次は今より容赦しないよ」
言い終えると同時に、人の体を地面に引き倒すほどの異常なまでの禍々しい磁力。魔力の渦。人外の咆哮が超絶的訓練を受けた弓兵達すらを硬直させた。
それでも咆哮を挙げて野獣が飛び掛る。
次の瞬間、時雨の中心から突然弾けるよう竜巻が発生して視界が阻まれ、同時に蛇のような鱗に包まれた、何か巨大なモノが天へと昇っていた。
それがもの凄い速度で山の、人外の居城の方面へと消えた後には、竜巻の衝撃で全身を己が血で染めた金太郎と、壊れた籠手だけが陥没した大地に残っていた。
ヒラヒラと蝶のように、居場所を失った襤褸が空を舞っていた。

遥か遠く頂の上から――。

一人の男がその光景を眺めていた。僅かな月明かりで照らされる大岩の舞台。
「おっもしれぇ、おっもしれぇじゃねえか」
岩の上に胡坐をかいた男が居た。
年の頃は四十を越えたところ。ザンバラの髪を頭頂よりやや後ろで纏め上げた髭面の、山賊の親玉ような男だ。黒い闇そのもののような、武骨で大雑把な攻撃的な棘の付いた鎧で身を固め、片手には酒を入れるための瓢箪、もう片方には白い、頭蓋骨の上半分のような、角の割れた御椀があった。
さて、男は山賊の親玉のように見えるが、あくまでもそれはパッ

と見に見えるだけで、些かに雰囲気は違う。鎧の下には金太郎であっても目では無いほど、圧縮された筋肉がぎっしり詰まっている。
そして、時雨すら平伏させるような圧倒的な覇気。
赤い、滑りを持った液体を男は呑みこむ。

ぐい、ぐい、

「ぶあっはああ」

あからさまに怪しくて酒臭い息と供に、口から黒い焔のようなモノが漏れた。
それは人では決して見る事が出来ないはずの、しかしそれは霊的な才能が零の魔術師でも見えるまでに物質化された妖気だった。

この男こそ、平安の代に最高と言わしめた陰陽師　安陪　晴明が【最強の魔】と言わしめた魔王、二千年の月日など遠い昔に過ぎ越した鉄神（てつがみ）　芭王（ばおう）だった。

「おやおや、何処に行ったかと思いきや、あんた、日本に戻ってたんだね」

年寄りめいた言い方をして、まるで月光を裂いて割るように、赤い着物を着た幼い女の子が現れた。
その年齢に合わぬ艶かしい瞳に、大気を歪ませるほどの強大な圧力を発するのは火龍の申し子。朱月（あかつき）　永女（ながめ）と呼ばれる、これまた強者の列に名を連ねる人外だった。

後に人と魔を共存させるために奔走する死神公社の創立者二人は、まだ影も形も無かった。
時雨以上にただ己の欲望のままに動く魔だったのだ。

彼らが人と魔を共存させる決意をするのは、また別の機会の話である。本当の語り手が語るべき話である。

「永女ぇ、まぁた俺に付いて来てんのか、おめぇ？」

しつこい奴だと言う様に鉄神は頭を振った。

「あんたの近くにいると面白い事が色々とあるからねぇ、退屈しないのさ」

「ちげえねぇ」

と、芭王は笑う。大気すら恐怖で卑屈になりそうな、暴力的な笑みだった。

「……あの坊や、雷神の血筋だね」

「唐土では雷神を象徴する武具が鉞だったか？　ははん、そいつを操るだけの怪力はあるってえ事か」

幼少の金太郎の手に何時の間にか握られていた鉞は、自らの根源を司るものだったのだ。同じ龍と人との合いの子である永女は金太郎の中に残る龍族の因子を鋭く見抜いていた。

「大陸の方から雷神系列の龍、紅龍（コンロン）なんてのが権力闘争に負けて日本まで出奔したのが十七年前だったけか？　時を同じくして、東の国の豪族、酒田（さかた）の家系が一人の女を残して近隣の別の豪族によって滅亡したらしいね。それから暫くして、近隣の豪族との闘争によって龍はぶち殺されているみたいだね。まぁ、豪族も紅龍に暴れられて皆殺しにされたみたいだけどね」

鉄神は龍神が豪族に戦いを選んだ経緯は用意に推測できた。愛した女の復讐のために死ぬのが、男としての彼の本懐だったのだろう。まあ、それが鉄神にとって重要かはさして考えるほどの事では無かったが。

「酒田の家系は、当麻何とかの筋だったか？」

「ええ、隠してはいたようだけれど、確かに相撲王、当麻（たいま）　蹴速（けはや）の血筋の奴らよ。ほら、最近、四百年前垂仁院（すいにん）の前で殴り合い（殺し合い）して土地の所有権を争ったじゃない。あんただって見て、勝った方に会ってたはず

でしょ？」

日本書紀にも残る、天皇による直接召喚で定められた殴り合いによる権力闘争である。無論、勝者の元に『殺し合いがしたくて』後々訪れた魔王が居たらしいが。

「蹴速は野見宿禰（のみすくね）って野郎に負けたんだっけか？　よく覚えてねぇや」

「えぇ、当麻の土地は昔から良い鉄が取れてた。それを狙う朝廷の陰謀のために、天皇の配下が独断で毒を当麻に盛り、当麻は毒に蝕まれながら野見の蹴りを食らって骨盤粉砕。まぁ、彼の怪力とそれで操られる相撲、そして彼に統率される強靭な配下も恐れたのかもね。まぁ、彼の相撲は呪いの域だからね、組んだら必ず相手が負けるのは当然だいね」

「毒さえ無けりゃ蹴速は勝ってた、てえのか？　はん、勝負は水物、人、時、天の運次第ぇさ。まぁ、酒田の家やら大陸の龍神やら、坊主の血は陰謀による失脚が多いみたいだな？　そいつも呪いか？　おい？」

「さぁ、私には分からないわ。どちらにしろ、彼は良い血を持っているみたいね」

雷神である龍と相撲王の名を冠した元名門豪族の娘の落とし胤。

それが、金太郎だった。

電光の如き早業に怪力。本人自身の素養もあるが、血に寄る補助があると言っても過言では無い。

「目ぇ覚まさしたら、面白えだろうなぁ」

目を覚ます。それは、彼の中の人外の因子を完全覚醒させると言う暗示である。彼の中の大部分の才能は使われないまま眠っているのも同然なのだ。

「あれは起こしたら龍ノ目でも迷惑するよ、止めたげな。それに今、彼女は『あの状態』でしょ？」

思い出したように、永女が戦の【裏事情】を促す。
人里をいとも容易く薙ぎ払える彼女が、ある事情で全力を出せない事は一部の人間から推測されていた。そう、どんな戦場でもいつも抱えていたはずのあの小さな子は何処に行ったのだろうか？
それに僅かに納得がいかないようにしばらく髭を親指でゴシゴシと擦り、そして、にかっ、と魔王は気が強い人でも突然の変化に泣き出してしまいそうな貌で笑った。
「かかっ、この戦（いくさ）は面白えからな、しばらかぁ静観してやるさ。それから、だな」
月が雲に塗れ、彼らも消えた。

「稚児よ眠れ安らかに、紅の父が鳴きます故。稚児よ眠れ安らかに、足柄山の山姥泣きますぞ。稚児よ眠れ安らかに、明日一人で歩けますように……」
金太郎は昔の夢を見ていた。あれは指折りで三つの時、母が死んだ。
銀のように白い髪に、赤い瞳、血管の透けた赤い妖艶な大きな唇。死んだ父が母に言って教えたその容貌の理由は「色を表す体の部分が少し足りなかったから」であり、遺伝と言うものを知っていれば感染性の病気や気狂い、鬼化などではなく、とりわけ異常なものでも何でもなかった。むしろ容貌としては鮮烈なほどに、美化していようがいまいが、美しかったと彼は記憶していた。
酒田の家系が滅び、足柄山に隠れ住むに至っても、彼女が母としている間は人里を離れ過ぎる事は無かった。
父が死ぬ前に建てた木造の家屋にひっそりと金太郎と供に住み、偶に人里に袈裟を頭から被っては、母の一族の残した遺産の小さな金塊と引き換えに粟や稗などの穀物、野菜と交換して村の間を回って生活した。

その個人には手に余る莫大な遺産を巡って邪な考えを抱いた者が居た。しかし、その考えを実行する前に、ヨチヨチ歩きの金太郎が熊を片手で放り投げるのを見、それを彼女が愛しいそうに抱きかかえるを見て逃げ帰ったのだそうだ。

それ以降、怪童を産んだ山姥としてより疎まれる事となったが、彼女は気にも留めなかった。

唯一、心配だったのは彼女自身の体調だった。今風に言えば、白子(アルビノ)種の風貌通り、彼女はあまり長い命ではなかったが、それを押してまで金太郎を、人と龍の合いの子を産んだために長生きするのは困難だった。

「金太郎さん、よく聞いてください」

一月以上歩けなくなったある日、床に就きながら、母は訥々と語り始めた。

「あなたの父殿、時行(ときゆき)様は、大陸の方である儒教の教えを持って礼を知り、仁義に溢れた尊いお方でした。そして、何よりも優しい方で、同時に自分自身にも厳しいものでした」

瞼が釣鐘でも掛かったかのように重く、下りそうになるを堪えながら、母は語り続けた。

「あの方は侍でした。侍とは忠義をもって、あまねく人に仕える偉い方の事です」

誰構わず人に仕えるのに偉いと言うのはどういう事なのか分からず、彼が難しい顔をしていると、「そうですね」とそれに気付いた母は続けた。

「人を幸せにし、その幸せを守るのが侍のお仕事でしょう」

「おっとうはおっかさんを守ってない、幸せなんかしてない。死んじまったのに、何で立派なのか、俺は分からん」と金太郎は言うと、彼女は静かに笑って言った。

「人を幸せにする方法は何事も一つではありません。あの方は自らの命と引き換えに金太郎さんをもたらしてくれました。それにあの

方が亡くなってしまわれたのは、私の責任でもあるんですよ？」
　金太郎は納得がいかないように難しい顔を続けていると「そんな顔をしていると、時行様を思い出してしまいます」と、母は瞼を閉じた。
「金太郎さん、母の、願いです。立派な、侍となって、くださいまし……――」
　おっかあ、と金太郎が呼ぶと、
「稚ごよ、眠れ、安ら、かに、くれな、いの父が、鳴きますゆ、え。……ちご、よ眠れ、……やす、らかに、あしが、ら山のやまん、ば泣きますぞ。ち、ごよ、ねむ、れやす、らかに……、あし、た、ひとり、であるけ……、ますよぅ、……に……」
　静かに、いつも通り、金太郎が眠れるまでに謡っていた子守歌を静かに力無く謡った。
　金太郎の母、足柄山の山姥は謡い切って事切れた。
　その日に滾々と溢れ出る涙を声も出さずに、もうこれ以上彼女を起こして苦しめないように、静かに流して、流しきってから、金太郎は泣いた事は無かった。
　彼は獣として、頼光によって目を覚めさせられるまで生きていた。

「金太郎」
　耳元で自らを呼ぶ声がする。そう思って金太郎は瞼を開けると、横に正座をした光が居た。
「ようやく起きたか、寝坊助」
　目元に涙を溜めた光を見て、あの日、母が起きなかった時と同じ自分の気持ちにさせたのだと金太郎は思い、「すまない」と短く、胸の奥が溢れて上手く言葉にならない気持ちを表した。
「おまえはいつも、簡潔に済ませるのだな、……だが、私は好きだぞ、そういうの」

安堵の気持ちを語勢に見せながら、微かに光は笑う。
「頼光」
不意に、金太郎は彼女を抱いた。
「なっ」
突然の行動に光は戸惑う。
具足越しにも感じる、金太郎の強力。しかし、その中には例えようの無いせつなさが感じられた。
「俺は、怖い」
自分が何なのか、自分がどうなってしまうのか。
「俺は本当に武者、立派な侍に成りきれているのか？　俺は本当にはばらっ」
耳の裏を殴られた。三半規管を揺らされて朦朧としている間に逃げられたため、抱きついていたのは三呼吸以下である。
「ばばばばばばばば馬鹿、ひひひひひひひひ人に見られたらどうするか考えられんのか！　この未熟者！」
色んな、押し倒されてそのまま孕まされる危機感とか感じて同様しまくって、さっきよりも更に涙目になった光だが、それにも金太郎は気付かなかった。
「……済まない」
声色から精神的な疲れが滲み出るほど、焔を象徴するはずの男が燻って疲弊していた。
その様子を見て、「えーとっ」と光もぽりぽりと烏帽子の後ろ辺りを掻くと、何を言うべきか頭の中でまとめた。
「……良いか、愚か者」
金太郎の俯いた顔を左右から『むに』と頬肉ごと潰しながら、金太郎の顔を自らの顔に向ける。
「お主は贅沢だ。本当は力が無くて悩むものが多いのに、何で力を持つことを恐れる？　お主は昔から獣だ。だが、それは誇る事だ。縦横無尽で爪と牙を持つ。今更、額に角が生えようが、翼が生えようが、猿の尻尾が生えていて、実は他の星の果てから来た人種だろ

うが誰も気にしない」
「……、そんなことを思う変人はたぶん光だけだばらっ」
座ったままからの蹴りから金太郎を一回転させていた。「真面目な話を混ぜっ返すな」と言うと、そのまま続ける。

何故か、二年前くらいから妙に金太郎への光の当たりと言うか八つ当たりが多くなっている。金太郎が他の四天王に聞いても貞光を含めて「己の胸に聞いてみろ」の一点張りであり、心当たりはある事にはあったがまさかそれに光が単独で気付くはずが無いだろう、と金太郎は可能性を消していた。無論、その可能性は当たりであり、それの手引きをしたのが相模である事には気付いていない。
「まったく、次に戦場で私の真名を呼んだら暫く立てないくらいぶん殴るからな。……それに、お主が思うほど、周りは冷たい奴らではない。恐れる事は誰でもある。だが、私らも武器を取って戦う身だ。武器を持つ者だって怖いんだ。ただ、それがお前の身体に元からあるだけだ。巨乳白刃取りが出来そうな馬鹿乳女に何を言われたか知らないが、獣である事を誇れ」
「……、ところで今の馬鹿乳と言うのは頼光の一種の嫉妬なのだぼ、げは、やめ、ちょ、もう、なぐら、な」
しばらく、「ああ」とか「うお」とか声を出していた金太郎が静まり、ただただ延々と続く打撃音が鳴り響くと、天幕で耳を澄ましていた兵士達が顔を見合わせて歯根を震わせて鳴らしながら蜘蛛の子を散らすように恐怖に駆られて逃げていった。
たぶん、色んな意味で、彼らは今日は寝られない。
「――ハァ、ハァ、まったく馬ぁ鹿な部下どもといい、頭を悩ます事が多過ぎる」と光が嘆息しながら、その横でいつも坂田に殴られ慣れていた金太郎は「死ぬほど臣下を殴るなんてどんな大将だ」と直ぐに元に立ち戻った。光は少し考えるように俯いた姿をすると、やれやれ、ともう一度嘆息した。

「生憎それぐらいでくたばる様な臣下なぞ手元に置かん。……さて、お主に良い事を教えてやろう。――『悪』と言う言葉がある。この言葉には二つの意味があり、一つは良い事の逆だ。これは知っての通りだな。もう一つは『強い』、と言う意味だ。悪は弱い者を従える事の出来る強者なのだ。そして、魔に対抗する我らは常に『相手の正義に対抗する悪』の立場に立たねばならない。魔である人外達にも生活があり、そのための戦がある。それを侵す者は魔の有無に関わらず、彼らにとって良くない事なのだ。良いか？　彼らは私達の悪を恐れているのだ。強くある事を敵から指摘されたのだ。良くない事ではない、むしろ好ましいくらいだ。何よりも――」

私はお前を信じているのだからな、と爽やかで柔らかな笑顔を魅せた。

全てを許されたような気がした。

「さぁ、準備をしろ。戦の準備だ。飯を食う隙すら与えるな。奴らの大将に死神を拝ませろ。陣地の角に奴らを押し込めて、恐怖で震わせながら念仏を唱えさせるような命乞いをさせろ。良いか、悪が勝つ時だ！　だから、今は勝つ事だけを考えろ、よいな？」

「分かった、頼光」

ニコッ、と再び太陽のような笑みを魅せ、天幕の外へと出て行った。

「……そうだ。今は悩む時じゃない……奴らに尻尾巻かせて、俺達が人と魔が均衡を保てる国の境界を定める時だ……」

頼光のために負けない、そう誓った。

半時（一時間弱）で金太郎は立ち直ると設営された天幕の中に入った。

彼らの陣は、山脈が高らかに連ねる近江の地で敵方よりも高い位置に敷いていた。

今回の戦は相手の陣地に如何に早く攻め込むかと言う侵略、攻城戦である。人外の屈強な岩石の天然要塞とは違い、彼らのは遠征によって急造で作られた城である。むろん、そのために堀を満足に巡らす事も出来ていない上に、垣根程度の柵しか作りきれていない。櫓（やぐら）、射撃用の高台もそれほど高いものではない。

しかし、これは問題にはならない。彼らは遠征での戦であり、兵糧、つまり兵士のための食料を多く携行する事は出来ない。腹は減っては戦は出来ぬ。故に、これは早々と成果をあげるべき短期決戦となるのである。そのために、長い時間兵士を留める事は出来ないため、城は攻め込まれたら放棄する程度のモノなのだ。だが城の内部に攻め込まれるまでは死守出来る様、敵方の陣地を一望でき、なおかつ、彼らの強みである遠距離兵器、弓の射程距離と目視の範囲を広げるために高い山の中腹に城を設置する形となっていた。無論、近くに最低限の湧き水や馬も通れる撤退路、城の真後ろからの攻め込みを防ぐ迂回の監視も出来る場所を秀武は何ヶ月も前から金太郎とその配下を斥候に使い、距離や角度を測りながら、見極め、見つけたと同時に敵方の妨害を受けないように一気に設置したのである。

十五の候補から選んだその場所は、力による突破が原理であるはずの時雨すらも「攻め難いな」と言わしめる、地形の理を凝らした本当の天然要塞だった。敵方の岩の要塞に比べれば一見攻め易そうに見える脆弱な城が大陸の兵法を勉強した博士でも唸らせるほどの見事な設置場所だったのだ。

そして、それは用兵、兵士の構成に置いても同様である。

この時代は歩兵の未だ全盛期であり、槍や太刀を持った者が前面

に二十～三十人ばかりで立ち、それを七十～八十の弓兵が後ろから援護する形だった。

それでも戦においての華、上級兵士達は太刀による馬上からの斬撃の上手が多かった。大陸と違い、両手での斬撃を重視した結果、片手に楯を持つ戦法は廃れ、防護柵のような据え置きの楯以外は衰退したようである。つまり、騎馬兵の防御力は自然と低下したのである。

その代わりに攻撃は最大の防御と言う言葉が生きてくる。

古来戦場では遠距離からは馬上からの弓射、もしくはもう少し近づいて短い槍を使った槍投げ、近距離では太刀を使う形となっていた。攻撃力のみの突出が自然と選ばれる。

つまり、上級兵士は必然的に、戦術上では散兵と呼ばれる、あらゆる武器の得手である兵となるのである。

そして彼らは、殺戮技術を専門に養育した闇殺舎は散兵である事が『最低条件』である。

故に彼らは必要に迫られれば、馬を飛ばす事も、相撲を使う事も、弓、槍、太刀を使うことも出来た複合兵団だったのである。

室町時代以降に形となる武芸十八番を、彼らは先取りし、既にどの兵士も実践レベルまで高めていたのである。

それは現代風に言うなれば様々な技能に長けた特殊部隊のようなものである。

それでも真っ向から人外と戦った場合、生命体としての潜在能力の低い人間は苦戦を強いられる。だが、人の強みは違う。個々でなら決して勝てないような化け物を、彼らは集団戦術によって決してきた。故に士気も、非常に連帯感も強い。例え人の兵団なら同規模で戦った場合、千年現在の段階で勝てるのは大規模な兵団を運用する唐土やその先の巨獣である象を従えた天竺、島国で鉄の鎧で固めた騎士を携えた英国すらも適う事はなかっただろう。

こと集団戦闘の技術とその個々の強みを引き出す戦闘技術において、現在彼らは時代の先駆者を歩んでいたのだ。最新鋭の理論で作られた最強の軍団である。

その彼らの相手は現時点において、
空中機動を発揮する烏族が四百、
古代印度より巨獣として猛威を振るった戦象にあたる龍族が二十、
そして、主力部隊である千の鬼の歩兵団、

数字上では少ないが、ただの歩兵である鬼を退治するのに闇殺舎での並みの兵士なら五人は必要とする。龍などは優秀な兵士、百人力が三十人で立ち向かっていくものであり、加えて、烏族は根っからの武の得手であって集団戦術も得意としていた。
そのため、事実上彼らの戦力は五万どころか七万を超えると言っても過言ではないのだ。

大して頼光側は闇殺舎の公時の手塩に掛けた騎射を生業とする千人の軽騎馬兵と、綱の選び抜いた生え抜きの五百人の大太刀による斬り込み隊。秀武の指揮する工兵にして散兵の歩兵実働部隊五千人に、貞光の二千人の僧兵集団。そして予備兵と呼ばれる、非常時の際に真っ先に駆けつける総鋼鉄の分厚い鎧を纏い、長槍を携えた電撃突撃戦特化の、戦闘膠着時の突破口を作る専門である重騎馬兵、金太郎を含めた五百人である。
兵法上で戦力を概算した場合は、兵力は二乗し、互いのその比率を見る。単純計算でも七万の七万倍と九千の九千倍では、四千九百と八十一。約六十倍の戦力差となるのである。
数字上の兵数は六倍であり、兵法上では敵兵力の三倍を出せれば勝てるものであるが、先に記したとおり、生物的な基本能力の差は

天と地の分かつほどの差があるのだ。単騎で龍やら鬼と戦えるのは頼光と四天王、そして通常の百人長の兵士の内でごく一部のみである。戦力が乱れれば例え単騎では勝てても戦に負ける確率は倍増する。兵を均等に配置するのが重要だが、それでも何処かが足りなくなる事は必死だった。足りなければ、そこから陣形は崩れて敗色は濃厚となる。

「だが、我らは綿密に情報収集を重ねていた。敵の動きも、そして、その性質も利用できるだろう」

地形情報。

南東に位置した人の居城、東の丘陵から流れる大河は北西へと走っている。西から南西へは森林と共に小高い尾根を連ねている。そして、北東、鬼門に位置するは怨敵の牙城である石塔と洞窟城。西の険しい連峰から大河の間は僅かに手狭ながらも平地を醸しだしている。おそらく、直接、歩兵同士がぶつかり合うのはここだろう。

厄介なのは彼らの兵団の一つである烏族である。

いわば、古き森人の一族である天狗の一派はその身を森深くに埋め、人とは関わらないように続けていた。しかし、政府の、もとい貴族達の課す様々な税金の類、米、材木、鉱石などが人の領土の拡大を余儀なくし、居場所を奪われた烏族達は着実に心に憤怒を募らざるを得なかった。烏族は元々猛禽類が長い経験と森と土の英気を受けて変化へと成ったモノどもである。純粋な森の化身である天狗に比べその血気は些かに盛んである。

そして、何よりも危険なのは彼らの背中には翼があることである。

この時代、一部の卓越した修験者や陰陽に通じるもの、仏法密教の秘を会得した貞光のような『魔法使い』以外で飛べるものは居な

かった。当然ながら上空への攻撃は弓矢を持ってしても矢自身の自重によって貫通力は減少、または相殺され、致傷を与える事が出来ない。つまり、彼らが高低差を利用して射撃戦に持ち込んだ場合、味方の甚大な被害は免れない。

現代ではベトナム戦争以来、航空戦力である戦闘機や武装ヘリによる上空と地上戦力である戦車や歩兵の地上との挟み込み作戦は勝利の大前提となっている。真上と横からの三次元の圧力には同じ次元の力で対抗しない限りは勝つ事は出来ない。故に現代戦では如何に航空戦力の空対地攻撃を防ぐかが要となる。そのために諸外国は如何に早く航空戦力の発着施設である空港を破壊するかや空対地攻撃からの弾頭迎撃、戦闘機による爆撃機撃墜の航空戦に尽力しているのである。

しかし、それは現時点においてはそれは遠い未来の話である。飛べない人はただの人であり、残念ながら頼光の郎党の間に空を飛ぶほどの異能を持つ者は貞光を除いて居なかった。加えて、血気盛んな龍族に怒涛の突撃をされれば人は烏合の集も同然、一溜まりもないだろう。

だが、彼らは勝てるのだ。『勝算』があるのだ。

日も明ける前から崖側に陣取った鬼の軍勢は、その自らの出撃を今か今かと待ち望んでいた。

鬼の起源は人である。元は人の形をしていたものがその気性の荒さと同じ『臭い』のする同族以外からの孤立性によって、人から乖離したモノどもである。元から妖(あやかし)の生まれではなく、徐々に鬼へと

変じていくのである。死後、人が鬼籍に入ると言うが、死んでも妖の理（ことわり）に属した故に鬼となるからとも言われている。

もしくは鬼子と呼ばれる、異常成長をした者達などは緩やかに人から排斥され、自然に同じ臭いのする鬼へと組み込まれていくのだ。

さて、その鬼達は人から外れた事による妖の理へと踏み込む。鬼はその妖への進行度合いと諸々の力の強さが色濃く膚（はだ）に表れる種である。

始まりである青鬼、最も多くの部類である赤鬼、人と同じ大きさで地上でなら最高の怪力を持つ黒鬼、そして神域であり、数えるほどの鬼神と呼ばれる白鬼である。奇しくも人の死体が経る腐敗過程と同じため、その力は地獄絵図にも描かれる通り、より人から忌避される。端的に死者が、死体が変じた者であるからと言うのもそう避けられる要因なのかもしれない。

鬼の寄り合いと言うのは暴力を生業とするもので言ってみれば山賊や暴力団と似たようなものである。源などの武士と違いは人と協調性を保てるか否かと云えば微妙なものである。そして、鬼の独自の階級制度と兄弟盃制度があるが、末端の青鬼の事に長である白鬼が関与する事は滅多に無い。

今回の戦では、人との境界に鬼なりの理屈では許せないモノがあるとして、青鬼と赤鬼の集団が団結がしたものであり、上級の鬼達である黒や白は関わりを持ってはいない。

以前に吉備の国で白鬼の大将格とその一団が犬やら猿やら雉を連れた荒武者に打ち殺され、更につい最近は黒から白に変わりつつあった九比来（くびきり）梨峠の鬼を坂田　公時に例の第一次大戦で討たれたため、「人間達と戦りあうのは暫くやりたくないわい」と上級格の鬼達は静観状態に入っていた。

それに反発する勢いなのか、逆に青鬼、赤鬼達は外と内の下克上に燃えて大多数が龍ノ目の軍門に下っていた。

しかし、生粋の魔である龍や烏族に比べれば、彼らには立場と言うものが余りにも無さ過ぎた。いわば、エリートの魔族達に対して、

神域の白鬼でも外れ者であり下っ端の魔属である。自然と鬼独特の烏合の集ぐあいから蔑まれ、疎まれた。誇りを旨とする龍ノ目にすら軽んじられ、先の彼女の士官とのやりとりの通り、拾いもの扱いをされていた。

だからこそ、士気とはまた違った反逆的な闘争本能みたいなものは異様なほどに高まっていた。ただでさえ妖の力で倍増された怪力が千の津波となって襲い掛かるのだ。六尺を越える鬼の軍団が進撃したら、誰もが震え上がるのは間違いない。

立ち塞がるものは何人も居らぬと、鬼はいきり立っていた。

そんな中にいた先頭の鬼の一匹が、何かに気付いた。

南東、巨馬に人が一人、朝焼けも始まる前から平原に佇んでいた。人を乗せるにしては大き過ぎる馬だろうが、乗っている本人には十分すぎる大きさだった。普通の馬の二倍はあろうかと言う巨躯の馬が似合い過ぎる馬上の戦士は、紅い装束を着た大男だった。上背は目測で六尺五寸は軽く越えている。

総鋼鉄と言って良いほどの分厚い唐紅の鎧。赤獅子嚇しの胴丸に、天を突き刺すような赤銅色の角を付けたの兜、顔を鉄の仮面で覆い、太い上腕を囲う肩鎧に手足の具足ははち切れそうな野獣の筋肉をひた隠していた。

そして、紅い長大な槍。

それの柄の中ほどを持って宙に掲げ、一気に鬼の方へと振り落とした。

黒穹を割る、音を鳴らす黒い鏑矢が一本。
大きく弧を描いたその矢に合わせて、空はようように紫を含み、平原を取り囲む山の端から白を含み始めた。
矢がその大男を見つけた鬼の手前に突き刺さる。
それはあたかも、真っ赤な大男が日の出を引き連れ、勝利宣言をしに来たように鬼どもには見えた。

――明け方、日の出と鏑矢と共に盟約は終りを告げ、近江の地に殺意と戦叫が迸る。

鬼どもが自然と駆ける。
その勢いは怒涛。大地を震わせ、全てを恐怖で覆うがごとくである。
血走った瞳、虎の皮などは下半身を覆うだけのための物で、頭蓋骨をほぼ一撃で砕く武骨な棘の付いた金棒に、その太さと凶暴さに劣らない太い筋骨と浮き出た血管。そして、妖だと誇示する膚は極彩色の青や赤で交じり合い、それは一つの巨大な斑な紫色の生き物が襲いかかってくるようだった。
それが迫るだけで並みの人間なら心気を失い、茫然自失となるより他は無いだろう。

だが、その大男は違った。
巨馬の腹に軽く声を掛ける程度のように蹴りを入れると、あろう事かその鬼の進軍に真っ向から突っ込んできた。
鬼どもは「馬鹿め」と心の中で笑い飛ばした。
ただ一人の人間が、馬と高々槍一本で大軍に向かっていくのだ。
痴れ者にも程がある。余程の愚者でも裸足で逃げる事は請け合いであり、それはただの自殺にしか見えない。
鬼達はいつ尻尾を丸めて逃げるだろうと期待しながら、その足を

緩めない。駆けるような轟来波動の進行に一人の兵が立ち向かう。

一騎駆け。

後方に兵団は零であり、まさしく男は、たった一人で鬼の大軍を相手取ろうとしていた。

「ぐぉぉぉぉぉぉっ」と空と大地を揺らすような鬼達の吼え声。

胆を潰すような遠吠えとはこのようなことか？　空気の圧縮された咆哮はびりびりと大漢の兜を震わせる。

しかし、馬が更に加速をした。

男は無言で諸手で大槍を背中へと隠すように回す。

狂った大軍の先端が男へと辿り着かん、正にその時だった。

先頭の鬼達の四、五匹が何かの冗談のように吹き飛ばされた。

いや、吹き飛ばされただけではない。上体と下体が斜めに分断されていた。

男はまだまだ進む。

その槍の刃先は先ほどとは逆の方向に回されている。

今度は二、三匹。金棒でその音速の薙ぎ払いを受け止めた鬼どもがそのまま天空へと吹き散らされた。

吹き散らされた鬼が更に吹き飛ばされた場所から十間（二十メートル）以上も外れた他の鬼を巻き込む。鬼達の進軍が総崩れとなり、たった一人のために進軍が止められた。

それがわずか、馬が自分の鼻先が通過した場所から尻までの間に進んだ間に起こった出来事であり、時間にしては刹那にも満たない攻防。いや、鬼達が防御不可能な、圧倒的な攻撃だった。

それを後方から見ていた鬼も、吹き飛ばされた鬼自身も信じられなかった。

人が、ただの人が人外の大軍に楔のごとく食い込んでいるのだ。
たった一人の進撃故に、それはにわかには信じられない出来事である。
逆の光景なら彼らには見慣れたものだった。
斬り掛かる武者どもを蹴散らし、叩き潰す鬼が一騎。
それが、まったくの反対の状態となっていた。

千の鬼どもの一部とは言え、進撃の圧力に真っ向から、強風に煽られた火勢のように一騎駆ける荒武者。
普通なら恐怖の対象である鬼を馬も恐れるはずである。しかし、馬上の人物の絶大な信頼とこの場では不思議なほどの男自体の勇猛さが馬を奮い立たせて、化生（けしょう）へと突撃させるのだ。
槍から先へは踏み込むものは鬼には一匹足りともおらず、ただただ骸を馬の進路の跡に曝していくだけだった。
馬上から操るにしては僅かに短いような槍だ。おそらく、徒歩で操るためのものだろうが、それでも総鋼鉄の槍は両手やましてや片手で扱うなんて事は普通は出来やしないだろう。更に、巨体とは言え、馬の首越しにその走行を些かも妨害せずに槍を操るなど出来ようか？
いや、出来るのだ。
何故なら彼の者は内裏南門を守護する焔の武者、四天王と呼ばれる源　頼光の郎党の一人、坂田金太郎だからだ。

三十ほど鬼を蹴散らした所で男は馬首を巡らし、今度は反転して逃げるように山側へと駆けていく。
前方を僅かに遮る鬼を巨馬の馬蹄で逆に踏み潰し、あるいは驚異の曲乗りで六尺を越える鬼の頭上を飛び越し、まるで草か何かのように鬼どもを掻き散らしていった。
唖然とした鬼どもも、その男の攻撃と切り替えの早さに目を疑いながらも、仲間の虐殺によって残すにしては少な過ぎる理性を切れ

させて、荒武者の方へと襲い掛かるために追い駆けた。

「ふん、秀武の机上演習どおりか。誘いに乗るのは目算済みか」

馬上の大男、金太郎は腰元の荒布で鬼の血と油で濡れた槍の刃先を拭いながら、愛馬の羅王号を腰と足だけで小刻みに左右に走らせ、鬼の大軍の頭上、空の烏族からの遠距離射撃を器用にかわしていた。

雨のように降り注ぐ矢を、刃先を拭きながら、柄の方で円を描くようにして羅王号に当たらないよう矢をそらしている。自らに向かう矢は分厚い鎧に阻まれて貫く事はおろか、傷を付ける事も出来ない。頼光や金太郎の扱う三人引きの強弓ならまだしも、幾ら武の上手である烏族達でも、弓を引くためだけに鍛えた怪力やら専門の技で射る弓とでは雲泥の差があるのだ。ましてや、以前金太郎が「こんな襤褸(ぼろ)でも着るなら裸の方がマシだ」と言って金太郎のために作った鎧を馬鹿にしたために、それを聞いて怒り狂った防具工が躍起になって作った総鉄鋼の重鎧は金太郎が矢が十分に加速する五間(十五メートル)の距離から放っても傷一つ付かなかった代物なのだ。無論、唯一をそれを着て自在に動ける怪力の金太郎とそれを乗せて駆け抜ける事の出来る巨馬の羅王号だけが出来る唯一の一騎駆け戦術である。

「後は任せたぞ、頼光」

そう呟いて、南西の山側の林へと金太郎は身を隠した。

石の尖塔の真下、室内と同じように今度は外にある大岩に座した時雨が戦報を聞き届けていた。

「伝令より直伝。鬼どもの一部が当初の進撃路を外れ、山側へと向

かっています」
「……、今日の戦は負けだな。まだ進撃していない鬼どもの後ろの八百と烏族は力づくで下げさせろ。前の二百は踏み込み過ぎだ、捨てて構わん。後は体制の立て直しに費やす」
「はっ？」
鋭い目付きで空けた直後の空を見る。「昼前に勝負を決するとは人間どもも意地汚いな」と毒づいた。
呆けた顔で負け越しの言葉を聞いた士官に、時雨は一人続けた。
「林に伏兵が居るのは見ても同然だ。幸先良く、我が軍に痛手と優位を見せ付けるために、陽動と伏兵を使いやがった。しかも朝駆け。人外の活動力が最も弱る頃を狙って、頭の鈍った鬼どもを坊やで引き連れて、林へと誘い込む。おそらく林の中に居るのは弓兵の軍団だ。馬の足に引かれて来た鬼どもがそれに気付いても駆け足を簡単に緩め、進路を変える事は出来ない。真っ直ぐ林に突っ込んでいこうとして、後は蜂の巣だ」

鬼の頭が爆ぜた。
強弓が鍛えられた荒武者の手で引かれ、矢が放たれる。
呪力処理された矢、そこには人外を否定する言葉と荒ぶ魂を鎮める詞が刻まれている。それは人から外れた鬼にとっては猛毒のようなものであり、当たった瞬間に鬼をのた打ち回らせる痛みを引き出す。
しかし人外にとってはそれは痛みだけであり、人のように絶命する事は頭や首、心臓などの本当の急所でもなければ無い方が多い。
そのため、真正面から放たれた矢の痛みでのた打ち回る鬼どもを更に、林に隠れていた頼光の配下が斜めから太刀を携えて、鬼を斬り、倒し、ばらし、曝す。
二百ほども居た鬼どもは一斉に放たれた矢に自ら突っ込んでいく

形でバタバタと倒れ、更に横から来る形で武者に挟まれて、細くなるように軍勢が散り散りに断たれた。散り散りとなれば、一体の鬼であれば、それはいつもの人外退治と変わらない。最後に頼光が小振りの太刀を振るって、逃げ帰ろうとした最後の鬼を背後から切り払って絶命させた。

太陽が真上に着く前に、今日の勝敗は決していた。

後は鬼の死体を数え、戦傷をした兵士を護送し、日の暮れる前にはおおよその局面を制していた。

林には新たな櫓が急造で建てられ、夜間の烏族への警戒も怠らないものとなっていた。

戦の始め、その勝敗は人の圧倒的な勝利と言えた。

「うぉおおおおおおおおおおおおおっ、俺の出番ねぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

要塞の中心で自分の活躍を夢見ていた馬鹿（秀武）が順番待ちを叫んでいた。

ちなみに秀武の役目は要塞の護衛であるため、彼の出番が来ると言うのは攻め込まれていると言うかなりの危機的状態である事は付け加えておく。

そのため、現在優勢である戦況では、こうして、

「しかぁぁぁしっ、その出番の代わりと言っては何だが、ここで絶技『超級亜空間ぞろ目出し』ぃぃぃ！」

「何ぃ、ぶつかり合うさいころがそれぞれ最適な位置と回転を生み出し、とんでもないぞろ目出しなっているぅぅ！」

「しまった、小生の次の番で最下位だったはずの卜部兄貴が上がってしまう！」

「いかん、那波咲(なはざき)！　ここは我輩では無理だ。殿(しんがり)を貴様に任せた、止めるんだ、死守だ、死守！」
「うはっ、雪円(ゆきまる)や行念力(こうねんりき)に言いたいけど無理だお。このさいころ、絶対仕掛けあるはずなのにおいら全然たねが分からねぇお！」
　双六と呼ばれた、現代で言うところのバックギャモンみたいなさいころ賭博でも歩哨休みの部下としないと大変暇が出来るほど退屈だったのだ。ちなみに秀武専属の軍勢の、しかも賭け事専門の仲間の面々だけあって、さいころの独特の振り方だけでインチキなほど高い目の出る手品、何時の間にか駒の位置を変えるいかさま、最初から何か空繰を仕込んでおく仕掛け、精神的な圧力を掛ける強請りや謀ったようにちょうど仕事が来る勝ち逃げ、罰遊戯(ゲーム)からの逃走などは寝起きの髪梳きくらいの勢いで軽く、しかも大人気なく本気でやってしまうダメ人間の集まりだった。ちなみに体術や武器術で綱や金太郎、むろん魔法においては天地よりも差のある貞光などの異能に近い四人の中で、唯一秀武が神がかっていたのはこの博打関係だった。このいつもの遊戯仲間が三人がかりでやっと卜部を最下位に留めて勝てるか勝てないかの境目なのだ。そして、ちょっとでも気を抜けば、先の通り、糸か何かで操っているかのようなぐらいのインチキさで彼らを翻弄するのだ。
「そして、主役交代を待ちわびながらも、上ッがりぃっ、ひゃほぉっぃ」
「うおっ、やべぇ、秀武兄貴ぃ、その上がりの金を持っていかれると子供を売りに出さないと我輩の飯が食えなくなるのであります」
「嘘付け馬鹿！　行念力、てめぇ独身男だろうが！」
「同じく、このまま負けると小生雪円、太刀一本で、しかも褌で戦場出る事になります」
「生き恥を晒せ！　お前の男達の群がるいやらしい尻を晒してろ！」
「うはっ、おいらは逆、ふんどしどころか胴丸鎧しかない。下半身丸裸、日常生活どうしよう。頼光様に見られて怒られるちゃう……、はぁはぁはぁはぁ、ふぉぉぉぉぉぉぉっ！」

「知るか！　このど阿呆ぅ、この俺だけが圧倒的に勝ちゃーいーんだよ。俺の足の裏に接吻するなら借金でもう一遊戯やるぜ。むろん、接吻は舌で舐れよ」

ちなみにこの軍団、指導者である坂田の中で最も頭の痛い軍団だった。殆どが秀武が盗賊時代からの仲間なので、規律と言う基準が一番上の馬鹿に合わせたために下がもの凄く低いのだった。

「舌で舐れですとぉぉっ！　この屈辱、必ず次の回で汚名挽回させたる！」

「ちなみにそれは汚名返上ね、と突っ込みつつ、この勝負、もう一度いかせていただきましょうか？　ところで、そのさいころ、こちらに『たまたま落ちていたもの』と取り替えませんか？」

「いや、もう勝負とかどうでもいいから秀さんの悪臭のする足の裏より、頼光様の具足の中でむんむんに蒸れた足の指の間をしゃぶらせてくれ。おいらのおしゃぶりに『ん、あっ』とか艶っぽい声を挙げながら拳を口元に持っていて耐える頼光様、頼光様、頼光様ぁぁぁぁぁぁ！」

この世の混沌がここにあった。

「ちょっとあなた方何しているんですか！」

すぱーんといい音を立てながら引き戸が開かれ、坊主頭から湯気を立てている貞光を「あんた何言ってんのん？」みたいな顔で、双六を四人で囲みながらやっていた馬鹿軍団が眺めた。ちなみにその目を離した瞬間にさいころを自分用の仕掛け有りのと入れ替える激しい攻防が手元で行われたが、貞光ごときの素人には分からなかった。

そんな本気の遊び心を戦場で全開の集団の、あまりの能天気さ加減に土床に音を立てて貞光が地団太を踏む。

「ここは決戦場ですよ！　どうしてあなた方はいつもいつも緊張感

とかが無いのですか。確かに緊張を解すのは重要な事ですが、『適度な』と言うのが接頭に着くべきです！　身体の緊張を解し、心の強張りを無くすのが脱力の基本ですが、あなた方は力云々以前に方向性を誤っています！　反省してください、反省をっ！」

今度はばんばんと地盤が砕けそうな勢いで両手で地面を叩き、息を撒きながら馬鹿を正そうとするいつもの光景である。

そこで秀武は至極真面目な顔をしながら、片方の掌を広げつつ、その掌の小指の第二関節だけを曲げて見せる。

「なぁなぁ、この状態で曲げた小指を反対の指で弾くと小指が全然力が入らなくてなんかムカつかね？」

「ちゅぁぁぁぁぁぁっっ！！　ひ　と　の　は　な　し　を　き　き　な　さ　ぁ　ぁ　ぁ　ぁ　い！！」

正座から六尺くらい飛び上がって、今度は立ち上がる貞光。

「もう本当にっ、重大な勝利の分かれ道だっていうのに分かってないんですか！　あなたがたは！　あろう事か開戦の合図と同時に双六始める人たちがこの世の何処に居ますか。はい！　そこぉ！　下らないのでここに居ますって、全員で手を挙げない！　と言うか、那波咲さん！　何であなたは全裸の上から胴丸だけを着ているんですか！　それに頼光様の足の指を何と言ったか判断しかねますが、金太郎さんが横に居たら投げ殺されますよ！」

「ふ、貞の兄者、頼光様の息も絶え絶えで恥らう姿の妄想で胸がいっぱいの今のおいらに如何なる障害も意味をなさないのさ」

「――そうか、那波咲、ちょうど今から話があるからちょっと本陣の裏に来い」

むんずと下半身裸の那波咲の首根っこを掴んで、鬼の返り血で染まった金太郎が横合いから現れた。

「うぉ、金太郎氏帰ってくるの早ぇっす！　うわ、ちょっ、そこは普通は掴んで引っ張るところじゃ……うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――」

そんなこんなで緊張と言うのとは対極に位置する奴らが要塞を守

っていたのである。

「……貞光、お前も少しは力を抜いたらどうだ？　短期決戦とは言え、心の労苦は重みになるぞ」

同じく陣地へと帰ってきた、返り血すら無い剣舞を見せていた綱が貞光にぽんと肩を叩く。

「はぁ、綱殿、彼らの蛮行を見ていると本当に心労で心の臓がきりきりと痛みますよ」

法衣の下に着込んだ鎖帷子ごと押さえつけるように胸に手を当てる。

その様子を一通り眺めてから一人で納得するように「まぁ、お前のような硬さがあるからちょうどいいのだろうな」と複雑な心境を言い含めた。

綱が奥に引っ込むのに合わせるかのように、代わりに光が入ってきた。

「秀武、明日の合図の確認をしたい、ちょっと来てくれ」

脱ぎ捨ててある具足や褌を疑問に思いつつも、軽やかかつ速やかに鎧の音を立てて光が外へと出て行く。

「頼光ちゃん諒～解。んじゃ、外回りに行くから今日はお開きな。と言う訳で、この場で途中退場した那波咲の全面的に惨敗で同意？」

自分達は負けてないので「激しく同意」と適当過ぎる合意をして歩哨へと戻った。ちなみに、双六中に身包みを剥がされ、そして怒り心頭の金太郎に下半身丸出しのままで引き摺られた、那波咲の兵装やら褌までを戦利品で全て持っていく念の入れようだった。

その様子を見て、柱に額をくっ付けて寄りかかりながら貞光は再び深いため息をついた。

話は変わるが、妖魔がなおのこと強い状態である夜を人間が警戒してまくっている、と人外らは予想している。そう考えた頼光らは、初日の夜の襲撃は逆に無いと考えて、昼よりは僅かに弛緩した状態

になっていた。つまり、裏の裏を読んだのだ。まさしく、時雨もそう考えさせられたのと、今日の痛手のために建て直しのために時間を取らざるを得なかったのだ。
彼女らの予想と思惑通り、戦場に似合わないほどの穏やかな夜は徐々に更けていった。

こうして、戦の初日は終わったのだった。

――人外北方最前線要所

総指揮官たる時雨は忌々しいほどの戦術によって破れて苦渋を呑み、周りが気を使ってまるで彼女の部屋に来なかった。そして、逆に気を使われるほど人如きに大敗した事実が彼女を蝕んでいた。
「ふん、このくらいで……」
人間にしてはやると少し驚いた程度。実際、兵力は減らされたとは言え、全体の一部であり、主力である鬼ども全ても、虎の子の龍族の突撃部隊もまるで活用していない。加えて、戦場に未だ隠れ、地下に潜っている【霧宮の部隊】も一向に出てきていないのだ。
自陣の圧倒的過ぎる戦況を如何に演出する、いや『演出させられているか』と考えてみると、あの恐ろしい人間の男に怒りと同時にぞっとする何かが浮かんできた。

「大変そうダな。そロソろ出番か？」
蝋燭の揺らぎと共に現れる蟲の王。
「まだ貴様を頼るほどでは無い。引っ込んでいろ、今日のオレ様は色々と癪に障る」

「随分と手前勝手ダな。京(みやこ)カら老原なる亡霊ノ軍団が出陣しタソうだ。その報告でモ引っ込ンでいロト？」

「何……？」

老原(おいはら)　灼染(しゃくぜん)。霊帝と呼ばれる男。

人がその名が何処から始まったのかを知る者が誰も居なくなる頃、未だ一人、ただ戦いだけを求めるその男が居た。

男はただ体の熱が、それ以上に沸騰するほどに戦いだけを望んだ。

しかし、長生きしたとは言え、それ以上に男は身に迫る老いがあった。

それを悟った時、人は二つの行動を起こす。

受け入れるか、反逆し続けるか。

男の性格、いや、性質上、反逆する事は必死だった。

仏舎利と呼ばれるものや月の使者が授けた不死の妙薬を求めたりした。

しかし、どれも眉唾であり、例え手に入れても、僅かに老化を止め、若返る程度だった。

生きたい、生きて戦い続けたい。

そして、ある僧にあった時に全ての疑問は氷解した。

『それほど、戦う事に執着すれば、彼方様は永遠に戦う事だけとなる修羅と言う亡霊と成り果てるでしょう』

『――――！　ならば、それこそが儂の生きる道』

彼は寝食も忘れて忘我のまま戦いを続け、そして肉体を徐々に失いながら、戦うだけの魂が現世に影響させるほど亡霊になることが出来た。

それが、都に巣食う戦の続行のみに特化した亡霊達の王、霊帝老原灼染なのだ。

「で、奴はどちらにつくのだ」
「分かラン。どちラニしろ、戦いニ惹かレてやっテクるのだ。ドちらカに敵対はスるダろウ」
「こちらに来れば、握り潰すだけ。あちらに行けば、漁夫の利、だな」
「予測不可能だナ」
そう、蟲の王は言った。

27．?昕陀（あただ）（2／3）

――別幕

「【予測】するなら、亡霊どもは確実に頼光の軍と戦うだろう」

闇の中、なお暗き底で、安陪　晴明は言い切った。

彼の前には闇の中でもなお赤い、極彩色の衣を羽織った食人騎『あるでひど』が座って対峙をしている。

「それは何故ですか？」

彼の世界のどろりとした、飲み物とは思えない緑色の液体を口に含みながら、あるでひどは聞き返す。

「単純な事だ。彼の性格上、草木も分けて何よりも早く戦場を目指すだろう。進路上、そこには大量の兵士の駐屯した陣地が目の前にある。好戦的な彼はどうするだろうか？　答えの示唆となる情報はこれだけで十分だろう」

「なるほど、『彼らに最も近い』からですか」

「そう言うことだ。まず、手近な彼らに亡霊達は襲い掛かるだろう。明日、明後日が一番厳しい戦いになるだろうな。明日は空の読みによれば、雨気を含んだ霞が月に掛かっている。雨、しかも豪雨と見たかな」

――本幕

雨が降っていた。

視界を塞ぐ雨、そして何よりも雨が厄介なのは足場と矢筋を狂わせる事である。

日本は湿気を多く含みやすい大地のために泥沼のような大地へと

なりやすい。そうなれば、足自体の大きな鬼や、足どころか体が四～五倍ある龍の方が接地面が多いために安定性が高いのは自明の理である。

そして、それ以上に人側で深刻なのが弓矢である。矢には矢筋を整えるために羽が付いている。それは雨を含む事で濡れ、羽の形と重さを狂わして精妙な矢道から外れるのだ。羽自体が生きて羽ばたくならまだしも、そこまでの妖術を使う事が出来ない、もといそれだけの術を数多くの矢に施せないのだ。

彼らの拳や鉤爪の届く距離の前に事を終わらすが最も効率的である。そのため、古来から遠い間合いから攻撃手段を持つ弓の上手を揃える事は戦では必要不可欠だった。そのため、古来では弓の上手を『弓執り』と呼び、敬われていた。

その弓矢が非常に使いにくくなるのが雨と云う天候だった。雨用の、蝋や多少の油を羽に施した矢もあるが、本当に僅かなものである。後四百年後の戦国の世であれば、そう言った商品を提供する商人が現れるが、残念ながら現段階ではそこまでの文明の高さを日本は有していなかったのだ。

そう、古代人の戦においては雨は大敵なのである。

雨がしとしとと覆う中、綱と光は先日布陣を敷いた林の影から人外の兵団を覗いていた。

「……やはり、視界が悪いな」

「雲の翳り、滝のような雨のせいですね。少し様子を見るのも必要でしょう」

「どちらにしろ、敵もそれで何らかの襲撃をしてくるだろう。それほど待てるものではない」

光が獣道に待たせていた彪凪に乗り、馬首を巡らせようとして、不意に落馬しかけた。

それ自体は非常に珍しい事だった。

雨に濡れた足を乗っけるための鐙から足自体を滑らせるにしろ、それは武人であれば殆どないことである。

だが月に何度か、武人であるはずの光がそう言った激しい運動をしない日を決めて避けており、それでも人外討伐のため、その日に出兵した際には、四天王と後数名が分かる程度の身体の鈍りがあったのを綱は思い出した。

「大将、まさか……？」

「違う。水気の冷たさで古傷が痛んだだけだ。安心しろ。私は大丈夫だ」

「ご自重ください。この戦には我らが四人が支えます。頼ってください」

「まるで坂田みたいな爺くさい口調だな。だが、困難な時こそ陣頭指揮が指揮官に必要だ」

そう気丈に振舞って光は言うが、よくよく見てみれば、兜と髪の生え際の間に不自然な程多い汗を掻いている。

「しかし」

「もう良い。私とて私の体調は理解しておる。……それと、金太郎には言うな」

「誰もそんな事は聞いていませんが？」

「……いくぞ、布陣と戦術の確認を行う。歩兵十二支の各百人長と騎馬の千人長をそれぞれ櫓の傍らに呼ぶんだ」

「はっ」

「まったく頼光ちゃんも頑張るねぇ」

雑木林と巧みに同化され、隠された櫓から秀武は味方の進軍を眺めていた。

彼らの進軍は大規模にも関わらず、同種の人間でなければ見極められないほどの静かな進撃である。通常大部隊であれば、その察知

は容易いものだが、隠行に長けた彼らは歩兵の歩みは少なく、騎馬の音は小さく感じさせる事が出来るために、実際に運用する兵数よりも圧倒的に少なく感じさせる事が出来るのだ。

簡単に言えば、突然二百かそこらだと思われた兵が森林から出た途端に十倍にも膨れ上がるのだ。

戦術に置いての基本は、敵の少ないところに敵よりも多い兵を用いて制するのが肝要である。故に、少ないと思われた所に突然大兵力が押し寄せれば、圧力に抵抗する術もなく瓦解するのである。しかし、戦術の一つとして集団での隠行はこの時代では前例の無い手段である。

彼らが暗闇の中ともなれば、時に闇に身を置く妖よりも危険な存在となる。

闇から闇へと静かに忍び寄り、何時の間にか死体を増やす。

闇から殺す舎人（とねり）。舎人とは雑色（ぞうしき）とも呼ばれる貴族専門の下級兵の事。つまり、頼光の統率する機密機関【闇殺舎】とは退魔機関であると同時に、貴族の権力中枢を守るために動く専門の暗殺集団とも言えるのだ。

彼らは時として、権力に逆らう人間にも牙を剥くよう鍛えられていた。

暗殺は通常複数の後方支援に拠るもので、一人で動く事は要人暗殺などでなければ滅多に有り得ない。その技能を高める為に、妖魔のみならず、時に人すら殺す集団は、まったくもってして凄味が違うのだ。

それ故に、彼らの進撃は見破りにくいものだった。

東の山側と南西の森林地帯を蛇の如く静かに進撃をする二つの兵団。

大河を越えて平地に陣取った人外からは雨の不明瞭な視界では、けっして目立つ事すら無いのだ。

烏族でも難しいだろう。この雨では暗がりとなり、鳥目の多い彼らでは鷹の双眸を持ってしても判別は不可能なのだ。

闇殺舎、それが最古において遊撃戦（ゲリラ）を集団で発達させた例である。その作戦はどれもこれも秀武の立案によるものである。

山賊として生まれ立てから長年の経験を積んだ戦術勘は誰よりも卓越しており、それに唐土から取り寄せた、かの太公望が書き上げた虎の巻、そして羅馬（ローマ）と呼ばれる場所から流れてきたあれくさんどろすと言う、大王なる人物やしーざーなる人物が使った戦術が記された伝書は彼の戦術を知識面からも支えた。

単騎では戦闘力が四天王最弱でありながら、戦術を駆使する事により、時に単独で龍すらをも打倒する。それが四天王の頭脳にして、策士・秀武と言う人間である。

「あー、だりぃー、歓楽街に帰ってヤりてぇや」

無論、その戦術が大抵の場合において、自分が楽をするためにしか使わないので諸々より非難轟々であるのは仕方が無い。

こうして陣地の居城で護衛をしている間は、既に戦術での大方は決まり、後は彼よりも『指揮』の上手な頼光に任せた方が無難なのだ。戦のやり方を考える戦術と、それを実行する指揮では分野が異なるのであり、それを十分秀武も把握していた。

ふと、ダルそうに秀武は櫓から見える戦場から目を離し、真逆の京の内裏辺りを見据えた。

彼は知っている。

戦が終われば闇殺舎は解体されると言う事を。

何故なら、明治以降になるまで日本では巨大な常備軍を維持出来るほどの生産力が無かったためである。戦は臨時の徴兵、もしくは傭兵となり、戦争以降はお払い箱となる。

彼ら大軍が密かに維持できたのは、朝廷の権力者である道長と、それに付き従う有数の富豪であり、戦場の飢狼たる源家が支援したからである。

しかし、それは戦が終わるまでの話しだろう。

戦が決すれば、余分な兵力は削減され、そのために組織自体が弱体化、もしくは消滅をする。

権力機構が完全に維持できる中で、海外への展開や国外からの侵略などの憂慮をせぬ場合、常備軍は不要なのである。

つまり、闇殺舎とは為政者の権力維持の都合で生み出された、その正統を認知される事のない、妖魔討伐のためだけに力のみを蓄えた鬼子のようなものである。

権力者の多くは、戦が終わった後、彼らがその組織の存続のために、意思を持って牙を剥かないかと危惧しているのだ。それを裏付けるかもしれない暗殺行為そのもの。そのため、組織化された暴力が自身の意思を持ってはならないのは原則である。もし、そうなるのであれば、それは己がままに動く、反乱組織などと変わらないものなのだ。

その意思の中枢を、彼ら貴族は頼光だと考えている。

無論、頼光の身近にいる秀武などの四天王や道長が頼光を現行政府の反逆などを企む、そう言う人間だとは考えては居ない。

それでも、彼女が常々言う楽園と言う思想は現在の世相は真逆に位置するものである。

彼女がもし自らの戦力で打倒しようと思えば、現在の政権を完全に塗り返す事が可能だろうし、秀武もちょっと考えただけでもそれぐらいの事は、戦力から考えれば余裕で出来ると考えている。

加えて、彼らの染み付いた血の中に彼女への絶対服従が組み込まれているのである。固有の意思を持った四天王でさえ、彼女の意向に逆らう気など毛頭として無い。

結局、闇殺舎にとって決断とは個々が考える事ではなく、身体に繰り返し教え込まれたきた血の作用であり、それを組み込んできた

過程を否定する事、頼光に逆らうと言う事は彼らの存在そのものを否定するのに等しいのである。

しかし、それでも、闇殺舎がそれだけの力とその意思を持っても彼女は反逆自体をしないだろう。

戦で土地が乱れ、人民が疲弊する。

京から離れた地でさえ、獣達の土地を荒らし、兵の犠牲を出すのだ。

彼女は誰かに犠牲を強いるのに抵抗がある。人外からの脅威殲滅と言う大義名分すらなければ彼女は戦に立つ事は二度と無いはずだ。今の日本の脅威を鎮め、人と人外との区切りを設けた、それぞれの楽園のためだけに、彼女は動いているのだ。

闇殺舎はこの決戦場に立った時点で、組織としての緩慢な死を迎えたと言っても過言はなかった。

「まぁ、組織が無くなっても、そこに居た人間と、その意思が消えるわけじゃねーからな」

戦場のただ中で先が見えてきたためか、少し感傷気味になった自身の心に秀武は呟くように言った。

と、そこで彼は何かに気付いた。遥か遠方、京から真っ直ぐと進撃してくる鬼火の大軍に……。

南西の森林から北上していた綱と彼の切り込み隊、僧兵団と散兵団に緊張が走った。

地響き。

それは龍などが踏みしめる重厚な足音ではなく、地の底から這い出てくるような異質な音だった。

綱が髭切丸に手をだらりと添える。
突然、静まる音。
雨音だけの響く一定の慌ただしさ。本来なら弛緩する所を、彼と彼に従う何人かはその静けさと同種の代物を知っていた。
それは自然の動物が獲物を定める瞬間、金太郎が始めて襲ってきたのと同種の代物である！

大地が次々と爆ぜて割れた。
そこから出てきたのは醜怪な蟲の大群である。
二足歩行の蟻や団子蟲に酷似しているが、大きさが人ほどもあれば生理的気持ち悪さよりも何処か滑稽さが目立った。
しかし、その見た目が戦力と一致して居る訳ではない。
蟻に似た蟲魔が全身を鉄鎧で固めた男を軽々と片手で持ち上げて放り上げる。団子蟲が丸まって転がりながら、硬いなめし皮の胴丸ごと骨を砕く。
「蟲潰しの円っ」
綱の号令と共に男達は身を寄せながら陣形を整える。二列縦隊が一瞬にして、槍や刀の刃を外側に向けた防御陣へと代わる。一番外側は刃を向けた四角形でその一つ内側は刃を八相の構え、耳の横に柄を添えたような構えで、最外殻が破られた際の二番手になっている。そのさらに内側には、先のように地底から攻撃に備えて槍を持った者が地面に気を配り、中心には先の戦闘での怪我人が居た。
完全な防御態勢であり、上下左右前後の警戒に優れたものだ。

そんながちがちの防御で固めた外側の陣に綱は居た。
凪いでいる。
台風の内側のような無風地帯に立つ綱。その刀が届くか届かないかのギリギリの領域には筋張った、甲冑のような体の開きどころから綺麗に斬断された蟲の残骸が転がっていた。
近づけない。

それが無風の理由だった。
如何なる拍子、人数、飛び道具を持ってしても、綱に当たる事は無い。
彼らは後半歩で近づくその前に綱に切り落とされているのだった。
「野郎、化け物か?!　我等が五十の群体を持ってしても敵わないだと?!」
指揮官に当たる蜻蛉(とんぼ)の兵が嘆く。
三尺の太刀より内への不可侵領域を作り出す男。
「荒ぶ風は簡単に見て取れる。俺の太刀は中々鋭いぞ」
そう、だらりと刀を垂らしたまま言いながら、綱はふっと唇を微かに上げた。
「空尖(くうせん)、そノ男の相手は俺ガする」
「霧宮様っ」

蟲王・霧宮は蜻蛉の横合いから音も無く地に降り立った。
「時雨かラ聞イタぞ。汝(なれ)は金太郎よリ強いらシイな」
「あぁ、そうだ」
気負いも何もなく言い切る綱に、霧宮は無表情な蟲には似合わない、僅かな笑みを浮かべた。
「時雨に渡辺綱ノ討伐命令をサレタ時には腹立タシいだけダッたが、こうシテ奴以上の名手と会ウノも……」
親指に添うように、人差し指と中指が伸ばしたまま合わせられ、薬指と小指が内側に畳まれる。腰を落とし、前足を僅かに出して、後ろ足を曲げ、引き絞った弓のように体勢を整える。両手がそれぞれ綱の上下の急所を狙う。
「……中々のモノだナ」
その構えに合わせて、この戦場ではじめて、綱はゆっくりとそれでも確実に正眼で構えた。
構えとは本来、防御の『正統なくせ』を作り出すものと同時に、実戦に於いては相手に攻撃の筋を限定させる、云わば特定の手の形

などへと注目させて逆に相手の特定の反応を引き出す為のものである。言わば相手を誘うのための身の使い方を構えと言う。

綱の未来を見通す魔眼をもってしても曖昧になるほど、霧宮のその構えは異常な程警戒心を高めるものだったのだ。

綱自身が構えを使う事は滅多にない。通常、筋肉を弛緩させた状態は最も早く動く事が出来る。それは現在使っている筋肉は弛緩をさせないと次の動作へと移せないからと言う単純明快な理由による。相手の動きを読む事さえ出来れば、構える必要も無く、ただ相手の動きに反応をすれば良いだけである。しかし、蟲の王の構えは弛緩して待ち構えた状態よりも、相手の行動を限定させなければ成らないほど反応し辛い、凶悪な代物だったのだ。

始めての相手に、綱が構えたのはたった三度。

公時に稽古を始めて付けられた時、頼光と過去に一度だけ立ち会った時、そして、今この瞬間のみである。

「装甲結界を指先に集中させて凶器としたのか」

「然様（さよう）、新たナ我が凶器、蟷螂手（とうろうしゅ）とデモ名付ケヨうカ？」

七百年後、霧宮が中国大陸でその技を披露した時、その技の一部始終を拝見し、人間でも使えるように高僧が練り直した実戦的拳法こそ蟷螂拳と呼ばれるものである。

正眼と呼ばれる基本の構えのまま、綱が無造作に歩を進めた。一見細身ながら、自ら持つの刃のように粘く作られた肉体は筋肉が高密度に圧縮されている。故に一歩進めるだけで肉体から湧き出る力のような、後退させるような激烈な風圧のようなものが前面に押し出された。巨大な竜巻がずいと前に出たようである。闇殺舎の大部分はそれを可能とするが、四天王級の構えともなれば、相手へ踏み込みだけで人外であっても敵の心意を萎えさせて挫くほどで、仮に

向かったとしても全身からの熱風のように噴きつける闘氣に身が竦み、それに耐えられたとしても武器からの凄まじい殺意で武器が巨大になったように感じ、まともに相手にされることすらないのだ。

そんな、並みの人外なら後退するだけの挙動を、蟲の王はそれに微かな笑みを浮かべながら逆に踏み出した。

距離は三間（九メートル）。幾ら、霧宮の手足が長かろうと、届くような距離には見えなかった。

だが、先に霧宮が一歩踏み込んだ瞬間、小蝿が跳んできたのを避けるように自然に綱は首を僅かに横に倒した。

僅かに遅れて喉の横を何かが通り過ぎる。

それは有り得ない事に霧宮の指先だった。

無風のまま、斜め後ろに綱が後退して、首元の、この戦場に入ってから始めての傷を片手の親指で拭った。

「遠いな」

ペロリと己から零れた唐紅の血涙を舐め挙げ、ぼそりと綱は呟く。

綱は、この男は素手にも関わらず、諸手は槍を持った金太郎と同じ間合いと凶器だと認識した。それでも、その彼よりも間合いが遥かに広い。

傷つけられた時、彼は僅かに避けられた直前に指先を曲げ、腕を引き戻す時に僅かに綱の首を引っ掛けたのだ。避けねば、頸動脈を抉られていた。

その精妙さは固形である槍では決して及べない、技の変化に優れていた。

「さァ、どウスる。コノ狂気の内に踏み込ムか？」

「そうだな、そうするとしよう」

直後に、無風の状態から突然、味方の闇殺舎達をも驚く足捌きを見せた。

それは普段の綱では決して見せない、秘技の中の秘である突込み

だった。
爆発性と突進力は金太郎に劣りながら、その突然の切り替わりで金太郎よりも目標へと到達するのは早い。速度ではない、突然の動きで相手を翻弄する技が出る早さ。武の真骨頂である。

閃光の一太刀。
眼には見えない。あまりの速さで頭が理解しきれず、その瞬間だけが消えてしまう脳天唐竹割りの一撃。
その斬撃を有ろう事か、一つの瞳の中に千の瞳を持つ複眼で蟲の王は捉え、右指先で掴みとっていた。
「（勝っタ）」
と蟲どもの誰もがそう思った時だった。
ぞぶっと音がしていた。
蟲の王の脇腹、そこに動物的勘ならぬ蟲の知らせを感じて、反対側の左手首から出た鎌で辛うじて止められた刃が切り込まれていた。
直後、一撃でも当たればその部分が肉片となって消える霧宮の反撃の指撃を、綱が身体の至る所を揺らさずに後ろ向きに下がって避ける。
綱は単に後ろに下がっただけなのに、背景である森自体が滑り出して突っ込んできたように多くは感じた。身体を如何にして揺らさずに、隙を生まずに動くかと追求した結果が生み出すあまりに異常な光景である。
だが、それ以上におかしい。
確かに、彼の最初の一撃を蟲の王は止めて掴んでいた。
それなのに、彼の一太刀が、その瞬間明らかに二太刀に増えていた。
「面妖ナ……」
「もう一度行くか？　言ったはずだ。俺は、――強いぞ」

「何なんだ？　てめぇらは？」
秀武は時間稼ぎをしていた。
眼前には顔面に矢が刺さり、腹を切られ臓物をはみ出し、片手、片足で、それでも戦い続けようとする武士達が居た。しかし、その姿は軽く千を超えながら、全てその群像の奥の風景が見えるほど透き通っている。
亡霊。
強い念により現世に囚われた者達である。
その念は死を経て益々強くなり、人で太刀打ち出来るものは殆ど居ないだろう。
山の裏、京の方角から来たのは老原の亡霊軍団である。
別に彼らの存在自身は問う必要も無く、秀武ならすぐに気付きそうなものだ。だが、闘志を持て余す連中と事を構える危険性を危惧した秀武は口八丁で上手く乗り切ろうと企んだ。
だから、誰よりも先に、たった一人で、亡霊達の前に立つ。
自称他称共に己の肉体を酷使する武では四天王最弱の称号を持つ秀武だが、砦の中に並み居る兵士の誰よりも強い闘気を持つが故に注目され、砦へと攻め込まれるのを引き止めていた。
「（あーあー、やだねー。俺がちゅーと半端に強いのも。綱くらい強かったらカッコ良くこいつら倒せるんだけどねぇ）」
心の中で嘆息しつつも、それを見せる事無く、彼はゆるゆるとした状態で腰の小太刀を構える事もなく、さて、どうするか、と考えていた。
「俺達よぉ、今は人外の集まりと戦ってっから暇無いし、悪いけど、後にしてくんね？」
怨々と声にならない圧力が金縛り寸前になるまで秀武を攻め立てる。
「（砦の中にいるのは貞光だが、結界作成をしている今、あいつは外に出れねぇ。今、霊刀を持っていて、亡霊にまともに斬りかかれ

るのは俺だけだ。……仕方ない、上手く誤魔化すか）おぅ。お前ら、今、砦ん中で降魔調覆の祈祷の真っ最中だぜ。てめぇらみたいな雑魚は十杷一絡げに消滅させられちまうぞ。ここで待っても相手なんてしねぇし、それがやだったら、ととっと京に帰ぇんな」

だが逆に、んなこと気にするか、と業を煮やし始めた亡霊達が各々の武器を構え始め、秀武が「やべぇ、煽りすぎて罠を踏んだ」と思った時だった。

〈お前ら、そこから退け。勝手に攻め込むんじゃねーぞ。強いのにやる気の無い奴に本気を出させて、死力を尽くしてこそ、熱く血が滾（たぎ）るなんだからよ〉

不意に、心の中に声が直接響いた。亡霊の殆どは肉体に取り憑かない限りは意思を伝える事はとても困難である。しかし、魔の世界の専門家である貞光曰く、高位の霊体は直接心に明確な意思を伝える術もいるとの事だ。

緑に溶け込んでしまうような深緑の和服姿の老人が居た。剃り上げた頭の下にある瞳は坂田と同じ鋭さのする霊だ。それは全周囲に気配を巡らす、緊張感をまとった瞳である。背は低いが横には広く太い。眼光も、首も、腕も、への字に曲げた唇も、そこから漏れる息ですらも太い老人だ。

太い腹筋で覆われた腹を締めるのは灰褐色の帯で、そこには黒檀の色をした重厚な扇子とそれにくくり付けられた太い鎖が垂れ下がっていた。

その姿は他の亡霊達と同じく透けているが、触れる事が出来るような重さが現身（うつしみ）にあった。

「（鎖が、武器か）」

秀武が目聡くそれを見極めてから、その太い眼光に視線を合わせた。

まともに合わせずに、透ける背景の山に眼を合わせるような視線の合わせ方だ。そうでもしないとまともに眼も合わせられない重厚

な威圧感を感じる。
「あんた何処のどちら様だ?」
秀武の飄々とした物言いにニヤリと太い笑みを浮かべて、亡霊は言った。
{儂はこいつら二千の亡霊の霊帝(あたま)、老原、老原灼染だよ}

雨脚が一層強まり、綱が蟷螂の王と戦い、秀武が逃げ出したい気持ちをばりばりに抑え付け、貞光がちょうど大祈祷の詠唱を半ばまで終わらせた頃だった。

刃と手甲が交わった。
刃金の澄んだ音色。
飛び散る火花が雨を蒸発させる。
見る者の闘争心を振るわせ、同時に刻々と流れるような剣舞だった。

手甲の主は時雨である。
大女が真上から叩きつけるような拳を放つ。
それを受けるのは細身であろうその体躯を、白絹衣を通して赤銅色の胴鎧で堅め、腰に普通よりもやや小ぶりな太刀を掲げた武者、源　頼光、もとい光である。
受けた瞬間にその力を身体に当たらない程度にわずかに逸らす。
真っ向から相手の攻撃にぶつかれるからこそ、攻撃した直後のそこから身体に当たらない程度に僅かに外して崩せると言う極意中の極意である。
首元に確実に飛ぶ太刀を人外の反射神経で身体を弓形に反らしながら、同時に蹴り。
しかし、それは光には胴丸に泥の足型をつけただけで、衝撃自体は飛んで殺していた。

離れた場所から太刀と両拳をそろぞれ構え直す。
今まで、聞こえなかった雨音が急によく聞こえるようになる。
「中々やるじゃないか、大将」
「……そっち、こそ」
北東、大河の横たわる平原の端、山合いを通って人外の拠点へと隠行をしながら奇襲を試みようと移動していた途中、龍ノ目の率いる龍族の精鋭に襲われたのだ。逆に戦術を読まれていたのだ。
龍族の精鋭には今、金太郎と彼の配下である最勇猛の突撃部隊が一歩も引かずに対峙している。
地上兵力なら最強の騎馬隊でも、龍族の空中から攻撃に加えて、足場の悪い山中ではその真価である機動性を発揮できない。そのため、徒歩での白兵戦力として優れた金太郎の突撃隊を急造で最後尾で足止めを努める殿とし、騎馬隊に退却を命ずる他なかったのだ。
そして、退却する彼女らに立ちはだかったのは、巨強、龍ノ目時雨だった。
彼女は騎馬隊を配下の千人隊長に任せ、この場で足止めをする事にしたのだ。
この勝負、互角のように見えて、大きく息をしているのは光の方である。それは雨で体が冷えたためだけではない。

しかし、何故これほどまで小さな体格で何故こんな化け物と戦えるのか？
それは彼女の見えない、体の中にある。
心臓の鼓動と共に流動する小さな、血潮とも違う流れ。
拍動に呼応して、流れが底無しの力を発揮する。
それを意識する事で、彼女は綱の最速の攻撃を受けられるほどの、集中力と敏捷性を生み出していた。
そう察しの良い者なら気付くとおり、彼女は【霊気装甲】を持つのだ。
貞光のような呪術を知らないが為に体に直接作用させる方法しか

使えない。それでも、彼女はそれを効率良く扱う術を妖魔人外との死闘で手に入れたのだ。
陳腐な言い方をすれば、魔の法を操る魔法使いの貞光に対し、光は魔の法を刃に応用する魔法剣士とでも言ったところだろうか？
しかし、大方の攻撃を受けたとは言え、彼女は不利中の不利だった。
「息の上がり方がおかしいな。もしかして……、貴様、アノ日か？」
「……、はぁ……はぁ」
「無言は肯定と見なすぞ。そうか、それなら仕方が無い。俺様が言うのも何だが、大方の女には戦場は似合わん。高々月の体調で崩れるような強さなら意味は無い」
「……、はぁ、……はぁ」
「退かないか、――もう無理は止めな。俺様は優しいからな、手加減が出来ない、さぁ、諦めろ。お前が戦いを続ける理由はない。それとも、戦う理由があるのか？」
その言葉で、今まで頭痛と体の火照りで虚ろだった光の瞳が輝きを取り戻した。
「戦うと決めた。それだけだ」
決意。断固たる意思は名のように閃光だった。
「そうか……、じゃあ、これ以上無理しないように、この場で殺してやるよ」
そう言いながら見せた、人外に似合わない柔らかな笑みが地面を見て、それから瞬時に般若よりも恐ろしく切り替わる。
下から上。離れた場所から振るった拳が突風を起こした。
圧縮された空気が時雨の手元から加速を続け、それは彼女の目の前で炸裂した。
激甚の暴風が光を巻き込む。
体が浮く。

「（あ――、死んだ）」

山の上、断崖絶壁から小さな光の体が弾き飛ばされる。

目も眩むような眼下の光景と、身体を巻き上げる下からの風。数秒もしない内に、眼窩の千尋の地面へと叩きつけられる事は目に見えていた。

景色がゆっくりと見える。死を覚悟した戦闘でよくよくあった現象が現れた。詰まるところそれは、彼女の肉体が死を悟ったのだ。

「（戦う、と決めたのに、二呼吸で再起不能、か――。楽園のために戦いたいのに）」

彼女の、黄金の闘志と理性は死に抗いながら、肉体はそれを享受する。

憎いほどにあっさりとした最後。

心は抗っても、現実は変えられない。あと少し、視界の先にある河に飛び込めば別だが、そんな事は空で方向を変えて飛ぶ事が出来ない限りは不可能だ。

「――ッ！！」

何処か遠くから声が聞こえる。

「――りッ！！」

次の瞬間に聞こえる声が徐々に鮮明になっていく。

「――かりぃッ！！」

それは有り得ない速度で崖へと疾走する者の叫びだった。

幻聴だと思った彼女が眼を閉じて、仕方なく死を受け入れようとした時、その馬鹿は目の前に居た。

「――ひかりッ！！」

両手を合わせ、まるで飛び込みでもするかのように空気を割り、空中で光を強引に抱き締めた。

離さない、死なせないと言う意志だけが伝わるしっかりとした抱擁。

飛べない代わりに、彼が代わりに跳んで、方向を変えた。

その強い力に応えるように、光は抱き締め返す。
そのまま、金太郎と光は錐揉みしながら、落ちるはずの地点を僅かに外れ、眼下の大河の方に飲み込まれていった。

その頃、秀武は逃げていた。
彼の背後では蛇のように宙でとぐろを巻きながら鎖が展開している。
音を立てて鎖が絡まった大木を根ごと引き倒し、大岩を粉まで砕く。
彼が山を駆け降りる間にいくつも、その傷痕は刻まれていた。
必死に、それでも相手を納得させて『自分が』勝つ事を考えながら、秀武は走り回っていた。
「手加減してくれぇ！」
それでも口角から泡を飛ばしながら、人にはあまり見せられないような酷い顔で走る。流石、山賊出身なだけはあって、金太郎のような異常な速度ではないが、それでも普通の人では決して追いつけないような速度で、ジグザグに、鎖の打撃をかわしながら走っていた。
〰そんな熱血じゃない事は出来ないな。死力を尽くせっ！　【蛇絞（じゃこう）】からは逃れらんぞっ！〰
鎖が鎌首をもたげて、襲い掛かる。寸でのところで秀武は茂みに飛び込んで、横に転がった。
茂みは巨大な鎌で刈ったかのように消えうせ、彼の視界から消えた秀武はごろごろと無様に転がりながら、大木の後ろに廻った。
〰そこかぁッ！〰
ひぃ、と声を挙げて、反射的に秀武が頭を伏せれば、ちょうど頭の上半分の大木が真っ二つに折れていた。
もし、そのまま突っ立っていたら、頭の上半分は『おしゃかに』

なっていた。
「（死ぬ、今日こそ絶対死ぬ！）」
と、心ではそう思いつつも、彼の策は半ば完成していた。
折れた大木を片手で必死に抱きながら、四つん這いになって再び茂みに隠れ、隠行で気配を消す。
〽さぁ、何処まで逃げるか若造。これ以上逃げれば、熱く血の滾った儂とて、……我慢ならんぞ〽
ひぃぅん、ひぃぅんと空を裂く音を立てて、超音速で鎖が飛び回る。
普通ならそんな長大な兵器は草木に阻まれ振るう事は無理なはずだ。しかし、戦闘に戦闘を重ねた結果老原の内には燃え盛る闘志と共に現実を凌駕する力が生まれ、草木に阻まれるはずの鎖をぶつかろうともお構いなく振り切れるほどの縦横無尽の膂力で操れたのだ。
鎖状自動鋸（チェインソー）のように、それ以上の破壊力で、阻む大木や岩石をも砕き散らす凶器を操る。
〽さぁ、何ぉ処に隠れた若造？〽
ひぃぅんと音を立てて、隠れるのには手ごろな大木が引き倒される。
〽ここかなぁ？〽
岩石が下から上に撒き上がって、下に潜むのには都合の良い岩が砕ける。
〽それとも……〽
ひぃぅん、ひぃぅんと音だけが鳴り響く。その肉体では無い、虚像の瞳をちらちらと動かして辺りを睨みつける。
〽ここかぁ？！〽
視界に入った全ての風景を鎖が薙ぎ倒す。
その振り切った直後、倒れた大木の背後から鎧姿が躍り出てて、樹上から老原に飛び掛る。
〽そう来る事も――〽
鎖を有り得ない速度で怪力を使って引き戻し、

〜――読んでたわッ！〜
ぐしゃりと鎧ごと砕いた。

じわりと汗が滲む『動かない闘い』が、綱と霧宮の間で行われていた。
互いは僅かに手首の返して刃の角度を変え、錐のように尖らせた諸手の上下の位置を変えている。
大型の肉食獣みたいにやたら頑丈な金太郎や怪我慣れをしていて傷への耐性の高い秀武、再生魔法を心得ている貞光とは違い、綱は四天皇では打たれ弱い部類に入る。むろん、それは並みの兵士に比べれば、意思の力である程度は克服する事が出来たが、それでも不意の一撃には人並みに弱いのである。
その代わりに彼は『先』を取るのに優れていた。
相手よりも技の出そのものが早い『対の先』。
相手の技を出そうとした心を読んで先に打ち込む『先の先』。
相手の技を出させて、予め予測されたその攻撃を反撃（カウンター）で潰す『後の先』。

どの先も優れているが、敢えて言うなら彼は先の先が得意である。
前述の通り、彼は未来を見通す魔眼である『龍眼』を得ていた。
その結果、彼はどんな攻撃でも先に予測する事が出来たのだ。
技の出が未だに早い、先に長けた坂田や頼光、普通の人なら意識不明になる攻撃を耐えられる頑丈な金太郎、何かと予測しても効果が分からない策の連続を仕掛け、最終的には煙に巻いてくる秀武や回避不能の広範囲攻撃を仕掛けてくる貞光など、その超人達の中なら偶に負ける事はありそうだが、それを常に寸前で回避し、勝ち続けているのが綱である。
十歳の頃、初めて対峙した坂田と練習中に互角の拮抗の末、予想

外の死闘を繰り広げ、後に龍眼となる片目を負傷して渾沌、不戦敗となって以来、彼は一度足りとも負けたことがない。

武士のとっての勝敗は生死のみに直結する。しかし、彼の中で美学とでも言った考え方の中では、己が何らかの形で自らの体現する体の動きが他人に劣る事を認めず、それすらも勝敗に繋げていた。それが、年上の最強の武人だろうが、人外だろうが構う事はなかった。それが彼の矜持であり、生き様。

詰まる所、彼は武で負けるのが途轍もなく嫌だった。

彼は負けず嫌いなのだ。

その彼が今一番苦戦しているのが、目の前に居る巨大な蟷螂だった。

人の皮を被った状態で、この強さである。力を完全に解放すれば、人の反射神経でも捉えられるのが不可能である。

彼のように未来を見通す瞳か能力を持たない限りは勝つ事は不可能、不可能と言うより比較の余地無しなのである。

速さは力である。速ければ、拳そのものは到達する速度と同時に破壊力を生み出すのだ。

蟷螂が獲物を掴むかのように掲げられた諸手。

その諸手の本来の使い方は指を開いて即座に絡む関節技であろうと綱は気付き、同時に霧宮自身がまだその本来の姿に気付いてないように思えた。

相手の腕を鎌で拘束し、打撃を加える。

相手の攻撃手段を殺した上で打撃を加えるのが、真骨頂である。

それを綱は霧宮自身が未だ模索中の完成形を霧宮の構えから読み取った。

「（長引けば、奴も気付く）」

そう、まだその真の完成形に至ってないからこそ、綱は苦戦の最中でまだまだ『余裕』でいられるのだ。

その精神的な余裕を切り詰めて更に張り詰めさせ、闘気を高めた。

剣先がわずかに上がり、剣気が高まる打つ気配を見せる。

無手が二つの鎌となって奔る。

その間に切り込む刃、綱の身体。

霧宮が片方の手のみを鎌に、片方を蟷螂手にし、綱の刃を鎌で受けながら、神速で綱の顔面へと突き込む。

誤算。

綱が自然に動いた結果、霧宮は『無意識で』完成形の攻防を生み出していた。

だが突如、遠巻きに見ている誰もが、眼前で闘っている霧宮すら、信じられない事が起こった。

鎌で捉えられていたはずの刃が突きを受け、突きを受けたはずの刃が逆に突きで霧宮の胴体を抉っていた。

鍔元まで掛かった突きの圧力で霧宮の身体が吹き飛び、肉の間から吹き出る液体が突き立てられた皮の端を揺らす独特の音を立てて、白色の体液が血のように大地を汚す。

再び、斬りつける綱。それを受けようとして、また違う方向から来る太刀に断たれる霧宮。

一振りの太刀が分かれる、一太刀、二太刀、三太刀、四太刀、五太刀。

全身から体液を噴出して、霧宮は地面に倒れ伏す。

幾つも分裂したはずの太刀は再び一振りの太刀へと返っていた。

「秘剣、残剣散徹」

今度は確実に、明らかに双方で対峙した格下の兵士達も霧宮ほどの動体視力の無い蟲達にも見えた。

雨の水滴が作り出した一振りの刃の軌跡が、前触れもなく五つに

分かれて蟲の王に斬り込んだ。
揮った太刀は霧宮に斬り込んだ時、確実に五つあった。

事象同時進行。理(ことわり)を限界まで高め、更にそこから先に挑戦した結果、彼は人類で始めて只の生身で、霊気装甲も無しに神秘へと至った。

五回の太刀筋を一動作にまとめると言う脅威。彼は一振りで本当に五回相手を斬り殺す事が出来るのだ。

威力を殺す事も無く、太刀筋を殺す事も無く、そして速度も殺す事も無く、勿論、捨て身で、自らを殺す事もなく、飄々と相手を殺すための極技である。

無論、相手の装甲結界に斬り込める霊刀『髭切丸』だから出来る有り得ない技なのである。これがただの太刀だったら、木の枝で相手に打ち込むようなものである。邪を祓う事に特化した、霊刀鍛冶安綱の一品である。

「貴殿らの命が惜しければ、退け。人を甘く見るのでないぞ、蟲王」

今にも霧宮の『化けの皮が剥がれそうな』勢いだが、彼の蟲が独特に持つ理性よりも確かな本能が、綱の刃によって蟲全体の士気が削ぎ落とされたのを感じた。如何に大軍があれど、それに殺る気がなければただの木偶人形と同じである。誘蛾の焔に惑わされた蟲の如く、高ぶった人の士気に焼き尽くされ、勢いで殺し尽くされるだろう。

統括思考と呼ばれる強制命令で、働き蜂よりも狂って戦わせる事が出来た。しかし、これは彼らの個人単位の私闘ではなく戦争である。主義や趣味では無く、利益で戦わなければならないものだ。無論、斬り倒されて朦朧とする思考の中で配下を上手く従えるとは思えない。またしても、引かねばならない時である。

そう決断した王の無言の命を受けて、蟲達は機敏な動作で土に潜り、空を飛び、御簾を引くかのように森から瞬時に消えていった。

一匹残る霧宮が立ち上がる。既に膨大な妖の力で止血はされていたが、霊刀によって見えない内部が切り裂かれていた。

「次こソ、次の決戦デ千の我等が殺シニ掛かルゾ。ダガ、そレトは別に、いツか、貴様を、もシクは同ジ外道を使ウ剣士を突キ殺してクれル」

「今の世に二人とて使えるものは居ない。何百年経ったとしても、十人にも満たないはずだ。だが、覚悟しろ。人を、武を舐めるな。貴殿の思いつきで出来たような技で、人の刻苦研鑽である武の重みを突き崩せると思うな」

霧宮は瞳を中心に背景が歪みそうな殺気を放ちながら、森の奥へ、雨の薄絹に紛れるように消え、殺気も霧の如く消え去った。

綱は悠々と太刀を柄に収める。まさか、後もう一度、同じ技をしたら一月は動けない身体になるとは思えないほど、雨の中に映える雅な立ち姿だった。

その姿を崩すような悲報。早馬での伝令が光と金太郎が崖から落ちた事を伝えた。

砕けた秀武の大鎧。バラバラと乾いた竹で編んだ、刃ですら通すのが難しい鎧が粉微塵となった。雨よりも遅く落下するその欠片。

その『身代わりの後ろから上半身裸の秀武』が躍り出た。

時間差攻撃。

身代わりの代わりに、長大な攻撃範囲を持つ霊体に、些かに短い攻撃手段を持つ秀武が肉薄するには攻撃を一時的にでも止めるしかなかったのだ。

「しゃ――――――！」

片手を刃に添えられた霊刀、双子の小太刀【字丸】が老原の喉元に食らい突かんと飛び掛る。
その刃の届く直前になって、秀武は気付いた。思いっきり近づいたにも関わらず、何故俺の身体は『老原から離れていく』のだろうと。
思考の後に続く強烈な、内臓が破裂したかのような痛み。
それを自覚したと同時に大木に秀武の体が打ちつけられた。
あまりの衝撃に頭に火花が散ったような意識を振り払い、老原を見た。

右手に鎖、左手に鉄扇。

〜馬手(めて)に蛇咬、弓手(ゆんで)に白龍。戦場に得物一つで行く馬鹿は居らんってことだ〜

馬手の鎖で遠距離の敵を足止めさせ、弓手で鎖の圏を突破した者を鉄扇で叩く。

「遠近自在ってことか、くそッ、……んぶっ」
喉元からこみ上げてきたどす黒い血を吐き出す。それを見て秀武は安心をした。血は鮮やかなほど心臓などの呼吸器系に近いため致命傷であるが、黒い血ならば『まだ動ける』と言う証だ。
ふらつく身体を背後の折れ曲がった大樹に預けて立ち上がる。
それを見て、ひぃぅんと死神の鎌のように鎖が再び旋回を始めた。
〜いいねぇ、体の内から血が沸き立つのをひしひしと感じるぜ。それにしてもお前、あれを避けるたぁ運がいいじゃねぇか〜
鉄扇で打ち殺される瞬間、偶然にも字丸の鉄鞘が防いだお陰で左の脇腹に食い込んだだけで済んでいた。無論、秀武ほどの、普段の素っ惚けた姿には似使わない意志の力でなければ、その場でただ殺されるまで痛みで蹲るだけであろう。

「へへっ、こう言う時に何度も立ち上がる奴ぁは俺じゃなくて金太郎の仕事なんだけど、まっ、どうしてもってんなら、四天王の末席を汚す俺が、……てめえを調覆やんぜ、この野郎」

染み出す痛みを抑えながら、秀武は凶悪な、何かを企んでいそうな笑みで刃を構えた。

〝でよ。さて、手詰まりだぜ、兄ちゃん。こっからどう逆襲すんだい？〟

鉄鎖の蛇咬と鉄扇の白龍を携えて、秀武の前に老原が立つ。

血反吐を吐きながらも立ち上がった男が最初に発した言葉は、

「夫婦剣って話、あんた知ってっかい？」

と言うこの場に及んでの時間稼ぎの策だった。

次は何をするのかと、それを楽しむかのように老原はにやりと笑って立ち止まる。

〝干将莫邪。大陸の刀工の夫婦が正しく命を削って出来た二つ霊刀。切れ味は凄まじく、邪を退かせ、片方の剣のある場所へと必ず文字通り帰ると言われた、それがどうしたのかな？〟

「似たような剣に兄弟剣てのがあるんだよ。紹介のため、それを知ってもらいたいって事を言いたかったのさ」

「で、それがどうした？」

「どうしたもこうしたもねぇ。策士が敵に策を明かすのは嵌ってくれた後だよ。つまり、あんたはもう俺の策に嵌ってんのさ」

そこで、老原は気付いた。

奴の腰に差さっていたはずの、もう一つの刀は何処へ行った！？

「来たれ、【友切】っ！」

鋭い命令と共に音の壁を超えて背後から老原の霊体を刃が貫いた。

〝ぬぅ、だが、これしきはっ！　……なんとっ！〟

京最強の霊帝が揺らいだ間に秀武は信じられない速度で手近の一番デカイ大木へと攀じ登っていた。それは逃亡でなく、あくまで立ち位置を変えるだけの移動。自らが優位に立てる場所への一人進軍である。

それを見止めた直後に老原が切り崩した道を大量の土石流が彼らの、半ば実体化していた霊大群を巻き込みながら下ってきた。

{小癪なぁぁっ！}

厚く凶暴な土砂の流れが物理領域へと実体化している老原を押し流さんと駆け抜ける。しかし、老原は鉄鎖を秀武の登った樹の太い枝へと鋭く絡みつかせて流れに抗う。老原の剛力で流れが意味を成さなくなろうとした瞬間、秀武はその太い枝の上に二つで一つの名刀【字丸】と【友切】を持って立っていた。

妙に長い間。

{や、やめろ}

いや、やる事は分かっている。この男は慈悲も糞も無いとんでもない野郎だ。やる事は一つ。

無表情に、秀武は仕事であるかのように吐息共に枝を切断した。

{おのれぇぇぇぇぇぇぇッ！}

土石流が老原を点になるまで流していくのを見届けると、樹上で秀武はやっと一息をついた。

秀武の策はこうである。彼らの陣地を作成した時に、その出来た土砂で予め敵の軍を陣地から押し流す罠である土石流の仕掛けは大体は出来ていた。しかし、土石流を山の下まで効率良く流すため、伐採をすれば妙に切り開かれた地形のために敵に感づかれる可能性があり、使われずにただ死蔵されていた。

しかし、この場に自ら石を削り、大木を引き倒し、『土石流の流せる道』を作って、それに引っ掛かってくれそうな敵が来てくれた

のだ。

片割れ刀の【友切】を仕掛けに添えて、老原に開拓させながら、陣地から下まで駆け下りた。老原は土石流を流すための道を作らされているとは知らずに、彼を追い詰めたつもりとなって、血を滾らせていたのだ。

「やれやれ、一人で霊軍二千を倒したかな？　さてと、あとは自尊心の高い霊帝様を口先で丸め込んで一丁上がり、ってとこか。女の子達を抱きこむ小噺にするには上等なくらいだな」

そんな下らない事を言っているうちに、老原の剛力と流れる土砂ですっかり傾いた大木が一緒に流されそうになってびっしょりと秀武は冷や汗を掻いた。

秀武の血と汗、それらが混ざり、最終的に辿り着く河川に金太郎は流れ着いた。

轟々と豪雨で龍の鱗のように逆立つ濁流を、人を一人担ぎながら泳ぎきれたのは野性の本能のお陰なのだろう。

第一の武装である坂田の槍は光を助けるために置いてきたため、腰元の短刀【陰落（かげおち）】を除けば丸腰に近い状態である。幸い、光は手で固く愛刀の【蜘蛛切】を握り締めていたために彼女の武装は保てていた。そう言えば先ほどの水中で、ぶつかりそうになった岩を触れただけで真っ二つに割っていたよう気もするが、今の金太郎にはどうでも良いことである。背中にあった矢筒も流れ、弓も無い状態であり、とにかく敵に襲撃されたら困った事になるのは確実だった。

ちらりと金太郎は、遥か遠方の山の高さを見てゾッとした。あの高さから落ちて水面に激突しながら殆ど無傷だったのは僥倖であり、同時に心に恐怖の疵を刻み付ける高さだった。あの浮遊感はとても形容しがたいほど気持ちが悪いものである。

「……もう二度と高いところから落ちるのは御免だ」
そう言いながら、水を吸って重たくなった鎧姿の光を抱き上げた。
「おい、いい加減に人の肩に掴まるのは、って息してないじゃないか！」
くたりと力の抜けた光を河川敷にゆっくり横たえ、口に息を吹き込んだ。
一度、二度、三度……。
五度目になってようやく光は水を吐き出して、呼吸を再開し、金太郎は雨に打たれながら、その場にへたりこんだ。
「まったく、今日は奴らの奇襲といい……、何だかやたらと気苦労する日だ」
金太郎は光を抱きかかえ、手近に休める場所を探した。
川でびしょ濡れになった鎧やら何やらを乾かさなければ、体力を消耗するばかりである。
それに流されたり、何だりしている間に辺りはすっかり日が暮れてかけていた。意識の無い光を抱えたまま歩き回るわけにもいかず、野営の出来る場所を探さなければならない。
幸運な事に河川敷の近くに天然の、土砂崩れなどの心配はなさそうな天然の洞窟があったためそこに身を寄せる事にした。
雨の中で乾いた薪を探すのに一苦労しながらも焚き火を始めた。
横で未だうなされる光にどうしたら良いものか、と思いつつ、とりあえず服を脱がす事にした。濡れたままの服を着せているのは身体によろしくはない。
鎧を外せば、先ほどの戦闘で負傷した箇所がそこかしらにあり、貴重な薬も無いので仕方なく金太郎は動物がそうするように光の身体を舐める事にした。
体力を消耗して白い肌が青白くなるまで冷え切った光の身体を温めるため、自らも鎧もその下も脱ぎ、金太郎は裸で抱き締めながら、光の血の滴る疵口を舐め上げた。
何だか色んな意味で間違っている気もしなくも無いが、金太郎は

隈なく血の跡を舐め続けた……

光が目を覚ます頃には焚き火は四分の盛りであり、身体を包む暖かさに、もうオラは死んじまって極楽なのかと錯覚を覚えた。

「――やべっ、うとうとしちまった……。お、目ぇ覚めたか？」

ちょうど斜め後ろ、耳元で囁かれたのは金太郎の声だった。

胡乱な目元を擦りつつ、周りを見定めた。天然の洞窟の外は昨夜と打って変わって晴れ上がり、薄紫の空に小鳥の囀りが響いていた。焚き火は長い事維持されていたのか、消し炭が石の間で積もっている。その脇には濡れていた状態を乾かすために置かれた薪が積まれ、更に横には二人分の鎧と、その上に褌やら狩衣が広げて乾かされていた。

ふと、光は胸元を見た。見慣れた、少し（彼女の解釈では）小さめの胸の見える全裸だった。そんでもって金太郎も全裸で、そのまま守られるかのように抱かれていた。

「やっと起きたか。うなされていたから心配したぞろばっ」

顎を砕かんばかりに掌で打ち上げると腹を蹴り上げて後退し、目の据わった状態で刀を掴んで鞘から引き抜き金太郎に向けた（全裸で）。

「殺す」

「ちょっ、ちょっ、ちょ、とわったぁ」

脳天をかち割らんとする白刃の唐竹割を両掌で瞬時に挟み込んで押し止める。調子を誤れば、実際に斬割されていたであろう、殺意の篭った攻撃である。

「さぁ、死ね。潔く死ね。そして、貴様を殺して私は生きる！」

「なんだその理屈は！　一晩うなされているを守ったってのに随分な物言いだな、この野郎！」

剛力の金太郎は刃を挟んだまま、膂力と体の移動を使って刃を捻り上げ、柄から【蜘蛛切】をもぎ取った。

刃を掴み取ったのも束の間、今度は光は金太郎の鳩尾に鉄拳を叩きつけた。常人なら血反吐を噴いてひっくり返る打撃だが、鬼の金棒の素肌でまともに食らっても立ち上がるだけあってびくともしない。しかし、それはそこに意識を集中させるだけの当身で、そのまま身長の差を生かして金太郎の脇の下を潜り抜けて背中側に回ると、膝の裏の蹴りと同時に肘を背中に近い脇腹に打ち込んだ。それでも金太郎は怯む事は無く膝への蹴りで体勢が崩れたと見せかけて、沈みながらくるりと反転して足払いを掛けて光を転がし、刃を首元に当てて大人しくさせた。

「いい加減にしろ、まったく助けたってのになんて事するんだ」

「うぅぅぅ、酷い。手篭めにした上でここまでの屈辱。武士の風上にも置けない」

「それは自分への台詞か？　人に助けられておいて恩を仇で返すなんて、そんな事を俺に教えたいのか？　お前は、俺の大切な……」

ふと、逡巡した後、言い切った。

「……大切な目標で、今は大将だ。そんな、ちょっと不測の事態くらいで慌てて、『頼光』、あんたの夢を、理想を遂げられるのかよ？　俺はあんたの刀だ。鞘のあんたがしっかりしてくれないと、俺は誰を相手していいのか分からなくて、誰も彼も傷つけちまいそうだ」

その言葉ではっと気を取り直したのか？　金太郎が刃を離して柄から頼光に返すと、いつも通りの落ち着いた形で鞘に納め、目を背けながら「済まん」と一言謝った。

「何だか……、私は勘違いをしていたようだ」

金太郎は、光として彼女の事を、女性として好いているのだろうと光は思っていた。無論、そう言った側面も多少はあるのかもしれないが、それ以上に、今の彼は彼女を一人の目標として見据えてい

たのだ。
だから、勘違いしていた彼女は自分が身体を奪われたのでは無いかと危惧したのだ。
「勘違い？」
子供のように首を傾げる金太郎に光は微かに笑いながら「気にするな」と言って着物に袖を通し、ふと、止まった。
「ところで、太腿の辺りが何か『てかてか』しているが、何故だ？」
「あぁ、それは俺の唾液だ。両足の根元の間から『不自然な出血』をしていたから薬代わりに舐めておいてやったんだ」
再び、今度は霊気装甲まで使われて洞穴の中で刃で追い回されるはめに金太郎は陥ったと言う。無知とは言え、自業自得である。

具足を整えて、洞穴から出でる。
昨日の雨の名残か、まだ暗い雲も幾らか空に掛かっていたが、雨を心配するほどではなかった。ただ、時折響く遠雷が、龍神のあの女の力を現しているように思え、光はぞくりと震わせた。
太刀を合わせる事が出来たとは言え、人の形態であの異常な殺戮衝動。自然を背景にし、生み出された化生の大将、龍ノ目　時雨。人の皮を被ってあの強さ。真の姿を解放した時に化け物に本当に敵うのかと、光は僅かに胸の奥が揺らぎ、いや、勝たなければならないのだと、心に言い聞かせた。
「――――、この川から秀武の悪臭がする。これを辿れば本陣に戻れるはずだ」
地面に這い蹲っていた金太郎の超嗅覚に頷いて、河川を遡る。
その途中、鷹などよりも遥かに大きな複数の羽音を聞き、金太郎と光は河川横の茂みへと身を潜めた。
「烏族ッ――ざっと四十って、部隊の五分の一じゃない？」
「ちっ、俺達が下流まで流されているのを知っているわけか」

烏(からす)の頭に人の体。森霊種である天狗族の一派である。武装も虎の皮の腰巻の鬼に比べれば、ずっとましで、羽ばたける程度の重さの鎧を纏い、その彼らの手に在るのは弓と矢。空中より彼ら二人を見つけ、射掛けんと周回を繰り返していた。

「こんな時に槍があれば良いのだが。矢を弾いて投げれば隣山からでもブチ殺せるのだが」

「無いものを嘆いても仕方がない。静かに突破するぞ、私に続け」

二人は彼らの視線から逃れるために木陰から木陰へと身を躍らせていった。

「時雨様、その赤い槍は一体？」

いつもの玉座では無く、仮の石塔横に置かれた岩石に時雨は威厳を漂わせて座しながら金太郎の槍を見つめていた。それを些か何をしているのか検討がつかないと言うように付き人である士官は問うた。

「優れた武器には意志が宿る、と言うが、その意志は何なのかと見極めようとしていたのだ」

その槍は金太郎の手を離れた際に山の剥きだしになった岩肌に突き刺さり、戦利品と言う事で回収しようとした鬼達が、その総力を結集しても岩から槍が抜けなかったので岩をまるごと抜き出して時雨へと献上したのだった。

その岩の大きさは長身な時雨よりも二回りも大きなものである。流石にそれを岩窟の奥へは持ち込めないので、こうして自ら赴いて間近で観照(かんしょう)しているのである。

「赤い槍、……人の血のような色ですね」

「無論だ。この色合い、人の血としか考えられない。だが、その色合いにも関わらず、人を殺めた邪悪さは無い。この神聖さ、見極められん」

遥か西方の地に赴き、前時代の大戦で使われた神の雷槌や光の皇子の持つ突けば必ず相手の心臓を貫く呪いの槍、全ての苦難を分かつ征服者の剣に、投げ撃つものから全ての覆う無敵の楯、約束された勝利をもたらす光の剣などの様々な武具などを彼女は見てきたが、その槍が一体何なのかまるで分からない。

人の血を浴びた槍。その言葉だけに着目すれば、何処かで聞いた事があるような気がするが、まさかこの極東の地でその規格外の槍があるはずはないだろう、とそんな事を、自らを半信半疑とするように思索を繰り返していたのだ。

「あの獣の男の槍ですか。奴は生きているでしょうか？」

「奴が生きているからこそ、槍はその場を動こうとしないだろうな。くくっ、待っているぞ、半端者」

いつものように煙管を咥えると、自らの闘気に呼応する雷雲の真下であの勇ましい獣を到来を時雨は待ちわびた。

ぬぅと現れた金太郎の左手の短刀【陰落】が閃いて二度三度向かってきた矢を打ち落とす。直後に地面にあった石を掴むと金太郎はもの凄い剛速球で烏族へと投げ付ける。既に三十三度目の投擲だが、一匹だけその投擲に驚愕して鎧ごと粉砕されて地に落ちたが、それ以降は警戒されてまるで当たる気配が無い。慌てて、全方位に近い矢の集中攻撃に翻って岩肌へと戻る。如何に重武装の金太郎とて、千の矢で集中攻撃されれば鎧袖の空き所から痛い一撃を食らうだろう。ましてや武に長けた烏族がそんな隙を逃してくれる筈が無い。

後は山を二つ越えれば本陣だと言うのに、烏族の鷹の如き驚異的視力によって彼らは見つかってしまっていたのだ。

旋回をしながら飛びながらでも射れるように短くなった弓を持ち、烏族達は河川の岩肌に追い込まれてその近くの物陰に隠れた彼らをいつ穿とうかと待ちかねていた。

「絶体絶命の危機だな」
「くそっ、弓さえあれば射落とせるのにっ！」
「無いものを嘆いても仕方が無いと先ほど言ったのは何処の誰だ？」
「うるさい、ここは流動的に対処するのだ」
「隠れ続けるしか対処の方法は無いがな。残念ながら、当てても落とせそうな使える石は後四つだ」
先ほどまでは雨よりも酷く降っていた矢は時折、彼らが焦れて動く時を狙うようになっていた。
以前も言ったとおり、この戦は短期決戦でなければならない。一気に攻め込み、龍神と決着を付けるのが最善。しかし、ここで足止めをされ、光、もとい頼光が居なければ如何に天才的作戦力を持つ秀武とて、戦力十万超の悪鬼羅刹の圧力に対抗出来る指揮と士気を使うことが出来ない。優れた将の下では全ての兵は一騎当千だが、それを欠けば苦戦を強いられ泥沼の長期戦となるだろう。長期戦は消耗戦であり、それは個人の技では対抗出来ない領域となる。それは闇殺舎が潜在能力の違う人外にじわりと咀嚼されるのと同義である。
しかし、頼光が居ればそれはその限りでない。きっと彼らは彼女のために獅子奮迅の死狂いとなって化け物を殲滅していくはずだ。
そのためにも彼女が本陣へと戻る必要があるのだ。

「くそ、どうすれば……、ん？」
ぴたりと苦渋に満ちていた金太郎の顔が変わった。
「どうした？」
「二頭の馬蹄の音が聞こえるっ！」
「まさか！」

そのまさかだった。
烏族の目にもあまりの速さにそれは黒と白の稲妻に見えたはずだ。

白馬彪凪と黒馬羅王号。重武装の馬鎧で飾った、否、金太郎以上の重武装を施した彼らには矢の意味が無い。古代の機動力の要、それが馬であるのだ。

岩肌へと滑り込むと同時に金太郎と頼光はほぼ減速もしていないのにも関わらず軽やかに飛び乗り、半呼吸遅れて降り注ぐ射線から離脱する。

そして、その背に括り付けられたのは強弓と烏族を射掛けるには十分な矢。加えて、その背に乗るのは京随一の弓の名手の二人である。

馬に弓の名手が乗れば、騎射となる。馬はただの機動力でなく、敵を絶命させる戦車へと変わる。

「お前ら素敵過ぎるぜっ！」

「帰ったら毛並みを整えてやるぞっ！」

二頭にひどく嫌われているために馬蹄を食らいながらも死ぬ気で装備を括りつけて放した秀武の苦労は彼らに察せられる事は無く、ただひたすら後方から迫り来る烏族達を二人は一方が構える間に一方が射ちと華麗に繰り返して烏族達を射ち落としていった。

頼光の本陣への帰還。それは明日の総力戦を予期させるものだった。

――別幕、闇の中で蠢く者ども

「時は来た」

暗闇よりもなお暗き奥底で、その白い衣の男、安陪　晴明は呟いた。

呟きは空間に震と響いて、大地から深くへ、天へと挑むように満たしていく。

「乾より来たりて坤に向かう、森羅万象万物流転。天球道より東、南、西、北の七宿から合わせて二十八宿。時を表し、十二直、六曜。四季に二十四節は通じ。人の生を六十干支より委ねられた金、水、木、火、地の五行は全てに相剋す。生と死の流渦は魂魄の転(まろばし)。陽中陽、陰中陰、陽中陰、陰中陽は陰と陽とし、両義。陰と陽より太極、太極から無空へと至る。東方降三世夜叉明王、南方軍荼利夜叉明王、西方大威徳夜叉明王、北方金剛夜叉明王、中央二大日大聖不動明王」

『豪』と舞を踊るかのように白い衣が翻って闇に映える。それはまるで、自らが闇の中での光の渦であると言うような、傲慢な輝き。

反、と地への束縛を脱して反転し、再び地に戻って剣指で虚空を掻き乱す。

バン・ウン・タラク・キリク・アク

その指先が呪と共に描くのは彼が物事の全てを人に分かる様に凝縮した図。

五芒星(セーマン)

その理は絶対にして不変にして普遍。

僅かな言葉で全てが彼の意志に優先され、物は語らせられる。

汗をつたらせながら、舞を終えると暗黒を切り裂くように引き戸

を開いた。
黒い世界に浮かぶ、白く輝く月。
その端は僅かに紫の、陽光の気配を感じて薄くなりつつあった。
「暁光と共に全てが終息する。未だかつて無い、私の、私による、全てのための世界の創造が始まる」
再び、万魔殿の扉が閉じられた。
――黙。

28．?昕陀（あただ）（3／3）

風が鳴る。
烏族の一匹は羽を風に任せ、その大地を一望した。

平らな大地には双方ほぼ全ての軍団が集結していた。
眼下には紫色に見える赤鬼と青鬼の歩兵団、すぐ真横には白い羽を持つ烏族の仲間達、後方には緑色の鱗を光らせる龍族が元々の小山のような龍の姿で待ち構えている。
その反対側には大太刀を剣山のように頭上に掲げた最優秀の切り込み隊を先頭に、両脇に弓を主体とする軽騎馬兵団、後方に弓と槍と太刀をそれぞれ距離と戦略に応じて変える歩兵団と薙刀を携えた僧兵団が陣取っている。

法螺貝の響かせる音色が人外の全軍を動かした。
大地を踏みしめる轟きが地鳴りのように空まで揺り動かす。
その空気へと伝達する振動を羽に受けながら、烏族達は彼らの頭上まで接近した。

空中機動は地上の障害物の影響を受けないために最速で陣地へと到達し、陣地を掻き乱す。前述の通り、空と地上からの同時多角攻撃は相手が同じ攻撃手段を用いない限りは勝利にはならない。何故なら、三次元で戦う相手に二次元で戦おうとするのだ。前後、左右の方向は対応できても、存在しない次元からの上下からの攻撃には対応出来ない。弓は先ほどから言うとおり、天地の理である重力で上空に達した矢を地上に向かって加速させ、その『地上』の敵を貫く。しかし、『上空』の敵を十分な加速を得られる矢と腕で当てられるのは極少数であろう。だから、上空からの攻撃を加えられる烏族は実のところ主戦力と断じても過言では無い。そのため、彼らの

多くは、この戦で挙げられる戦功を信じて疑わず、内心ほくそえんで彼らの頭上へと進軍を進めた。

さて、彼らの次元である上下に対抗するにはどうするべきだろうか？　むろん、彼らの中で飛べるほどの法力を持った僧は貞光のみであり、薙刀を携えた多くの僧兵は法力の欠片も無い、むしろ破戒僧と言った風体である。それを打破する方法はあるのだろうか？

解答は至極簡単である。彼ら、烏族が空で戦えない状況を作ればいいのである。

烏族の弓が射程距離へと近づくなか、彼らはまったくと言って良いほど動かなかった。制空圏を烏族達は捉え、弓鳴りがそこかしらになる。烏族達の射撃に幾人もの兵が矢に倒れるがそれでも動かない。その一方的な虐殺に莞爾を彼ら烏族が挙げようとしたその時だった。

最後方、僧兵団の真ん中に座する男の異言と共に大気が鳴動し、風と共に彼らの間から濛々と急に濃い煙が立ちこめた。予期せぬ出来事に烏族が動揺する。それでも粘り強く、弓を射ろうとしていたのが彼らの末路だった。

弓の弦音と共に彼らの身体に何かが絡まった。次の瞬間、物凄い勢いで三、四匹まとめて烏族達の多くは地上へと引き摺られた。

矢に結び付けられた綱（つな）と網（あみ）。矢と共に放たれた網。それに絡め取られた烏族達を地上へと綱で十人掛かりで引き摺り下ろし、後は彼らの独壇場である。これによって部隊の中央に引き込まれた烏族達は瞬時に壊滅状態となった。

濛々と立ち込めた煙は同時に歩兵である鬼達の進路と判断も混乱させた。その隙に切り込み隊と軽騎馬兵団は鬼達の正面でなく、僧兵団と歩兵団の斜め前へと静かに陣取る。

次の瞬間、視界不明瞭の煙の中で鬼達と歩兵と僧兵の混合兵団が衝突した。

鬼達の剛圧力。今回は射撃でちりぢりに逃げる鬼を追討するので

はなく迎え撃つ形である。本来なら正面からの対峙を避けるはずのその圧力に、彼らは敢えて力で対抗する。鬼達が最も強く出てくる場所に、彼らは十人ごとに一つの隊となった、十二支の動物が割り当てられた部隊で動く。日頃の訓練の通り、兵士達はいち早く隊長格の指示に従い、時にはその戦況を伝達し、個々の隊長格が巧みにその圧力に最も強い力を当てて、鬼の進撃を一時的に止めた。個でありながら全となる集団戦での理想系である。

鬼の大半は歩兵であり、多くは金棒での接近戦主体となる。そのため進撃を止められた軍団は四角形として前後左右中央と五つに分けた時、前方の約二割のみが攻撃に当たる形となる。好戦的な鬼達はそれを良しとせず、次第にその軍団は横から戦いへと勇んで軍団は扇状に広がっていく。しかし、横陣の戦列である薙刀の長さで防御に徹する僧兵団に対して、歩兵団、もとい、遠間で弓、近場で槍、接近して刀を使う散兵団が、僧兵団の横合いから徐々に強い鬼の圧力を削いでいく。これによって鬼達の横列は停滞。

それが闇殺舎の狙いだった。

煙の中、全体の軍からそれぞれ広がる形で斜めに前に進軍した軽騎馬兵団。彼らの主武器は弓矢である。つまり鬼達は弓矢の大軍に誘い込まれ、挟撃を受ける形となったのである。横に長く伸びた鬼達に軽騎馬兵達は同士討ちの危険性を考える必要も無く矢を打ち込む事が出来るのである。突如として横合いから放たれた矢に混乱し、鬼達は統制を極度に乱した。

矢が止むと同時に今度は馬蹄の轟音と共に勇ましい掛け声が後ろから響いた。

大太刀を掲げた切り込み隊が彼らを回り込んだ後ろから突撃しながら切り裂いていく。

歩兵団が敵軍の圧力を受け止める『鉄床』と成り、切り込み隊と軽騎馬兵が『槌』となって鬼の軍団を粉砕していく。

これは紀元前二世紀に羅馬（ローマ）の巨軍（レギオン）である必勝の密集陣形（ファランクス）を破った

斜線陣と言う戦法である。敵を中央へと誘い込んでその真っ向から衝撃を受け止め、横に位置した騎馬兵が横撃を行い殲滅する。更に秀武は弓主体の軽騎馬隊が横から完全に彼らを撹乱させ、ちりぢりとなり始めた軍団を後ろから切り込み隊で攻める形としたのだ。戦意の猛々しい鬼達もすっかりその戦術で混乱し、戦力は削がれていった。

無論、それを見て黙っている時雨では無い。煙幕の発生と同時に機を読み、彼女は遂に虎の子である龍の軍団を自らの士官と共に進撃させた。その彼女の気配を読んで、蟲達も地中から進撃を始める。

鬼達の追撃に掛かりっきりの今、彼らが龍と蟲の軍団の怒涛の反撃を違う角度から受ければ、逆に総崩れとなる。

その時だった。彼らの軍に追い縋ろうとする東の横合いの森林から、鈍い色を放つ総鋼鉄の鎧を纏い、先日単騎で楔の如く鬼達に分け入った金太郎と、彼の率いる重騎馬兵団が待ち構えていた。

先日の龍の攻撃も耐え切った少数精鋭である。切り込み隊のような華麗に斬殺する巧みさの無い代わりに、厚い装甲と愚直な突撃戦術が龍と言う人外の圧力に唯一対抗出来る戦力となるのである。

しかし、今回彼らは馬には乗っていない。馬は巨大な獣には本能的に恐怖するものであり、羅王号と言う例外はあれど大部分はそうではない。ならば、もとより徒歩の重装歩兵へと急遽転換し利点を挙げるべきであったのだ。

彼らの存在は予備兵力と呼ばれる。自陣の崩れに駆けつけ、時に戦局の膠着に対する一手となる攻性の守りとなるのである。補充戦力にも関わらず、その任務は重大かつ拙速、云わば切り札である。故に彼らの殆どは実戦経験豊富ないぶし銀の古豪で固められている。その頭が先日の一騎駆けでその勇猛さを知らしめた金太郎である。そしてそれは人外との小競り合いはあれど、戦での経験のない金太郎を古豪に認めさせる儀式の意味合いでもあった。その目論見が成

功した結果、龍族と言う超越種に引けを取る事も圧倒される事もなく、最前線で駆ける若人、金太郎を追い掛けて古豪達は味方の援護へと追従できるのだ。心気体の伴った突撃は一つの槍とも言える破竹の勢いで龍族へと突撃していった。

敵陣、残る蟲の軍団である。こちらも彼らに言わせれば金太郎達と同じ予備隊に相当する。地中より深く進攻する三百匹。先日の蟲王の敗北を挽回すべく、彼らの陣地の背後へと駒を進めていた。背後から現れたら最後、鬼の歩兵団の圧力に僧兵団と歩兵団は負け、中央突破をされる事となる。中央に居るのは先日からの大祈祷を維持し、妖魔人外のあらゆる力の流転を封じている貞光である。彼が殺られれば、残った鬼、烏族、蟲、龍が束縛から除けてたちまちその力を取り戻し、人では抗えない領域へと現在の力から飛躍させるだろう。限界一杯一杯まで技術と鍛錬によって増幅された人間が呪術の枷を付けた人外にようやく対抗できるのだ。つまるところ後方に位置する、僧兵団の中央で慧埜駆語の大縛鎖結界を使って人外の力を大幅に封じる貞光を倒せば、彼らの攻勢の逆転はありえるのである。

そのために彼らは地中をひた走る。古来より土蜘蛛などと呼ばれて、様々な政権から疎まれた蟲魔の一族の権力を魔族の間に作り出し、正統な勢力を生み出すための戦争である。彼らに恐るるものは無く、ただ人を蹂躙し、人を喰らい、人を殲滅させる次元でしか考えていない。

大地が爆ぜて蟲達が後方に到達する。最後方に位置する貞光目掛けて蟲達はその怪力を揮う。

そのはずだった。

彼らの背後、そこには存在しないはずのもう一つの兵力があった。陽光の中でもなお暗く、透けた身でありながらなお強く、いくつもの矢と刀傷をこさえながらも、鬼火を携えてその身を現世へと永ら

えさせる戦を求める修羅の者ども。老原の亡霊軍団が居た。
秀武の策略に感服し、彼らの闘争本能の他に心に残ったその侠気を見せるべく、二千の軍団が三百の蟲を押し止めた。
しかし、後方のどの地点から出現するのかを見極め切れなかったために横に伸びた隊列となった。結果、一部の四百弱の亡霊達が三百の蟲達の進撃に耐える事となった。しかし、彼らは戦闘狂の亡霊軍団である。魔の持つ力で彼らが霊体に触れ、撃滅できるとしてもそれは彼らも同じ条件である。

いくつもの人と人外の屍が大地に重ねられ、血の河を作り出していた。
それを石塔の上から眺めていた時雨の足元から二つの声が聞こえた。
「従四位にして左馬権頭、闇殺舎総大将、源　頼光」
「同じく、その郎党にして一番槍、四天王の南門の守護者、坂田金太郎」
刀を掲げた頼光に、槍でなく、自前の鉞を担いだ金太郎。ついに彼らは龍族の障害を突破し、人外の総大将である時雨の下へと辿り着いたのだ。そして、最強の人外、彼女に対抗できるのは四天王と

頼光しか居ない。
「「貴様の首、貰いに来たっ！」」
「おぉ、待ちかねたぞ人間ども！！」
潔い宣告に時雨は気をよくすると、自分の身長の二十倍はあろう高さから躊躇無く飛び降りた。
爆音のような着地と同時に、昨日と同じように纏った襤褸を剥ぎ、殺人手甲を構えた。
「かかって来な、人間」
手招きと同時に、鉞を文字通り振り回して金太郎が突っ込む。
時雨はその突撃の早さに驚愕する。
「（こいつっ！　槍の時よりも動きが早ぇ！）」
雷撃を身体から飛ばすように金太郎の周囲を巨大な鉞が駆け巡る。金太郎の上半身を軽々と隠すほどの巨大な鉞が常人の目には見えない。それを人外の時雨は両手の手甲で凌ぎ、むしろ攻めに転ずる。しかし、その合間を縫って、閃光のように頼光の太刀が奔る。金太郎の振りぬく鉞の陰から、その小柄な身体を生かして時雨の胴体を斬割せんと抜け出る。それも防ぐ。しかし彼女の防戦の一方である。
大地は鉞に削られ、空を割る太刀、打ち付ける手甲の音は高らかな魂の響きを生み出す。

誤算。
頼光の強み。それは四天王の攻撃を補佐した時、それは絶大な心理効果と同時に、彼らの体へと無意識に自らの魔力を送り、身体能力を強化させていたのだ。

敗北。
それをはっきりと意識した瞬間、時雨の中で何かが弾けた。
「ららららららららららららっ！」
突如、時雨の身体が加速する。視界を埋める拳。金太郎は幅広い鉞の鎬で頼光と自らの身体を守り、二人は同時に跳び下がる。

「くぅ……、いいねぇ。俺様を、ここまでコケにしてくさったのは手前らが始めてだよ」

「何だ。貴様をコケに出来るほどの人外は居ないだけなのだな。私なら人で三、四人は知ってるぞ。まぁ、一人は現在進行形で床の上で死に掛け、もう一人は戦場で大太刀持って暴れていて、残るは私とその横に居る獣だがな」

頼光の涼しい物言いに「違ぇねぇ」とくつくつと笑いながら答える。

「いいねぇ……、あんたらが気に入り始めたから、俺様はあまり殺したくないのさ。でもねぇ――、身体が抑えが利かなくなってきているんだよ？」

ぎしぎしと音を立てて、時雨の革鎧が、いや、彼女の身体が膨張を始めていた。

「微塵と弄り殺してやるさ！　人間ども！」

彼女の身体が巨大化した。革鎧が爆ぜると瞬時に蒼く尖った鱗が浅黒かった全身を覆い、胴は長く太く変形し、こめかみからは角が生え、口元から長い二本の髭が伸びる。赤く艶かしかった唇からは太刀よりも鋭い牙が生まれ、瞳は白目と関係なく赤く染められていた。短いながらも鋭い爪の四肢。体長四百間（二千メートル）はあろうかと言う化け物。自然界の権限、雷雲の彼方の畏怖から生まれた龍族の王にして神、龍神としての姿が龍ノ目時雨の真の正体である。

「ごあああああああ

あああああああ

「俺に全て任せろ」

古代よりこう呼ばれるものがいる。英雄。人から生まれし、神に唯一対抗出来る者ども。

確信したからには、人は英雄の行動を賞賛しなければならない。

「……命令だ。――――勝てっ！」

その言葉と同時に金太郎は雷雲と豪風の渦巻く、彼女の中心へと駆ける。

途中、岩肌に刺さった赤い、あの槍を抜いた。

それが抜けると同時に走りながら、槍が時雨の喉下へと投げ付けられる。それだけではない、何と彼は更に疾走を加速させ、その槍に飛び乗った！

彼女の顎が大きく開かれる。その中心には稲光が迸っている。槍に乗って一直線に向かう金太郎に、電離した、人が触れれば溶解するほどの超高温の稲光が放射される。

それをあろうことかただの鉞が弾く。それは自らの身体を傷つけさせないと、強い意志がまとった心の壁、装甲結界、それが鉞に層を成していた。体内に混じった妖（あやかし）の血がこの場で覚醒したのだ。

喉下、そこに振り被った鉞の一撃が加えられんとした。

だが、時雨も甘くはない。彼女にとっては豆粒のような金太郎をその長い、天を覆うほど長い尾の一部で打ちのめした。

上空から地へと高速で叩き付けられる金太郎。

岩石、いや地盤が山の彼方まで裂け、砕ける。
頼光の叫び声。
その上に駄目押しとばかりに時雨の巨体が押し潰すように圧し掛かった。
地震。時雨の押し潰しに遥か遠方、大陸までその震動は伝わった。

……。

誰もが金太郎は死んだ。そう思った。
時雨は勝ち鬨の鈍い吼え声を轟かせ、生き残った一部の人外達は愉悦の笑みを浮かべた。

そんな中、何処からか声が聞こえた。

その声は確か「発気用意――」とそう言っていた。

微かな震動を大地が上げ始める。何か巨大なものが彼女の体の下から湧き上がるようなそんな音。

時雨もその異変に気付く。空を飛ぼうともしていないのに、彼女の身体が持ち上がっている！

ついには彼女の体が真下から何かによってむりやり旋回をさせられ始める。彼女もそれに抗おうと大地に爪を立てる。だが、その力もむなしく、大地に痕を残しながら開墾するだけに終り、彼女の体が竜巻のように旋回させられていく。止まらない、留まらない。怪力を超えた怪力、剛力の中の剛力が真下で彼女を振り回している。

紅龍の半魔の力、相撲の神の力が渾然一体となった結果、この場で最強の獣が覚醒する！

「――残ったぁっ！」

虚空を劈く（つんざく）鋭い呼気と共に、彼女の体は空の果てへと有り得ない速度で『投げ飛ばされた』。一瞬にして、天空を覆っていたはずの彼女の体が点、光となる。生き残り、愉悦を浮かべていたはずの化け物も、自陣であるはずの闇殺舎達の眼も点となる。

その彼女が足掻き、鋭い爪で掴み、それでも抵抗できずに描かれた円、いや、【土俵】の中心には大きく息を荒げ、それでも立ち尽くす金太郎が居た。

圧倒的な力に彼は力で打ち勝った。

土俵の中心で高く片足を上げて、打ち下ろす。

四股。古来、大地に滞る邪気を祓う儀式であり、彼の気迫は地を伝って響きとして味方に心気を与え、敵を気迫で打ち払う。

あまりに俄然とした英雄の力の発露に全ての化け物たちは頭を垂れ、敗北を認めた。

戦闘の直後、余りの人外の力を行使したことで倒れそうになる金太郎を、小柄な頼光が支えた。

血塗れの戦士、矢尽き、刀も折れたが、昔から変わらない、獣の攻撃な笑みだけはそのままだった。

「……やるじゃないか、金太郎」

「ふんっ、頼光。お前の兵が負けるはずがないだろう?」

西暦千年、近江の乱はここに終結した。

29．??婆（かかば）

遥か彼方の大地で――。

赤い、派手な衣を纏った男と白い衣の男が黄土色に枯れた、草原の中央に立っていた。

その赤い男の名は『あるでひど』、異界の世界に住まう、次元と空間の壁を越えて現れる騎士の一人である。

白い男は安倍晴明、陰陽寮の実力者である。

漠然と立つ彼らの横を風が一陣駆け抜け、凪いだ後に皮の襤褸を纏った女が居た。

「龍ノ目時雨で宜しいのかな？」

「そちらの条件を満たす約束は果たした。……返してもらおうか？」

あるでひどの問い掛けに女は殺気付いた声で返すと、晴明は朗らかな笑みを浮かべて頷いた。

あるでひどの口が開く。

びきびきと音を立てて、唇が有り得ない伸びを見せて、人では到底広がらないような口からにょきりと子供の足が生えてきた。そのまま藍色の着物の裾が垣間見え、歯にも引っ掛からずにスルスルと出てくる。

そのままずると小さな、十歳にも満たない子供が出てきた。

草むらにペタンと置かれた子供は不思議そうに辺りを見回すと、時雨を見つけて叫んだ。

「かぁしゃん！」

「たろちゃん！」

二人は草むらを駆け抜けて抱き締めあう。

「三十年ぶりの親子の再会ですか。ふふふ、龍族は一生涯に一人しか子を孕めませんからね。大切にしなくてはなりませんね」

たろちゃんを抱きながら、草木も平伏すほどの殺気で晴明を睨みつける。あまりの怒りに大気が鳴動し、周囲には放電現象が始まっていた。

「私のお役目は終わったからな。貴殿の身は守らんぞ。好きにしてくれ」

あるでひどのすっぱな物言いに、邪な微笑みを返す。

「ご苦労でした。王によろしく」

「貴殿には紹介出来る身分ではない、もう会うことはないであろう」

あるでひどはそう言うと、赤い衣を翻してその場から消えた。食尽騎の持つ空間移動能力である。

一人、草むらに残った白い衣の男は顔を歪めて哂った。

「くくっ、一人の子を守るために一万を超える魔の大群を見捨てるのですか。親子とは実に興味深い。いえ、褒めているんですよ。人類との共通する感情に」

「てめぇのお喋りは終りだ。その賺した顔もそれまでにしな」

紫電が弾けて、無手の時雨の両手に籠手が装着される。目は瞳が金色。

金太郎と頼光との死闘時で四割も掛けていた限界を外す。手加減では無く枷。子供を人質に捕られたが故に負ける事を宿命付けられ、それ故に無意識に掛けていた枷が外された。それでも、金太郎は龍

神に六割の内でのギリギリの力を打倒したのは完全な実力である。
彼は人としての範疇、現世の箍から外れて、明らかに神話の領域、魔や神と言った人外への道を辿り始めていた。

「今回の戦で様々な記録が取れました。私の辿り着くべき道へと近付く素晴らしい結果です」

両手を大きく広げての拍手。
次の瞬間、彼女の体が地を蹴った。殺戮拳が晴明に揮われ、歪んだ笑顔のまま彼の体は顔から真っ二つに裂けた。
雷の音。拳に纏った紫電が迸った。
途端、彼の体は不自然な蠕動をし、その彼の体だったものは何時の間にか収縮されて人の形に切られた、雷で焼けて、くすんだ紙に変わっていた。

「式神……？　くそ、偽者か……」

恐ろしい相手だった。相手も最も弱い部分を突き、それをもって相手を操る。もしかしたら、人の宮中も実は誰も知らぬ間に奴の手にあるのではないか、と考え、彼女は恐ろしく思った。
怖い顔のままでいると、その彼女の襤褸の裾を小さな子供がぐいと引っ張った。

「かぁしゃん、オラははらがへったのでしゅ」
「そうかい、じゃあ、今日は帰って芋粥にでもしようかい」
「うにゅ。オラ、べこのちちでにてほしいでしゅ」

まぁ、どうでもいい。しばらく、三百年は人とは付き合わないさ、と愛息子を抱えて、その場を彼女は去った。

以降三百年、記録から龍神　龍ノ目の名は消えるのであった。

30．虎々婆（ここば）（1／2）

死者二千四百八十三人、重負傷者四千三百五十七人、軽負傷者二千七十三人、まったくの無傷で帰路を辿るのは九十人にも満たない。馬も千頭連れた内の五十四頭しか残っていない。まさしく天地を揺るがす大激戦にも関わらず、人の身でここまで人外を圧倒したのは前大戦を上回る成果だった。生きているものは自分でも生きているのが不思議なくらいで、実は本当は死に掛けていて、ふと気付けば実は死の淵であえでいるのではないかと勘違いしてしまうほどだった。彼らの殆どは志願兵であり、妻子ある身はほぼ極秘扱いとなっての出陣だった。中には遠い蝦夷の国から志願しながら、戦場に骨を埋めてしまった者もいた。しかし死んだ者も、一生の不具者となった者にも、それは誇れる戦だった。人の身で人外の神を打倒したのだ。出陣前に記した彼らの名、死者は英霊として名を連ね、生者は豪傑として身を正した。

兵どもが夢の跡。大将を倒したが故に、残った人外達はその指揮官の補佐に従い全面降伏を受け入れ、今後人外の一切が限られた境界を越えない事を誓い、またその神域を侵さない事も人間からも誓う証文を交わした。人外の生息域は大きく狭められたが、頼光は内緒で温情を見せて、『闇殺舎の管理する村落において、人の姿形をし、またそれを人に覚られずに生活するのであれば良しとする』と言う『政霊村管』などと言う約束までも勝手に証文の隅に載せてしまった。それを後から知って「頼光様はよくよく命知らずですね」と貞光は呆れながら皮肉を漏らしたとか。無論、人外に対して余計で不当な圧力を与えれば、後がどうなるか分かりませんぞ、と日頃から坂田が昇殿の際に公家を脅しておいたのでどうにかなるだろうと言う目論みと最高権力者の道長が気楽に「了承」と言ってくれそうな気配はあったのだが。

勝利者達の静かな凱旋である。北大路側の街道からひっそりと、それでも負傷者を抱えての行軍である。国家機密の大戦争をしておきながら、それでも秘密と言うのも可笑しいが、極力宮中を含め、下々の民を動揺させないと言う配慮だった。

都の手前、途中に待機していた薬師や医師が総出となって負傷者を看た。彼らを一時その場に残すと、馬に乗って頼光と四天王は内裏を目指した。

宿直のために、いつ侵攻するとも知れない人外に怯えながら起きていた近衛の見廻りが彼らに気付くと、喜び勇んで早馬で各公家と天皇陛下に戦勝を告げた。あまりの喜びに宿直が誰も居なくなったので、頼光と他の四人が宿直したと言う。

翌朝、一番に彼らの前に立ったのは道長だった。

彼らに会って一番、あろうことか、現政権でのほぼ最高権力者が頭を下げた。

「?!　道長大殿!」

「この礼は」

道長の重々しい声が五人の動揺を鎮める。

「この礼は、そなた達の功績と今までの刻苦に捧げるもの。それは人の身で語るにはおこがましいほどの苦行を成し遂げた。それに対しての礼である。そして、それに従じた、そなた達への信頼の証である」

すっと道長の背が伸びる。

「大儀であった。さぁ、我が君がお待ちしておられる。昇殿なされ」

我が君、それは現人神(あらひとがみ)たる懐仁(かねひと)親王、俗に言う現政権の真の権力者、一条天皇の事である。実際の政治の運営を司ったのが藤原道長であるなら、一条天皇はその権力を与えた立場にあたる。実際、彼らは道長が叔父、一条天皇が甥に当たる関係である。

いや、それでも彼らの立場は対等ではなく、それ以前に彼と道長には絶対的境界がある。現人神とは読んで字の如く人の姿をした神である。例えその身に力は無くとも、神足る神性の発露は悉く人を凌駕せしめる。

それだけに及ばず、一条天皇は英明の人と伝えられている。先代、先々代と続いた二人は物狂いの節があり、それを度々摂政関白を付け狙うものにつけ込まれたが、一条天皇はそう言った点では逆であり、むしろ心情優雅で思いやり深く、かと言って情に流されすぎる事もなく、節度を備えていた。詩歌管弦の道にも通じ、学問にも草子が深い。また政治的な駆け引きも上手く、有能な道長を関白でなく左大臣に止めているのは権力の均衡化などの目論見があったのだろう。云わば、一条天皇は完璧超人である。

御簾越しに分かる輪郭。その影に向かって四人は拝礼する。

「諸君、面を上げ給え。諸子女房、御簾を挙げよ。本朝を救いし、英雄の面を拝謁したい」

厳かな声と共に御簾が掲げられる。

眉目秀麗。当時の、まるで運動をしていない貴族にしてはすっきりとした面構えが現された。流石竜顔と称されるだけの美男である。

「この度の戦功、本朝八百万の神々の子孫、懐仁の名を持って礼を申す」

再び、畳に五人は擦り付けるように頭を下げた。

「諾子女房、私の笛を」

「ならば、私は鼓を打ちましょう」

その言葉に厳かな雰囲気と共に清少納言の手で小さな笛、宮中に

伝わる名笛、大水竜（おおずいりょう）が一条天皇に、鼓が道長に掲げられた。
静々とそれを受け取ると、その小さな笛に相応しい、緩やかで澄み渡る音が流れた。
それに乗せるかように鼓が一つの音を拍子として、笛との合奏を見せる。
どちらも宮中で美に拘る人の出す音色である。笛の途切れる事のない音と、鼓を打った直後の僅かな無音が雅な音を作り出していた。

聞き惚れていた面々の間から、静かに金太郎が立ち上がった。
獣が狂いだしたのか？　残る四人は驚愕した直後に、金太郎は腰元に差していた扇を開き、舞を見せた。

「席田（むしろだ）の　席田の　伊津貫（いつぬき）川に　や
住む鶴の　住む鶴の
千歳（ちとせ）を予（か）ねてぞ　遊びあへる
千歳を予ねてぞ　遊びあへる」

祝宴の席でよくよく歌われる席田と言う民謡を雅楽用に編曲した催馬楽（さいばら）と言うものである。美濃国席田郡の伊津貫川で鶴が千年の栄華を謳うと言う歌である。

それは以前、近衛として公時が歌と共によくよく舞っていた音曲だった。

音に合わせ、武の達人が見せる舞。獣にして人、人にして英雄が見せる仔細で優美な舞は神々しく、美しい。
獣が翼を羽ばたかすかのように無拍子で諸手を広げて跳び、驚異的な、天に浮くように静止。再び歌にある千年の幸福を囀る、晴天を浮かぶ鶴のように舞う。日々の激烈な訓練によって鍛えられた呼吸で、大地に音を下ろすような深い声が宮中に響く。

いつしか、綱も自らの竜笛を取り出して吹き出す。緩く高い音が天上へと端掛かる。

四重奏となってその美を四人が表現する。

遠い別の宮の蔵人達も、公務に疲れていた筆を止め、その音に聞き惚れていた。それは瞳を閉じれば、美濃の鶴が舞う風光明媚な景色を想像させる事は容易いものだった。

残る秀武と貞光の二人は血迷って謡い出そうとする頼光を必死に止めていた。

金太郎が翼を、扇を閉じると同時に、幻想的な空間が内裏の清涼殿へと戻る。

笛の音には暗示を引き起こす波長があると言うが、それを差し引いても見る者、聞く者の心を振るわせる音曲だった。

「その者、名は？」

金太郎は先ほど立ち上がった時と同じように、雅に音も立てずにふわり坐す。

公時の教えた完璧な礼を調教された獣のように淡々とこなす。

「源頼光の朝臣の郎等、相模国足柄山の生まれ、四天王の南が増長天、坂田　金太郎にあります」

「おぉ、坂田公時の子か！　そちの父は腕利きにして、魂太く、器量ある臣下であった。もう老い、あのような傑物は出ぬかと朕（ちん）は憂いていたが、そなたのような若人が本朝に居るならば国家は安泰で

あろう」
　喜色円満の笑みを浮かべて、転じてそこから一条天皇は思案顔となった。
「そういえば、お主。金太郎と言う事はまだ幼名であろう？」
「は、恥ずかしながら」
　本来、元服したと同時に新たに付ける名があるのだが、公時が「未熟者にはまだ早い」と付けるのを中々に渋ったのである。今更ながら、あの爺、と金太郎は胸の内で毒づく。
「ふむ、では……。護国の士足る者に、こう言っては何だが『坂田』では名の力が足りん。そうだな……、妖の国と人の国の境を定めし国士無双、坂田に代わり『国定』の氏を授けよう」
「はっ」
「さて、名だが……。国定、御主の父はまた別と坂田公時より聞いた。して真の父殿の名は？」
　一瞬、自分の名が現時点で変わったのだと気付かずに流しかけるが、頼光に促されて、再び金太郎は堂々と答えた。
「亡き父の名、同じく亡き母によれば、時仁と伝え聞きます」
「時仁！　奇しくも我が名と一字違いか」
「ははっ、ご縁がおありかと存じます」
「そして、やはり、金の字は名に遺したいだろうか？　戦場へと赴き、帰ってきた名であるからな。成る程縁起も良い」
「はっ、出来るのであれば」
「ふむ……」
　長考。
　英明の権力者が与えた文字は、
「よし、【金】の字、【東】に赴き、【錬磨】した技を揮う。その忠孝、【仁】を持って侍うて表す『錬仁』と名乗るが良い。今日より、お主は護国の雄、四天王の増長天　坂田　金太郎を改め【国定錬仁】とする」
　彼のこれからの千年を共にする名だった。

「納得出来ん！」

物凄い音を立てて、肘立てに拳を下ろされ、砕かれる。

名づけからしばらくして、辞令を受けてから頼光の家へ帰り、自分の部屋で金太郎、もとい錬仁は怒っていた。

突然、呑むぞ！　と首根っこを捕まれて付き合わされた秀武は、綱に「こう言う怒りを静めるのはお前が適任だ、それじゃ」と勝手に一人で押し付けられ、「な、何が起こったのですか？」とうろたえる貞光に押し付けると、今度は流されて一緒に怒り出してとんでもない方向に行きそうなので、「やっぱりこう言う役は俺一人かよ！」と仕方なく貧乏くじを引いていた。

「ったく、金太郎、まだ怒っていたのかよ？」

先ほどから秀武は酒樽から膏（あぶら）と呼ばれるやたら濃い酒を注いでぐびぐびと呑んでいた。

「金太郎ではない！　俺はもう錬仁だ！　まったく！　秀武は悔しくないのか？　あれほど戦功を立てた云うのに即日、闇殺舎の縮小を命じられたのだぞ！　憤る事を通り越して呆れて、また怒りが溜まってきた！」

「しょうがねーだろーが、戦もねーのに大規模な軍備を無理に維持して意味ねーだろ？　代わりに闇殺舎の所属者には位田二町に、戦没者の家族には位封二戸分を国司から五年間も配当されるんだぞ？　参議のぐーたら親父達も貰えないような高給なんだぞ？」

位田とは全収穫の五分の一が自らのものになる田であり、位封は位田などから徴収した玄米を配給される、云わば貴族の給料にあたるものである。

秀武の言った通り、通常は国家の上級権力者でしか持ち得ない高給中の高給である。むろん、普通は五十町や百戸と言った大きな形

で配給されるのだが、それでも何の位の無い者達が持つにしては破格である。簡単に言えば、住所不定無職の暴力団達に五年間国がただ飯を食わせるようなものである。

「しかし、それにしても突然過ぎる！」

取り留めのない怒り方に秀武は舌打ちをしたが、嘴が黄色い錬仁に権力者の目の上のたんこぶになる可能性があろう、闇殺舎の政治的意義などを説明しても分からなそうなので止めた。

代わりに溜息を吐いて、錬仁を諭す。

「とにかく決まった事で頼光ちゃんも了承してんだろ？　お前、頼光ちゃんが考えも無しにそれを承諾すると思っていんのか？　え？」

光の名を出すと流石に錬仁もむっとした顔をしつつも、「それは……」とそれっきり押し黙ってしまった。

「お前、さっきからぐちぐち五月蝿ぇけど、本当は頼光ちゃんから離れるのが嫌なだけだろ？」

「んな！　そ、そ、そんな事無いぞ！」

しかし秀武は、錬仁が闇殺舎を縮小される事よりも憂いている事があるのを余裕のよっちゃんで知っていた。それは『四天王制度の解体』、つまり、光から四天王は離れろと言う命令だった。

それは、五年後、禄、給料を失った後に山賊化する可能性がある闇殺舎の所属者を監督するためであり、同時に地方での未だ反発のある人外の小競り合いに対抗するために東西南北にそれぞれ派遣されると言う意味合いもある。それよりも、只でさえ恐ろしい牙を持つであろう光の手足を、部下の力をもぎ取る作戦でもあった。道長としては有能な随身（護衛）として彼らを光の下にいる者として更に召抱えたかった。だが、流石にそれをすると道長は一条天皇を含めて宮中全体から個人として持つには強過ぎる軍隊を備える事となり、逆に非難、そして彼の政権を揺らがせる原因へと成りかねないので、彼らを京内に留めるのを良しとしなかったのだ。

それ以外にも色々と小難しい政治事情はあるのだが、錬仁の頭で

は理解させようとすれば混乱するだろうと思い、秀武は留めた。
「とにかく頼光ちゃんを信じろよ。それにずっと離れ離れって事もないだろ？　会いたきゃ何時だって馬飛ばして行きゃいいだろうよ。それに道長の旦那が執り成してくれりゃあ、まぁ、五年くらいすれば京に戻れっだろうよ。それにどうしても頼光ちゃんと一緒に居たいんなら手はあるぞ？」
「あるのか？！」
「あぁ、孕ませて、自分の嫁にしちまらびゃはっ！」
錬仁の拳が顔面に直撃して部屋の外へと飛び出させられる。
秀武は鼻血を出しながら部屋の中に足音を立てて戻る。
「殺す気か！」
「そのつもりだった！　何だその脈絡の無い考えは！」
「馬鹿か貴様は？　俺が何の考えも無しに言う訳無いだろう？」
垂れる鼻血を自らのしくじった歌を書いた紙を胸元から取り出すと鼻をかみ、丸めてその辺りに捨てる。
「良いか？　頼光ちゃん、もとい光ちゃんは知っての通り、まぁ、年齢的にも適齢期ギリギリの女の子だ。加えて風の噂に寄れば、兄貴の『本物』の頼光殿の病状はこの場に及んで回復しているとの事だ。いずれ、二人は『入れ替わる』事は想像が付く。頼光として活躍していた光ちゃんはただの女房に戻る事になる。そうすれば、地位も何もかも剥奪される事は目に見えている。例え腕っ節は強くても、冠も何もかも剥ぎ取っちまえば、光ちゃんだって女の子だ。たぶん、今の状況から考えれば、『女が闇殺舎、戦の大将だった事を隠す』ために寺に閉じ込めておく出家か地方に流す都落ちの二つに一つにされるはずだ。でもな、お前は違う。『源頼光に仕えた四天王の一人』である事は変わらない。だから、都落ちするかもしれない彼女を守る事が出来るはずじゃねーか、と言うことだ。それを要約すると既成事実作って孕ませて誰も知らない田舎で暮らせばいいだろって話だ」
「いや、要約し過ぎてそこまで考えが回らないだろ普通」

呆れる金太郎に、はんと反対側からまだ垂れる鼻血を手の甲で拭い、啜りながら、酒を口に含む。
「それは手前が子供なだけだ。石頭の貞光はともかく綱あたりだったらさらりと優雅にやっちまうだろうよ」
「止めろ、お前が『やっちまう』とか言うと下品に聞こえるから止めてくれ」
「この……、俺様がガラにもなく真面目に話しているっつーのに茶化すなよ」
「で、……その、何だ。いつ、その……、け、けけけ結婚の事を言えばよいのだ？」
「ん？　何、錬仁、いや金太郎ちゃま、錬仁様はぁ、女の子に今すぐに告白出来ない程、玉が縮んで怖気づいちゃったんですかー？」
弾と言う音と共に立ち上がる錬仁。
「お前、俺がその程度の事が出来ない男だと申すのか？」
「なんだよ、出来るのか子供んちょ」
「言ってくる。吼え面かくなよ、山賊もどき」
「だからもどきじゃなくて元だっつーの、早く行け」
廊下をのし歩く獣に向かって嘆息し、まったく、お膳立ても大変だぜ、と策士は人心地と同時に酒を煽った。

「だめだ。緊張する……」
有ろう事か、光の私室の前で躊躇して頭を抱えていた。
胸の鼓動は錬磨をしている時よりも高まり、酒を呑んでいる時よりも紅潮している。
意を決して入ろう、そうした時。
「金ちゃん」
聞き慣れた柔らかい声を聞いた。
「……相模、どうしたんだ？」

「はい、公時様が話があるそうです」
何故か心持緊張した顔のまま、相模はそう言った。
「爺が？」
「はい、死期が近いそうなので、今の内に話がしたいと」
「俺だけにか？」

床に伏せているのは、過去、鬼を倒した豪傑でも、四天王を導く指導者でもなく、ただの枯れた老人だった。痩せ細った身体に、唯一覇気のある独眼が錬仁を射抜いていた。
「国定　錬仁か。陛下から良い名を貰ったな」
「あぁ、悪いけど、坂田の名は継げない」
「どうって事はない。この坂田公時、後にも先にも儂一人で十分だ」
身体を走る痛みと喉を鳴らす浅い呼吸、それでも剛毅な笑みを老人は浮かべた。
「綱は息災か？」
「相変わらず、飄々としてやがる。ありゃ柳か暖簾だ」
「ふん、そうか。あやつの武才は古今東西においても肩を並べぬものだ。何か武で行き詰れがあれば、あやつに訊け。そして貞光は糞真面目か？」
「あの性格は直りそうにない。だが最近、何故か妙にぼぅとしているが、秀武曰く『こいの病』らしい。何だそれは、何処の風土病だ？」
「自分で調べい。そうか、あやつも岩にも色がつくようにようやくなったか。で、秀武の怠け者はどうした？」
「俺の部屋で今酒を呑んでる」
「真面目にしろと言っておけ。あの馬鹿がその気になれば、大陸の先まで物に出来る将の器だ。その内に儂ら武が政権を握る世代が来るはずだ。その礎を作れ、と言っておけ」

「指揮能力が無いが？」
「それを補うのも策士の才だ。怠けずに考えて、最良の一手を打つように言え。そうそう、最後の囲碁は儂は負けたとは思っておらんぞ」
「秀武よろしく碁盤をどさくまに紛れてひっくり返しておいて良く言うぜ」
「相手の勝ちがなければ負けもないわい。さて、貴様の事だが、『相模』をよろしく頼む」
「……はっ？」
何故、そこで相模の名が出るのか？　彼には皆目検討がつかなかった。
「今更の話だが、彼女は……、源高明の娘と為平親王との娘だ」
「げ、それは……」

源高明は安和の変以前の左大臣だった人物である。一条天皇に負けず劣らず、村上天皇と言う平安時代を象徴する帝から厚い信頼を受けていた有力者の一人だった。しかし、その事件当時、村上天皇は崩御され、関白太政大臣に藤原実頼、左大臣に源高明、右大臣には藤原師尹が就任した。また皇后安子の父で右大臣だった藤原師輔の娘を妻として親交があったが、既に亡くなり、源高明は宮中で孤立しつつあった頃合だった。そして天皇の地位には憲平親王（冷泉天皇）が即位した。しかし、冷泉天皇にはまだ子がなく、その冷泉天皇はかなり精神状態を患う事が多かった。そのため、遠からず世代交代がある事が見越された。次の世代の候補は村上天皇と皇后安子の間の皇子である冷泉天皇の同母弟の為平親王と守平親王であった。そして、為平親王の義父が源高明に当たる。細かい事を挙げれば錐が無いが、とにかく冷泉天皇が退いた後、どの天皇が就き、誰がその外戚、つまり操り糸の主になるか、と言う政治合戦が裏で色々と行われていたのだ。年長の為平親王が東宮となることが当然視されていたが、実際に東宮になったのは守平親王であった。

むろん、順当に考えれば面白くないのは右大臣の藤原師尹である。あの手この手を回し、人と人外の境界にあった大戦の代理脚本として利用する名目を持って、藤原氏に対抗する源氏の政治勢力を同時に潰したのである。

為平天皇を擁立し、東宮となった守平親王に対抗するために東方で謀反を起こすと言う代理脚本が師尹の間で組まれ、源高明は嵌められた。

左馬助源満仲と前武蔵介藤原善時が中務少輔橘繁延と左兵衛大尉源連の謀反を密告した。源満仲、頼光の実の父親である。武だけでなく政治力に優れていた彼は、貴族に対する自らの武士の地位を確立するため、京で源満仲と武士の勢力を競っていた藤原千晴を陥れる策もあったのだ。

つまるところ、政治家である源高明は地位を失って、藤原師尹が左大臣の地位を受け、武士の源満仲が京の荒事の専門家として地位を築き、藤原千晴が失脚すると言う、源藤の文武交代みたいな話なのだ、と錬仁は当時の一部だった頼光からその話を説明を受けていた。

本当は関白である同じ筋の藤原実頼を内部抗争で蹴落とす予定だったのが、とばっちりを受けて、蹴落とされたのは源高明だけになったのが真相のようだ。

源高明の館は、彼と彼の息子の流刑後に何者かに放火され、彼らの一族は何もかも失ったわけである。

ちなみに藤原師尹は左大臣の地位を得た後、半年も経たずに病気で死んだらしい。源高明の生霊、また代理脚本の影の妖が祟ったのだと言われたとか。

「つまり、源　相模がここに居るのは？」

「頼光様の罪滅ぼしのつもりなのだろう。父親がめちゃくちゃにした人生を償ってやるつもりなのだろうよ。だがな、源満仲様がお亡くなりになり、頼光様の地位が危うくなる今、何も後ろ盾の無い相

模は行く宛ても無くなるのだ」
「……」
「頼光様、もとい光様なら道長様の愛護も受けている上に大丈夫であろう。四天王も帝より直々に信頼を得ている。だが、この家で何も後ろ盾が無いのは相模だけだ」
「何故、俺に……」
「仲自体が良いからな。貴様も相模が嫌いではないだろう？」
「あぁ、そうだが……」
「それに相模も好まざれば、貴様の事をいつまでも世話をする必要もないだろうさ。現に気立ても家柄も良いからな。道長様のみならず、後朱雀天皇の皇女祐子内親王に出仕しないかと言う話もあったが悉く断ったそうだ。その理由が分かるか？」
「いや」
錬仁の中では言い知れようの無い気持ちが鬩ぎ合っていた。自らの心に強く残る光と自らを影から支えた相模。
「相模は『金太郎の傍に居たい』と言ったのだぞ。儂の心残りは彼女だけだ。貴様が誰に対してどう考えているかは分からん。だが、残される者がいると言う事を貴様に伝えたかった……」
「……爺、いや、坂田公時殿。俺は、何がどう出来るかは分からない。ただ、俺は、女性を泣かしたくはない」
昔の母のように、居ない父を人知れず嘆く姿。
「難しい顔をするな。貴様に話したのは間違いだったかもしれないな」
「いや、むしろ光栄だ。きっと、言われなければ、俺は気付かないままだった。貴殿は、良い教師だよ」
「……そうか」
「うまく、俺に何か出来るかわからないけど、精一杯やってみるよ」

公時は動かない。
「爺、後は任せろ……」

布団に横たわっていた男の身体が少し軽くなったような気がした。

心には二つの錘。
光の象徴たる彼女に、影から支えた彼女。
心の天秤はゆらゆらと傾き続ける。

31．虎々婆（ここば）（2／2）

黄昏の紅。黒よりも蒼い空が侵食する。
天上よりやや西に望月。
全ての望みは果たされた。
少女は一人、白絹の薄い格好で光はぼんやりと空を眺めていた。
若葉の匂いが庭に漂う。初夏の目前の夜。
源　頼光だった猛者は、既にその身は光と言う小さな少女に変じていた。

闇殺舎の殆どは古参も新参も含めてそれぞれの帰路を辿り、彼女の許に残るのは四天王と相模、そして彪凪と羅王号のみである。
無茶な闘いは何度もした。それもこれも民のためだった。妖魔の脅威が薄れた今、政治機構は安定し、貴族との隔たりのない政（まつりごと）が行われるだろうと彼女は思っていた。
全てが終わってしまえば、祭りの後の寂しさように感じられた。
逆にその知らせを聞いて、安心した彼女の近所の貴族は宴会を始め、静かなのは彼女と向かいの安陪晴明の邸宅くらいである。
囃子の音頭が遠く聞こえる。
澄んだ空に僅かに掛かる絹のような雲。

砂利を踏む足音。
「隣、座っていいか？」
頷く光を見て、錬仁が縁側に腰を下ろした。
巨体を縁側が重みを受けて、ぎしりと鳴る。
「……爺の埋葬が終わったぜ。懐仁親王もお越しになられてな。それは爺の人徳を垣間見る盛大で、それでもしめやかな葬式だった」

「そうですか」
上流から引いた水が、庭園の一角である池へと注がれる音が静かにさざめく。
池には錬仁が度々釣った魚が放され、水面に映る月を中心に回っている。
「頼光」
「私は光と申します。彼方様のようなご身分の方とはお話する事は、もう無いはずです」
若葉を震わす風。
それは通り過ぎる過去の音か――

「俺は、頼光を慕っていた」
「存じております。『兄上』とは、ほんに仲が良かったのですね」
「一緒に風呂にも入ったぞ」
「『兄上』の身長にも満たない頃でしたね。可愛いものだったそうですね」
「この家で食った飯は、やたらと美味かったな」
「相模様が作る膳はどれも一品だったようですね。彼方様の御作りになり始めた膳も大変美味しかったとお聞きします」
「……初めて、馬に乗った時は気持ち良かったな」
「彼方様がお乗りになろうとした羅王号は、非常に気性が荒かったらしいですね」
「でもあいつ凄ぇんだぜ。乗りこなして本気で駆ければ、牛車や土塀をぽんぽん飛び越すんだぜ」
「ふふっ、彪凪とは最初は仲が悪くてつんけんしていたのに、今では五匹も子を産んでますからね」
「初めて乗れた後、調子に乗って酒を始めて呑んだ時は大変だったなぁ」
「あら？　呑み過ぎたのは『兄上』のせいではございませんでしょう？」

「さぁな、頼光が最初に一気呑みを煽った気がするぞ」
「気のせいでございましょう」
「さぁな」

互いに笑う。本来ならば、源　頼光の妹とその臣下の国定錬仁は邂逅する事は無い。共有する記憶も、その身にそれぞれ残る傷跡も、同じ戦場に立った証で合ってはならない。

様々な過去が巡る。
弓を教えて貰った時の感触。味噌煮を美味いと言いながら綻ぶ笑顔。汗を隠す僅かな香の薫り。その汗の味。綺麗で澄んだ、雅な声。艶やかで黒い髪。
光――

「なぁ、光」
「はい」
「俺の……」

途中まで言いかけて、何故か、影から自分をいつまでも支え、叶わぬ思いを溜めていた、もう一人の少女を思い出した。

初めて屋敷で柔らかく包んだ布と彼女の手の感触。疲れた錬仁を見て明け透けなく笑う顔。家事で少し荒れた掌。寝床で嗅いだ彼女の匂い。少し甲高く静かで透き通る声。同じく艶やかで黒い髪。
相模――

錬仁を信じた瞳が光なら、それ自身を案じていたのは相模だった。

「彼方様には相模様がおわしますでしょう。互いに愛し合う身であれば、それはようございます」

つと、光は自分の横に畳んでいた着物を羽織る。

その場から離れる身体を錬仁の腕が抱き締めた。

あの時、崖から落ちていく時と同じ力強く、熱く迸る感情。

「光、俺の傍に……」

「彼方様とは今晩初めてお会いしたばかりにございます。荒武者と呼ばれる方は、秀武殿を含めて、乱暴なのでしょうか？　それとも、」

あの日、あの晩、頼光を目標と仰ったのは嘘でございましょうか？

つぅ、と錬仁の頬から月明かりを反射する一滴。

「『兄上』は常に彼方様の憧れで在って下さい。……『兄上』を宜しくお願いします。相模様とお幸せに……」

彼の、この地に比類なき怪力の縛めをあっさりと外すと、しずしずと礼をして縁側を去った。

その錬仁と同じく、頬を流れる雫を隠して……

「あぁぁ」
分からない。憧れだったのか？　恋心だったのか？
彼の頭は混乱の一途を辿り、涙が止まらない。
錬仁は思う。俺が光に抱いていた思いは何だったのだろう、と。

「金ちゃん」

流れる涙を掬ったのは、彼が案じていた瞳の女だった。
あの、まだ彼女よりも小さく、ただの獣だった頃に、その身体を拭った布のように柔らかく、彼を正面から抱き締める。

「俺は、爺からお前を頼まれたのに、それを無視しようとした」
「はい」
「そんな俺に、お前に対して何が出来るか分からない」
「構いません」
涙で霞む彼の瞳に、微笑を帯びた少女の顔が映る。
「私は金ちゃんの傍に居られさえすれば、それ以上望む事はございません」
「俺は頭は悪いぞ。きっと位田を与えられても上手くはいかん。畑なんか耕した事がない。お前を養っていけるかどうかも。それにお前を愛せるかどうか――」
そこから先の言葉を彼は紡ぐ事は出来なかった。
相模は彼の言葉を押し止めた唇を拭う。
「金ちゃんが……、錬仁様が私を愛せるように私が努力してはいけませんか？　錬仁様が光様を忘れるまで。私には、」

それだけで十分です。

その彼女の強い感情に答えるように、錬仁はしかと、彼女を強く、離さないように抱いた。

光を京の外へと連れ出す牛車。

その前に、月影に縁取られた一人の男が居た。

「あら、綱お兄様、久方ぶりですね」

「光、良いのか？」

そう言う独眼の男に少女は涼やかに笑う。

「公時様の遺言ですので。彼方様もご存知でしょう。元は公時様は為平親王の隋人。名も無き、内裏に侵入した賊が、地位を認められ出世したのですから、その恩を親族に返したいのは道義でしょう」

眼を伏せて思い返す。

床に伏せた老人がよろよろと起き上がり、頼光の前に頭を擦りつける姿。

その昔、京を荒らした名も無き賊がいた。身の程を超えた思いあがりに遂には内裏に侵入して手傷を受け、思いがけぬ事に、侵入した殿の皇子に助けられた。そして氏を与えられ、それに報いるために鬼を討伐し、内裏に名を掲げる兵となった。しかし、その思いは届く事無く政敵により恩人は散らされ、彼の手には恩人の娘だけが残った。

恩人の娘であれば、その娘は我が娘も同然。
その心を奥に秘め、死に際で、目の前に相対する彼女の思いも知りながらも懇願したのだ。
その覚悟を受け取らずして、武士としての頼光の最後はどう飾るべきか。
彼女は老人の想いに応えたのだ。

「頼光は四天王の心の中に、それぞれ生き続けるでしょう。私、光は今日、京(みやこ)を去ります。西へ、西へ向かいます」
牛車に、昔培った、娘らしからぬ身のこなしで乗り上げる。

「錬仁様には居場所を告げずにいてください」
「本当にいいのか？　それで？　お前は金太郎の事を……」
彼の、先を見通す独眼にも彼女の未来は見えない。
それでも、その先の見通す事も出来ない霧も晴れるような笑みを彼女は見せた。
「もう決めました。来世で見まう縁があれば、それが救いとなるでしょう」
単と袷の音も立てずに頭を下げ、牛車を何処知れずに走らせた。

「来世か……、本当にそんなものはあるのか？」
もし、綱の刀が月まで届いたならば、きっと真っ二つに割っていたであろう、そんな夜だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2789y/

空想活劇譚【パラノイア・インフェルノ】

2012年1月10日06時54分発行